（岡山製本）

大正四年四月二十日印刷
大正四年四月廿三日發行

有朋堂文庫
御伽草紙（非賣品）

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地
三浦理

印刷者　東京市本所區番場町四番地
平井登

印刷所　東京市本所區番場町四番地
凸版印刷株式會社分工場

發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地
有朋堂書店

御伽草紙終

節こそ踊りける。

お歸りあるか名古三さまは、送り申さうよ木幡まで、木幡山路に行き暮れて、ふたり伏見の草枕、八千夜そふとも名古三さまに、名殘をしきは限なし。

よく〳〵物を案ずるに、このお國と申すは、忝くも大社の假に現れ出で給ひ、かぶき踊を始めつゝ、衆生の惡を祓はんため、かゝるかぶきの一節をあらはし給ふばかりなり、あら難有の次第かな〳〵。

かけて—驅けて、懸けて
そふてふ—添ふてふ、雙調
あふしき—逢ふ、黄鐘

いかにお國に申し候ふ、これははや古臭き唄にて候ふ程に、めづらしきかぶきを、ちと見申さう、今の程は淨瑠璃もどきといふ唄を歌ひ申し候ふ、さらば歌ひ聞せ申さんと、つゞみの拍子打揃へ、調子をこそうかゞひける。

わが戀は月に叢雲花に風とよ、細道の駒、かけて思ふぞ苦しき。

山を越え里を隔てて、人をも身をも偲ばれ申さん、なか〳〵に歌に節とは思ひ候へど、それ吹く笛は宵の慰み、小唄は夜中の口ずさみとよ、あかつきがたに思ひ焦れて吹く尺八は、君にいつもそふてふ、別れて後は又あふしき、春雨のしだれ柳のうちしをれたるを、見るにつけても此春ばかり。

世の中の人と契らば、薄く契りて末まで遂げよ、もみぢ葉を見よ、薄いが散るか、濃きぞまづ散る、散りての後は、訪はず訪はれず、互に心の隔たれぬれば、思ふに別れ思はぬに添ふ、なさけは大事のものかの。

かぶきの踊も時すぎて〳〵、見物の貴賤も歸りければ、名古屋は名殘の惜しきまゝに、待てしばし〳〵、歌へや舞へや、拍子に合せて打つつゞみの、とゞろ〳〵と鳴る神も、思ふ中はよもさけじと言ひしも、いたづらに別れになれば、お國は名殘を惜みつゝ、又一

ふしぎ―節にかけていふ
かぶかん―浮れ戯るゝをかぶくといふ
きの毒―木と氣とにかく
くる〳〵―來る來るにかく
おかゝ―女房

さしてそれともいは代の、松の言の葉かず〳〵に、袖を聯ねてきた野なる、右近の事と夕顔の、花の名殘の玉鬘、かけても思ひ出でざるや。言葉の末にて心得たり、さては昔のかぶき人、名古屋どのにてましますか。いや名古屋とは恥しや、なごやかならぬ世の交り、人の心はむら竹の、ふしぎの喧嘩をしいだして、互に今は此世にも、なごやが池の水の泡と、果てにし事の無念さよ、よし何事も打棄てて、ありし昔の一節を、歌ひていざやかぶかん、いざやかぶかん。

あ只うき世は生木に鉈ぢやとのう、思ひまはせばきの毒やのう。

あ只お國は柚の木に猫ぢやとのう、思ひまはせばきの藥。

淀の川瀨の水車、たれを待つやらくる〳〵と。

茶屋のおかゝに末代そはゞ、伊勢へ七度熊野へ十三度、愛宕さまへは月まゐり。

茶屋のおかゝに七つの戀慕よのう、一つ二つは痴話にも召されよのう、殘り五つ皆戀慕ぢや。

風も吹かぬにはや戶をさいたのう、さゝばさすとて、疾くにもおしやらいで、あ只つれなの君さまやのう、そなた思へば門に立つ、さむき嵐も身にしまぬ。

千本―地名

の裳裾を染めて、木の下ごとに圓居して、歌ふもいとゞ面白し。そも〳〵都ほとりの花の名所、地主權現の花の色、鷲のお山に咲く花は、靈鷲山の春かと疑はれ、大原や小鹽の山の花盛、今も御幸や仰ぐらん。さて又返り眺むれば、大内山の花盛、近衞どのの絲櫻、千本の花にしくはなしと打眺め、天滿つ神にぞまゐりける〳〵。

いかに申し候ふ、今日は三月二十五日、貴賤群集の社參の折柄なれば、かぶき踊を始めばやと思ひ候ふ、まづ〳〵念佛踊を始め申さう。光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨南無阿彌陀佛、なむあみだ、南無阿彌陀佛、なむあみだ、はかなしや鈎に懸けては何かせん、心にかけよ彌陀の名號、なむ阿彌陀佛、なむあみだ。

念佛の聲にひかれつゝ〳〵、罪障の里をいでうよ。のう〳〵お國に物申さん、われをば見知り給はずや、そのいにしへのゆかしさに、これまで參りて候ふぞや。

思ひよらずや、貴賤の中にわきて誰とか知るべき、いかなる人にてましますぞや、御名を名乘りおはしませ。いかなる者と問ひ給ふ、われも昔の御身の友、馴れしかぶきを今とても、忘るゝ事のあらざれば、これも狂言綺語をもつて讃佛轉法輪のまことの道に入るなれば、かやうに現れいでしなり。さては此世になき人の、うつゝにまみえ給ふかや、

あふの宿―逢ふ、大野
うし窓―憂し、牛窓
ふく島―吹く、福島

歌舞妓草子

都の春の花ざかり〳〵、かぶき踊にいでうよ、そも〳〵これは出雲の國大社に仕へ申す社人にて候ふ、それがしが娘に國と申す巫の候ふを、かぶき踊と申す事を習はし、天下太平の御世なれば、都にまかりのぼり候て踊らせばやと存じ候ふ。

古里やいづもの國をあとに見て、末は霞みて春の日の、長門の國府を過ぎぬれば、かゝる御世にもあふの宿、道せばからぬ廣島や、問ひよる宮は嚴島、舟のとまりにならたの濱、釣するわざはうし窓の、月にあかしの浦傳ひ、なほ行末は世の中の、なにはの事もよしあしの、若葉に風のふく島の、湊の波の治まれる、御世には今ぞあふ坂や、急ぐ心のほどもなく、都に早くつきにけり。

これははや都について候ふ程に、心靜に洛陽の花を眺めばやと思ひ候ふ、をりしも春の事なれば名にし負うたる花の都、こゝやかしこの花見の遊び、花の袂を重ねつゝ、色々

歌舞妓草子

にみどりの髪を剃りおとし、花の衣を墨染の櫻とこそはなりにけり。

古藤七郎兵衛

おへいでて―おひいでての訛

阿鼻地獄―無間地獄に同じ

はえいで―生えずして

三如來―阿彌陀如來、釋迦如來、藥師如來

佛くわ―佛果、佛花

卯の花のむら〳〵咲ける垣根をも、雲間の月の影かとぞ眺めあかされ、色々の花どもの色をまじへし有樣、これ天上の槳み目の前なり。さて春は青く夏は茂り秋は染め冬は根にかへる、有爲轉變のことわり、元より人間にかはる事なし。地獄といつぱ、あるひは山林におへいでて賤がつま木となつて、斧鉞のために切りさいなまれ、牛頭馬頭の車に載せられて、民の竈に身を焦し、或は筏のために搦めつながれて、漫々たる大海に浮け沈められ、苛責のせめを受くること、これいづれも阿鼻地獄の苦患にあらずや。又弓、胡籙、ほうの木、木刀のなんどいはれて、合戰の巷にいづること、これ則ち修羅道なり。又は岩巖石の嶮岨にはえいで、或は人家の垣栞に結ひ撓められ、長閑なる春をもあたらず、雨露の惠みをも受け難き風情は、さながら餓鬼道なり。又同じ草木の中にも犬槙、犬黃楊、或は猿すべりなどと言はれし、只今皆畜生道にかはる事なし。此六道の外に神道あり、佛道あり。まづ開けそめしより二柱の神を始めとして、すべら木のかしこき御代に至りては、色々の神木と現れ、扨佛道といつぱ、三如來の御形を始めとして、或はあらゆる木佛に刻まれて、佛くわを開く事、これ又過去の善根によると見えたり。草木國土悉皆成佛と聞く時は、谷の枯木も佛なりと、目前に悟を開き、扨彼の八重櫻は、終

おほぢのふぐり―蟷螂の卵
みどり―緑、見取
人天―人間天上
ぢうぜんていぎよく―十善帝王の誤か

ふこと一つもなし。それを如何にとなれば、種を蒔きそめしより芽をひらき、同じく花に匂ひをとゞめ、口なしといへども葉もはえ、聲なしといへども一節もあり、耳なしといへども物をきくらげの耳がましきをば初めとして、手には手柏あり、おのれ〳〵に股もあれば、おほぢのふぐりも下れり、欲なしといへども物をみどりにする縁も備はり、夫婦の道を思ふこと高砂住の江に相生の松を初めとして、その外戀路の道には丹花の脣、芙蓉のまなじり、柳の眉のいとわりなき姿を見ては、おもひばの色をあらはし、錦木の戀衣を重ねて連理の枝とならん事を誓ひ、又かやうに中をわかれては、川柳の歎きをなし、あるひは萎める花も水を注ぎ露をうけては忽ちに開き、喜びの色をあらはすといへども、終には老木となつてむもれ木の土に還らんことをかねて思ひ、跡をつぐべき繼木をもとめて、殘るこのみをゆづりはの次第に跡をさかやかす。この道いづれも人間の愛別離苦、怨憎會苦にたがふ事なし。次には地獄、餓鬼、畜生、修羅、人天、此六道佛の教へに違ふべからず。或は玉樓金殿、玉の臺の内にして、まづ南殿の花の開けそめしより、ぢうぜんていぎよくのそばに交り、花のこずゑのきさきのとかしづかれ、色々の衣更も過ぎぬれば、うら紫に咲けるふぢまづ言の葉に契りおく彌生も末になりしかば、

つらき思ひは—「は」は「の」の誤か
深きにも—深みにもの誤か
知らざる事—知らざる事をの誤なるべし
やうに—やうとの誤か

心ぞあはれなり。薄も別れし頃は彌生の梓弓かへらんことも難ければ、かりの玉章をもつけて、思ひおく花の、たよりをも聞き傳へんと、枕に聞えしその言の葉も打過ぎて、今は靜に楢の葉の皆根にかへると告げしかば、夫の行くへの聞かまほしさに、忍びて都へ上られしが、薄もかくなり給ひぬと聞えしかば、そも夢か現か、夢ならばさむる現のあれかしと、花の薄衣ひきかづき、伏し沈みたる有樣は、しぼめる花の如くなり。やゝありて口說かれけるは、扨も薄き契は一重櫻のつらき思ひは、八重九重にかさなる身こそ悲しけれ、せめては其夫の果て給ひし野原の草の露とも消え、又は櫻川の深きにも身を沈め、波の花とも散らばやと思ひしが、待てしばし我心、われさへかくなりなば、一むら薄の亡き跡をも誰かは殘りてとぶらふべし、又は多くの草木共の秋の霜と消えはて給ひしも、ひとへにみづから故と思へば、後の世の報いもおそろし、是を菩提樹の種として、庵室の花とも呼ばれ、夫の後生善所をもとぶらひ、無常の風にさそはれば、彼岸櫻の岸にも到り、又はこの土に歸らば、再び草木の契を結ばんと、思ひし涙のひまよりも、

この世にて菩提の種をうゑつれば君がひくべき實とぞなりぬる

さても浮世の物語に、物の道を知らざる事、木の端のやうにいひけれども、人間にたが

雪の下―鴨足草

鹽竈―鹽竈櫻といふ一種あるよりいふ

搔切りちぐさを流す有樣、いづれもみそ萩のもろき露となるもあり、雪の下と消ゆるもあり、ちり〳〵草も多かりけり。物によく〳〵譬ふれば、枯野に殘る冬草の嵐に吹くが如くなり。すゝき此由見るよりも、この合戰起りしこと我等よりいで來り、速に討死せんといでたつ。其日の裝束にはかりやす色の水干に絲の大口きるまゝに、はよきの太刀をひつさげて、さかげの駒に鞭をあて、蓬生の露打拂ふが如く、末摘花の細首を拂ひ切りにぞ切つたりける。その勢は集つて枝を交へ葉を並べて、簾の如く編みつれて、薄を中にとりこむる。無慚や薄は花籠の花の如く穗にいづべきやうもなし。今はこれまでとや思ひけん、跡とひ給へ刈萱の道心ばらといひさまに、はら一文字に搔き切つて、淺茅が原の露とぞ消えにける。うへ木した草これを見て、花の袖、草の袂をしぼりける。さても薄は千度百度打勝つて、一戰に負けし事、只楠木が業なりと感ぜぬものはなかりけり。

櫻道心の事

さる程に彼の八重櫻は、われ故不思議の軍いできぬれば、夫の薄に再びめぐり逢はん末の契もいさ知らずと、深き思ひは鹽竈の煙とあらはれ、袖の上の涙はあしたの露と爭ひつつ、ある山に深くつぼめる花の形も色外に衰へて、浮世の靜まるまでを待たれける。花の

金谷―晉の石崇の別莊ありし地、こゝにて客を會し花見の宴を開き詩を賦せし事有名なり

ぜづひき―未詳

熊野うち云々―ナギの木は熊野の名産なり

旗の手かと肝を消し、坂を下るは花車、いよ〳〵草はかつら川、つきせぬ花はおほゐ川、波の花こそさかりなれ。物によく〳〵譬ふれば、金谷苑裏の春の花、一場の嵐にさそはれて四方の霞に散りゆきし其有様に異ならず。其後草は勝鬨をつくつて、けふの軍の花はこれまでと、元の陣に立ち返り、物具の露をぞ乾しにける。

楠木高名の事

かゝりける所に楠木正成といふもの、ぜづひきの目も驚く合戰して、味方のはなをあけんといでたつ。其日の裝束には唐錦の鎧に鍬形打つたる兜の緒をしめ、鋼よきかいしのぎの刀をさし、駒のけやき見事なるにきくらげ置いてゆらりと乘り、熊野うちの薙刀を風車に舞はいて、若き葉武者を百きばかり從へ、思ひもよらぬ敵の後より鬨をどつとつくりかけ、草の陣へ割つて入る。八花形といふものに四方へさつとかけ散らし、百草を刈るが如く散々に薙いだりけり。その有樣いにしへの草薙の劍ともいひつべし。古木どもは是に力を得、再び花さく心地して、われも〳〵と立ち返り、こゝをせんどと戰ひける。草の勢はもとよりも油斷せし事なれば、八重葎しげるが如く一所に打寄り控へたり。ここを引くものならば笑草ともなりぬべし、皆篠原の露となれと呼ばはつて、草のはらを

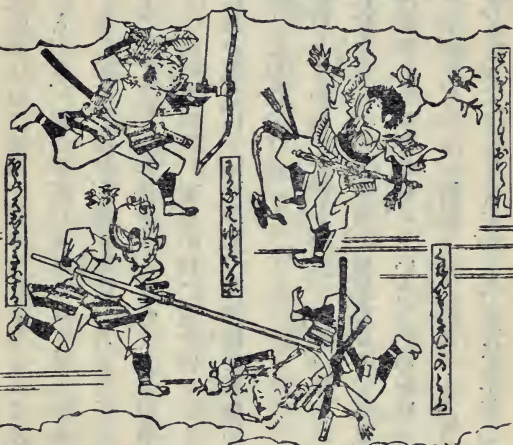
きりのきー斬り退きと桐の木
とりきー虜と取木
けひばーかひば(飼葉)の衍か
おほる山ーおほる川の衍が

きゞつさうの兵者ども、をどしたてたる鎧を著、花を生捕にせんとおつかけて、きりのきにするもあり、或はとりきにするもあり、組んでおつるは角力草、散々に切艾の火花を散らいて戰ひけるが、花は終に打負けて、つめの城にぞとりこもり、引きおくれたる遲櫻ども草、のけひばに斷け散らされ、將棊倒しをする如く、大手をさしてぞ引きにける。たいこくの花いくさも、かくやと思ひ氣の毒なり。

鞍馬おちの事

さる程に草は綠の色をかゞやかし、花の袖をくさりつれ、敵の城を圍むこと、七重八重に籬をゆふが如くなり。かゝりける所に花の兵者にさつきとてありけるが、二心の色を咲き分けて、味方の城に花火をかけ花とぞなりにける。をりふし風は嶮しく火花の四方に散ることは、秋の螢の如くなり。城へつぼみし花共は、けぶりに迷へる火櫻の、色のはがれて散るほどに、花の勢もつき弓の引くに力のあらざれば、老木のこども姥櫻は朽木うつぼ木の洞に身を隱す。或は落花をせんと鞍馬に鞭うつ花もあり貴船に棹さす浮木もあり。其外の花どもは東風ふく風の便をえ、西をさして散る程に、草花どもはさゝがにの梢を傳ふもかくやと、逃ぐる敵をおほる山、嵐山の風をも鬨の聲かと驚き、衣笠山の霞をも

たのもん―田の面、他の門
よめがはいだる―よめがはぎ(嫁萩)にいひかく
まくは形―眞桑と鍬形とにかく
そのみは土に埋む云々―白氏龍門原上土、埋骨不埋名
若菜の上下―源氏物語若菜の卷は上下に分てり
もゝ―股を桃にかく

駒に打乘つたり。その外われとおぼしき大剛の兵者ども、うねめくに楯おひたるに、たのもんにはゆき薺、よめがはいたる矢筈の紋、葉と羽は萌黄、根は白絲の靭草、一つの口などかいたるを、木枯に吹き散らさせ、霞に見ゆるは山田の僧都、鳴子の如くに控へたり。其後瓜の陣よりも、まくは形うつたるあこだの冑を猪首に著、絲瓜の皮の腹卷に、はゞよき太刀をするりと拔き、敵の陣にわつて入り、瓜切りに切つてまはる。是を見て北山の芋が子どもに至るまで、所々に討死して、そのみは土に埋むとも、名をば蔓葉に殘しける零餘子どもこそ悲しけれ。若菜の上下おしなべてこれを感ずる所に、草の勢も打寄つて、こゝを引くなとゆふだちの、林を過ぐるが如く篠根をそろへて射かけたり。いたはしや西王母、そのもゝを射られて、千年の命をゆふべの露にぞとゞめける。脇に控へたる九年母もほゝづきに突かれてむくろぢをさつと流し、同じ枕に伏しにける。野邊の千草に至るまで、紅葉にそゝぐ雨の如く、皆紅となりにける。續く味方はありの實の梨切にせんといふまゝに、冬枯の森の梢の如くきさきを揃へおつかくる。草も矢種つくれば、茅花の穗の如く拔きつれてぞ蒐りける。花の靡く時もあり、草の亂るゝ折もあり、互に勝負は見えざりけり。かゝりける所に鬼百合、鬼薊などいはれし

廣げて組むもあり、或はもみぢを流すもあり。物によく〳〵誓ふれば、吉野初瀬の花紅葉、嵐に散るが如くなり。ある合戰の歌に、

千々の秋一夜の春にむかはめや紅葉も花もともにこそ散れ

敵味方東西にさつと引き、四方を遙に見渡せば、麓には花ちる里のげんげども、いざや味方を申さんと、旗の手を打揚げ、賤が緒環いろ〳〵に、作りおいたる唐瓜の、實數多き鎧を著、冑の星瓜かゞやいたる、黄金まくはの太刀を佩き、鴨瓜の青羽にてはいだる矢を、いとしほらしく取つてつけ、黃瓜の弓に弦かけて、くはしめし口よき馬に打乘つたり。冑のしのびに是を見れば、姬瓜の如く薄化粧に眉刷いたり。あつぱれ瓜一かしらの大將やと褒めぬ者こそなかりけれ。

西王母もゝを射られし事

さて後陣の大將には小豆の大納言豆男、弓胡籙かる〴〵と、そばに續くは小麥のわらべども、著たる袴をぬぎおき、麥の靱にたいとうの弓をはる過ぎて、年よりたる秋の茄子に至るまで若やぎ討死せばやと、鬢鬚を紫に染め、十八さいたるさゝげの矢の節近なるをつまよつて、あひかはにごまからまきの太刀をはき、草の種蒔繪かいたる鞍置いて、白

もみぢ—皿にかく

一かしら—瓜は一かしら二かしらと數ふるよりいふ

大納言—小豆の一種に此名あり

わらべ—藁にかく

白駒—白胡麻にかく

射たらば―渡らばのもぢり
太白―太白星と菊の名とにかく
かいで―楓を手にかく

ゐらせんと、時雨に染むる紅葉の旗をまつさきに進まれたり。

龍田川もみぢに宿るつき弓を射たらば錦中や絕えなん

其後菊の大將のがれ難くや思はれけん、太白の扇をぬきいだし、まづこの輪をあそばせと、花壇の上にぞ立たれたり。相從ふつはものには、春菊、夏菊、さて寒菊、その外のより菊どもいくらといふ數を知らず、大將の前後に控へたり。かゝりける所に味方の陣よりも、猩々紅菊と名乘つて、唐紅の鎧を著、菊一文字の太刀を佩き、青き名馬にゆらりと乘り、大將の命にかはらんと、亂れ足を踏んで出でにける。紅葉の錦これを見て、聞くも涼しき詞かなと、あくまでちやうど放つ。無慚や猩々眉間のまん中射られて、鼻血をばつと散らし、馬より落葉の露とぞ消えにける。敵も味方もおしなべて、あつぱれよき紅菊かな、是を生けておきたやと惜まぬ者はなかりけり。亂菊どもは是を見て、安からず思ひければ、拔きつれてぞかゝりける。紅葉の勢も一度に大將討たせて叶はじ、ところどころのむら紅葉、狩りつれてくるは稻荷の薄紅葉、名をも雲居に通天の紅葉、西に小倉、高尾のもみぢ、その外の下紅葉に至るまで、命をばいつの用にかたつた山、散らせや紅葉と呼ばはつて、敵の勢仙翁花と味方の勢百日紅を追うつ追はれつ入り亂れ、かいでを

より大力なれば、枝を張りはがねを鳴らし、散々にひつきつて、藤繩に絢うてぞ捨てにけ
る、その氣色唐松にてはめいぼくたいし、我朝にては鬼を從へる柊もかくやと思ひ知
られたり。垣根を出でくる勢は朝顏、晝顏、夕顏、大將と同じく討死せんと、まづ朝顏は
槿花の鎧、晝顏は照りに照つたるひをどしの鎧、さて夕顏は干瓢の腹卷、この三草をさ
きとして、百なり千なりといふ數を知らす、命をば瓢簞よりも輕く、同じ枕に討死して
夕顏の露とぞ消えにける。草木いづれも是を見て、露をしたてぬはなかりけり。

百なり千なり―共に瓢の一種

猩々菊射殺されし事

その後草の陣よりも菊唐草の鎧を著、裾萠黄の膝甲に菊金物打つたる冑の緒をしめ、菊
鍔の太刀に黄金目貫打つたるを、弓手の脇に結んで下げ、大音あげて名乘られけるは、昔
より菊みづの流れを汲んで千歲の齡を保つ翁草とは我事なり、よからん敵と討死して菊
みづの流れに名を流さんと、敵の陣にわつて入り、
　いにしへもかゝるためしを菊川の淸き流れに名をや流さん
又敵の陣よりも龍田山の神木と名乘つて、紅葉の錦の鎧を著、蘇枋袴のそばをとり、赤
木の弓の眞中握り、染羽の鏑打ちつがひ、花をみて其名はいまだ白菊の大將に矢一筋ま

菊みづ―きくすゐの誤讀なるべし

國土開けしよりまづ始まりぬる故に、草木國土とは說かれたり、木は多くとも草にこすことあるべからずと、言ふより早く蘆の征矢をぞ射かけたり。花も小太刀をするりと拔き、鎬を削り鍔を張り、きさきよりも火花を散らし、木草も枯れよと戰ひける。その後風に木の葉の散る如く、四方へさつと引き退き、いづれも小楯をとつてぞ控へたり。

老松大將の事

さて二陣の大將には老松と名乘つて、大荒目の鎧に苔金物しげく打ち、松笠なりの冑を著、松かげの馬にゆらりと乘りならべ、おほまつのはやりをみどりにし、一合戰と待つ所に、藤原の朝臣と名乘つて、花やかにぞ見えにけれ。若紫の摺衣の鎧に紫の藤袴、同じくふぢしまの太刀を佩き、根曲りの鞍に八つ藤の紋すつて、斷えたる馬にゆらりと乘り、相從ふ勢共には柾にかゝる定家葛、いつも變らぬ常夏の裝束、さてはうらみの葛袴、きて又旅をするがなる宇津の山べの蔦かづら、わけて上りし軍には逢坂山のさねかづら、すひかづらるさいかちの錏に、あけびの頰當、あるひは鐵仙花の鎧、あるひはつゞらをりの裝束、此外ぶだうだいいちごの花かづらども、數へていふに限なし。此勢を從へて藤波の松にかゝるが如く、前後左右より這ひかゝり、枝にから卷き葉にまつはる。松はもと

松かげ―松陰と松鹿毛

ふだう云々―葡萄と武道、莓と第一

くのかみ—人のかみの誤か

れんげん蘆毛—連錢蘆毛を蓮華にもぢりたり

櫻い—櫻いろの誤か

一華開けぬれば云々—大集經にいづ

に八つ橋の杜若、名をくのかみに殘さんと、さわやかにこそいでたちけれ。花紫の唐衣きつゝ馴れにし駒に乘り、菖蒲づくりの太刀をはき、澤瀉の笠印を川風に吹き流させ、澤邊の眞菰、沼の河骨ひき具して、くもで川を渡るが如く、つゞいて軍をしなのはすみをぬけ、いでたつ鎧には蓮絲のをり裝束に蓮の葉形の冑をき、蓮木刀をするりと拔き、蓮切にせんといふ波に、れんげん蘆毛を打入れたり。扨は田面の早苗と名乘つて、ふし繩目の鎧に糠星の冑を著、やきごめ籐の弓にみつばの稻を隨へて、まづ苗代をいでたるは、水際たつてぞ見えにける。

秋の田を人にまかせて我は只花に心をつくるけふかな

これをみかたの先陣として、大勢一度にさつと入り、花筏を組むが如く、草もうら筈元筈とりちがへ、向ふの岸にぞつきにける。大將これを見て、味方の陣をまつさきわけて驅けいで、大音聲にて名乘られける。花多しといへども、我等が櫻いにこすはなし、草は木に從ふをもつて、花の下草とは傳へたり、ある經にも一華開けぬれば天下皆春とは說かれたりと、梢も響くばかりにぞ名乘られける。さて又難波津の蘆も駒を引据ゑいひけるは、我等が先祖をいへば、葦原の昔よりその眷屬多うして、いくらといふ數を知らず、

木の梢にひるがへつて、山を五色に染めなせり。麓には鴨川を要害に堰き入れ、亂杭逆茂木を引いたれば、鳥ならでは通ふべきやうもなかりけり。

難波津の蘆先陣

さる程に草の陣を見渡せば、霧の幕、霞の幕、牡丹唐草、菊唐草、菊水、藤色、山吹色、桔梗の紋をはじめとして、色々の幕どもを透間もなく打つたるは、錦をさらすに異ならず。さて花の方の旗頭には棕櫚、同じく銀杏、ならびに蘇鐵、一所に打寄り控へたり。まづ棕櫚は花を招く團扇の旗、銀杏は風を含める扇の旗、さて蘇鐵は敵をきりさきの旗、いづれも毛深き馬に乘り、鴨川を見渡せば、花の色は水にうつろひ、草は色々に生ひ渡つて、梅花の林に入る如し。その後七草をはやすが如く、鬨をどつとつくつて、敵は桑の弓を引き、草は蓬の矢を放つ。いづれも共草摺をゆり合せ、東西の岸に臨んで、果しかねたる所に、草の陣よりも水を得たるつはもの共先陣に進んだり。まづ難波津の蘆、其日の裝束には水色の鎧をきるまゝに、蘆の征箭を筈高にとつてつけ、弓のひしづるくひしめし、よしみつの太刀をはき、蘆毛の馬にゆらりと乘り、菅の小笠をかたぶけて、濱荻をさしかざし、元より水は我物と、白波を立ててぞ泳がせける。つゞく勢には三河の國

やかんさう―射干草を夜間の意にかけたり

みくさ―みちくさの誤か

がんひ―岩菲(仙翁花)といふ草の名を火にかけていへり

あけやらぬ―原本「あやらぬ」とあり、今改む

地して、手毎に花を手折りつゝ、皆家路にぞ歸りける。かくせし程に其日もやう〳〵暮れそめて、弓張月のいるや彌生の山の端にかよりしかば、今宵は花の下臥して、あすは軍と相定め、おのがさま〴〵陣を取る。其後花の方にふれたるは、敵陣に聞えたる葛かづらやかんさうなどとて、夜討に馴れたるものあり、足元より這ひかゝり取卷くこともありぬべし、篝をたけといひければ、谷の早蕨もえいづる峯の檜の木もおもひばを焚く。草の陣にもこれを見て、さらば篝をたかんとて、野邊のみくさをたきものの、焚きつづけたる空灶は、鎧の袖や匂ふらん。更けゆくまゝに是を見れば、足曳の山高き雲の原、さてがんひを焚く篝の野邊に見ゆる火は、賀茂白川に立つ波の、花を焚くかと怪まる。かくせし程に草の枕をとる程もなく、しのゝめやう〳〵明けければ、大將をはじめとして、いづれも弓をはるの野に、駒かけちらし打出でて、波うち際に控へたり。敵も城よりおりさがつて、白川表に陣を張る。扨其日の物見には、芭蕉の大助青葉の旗をさしあげて、草のはたてをつき竝べ、まだあけやらぬ朝霧の晴間より、花の城を見あぐれば、峯にはあるとあらゆる花ども、枝を交へて色々に雲か雪かと疑はる。總じて山々を見渡せば、白旗、赤旗、紫、縹色、花菱、花輪ちがひ、桐のとうを初めとして、色々の旗どもは木

京わらび—京わらべ
いふ顏—夕顏にかく
芝居—芝のはえたる場所
かうじの花—麴花にて酒の意に用ふ
たんほゝ—蒲公英にかく

草木太平記　巻下

さる程に京わらびども寄合ひて言ひけるは、都家々の櫻咲きも殘らぬ、また山里に契りおく花もいくさをすると聞く、いざさらば行きて見んといふ顏の、瓢簞に酒など入れてもつまゝに、花衣の袖をつらねて行く程に、程もなく北山の麓につきぬ。こゝかしこの山々を見渡せば、百しゆの花をつらねたり。誠に興ある見物かなとて、いづれも芝居のうへにつくぐ〳〵しと竝みゐて、かたはらより聞えしは、

いにしへの奈良の都の八重櫻けふ九重に匂ひぬるかな

又あるかたよりは、

春の野にいくたびやりをつくぐ〳〵し共草摺に花を散らすか

などと折にふれたる草歌など口ずさみ、肴杯とりぐ〳〵に遊ぶほどに、やう〳〵かうじの花もあがりしかば、たんほゝとて鼓などうちはやし、時の小唄などいと面白く歌うつ舞うつ戯れて、その後酒の燗に焚き殘したる青楓の燃えいづるをも、時ならぬ薄紅葉の心

も控へたり。其外あると霰釜に至るまで星兜を猪首に著、鎖の鎧を長々と鈑付とつてひつたて、弦掛おいたる淨顔梨をてまへも口におし握り、やいばよきかま槍を手取にしたる破釜共、敵に尻矢をいかけられ、猶洩らすものならば末代の疵にもなるべしと、沸えふためいて九輪釜、そのせいほうろく千騎にて、まつかなわに陣をとり、こゝを茶せんと一度にたてたる時の聲、上は自在天目までも聞え、下は鑵子の底までも響き渡つておびただし。其外の勢共は、橘の小島が崎に夜もすがら螢火に冑の星を輝かし、宇治川ながれに花を散らすもあり、或は茶舟にとりのつて、焙爐にかける茶の旗を、槇の島にあぐるもあり。これぞかなめの合戰と、扇のしまに頼政のそのいにしへもかくやとばかり、聞くに花香もかうばしく、見るに其色むじやうやと、宇治山ずりと褒めたるも道理かなと、その茶をもちひぬはなかりけり。

扇のしま—しまは芝の誤か
むじやう—無上、無常

あふり―障泥

い二千ぎばかり前後左右に從へて、白雲の風に靡くが如く、宇治晒の白旗をまつさきに進ませて、まづ平等院に陣を据ゑ、茶の木の弓杖にすがつて、みなやりを月こそいづれ朝日山と、輝くばかりにいでたつたりしは、あつぱれ大將の勢やと、ちやどきを揚げてぞ褒めにける。

茶壺加勢

さる程にさて國々の茶壺共に至るまで、大將に從はんと、愛宕山につめよる程のまつほ共吊輿の荷ひ茶屋のと打乘り〳〵引きもちぎらずくだつて、大勢かゝらばこぐちを切拂ひたてをすて、ひき色に見えたる敵あらば、なつぎりに切り散らさんと、壺尻かろく家をいづるは、藤四郎茶碗色の鎧、染付のはいだてに、丸壺のほりいだしうつたる冑を著、備前のうちものさすまゝに、信樂の弓に弦つけて、葉茶屋壺をかる〴〵と負ひなしふゆかんよきしりぶくらのぶんりんと跳ねたる馬に、青磁のあふりをかけさせ、その鞍壺にゆらりと乘り、われも〳〵と驅けいでたるは、なつめも驚くばかりなり。相從ふつはものには、島燒の目利き物、薩摩燒のやらうども、今燒の土につかゆる太刀をはき、敵よせ來らば肩つきにつきはつて、だいかいにはめんと言ふまゝに、水こぼしの瀬戸にいづれ

上林―有名なる茶師

づんぎり―茶壺にかけていふ

一度に茶をぞいでにける―茶は茶屋の誤脱なるべし

ひしめいて、上林の許に森の如く集りて、まづ著到をつくるに、聞き傳へ〳〵何千きといふ數を知らず、植込路次までつめよつて、腰かくる所もなかりけり。さて此事いかゞあるべきと、とり〴〵に評定しけるは、敵寄せ來らば宇治橋を引き切つて、一々にづんぎりにせんと云ふもあり、又かしこへなかだちして言ひけるは、我等が緣者のすまひする栂の尾に打寄つて、ひく敵を茶臼の如くとりまはし、立てかけて討たんといふもあり、其外すい茶のこい茶の、或は薄茶のと、すき〴〵にいひければ、中にもふるきこ茶どもは、持つたる柄杓にてなかつきの上を丁どうち、いかにもたぎつて言ひけるは、さやうに甘茶の煎じ茶のと、敵の氣を汲みはからんこと、皆新茶の若氣にて靑き分別とこそ存じさむらへ、それをいかにと申すに、われらがうぢは昔より木にもあらず、草にもあらねば、いづかたへつかんとも申し難し、只この所に控へてわびに力をそへんと、大人しやかにいひければ、いづれも別義あるまじとて、一度に茶をぞいでにける。さて其日の茶將軍極上之助うぢよしのいでたちには、茶絲の腹卷に茶巾の大口、茶の實なりの星兜を猪首に著、そぐつて上帶丁どしめ、一そりそつたるさしやくどうづくりの太刀をはき、茶の糟毛なる駒引寄せ、海松茶の手綱を結んでさけ、茶のみからげにゆらりと乘り、ちやせ

著長―原本「きせが」とあり、今改む
はいだて―膝甲
づんばい―榛桃、此桃毛なし故に毛ぎれ云々といへり、又礫をづんばいといふより敵にあたるともいふなり
このみ〳〵―木の實と好み
くるみ―來る身と胡桃
あせぼ―汗のため肌に生ずる小瘡をあせぼといふ、それを馬酔木にかく

くれなゐの著長に柾目のはいだてを著ごみにし、いための籠手をさすまゝに、榿木の弓かる〴〵ときほうの矢を筈高にとつてつけ、丈よき牧の駒ひきよせ、このみかろげにゆらりと乘り、どゐの原にぞ控へたり。老武者には西王母、ひたうの腹巻に桃色の鎧き、いろにふしかけとつたる矢も、花しげ籐の弓の眞中握り、柘榴の馬にこがなしの鞍置かせ、こゝちにおもむく郎等には、楊梅、杏、敵にあたるはづんばい、毛ぎれしたる鎧を著たり。同じく橘のおつそん九年母、陳皮の腹巻に柑子の皮のひつしき、だい〳〵傳はる金柑作りの太刀をはき、みかんよき馬に乘つたるは、誠に一き千本のきほひやと、囃さぬ者はなかりけり。其外果物どもはこのみ〳〵の鎧を、われも〳〵きなりにする。えのみてにならばなれ木は椋の木と、いろ〳〵に爭ひつれてくるみども、すぎたてを持ちかねて、あせぼを流す谷川の橡がらに至るまで、そのみを捨てて寄る程に、總じて山々里々木の下草の蔭までも、花ならずといふ事なし。誠に九てうをも花の都といひし事、始めて驚くばかりなり。

宇治茶合戰

かくせし程に都近き宇治の里にも、此事かくれなかりしかば、茶園どもはさればこそと

力をゑぬ－力をそへぬの誤か

柏木の衞門－衣紋にかけていふ

しぃ－四位と椎

いかものの具－栗のいがにかく

綠の色をかゞやかし、音羽の山の松までも力をゑぬは無かりけれ。麓にはいろ〳〵の與力ども、騎馬の鼻をそろへたり。まづあきばの中將、藥室の中將、紅葉匂ひの鎧に朽葉の直垂、もみ烏帽子に蒔繪の細太刀、いづれも柏木の衞門をひきつくろひ出でられたり。其外むくげしいの位は團栗毛の馬に乘つたり。或は綾杉、白檀磨きの鎧に、弓取り八千代をこめし玉椿、薄色の裝束に、拔けば白玉散るやうなるをさしかざし出でたつ。賀茂の山よりはだんのつゞじと名乘つて、さつき色の馬にのり、さみだれ燒刃の太刀を佩き、今を盛とさきつゞいたり。さて山中の葉武者には、丹波の國に朝倉の宰相、唐革の腹卷に唐織の直垂、唐太刀にさんしやうの目貫うちいでて、唐鞍をおいたる駒ひきよせ、犬山椒のもみたびにはりがねやつて、あぐち高にはいたるは、あつぱれ山椒の氣色やと、口にかけぬはなかりけり。伴ふ勢にはてゝうち栗、いかものの具を著るまゝに、栗毛の馬にゆらりと乘り、けふの軍をかち栗にせんと言ひつれたるは、かきをの柹核よせ具足をきるまゝに、こねりぎぬの大口に、きざはしの弓の中握り、はりそめるは澁紙のへたけげに軍をしぬるなと、漆の木に至るまで、負けじといでたつ鎧には、青漆色の腹卷に黒漆の太刀をはき、ぬりでの弓をとりかため、錆月毛の馬に乘り、つゞいて木曾の山よりは、皆ひ

かいとう—海棠と篠
使は來たり—頼政「花咲かば告げよといひし山里の使はきたり馬に鞍おけ」

におつとつて、かいとうの弓に手柏の征箭をとりそへ、はなかげを乘りいでて、八重一重に討死せんと進まれたり。さて北山の鞍馬の雲珠櫻、使は來たり馬に鞍おけと、騷いで毘沙門どうの鎧を著、黒木の柄にはなし目貫の太刀をはき、黒文字の母衣ぎぬ開いてさつとかけ、黒柹の弓にかやおつとり、こかげの馬に乘られたり。此外都あたりの名木には、大原や小鹽の花、ならびに嵯峨、仁和寺、御室の花、小原、賤原、宇治、醍醐、伏見木幡の山櫻に至るまで、咲き後れじと寄る程に、其數千本の花も過ぎたり。さて國々の遲櫻には越後櫻、信濃櫻、伊勢の國に神路山の櫻、昔を忍ぶ志賀の花、花の吹雪と口ずさみに山を越え、花の都につきにけり。年はふれども若木の櫻、浪華の梅さきがけて、しろに冬ごもらんとくる、程遠き南殿の櫻に至るまで、一門の大事此時なりと、吉野にて勢揃へをする程に、百萬騎の勢どもちくばの花を揃へて、けふ九重に匂ひ來にけり。總じてこゝの山、かしこの里の家櫻、軒端の梅に至るまで、手毎に素槍をもちばなの引きもちぎらず續いたり。さて松の大將には加賀の國に安宅の松、やがて軍にあふみ路や、志賀唐崎の一つ松、名も高砂の松、墨の江の松、五葉にたつは子の日の松、總じて松ふぐりをさげたる程の若松小松を引きつれて、まづ東山にて小松が峯に陣をとる。いづれも

楓―傍訓原本に從ふ

こだち―小太刀と木立とにかく

うのはのや―うのはなやの誤か

あり〳〵―蹴鞠の掛聲によそへいふ

思ひもよらず、さらばくわさんのゐんを花のちやうに構へよとて、一門を集むるに、まづ梅、櫻、松、楓、柳、桃花をさきとして、名所々々の古木ども、夏山の茂みの如くうちよつて、馬を華山に控へたり。さても梅は匂ひ深くて枝たをやかならず、櫻は色ことなれどもその香もなし、柳は風をとゞむる綠の絲、露の玉ぬく枝ことなれども、匂ひもなく花もなし。梅が香を櫻が色にうつして、柳の枝に咲かせたるらんも、このたとへなるべし。

まづ梅の薫大將その日のいでたちには、楊梅桃李の腹卷に、梅のこだちを結んでさげ、紅梅月毛の馬に乘り、素槍おつとり出でられたり。公達には白梅のにほひ、ひようぶの花をどしの鎧に、うのはのや白木の弓に白栗毛の馬ひきよせ、ゆらりと乘られたり。そのきやうはくばいの頃より深き匂ひかなと、褒めぬ者こそなかりけれ。絲柳の裝束には青柳のいと珍しき鎧を著、柳の細太刀佩くまゝに、葛袴の裾をとつて、鞠の如く肥えたる馬に沓をかけ、あり〳〵と出でられたり。誠に其姿未央の柳もかくやと思ひ知られたり。さて東山に地主の櫻、ならびに雙林寺の花、いづれも花やかにこそ見えにけれ。地主の櫻は花橘の鎧を著、唐太刀を佩くまゝに、花靫をさもやさしく負ひなし、樺月毛にさくら打置き乘られたり。雙林寺の花は小櫻をどしの鎧に、花色の大口のそばを高らか

鹽手―鞍の前輪後輪に二處づつ付くる紐

あまのり―尼にかけていふ

かゝりける處に須磨明石の藻鹽草ども寄合ひてつぶやきけるは、此程の風の便に言問へば、都には木草の爭ひ半と聞く、われ〳〵潮瀬に年をふるとても、流れは同じ草なれば、近きあたりに聞きながら、さてあるべきにあらず、陸地の軍は知らねども、蜑の刈藻に身を焦さんよりは、波の討死せばやとて、寄せくる草を數ふるに、軍の花を散らすは櫻海苔、海松も和布の春駒に力革、せゝの鹽手をはやかけて、青海苔きたる鎧には、いつも變らぬ大あらめ、ひじき物具著るまゝに、波の濡衣はるふのり、皆しほくびを取りどりに、いづれも槍をつくも髮、そるあまのりに至るまで、磯菜をあけんとゆふ波に、時をつくるは雞冠海苔、此海苔どもをほんだはらとして、南は淡路繪島が崎、鳴門の沖、西は播磨路須磨の海草共聞きつたへ〳〵、弓の濱に三保のせきづる掛けそへて、射るや八島の浦風に、昆布の海旗吹きさらさせ、潮どきをどつと作つて、波間々々に控へたり。

よしの山勢ぞろへ

さる程に此事かくれなかりしかば、梅の薫る大將、こはいかにと騷いで、さても憐みを垂れ助けおきければ、敵となるこそやすからね、それ草のかず多くとも、木の勢に勝つこと

えもぎ—よもぎ(蓬)の訛

けまん—華鬘

にほひくる—になひくるか

腹卷、龍膽の弓にえもぎの矢負ひ、菖蒲作りの太刀をはき、とう駒にさゝき鐙をかけいでたり。その外のつはものには、芙蓉、芍藥、菊、葵、しもつけ、紫陽花、けしの花、紫苑、龍膽、藤袴、桔梗、岩藤、櫻草、花かけちらす駒つなぎ、くる小車の忘れ草、しのび音による鶉草、立ちこそつゞけ足曳の、大和撫子、唐撫子、がんぴおどしの鎧に石竹の征箭、法師武者には萱草をさきとして、水仙、きいせん、鳳仙花、このぎぼうしども、いづれもしそう色の鎧に、けまんの旗をさしつれて、靜にくる姫百合の、さそひつれたる美人草、からあやめ、紫蘭のよろひに、あるひは紅、紫、萌黄匂、色々染めつくしたる鎧を著たり。いづれも其姿たとへて言ふべき花もなし。さて其外の下草には河原の大黄、虎杖の楯をつき、しのねの征箭をにほひくる、唐草には唐蓼、毛蓼、犬蓼の吠えいづる聲につゞくはゐのこ草、あとには杉菜、木賊まで、綺羅を磨いてぞいでたちける。總じてあるとあらゆる小草共に至るまで、さうかうを振立てて寄る程に、紫野、内野、宮城野にすきまもなく入り亂れて、尾花が末に吹く風は草の旗を靡かし、野邊に住む蟲までも、喊の聲をぞ添へにける。

もしほ草加勢

花さく春を知らぬ身となり、末の露本の雫と消えぬとも、草蔭にても忘るまじきは、さまは霜にしぼめる女郎花、風に從ふ絲萩のゆふべの氣色もかくやらんと、見るに萎れぬ花はなし。其後すゝきがたくみけるやうは、我等が本國武藏野に下り、草のゆかりを催し、旗をあげんと思ひ、よろづの草共をかり集めけるに、まづ新玉の年たちかへれば初草や、芹、薺、五形、たびらこ、佛の座、鈴菜、すゞしろ、これぞ七草、この若草を初めとして、あるひは月もうつろふともとあらの小萩、波も色ある井手の山吹、あるひは遍昭僧正のわが落ちにきと人に語るなと、たはぶれし嵯峨野の秋のをみなへし、光る源氏の大將の、白く咲けるはと名を問ひしたそがれ時の夕顔の花、見るに思ひの深見草をさきとして、いづれも作り花の如くにぞ出たちける。まづ小萩のいでたちには、秋の野に草づくしの鎧を著、藤紫の袴に刈萱を筈高に負ひなし、露重籐の弓のまん中握り、葵作りの太刀をはき、花月毛にもぐら置いてぞ乘られたり。その次には木曾の山吹巴の薙刀持つ儘に、うら山吹の下重ね、紫苑唐草の鎧を草摺長にさつくと著、菖蒲の鉢巻結んでさげ、黃月毛の馬にのられたり。さて女郎花の裝束には、忍ぶ文字摺たかにとつて付け、ゑんどうの弓を横たへ、黑駒に菫の手綱をかけられたり。扨深見草のいでたちには、牡丹花の

月もうつろふ―續千載「秋萩の花野の露に影とめて月もうつろふ色やかふらん」

波も色ある―後鳥羽院「玉川の岸の山吹影みえて色なる波に蛙なくなり」

わが落ちにき―古今「名にめでて折れるばかりぞ女郎花われ落ちにきと人に語るな」

もぐら―蓿を鞍にかけていふ

も今は花の下紐打解けて、苔の筵に露をしき、連理の枝に花さく春はありぬとも、心の花の散る時は勿れと、かねて別れを悲み給へば、すゝきも優曇華の花まちえたる心地して、草の枕をとりかはし、千夜を一夜になす由もがなと、思ふ心のかひもなく、しのゝめやう〳〵明けぬれば、花の袂にすがりつゝ、

睦言をまだつきせぬにしのゝめの明けぬと告ぐる鳥ぞ悲しき

花もとりあへず、

かりそめに伏見の野邊の草まくらすゝき忘るなわれも忘れじ

梅いくさを思ひたつ事

かやうにたはぶれて、互に聞いてこは口惜しき次第かな、折りえても心ゆるすな山櫻とは是なるべし、その義ならばすゝきが野邊に火をかけて、根葉を枯らさんとぞ怒りける。花も薄も打聞いて、包むにあまる花の香の、洩れても梅の推しけるかと、嵐のつてに散る花の、袖にかゝれる心地して、かろやかに花を掻負ひ、白玉か何ぞと問ひしいにしへも、かくやと思ひ知られつゝ、草むらの中に隠しおきければ、花かぎりなく打詫びて、武藏野はけふはな燒きそ若草と、言ひしたぐひにも成りぬるものかな、我身かく埋木の

千夜を一夜に—伊勢物語「秋の夜の千夜を一夜になずらへて八千夜し寝ばや飽く時のあらん」

睦言を—睦言もの誤か

互に聞いて—誤脱あるべし

折りえても云々—新續古今、下句「さそふ嵐のありもこそすれ」

梅の推し—推に酸いをかく

白玉か何ぞ—伊勢物語「白玉か何ぞと人の問ひし時露と答へて消なましものを」

せう〳〵―少少、少將

べしと、或時は目を怒り、或時は枝を垂れていひ怨み、さて彼の玉章を取りいだしければ、花も歌を見てあはれにや思ひけん、つく〴〵と案じけるは、さても錦木の千束に茂るこひすゝき、殊に思ひは深草の、露のせう〳〵つもりなば、若木も終に百年の姥櫻ともやつれはて、梢の霜と消ゆならば、長き罪ともなりぬべし、今は只花のかごとに露の情をもかけばやと、思ふ氣色に打現れ、終に返事をぞせられける。

いろ〳〵に花のたつみはつらけれど今はしのぶの草結びせん

萩は此返事賜はり、急ぎすゝきがもとにぞ歸りける。すゝきは亂れ心を空にして、よれつもつれつ萩の戸を、明けぬ暮れぬと待ちわびて、つゆまどろみける其中は、薄が氏神深草の明神は、是をあはれと思召し、枕上に立ちよりて、何歎く終にあふべき花すゝきと、あらたに聞えて失せ給ふ。すゝきは夢さめ打驚き、是ぞ祈も深草の頼もしき神の御告なりと伏し拜みける折節に、つての小萩は打歸り、すゝきに返事をぞさし出す。すゝき開いて宮城野のなさけも深き小萩かなと、さま〴〵にぞ感じける。かくて其日もくれなるの花まつ程になりしかば、すゝきは草の葉衣打拂ひ、荻の葉のおとづれ、戀草の招くをも君かなどと待ちゐたり。其後花もたそがれ時の嵐と共にすゝきが許にぞ散りかゝる。櫻

山吹色の薄様にかくぞ、

思ひやる花の玉章かずつきて何と薄が言の葉もなし

小萩つかひに行きし事

萩はこれを薄紫の袂に入れて、花のもとにぞ忍びける。折節花の匂ひくる櫻花の風にさそはれて、籬の外に散りかゝる其姿、みるに心もさみだれの、ふるき薄が思ひそめけるも道理かなと思ひ、まづ小萩とりあへず、

もろともにあはれと思へ山櫻花より外にとふ人もなし

かくたはぶれて詞に花を咲かせつゝ、さて／＼かやうの事申しいだすもいと萩の、したばに餘り候へども、餘りに色ふかき花の御けしき、外山のよそに見奉りしも、堪へ忍び難き事にて候へば、せめてはつての御返事をなりとも賜はり候へかし、さのみ度重ならばこそ藤のうらはに引く網の、まづ言の葉に洩れ聞え、憂名の立つ事も候はめ、笹の小篠の一節も、露かゝる事ありとても、皆くちなしの何とてか言の葉にかけ候ふべき、げにげにつれなき御氣色にて候はゞ、すゝきも露と消えなん後には、必ず鬼薊の形をあらはし、死出の山吹山茶花を、くるり／＼と小車の、うさもつらさも後の世に、思ひ知らせ申す

したば―舌齒、下葉

うらは―裏葉、浦廻

のべの草―野邊、延べ
いづれか秋に―平家物語、妓王「萌えいづるも枯るゝも同じ野邊の草云々」
花の色は移りにけりな―小町の歌、下句「わが身世にふるながめせしまに」
いひしかば―原本「いふかば」とあり

ども、尚つれなき青柳(あをやぎ)の靡くけしきもあらざれば、薄も今は藻鹽草かずかくまじとこひ枕に伏沈み、夜もすがら案じけるは、我身數ならぬ一むら薄の風情して、かやうの色ことなる花に亂れそめけるこそ由なけれ、色にうつり香に染(そ)むは皆これ浮世のたはぶれ、暮れゆく秋を思へば、枕にすだく虫の音までも思ひの數となるべし、とかく浮世をいと薄の細き命を何にかけてかはのべの草、いづれか秋にあはで果つべきと言ひし言の葉までも、今身の上にしら露の消えかへるよりも仇なれば、我らがゆかり刈萱(かるかや)の、道心坊を頼み、ひとへに草木蓮華の臺(うてな)にも到らばやと思ひ草、かき集めたる春の夜も程なく明けて朝露の、袖を爭ふ折節(をりふし)に、宮城野の小萩、薄がいほりへ音づれたり。薄かたはらへ招いていひけるは、爰に文をつくれども返事をもせず、便(たより)のなさけをも懸けざりしつれなきものありけると、打萎れ語りければ、小萩此由打聞いて、たとへばいかなる花、又はぬしある木なりとも、花の色は移りにけりないたづらにと言ひし事の候へば、みづから言の葉をつくして、言ひ靡けんにいと易かるべし、いかなる花にか亂れそめけん、怪しと問ひければ、其時すゝきは限なく打笑みて胸の蚊遣火ほにいでてぞ語りける。もとより小萩かやうの事にさかしき者なれば、少しも子細あるまじと言ひしかば、筆を執りそめて

せきやう—夕陽か

送られたる菫の色、みるに思ひの深見草、花散る里に宿木の、身をつくしても明石潟、とわたる舟の梶の葉に、かくともつきぬ言の葉を、たれかは花に夕霧の、立つ名を流す川竹や、涙ひまなきかげろふの、日影まつまの露の身に、深き思ひを椎が本、末摘む花の宴となり、胸の薄雲はる風の、吹きも定めぬつま故に、歎く胡蝶のねも高き、ふぢの裏葉におく露を、拂ひかねたる蓬生の、宿にかたぶく枕だに、夢の浮橋中絶えて、ふみ迷ひゆく玉章の、結ぶ契となれかしと、祈る杯の色ふかき、若紫の戀衣、怨みがちなる君をだに、せきやうにかけて松風の、吹くに亂るゝ玉葛、長き思ひをすゝきさへ、戀の床にぞ臥しにけると書きとゞめ、

しげき野の草の根ごとにわれぞなく一むら薄うゐそめしより

小萩すゝきに力づけ

すゝき此文を風の便に送りければ、花は此由をみづ莖の結ぶ二葉のむかしより、梅のかをる大將に匂も深く相馴れて候へば、四方の霞に散らんこと思ひもよらずとばかりにて、氣色も強き花垣の言ひよるべき言の葉もなし。すゝき此由きくよりも、いかなる堅き石竹なりとも、情にしをれぬ事やあるべきと、往きては還る小車の、しぢに心をつくせ

草木太平記　巻上

草木元年ちやうしゆん半の頃かとよ、不思議の軍ぞ起りける。故をいかにと尋ぬるに、大和の國み吉野の里に、色異なる八重櫻の一本ありけり。いにしへ若木の花よりも尙色深く枝嫋かなり。誠に其姿繪にかくとも筆に及び語るに詞もなかるべし。又其里近きところに年ふるき一むら薄のありけるが、此花の姿を籬の隙に見そめしより、其色深き戀となり、或日の雨中のつれ〴〵草に、つく〴〵と案じけるは、それ人間は申すに及ばず、鳥類畜類に至るまで此道に心をかけずといふ事なし、たとへば草木なりともいかゞは隔あるべき、此事をたゞに止みぬるものならば、あだし野の露と消えなん後までも長き障ともなるべし、いかなる風の便にも露の玉章を送らばやと思ひくらして、硯に向ひ花染のこがれたる薄樣に、言の葉をつくしてぞ聞えける。抑も高間の山の峰の花、よそながらみ吉野の、こひそめ薄穗にいでて、亂れ心をつく〴〵し、杉桒の立つもつらからじと、書き

こひそめ—戀初め、濃染

草木太平記

ぞ申しける。斯くて其年の秋に、北方たゞならずなり給ふが、月日にわづらひなく、明くる五月に、玉の如くなる若君の出で來給ひ、それより打續き姫君若君の數五人までこそ出で來けれ。何れも容顏勝れければ、或は后に立ち給ふ御方もあり、或は關白殿の婿にならせ給ふもあり、めでたしとも中々に、譬へん方もなかりけり。去程に大臣殿は隱里にて羞めける不老不思議の藥の酒の威德にて、御齡百年に餘り給へども、姿形は老いもせず。元より北の御方は天に稟けたる事なれば、御年重なるに從ひて、花の顏容麗しく、御惠みの深き事、水に影さす月の如し。されば聖人一人世に出づれば、萬民心素直になりて、いと靜謐なれば、遠國波濤も穩かにして賴みあり。民の竈も賑しく、運ぶ貢の道直に、關の閉さぬ御代となりにけり。是を以つて思ふに、只假初にも夫婦の緣を結ぶ事、前世の契淺からず、後の世かけて賴もしく、神の定めし中なれば、互に隔たる心もなく、交す情の末遂げて、望まざるに位を進み、貯へざるに財寶をうけ、出で入る人は袖を連ね、ますく\富貴繁昌の家とぞなり給ふなり。

寬文二壬寅五月吉日　　三條通菱屋町　　ぬ屋仁兵衞

思召しければ―思召しけれどの衍なるべし

ふたゝび生れあはんとぞ思ふ

とあり。初めの短册と引合せけるに、紙も同じ紙にて、歌の言葉を讀み續くるに、

いつはらぬ言葉の末をたのみにてふたゝび生れあはんとぞ思ふ

と讀み合せければ、君を始め奉り、御前にあり合ふ大臣、公卿も、あつとばかり感じつゝ、暫く物も宣はず。

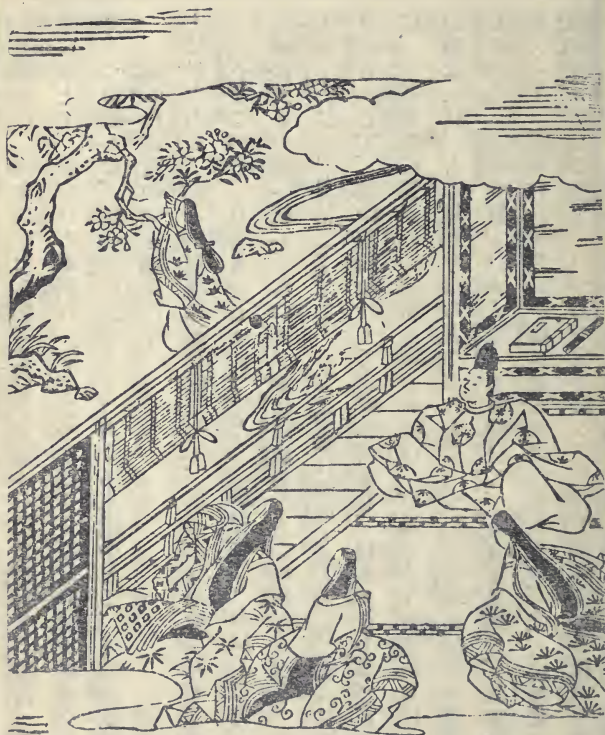
やゝありて勅諚ありけるは、御身心素直にして、慈悲心深くある故に、佛神の御惠と覺えたり。内大臣それ〳〵明し侍れと仰せければ、初めよりの事ども、詳しく語り給ひける。かゝる不思議の事どもは、昔も今も末代も有るべき事とも覺えず、急ぎ吉日を選び祝言有るべきとて、昔の屋形をしつらひ、金銀の鏤めて、玉鶴姫を迎へ給ふ。姫君は世の人に見々えん事を、疎ましく思召しければ、此宰相とは前世の契の事なれば、などかは隔て有るべきぞや、何時よりも御心も浮きやかに、悦び給ふよそほひなり。宰相殿は見給ひて、昔契りし面影の、少しも變らざりければ、懷しとも愚なり。かゝる目出度き事あらじと、忝くも、君よりの贈物、大臣、公卿の捧物、山の如くにぞ積み上げて、門前には馬車の、所狹きまで見えたりけり。やがて官位を賜はり、左大臣まさあきらと

三位の宰相の裝束にて、君の御前に出で給ふ。帝御側へ近く召されて、其後御物語ども暫く有りて、偖も此の手を見知りたるかとて、彼の短册を出し給ふ。宰相是を見給ひて、はつと思ひければ、時ならず顏に紅葉を散らし、其事となく淚浮びて、何とも御返しをば申さず、頭を地につけてぞおはしける。人々色を見て、偖は疑ふところなし、御前にて包み給はんも恐れなり、思合する事あらば、ありの儘に語り給へと、面々申し給へば、宰相申されけるは、偖此文は如何なる人の持ち來り、御前には留り候ふや、それにつき思合する事をも、御物語申し上げ候はんと宣へば、先づ御身の言葉を聞きて、此方にて申すべし、僞なく語り侍れと仰せければ、ありの儘に申さんと思へども、鶴の變じて契をこめたる事、誠しからぬ事なれば、少し僞の中さばやと思ひ、今は何をか包むべき、某貧しくなり果てて、身の置所なき儘に、此十五年以前より、片山里に忍び居て、明暮御經を讀み、後の世を願ひしに、何處とも知らぬ女性の來りつゝ、自らが妻となり、寳を數多與へけるが、明くる年の春の頃、我は誠の人ならねば、生を變へて夫婦となり、二世の契を結ばんとて、互の形見を取交し、其人の手遊は是に持ちて候ふとて、肌の守より、短册一つ取出し、御前にこそ置きにけり。人々あら不思議やとて見給ふに、

今年十五年に罷り成る、内大臣の姫は十四になるなれば、生れぬ先の事なるべし、彼の人世に無き事はよも有らじ、急ぎ尋ね給へと、奏聞申されければ、帝愈々不思議に思召し、さらば官人をもつて尋ねよとて、日本六十餘州に宣旨を下し、其國々の守護に仰せて、谷、峰、賤が庵まで殘る處なくぞ探しける。近國の官人は其日に歸りて無き由を申し、遠國の國司は五日十日を隔て、さやうの人は無しといふ。偖は此世に亡き身となるかやと、せん方なく思召すところへ、或代官の申しけるは、是より北山若狹の境の山陰には、天よりの降人とて、此十五年が間、富み榮えて侍るが、此人こそ怪しけれと奏しければ、偖はそれなるらんとて、急ぎ勅使を下されけり。其時の勅使は花園の左中辨とて、宰相の爲には從兄弟なり。彼の處に下り案内もなく入り給へば、宰相はいにしへ二十一にて世を厭ひ給ひし姿、少しもかはらざりければ、左中辨なじかは見損じ給ふべき、如何に御身はこの所におはするかや、此程さる子細ありて、秋津島が其中を殘る處なく尋ね給ふなり、はやはや參內あるべしとて、取るものも取り敢へず、馬に召されければ、宰相殿は夢にも知らぬ事なれば、以ての外に驚き給へども、勅使許し申さず、急ぎ都に上りけり。今までは世を厭ひし人なれば、五位の裝束召されしが、いにしへの

を見奉るに、附き添ひたる腕の延びさせ給ふぞ不思議なり。父母、傅、乳母、めでたき事なりとて、悦びける事斜ならず。さりながら身に取り付く事もやと、御肌に白粉の煉藥をつけ給へば、腋の下に玉章あり。あら不思議やとて、押開き見給へば、只一行、

僞らぬ言葉の末を頼みにて

とばかりあり。愈々不思議に思ひ給ひつゝ、姫君に尋ね給へども、前の世の事をばいかで知召さるべき、自らも知らず候ふとて、顔打赤めておはしける。内大臣殿宣ふは、此姫は天より與へ給ふ子なれば、如何樣故ある人の再來なるべし、かゝる不思議の事どもを、下にて計らひ申さんより、ありの儘に奏聞し奉り、勅諚に任せて、兎も角も方付き侍らんとて、彼の短冊を持ちて急ぎ參内申し、初めよりの事ども詳しく申し上げ給へば、帝不思議に思召し、短册を取らせ給ひ、打返し〳〵叡覽ありけるに、未だ新しき筆の跡なれば、もし見知りたる者やあるとて、大臣、公卿の御中へ出し給ふ。其比才學優長なりし、其後大將といふ人熟々と見給ひて、あら不思議や、此筆は、むねまさの左大將の一子、宰相右兵衞督が手跡に似たる處の候ふぞや、此人は慈悲の心を主として、七珍萬寶を非人に施し、いつしか其身衰へて、行方知らずなり侍るなり、年號を數ふるに

給へ、是孝行の一つなり、偖亡き後は倘々頼み申すなりとて、二位の中將殿への營みも差置きて、其年も暮れ、十四の春にぞなり給ふ。雨の晴間の朝日影、長閑なりける花の色、うつろふ東の窓の前に、簾几帳をかゝげて、蕾める花に心を痛ましめ、散りぬる櫻に怨を添へ、思ひ〳〵に花の短册つけ給ふ。内大臣、

かく散るを見てはくやしきさくら花またくる春は待たじとぞ思ふ

北の方、

雨のうちにほころびそむる花の色朝日に散るぞしづ心なき

玉鶴姫、

あひいでし若木の櫻さかりぞと見せまくほしき花のいろかな

と詠み給ひければ、父母も怪しの歌の心かな、如何なる思ひの有りて、かやうに歌をば詠みけんと思ひながら、心を問はん由もなし。各の歌を、姫君の筆取りにて、短册に書き留め、庭に下り立ちて、櫻の枝を引き撓めて、結び付けんとし給ひし、其處の枝強くして、姫君の取り付き給ふ左の御手を引き上げてこそ見えたりけれ。人々驚き、いかに御手の痛み候ふやとて、庭へ走り下り、御肌

みな〳〵の人—
なみ〳〵の行か

かやと、薬を與へて揉み合せ、色々養生し給へども、其甲斐なくて憂き事と思ひながら、世の人の見る事ならず、只眉目容貌の類なきをば、かたへの公卿殿上人聞き傳へ〳〵、思ひを掛けぬ人も無し。やう〳〵十三になり給へば、父母宣ふやう、姿かゝりより心様も優しければ、女御に供へんと思へども、手の叶はぬ事の恥がましければ、御目に掛くるに及び難し、さればとてみな〳〵の人に見せんも心憂し、如何せんと歎き給ふ折節、關白殿の御子に二位の中將と聞えし人、此姫君を思ひ掛け、人して斯くと宣へば、内大臣嬉しき事と思召し、北方と談合せ、此年の八月には必ず參らせんと、御返しありて、其用意をぞし給ひける。

姫君は此事聞召し、父母に宣ふ、我は身にも不具候へば、何處へも參るまじ、只御暇を賜はれ、片山陰に引き籠り、佛道を願ひて靈山淨土に生れんと思ふなり、女御、后も此世ばかりの樂みなれば、羨しく思はれず、ましてそれより下の人に相馴れ侍らんとは、更に思ひも寄らずとて、歎き悲み給ふなり。父母もいとほしき姫君なれば、さのみ愛で諫めて、目の前の憂き別れも有らんかと思召し、兎も角も御身の計らひなるべし、さりながら御身偶々儲けし事なれば、片時離れて有るべきかや、我々世にある程は慰めて給び

鶴のさうし下

偖宰相はありし閨に立ち歸り、枕並べし床の上、打著せし中の香の唐衣、今は獨の手枕は、寐覺のたびに別れつゝ、夢にも姿見々えねば、遣方もなき思ひの程、せめて慰みには、身内の者を近づけ、里人を語らひ、春は花の下にて日を暮らし、秋は月の前にて夜を明かし、年月豊かに住み給ふ。其比三條の内大臣と申すは、君の御伯父にて時の覺え、他に異にして、家の繁昌肩を並ぶる人もなし、されども御子の無き事を歎き給ひ、天に祈誓し給へば、御納受まし〳〵て、北の御方懐胎し給ひて、程なく姫君を儲け給ふ。されば天より具ふ形なれば、耀く玉とも申すべき。父母悦び給ひ、御命長かれとて、玉鶴姫と名づけつゝ、數多の乳母をつけ、齋き傅き給ふ程に、愈光增さりけり。幼き時は其心もつかざるが、成人らせ給ふにより、左の腕の肘のかゝりまで身に添ひて、御手自在ならず。父母御覽じて、大人しくなるならば、さもあらじど思ひしに、年月に從ひて、斯樣に取付きてある事は、胎内にての事なるか、產み落したる其時に、荒く當りし故なる

あら恥しや我身かな—「あら恥しの我身かな」の誤にや

つきて、暫し留め給ひければ、我をば誰と思召す、澤邊にて獵師に捕られし雛鶴なり、極まる命を助け給ふ、其恩德を報ぜんため、人間となりて來りたり、あら恥しや我身かなと、もとの姿を見えんとて、虛空に飛びてぞ歸りける。宰相はいとゞ哀れに思ひつゝ、此二年の情の程、思ひいづれば懷しく、後を見送り、只茫然と立ち給ふ。

時北方宣ふは、申すにつけて恐れなれども、今は父母の許へ歸るべきと思ふなり、假初に馴れ初めて、此年月の情の色、生々世々に忘るまじ、御名殘惜しく候ふとて、打伏して泣き給へば、宰相聞召し、あら思ひ寄らずの御言葉かな、後の世かけてと思ひしに、仇なる人の心ぞや、我淺ましき折に問ひ寄り給ふ志、今更何に見落され、捨て給はんとの言葉ぞや、よし〳〵それも力なし、御身の父母の有樣は、我等如きの凡夫の身を、見屆け給はんとも思はれず、されども御身は假に浮世に現れて、語らひ初めし睦言は、隔てぬ中と思ひしに、せめて三年も添はずして、殘り留る憂き程は、絶えて存ふべきならずと、泣き口說き給へば、北方聞召し、その御心の痛はしさに、今まで斯くとも申し得ず、我は誠の人間にあらず、「遂に添ひ果つべき身ならねば、先づ此度は立ち別れ、生を變へて、誠の妻となるべきぞや、御形見の一筆を賜はり、それを知邊とし尋ね給へ、自らも尋ね奉り、思ふ事なく暮すべし、父母の許にて聞召されし酒は、不老不死の藥にて候ふ、面影も變らず、命の終る事も無し、錦金襴の卷物は、如何程裁ちて取り給ふとも、盡くる事も有るまじ、黃金は使ふに從ひて、跡見ゆる事ならじ、いつまで語り侍るとも、名殘は愈增さるべき、暇申してさらばとて、廣椽に出で給ふを、御袖に取り

としをけ―役陰の誤か

れば、山海の珍物に、國土の菓子を調へて、三々九度の土器は擧ぐるに暇こそなかりけり。かゝる不思議の處に入らせ給ふ御慰みに、管絃をして聞かせ奉らんとて、琵琶、琴、和琴、簫、篳篥、思ひ〳〵に音を取りて、樂の數をぞ盡しける。昔としをけといふ者、唐土にて習ひ傳へし琴の爪、蟬丸といふ世捨人逢坂山に引き籠り、琵琶を彈ぜし撥音、用明天皇のいにしへ上の空なる戀をして、さんろと呼ばれし時、思ひを晴らす雨の中に、音を取り給ふ笛の音も、是にはいかで勝るべき、只是極樂世界にて菩薩聖衆の歡喜の時、音樂の曲難有かりし事どもなり。

かくて夜も明方になりければ、今宵の御引出物參らせんとて、黃金千兩、銀の盆に積み、綾羅錦繡の卷物を、山の如くに積み上げて、御前に差置き、夜明けば人目つゝましければ、御名殘惜しく候へども、はや〳〵歸らせ給ふべし、我隱家を初めてお目に掛くる事恥しく候へども、此後は常に入らせ給へと、暇乞して出で給へば、それ〳〵送り奉れ、承ると申して、虛空を翔る車に、二人の人々乘り給へば、引出物の數々を鳥の翼に乘せ、或は力士に負はせて雲に乘せてぞ送りける。片時の程にて、ありし館に送り著き、皆々立ち歸りけり。愈其家繁昌して、近國他國のものどもの、附き從ふ事限りなし。或

告らせ給へと有りければ、いやとよ、自らが計略にあらず、御身心素直にして、慈悲深き人なれば、佛神の力を添へ給ふ事の難有さよ、いざさらば自らが父母のもとを見せ奉らんとて、夜に紛れ、只二人忍び出で、山路遙々と分け入りて、嶮しき谷に下り給へば、數千丈高き巖より白き布引延へたる如くなる瀧の白波漲りて落ち、岸根の松は枝乘れて、心凄き苔の細道踏み分けて、片山際の洞の中へ入ると思へば、宮殿樓閣は甍を竝べ、七寶莊嚴の眞木柱、金銀の瓦を敷き竝べ、咸陽宮の大内裏と申すとも、是にはよも勝らじと思ひつゝ、踏む足もしどろにて、めでたう遙かに入り給へば、内よりも青侍官女と思しき者、我先にと微語き、北方に取附きて、珍しくも入らせ給ふものかなとて、前後に立つて介錯申し、奥の間に請じければ、又公卿、殿上人と思しき人々走り出で、宰相殿に色代して、是も同じ座敷に直し、煌々しき體なり。其中に女御と思しき人、宰相殿の前に寄り、萬恥がましき我姫を、留め給ふ御志、何時の世にかは忘るべき、疾く入らせ給へと申すべきを、一日々々と打過ぎ參らせ、明暮御姿を見まほしく思ひしに、遙々是まで渡らせ給ひ、御見參に入り奉り、自らが心の内如何ばかり嬉しく侍ると、御推量あるべき、それ〳〵と宣へば、女房達承り、黄金の銚子に盃取り添へて出でけ

に及ばねば、馬諸共に立竦み、我助け給へと、天に祈誓し念佛申し、さも哀れなる有様なり。

されども田邊の七良は文武二道の者なれば、大將の前に馳せ歸る。さればこそ初めより由なき事と思へども、仰せを背き難きにより、是まで御供申すなり、天より降人と聞きしが、僞ならず覺えたり、如何樣佛神の化身なるべし、佛の怒るを鎭むるには、心經に若くはなし、心の內に祈念して、御經を讀誦し給ひて、惡魔を鎭め給へと、高らかに讀みければ、次第々々に雲晴れて、變化のものも失せにけり。人々悅びて危き命助かり、我先にとぞ歸りけり。館に歸り誰々討たれたると思ひ給へば、殊に御經の功德にや、手負うたる者一人もなし。宮崎悅び給ひ、我邪の働きして、かゝる奇特を見る事よ、偏へに佛の方便なれ、是を菩提の種として、今日より浮世を厭ひつゝ、佛道を願はんとて、日比貯へ置きたる財寶を、貧なる者に與へ、慈悲第一の人となり後生善所の營みは、難有かりし發心なり。惡に強き人は必ず善にも強き事、今に始めぬ事どもなり。去る間宰相殿は不思議の難を逃れ給ひ、北方に宣ふやう、初めより御身は尋常人とは覺えぬに、只今の事どもは人間の業ならず、いかさま佛の化身と拜み奉るなり、此上は包まず名を名

御迎へに參れ七良と—「御迎へ參れと七良は」の誤なるべし

弦をはせ切る—弦をば切るの衍か

討つて參らせよと、忝くも宣旨を帶して參りたり、誠は身の咎の有るならば、尋常に腹を切り給へ、さも無くは主に出でて、其理由を申し開き給へと呼ばはりければ、籠り居たる若黨ども驚き騷ぎ、寄手は雲霞の如く近づきけるに、何とて臆し給ふぞや、はや打出で給へと犇きけれども、宰相殿、北方に諫められ、少しも驚き給はず。暫くありて北方、はや敵の寄せ來りたるやらん、物騷しく聞えけるぞや、いでさらば防がんとて、何時よりも尋常に出立ち、皆紅の扇を持ち、廣椽に立ち出でて虛空を招き給へば、宮崎是を見て、人々靜まり給へ、わが思ふ敵の立ち出でて、此方を招くは降參すると覺えたり、御迎へに參れ、七良と、獨笑して悅びけり。あら不思議や、俄に山風烈しく吹き、黑雲一群棚引きて、館の上に立ち覆ひけるが、雲の內に異類異形の物こそ見えたりけれ。眉目よき女房の具足、冑を鎧ひつゝ、弓矢を持つて進むもあり、夜叉、羅刹の形にて、矛を持つて振るもあり、鷲、熊鷹の人業に、劍を植ゑたる如くにて、敵の前に飛び行きて、弓の弦をはせ切るところもあり。蝶、蜻蛉は甲冑の隙間を狙ひ、眼に塞りて、さしもに猛き武夫も、働くべきやうもなし。寄手の人々呆れ果てて、心も消え、そのまゝ絕入る者もあり、退く事も叶はず、まして進む

二世の契なりしと聞きければ―「二世の契なりと聞きければさのみ力おとし給ふな」などの文句脱落せしなるべし

一度のたのしみ―一度たのみしの衍か

寄せ來りたる人―「たる」の二字不用なるべし

かみよ―かみがみ(神々)の誤か

變らずは、二世の契なりしと聞きければ、愚なる人の言葉かな、賢臣二君に事へず、貞女兩夫に見えずと申す事の候へば、一度のたのしみ御身を捨て何處へか行くべきぞや、もし軍勢の寄せ來らば、御身を先に立てて、切つて出で、思ふ儘に軍して、叶はぬ時は引き籠り、刺違へて死出の山三途の川を、手に手を取りて行くならば、何の恨事か候ふべき、其上千萬餘騎寄せ來るとも、自らが謀にて追ひ拂ひて見せ申すべし、太刀も刀もいるまじとて、一間所に引き籠る。さもゆゝしき姿にて、寄する敵を待ち給ふ。去程に日も西山に傾けば、時分よしとて、宮崎を先として、百五十騎兵等、太刀、薙刀の鞘を外し、さしも嶮しき山路を、谷も谷とも崖とも言はずして、三方の峯に馳せ上り、館を目掛けて弓取り直して、下り拳に差詰め引詰め散々に射たりけり。其中に田邊の七良進み出で、味方の軍兵に向つて言ひけるは、方々はいかゞ心得給ふらん、弓矢を留め給へ、是は聊の怨言せんため、此處へ寄せ來りたる人を威さん其爲の謀なり、よし敵を射殺さば勳功は扨置き、かみよの御不審を蒙るべし、今日の軍の大將は此七良が承りたりとて、只一人門外まで馳せ來り、大音揚げて言ひけるは、只今こゝに寄する事別の子細に候はず、此山中に隱れ給ひて、夜討、强盜を業として、いみじき有樣を聞召されて、

きらの兵―綺羅の意にて精選の武士をいふ

頼みし吾戀の、空しくなるこそ無念なれ、我領内にありながら、上も恐れぬ女は、押寄せて奪ひ取り、無情き心に思ひ知らせん、はや打つ立てと怒り給へば、七良由なき事と思へども、氣色變りて見えければ、尤も然るべき御計らひなり、某一人なりとも忍び行き、奪ひ取らんはいと易き事なれども、彼もさすが故ある者と聞えければ、欺くに及ばず、軍勢を催して、一方の山より攻め下り、東の方を開けておくならば、定めて夫婦郎從も落ちて行くなるべし、行かん處を道に兵を伏せて、男をば切つて捨て、女をば抱き取り、この御館へ齎ひ入れ奉らん事、今日の日を過すべからず、御心易く思召せとて、頼もしげに申しければ、宮崎悦び給ひ、片時も早く見奉らんに、軍勢を催せとて、きらの兵三十八騎、雜兵合せて百五十騎の軍兵を揃へ、今日の暮方に押寄せんとて、馬に鞍を置き、庭騎するものもあり、太刀、刀を磨ぎ、弓の弦を食濕し、日の暮るゝをこそ待ちたりけれ。

此事隱れなかりければ、里へ急ぎ宰相殿に參り、只今押寄せ申すと告げければ、宰相は夢にも知らせ給はず、此方に云々と語り給へば、元より我故と思召し、初めよりの事ども語り給ふ。力なき次第なり、誠に御志難有く侍れども、我故に御身の命を失ひ給はんも心憂し、一先づ彼の方へ行き給ひ、人の心を慰めて、夢の浮世を暮らし給へ、御心

言を言ふ人かなと打笑ひて、兎角紛かし給へば、重ねて言ひ出すべき由もなく、日も暮れければ、またこそ參るべけれとて立ち歸る。宮崎殿に斯くと申しければ、扨は我文を御手に取り見給ふかや、歌の心を感じ給ふ上、などか御心の無情かるらん、又明日も參りて御返しを取りて給べと聞ゆれば、局も如何にもしてと思ひければ、それより日毎に參りて、包む氣色もなく、初めよりの事ども仄かし、あはれ浮世の習ひに、人の心を慰め給はゞ、賴む方なき我身までも、寄る邊も波の助船、こがれて消えん泡沫の、怨みの程も盡くべきか、其上思ひ染めし憂人は、此國の主なれば、一つは情と言ひながら、處にては處に從ふ習ひなれば、もし一筆の御返しもましまさずは、誰か其怨みを忘るべきと申しけれども、人の聞かんも憚あり、今日より局參るべからずと、簾中深く入り給ふ。力なく立ち歸りける。宮崎殿に申しけるは、如何なる雲の上人も、情の道は知るものを、此人は眉目容貌こそ生れつきたらめ、心はさすが田舍人、物をも知らぬ人なれば、言葉の色をも聞き知らず、自らが使には、叶ふべきとも覺えず、只思召し留り給へかし、面目なく候ふと言ひ捨てて、走り歸りければ、今までは使の歸るを便にて、少し心も慰みけるに、賴み寄るべき緣もなし、せん方なく思しければ、田邊の七良を呼び出し、もしやと

遙かに人家を見て云々ー朗詠「遙見人家有花入、不論貴賤與親疎」

事別の子細にて侍らず、自ら住み荒したる蓬生も、春は隔てぬ花の宿、夕つ方入らせ給ひて、朧月夜の終夜、慰め奉らんと申さん爲に參つて候ふと申しければ、北方、誠に切なる志にて侍れども、假にも立ち出でたる事もなし、又殿の心も取り難ければ、叶ふまじきと仰せけり。局たくみし志違ひて、斯くと言ひ出すべき言葉もなく、暫し浮世の物語しけるが、懷より玉章を取り落したる體にて、これ〳〵御覽候へや、只今參る途にて、此文拾ひ候ふが、いかさま故ある人の手遊やらん、やうがましく認めたり、御慰みに御覽候へと申しければ、北方受け取り給ひ、開きて見給ふに、誠に御言葉を盡しつゝ、奥に一首の歌あり、

はる〴〵ととめよる宿の櫻花したしからぬも隔つべきやは

と有りければ、面白き歌の心かな、古き言葉に、遙かに人家を見て、花あれば入る、貴賤と親疎を論ぜずといふ詩の心を引き直して詠みたる、いかさま是は又初々しき人に思ひ亂れたる人の文なるらん、見るにつけても痛はしく侍るなりとて、局に返し給へば、局便宜よしと思ひて、よし〳〵誰人の文なりとも、御手に觸れさせ給ふ事、他生の機緣深かるべし、捨文の返しと思召し、只一筆遊ばして、自らに賜はれかしと申しければ、戲

世を亂れし―世を亂りしの誤なるべし
よも勝るべし―よも勝るべきとありたし

惜までや有るべき、唐土の幽王の世を亂れし褒姒が姿、越王勾踐の再び國を覆されし西施の面影と言ふとも、是にはよも勝るべし、聲いと匂やかに、愛敬ありし眦は、如何なる島の夷なりとも、心を迷はさでは有るべき、あはれ殿の御目に掛けばやと、言葉に花を咲かせて申しければ、いとゞだに堪へ難き物思ひに、此物語を聞くよりも、忍ぶべき心もなく、扨も其人を如何にも申し、媒介して、同じ枕の轉寐こそ叶はずとも、此思を告げて給び給へ、さらば御身の爲もいかでか疎略に思ふべき、是は當座の引出物なりとて、側にありし綾の小袖を取らせ給へば、局嬉しく思ひながら、主ある人にいかゞして言ひ寄らん、由なき事を語り出し、行末いかゞあらんと思へども、さらば先づ御文を遊ばせ、便も有らば、御目に掛け侍らんと申しければ、宮崎硯を取り出し、紫の薄様に梅花の匂を焚き染めたるに、思ふ心の底までも、細々と書き流し、せめて一筆の御返事もがなと、涙を添へて渡し給へば、局文受け取りて、急ぎ我家に歸り、色も妙なる花を折り、宰相殿へ參りける。北方出で給ひ、あら珍しや、如何なる風の誘ひつゝ、思ひ寄らずの花の色、懐しき局かなとて、奥の間に召し入れて、先づ酒肴を調へて饗應し給ふ。局申しけるは、此程は彼方此方と打紛れ、御訪問も絶え果てて、仇なる者とや思すらん、只今參る

其句ひなつかしけれども―此下に「枝のさまこちたく柳は」などいふ文句脱落せしなるべし

處の傍に、さる者と語らひて侍るが、常に彼の家に參る由を承る、此人を呼びて、事の心を尋ね給へと申しければ、宮崎悅び給ひ、それこそ然るべき神の御引合せと覺えたれ、急ぎ呼び寄せ侍れと聞えければ、やがて使立てられけり。局參りて、何事の御用なれば、自らをば召し給ふぞや。宮崎殿枕元近く呼び寄せ、扨も此山の彼方に、いみじく作りし家居には、如何なる者の住みけるぞや、主の名をば何と云ふぞと問ひければ、局承り、自らも去年の冬より折々參り候ふが、主の御名は誰と知りたるものも候はず、北方も、去年の秋迎へ給ふと承る、誠に家榮えて、今長者とぞ申しける、只天よりの降人のやうにこそ言ひ習し侍ると語りければ、宮崎聞き給ひ、扨も其北方は年は何歳になり給ふぞや、さこそ情の深からん、覺束なしと問ひ給へば、局承り、されば御年は二十ばかりにてもや候ふべき、容顏の美しき事中々賤しき口にて言ひ難し、我古都にありし時、數多の女御更衣を並べ置き、花の譽にせられしが、御名は定かに言ふに及ばず、先づ初春の梅は雪の内より咲き出でて、其匂ひなつかしけれども、枝たをやかなれども匂ひもなし、花もなし、されば何れによそへても、思ひ所はあるものを、此人と申すは、梅が香を櫻の花に匂はせて、柳の枝に咲かせても、春の過ぎん事をのみ、見る人

鶴のさうし中

北方御覽じて、あれは誰なるらん、あら恥しとて、宰相諸共に内に入り給ふ。宮崎殿は今一度見る由もがなと佇み給ふを、人々參りて、やう〱雨も晴れ候へば、歸らせ給へといさめけれども、只茫然として、物も更に宣はず、御心地怪しきとて、駒の口を取り、御腰を抱き、御内の人々前後に立ちて、我家に歸り給ひけり。今は只管戀の病と臥し沈み、せん方もなく思ひければ、御内の侍に田邊の七良とて、萬賢しき者の有りけるを呼び出し、言ひいだすにつけて便なけれども、狩場の山の主の女を、一目見しより、其面影の身に添ひて、かゝる病となりけるは、いかゞして薫る烟の胸の中、思ひ消えなん謀を、よきに計らひて得させよと有りければ、七良承り、是は理なき事を思ひより給ふものかなと、思ひながら、さも言はゞ、いとゞ物病にやなり給ひなん、暫し慰めばやと思ひ、それこそいと易き事なるべし、男女の習ひ、慕ふに靡かぬ者はなし、我々が伯母に内侍の局と申すものは、元は都に宮仕して、萬優しき人なるが、此三ヶ年は、此

打渡り、内の體を見給ふに、四重に塀をかけ、屋形の棟數數多あり。あら不思議や、我領内にかゝるゆゝしき者の有りけるぞや、如何なる者の住むやらんと、小柴垣の陰に休らひて、暫く佇み給ひける。宰相も北方も見る人ありとも知らず、南面の廣椽に立出でて、庭の花を見給ふに、梢色添ふ初櫻、かつ散り初むる眺めつゝ、北方取敢へず、

かぞいろの育てあげにし甲斐もなくいたくも雨の花をうつおと

と口吟み給へば、宰相殿も思ひ續けて、北方を熟々と見給ひて、如何ばかりの事か思ひ出で給ひけん、

初櫻いろにそめぬる春雨は花の紐とくつまにぞありける

と、打詠じ給へば、北方打笑みて、

春雨は同じけしきにすさめどもあだにも散りし花の色かな

と戲れ給ふを、左衞門督熟々と見て、あらぬ思ひのつき添ひて、立ち忍ばん由もなく、さし現れて覗き給へば、

かぞいろ―父母

あり、時の景物なればとて、果實を數を盡して、我劣らじと參りつゝ、今日より御内の者となり侍らんと、敬ひける事限りなし。其品々の引出物、絹小袖を賜はる者もあり、金銀を賜はりて、悅ぶ事は限りなし。去程に其年も暮れ、新玉の春にもなりければ、其國の守護宮崎左衞門督といふ人、身内外樣の者百餘人召し具して、朝鷹狩に出でにけり。裾野の原の勢子の者、二行に立つてぞ狩り廻る。峯とも谷とも分かずして、雪間の草を栞とし、尾上の松を目に掛けて、四方の谷より狩り上る。岩を飛ばせ、古木を拂ひければ、雉、山鳥は言ふに及ばず、野干臥猪の床までも、隱れん方もなかりけり。大鷹小鷹の飛び違ひ、中有にて組んで落つる處を、押へて取るものもあり、兎、貉を目に掛けて、弓矢を取つて追ふもあり、太刀、刀を拔き持つて、猛りてかゝる猪を向樣に打つもあり、巳の時の初めより午の刻の下りまで、打留めたる鳥獸、數ふるに遑あらず、面白かりし見物なり。

各立歸らんとせし時に、春雨しめやかに降り注ぎければ、思ひ〳〵に木陰に宿を借り、岩の洞に立ち隱れて、雨を凌ぎて居たりけり。宮崎殿は、馬に乘り谷に降り給ふが、とある山陰に烟の立ち上りければ、人里やあると、只一人駒を早めて行き給ふ。堀の船橋

妃は、一度笑めば百の媚、君が心を迷はして、世の政道を亂すとなり。我も浮世を厭へども、心は空に憧れて、覺えず寄り添ひ給ひつゝ、苔の筵を褥とし、早稲田の稻を枕にて寢亂髪の打匂ひ、梅の小枝に降る雪の、消えかゝりたる肌の色、いをねもならはぬ下紐を、解けて寢ざりし宵の間の、悔しかりける睦言は、まだ何事も語らはぬに、遠山寺の鐘の聲、物凄じく聞えければ、孀烏の浮かれ聲も、今宵しもさかしらと聞きなし給ふ。誠に昨日までは、秋の夜の長き怨みの床の上、今日は引きかへて、千夜を一夜と願ひ給へども、軒端の山に横雲の、引く月星の光も旭日の影にそばひ、夜はほの〴〵と明けけれども、訪れ通ふ者もあらねば、扃の簾揭げつゝ、倚熟々と見給ふに、言はん方なくらうたけて、雅やかなる面影は、立ち離れん由もなし。

女房も心打解けて、下女に持せたる袋の内より、黄金千兩取出し、是にて萬計らひ給へと言ひければ、宰相悦び給ひ、今まで孕みし里人を近づけ、此由かくと宣へば、里人めでたき事なりとて、黄金を受取り、番匠數多呼び寄せて、御殿を結構に作り、衣裳を調へ、召使ふ男女數多揃へ、或は道具を拵へ、俄に長者となり給ふ。此事里々に隱れなかりければ、處の侍は申すに及はず、土民百姓に至るまで、酒肴を調へて、參るものも

を明かさせて給び給へ、野邊の千草の葉毎にも、露の宿りは有るものを、森の茂みの木隱れは、翼の宿となるぞかし、ましてや御身は世捨人の身の、問ひ寄るこそは他生の緣、庵の内に叶はずは、軒端の下の轉寐に、何か無情くましますと、怨み顏に見えければ、宰相も流石岩木の身ならねば、餘り見苦しき庵の内の恥しさに否とは申しつれ、さらば此方へ入らせ給へとて、庵を開きて入れ給ふ。狹き藁屋の内なれば、女房二人をば、奥の間に宿し、我身は樞の前に臥し給ふ。其夜は殊に物淋しく、軒端を誘ふ秋風、肌はいとゞ狹筵の、露微睡まんよしもなし。藻屑の烟焚きすさび、世の憂事を語り給ふ。女房言ひけるは、御身の容貌を見奉るに、いかさま通常人とも覺えず、流竄人にてましますか、自らも故ある者なれば、今日より是に止め置き、妻と定め給ふならば、寶を與へ奉らんとぞ申しける。宰相怪しく思ひながら、元より誠の道心ならず、身の貧なるに從ひて、世の謗をつゝましく、暫しは隱れ給へども、未だ御年廿一、盛の花の山櫻、雲に隱るゝ風情にて、誘ふにつけて色に愛で、熟々と見給へば、翡翠のかんざしたをやかに、青柳の風を含める裝ひ、打項低れたる顏容は、雨に霑ける海棠の、眠れる花の姿なり。我古の淸凉殿の御遊の時、數多の女御后を見しかども、かゝるめでたき貌はなし、唐土皇帝の楊貴

はる重寶なれば、乞食非人の後までも、肌を放さじと持ち給ひしかども、慈悲の心を先として、獵師に與へ給ひし御志、例少き善根なり。宰相暫く鶴の後を見送り給へば、鶴も心ありけるにや、後を見返り〳〵て雲路遙かに上りければ、嬉しく思召し、柴の庵に歸り給ふ。明くる日の夕暮に、さもやんごとなき上﨟の、下女一人連れて來り、此庵の内に案内申さんとこそ呼ばはりける。誰なるらんとていで給へば、年の程二十ばかりなる女房の、濃き紅の五つ重に、綾の袿に顏隱して立ち給ふ。宰相御覽じて、あら淺ましや、如何なる變化のものなるぞや。かゝる山中に斯樣の人の來るらん事、思ひも寄らぬ事なれば、身の毛も彌立つて覺えけれども、臆したる氣色もなく、如何なる人ぞと問ひ給へば、女房立ち寄り、我は都の者にて候ふが、故なき人の妬をうけ、何處ともなく出でけるが、焚く火の光につきて、この處に迷ひ來りたり、一夜の宿を貸し給へと申しければ、宰相聞召し、よし何處の人にてもおはせよかし、此處は人里遠き處にて、我ならで住む者もなし、夜更けぬれば鹿獸の凄じく、嵐烈しき山彦は、雷の如くなれば、いかでか明かさせ給ふべき、何處へなりとも、御志の方の侍らば、送りて參らせんと言ひければ、女房聞きて、いやとよ、何處を終の住所とも定めず、頼むべき方も有らざれば、ひらに一夜

大きよせんちよ―大鹽千町か

せめう―未詳

ば、宰相聞き給ひ、實に道理と思へども、昔も去る例あり、釋尊の昔、薩埵王子と言ひし時、御懷の中へ山鳩一つ飛び入りぬ、後より白斑の鷹追ひ來り、其鳩出し給へとせめければ、力及ばせ給はず、鳩の代りに御身の肉を切りて鷹に與へ給へば、流石鷹心ありて、御志の難有さに鳩を助けて歸りしなり、其善根にて、一代の教主釋迦牟尼佛と生れ給ひ、鷹も優しき心にて、成佛したると說かれたり、御身殺生し給ふ事、五逆の罪には勝れども、今一念の慈悲心にて無量の罪を滅し、極樂世界に生れ給ふべし、鶴の代には我重代の守なれども、是を參らせんとて、肌にさしたる金作りの刀をこそ與へ給ふ。扨元より慾心深き者なれば、莞爾と打笑ひ、此刀を代なしては、一期の貯蓄あるべきと思ひければ、今日より獵師を止むべきなり、鶴を御身に參らするとて、急ぎ我家に歸りけり。宰相嬉しく思召し、鶴を抱き取り、汝心あらば物を聞け、大きよせんちよにいづれは獵師の憂へ有るとは此事ぞや、唐土の鳳凰は聖人の時世に出で、賤しき者の見る事なし、汝は日本の鳥の王として、此淺澤に降り居つゝ、捕られけるこそ淺ましけれ、今より後人なき島に下り、千町が野邊に求食して、人近づかば飛び去り、小田のかたへの稻垣は、天の網と思ふべしと、能く〳〵せめうを含めつゝ、鶴を放ち給ふなり。彼の刀と申すは家に傳

の御法にも、人間と生れんもの、五戒を保ちて、佛果を得る、殺生、偸盗、邪婬、妄語、飲酒戒是也、上代の事は扨置き、五百戒も保ち給へども、末世濁亂の我々は、一戒をも保ち難し、それを如何にと言ふに、先づ偸盜戒は盜人の事、手を出しては取らざれども、欲しきと思ふ妄念は、日々夜々に絶え難し、此執著の盡きざれば、偸盜戒も破るなり、邪婬戒は夫婦最愛の事なれば、俗體にては保ち難し、妄語戒は虚言を言ひ、人の交情を避くる事、さがなき人に交れば、是も保つに難かるべし、飲酒戒は酒を絶つ事、上一人より下萬民に至る迄、悅びの處には酒を以つて富貴をなし、哀傷憂への座敷にも醉に化して忘るれば、是も在家は叶ひ難し、其内殺生戒を第一として、殊に是を戒め給ふ、御身如何なる果報にて、世の營みも多かるべし、生きたるものの命を取り、明日をも知らぬ露の身を、助からんと思ふ心の罪深さよ、其上鶴は千年の齡を保ち、人間には勝りたり、假令我身は鶴に代りて死するとも、助けて給べと宣へば、獵師愈腹を立て、我は賤しき者なれば、五戒も十戒も辨へず、只價もいらぬ魚を漁り、人も咎めぬ鳥を捕り、調味して食ふ時は、罪も報も覺えぬなり、御身の命に代り給ふとも、我が餌食ともならばこそ、由なき人に見付けられ、時を移して妻や子供の待つべきに、こゝ放し給へと怒りけれ

壽命せんくわ—せんくわは遷化か

日の憂き日を慰まんと、岸の隱に佇みて、驚かさじと見給ふなり。かゝりける處に、男子一人堤傳ひに忍び寄り、天の網を引延へて、彼の鶴を手捕りにして、首を捩ぢて、羽交の下にぞ敷きにけり。無慙やな雛鶴は、今まで虛空を翔り、水を渡り、思ふ事の有りげにも無きに、彼の男に生捕られ、今を最後の一聲は、壽命せんくわと聞えたり。宰相是を聞き給ひ、只今の鳴く聲は、千年の鶴命終ると悲めり、是を聞きながら目の前にて、殺さん事我殺生となるべきと思しければ、する〳〵と走り寄り、如何に御身は、何とて其鶴をば取りて、害し給ふぞや、我に得させ候へ、親の孝養に放つべしと呼はり給へば、男子聞きて呵々と打ち笑ひ、和殿は何者なれば、偶捕りたる此鶴を、得させよと乞ふこそ不思議なれ、我は此里の傍に住む獵師なるが、明暮江河の鱗を漁り、山野の獸を捕りて、一生を過ぐるなり、此四五日は如何したりけん、沖の鷗、磯千鳥の、一つも捕り得ずして、妻子が飢に臨みしなり、今日偶捕りたる此鶴は、天の與へと思ひしに、くれよと言ふこそ心得ね、活けて置くにこそ人の怨みも有るべけれと言ふまゝに、鶴の細首引き延べ、己が小脇に引き敷きて、力を出して締めたりけり。宰相愈悲しく思召し、獵師に取り付き、暫く待ち給へ、假令殺し給ふとも我が言ふ事を聞き給へ、釋尊一代

田面の如く—田面の此の如くの衍か
榮ふる—榮ゆるの訛

も共儘色づく秋となりにけり。里人是を見て、あら不思議や、我々終夜漉返を立てて鹿を追ひ、鳴子を引きて鳥を拂へども、荒れ果てにたる田面の如く、初めてかやうに榮ふる事、御身の恵みと覺えたり、是菩薩の化身なりとて悦ぶ事限りなし。漸うに孚みけれども、粟の飯稗の粥にて貯へ置ける物もなし。晝は來りて慰め奉り、畑を打ち稲を刈り、御目にかけ日數を送り給ふなり。

或日の事なるに、柴の庵を立ち出でて、田面の中道を踏み分けて、落穂を拾ひ、袖に入れ、霜の下草打ち拂ひ、うつらふ菊を摘みためて、昔の事を思ひ出で、今の浮世を慰みて、四方の梢を眺め給ふ。錦彩る山の端は、染むる時雨や厭ふらん、雲井を渡る雁音は誰が玉章や掛けつらん、忍ぶ甲斐なき故里も、今更思ひ出でけれども、一度厭ひし浮世なれば、立ち歸るべき心地もせず、柴の樞の屢々も、住めば都の心地して、日も暮れ方になりぬれば、ありし庵に立ち歸らんとし給ふ處に、何處とも知らず、雛鶴一つ飛び來り、澤邊の小田の片淵に降り居つゝ、漁してこそ居たりけれ。宰相熟々と見給ひて、あらゆゝしの鳥の姿かな、費長房といふ仙人は、鶴の翼に宿をとり、虚空を翔る例あり、衛の懿公と言ふ者は、鶴を愛して一生を暮すとかや、我はせめて野鳥の鶴を愛しつゝ、今

ちやうさう—未詳
いへし者—いひし者の訛

も、御身の姿にて田の草を取り、畑打つ事もなるまじ、只何處へも行かせ給へと申しければ、力及ばぬ次第とて、庵の内を出で給ふが、やう〳〵力弛み足も立たざりければ、一足踏みては畔に倒れ、二足には巖の苔に打ち轉び、行きやらぬ風情を、里人哀れと思ひければ、如何に聞召せ、我々一日の營みだにも容易からねば、御身を養ひ奉らん事も叶ひ難し、さりながら餘り御痛はしく候へば、是に留り給ひて、晝は稻葉の鳥を追ひ、夜は小男鹿を拂ひて給はらば、此所に留め申さんと言ひければ、如何にも孚みて給び給へ、嬉しき人々の志かなと、涙を流し給へば、里人も情深く、柴の庵を設ひて留め奉る。己が食を分けて其日の飢をば助けてけり。日もやう〳〵暮れければ、里人は皆歸りて、物荒涼じき山陰に、只一人臥し給へば、秋風烈しく身にも染みて、露の手枕安からず、事問ひ交すものとては、虎狼野干の叫ぶ聲、耳に從ひ目に觸れて、昔の夢も結ばねば、何に樂む世の中ぞや。傳へ聞く唐土のちやうさうといへし者、世の交りを疎み果て、七珍萬寶を捨て、山中に籠り居て、悟の道を得るとかや。我は濁世の凡夫にて、觀念坐禪の力もなし、只一念の功力にて、安養淨土の營みには、佛の名號に若くはなしとて、高らかに念佛して夜を明し給へば、鳥類畜類も其聲にや靜まりけん、早稻田の稻も食ひ荒さず、晩稻の穗並

かけ給ふ—兼ぬるをいふ

鶴のさうし上

情深うして、富貴の家と榮ゆる事、中比宰相にて右兵衛督をかけ給ふ人ありけり。父は左大將むねまさとて、世に覺えいみじかりしが、此宰相は殊更慈悲心深く、飢ゑたるものに食を與へ、窶れたる人に衣裝を取らせ、我身の上を忘れ給へば、何時しか家貧しくなり、朝餉夕餉の烟も絶え、春夏の衣をも脱ぎ更へんたよりもなし。自然人の交際も薄くなり、親しきも遠ざかりければ、かくて世に生存へ、時めく人に嗤はれんも心憂し、いかなる山林にも籠り、身の隱家を求めんとて、只一人そこも知らず、迷ひ出で給ふ。

或山陰に草の庵の有りけるを、一夜の宿と賴みて夜を明し給ふ。

夜明けて里人來り、是は人の住む家ならぬに、如何なる人なれば、艶きたる容姿にて、この内にはおはしますと咎めければ、我は行方もなき世捨人なれば、汝等心ありて孚みてくれよかし、我身に叶ふ事をば、如何なる奉公をもし侍らんと宣へば、里人聞くより

鶴のさうし

る戀の道世にためしなき契をばかき留めける水莖の跡ばかりこそ由なけれ」とありて滿尾せり

濁りなき世—此歌の上句缺けてなし

よう思召し—世を思召しの誤なるべし

とぢめ—終局の意

打傳への爲におくなり—打傳へん爲にかきおくなりの誤か

また例なき　たぐひをも　思ひ出でよの
心にて　只書きすさむ　水莖の
岩根をいづる　山川の　谷水よりも
處狹き　袂の露を　君は知らじな

色に出て言はぬ思ひの哀をも此言の葉に思ひ知らなん

濁りなき世に君を守らん

かやうに歌を書き奥に二首の歌を書き付て、此箱は人に厭かれず、年經れど添ふ人に愛を增す箱なれば奉るなり、君に添ひ參らせん程は、此懸子をあけさせ給ふなと申し置きつる如く、よう思召し離れんとぢめなどには、開けても御覽ぜさせ給へなど、細々と書きて參らせたるに、哀淺からず思召しける。畜類ながらかゝるやさしき心の、哀深きを打傳への爲におくなり。

變らじと—紅葉合に「忘れじ」とあるよろし

人知れず云々—意味通ぜず、紅葉合には「人知れず思ひ入りけ

何時の世までも　變らじと　思ひ明石の
浦に出て　潮干の貝も　拾ふかな
蜑の焚く藻の　夕けぶり　棚引く方も
なつかしや　島傳ひして　みるめ刈る
蜑の子どもに　有らねども　乾く間もなき
袖の上に　訪ひ來る風も　ほしかねて
靡く氣色を　餘所に見て　思ひ知られぬ
身の程も　遂に甲斐なき　心地して
たゞ一筆を　すさみ置く　玉章ばかり
身に添へて　長き思ひの　しるしぞと
常に弔ふ　心あらば　後の世までの
掛橋と　なりても君を　守りてん
かゝる憂身を　人知れず　とぶらはしとは
をののやま　またたついなや　花に出でて

晴れやらで浪に漂ふ—紅葉合に「浮雲の風に漂ふ」とあり

負ひなん事の—紅葉合に「おもはん事の」とあり

身の類ぞと—類は頼又は願の誤か

ずれば、此巻物の奥に長歌をぞ書き付けける。

束(つか)の間(ま)も　去り難かりし　わがすみか
君を逢ひ見て　その後は　靜心(しづごころ)なく
あこがれて　うはの空にも　迷ひつゝ
はかなき物は　數ならぬ　憂身なりける
物ゆゑに　すゞろに身をば　つくし舟
漕ぎ渡れども　晴れやらで　浪に漂(たゞよ)ふ
篠蟹(さゝがに)の　糸筋よりも　微(かす)かにて
過ぎし月日を　數ふれば　唯夢とのみ
成りにけり　我身一つは　如何にせん
君さへ長き　恨みをば　負ひなん事の
由なさよ　朝夕君を　見る事も
身の類(たぐひ)ぞと　慰めて　夢(ゆめ)現(うつゝ)とも
別(わ)き難く　明かし暮らしつ　面影を

官の廳―太政官の正廳

君さらぬ樣にて、此箱を引き隱し給ひけり。

扨御内參りの紛れに車に乘るよしにて、何處ともなく失せにけり。殿には内へ御供なりと思す、内には心地惡しと常に言ひしかば、里に止りぬらんと人々も思ふ。姫君も歎かしく、如何もなりつるぞと、心元なう思召し、二三日過ぎて、何方へも無しと聞えければ、親の方此處彼處尋ねさせ給へども、行方も知らず。五日十日の程は、さりとも聞き出でん、餘所よりや歸り來んと待ち給へども、見えねば、何處に失せぬるぞ、人の隱したるかと思し給ひければ、御悦びに御心の内の御歎ぞ增させける。諸卿の女房達打託ち歎き合ひけり。何事につけても此人あらましかばと思しける。宰相殿は中納言にぞ成り給ひける。玉水の事常に名高く、いみじき事も有れば、如何に成りぬる事ぞと歎き給ふ。姫君は此箱の中ゆかしく思さるれども、御門のおはします事絕えず、暇なくて明かし暮らし給ふに、或時官の廳へ御幸あり、よき暇と思召し、忍びて開けて御覽ずれば、始めより終りの事を書き付けたり。こは如何になる事ぞと、御胸打騒ぎ、恐しくも哀にも思しけり。我故かやうに化けたりしを、遂に色にも出さで過ぎし事の、畜類ながら無慙さよ、覺えの志を見せつゝせし事の哀さよ、難有き心かなと、思召し續けて打ち淚ぐみつゝ御覽

見屆け給はまじきや—見屆け給ふまじきやの訛

ん、とても御内參りあらば、其時こそ紛れ失せめ、わが化けたりし姿を、今まで見つけられざりつるこそ不思議なれと思ひ廻らして、風の心地とて、我住む局に閉ぢ籠り、初めより思ひ染め奉りし我有樣、今までの事を書き集め、小き箱に入れて、姫君にもて參り、何とやらん此頃は世の中味氣なく仇なる物と、思ひ知られて物憂く侍れば、もし夜の間にも消え失せ侍る事もやと覺えて、此箱を奉る、我いか樣にも成りなん後此箱を御覽ぜよと申して、潸然と泣きければ、姫君は怪しく、如何に思ひ給へば斯くは宣ふぞ、此儘わが行先をば見屆け給はまじきやと打怨み給へば、御内參りにも御供申し奉るべけれど、もし如何なる事か有らんと心細くて、是を奉り置くなり、儀式の折は人目繁くて、此箱をもえ參らせぬ事かあらんなどと、思ひ奉りてなど言ひ紛らかしつゝ、構へて〳〵此箱を類なく思召し、又親しく思召さるゝ月さえなどにも見せさせ給ふな、樣ある箱にて候へば、左右なく人に見せさせ給ふまじ、中の懸子をば御年積り世を思召し放ちたらん時、明けさせ給へと申せば、打泣き給ひて、何時までも候はんとこそ思ふに、斯く末の世の事まで宣へば、心元なく、いと憂き心こそすれと宣ひながら、此箱を受け取り給ひて、互に涙に咽び給ふ。月さえも參り人々忙しげなれば、紛らかしつゝ立ち去りぬ。姫

有か見たり—誤脱あるべし意味通せず

に亡き後を弔ひ給へ、我は入道して山深く閉ぢ籠り念佛申すべしとて、病者の許を立ち退きけり。母は娘の人と物語するとぞ思ひける。扨病者は心輕くなりて、物など言ひ、物見入れなどしける由聞き、同じ畜類と言ひながら、有か見たりとて語りければ、實にさる事ありとて、彼の射殺しつる狐の後弔ひ、樣々の孝養したり。扨玉水は心易く見置きて御所へぞ歸りける。

既に霜月になりぬれば、御内參りの御儀式目も驚くばかりなり。女房達童三十人、中にも此玉水をば中將の君になし給ひて、一の女房に定めらる。されども是を勇しくも覺えず、常は打萎れたるを、如何にと怪み給へば、何となく風の心地など言ひ紛はし、いかさまにも物思すらん、かばかり隔てなく思ふを、などか心にこめて言ひ出で給はざるらん、語りても慰み給へかしと宣へば、打泣きて、遂には知召さるべき事なれども、今は語り奉らじ、亡からん後にも哀とは思召し出させよなど申せば、心苦しう思す。御内參りも近づく儘に、玉水熟々と思ふやう、我畜類と言ひながら、近づき參りて契り奉らん事は痛はしさに、只斯くながら見奉り添ひ奉るに、心を慰めつる事のはかなさよ、姫君の御耳へは聞かせ參らせばやと思へども、今まで知らせ奉らで思ひの外に恐しとや思され

一業所感―前世になせる一作業が現世にて其結果を感起するをいふ

佛の力にはけ給ふ―誤字あるべし、意味通ぜず

耳に留めて覺えきかんといふは云々―紅葉合に「耳にとゞまりて候ひしは惡を知らざるところをさぜんすと申す也罪は理非をわくべからず」とあり

善惡けりつしやうは―けつしやうは決定か、このあたり文章調はず

隨ひて、無間の底より、炭頭の如くなるを金鋏にてはさみ出し給ふとこそ申せ、斯かるめでたき御門だに前世の業をば免れ給はず、又播磨の書寫に住みける蟒、雀の子を尋ぬるとて、法華經の聲を聞きし故、聖武天皇の后とならせ給ひしなり、今惡念を拂ひ、菩提心を起し、十惡五逆の罪人まで導き給ふ彌陀の名號を賴み奉らば、後生は疑ひ有らじ、然るに汝も獸なり、我も畜類なれば、一業所感の身として、何れを敎化すべしといふ。其時若狐理はいと能く知り給ひて、佛の力にはけ給ふ謀一旦の事なり、法然上人の仰せられし事を、耳に留めて覺えきかんといふは、善惡を嫌はざる處なり、罪に理非は入るべからず、淨飯王の王子悉達太子と申せしも、王宮を出で給ひし故にこそ、今の釋迦佛とも成り給へ、又善惡を分け給ふはかうこそ有るべけれ、子の敵を取り給へば惡なり、助け給へば善なり、爰に於いて善惡けつしやうは、是を殺さんと思ひ給んは念ならずや、爰に於いては拂はぬ念なり、彼是を思ひ捨て給へば悟なり、卽身成佛こそ有らまほしけれ、十惡五逆を盡して、阿彌陀佛の敎化を賴み給はん事は然るべからず、此上にそれを思ひ取り給はずば力なしと申せば、其時古狐、猿眠して打頷き、斯かる不思議に逢ふ事前世の幸なり、誠に殺したればとて、戀しき我子歸るべきにあらず、今は一筋

れば、などか思ひ知らせざらん、我も此娘を悩まし、命を取りて、思ひをさせんと思ふなりと語る。玉水、理なれどしゆしやうむしやくしやう化城品と名付けたり、然りながら、業に引かれて、六道に迷ふ罪によりて、元の三途に歸る事、身より出せる焔なり、我等畜類なり、未だ業因盛なり、然りと云へども、善根をもせば、などこんど人體を受けざるべき、又人體は佛の體なり、心違はずば、などかこんど佛にならざるべき、幾程あらぬ世の中に、一旦の念に引かれて、忽ちに此病者を失ひ給はゞ、彼の罪と言ひ、又多くの人の歎きを受け給ひなん、何事も報いのものなれば、さあらば、獵師の手にも掛り給ふか、然らずは三途に歸り給はん事のはかなさよ、唯然るべくは、立ち退きて助け給へと言へば、古狐目を見出して申すやう、人界に生るゝも佛の敎によりてなり、然れば佛も度々現じて、忽ちに人の命をも斷ち給ふ、我に起す罪ならず、彼等が招く罪なれば、努々身に過失なし、終日に坐禪工夫をして我心を見るに、心に種なし、理を知りて心とす、理を計つて、そこと案ずるに、起らざる念を理とす、念を拂ひて功德とす、此仇を知らずして、思はん事は力なし、延喜の帝と申すは、末代まで忍ばれさせ給ひし帝なれども、過去の宿業により て、無間の底に沈み給ふ、帝の皇子かふや上人とて世を背き給ひし人、御夢想の告に

しゆしやうむしやくしやう―未詳

三途―地獄、畜生、餓鬼

などかこんど―「こんど」は「來ん度」の意

目を見出して―目を丸くして

かふや上人―太平記には日藏上人の事とせり

初花のつぼめる色のくるしきにいかに木の葉の色をみきくに

と、かゝる事を見聞くにつけても、思ひの色は晴れやらず。御返りは、忝き御哀み申し盡し難う、筆にも及び難う侍るなり、心に掛らぬ折なく參らまほしう侍れども、見捨て難くてなん、少しもよろしげならば、參りてよろづ自らこそ申し侍らめとて、

ちりぬべき老木の花の風吹けば殘る梢もあらじとぞ思ふ

月さえにも同じく書きて、

蔭たのむくち木の櫻朽ち果てばつぼめる花の色も殘らじ

など書きて參らせけり。

かゝる處に母の物怪起りければ、一所に集りて歎くに、又少し怠りたる樣にて寢たれば、皆打緩み、夜更け人靜まりて、此娘ばかり起きて居たるに、毛一條もなく禿げたる古狐一つ立ちよりて見ゆ。よく〳〵見れは我父方の伯父なり。是を追ひ退けければ、病者は微睡みけり。互に、こは不思議なる事かな、如何にといふ。我狐われ聊かの便りによりて、この病者を親と賴む事あり、然るべくは立ち退きて此苦みを止め給へと言へば、ゆめ叶〳〵ふまじき、其故は彼の病者の父、我賴みたる子を、さしたる咎も無きに殺した

初花の云々―此歌紅葉合に「初花のつぼめる色のゆかしさにいかに梢の世を惜むらん」とあり

我狐―汝狐の意

玉水物語下

此母少しも人心地ある時は心細げなる事ども言ひ、又起ると思ふ折々は物怪めきて、現にもあらぬ風情なり。起りて又少し押鎮めて言ふやう、我は斯かる有様なれば、遂には消え失せなん、痛はしや御身も我世に無くなりなば、又誰をか母とも頼み給はん　我母の譲りにて鏡一つ持ちたり、日比命の限りと思ひしものなれば、是を形見に御覧ぜよとて參らせけり。今ははや歸り給へと勸むれど、見捨て難くて一日二日と過ぐる程に、旣に三日になりにけり。姬君の御方より文あり、母の惱み心苦しかるらん、少しもよき樣ならば、早く歸り給ふべし、此方の徒然思遣り給へ、搔暗す心地なんすと書かせ給ひて、

　年を經るはよその風にさそはれば殘る梢はいかになりなん

と遊ばしたるを、此母すこしの間心よく見奉りて、忝くも仰せられたるかな、御宮仕ならずは、いかで世にある者とも知られ奉らん、とにもかくにも難有し、身より出でたる子供よりも、おろか無く思ひ奉るぞと悅びけり。月さえも細々と書きて、

身置き奉らん云云―御身をあとに置きて先立つが悲しと也

くと傳へ申しけるに、いと哀と思ひて、暫しの暇を申して參りければ、悅ぶ事限なし。如何なる前の世の契にか、唯朝夕御事のみ心苦しく、御宮仕も何時までかと痛はしく思ひ奉る、御身故に心易く過し侍れば、難有く嬉しくも覺え奉る、思ひ掛けずかゝる病を受けぬれば、千に一つも助かり難し、身置き奉らんこそ悲しけれとて、衰へたる手を差出して搔撫で泣きければ、此人は物も聞えず、泣くより外の事ぞなし。側に付き添ひ給へば、殘りの子供は少し暇ある心地して、此處彼處に打休む程なり。

並ぶもなかりけり—並ぶものなかりけりの衍か
御きそく—御氣色
かく田—紅葉合には「のだ」とあり
ほかい所—紅葉合に「けはひ所」とあるよろし、化粧料の意なり
樣々恨み仰せられければ—紅葉合には此下に、やむを得ず受け取りて父母の方へ預けたる由の文あり、さなくては聞え難し
おほぢ子ども—おほぢは老夫の意

幾しほに染めかへしてか紫の四方の梢を染めわたすらん

となん書き付けられける。殘りは姫君書かせ給ふ。扨其日になりて合せ給へば、色々心を盡して讀みいで、えならぬ枝色を調へ給へども、姫君のに並ぶもなかりけり。五度合せ給へども、度毎に姫君ぞ勝せ給ひける。此事隱れなく、内にも聞召され、彼の紅葉御召しあり。惜み給ふべきかはとて、やがて參らせ給ひければ、帝叡覽ましまして、やがて其姫君參らせ給ふべきよし、時の關白に仰せ下されければ、定めて參らせ給はん事は悅びなるべけれど、宰相微なる住居にて候へば、出し立てん事難くやと申させ給へば、やがて心得させ給ひて、三ヶ所を賜びにけり。かねて願ひし事なるに悅び給ふ事限なし。やがてその御營みめでたかりけり。玉水の前の御きそく類なし。津の國かく田といふ所をば、玉水のほかい所に賜びにけり。我身は無緣の身なれば、たゞ哀をかけさせ給はんこそ嬉しう侍らめ、斯樣の御事は思ひ掛け侍らずと度々申し返し奉れども、樣々恨み仰せられければ、さらば父母悅ぶ事斜ならず。或時彼の母物怪めきて、惱み渡る、多くの祈をしけれども、月日重なる儘に重くのみ見ゆれば、おほぢ子ども歎きけるに、御所に候ひ給ふ娘に、今一度逢ひ奉らまほしう、常に戀しきを見て止みなんと言ひければ、此由か

葉に歌をつけらるべしと有りしかば、同じくば歌を玉水よみて付け給へと宣ふ。たゞ遊ばしたらんこそと言へど、强ひて宣へば、さらば書き出でて見せ奉らばや、少しもよろしげならんを取り直し給はなんとて、筆とり上げすさみ居たる。殿も渡り給ひて、紅葉を御覽じ愛でて歸り給へば、また母上ぞ渡り給へる。

玉水は歌を書き出でて、姫君に奉る。何れも面白しとて、五つの枝に五首歌を付けらる。青かりし枝に、

もみぢ葉の今はみどりに成りにけり幾千代までも盡きぬ例に

黃なる葉に、

黃なるまで紅葉の色は移るなり我人かくは心かはらじ

赤き葉に、

くれなゐに幾しほまでか染めつらん色の深きはたぐひあらじを

白き葉に、

野邊の色みな白妙に成りぬとも此紅葉ばの色はかはらじ

紫の葉に、

所やあるー紅葉合に「われ〳〵が山におきて到らぬ所のあるべきか」とあり、此意の句落ちたる也

心地はし侍らんものをー「侍らん」は「侍らぬ」の訛

さしつぎの弟ーすぐ次の弟

の營みをこそ此三年はしつれ。此程御所の邊に候ふなり、靜かに語り申すべし、扨は明日一大事の用ありて、紅葉尋ね來りたり、各如何にもして尋ねて給べと言ひければ、所や有る、易き事かなといふ。嬉しくもあるかな、さらば高柳の御所南の對の椽に差置き給へといへば、易き事なり、さりながら犬や有ると問ふ。犬は侍らず、心安くおはせなど言ひ置きて歸りぬ。姫君月さえは、例ならず何方へ出で給ひしぞといへば、打笑ひ、怪しき者に戀ひ契りて出で逢ひつるなど戲れければ、實にさや有りつらん、いと久しかりしなどいへば、姫君、さもあらば、如何に憎からん、移れば變る習ひなれば、我は必ず思ひ捨てられんと戲れ給へば、忝なく嬉しいみじと思ひて、あな傍痛や、世にあるまじき人と言ふとも、御側を立ち離れて他人に添ふべき心地はし侍らんものをと申せば、知れ難き事と打笑み給へるを見奉れば、身に染む心地していと味氣なし。さて彼の兄弟は、山へ入りて紅葉尋ねけり。中にもさしつぎの弟、五寸ばかりなる枝に、色は五色にて、葉毎に法華經の文字を摺りたり。鮮に磨き付けたる如くなるを、明日の午の時に、玉水出でて見れば、枝ざしの斯かるもの有りけるや、まだ見ずとて、愛で悅び給ふ事限なし。外よりも數多奉らせ給へども、是に並ぶや有るべき。扨面々に紅

目易く―見ぐるしからず。
みやうとく―けうとくの術か
我も覺束ながら云々―文章調はず、我も覺束なく思ひながら過ぐる朝夕の心にかけてなどか思はざらんの意

と訪へば、姫君聞き給ひ、

おほかたの哀は誰もしらずやと身には習はぬ戀路なりとも

はや夜も更けぬらん、入らせ給へと宣へば、泣く〳〵歸りて、月さへ諸共、姫君に添ひ臥し奉れども、思ふ心のもと言ひ現はさねばにや微睡まず。

斯くて月も立ち行く程に八月ばかりに成りぬ。初雁音の告げ渡る聲も身に染む心地して、哀を訪ふと覺えたり。養母の方よりは絶えず訪れ、誠の親よりも愛しく當りけり。常の衣裳の外にも鮮に目易く仕立ておこせけり。文にも、などや時々は出でも慰め給はぬ、我はかく夜の寢覺にも、生まぬ親なれば、みやうとくのみもてなし給ふと恨みければ、我も覺束ながら過ぐる朝の心には思はざらなん、誠の親ならねばと、承るこそ侘しけれなど言ひて、返事をしければ、是を見て、げに〳〵さぞ有らん、理ぞかしとて打泣きぬ。去程に三年と申す神無月に、姫君の親しき人々數多寄り集り給ひて、紅葉合あるべしと、定めさせ給ふ。明日にもなりぬれば、色美しく葉數多有らん紅葉を尋ね侍るに、此玉水夜更けて打紛れ出で、元の姿になり、鳥羽殿の南面の塚に、兄弟などある處へ行きたりければ見付けて斜ならず悅び、如何にや何處より來れるぞ、失せぬると覺えて後

心から雲ゐ云々—紅葉合には「おのづから雲ゐをいづる望月の袂に影をさすぞ物うき」とあり

哀をぞ—紅葉合に「哀とぞ」とあるよろし

さみだれの程は雲ゐの郭公たがおもひねの色をしるらん

玉水やがて、

心から雲ゐを出でて郭公いつを限りと音をや鳴くらん

月さえ、

覺束な山の端いづる月よりも猶鳴きわたる鳥の一聲

など言ひかはし、夜も更けぬれば、内へ入らせ給ひぬ。されども玉水は月殘り多く侍るとて殘り居て、來し方行く末打案じ、扨も我はいつを限りに何となるべき身の果ぞと、漫に涙漏れ出でて、袖も絞るばかりに成りにければ、

思ひきや稻荷の山をよそに見て雲ゐはるかの月を見るとは

心から雲ゐを出でて望月の袂に影をさすよしもかく

心から戀の涙をせきとめて身のうき沈むことぞよしなき

いと久しく歸らねば、月さえ心もと無くて立ち歸るに、かく吟むを聞きて怪しく覺ゆれば、

よそにても哀をぞ聞く誰ゆゑに戀の涙に身をしづむらん

供御―食事

口々―内々の誤か

御乳母に伺へば、さらば唯やがて參らせよと宣ふ。悅びて引裝ひ參りぬ。見樣容貌美しかりければ、姬君も悅ばせ給ひて、名をば玉水の前と付け給ふ。何彼につけても優にやさしき風情して、姬君の御遊び、御側に朝夕馴れ仕うまつり、御手水參らせ、供御參らせ、月さへと同じく御衣の下に臥し、立ち去る事なく候ひける。御庭に犬など參りければ、此人顏の色違ひ、身の毛一つ立になるやうにて、物も食ひ得ず、けしからぬ風情なれば、御心苦しく思されて、御所中に犬を置かせ給はず。餘りけしからぬ物怖かな、此人の御覺えの程の御羨しさよなど、傍には嫉む人もあるべし。斯くて過ぎ行く程に、五月半の頃、殊更月も隈なき夜、姬君簾の際近くゐざらせ給ひて、打眺め給ひけるに、時鳥おとづれて過ぎければ、

　郭公雲非のよそに音をぞ鳴く

と仰せければ、玉水取敢へず、

　ふかき思ひのたぐひなるらん

やがてわがの心の内と口々申しければ、何事にか有らん心の中こそ懷しけれ、戀とやらんか、又人に恨むる心などか、怪しくこそとて、

見給ふ君—戀ひ慕ふ人

御ひてう—未詳

此由と語れば—かく〳〵の次第なりと語れば

行き、我は西の京の邊に在りし者なり、無緣の身となり、賴む方なき儘に、足に任せて是迄迷ひ出でぬれど、行くべき方も覺えねば賴み奉らんといふ。主の女房打見て、痛はしや尋常人ならぬ御姿にて、如何にして是まで迷ひ出でけん、同じくは我を親と思ひ給へ、男は數多候へども、女子を持たねば、朝夕ほしきにといふ。さやうの事こそ嬉しけれ、何處を指して行くべき方も侍らずといへば、斜ならず喜びて、愛み置き奉る。如何にしてさも有らん人に見せ奉らばやと營みける。されど此娘つや〳〵打解くる氣色も無く、折々は打泣きなどし給ふ故、もし見給ふ君など候はゞ、我に隱さず語り給へと慰めければ、努々さやうの事は侍らず、憂身のめざましく覺えて、斯くむすぼれたる樣なれば、人に見ゆる事などは、思ひも寄らず、唯美しからん姫君などの御側に侍りて、御宮仕申したく侍るなりと言へば、よき所へ有り付き奉らばやとこそ常に申せども、さも思召さば、兎も角も御心には違ひ候ふまじ、高柳殿の姫君こそ優にやさしくおはしませば、妾が妹、この御所に御ひてうにて候へば、聞きてこそ申さめ、何事も心易く思されん事は語り給へ、違へ奉らじと言へば、いと嬉しと思ひたり。

斯く語らふ所に、彼の者來りければ、此由と語れば、其樣をこそ申さめとて、立ち歸り

じんどう―神頭、鏃頭などの字をあつ、鏃の一種

園に狐一つ侍りしが、姫君を見奉り、あな美しの御姿や、せめて時々もかゝる御有樣を、餘所にても見奉らばやと思ひて、木蔭に立ち隱れて、靜心なく思ひ奉りけるこそ淺ましけれ。姫君歸らせ給ひぬれば、狐も斯くてあるべき事ならずと思ひて、我塚へぞ歸りける。熟々と座禪して身の有樣を觀ずるに、我前の世に如何なる罪の報にて、かゝる獸と生れけん、美しき人を見染め奉りて、及ばぬ戀路に身を俏し、徒らに消え失せなんこそ恐しけれと打案じ、潸然と打泣きて伏し思ひける程に、よき人に化けて此姫君に逢ひ奉らばやと思ひけるが、又打返し思ふやう、我姫君に逢ひ奉らば、必ず御身徒らに成り給ひぬべし、父母の御歎と言ひ、世に類なき御有樣なるを、徒らに爲し奉らんこと御痛はしく、兎や角やと思ひ亂れて、明かし暮らしける程に、餌食をも服せねば、身も疲れてぞ伏し暮らしける。もしや見奉ると、彼の花園に蹌踉ひ出れば、人に見られ、或は飛礫を負ひ、或はじんどうを射掛けられ、いとゞ心を焦しけるこそ哀なれ。中々に露霜とも消えやらぬ命、物憂く思ひけるが、如何にして御側近く參りて、朝夕見奉り心をも慰めばやと思ひ廻らして、或在家の許に男ばかり數多ありて、女子を持たで、多き子供の中にひとり女ならましかばと、朝夕歎くを便にて、年十四五の容鮮かなる女に化けて、彼の家に

三十二相―原本「二十五相」とあり、紅葉合によりて改む

なほざりばかりは云々―只そのまゝ家におくは殘念に思ひ

玉水物語上

中比の事にや有りけん、鳥羽の邊に高柳の宰相と申す人おはせしが、三十に餘り給ふまで、御子もなく、如何なればとて歎き給ひて、佛神に祈り申し給ひければ、其效驗にや北の方たゞならず見えさせ給ふ、御悦び限りなかりけり。扨神無月の初めつ方に、姫君出來給ひけり。手の上の玉と傅き育て奉り給ふ。三十二相の御容めでたく誠に傍ら光るばかりに見え給ふ。斯くて年月かさなる儘に十四五に成らせ給ふ。吹く風立つ波につけても、心をかけて歌をよみ詩を詠じ、何となき御遊にても類難有くおはしければ、父母なべてならず思し傅きて、なほざりばかりは痛はしく思召し、御宮仕にや出し立てんと思す。御心樣優にやさしくおはしませば、前栽の花ども咲き亂れ、四方の山邊の霞み渡り、いと面白きを、或夕暮に御乳母子の月さえと申す女房只獨り御供にて花園へ立出で給ひつゝ、花に戲れ、何心なく遊び給へり。此邊には狐と申すもの多く住みける處なり、折節此花

玉水物語

めんの躰―めんめんの躰か女人の躰の誤なるべし

惡業ほんの―惡業ぼんなうの誤か

し、暫く兩眼をふたぎゐ給へば、頃しも秋の草花の咲き亂れたる中に、時ならぬ藤、山吹、菫、蓮、其外さまぐ\の花の、今をさかりと匂ひ深く露を含みて月に色めき渡りけり。聖は御覽じて、さてはめんの體をあらはしけるぞと思ひ給ひて、煩惱卽菩提、生死卽涅槃といふ文を重ねて示し給ふ。たとへば煩惱と菩提、又生死と涅槃は水と氷との如し、又響と聲に似たり、しかれども煩惱は生死の源なり、かるが故に思ひのまゝに煩惱を起さば、生死つくることなし、されば只一心不亂の所にこそ涅槃の妙諦は讃歎すれ、過去の因によりて有情非情のかはりありとも、この妙文にひかれて佛果を得んこと疑ひなしと囘向して、もとの庵室に歸り給へば、東雲の空もほのかに明けすぐるとかや。心なき草木のたぐひだにも、誠の道に入りぬれば佛に成ること疑ひなし。此草子を見給はん人は、慈悲正直を專らにして、貪欲邪見戀慕愛執、もろく\の惡業ほんの大敵のきほひかゝる時は、忍辱慈悲を楯につき、名號の利劍をもつて是を鎭め給ふべし。

葛

葛の葉のうらみもなどか殘るべき心の秋の風し立たずば

忘草

たをりつゝ三世の佛に手向して花に憂きをもいざ忘草

尾花

よろこびの涙なるらし片岡の招く尾花が袖の露けさ

荻

秋風にそよぎいでつる荻の聲もおのづからなる法のことわり

かやうに心々のさまを一首づつ短册に書きつけ、上人の御前にさし置き、御いとま申して立ちいづるかと思へば、柴の戸ほそをさそひくる嵐と共に、搔き消すやうに失せにけり。上人思召しけるやうは、かく心なき草木まで、和國の風俗を知りけるぞやと、いと有難く思召し、かやうに口ずさみ給ふ。

草も木も皆佛ぞと聞く時はたれかは漏れん法の誓に

かやうによみて裾野の原に立出で給ひ、座具をのべ香をたき、一切非情草木成佛とくわ

座具—僧の用ふる敷物

くわしー觀じの誤なるべし

ゑむ―笑む、
しをん―紫苑、師恩

蓮(はちす)

心なき身もたのもしく思ふかな法の蓮のゑむに引かれて

紫苑

迷ひつる心の闇のおのづから晴るゝは法のしをんなりけり

深見草

深見草ふかく頼みをかけまくもかしこき法の教うけつゝ

末摘花

紅(くれなゐ)の色にそみても何かせん末つむ花のたむけならずば

紫陽花

あぢさゐの四ひらに咲ける花の枝折りて佛に手向にやせん

露草

露草の露の身ながら法の庭にたち交(まじは)りて頼むのちの世

蔦

蔦の葉のつたなき身さへ頼みあれや法の教の道たがはずば

撫子

なでしこと思ふ佛の惠みあれば及びなき身も賴もしきかな

仙翁花

いかにせんおふけなき身のかくばかり妙なる法の敎なからば

小車

法の師にめぐりあひにし小車の花さへ笑める心地こそすれ

葵

あひ難き法にあふひの花かづらかゝる淚は袖にあまりて

菫

こよひ聞く法に心のすみれ草花もや笑みの眉ひらくらん

藤の花

紫の花にうつろふ藤波のよする汀や西の彼の岸

紫蘭

一すぢの道をしらんと尋ねきて法の敎にあふぞ嬉しき

朝顔

はかなくも夕べを待たぬ朝顔の花の袂にかゝる白露

菊

のりの聲きくより早く雲霧のはるゝ心の月ぞさやけき

山吹

うれしさに露を拂ひてこよひしも御法（みのり）の庭にいでの山吹

絲薄

白露のたまゆら結ぶ絲薄みのりの雨に潤ひにけり

藤袴

ぬぎすてし薄紫の藤袴のりのゆかりを尋ねてぞきる

忍草

のりの聲聞く嬉しさのあまりにや忍ぶに堪へぬ我涙かな

刈萱

消えやすき露のうき身をかる萱の花に馴れつゝ願ふ後の世

都に御座ありし時は、あけくれ寵愛せられ申せしに、いつしか捨てられまゐらせて、其妄執深き故に、これまで參り御結緣にひかれて、佛果をうくる事こそ有難けれ、いざや面々のちまでの御かたみに、腰折歌なりとも一首づつつらね申さんとて、袂より短册を取りいだして、

夕顏

聞きうくる法の光は玉かつらかけてぞ賴む花の夕顏

萩

思ひきや露を結べる絲萩のこよひし花の紐とけんとは

女郎花

つひに又消ゆべきものをあだし野の露をみなへし手向にやせん

桔梗

二つなく三つなく法を一すぢにきゝやうくると尋ね來にけり

百合

あひがたき法の教は優曇華の花も心をゆりてこそ聞け

短册―傍訓原本に從ふ

二つなく云々―此歌桔梗の字を隱したり、以下この類多し一々註せず

六道四生―前にいづ

けながら悪業煩惱の闇に迷ひ、地獄には墮つるなり、迷故三界成、悟故十方空、本來無東西、何所有南北ともあり、迷ひの故に三界の流轉あり、悟る故に十方も空し、本來の面目を明に見れば、東西も南北もあるべからずと思召し、心の玉を磨き給ふべし、たとへば惡業煩惱のおこることは大洪水の如し、いかにとしてこれを堰きとめんや、只其水を切り流し〳〵せば、終には水つきぬべし、その水に溺れぬれば即ち地獄なり、是を以て地獄遠からず極樂まのあたりなり、さればをのこなりとも物毎に執著し、あるひは叶はぬ事を願ひ、又は戀慕愛執にひかれ、一念を切ることなきものは、六道四生に輪廻すべし、女人なりとも妄念を切りすてて、ひとへに佛に賴み給はゞ、何を疑ひあるべきぞと、さま〴〵に敎へ給へば、此女房たちは皆隨喜の涙に袖をうるほし、上人を拜し奉り、あら有難の敎化やな、忽ち輪廻妄執の雲晴れて、眞如實相の月おのづから澄める心地して、有難くこそ覺え候へ、御いとま給はり候へとて、皆々座を立ちければ、聖怪しく思召し、さもあれ方々はいかなる人々にておはしますぞ、御名のりあれと仰せければ、此女房達皆もとの座に直り、上人の仰せこそ御ことわりにて候へ、身の一大事を授かりまるらせて、いつまで我名を包むべき、いでく我名をあらはさん、我等は皆花の精にて候ふ、上人

面は菩薩に似て、内心は夜叉の如しとも說かれたり、しかるによつてもろ〳〵の佛にも嫌はれ、十方の淨土へ生るゝことも叶はずと、一切の經々に嫌ひ疎まれたること其數を知らず、そも〳〵我朝は粟散邊地の小國とはいひながら、欽明天皇の御代にはじめて佛法此國に渡り、聖德太子これを弘め給ひしよりこのかた、佛法流布の國となり、惡魔外道おのづから退き、民の煩ひなく國おだやかなり、津の國天王寺を佛法最初の御寺として、比叡山延曆寺は傳教大師の開闢、桓武天皇の御建立、藥師醫王の佛像あり、又南都の東大寺興福寺は三國一の大伽藍、聖武天皇の御建立、笠置の寺は天智天皇の御願所、高野の峯は弘法大師の御開闢なり、其外白山、立山、富士の嶽、戸隱山、釋迦の嶽、尊き山々峯峯寺々、靈佛靈社數を知らずおはしますが、峯をさかへ谷を限り、女人を深く嫌ひ戒め給ふぞかし、誠に內には五障の罪深く、外には三從のさはりありと聞く、又唐の白樂天が詞にも、人生れて女人の身となること勿れ、百年の苦樂他人によれりとあり、誠にかやうに內典外典に嫌はれ、かく淺ましき罪業の人々の、いかで佛に成り給ふべきを、釋迦如來の御慈悲の有難さは、一念隨喜の功德して無量ざいの罪を滅し、卽身成佛と說き給ふ、又法華の名文に、草木國土悉皆成佛とも說かれたれば、有情非情に至るまで、皆佛性をう

醫王―藥師の一名

峯をさかへ―峯を境として

無量ざい―無量罪

多生劫—多くの生死をへたる遠き昔

方々の有様を—此下に脱文あるべし

一條、鷹司、伏見殿の姫宮か、菊亭、葉室、西園寺、その外家高き人の姫君なるらん、しからば玉の簾、錦の帳の内にて、常は琵琶を彈じ、琴を調べ、歌を詠じておはすらん、又假初の物詣などにも御輿車花を飾り、舍人雜色あたりを拂ひ、上﨟、侍、御供申し、鞍馬の山の櫻狩、賀茂や八幡の物まうでなどにこそ出でさせ給ふべけれ、かゝるいぶせき柴の庵の内へ、しかも夜ふけ物凄き折ふし、御供申す人もなく、かちはだしにて來り給ふは、只人間にてはよもあらじ、愛宕の山の太郎坊、比叡の山の二郎坊、鞍馬の奥僧正が谷にすまひをなす小天狗の通力をめぐらし、此聖が心を迷はせて魔道へ引入れんとて來りたるか、さらずば此山にすむ虎狼野干のものどもが饑を助からんために、此僧をたばかり命を奪ひとり、しゝむらを服せんとて、女に變化て來るらん、よしそれとても力なし、たとひ魔緣の者なりとも、又虎狼野干にてもあれ、此界へ生をうけたらん者の、佛法に近づくは多生劫の緣ぞかし、一偈一句の功徳にて、無量無邊の罪を滅し、佛果菩提に到らしめんこと疑ひあるべからず、方々の有樣を、佛の戒め給ふところを、あら〳〵示し申さん、まづ涅槃經に見えたるは、三千大千世界のもろ〳〵の男子の煩惱を合せて、女人一人の業障とすと說き給へり、あるひは又女人は地獄の使なり、長く佛の種を絕つ、

又そのあとよりつゞき、二十ばかりなる女房の二十四五人いざなひ來るを見れば、いづれも花を飾りたる有樣なり。

又その
を慕ひ參り候ふと、涙に咽び申しければ、聖も尼君も墨染の袖をぞ濡されける。又そのあとよりつゞき、二十ばかりなる女房の二十四五人いざなひ來るを見れば、いづれも花を飾りたる有樣なり。

あるひは紅に白き袴をき、白綾に紫の袴ふみしだき、十二重の衣に花づくし縫ひて、又唐綾、唐錦、色をつくして飾り立て、次第々々に並みゐたり。中にも少し年たけたりと見えたる女房、上人に向ひ申すやう、これまで誘ひ參り候ふ人々は、御覽ぜられ候ふ如く、いづれも若く候へども、罪業深き女の身ながら、月花に心をそめて明かし暮らすのみにて、身の後の事をも知らず候へば、都のうちにていかなる知識をも賴みまゐらせ、御示をも受けまゐらせんと思ひながら、心ならざる身の悲しさは、いつとなく打過ぎぬ、今この上人の御事世にすぐれさせ給ひて、たふとく有難き御慈悲とうけたまはり及び候へば、皆々これまで誘ひ參りて候ふ、かゝる愚痴の迷ひを夢ばかりはるけてたび候へとて、いとあはれげにぞ見えける。聖聞召し、こは不思議なる御事かな、方々の御有樣を見奉るに、只人ならぬ御よそほひなり、雲の上人にて御渡り候ふかや、十二人の御局の中にても、女御后にてもおはすらん、さらずば公家の中にても近衛殿か、九條殿か、二條、

十二人の御局―天子に十二人の后ありといふよりいふ

受けまゐらせんために、これまで參りて候ふと申すところへ、又年の程は二八ばかりなる女房の、柳色の衣きて、薄紫の小袖上にかづき、する〱とさし入り、彼の尼君の脇に直り、みづからも御跡を慕ひまゐり候ふ、五障三從の雲厚うして眞如の月を澄ますことなし、今遇ひ難き緣にひかれて、是まで參りたるこそ嬉しう候へ、いかさまにも上人の御教にまかせ、末の闇路をはらしまゐらせんとて、露に萎れ涙にむせびてぞ禮拜しける。かゝる所に又十四五ばかりなる女の、薄萠黃の衣きて黃なる小袖うちかづき、足たゆく內へ入り、いと面はゆげにて尼君のそばに打ちそばみてぞ居たる有樣、いはん方なくらふたけて見えける。聖御覽じて、いかなる人々なれば召しつれらるゝ人もなくて、かく淺ましき庵の內へは渡らせ給ふぞとの給へば、かの女房しばしは御返事をも申さでやゝありて、みづからは父母もなき孤兒にて候ふが、いとけなき時より物思ふ事絕えやらで、道芝の露とも消えぬべく思ひつるに、繫がぬ月日たち行くまゝに、いとゞ思ひはます鏡、面影にたつ父母のことなつかしき明暮は、煩惱の垢あつく積り、拂ふ心の風絕えて、猶妄執の雲霧を、いかにもして晴らしやせんと來り侍るなり、上人の御値遇にひかれ、輪廻の業を免れ、父母われら諸共に無爲法樂の臺に到らんと思ふ心をしるべにて、方々の御跡

五逆十惡―前にいづ

深き女の身にて候へば、今上人の御教をうけ、後の世を助かりまゐらせんと思ひ、これまで參りて候ふといふ。聖聞召し、仰せはさもあるべけれども、かやうに世を捨てはてたる庵の內へ、女人の御身なるに、しかも夜更けていかで入れ申すべきぞ、急ぎ歸らせ給へと仰せければ、此女房きゝて、上人の仰せにて候へども、罪深き女の身にて候へばこそ法の庭には近づき候へ、五逆十惡のもの、女人、非情草木までも助け給はんとの佛の御誓願にて候はずや、そのうへ我身かやうに老いたる尼の事にて候へば、何か苦しかるべきとて、かづける衣を引きのけたるを、柴の編戶のひまよりもさやけき月に見給へば、六十に餘りたるらんと思しき尼の、薄靑の衣に練貫かみにうちかづき、露にしをれてイみたり。聖見給ひて、さては苦しからぬ者ぞと思ひ、柴の編戶を開き給へば、此尼やがて內に入りぬ。

聖仰せけるは、このあたりの人と仰せ候ふが、こゝは人里遠き所なるに、夜ふけてしかも女の一人渡らせ給ふこと、かた〴〵不審にこそ候へと仰せければ、誠は五條あたりの者にて候ふ、都にては常に參り仕へしことの候ひし、昔を語り申さば思召しあはする事の侍るべし、それはまづさしおき、かゝる迷ひ深き身のゆくへ、一偈一句の御示しをも

鐘さだかに聞えければ、又もや聞かん入合の鐘と詠ぜし歌を思ひいだして、

いつのまにけふの日もはやくれはどりあやしき程の入相の鐘

かやうに折にふれ事に隨ひ、心を澄まし明かし暮らし給へば、都のうちは云ふに及ばず、近國他國の者までも傳へ聞きつゝまうで來り、この聖を拜し奉り、末世の衆生を助け給はんとて、彌勒佛の生れ來り給ふと云ひならはしけるが、おのづから彌勒上人とぞ人の申しける。あまりに人の多く集りければいとはしく思ひ給ひて、

聲をきゝ色を見るにも世の中に心とまらぬ墨染の袖

ひとり世をのがれてすめる庵なれば軒もる月もいとはしきかな

かくて猶も浮世遠からん方をもとめんとて、北山の奥へわけ入り、人氣稀なる峯に柴の庵を結び、行ひすましておはしけるに、或夜夜半ばかりに柴の編戶をほと〳〵と叩く音す。野分の風のさそふにやと思ひ、ともし火をかゝげ心を澄まし聞きゐたるに、重ねて物申さんといふ音す。晝だに人のおとづれざるに、いかなる者の來るべき、只天魔破旬のわが道心を妨げんとて來るらん、よし何者にてもあれ、澄ましつる心の月は曇らじものをと思召し、誰なるらんとの給へば、これはこのあたりの者にて候ふが、元より罪業

うつつら—提婆尊者と交際ありし嗢咀羅（ウッタラ）をいふにや

悲願—佛が衆生のために大慈悲を起し願を立て行を修し諸願を滿てたまふ意にて卽ち諸佛の誓願をいふ

はず、況や人間においてをや。東方朔が九千歳、うつつらの八萬歳も名のみ殘れるばかりなり。かゝる教をうけながら、色にそみ香にめでて、二度輪廻の業にかへらんこそ淺ましけれと思ひ定めて、前栽に植ゑおきし花にも心をとめず、日比あつめおきし資財雜具をも打棄て、麻の衣の墨染を身にまとひ、東山のかたほとりに草の庵を結び、夕べには眞如實相の月をすまして、春の花のうつろひ、秋の木の葉の散りつくすにつけても、いよいよはかなき世の有様を觀じて、

　生けるもの草木のみかは何かさて此世に殘る物やあらなん

かやうに口すさび、淸水のかたを眺めやり、南無大慈大悲の觀世音、悲願たがへ給ふなと伏し拜みけるに、南にあたりて煙ほのかに見えければ、げに是は鳥部野にてぞあるらん、主は誰ともしら雲の消えてさきだつ夕烟、いつ身の上になるべきぞや、末の露本の雫と詠じける彼の遍昭が言葉も思ひいだされて、いとあはれなりければ、

　見ればげに心細くも鳥部野に絕えぬ烟のあけくれの空

誠に朝には紅顏ありて世路に誇るといへども、夕べには白骨となりて、郊原に朽ちぬとつらねおきしも、今一入のあはれをぞ催しける。さる程に夕陽西に傾き、遠近の寺々の

もいとゞなほ、秋の哀は知られけり。入り日の殘る山の端に、錦をさらすもみぢ葉も、色濃きよりや散りぬらん。曉かけて小男鹿の妻戀ふ聲を聞くにつけても、煩惱の闇に迷ふらんと打詠め給へば、やうく秋も暮れ、冬のけしきに變り來て、木の葉をさそふ北時雨、尾上も峯も白妙の、雪ふりうづむ炭竈の、煙たえたる山賤の住みかも思ひ知られつつ、いとゞ哀はまさりけり。是を見彼を見るにつけても、皆菩提の種ならずといふことなしとて、いよく發心修行の御志深く成り給ひて、十九の御年の八月十五日の夜、内裏を忍びいで給ひて、こんでい駒に召され、舍匿大臣一人召しつれ、檀特山のさかしき路を凌ぎ給ひて、阿羅々仙人を師と賴み、やがて菩提樹のもとにて御飾りをおろし給ひて、花の袂をひきかへ麻の衣に御身をやつし、御名をば瞿曇沙彌とぞ申しける。曉は谷に下りて閼伽の水を汲み、晝はひめもす峯に上りて花を摘み、つま木を採り、夜はよもすがら座禪の床に御まなこをさらし、衆生濟度のために難行苦行し給ひて、終に正覺ならせ給ふ。昔は淨飯大王の御子悉陀太子と申せし、今は三界獨尊の釋迦如來と現れ給ひ、一切の衆生有情草木國土まで、成佛の緣を結び給ひて、御年八十にして二月中の五日に、頭北面西に臥し給ふとかや。されば三世了達の御佛だにも、無常の掟はのがれさせ給

こんでい駒—馬の名、金泥、乾陟などの字をあつ

舍匿大臣—大臣とあるいぶかし、童子、舍人などいふが常なり

三世了達—過去現在未來の三世を分明に達觀すること

須彌の四洲―須彌山の四方にある南贍部洲、東勝神洲、西牛貨洲、北倶盧洲をいふ

しせつ―結夏、解夏、冬至、元旦の年中四大行事を四節といふ

え衰へも又かくの如し。須彌の四洲の中にも、此世界は老少不定の境なれば、一代教主の釋迦ほとけ末世の衆生に生死無常の定めなき事を知らしめ給はん御方便に、淨飯大王の后摩耶夫人の胎内をかり給ひて、假に人間に生れ悉陀太子と申し奉りしが、十九の年の御年より發心修行の御志ありければ、御父淨飯大王これを歎き思召して、いかにもして御心を慰め給はんために、都のまはりにしせつの四季を學び給ふ。太子は之を叡覽あるに、まづ東表に出で給へば、改まりぬる春の空、こち吹く風にさそはれて、梅が香ふかき山の端に咲き亂れたる初櫻、今をさかりと岩つゝじ、松にかゝれる藤波の、よせくる井手の山吹も、散り亂れつゝ飛ぶ蝶の、はかなき夢や頼むらん、霞の籬隔てつゝ百囀りの鳥の聲、きくも長閑けき景色なり。されども時移りなば花も散りうつろひなん、誠に是も菩提の種ぞと思召し過ぎさせ給ふに、南表を見給へば、常磐堅磐に繁りあひ、卯の花さける木の間より、歸らんには如かじと鳴きすてて行く時鳥、あとなつかしき橘の、かをりも深き紫の、雲をひたすか澤水に、色も異なる杜若、風さへ薫る蓮の絲の、濁りにしまぬ御心地にて是にも更にめで給はず。西を遥に見給へば、秋の景色のいろ〳〵に、千草の花の咲きつゞく、裾野の原の絲薄、結びもとめず散る露に、萎れて蟲の聲さやぐ、鳴きすがるに

胡蝶物語

前栽―庭

中比の事にやありけん、都近きあたりにこてふと云へる人あり。いかなる故にや、此人は妻をもかたらふ事なかりければ、愛すべき子もなく、只春秋の花にうき身をやつし、色さまぐ〵の草木の花の種を集めて、前栽にうゑおき、是を樂みければ、京わらんべども此人を胡蝶と名づけけるなり。胡蝶一人の母をもちけるが、世にこえて孝行をなし、いつきかしづきしに、五十ぢあまりの秋の比、假初の風の心地とていたはりつき、程なく十日がうちに空しくなりぬ。此人よその歎きにだに深くいたはる人なれば、まして恩愛深き一人の母に別れし事なれば、天に仰ぎ地に伏し、是を歎き悲みけれども其甲斐なし。誠に會者定離の習ひなれば、誰かこの道をのがれぬべきと思ひとり、せめての事に花園にいでて心を澄ましけるに、あしたに盛なりし花のゆふべにうつろひ、夕露を含みて笑める花も明くる日影に散り萎れぬ。誠に盛者必衰の掟のあたりなり。世の中の人の榮

胡蝶物語

にて髪を剃り、それより三熊野にまゐり、三つの御山を伏し拜み、その後諸國をめぐりつゝ、かやうに成り果てぬるも、誰ゆゑぞ、露と消えにし鶯姫の菩提をとはんためなれば、恨みと更に思はぬなり。

たうろう神―道陸神にて道祖神の事なり

本宮藥師―本宮は藥師の衍

ひれう權現―飛瀧なり瀧を本𨒂として祀る

さんてんの中のたかゑぼし―未詳、但しさんてんは摩利支天、大黑天、辨財天の三天なるべし

鎭守八幡大菩薩、春日、住吉、北野天滿大自在天神、伊勢天照大神、山には山の神、木には木魂の神、地にはたうろう神、河には水神、熊野は三つの御山、本宮藥師、新宮は阿彌陀、那智はひれう權現、瀧本は千手觀音、熱田の大明神、富士の淺間大菩薩、信濃には諏訪上下の大明神、善光寺の阿彌陀如來、南無三世の諸佛を請じおどろかし候ふぞや。

さて〳〵今生の花の緣、かやうに散りはてまゐらせ候ふべきとは、夢にも更に知らざりしに、思ひもよらぬ梓の聲の水手向けかたじけなや、誠に〳〵偕老同穴のかたらひも、緣つきぬれば甲斐もなく、比翼連理の言の葉も、かれ〴〵になるさゝめ言、誠にさんてんの中のたかゑぼしに、申したき事の海山語りても〳〵盡きせじ、かつ〳〵其時名殘惜しきこと、後世の障になり候ふぞや、さても〳〵不思議なる事にて、かやうに候ふや、さりながら思ひ切り、これ〳〵も思ひ候へども、九泉にかゝりまゐらせ候ふ間、夜六度、晝六度、十二時の苦み、御推量し給へ、語るはてもなし、閻魔の前を忍びて、これまで參りて候ふぞや、いざや魂彌陀の淨土へいそぐべし。その後ふくろふ猶々歎きまさりけり。はや浮世によしもなく、元結切りて西へ投げ、高野の峯にあがりつゝ、奥の院

あはぬ戀―逢はぬと引合はぬと兩意
數ならぬ云々―鷄の歌なり、雀の千聲より、鷄の一聲の諺に依る
見しよりも云々―雀の歌なり、躍るといふに歌主知られたり
此君の云々―かうぶりてに蝙蝠をかくしたる也
ほろとかけられて―ほろは雉の鳴聲なり
とつてこう―鷄の鳴聲を隱したるなり
梓―梓巫に口寄せさするなり
神おろし―神佛の名を呼びて其來降を乞ふをいふ

四十から今この年になりぬまであはぬ戀にぞ身をやつしぬる

うそ姫を思ふ心は深草の野邊にいつまでねをや鳴きなん

數ならぬ雀の多き聲よりもわが一聲に靡けうそ姫

見しよりもその面影にあこがれて躍りまるれど逢はぬ君かな

此君のなさけを深くかうぶりて末たのもしく臥す由もがな

うそ姫の情をほろとかけられて世になき鳥と人にいはれん

思ひきやつれなき君を戀にして夜半にかたみをとつてこうとは

その後壁に耳、岩の物言ふ世のならひ、此事上見ぬ鷲さまへ洩れ聞え、ふくろふの方へはい鷹のころくを討手に向けられけり。然るにふくろふは早く木の蔭におちにけり。料簡なくしてうそ姫を害し給ふ。此由ふくろふうけたまはり、起臥なげき沈みける。目もあてられぬ風情なり。せめて腹を切らんとて、刀に手をかけ給ふ所を、ふくろふの縁類みょづくのきすけ意見申しけるは、腹を切り候はんよりうそ姫の亡き跡を御とぶらひ候へと申しければ、ふくろふげにもとて思ひとゞまり、その後彌陀を頼みて梓にかけにける。まづ神おろしをぞ始めける。上は梵天帝釋、四大天王、閻魔法王、五道の冥官、王城の

こがるゝ—漕、焦の兩意
あふみ—逢ふ身、近江
歸りまゐらせん—歸りまゐらせんの誤
せん時—せし時の誤
くる—來る、繰る
よる—夜、縒る

翼連理の契をぞこめければ、ふくろふ餘りの嬉しさに、中にもかやうに鶯姫の寢物語のやうは、蚤のしわざや藻鹽草、火屋のけぶりにあらねども、はや浦風に打靡き、さゞめ言さま〳〵なり。そののちふくろふも、扨々此程の君に心をつくし舟、こがるゝことの悲しかりしに、終にあふみの鏡山、むかふ心のうれしさよ、又そもじは音にきゝし瀧の水、かやうに落ちあひまゐらせんとは、夢にも更に知らざりし、悠々と御物語申したく候へども、人目を忍びまゐり候ふ、はや〳〵歸りまゐらせんと、十二ひとへの褄をひきかへ、はや歸らんとせん時、ふくろふ餘りの悲しさに、泣く〳〵歌をよみ侍りける。

片絲のくるほどならばとまれかし深きなさけはよるにこそあれ

とよみければ、又鶯姫の御返歌に、

かりそめにふしみの野べの草枕露ほどとても人に知らすな

とよみすてて、急ぎ宿へぞ歸りける。もろ〳〵の鳥ども此由を聞及び、鶯姫の方へ腰折なりとも一首おくりまゐらせんと、思ひ〳〵に歌をよみ侍りける。

君ゆゑに身を墨染にそめなして深山烏となるぞ悲しき

我戀をたがしら鷺の願ひには君と岩屋にふたり住まばや

さる程にふくろふ餘りに事の物憂さに、木の葉かきよせ枕とし、少しまどろむところに夢をぞ見たりける。われは山の藥師なり、さても鸞姫の方よりよき返事にて候ふを、それを知らずしてさとらんことの不便さよ、こんよ過ぎて又こんよとは、明日の夜の事なり、天に花さきとは、月星いでさせ給ふことなり、地に實なるとは、ほのかにあかくなきことなり、西方の彌陀の淨土とは、これより西の阿彌陀堂の事なり、それにてあすの夜の月いで候はぬに逢はんと、起させ給ふと夢に見て、かつぱと起きていふやう、さこそしるしなりと思ひ、俄に支度して阿彌陀堂へぞ行きにける。さる間かの所に夜もすがら待ちにける。夜中の時分に少しまどろむ所に、鸞姫十二一重を引き飾り、めのとの女房ひきつれて、阿彌陀堂へぞ行きにける。ふくろふまどろむ姿を見てけおこし、そこにて一首の歌をよまれたり。鸞姫の御歌、

　思ふとは誰がいつはりのうそぞかし思はねばこそまどろみぞする

とよみければ、ふくろふ返歌に、

　よひは待ち夜中は怨みあかつきは夢にや見んとまどろみぞする

とよみければ、鸞姫此歌をきこしめして、打解け顏にて御物語いたしまゐらせんと、比

さとらん―さとらぬの訛

あかくなきこと―あかなることの誤なるべし

逢はんと―此下に「なりとて」の文字あるべき所なり

さこそしるしなり―さてこそ靈驗なれの意

けおこし―ゆりおこしの誤にや

よひは待ち―古歌なり

とよみければ、鶯姫返歌に及ばず、山雀にいふやうは、誠によく〱聞き給へ、年比上みぬ御方よりさま〲の御ことの限あらねども、御返事も申さず候へども、そもじの御つかひにましませば、事かりそめの水莖もいかではかなく洩すべしとて、御返事をぞあそばしける。

あからさまなる御言の葉、誠に水莖のあと打置き難く、ながめまゐらせ候ふ。さては數ならぬ身に心をかけさせ給ふかや。返事に及ばず候へども、文の中おそろしく思ひまゐらせ候て、事假初の申し事にて候へども、我身は賤しきものにて候へば、そもじは葛城山の神のゆかりにてましませば、誠しからず思ひまゐらせ候ふ、みづほのあはの假初に、末も通らぬ物ゆゑに、仇名立ちては何かせん、なか〱人には始めより問はれぬ怨みのあらばこそ。さりながらそもじとこんやの機緣うすくして、契りしこともよもあらじ、來ん世すぎて又來ん世、天に花咲き地に實なり、西方の彌陀の淨土にて契りなんと書きとゞめ、山雀に渡しけり。山雀斜ならずに思ひつゝ、急ぎ歸りてふくろふ殿にぞ奉りける。ふくろふ戴き開いて見るに、おりたしなみたる言の葉なり。山雀もさも曲なげなるふせにて歸りける。

文の中おそろしく―神佛を起請にたてたるより恐しといふなり

みづほのあはの―瑞穗の粟を水の泡にいひかけたり

こんや―この世の誤か

山雀に渡しけり―原本「山雀の渡しけり」とあり

おりたしなみ―「おり」の二字誤あるべし

ふせ―風情なるべし

彼の鷽姫の云々—文章調はず、「彼のうそ姫へわが玉章の誠にとゞき」の誤なるべし

たとへば—此使用法一種特別なり申して見ればの意と聞ゆ

もなき浮草の、苔の袂も朽ちぬべし、まつこともかれ〴〵になりゆく袖も白雲の、立ち迷ひゆく有樣にて、筆をとゞめ申すなり。かやうつ書き認めて山雀のこさく殿に渡しけり。

その後ふくろふ佛神三寶に祈誓申しける中にも、みやまの藥師へ願書を認めてこめける。南無藥師瑠璃光如來、彼の鷽姫のわが玉章の鷽姫へ誠にとつき、よろしき御返事を給はり、それがしに笑みを含ませ給ふものならば、藥師の御寶殿を金銀を鏤め、黄金の瓔珞、瑪瑙のゆき桁、玻璃の柱、錦の戸帳、水晶の切石、金銀の砂を敷き、池には玉の橋をかけ、極樂淨土をまなぶべしと、頭を地につけ祈誓申さる間、山雀こそ彼の宿へゆき、色色の物語を始めつゝ、その後申しいだしけり。誠にこれまで參ること、別の子細で更になし、たとへばかめわり坂の麓にふくろふ、そもじさまを戀にして、あけくれ袖をぬらさせ給ふ、つゝむに包まれずして、それがしを御賴み候ふ程に、參りて候ふとて、かの御文をとりいだし、まゐらせければ、鷽姫これを受け取らず、山雀のかたへ投げ返す。山雀とりあへず一首の歌をよまれたり。

ふくろふの我を賴みし玉章を空しくいかで返しはつべき

しなのなる云々｜伊勢物語「信濃なる淺間のたけに立つ烟をちこち人の見やは咎めぬ」

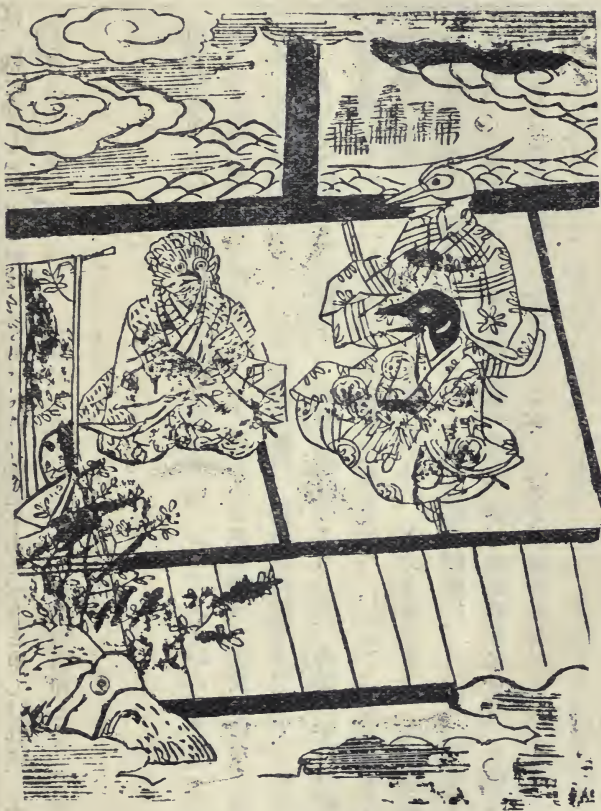
返事なきものならば、浮世は不定のならひ、互に消えはてまゐらせて、今生にての怨念、又來世にての怨み、生々世々に至るまで、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天人、この六道をありかんとき、微塵程も離れずして、くるり〳〵と追ひめぐり、憂きもつらきも後の世にて申すべし。もし此事上見ぬ鷲さまへ漏れきこえ、死罪に及ばん其時は、死出の山、三途の河をこす時に、手に手を取り組んで刹那が間に打渡り、閻魔の廳にまゐりつゝ、阿防羅刹に苛責せられんことども、うらみと更に思ふまじ。さて〳〵此事申し傳へんそのために、生滅滅已の鐘をきゝ、八聲の鳥を打過ぎて、是生滅法の鐘、朗々とうち響き、はや東雲に立ちあかしつゝ、終にいつとも見えもせず、君ゆゑ誠の咎もなき神や佛を怨みつゝ、君ゆゑ身をもやつれそひ、人目をつゝむ事なれば、あはれと問はん方もなし。かゝる思ひをしなのなる淺間の嶽に立つけぶり、胸よりや立ちぬらん。花に三春の約あり、いかで情をかけざらん、されば浮世のならひには風に靡く篠竹も胡蝶に親むならひあり、水にうもるゝ浮草も螢に一夜の宿をかす、虛空を照らす月だにも桂男に宿をかす、ひととほり一村雨の雨宿りも他生の緣とうけたまはる、一河の流を汲むことも他生の緣と聞きぬれば、及ばぬ戀をする人は神もあはれと思すらん。數ならぬ我袖の、乾くま

くよく譬ふれば、み山の木の葉、空の星、岸うつ波と眞砂をば數へば限ありぬべし。その外唐土、天竺、我朝、鬼界、高麗、契丹國、三千大千世界の畜類も、蟲けだものに至るまで、數へば限ありぬべし。法華經は一部八卷二十八品、文字の數は六萬九千三百八十四字につもれり、大般若經は六百卷、文字の數は五十九億四十八萬字につもれり。東方朔が九千歲、龍智和尙が一千歲、浦島太郞が七百歲も、限ある由うけたまはり候へども、君を思ひしことは限なし。物によく〳〵譬ふれば、春の花、秋の月ぞと、織姬か、皆鶴か、小野の小町か、毘沙門の妹に吉祥天女か、松浦姬、紫式部か、小式部か、和泉式部か、小督の局、大織冠の乙姬、玄宗皇帝の三千人のその中に、第一の妃楊貴妃、源氏六十帖の女房達、この外遊女かず〳〵多しと申せども、君に及ぶ人はなし。されば古き歌にもよまれたり、

なさけには賤しき袖はなき物をからさで宿れよひの月影

とよみおかれけんも、かやうの思ひよりも始まれり。上は玉樓金殿、下は賤が伏屋まで、野にふし山を家とする虎狼野干のたぐひまで、情はありとこそ聞け。一切の生類のその中に、この道知らぬものはなし。かやうに申すことの葉を、只おほかたに思すなよ、御

ば、殊にかしこき方なれば、定めて一往の御返事あるべきと申しければ、ふくろふげにもと思ひ、山雀の宿へゆき、いかに山雀殿聞き給へ、粗忽なる申し方にて候へども、あねはの松山鳥の院にて、月並の管絃のありし時、鶯姫の琴ひき給ふ御姿を一目見しより、由なき戀となり、身のやるかたもなく候ふ、及ばずながら世の嘲を顧みず、彼の御方へ玉章を送りまゐらせたく候ふ、わりなき申し事ながら、文傳へてたび給へと、打歎き申しければ、山雀申しけるやうは、鶯姫の御事は上みぬ御方より御心をかけさせ候へども、終に御靡きもなき由、うけたまはり候へども、餘りに〳〵御心のうち痛はしく候ふまゝ、御つかひ申すべしと申しければ、ふくろふ喜び、文さま〴〵と書きにけり。

さて〳〵何にとりてか、たかまのはらに餘所ながら見染めしよりこのかた、何とやらん心の內の亂れ髮、思ひの種となりにけり。入江に近き蜑小舟、こがれて物や思ふらん、何しに君をみ熊野の、音無川の淵瀬にも沈みはつべきとは思へども、君に名殘やをし鳥の、思へば命ながらへて、神や佛の惠みにも、賴む假寢の聲を聞きまゐらせん。そのためにかき集めたる藻鹽草、うつゝにも見る旅寢の小車の、めぐり逢はんと思ふ君、思ひしことの葉草こそ、譬へん方もなかりけり。されば浮世のその中に限あらざる事はなし、物によ

ふくろふ

中昔の事なるに、加賀の國かめわり坂の麓に、ふくろふといふ鳥あり、年を申せば八十三。ある日の雨中のつれ〴〵に、ふくろふ心に思ふやう、我此年になるまで榮華をきはめず、所詮榮華をせんと、烏の九郎左衛門、鷺の新兵衛を近づけて、いかに皆々聞き給へ、あねはの松山とりの院にて、月並の管絃のありし時、鶯姫の琴ひき給ふ御姿、しづ心なき戀となりて、心も心ならず、包むに包まれず、いやましの思ひ草となるまゝに、彼の御方へ玉章ことづけて給はれと申しければ、烏の九郎左衛門、鷺の新兵衛、詞をそろへて言ふやうは、仰せにて候へども、彼の鶯姫の御事は、七つ八つの年よりも今日に至るまで、上見ぬ鷲さまの御口說き候へども、終に御返事もなき由、うけたまはり候ふ、我等如きの者が御文づかひを申すとも、いかで御返事あるべきぞ、只同じくは山雀のこさく殿を御頼み候へ、それをいかにと申すに、をさなき時よりも同じ所にて御育ち候へ

ふくろふ

咎め給ふ―原本「かゝめ給ふ」とあり、今改む

佛像―佛緣の誤か

眞淨の道―眞如淨土の道

く思ふにやと上にいひしにつけて、見る人ならばこそ、見もせぬ人の何しに戀しき道理あらんと咎め給ふ心にぞあらん。それをこゝは鹽ならぬ海なれば、蜑の刈るみるふさわかめやうのたぐひも無きにといふ詞によそへて、みるめも無きにと續けたり。此歌の一ふしに鬼神の如くなる國守の心を柔げ、佛力の深きを驚き、菩提の道に入ること誠に歷切不思議にあらずや。郡司も佛力を賴みて妹背の中絕えず、家ゆたかにして佛道を修し、二世安樂を得る。あだなる迷ひのすぢを深き佛像に引きかけ、終に一大事の因緣と成就する事を思へば、いづれの門よりして眞淨の道に入らざるべき、利生の方便量りがたし、仰いでたふとぶべし。

あらみさき―あらみたまの誤にて、荒御魂の神(守)とつゞけしなるべし

しるしの文―證文

國のをの子姫―誤字あるべし

くて石山の觀世音の教へにまかせて付くると答へければ、さしもあらみさきの守の心もとけて、佛の力ならでは及ぶべきかはと、人々の上に召しのぼす。今よりは國を分ち巾すべし、ともかくも心にまかせ給へといへど、男はいかゞ有らんと辿るばかりなれば、武士の癖にて、言ひ出でたる言の葉を違ふは道の恥辱なり、人の思はんも恥しく、且は私にはからひ約をたがへなば、觀世音の咎めも恐しと、しるしの文に、いろ〳〵の絹五十匹、太刀、かたな、砂金百兩、馬、鞍など、引出物に相添へて、けふより半國を計らひ給ふべしと、盃とりて勸め、おのれも悅ぶこと限なし。男は面目を世にあらはし、家に歸りて妻を初め家の內上下悅ぶことたぐひなし。かくて横しまなくおきてし、民草ゆたけく家の內富み榮え賑しく、あまさへ國のをの子姬一方生ひいでて、夫婦悅びを重ね、行末長き樂みとなりにけり。これひとへに賢き妻の諫により觀世音に歸依し、信をもて祈れば、大悲無邊のあはれみを施し給ふ靈驗、豈疑ふべけんや。郡司は觀世音の厚恩の報ぜんために、石山寺に一日の法會を行ひ、これを恒例として今にたえず、子孫相續いて勤めけり。

つら〳〵此歌の心を案ずれば、所は近江の伊加胡郡なれば、それによそへいかなればか

参りたりと—と
文字不用なるべし
かため—契約

浦島が子の玉手箱、明けてかひなき恨はあらじと、うちまかせたる佛の誓ひを力にて、夫に渡せば、七日といふ夕つかた、國の守の館に参り、仰せのおもければ何の徑路は知らねども、歌の下つけけると案内さすれば、守はおそし來れ、そのわたり名ある侍、家の子どもある限り召し集め、興あるあらがひに郡司が妻をとられん不便さよ、よも歌の本末つゞくべきやと、喜びて待ち居たり。

程なく参ればよくぞ違へず参りたりと、いかに人々も聞き給へ、此歌心詞つゞきたらんにおいては、彼に國を分ちてしらしむべし、つゞかぬ時は彼が妻を我に贈らるべきかためなり、必ず此事違ふべからず、其證人にもなり候へかしと、髭おしなでて居たり。男恐れ〳〵心の内にはなも觀世音ぼさ〳〵と念じ、文筥をさしいだせば、封を切りつゝ改むるに、違ふことあらんやは。扨我方よりの歌を高く吟ずるに、近江なるいかごの海のいかなればとて、下の封を開きて讀みあげたれば、

みるめもなきに人の戀しき

と吟ずるに、おのれも人々もはつと言ひて、暫く感ずることやまず。守も餘りの不思議さに男を近くよせて、いかなればかく思ひ寄りしにやと、頻に問ひ責むれば、せん方な

ひにもれて、せん方なさに歸るなりと語りければ、彼の上臈する〱と立寄りて、そればかりの事はいと易かりけるものを、疾く語らざりける人かな、其和歌の末は、

　みるめもなきに人の戀しき

と言ひやるべしとの給はすを聞くに、嬉しきこと限なし。さるにても君はいづこにおはする御方、御名は何と申すぞ、承りてこそ重ねてよろこびも申さめといへば、武藏野のゆかりの草も假初の名なれば、いかでそれと打出でん、折節は御堂の東のつまに住むぞ、能くこそ問ひけると打笑み給ふ顏の光、衣のにほひ移るばかりに芳しくて、堂のかたへ歩み給ひしが、立ち隔たる朝霧に隱れて見失ひぬ。男はまさしく救世菩薩の我を助け給ふと、御堂の甍のかくるゝまでに顧みて、拜み〱口にはかの歌を誦しつゝ歸りけり。家には女房心もとなさに湖の方を眺めやりて、南無觀世音と唱へて、門に出でゐて待ち居けるが、夫の顏を見るより、いかに驗やといへば、佛を頼みてしるしなくて有らんやと、かしこげにいらへて内に入りつゝ、しか〲の事共を語れば、女房餘りの嬉しさに聲打上げて、さと泣きつゝ涙も更に堰きあへず、繰返し吟ずるに、言葉のつゞき長ありて頼もしげなれば、緣の薄樣に筆のあや淸げに書きて、上を包み封つけて推し戴き〱、

ねおびれたる—ねとぼけたる

はげしかれと—千載、俊頼「うかりける人を初瀨の山おろし烈しかれとは祈らぬものを」

三十三應の身—觀音の化身三十三體あるをいふ

くまでも佛の告はなくて、あまさへ國の守に襲はれ妻を奪ひとられ、我身もいたくさいなまれて追ひ拂はれつゝ、せん方なさにをうくとわが泣く聲の我耳に入りて夢は覺めぬ。かなたにはからこは何のしるしぞや、身は汗雫になり、われかの氣色に呆れ果てたり。かなたにはからからと鳴る花皿の音して、樒閼伽奉る法師ばらの、をのこのねおびれたる顏を見て、笑ふが恥しさに、やをら這ひいでて、怨しきに物言ひもやらず、堂をくだりて家に歸るに、參る人も多く、出づる人もある中に、怪む人はさし寄りて、何を歎く人ぞと問ふに、何をか歎かんと答へつゝ、樓門にさしかゝる程、いと氣高き上﨟の面は白く光るやうにて、まみのあたり打ちけぶりたるが、紫苑色の衣に紫の綾ひき重ね、濃き袙白ききぬかづきて、市女笠きたるに供の女三たり四たり後にさがりて歩みくる。かの夫を見て何を歎くぞと問はせたるに、はげしかれとは言はまほしけれど、何を歎かん、伊香郡より參りたるにと答ふ。猶思ふ事あらんに申さしめ給へと、頻に問ふにこそ、ふと心づきて、佛智不思議の方便は順逆の量りがたく、三十三應の身はいづれにか託し給はざらん、よしそれならずとも道の巷に行きかふ袖の追風、そよと身にしむも宿世のえにしなり、ましてあはれと思へばこそ問はせもし給ふらめと、しかじかの事ありて歎く事を祈りしに、菩薩の誓

ゆする―髮水つけて髮を梳ることなり

施無畏―觀音は一切群類の畏怖心を脱せしむる功德を有するよりいふ

したてて―ひたしての衍か

いもひ―潔齋

ゆふつけ鳥―雞

われ諸共にいづちの山の奥、谷の隈にも影を隠し、身こそわびしき住まひならめ、朽ちぬ契は心の中に變らじものを、諫むべき夫の諫められ給ふは、餘りにいふ甲斐なき迷ひざまかなど、いと面なげに恥しめられて、夫はやうやうに人心出で來て、暫く涙を押さへける。さらばそこの計らひに從ひてんとて、今日より家の内清まはりて、下人はしたに至るまで精進うちし、石山の方に向ひ觀世音を念じて、夜晝となく額づきぬ。さて三日といふ日に、男夜の程よりゆするして、明けたつともに立ちいでて、世は安からぬ野洲川にすむとて人の渡りかね、曇るか影の鏡山、長き思ひの勢田の橋、かけし願ひを見ぬ歌のあふ事かたき石山寺、大悲の誓ひあやまたず、驗をあらはし給へ、救世のほさち施無畏の德を施し給はゞ、歌の本末を示し、恐じき國守のにくさげなる面ばせを解き、われに半國をしらしめ、後の世は佛の國に生れ、ほさちに逢ひ見奉るまで、朽ちぬ契の妻諸共に、此世後の世助けさせ給へと、涙を袖にしたてて念願し、其夜は内陣に通夜しける。

此頃の物思ひ、習はぬいもひの心づくしに、道の疲れさへ添ひて、前後の分ちもなく打臥して、更けゆく鐘の響、曉の鈴の音にも目をさまさず寢入りたりしが、ゆふつけ鳥の鳴

きてのち、とありかかりとわきても答へめ、疾く語り給へといへば、泣く〳〵國の守のもてなしより始めて、しか〴〵の由語れば、女房とばかりためらひて申す、さはよく聞き給へ、かゝる難題にあたり、國の守に命をめし取らるべきしぎに成るとも、それ猶前世の宿業なり、今更悔むべきにあらず、さりとて免るべき難をそのまゝに過して、おろかなる名を取るべきや、つら〳〵思ふに我國の歌は素盞嗚尊の八雲をはじめ、三十一文字の數はかぞへて知るとも、六くさの深き道に尋ね入る事は更なり、まして見ぬ本歌に叶ふべき末をつがんこと、敷島の道に名高き雲の上人にもあるべき道理かは、昔物語に又逢坂の關と書きしに、かち人の渡れど濡れぬと、觴の底に續松の炭して書きつけしは、見たりし歌の上下にこそあれ、とにかくに國の守へ我を召捕らん謀に陥り給ひしこそせん方なくうたてけれ、かゝる事を愚なる人の心をもてめぐらすとも甲斐あるべき事かは、佛菩薩こそ一切衆生を憐みわたれる心に誠を發して頼み申せば、宿業をも轉じ給ふとなり、中にも大悲觀世音は救世の誓ひ深くして、もろ〳〵の苦を抜き樂を與へ給ふ、然れば遠く外に求むべからず、此國の内にまします石山寺の觀世音こそ殊に靈驗いちじるし、誠にもて頼み給へ、もし宿因深く驗なき時は、憂き事しげき此國に住まぬばかり、われ

六くさ—和歌の六義をいふ
昔物語—伊勢物語をさす
わたれる—る文字不用か

たへがたき—堪へと絶えとにかく

片手には面にさし當て—「は」文字不用なるべし

啼澤女—神代紀にある神の名

女房はかくとも知らで、常にもあらず國守に召されて、程過ぐるまで遲きことよと心もとなくて、更けゆく夜半も春なれば、さなきだに霞める月に浮雲のかゝる隈さへ怨しくて慰むかたのなきまゝに、枕に近き琴を搔き鳴らし調ぶるからに、中の緖のたへがたきすさみも由なしと置きて、

春の夜のならひに霞む月影もいとゞ淚に曇りはてぬる

あなうたてやと衣うちきて臥しぬ。むかひの寺の鐘の音も夜半過ぐる頃、男は歸りて寢屋の外にたゝずみて、言もいでず片手には蒔繪の文筥をもち、片手には面にさし當て、さめ〴〵と泣く。女房は呆れはてて、こは何事ぞやと胸うち騷ぎしが、もて鎭めたるけはひにて、やゝ言ふ事あらば申しもし給はで、只泣きに泣き給ふは、啼澤女の神にやおそはれ給ふらん、怪しきに疾く語り給へといへば、男は知らぬ事とて何をかの給ふ、此年月そこをば片時去らず馴れむつれて、憂きも喜びもうらなく語り慰み、あはれと思ふふし〴〵も月にそひてまさり草、まさる思ひのうらがれて、見もし見られん事も、今五六日と思ふが悲しければ、泣かるゝなりといふ言葉のあやも續かず、只妻の顏を守りつゝ、又雨雫と泣く。女房は思ひよらぬ事なれば興さめて、何のためにしかあらん、事のやう聞

和歌の本 上の句 末―下の句

口かためて―契約しての意に用ふ

駟も舌に及ばず―論語顏淵篇にいづ

らん書き認めて上に封じて、梨地に松のむらだちて千鳥の騒ぐ方に捨小舟の蒔繪かきたる文筥に入れ、上にも封つけ印押してさし出し、是をいとも開くべからず、此内には和歌の本なん書きてあるぞ、此末を同じ心に詠み合はせよ、汝が家にもて歸り開かずして、これに添へ七日といふにもて參るべし、和歌の上下付合ひたらば、速に此國をわけてしらしむべし、都方の事は我にまかすべし、もし歌の心ことに樣あしくば、汝が妻をまるらすべしと言へば、夫ぶとむね打騒ぎ、心の内にいかでわれ、神にもあらぬ身の草深き鄙の土に生ひたちて、早苗とり籾打つ歌ならでは言ひいでん言の葉もなし、たとひあらはに見聞くとも何程の事かいふべき、まして堅く封じて見せも聞かせもするにこそ、よしなき醉ひの上に心よく口かためて、年月馴れたる一日片時もえさらぬ中の蘆垣を、人のために押し隔つべきかはと思ひて、我ら賤しき心にて和歌の文字の數をだに知らず、何しに君に勝つ事あらんと、とかく言ひてすまひけれども、さればとよ、とくより言ひ定めしものを、上をかろしむるにやなど、むつかしげに言ひて、駟も舌に及ばず、むくつけき顏の鬚さへあれば、見あぐるも恐しくて、我にもあらぬ心地して泣く〳〵家路に歸りぬ。

物すべ—物のすべの意か
心うらなく—腹藏なく
いみに—いみじきの衍か
知らね—この下に、どもなどいふ語落ちしにや

ぞたくみける。まづ國守の御館にのたまはす事ありと、人をして召し寄せける。郡司の夫何事の仰せにやと、急ぎ參りければ、しかぐ\の由申して奥に召し入れけるに、常に參るより事嚴かにいとをしくもあひしらはず、心も空なるに國守出合ひていふやう、此國の内に人多かれども、物すべ知りたらん人とは汝をこそと思ひ侍る、然れば何事につけても心うらなく昔今の事ども問ひ聞かんれうに呼びいでぬるとて、珍らかなる果物を初め、酒肴もてなして、いかめしければ、夫よろこびよゝと飲みつ、昔今の事心ゆくかぎり打語りて、國の内の面目身に餘りてなど醉ひ泣きしてめで惑ふ。かく打解けたる時國の守曰く、何事につけてもわが言ひいでん事承り居けつべきやと。男の曰く、こは仰せとも覺えぬ事かな、時の御門の命をうけて此國にあるとじある事共を、心にまかせて計らひ給へとの事なり、しからば守のの給ふ事を否み申さば、御門の旨に忤ふことわりなれば、國法を背きていづれの所にか足をとゞめん、何事にても申させ給へといふ。然らば汝と我いみに爭ひせん、必ず我を憚らず計らふべし、汝勝ちたらば我國の所領以下を半分ちてしらしむべし、其上は心のまゝに計らへ、われ勝ちたらんにおいては善きも惡しきも知らね、汝が妻を我に得さすべしとて、文机にある沃懸地の硯とりよせ、何や

伊香物語

いづれの御門のおほん時にや、近江の國伊香郡の司なる人に、いみじうゆたけき者ありけり。其妻かたち世に竝びなきのみならず、心やさしく情ありて、花紅葉に心をよせ、四季折々のながめに大和歌を口ずさみ、絲竹をもてあそび、手なんどをかしく書きて、績み縫ふ業までおろかならず、そのわたりの人思ひかけざるはなけれど、心正しく貞婦の道を守り、五つの徳を修めて、いさゝかざれたる由もなければ、皆人類なき事に言ひわたりけり。其國の守かはる事に傳へ聞きて、いかにもして、此女を得まほしく思ひていはでの森のいはでやはと、眞間の繼橋ふみ通はぬ事もなければ、善きにもあしきにも重ねそめにしつまならで、又こと人にまみえず、手にだに觸れぬ玉章のくちやみぬる事となりぬ。このたびの國守もみぬめの浦の思ひ深く、波の立居に心をめぐらし、言にいでては叶ふべきやうにも有らざりければ、いかにもして此女を取りてんと、一つの謀を

かはる事―かはれる事にて普通ならる意か

くちやみぬる―朽ち終ぬる意か

伊香物語

六趣—地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上

つまこ—妻子か

慈眼視—原本「慈眼現」とあり、今改む

語の誤をひるがへして、紫式部が六趣苦患を救ひ給へ。南無當來導師彌勒慈尊、必ず轉法輪の縁として、是をもてあそばん人を安養淨刹に迎へ給ふこと豈疑ひあらんや。されば光源氏の名目五十四帖に分てりといへども、大數の名は三十七巻なり、これ大日の三十七尊を表せり。その巻々に好色ゆふゑんのたはぶれ言を書き列ねたりといへども、又無上菩提の妙なる理を含めり。しかれば諸佛の御内證にも叶ひて佛果を成ぜしめんといへども、末代の衆生に千々の縁を結ばしめ、隨喜の功徳をもつて、解脱の因となさしめんための方便にて、つまこの大會を行はしめ、諸人の參詣をすゝむる也。誠に有難き御利生にて、慈眼視衆生の御誓願たのもしき御事也。

明暦四年仲夏上旬

藤井五兵衛

つみ木―罪と積みとにかく

善逝―佛十號の一つ、好去と譯す

て、淨土の藤の裏葉をもてあそぶべし。彼の仙洞千年の給侍には若菜を摘みて世尊の供養せしかば、成佛得道の因となりき。夏衣たちゐにいかにしてか一枝の柏木をひろひて、妙法の薪となして、無始曠劫のつみ木を亡し、本有常住の風光を輝かして、聖衆音樂の横笛をきかん。うらめしきがなや、佛法の世に生れながら家を出で名をすつる砌には、鈴蟲の聲ふりすて難く、道に入り飾りをおろすところに、夕霧のむせび晴れ難し。悲しきかなや、人間に生れながら御法の道を知らずして苦海に沈み、幻の世を厭はずして世路を營まんこと。しかじ只薫大將の香を改めて青蓮の花ぶさに思ひを染め、匂ふ兵部卿のにほひを飜しては、香の煙のよそほひとなし、竹川の水をむすびては煩惱の身をすゝぎ、紅梅の色をかへしては愛著の心を失ふべし。待つ宵のふくるを歎きけん宇治の橋姫に至るまで、優婆塞が行ふ道をしるべにて、椎が本にとゞまること勿れ。北邙の野邊の泡雪と消えんゆふべには解脱の總角を結び、東岱の山の早蕨の煙とのぼらん朝には、栴檀のかげに宿木とならん。司位を東屋のうちに遁れて、樂み榮えを浮舟に譬ふべし。是も蜻蛉の身なり、有るか無きかの手習にも往生極樂の文を書くべし。かれも夢の浮橋の世なり、朝な夕なに來迎引接を願ひわたるべし。南無西方極樂彌陀善逝、願はくば狂言綺

あふひ―葵、逢ふ日
じやうせつ―刹淨(淨土)
四智圓妙―大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智の四智圓備して微妙なるをいふ

そも〳〵桐壺のゆふべの煙、速に法性の空に至り、箒木の夜の言の葉は終に覺樹の華を開かん。空蟬の空しき世を厭ひて、夕顏の露の命を觀じ、若紫の雲のむかへを得て、末摘花の臺に坐せしめん。紅葉の賀の秋のゆふべには落葉を望みて有爲を悲み、花の宴春のあしたには飛花落葉を觀じて、無常を悟らん。たま〳〵佛敎にあふひなり、榊葉のさしてじやうせつを願ふべし。花散里に心をとゞむといへども、愛別離苦のことわりを免るゝためしなし、只須らくは生死流浪の須磨の浦を出で、四智圓妙の明石の浦にみをつくし、關屋のゆきあふみぢを遁れて、般若の淨きみぎりに赴き、蓬生のふるき草むらを分けて、菩提の誠の道を尋ねん。何ぞ彌陀の尊容を寫して繪合にして、松風に業障の薄雲を拂はざらん。生老病死の身、朝顏の日影を待たん程なり、老少不定の境、乙女子が玉葛をかけても猶賴みがたし。谷たちいづる鶯の初音も何かめづらしからん、鳧雁鴛鴦の囀りにはしかじ。籬にたはぶるゝ胡蝶只暫くの樂みなり。天人聖衆の遊びを思ひやれ、澤の螢のくゆる思ひ常夏なりといへども、忽ちに智恵の篝火にひきかへて、野分の風に消ゆることなく、如來覺王の御幸にともなひて、慈悲忍辱の藤袴を著、上品蓮臺に心をかけて、七寶莊嚴の槇柱のもとに到らん。梅が枝の匂ひに心をとゞむる事なくし

傳へ給ひ、又我朝の傳教大師もろこしに渡りて、台州臨海縣の龍興寺道邃和尚を師として仕へ給ひ、此法を傳受して歸朝し、我山を建立し、一心三觀の宗旨始め給ひけり。たやすからぬ祕法なりとぞ示し給ひける。この澄憲石山の觀音を信じて、常に參詣せられ、或時夜もすがら祈念せられけるに、觀音夢中に告げての給はく、そのかみ紫式部といひし女人當寺に參籠し、光源氏物語といふ草紙つくれり、其詞ゆふゐんにして心菩提を勸め、義理殊に深しといへども、いまだ供養をのべざる故に、善所に到ることなし、汝才智世にすぐれたり、速に供養をのべて彼の佛果を成ずべしとぞ示し給ふ。澄憲驚き夢さめて寺中の僧衆に此由を告げ給へば、各奇異の思ひをなし、さらばとく〳〵說法を始め供養を遂げ給へとありしかば、澄憲喜悅して、佛前に高座を構へ、既に源氏の供養を始め給ふ。此事四方に聞えしかば、京都より公卿殿上人官女以下の女房たちに至るまでさし集ひ給へば、道すがら馬車にせきあうて、人のゆききもたやすからず。其外大津、松本、志賀、唐崎、矢橋、草津の土民等、湖上に舟を浮べ、陸路に駒を早めて參り集ひける程に、石山寺の繁昌時を得たりと見えにけり。澄憲の說法は富婁那の辯舌に異ならざれば、信心微妙のことわり花を咲かせてのべ給ふ。その表白の詞に曰く、

こうせん―廣宣
二乘はむじやう―未詳
そうしんのやく―增進の益にて、成佛の因道を增進する利益の意か
きやうたう―行道なるべし
多寶の塔中―多寶塔の内にて

庭に打たれ、淺ましき事共なり。武士は多勢を入れかへ〳〵攻め戰へば、大衆遂に叶はずして、神輿をふりすて奉り、泣く〳〵本山へぞ歸りける。夜に入て三社の神輿をば祇園の社へ入れ奉り給ひけり。御門大きに逆鱗まし〳〵て、則ち其時の天台座主明雲大僧正を流罪の宣旨下されけり。大僧正はごんど御輿ふり奉りし事、衆徒のしわざなり、度々なだめ給ふといへども、用ひずしてかゝる大事に及べり、されば座主の御身には曇りなしといへども、敕命なれば力なくして、追立の官使に具せられて、本坊を泣く〳〵立出でて配所へ赴き給ふぞあはれなる。年比日比御身近う參りつかうまつりし人々あまた有りしかども、恐れをなして御供申す者もなかりしに、此澄憲僧都ばかりこそ御名殘を惜み奉り、國分寺といふ所まで送り奉り給ひけり。座主澄憲を御前に召されて、汝われに名殘を慕うて是まで來る志こそやさしけれ、その報恩に天台祕密の法文一心三觀の血脈を付屬すと宣ひて、授け給ふこそ有難けれ。此法は是諸佛己心の所生なれば、如來四十餘年祕密して是を說き給はず、たま〳〵一乘こうせんの時、一乘はむじやうの悟を開き、菩薩はそうしんのやくに預り給ふ。されば天台大師は大蘇山の法花三昧の道場にして、きやうたう修行せしときに、靈山の一會現じつゝ、多寶の塔中、釋尊よりこの法を

とうさん—登山

○平家物語の神輿振及び座主流の條を見よ

しが、説法いみじくせられし故に、龍神感應を垂れ雨夥しう降りて、大地をうるほしよかば、萬民飢饉のうれひをとゞめて、安樂の思ひに住しけり。さてこそ其世の諺に、澄憲の説法には龍神感應を垂れ、甘露の雨を降らしけるとも申すなり。そのあした俊惠法師よみてつかはしける。

雲のうへに響くを聞けば君が名の雨とふりける音にぞありける

澄憲かへし、

あまてらす光の下にうれしくもありと我名のふりにけるかな

又一とせ白山妙理權現の神輿御とうさんありし時、山門の大衆蜂起して禁庭に嗷訴をいたすといへども、敢て御許容なかりけり。是によつて衆徒いきどほりをなして、八王子、客人、十禪師三社の神輿を飾り奉り、禁庭に振り奉るべしと詮議するよし聞えしかば、君も臣も大きに騷ぎ給ひて、敕使をもつてなだめ給ひしかども、衆徒敢て宣旨をも用ひ奉らずして、既に西坂本をくだりて、さがり松たゞすの邊まで神幸をなし奉りぬ。さる間武士に仰せて是を防がせらる。大衆神人事ともせずして、軍勢の中へ御輿をかき入れ奉る程に、武士と大衆と互に矢先をそろへ挑み戰ふ程に、あるひは劍を被り、あるひは矢

實相の道に入るべき故に、箒木といふ卷の名を始めにおけり、其證歌に云く、

園原やふせやに生ふる箒木のありとは見えて逢はぬ君かな

信濃の國園原といふ所あり、その所に箒木といふ物あり、遠くより見れば、箒を立てたるやうに見ゆるを、近くへよりて見れば、それに似たる木もなし。かるが故に有りと見れども無きものに、譬へ侍るなり。又夢の浮橋といふこと、是もありてなきものの譬なり。經に云、生死涅槃猶如昨夢と。又莊子といふ書に云、莊周が夢中に胡蝶となつて百年の間花にたはぶれ遊ぶと見たる由を書けり。此心を歌に、

百年は花に宿りてすぐしにきあはれ胡蝶の夢にぞありける

此物語にかきあらはす所の人々、有爲轉變のことわりを知らしめ、菩提の道に勸め入れんがために終に夢の浮橋ととゞめたり。これ則ち觀音の式部が心に入り替りて作らせ給ふと思へば、有難かりし御事なり。又人皇八十代の御門高倉の院の御時に、安居院の法印澄憲といふ人ありけり。これは少納言通憲入道信西が末子、文才世にすぐれ、辯舌人に越えたり。承安四年の春の比、天下大きに旱して人民悲み歎きしかば、則ち禁中において最勝講を行はれ、雨乞の祕法修せられけり。第二日の導師はこの澄憲僧都にて侍り

百年は云々―堀河百首、大江匡房の歌

せぞくゆふゑん―せぞくは世俗、ゆふゑんは優艷又は幽遠か

ためあきら―爲顯

有無の二偏云々―有無二偏の差別觀を脫却したるものを中道といふこの中道即ち宇宙人生の實相なり

貴賤男女のもてあそび、天下の至寶とぞなりにける。さて此物語は天台の六十卷といふ書を學んで、五十四帖に卷を分ち、筆法は史記といふ書をかたどれり。日本紀を考へ書きつゞけたる故に、紫式部が異名を日本紀の御局とぞ申しける。總じて卷々にせぞくゆふゑんの詞多しといへども、皆これ敷島大和言葉なり。歌は詞すくなうして心深く、多くの義理を含めり、則ちこれ眞言の陀羅尼をうつしたり、大日の三十一品を表して三十一字の詠とす。滅罪生善の徳あり、このゆゑに神明佛陀歌には感應をなし給へり。又紫式部は越前の守ためあきらの娘、一條の院の御めのと子なり。敷島の道にすぐれたるのみにもあらず、佛道にもおもむきて天台宗の許可をかうぶるといへり。さてこそ此物語にもまづ好色の事どもを書きあらはすといへども、人を仁義の道に引入れ、又は菩提心を勸めて、終には中道實相の妙理を悟らしめて、出世の善根を成就すべしとの方便なり。

さる程に卷のはじめに帚木、卷の終に夢の浮橋と立てたること、有無の二偏を離れて、中道實相の理をあらはしたる物なり。そのゆゑ又諸法は無きかと思へばしかも有り、又有るかと思へば無きものなり。有るにもあらず、無きにもあらず、有無の二法を離れて

大悲—觀音をいふ

さうせらる—藏せらる又は奏せらるか

となんよみてやりける。此人石山の觀音を信じて、折々參詣せられけり。あるとき賀茂の齋の宮より上東門院へめづらかなる物語や侍る、見給ひたきよし御所望ありけり。彼の齋の宮と申すは村上天皇十の宮選子内親王にておはします。賀茂の齋院は御門御代のはじめ殊に代らせ給ふ事なれども、この齋院は圓融院の御時天祿二年に齋の宮に備はり給ひて、既に御門三代に及びしかども、齋はあひかはり給はず、是によつて大齋院とは申すなり。上東門院、紫式部を御前に召して、うつほ、竹取などのふるめかしき物語は、定めて目馴れ給ふべければ、新しく作りて奉れと仰せければ、式部仰せに從ひ奉りて、まづ石山寺にまうでつゝ、夜もすがら大悲の御名を唱へて、此事をぞ祈りける。をりしも八月十五夜の事なるに、月の影湖水にうつりて、心の澄み渡るまゝに、物語の風情心に浮みければ、まづ須磨明石の兩卷を書きそめしが、そのおもむきを忘れぬさきにとて、佛前にありける大般若の料紙を本尊に申しうけて、ひるがへして書きとめけり。この故に罪障懺悔のために、大般若一部六百巻を自筆にかきて佛前に納め奉る、今に當寺の寶藏に納めおき侍るとぞ。次第に書き加へて五十四帖の草子となし、光源氏の物語と名付け、則ち大齋院へまゐらせ給ふ。齋院なのめならず悅びさうせらる。およそ物語の最上

紫式部の巻

一條の院の御時上東門院の官女に紫式部といふ賢女あり。その姿妙にして楊柳の風に靡き、翡翠のかんざし、蟬の羽の透きとほりたるが如し、亂れてかゝる鬢のはづれより顏の匂ひ薄雲に月のすきたるが如し。唇は芙蓉の如し、胸は玉に似たり。姿は園生の中の花の夕映、咲きこぼれたる梅櫻の如し。心ばへ幽玄尋常にして世の常の人にすぐれたり。管絃の道暗からず、和歌達者にして衆につらなり、既に歌仙にのれり。こゝにこせうしやう夕月夜をかしかりける程に、水雞の鳴き侍りければ、紫式部が許へよみてつかはしける。

あまの戸の月の通路さゝねどもいかなる方に叩く水雞ぞ

とあれば、やがて紫式部、

槇の戸のさゝでやすらふ月影に何をあかずと叩く水雞ぞ

上東門院―一條天皇の皇后彰子

こせうしやう―上東門院の女房小少將。

あまの戸の―新勅撰には「いかなる浦に」とあり

槇の戸の―同集に「槇の戸も」とあり

紫式部の巻

名をなつかしみ―原本「猶なつかしみ」とあり

時すぎ―時すぎての誤脱

罪障のあつくして云々―別本に「罪障の雲はあつくとも懺悔の功徳に闇晴れて」とある方よろし

無上菩提―原本「無常菩提」とあり、今改む

なつかしみ吹く風の、花散里を過ぎぬらん、猶こりずまの物思ひ、竹あめる垣の夜もすがら、月にあかしの浦傳ひ、猶みをつくし思ひゆく、左や右の繪合に爭ひ騷ぐ松風や、きゝていづくに薄雲の、煙のはてもあはれなり、世を槿の花の露、猶むつかしき少女子が、形見にのこす玉鬘、我が身にとむる梅が枝の、藤の裏葉も時すぎ、若菜も老いとなりぬべし、われ先立たばなき跡をとへかし、いきのはかなくも夢に傳へし横笛を、吹きよわりたる山風に、夕霧はるゝ小野の里、そもそも教主釋尊は御法の道を尋ねつゝ、夢幻の夜半の空、終に涅槃の雲がくれ、いざ諸共に罪障のあつくして、闇晴れて心の月をあらはさん、嬉しきかなや、只今の狂言綺語の戯れに花鳥風月を緣として、無上菩提に到らしめ、生死卽涅槃、煩惱卽菩提とも今こそ思ひ知られたれ、暇申して人々とて、花鳥座敷を立つと見えしかば、鏡の影も消えはてて、巫も元の姿となりけり。是を見聞く人も夢幻の心地して、うつゝとも更に思はれず。面白さといひ、一方ならぬ不思議なれば、奇特讃歎なのめならず、小袖十かさね、沙金十兩賜はりて、巫は歸りけり。

慶安三年孟春吉日

花の宴ー原本「花の緣」とあり、今改む

給を不審によりて昔語に承りし事どもを、まのあたりに御影に拜み奉ること他生の宿緣なれば、御菩提ねんごろにとぶらひ申すべし、委しく御物語り候へと申しければ、源氏仰せけるは、易き事なり、何事も尋ね給へとありしかば、そも〳〵彼の源氏の物語に帝王何代の事をあかせるぞや。答へて曰く、まづ前代の事はさておきぬ、桐壺の御門より始めて、朱雀院、冷泉、今上、春宮五代のうちを沙汰せり。后たちの御次第に不審あり、まづ朱雀院の御母はいかなる人にておはしけるやらん。二條關白、惡大臣の御娘。冷泉院の御母は。先帝四の宮薄雲の女院とも、又藤壺の赫く日の宮とも申す也。さて宇治の十帖の事は。我光かくれしのち匂兵部宮の御事、薰大將の事。作り添へたるをよそへて申すべき人々は。まづ桐壺の秋を思ひのはじめにて、名をのみ殘す箒木の心も知らで旅寢せし、こゝは涙の方違へ、思ひ懲りても扨あらで、猶人がらぞなつかしき、形見の袖を又ぬらす、夕顔の末葉の露と聞きしより、人の命は老いたるも、若紫も賴まれず、心をさなきはごくみも見る甲斐ありしさまなれや、靑海波の舞人の立居にかけて忘れぬは、紅葉の賀の御あそび、心にかゝる藤壺の、あたりゆかしき花の宴、賀茂のみあれの葵草、車をかざる爭ひも、後の夢とやなりぬらん、彼の野の宮の旅衣、一枝折りし榊葉の名を

普賢菩薩の乘物―象をいふ、末摘花の鼻の長きに譬ふ

衣うへに著て普賢菩薩の乘物と書き留められし筆の跡、身に知られつゝ耻しければ、この日比の愛念の絆をも引切り、嫉妬の思ひをひるがへし、過ぎにし方のはづかしさ、我と心に懺悔して、後悔の淚せきあへずと、袖をしぼりて申しければ、大將の給ひけるは、やさしく思召しとられけるものかな、そもく御身を今尋ね申す人もなし、何しに是まで來り給ふぞや。いまだ知り給ひ候はずや、只今不審をなす扇の繪は、いつぞや雪のあしたの御歸りに、松の雪を拂はせて、

ふりにける頭の雪を見る人も劣らずぬらすあさの袖かな

と詠み給ひし時、わらはも諸共に簾の邊までさそはれ出でたりし所を、書きたる繪にて候へば、此物語をたよりにして現れ出でて、日比のうらめしさを申すなり、是までなれや、いとま申して歸るなり、只今の物語さいしやう懺悔してなき跡をもとぶらひてたび給へとてなりと、淚を流し申しければ、鏡にうつりし影もなく、風月は又もとの心になりて、夢のさめたる如くなり。

さる程に人々奇特の思ひをなして、源氏御影はいまだ鏡にあり、花鳥も幽靈の去る風情もなかりければ、葉室の中納言進み出でて申されけるは、あり難き御緣かな、この扇の

葵の巻に失せ給ひ、世の歎き騒げどもわれはそれ程思はず、花散里と聞えしは、麗景殿の妹、いと數ならでましませば、いとをしと思へども、よかれとまでは思はず、明石の上は中宮のかくめでたきにつけても、あなづりにくゝ成り行けば、聞き見るたびにすさまじや、六條の御息所は物の怪に現れて、よろづの人の仇となる、心の深さも恐しや、何と思ふと此人を憎までいかゞあるべき、女三の宮、父御門殊にかなしくし給ひて、彼の憂き人にゆづりしに、衛門督の思ふことけぶりくらべに顯れて、御心にも入らざれば、人には言はず心にはをかしと聞きてさて過ぎぬ、御繼母の藤壺、朧月夜の御事を思へば、言ひちらさんも情なし、さすが人の御ためも痛はしければ、世がたりに人もこそ聞け、申すまじ、中にも物の憎かりしは夕顏の娘なりしを養君とかしづき、夕闇の比とかや、篝火すこしともさせて、引きさす琴を枕にて、御うたゝ寝のつきなさよ、空蟬の尼君數にもあらぬ人までもさるぞと聞けば、人知れず嫉妬の心炎となりて胸をやき、愛念のほむら身を焦す、又うち返し按ずるに、物の嫉きは誰ゆゑぞ、よし何事もうちすてて怨みは末も通らじや、せめて鏡の影にても戀しき人を見るやとて、鏡によりて影見れば、あたりも光る御影の匂ひみちたる御そばに、又其影を竝ぶれば、煤け赤める小袿にふるき皮

ものゑいむじ―物怨(モノエムジ)の訛、別本には「ねたみ心の」とあり。

御よせゑ―御餘情(オンヨセイ)か

院に候ひて數多の數には入り候ひしかども、名さへ賤しき蓬生のかれ〴〵なりし契の末、うらめしければ人知れず嫉き心のありしかども、只數ならぬ身に恥ぢて、知らず顏にてさて過ぎぬ、たとひ生を隔つとも愛念の絆切れざれば、猶憂き人につきそひて、あな離るまじの御身やとて、猶も御身に添ひ給へば、大將の給ひけるは、彼の伊勢の御息所をこそ物語の表にも、ものゑいむじおはせしうたてしき事にも申せしか、末摘花の御事は物嫉みし給ふとも、彼の物語にも見えぬものを、されば何事の御怨みにより、これまで來り給ふぞや、はや〳〵御歸り候へと仰せければ、物語にこそかゝれねども、今の世までも末摘花の名を得たるも、見そめ給ひし時の御よせゑに恥しくも、

　なつかしき色ともなしに何にこの末摘花を袖に觸れけん

と御よみ給ひし御歌ゆゑなり、見たりともなき姿とは、あら怨めしの言の葉や、いでいですきたる事なれども、物嫉みして狂はんとて、葵の上と聞えしは、攝政太政大臣の御娘、ときめき給ふ御事を淺ましとのみ見し程に、夕霧の君を生みおき、程なくかくれ給ひし嬉しさよ、紫の上と申せしは、ゆかりの草を尋ねつゝ、いとけなきより迎へとり、はごくみ給ひし事なれば、御志もたぐひなく時めき給ふ御事と羨しとのみ思ひしに、若

思ふ人には苦む──諺

香をかざり、高きも卑しきもおしなべて、主あるも主なきも隱れ顯れ、思ひし女の思ひや積りけん、思ふ人には苦むとて我身ながらもおろかなりと、迦陵頻伽の聲にて泣きくどき語りければ、皆面白くも不思議にも思ひ給ひけり。
さる程に妹の風月は氣色少しうつゝなき風情にて、あれ〳〵見給へ、鏡の影にわらはも現れ出で候ふぞ、恥しき末摘花の數ならで、思ひや色に出でにけんと、おし返し〳〵二三遍歌ひければ、扇にかける給の如くなる女口おほひして、源氏の御影に立ちより給ふと見えしかば、彼の女申しけるは、君はいづくへとておはするぞ、此世にてこそ疎まれまゐらせ候ふとも、冥途にては愛念の執心の鬼となりて、影の如くに離るまじきものをとて、猶も御影に立ちよりけり。さる程に花鳥は、源氏の御姿になりて物をいふ。風月は末摘花の幽靈になりて問答す。
そのとき源氏の大將の給ひけるは、そも〳〵いかなる人にてましますぞ、見たりともなき人の姿かな、面はゆければこそ口掩ひし給ふらん、これ程人の御覽ずるに見苦しき御ふるまひや、とく立ち去らせ給ふべしとの給ひければ、我をば誰と知らぬとや、知らずば御心知りの大輔の命婦に問ひ給へ。さては常陸の宮の御娘の。なか〳〵に。われ六條の

又の年―翌年

肘笠雨―俄雨

撫で物―身を撫でて穢を祓ふ人形

員の外―定員外

身に積みて、又の年の春播磨の明石に浦傳ひ、問はず語りの夢をさへ語り慰む人もなし、さるにても三年は須磨のうらさびしく、何と鹽屋の内も間近き荒垣の、竹の編戸のあけくれを憂きふし何と菅筵、習はぬ鄙のすまひして、人離れなる里なれば、都のたよりも絶えはてて、涙に曇る月の顔、ちひさき舟を眺めても、鹽燒く烟に身をいため、柴といふもの折り敷きて、思ひを須磨の山おろし、上野に通ふ鹿の音は、うしろの山に程近く、波こゝもとに降る雨は、潮の落つる聲なれや、旅衣うら悲しくも見渡せば、淡路島山ほのみえて、誰が住む里ぞ槇の戸の、塵まさりぬるすまひまで、思ひ殘さぬ事もなし、渚の苫屋に音するは友よびかはす浦千鳥、蜑の囀り水雞の聲、肘笠雨のしめ〴〵と、思ひをそへていつとなく、聞き馴るゝ高潮の、せめて思ひや慰むと、移し植ゑける若木の櫻、吹けども花は田舍にて、すむ我さへにいつしかと、山賤めきて鄙人の偲ぶ都のかたみには、巳の日の祓や撫で物の贈物にて笛の音も、引く玉琴もなつかしや、さる程に天下に奇特の告ありて、程なく都に召し返し、もとの位にあらたまり、員の外の大納言にあがり、打續き澪標の卷に内大臣、少女の卷に太政大臣、藤の裏葉に太上天皇、かくの如きの樂みを極めしに、紫の上の別れゆゑ、光をかへす稻妻の程なき夢の世の中に、色をたしなみ

しやうよう—未詳

涙をそへて云々—源氏桐壺「いとゞしく虫の音しげき淺茅生に露おきそふる雲の上人」

相人—人相見

召さば我身を光源氏の有樣に祈りなして、かの鏡の影に寫して人々に見せ申さんとて、雲隱れせしよはの月、光を又やあらはさんと、おし返し〳〵二三遍歌ひければ、まのあたりに鏡の影に扇にかける繪の如くなる上﨟の直衣、冠を著して見えける事ぞ不思議なる。人々稀代不思議の思ひをなして見る所に、花鳥、鏡にうつりける源氏に代りて申しけるは、桐壺の天皇第二の御子六條の院と申すは我事なり、たやすくも名のらじとは思へども雲がくれせしのちは、愛別離苦の罪に沈みて、いまだ浮ぶたよりなし、さればありし世の事共物語り申さん、懺悔の功徳によりて少しの罪を免れんがために、只今のしやうように鏡の影にあらはれたる、これ又他生の緣あるによて也、人々構へて跡とぶらひてたびたまへ、罪障懺悔申さん、われ三歲と申せし秋のころ、御母更衣におくれ奉り、涙をそへていとゞしく蟲の音しげき淺茅生の露けき中に生ひいでしを、御惠みいとも畏き勅により、源氏の姓を賜はりて、十二にて元服す、高麗國の相人光君と申す名をつけしより、光源氏といひし也、箒木の巻に中將、紅葉の賀の巻に正三位、葵の巻に大將、榊の巻に年二十二にて父の御門におくれ奉り、かの花の宴の春の夜にゆくへも知らで入る月の朧げならぬ契ゆゑ、二十五になりし時、津の國須磨の浦に移され、あまりに歎きを

人をもつて鏡―唐書「以人爲鑑、可明得失」
七德のほまれ―太宗が七德の舞を制せしことをいふ
すいとさん―未詳
しくん―止觀の誤なるべし
二け―二花(草木花、嚴身花)又は二假(無體情假、有體施設假)か
やうめい―永明、宋の人
しんきやう―神境か
せいをいたして―誠を致して又は精を出してか
○以下下卷
とせいすい―未詳
きみやう―歸命
ちせいふさう―治世無雙なるべし

鏡をかけて遂に障礙を從へ、唐の太宗は人をもつて鏡とせし故に、天下七德のほまれを謳ひき、阿房宮にたてし鏡すいとさんの深さを知れるなり、誰か鏡をしやうせざるべき、しくんに二け圓融のたとへあり、華嚴に十境一とうにあらはす、やうめい禪師は宗鏡錄をあつめてしんきやうを證し、心を明鏡の臺にたとへ、

　年をへて花の鏡となる水は散りかゝるをや曇るといふらん

不思議やな、彼の紫の上の須磨の別れを悲みて、鏡をみても慰みてましとよみ給ひし、いにしへの言の葉心にうかび出でて、あはれ光源氏の御事を御問ひ候ふ、御待ちあれ、猶々せいをいたして祈りあらはし申さんずるにて候ふなり。

それ明鏡に照らさずしてとせいすいに見るとは、濁れると清めるとによてなり。こゝにわれ〳〵きみやうの掌を合せて、恐惶とをのゝき、恐々と恐れ、稽首と敬ひ、再拜と伏し拜み申して、申さく、願はくは早く一面の鏡のかげに、只今尋ね給ふ亡靈の形をあらはし、たちどころに諸人の不審を明め給へ、しかれば則ち尋ぬる所の昔語は、これ辱くも神武皇帝の御末ちせいふさうの賢君の御名はわざと申すまじ、彼の物語にもいづれの御時にかありけんと作り給ひし事なれば、左右なくいかでかあらはさん、猶も不審に思

したふり—舌を振ひ恐るゝなり
きやうし—敬し
此御まへ—別本此下に「にて」の二字あり
ぎやうりき—行力
ほんしゆ—本主

人なほも隱して業平とも給はねば、いや〳〵さのみな御隱し候ひそ、巫の骨折にはやはや明かさせ給へ、まさしく御心のうちに御尋ね候ふ人は、業平の事にて候へばこそ、かやうに申し候へ、人たがへにて候ふまじ、さ候へばこそ御卜の面、梓の前にもあらはれ出で給ひて候ふらめと申しければ、人々これを聞き給ひて、目と目を合せてしたふりをしてぞゐたりける。

さて源氏の繪といひし人進みいでて申されけるは、御卜の合ひ合はぬ事は扨おきぬ、言語道斷きゝごとにてこそ候へ、それがし又尋ね申したき事候ふ、これ構へて〳〵ねんごろに占ひ候へ、人たがへ無くいかやうなる人の來り給ふらん、よく〳〵不審をはれ候ふやうに聽聞申し候はんとの給へば、誠に御大事を御問ひ候はゞ、我鏡をきやうしあがめ奉りて持ちて候ふ、此御まへ生靈、死靈、人間、畜類、佛神三寶、何事にても候へ、現れずといふことなし、御尋ね候ふ人を只今此鏡のうへに祈りうつして、奇特を見せ申すべきにて候ふ、多年ぎやうりきを入れ奉る神鏡の御前にて、鏡の奇特を申さんずるにて候ふ、そもそも鏡は日域朝廷のほんしゆ天照おほん神を内侍所に移し給ふよりこのかた、神鏡の威光ほがらかにして、濁世の闇を照らし給ふものをや、遠く上古を案ずるに、黃帝は軒に神

ひろし―別本に「ひろよし」とあり

きつねはめなで―「夜もあけばきつにはめなんくだかけのまだきに鳴きてせなをやりつる」

筑前の國云々―誤謬あるべし、別本には「筑前の守中原のちかむねが娘」とあり

きうさい―舊妻

時始めて逢ひ奉る、かへるあしたのおもほえず、

君や來し我や行きけんおもほえず夢かうつゝか寢てかさめてか

とありければ返事に

かきくらす心の闇にまどひにき夢かうつゝか世人さだめよ

と仰せられしもかたじけなや。さて飾り粽の女と聞えしは誰やらん。それこそ兒行平の御娘、さだかずの親王の御母にてまします。さてへんの御息所と聞えしは。ひろしの御娘、仁明天皇の御息所。なま心ある女と聞えしは、誰人の事やらん。それこそ其比天下にならびなき色好みの出羽の郡司小野の良眞が娘小野の小町が事にて候ふ。きつねはめなでとわびし女は。みちのくの坂の上のつらおが娘。又染河の女と聞えしは誰ぞ。筑前の國あきかもとしなかはらのちかむねが娘。九十九髪の女はいかに。治部の少輔藤原の定夏がきうさいなり。さて振分髪の女はいかに。在原のむねやすが母しげが事なり。よしや草葉といひし女は。きよこが事なり。世人は誰ぞ。それこそ伊勢が事にて候へ。この外數々多けれど事しげければ申すまじ、およそこの人々の御事は詮議まち〳〵にして、家の口傳一つならず、いづれの家の歌をか用ひ給ふべきと、ねんごろに問答しければ、人

かんれいをう―未詳

鬼一口に―原本「に」の字なし別本によりて補ふ

武藏野云々―「武藏野は今日はな燒きそ若草の妻もこもれり我もこもれり」

隅田川云々―「名にしおはゞいざこと問はん都鳥我思ふ人はありやなしやと」

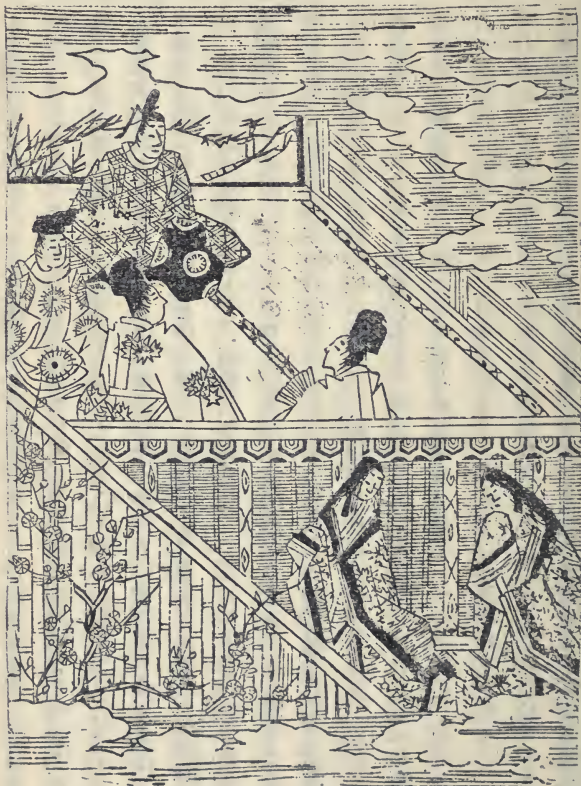
らは梓にかけて答へ申さん、風月とひてになりて問ひ給へとて、梓の檀弓打鳴らし、一首の歌にかくばかり、

思ふこと言はでたゞにや止みなましわれに等しき人しなければ

そも／＼我はこれかんれいをうのまめ男の名を得て、一生涯の間に契を結びし人の數三千三百三十三人なり。その時風月、わらは尋ねてになりて人々に聞かせまゐらせん、さても五條の后太政大臣冬嗣公の御娘、仁明天皇の后、御年三十八、業平二十二にて始めて逢ひ奉る、さて染殿の后は誰人ぞ。太政大臣良房の御娘、文德天皇の后、水尾の御門の御母是なり。さて二條の后と申して、あづまの奥まで盜みとり、殊に御身を苦め給ひしは、いかなる人の御事ぞ。あらなつかしの人の名や、嬉しくも尋ね給ふものかな、それこそ中納言長良の御息女、淸和天皇の后、御年十五、業平三十二にて后立よりは遙かにさきより忍び／＼に近づき奉り、或時は鬼一口おそろしき目を見、又或時は武藏野はけふはな燒きそと、ものゝふを怨み、隅田川にては都鳥にことを問ひ、宇津の山にては人に言傳をし、そこばくの思ひをつくし申せし人の御事なり。さて伊勢齋宮の御事は。あな事もかたじけなや、文德天皇第五の御息女にて渡らせ給ひしを、長寬十年業平狩の使の

さる名譽の御事―然るべき有名なる人
うけ給ひ候ふ―別本「うけたまはり候ふ」とあるよろし
これまで申して―これまで御出を請ひ申しての意

さる程に人々仰せありけるは、さる名譽の御事とうけ給ひ候ふ間、尋ね申したき事候うて、これまで申して候ふなりとの給ひけり。名譽までは候はねども、召しによりて參りて候ふ、若上﨟の嬲り草になりまゐらせんずるにて候ふ、何事にても候へと申しければ、さて業平の方の人々申されけるは、所詮只今心のうちに尋ね申し候ふ人は、此世にある人か無き人か、その名をば何と申し候ふ、また男か女房か、くはしく占ひ給へとありければ、姉の花鳥は承り候ふとて、短冊一つ取出し、つく〴〵とまほりて申すやう、あら面白の御卜や、名はいにしへのならの葉の木末の露のたまさかに、跡とふ人もなきものを、何しに尋ね給ふぞや、われはこれ天長二年三月二十一日に誕生して、淳和、仁明、文德、淸和、陽成、五代の朝に仕へ奉り、元慶四年五月二十八日に年五十六にて空しくなりし者のあとなりと、御卜の面にみえて候ふ、これは疑ひもなきいにしへの業平の御事を御尋ね候ふ御心あてにて候ひけるやと申しけり。

人々是を聞き給ひて、あと目を見合せて、あまりに不思議にて、いや〳〵これは御空事にて候ふ、何しに今業平の御事をば尋ね申すべき、よく〳〵占ひ給へとの給へば、花鳥此由打聞きて、いや〳〵千度占ひ候ふとも、ちがひ候ふまじ、猶も不審に思召さば、わ

さすの巫―安倍泰親のト占、掌を指すが如きより此名あり

けんてう―嚴重

後の御くわい―別本に「後日の御くわい」とあり、「くわい」は會なり

名にし負ふ風月―云々―別本「名にし負ふ風月げにもと思はるゝばかりなり」とあるよろし

妹をば風月と申し候ふが、空飛ぶ鳥をも祈りおとして、「過去未來の事をも明かなる鏡の如く、何事も曇なく申せば、さすの巫とも申すべき程の物の上手にて候ふ、とりわき人を梓にかけて口よする事、神變不思議けんてうの巫にて候ふ、此程このあたりに候ふよし申し候ふ、是を召寄せてまづ此相論のやうをば、つや〳〵申し候はで占せ候て、口よせさせて不審をはれ候はゞやと申しければ、山科の少將申されけるは、是は近比一興あるべきにて候ふ、源氏、業平相論の勝負をつけて、後の御くわいになさるべし、さらば源氏、業平おしわかつて、源氏と仰せらるゝ方は、業平の事を今のやうに御尋ね候へと申されけり。さる程に花鳥風月兄弟の者まゐりたり。姉は柳裏の櫻衣の匂ひことなるに、紅の袴きて、丹花の脣あざやかに、青黛のまゆずみほの〴〵と、色音も深き初春の初音のけふのたまさかに、開きそめたる花よりも猶めづらかなり。妹の風月は紅葉重ねの二つ衣に紅の袴きて、白雪の膚すきとほり、玉の髮ざしゆりかけて、蘭麝の匂ひかうばしく、嵯峨野の原の女郎花、露おもげなる風情にて、ゆるぎ出でたる有樣は、名にし負ふ風月もけふと思ふばかりなり。人々是を見給ひて、あな不思議や、あづまの奥の片田舎にもかゝる女房ありけるよと、今更目を驚かすばかりなり。

花鳥風月

はぎはらの院の御時、都西山葉室の中納言の御所にて、雲の上人、生上達部あまた集りて、梅は散り櫻はおそき折節に、雨さへいたく降りつゞき、春の日くらしがたき徒然のあまりに、扇合をし給ふ。漢家本朝の物語、古今萬葉の歌の心、さま〴〵筆をつくしたる色々の扇どもの中に、山科の少將の出されたる扇の繪に、稀代不思議の繪をぞ書きたりける。容顏媚をつくし、其形いふばかりなくいつくしき公家上﨟一人、又傍に女の口掩ひしたる所を、筆をつくして書きたりける。人々是を見給ひて各不審をなし給ふ。あるひはこれはいかさま業平にてこそあれといふ人もあり、あるひはいや〳〵是は光源氏にてこそあれと、座敷二つにおしわかつて相論し給ふ中にも、葉室中納言仰せには、所詮この繪の不審をはれ候はんずるやうの候ふ、それをいかにと申すに、こゝに稀代の物の上手の巫候ふ、もとは出羽の羽黑の者にて候ふなり、女巫兄弟候ふなるが、姉は花鳥、

相論―爭論に同じ

花鳥風月

れば、野もせ姫より繼母御前へ扶持し、邊近き處に置かせ給ふぞ難有き。偖少將殿は御悅びの爲に、姫君を相具し、住吉へ參り給ひて、百日御籠りあり、御寶殿作り參らせて、御下向ありけり。それより悅びかさなり、若君を二人、姫君一人出で來させ給ひ、行末繁昌し給ひけり。彼の繼母御前は、年一年もましまさず、自害して失せ給ふ。是は情なく當り給ふによつて、その天罰逃れずして、我と空しくなり給ひ、名を聞くだにも悲しさよと、人に疎まれ、亡き後まで惡しき名を殘し給ふ。又彼の尼君の事帝聞召されて、則ち本國信濃の内、所領を賜はりけり。是を見、彼を聞く時は、只人には情あれ。此物語を見ん人は、能く〳〵心得分け、只慈悲情を掛け給ふべきなり〳〵。

石津八良右衛門　開板

萬治貳年九月吉日

あはざらん―原本「あはざらぬ」とあり

て、少將殿かくなん、

あはざらん時こそあらめ逢ひ見ては何の思ひに袖ぬらすらん

と有りければ、姫君、

ことわりやいかでか袖のぬれざらん逢はぬひごろを思ひつゞけて

さて伏屋に四五日おはしければ、信濃の國の主は是を聞き、少將殿へ參り、齎き傅き奉り、程なく上洛ましませば、三千人を召連れ、少將殿の御供申されけり。又姫君の御供の女房達、下婢に至るまで、御輿三十挺舁き續けて夥しくおはします。少將殿宣ふ樣は、尼君、かゝる田舍におはして何かせさせ給はん、都へ御供申さんとて、姫君の御輿等しく用意し、尼君を乘せまゐらせて、都へ連れ上り給ふ。少將殿斯樣の次第を奏聞申されければ、哀れなる事かな、さほど心深く信濃の伏屋まで尋ね行きける不便さよ、此程の思ひを慰め給へとて、丹波の國にて三郡、元の本領に添へて、下し給ひぬ。少將殿御悅びは限なし。又姫君の父宰相殿の御悅び言ふもおろかなり。かの不得心なる繼母御前を、失はれんと有りしかば、野もせ姫宣ふは、仇をば恩にて報ずる習ひありとて、さまぐ\帝王へも、父宰相殿へも、御詫言あり。此上は姫次第なりとて、御宥ありけ

都にてこちくと見えし笛のねを泣く〳〵吹きて尋ねきにけり

と宣へば、姫君扨は誠の夫にてましますぞや、難有き事かなと思ひ、尼君に此由申させ給へば、やがて尼君忌垣の隙より見給へば、御年二十餘なる山伏、誠に氣高く優しげに見え給ひて、いかなる公卿殿上人にて渡らせ給ふぞ、只今の笛の音怪しく思ひ奉る、もし姫君の馴染み給ふ人にて候ふやと見參らせ候ふなりと宣へば、姫君誠に恥しげにて、哀れに立たせ給ふ。客僧此方へ入らせ給へと宣へば、恥しくは候へども、君を戀ひ是まで尋ね參りたり。稓あるべきに有らざれば、御内へ入らせ給ひぬ。さて洗足參らせ、やがて烏帽子、直垂取出し、御裝束參らせ、御休み給ひける。姫君物越に、

都をばいつから衣たちそめて冬にかゝりてきたるなりけり

と有りければ、少將殿旅の草臥ならせ給ひて、

都をばもみぢの錦きてしかど日かずつもりて冬ごろもきん

と有りければ又姫君

山伏のころもを見るにいかなれば泣きて來れば袖はぬれけり

さて尼悅び給ふこと限なし。二人の人々も夢の心地にて、互に物も宣はず、涙に咽び給ひ

たちそめて―立ち、裁ち
きたる―來る、著たる

日本の弓矢の守護神、住吉の明神なり、我昔凡夫なりし時、戀をして身を焦したる故に、神と現れ、津の國難波の浦に跡を垂れ、戀する人をば斯く憐みを運ぶ故に、是まで具して來りたり、汝獨りに限るべからず、汝が尋ぬる人は、あの棟角高き内にましますぞと宣へば、其方見遣る間に、搔消す樣に失せ給ふ。其時不思議さよ難有き事かなとて、

　住吉の神ともさらに知らずして目なれけることそはかなかりけれ

偖大明神の敎のまゝに、棟角高き内へ入りて御覽じければ、姫君は夢にもしめらで、都の事を思召して、

　夏びきの絲ほどだにもとふ人のなきかなしみをいかゞ忘れん

と打吟み給へば、少將殿は姫君の御聲と聞き給ひて、胸打騷ぎ、嬉しき事限なし。少し立寄り笛を取出し、吹き鳴らしてかくなん、

　なつびきのいとあはれなる戀をしてわれこそ來ては訪はんとはする

と詠じ給へば、姫君是はそも夢現とも覺えぬものかなと、胸打騷ぎかくなん、

　あやしさよわが聞きなしか都にてこちくと見えし笛のねかとよ

と詠じ給へば少將殿、

じめらで―しらでの誤か又はしろしめさでの誤なるべし

こちく―此方來と胡竹とにかく

すてしこ―なでしこの誤なるべし

いさゝめ―此語の本義はかりそめといふ意なり、こゝには諫めての意に誤用せり

なき人の姿を―「を」は「の」とあるべき所なり

風吹く方の垣となり、暗き道には燈火となり、影身に添ひて悲むなり、餘り汝が事を深く悲み候へば、執心の罪深かるべし、後世をば弔ひ候へとて、潸然と泣き給ひて、かくなん、

すてしこの花をば常に來てぞ見るあさぢが原の草のかげより

偖姫君夢のうちに、

なでしこの花をば常にいさゝめてなどはゝさきに散りてゆくらん

偖夢醒めて打驚き、涙を流し悲み給ひて、

なき人の姿をゆめに見えつればさむるうつゝのうらめしきかな

諸少將殿、鹽屋なる海小舟に召され、照澤の方を御覽じて、

こひのみち暗きをなげく我なれやてるさは水に心すまさん

と言へば、翁も、

戀の路いかゞはさのみ暮らすらんあひ見てのちはいとゞてるさは

斯樣に打詠じ急がせ給ふに、信濃の伏屋に著き給ひて、翁宣ふやう、此程君が戀ひ悲み、遙々尋ね給ふ人は、此伏屋にましまし候ふぞ、此翁をば如何なる者と思ふぞ、我はこれ

都にてこひしき春はきたれどもわれに見馴れし花人ぞなき

斯様に宣ふと思しくて、少將殿の返しに、

戀しさに逢ふうれしさもえぞ知らぬおつる涙にこゝろのむせびて

また姫君、

あし引の山がくれして訪ふ人もなきぞ悲しきひとりふせやに

斯様に宣ふと思しくて、おどろき給ひて少將殿、

あふと見る夢うれしくてさめぬれば逢はぬうつゝのうらめしきかな

と有りければ、姫君の御夢にもこの如く見え給へり。又少將殿富士の高嶺を見給ひて、

年をへん逢ひみぬ戀をするがなる富士のたかねをなきとほるかな

偖斯様に尋ね來り給ふとは、姫君知らせ給はず、都の事を思ひて、花の一本、鳥の音までも、都に變らざりければ、かくなん、

鳥のねも花も霞もかはらねば春ぞみやこのかたちなりける

去程に姫君微睡み給ふ夜の夢に、母御前此世の姿にて、さのみな焦れ給ひそよ、今三日が内に悅び給ふ事あり、自ら九夏三伏の夏の夜は、涼しき風となり、立冬素雪の夕には、

年をへん—年をへての誤なるべし

遠江―原本「ととをみち」とあり、今改む

のみ、波の晝夜汀にて、都の方を遙々と、思ひ遣るより遠江、濱名の浦に引く網の、迷はざりせば斯くばかり、憂き言の葉も露の身も、何にかゝりて君がつる、思ひ鳴尾の今は只、甲斐も波間の事なれや、こゝに忘れて信濃なる、只更科と思へども、逢はねば鹿の音をぞ鳴くと、斯樣に吟み給へば、翁もかくなん、

戀路にはいかでか袖のぬれざらんかばかり物は思はざらまし
見そめても通ひそめずばかくばかり歎かじものをさよの中山

駿河の國宇津の山にて、少將殿かくなん、

あをやぎの絲うちとけて寢られねば思ひ亂れてねをのみぞなく

とありければ、翁もかくなん、

みわたせばよもの梢もみどりにてあはれぞまさる宇津の山みち

淸見が關にて少將殿、

空晴れてさやけき月をながむれば心の關もはれてこそゆけ

偖其夜の夢に、姫君紫裏の白き單衣に、紅の袴ふみしだき、花園に立出で給ひて、心凄げにて、

君もや來るを白絲の―「を」は「と」の衍なるべし

そらの尾張―みの尾張の誤か

夏こそはあつたともいへ冬くれば水も凍りてさむくなりけり

偖それより遠江の國橋本に著き給ひ、宿の體を御覽ずれば、東に入江の魚の寄るを待ち、南は南海遙かにて、海人の小舟竝べり、西は遙かの東へ通ふ人あり、北は琴彈き鳴らす松立てる中には、宿々の遊君のあれば、軒を竝べて面白や。「前の入江には、反橋を架けしに、少將殿、

おきの波つゞみ打ちよるはしもとに琴ひきそふる峯のまつかぜ

波のおと峯の松風身にしみて心のとまるはしもとのやど

去程に習はぬ旅にあくがれて、思ひ續けさせ給ふ。住吉の夢を賴みて尋ぬれど、逢坂山に逢ひ見ねば、いとゞ心の炭竈の、焦るゝ夜半の淋しきに、君もや來るを白絲の、夜も打解け給はねば、亂れくる夜の近江なる、伊香の海のいかなれば、罪のむくいに我ばかり、みるめもなくて何時となく、戀をのみして鹽竈の、澄までも底に見えずして、かゝる思ひを駿河なる、淺ましかりし宿りして、心は空にあくがれて、袖は涙に濡れながら、胸は燃えつゝ焦るれば、何時とも知らぬ戀をして、過ぐる我身もそらの尾張、何と鳴海の浦々を、尋ね行けども甲斐ぞなき。戀と見る目のかたければ、慰む事も渚なる、岸の岩根をなきて

震旦―傍訓原本のまゝ
けいたん―契丹
柏原―近江にあり
せきと―關址（せきあと）か

申すやう、御身は正しく戀路に迷ひ給ふと覺えたり。尉も若く候ひし時、戀をして、十年の間身を徒らになして候ひし程に、戀せんずる人をば、如何なる天竺震旦までも、行きて訪はばやと思ふなり。是より東は津輕の涯、蝦夷が島、南は南海、補陀落山、西は鬼界高麗、けいたん國までも、北は越路、外の濱まで、此國々を御尋ね候ふとも、御供申さんと申せば、少將殿翁を禮し、嬉しさ限なし。或松原を御覽じて、

　わが思ふ人やきたりしこの程にせんの松原さきに尋ねて

とありければ、翁もかくなん、

　年をへて路のほとりのおいたれば人もこずゑのたれを松原

偖其後柏原にとまり給ひ、明くればせきとにて少將殿、

　たづねゆく人には逢はでこのほどに心とゞめよ美濃のせきもり

又翁もかくなん、

　戀路にはとゞむる人もなきものを逢はんと思ふ心のみして

偖尾張の國に著き給へば、雪降りて冷かりしに、少將殿かくなん、

　をはりなる熱田の宮も雪ふれば水もこほりてつめたかりける

くる―來ると繰るとにかく

くる人更に渚なる　　水の中なる濁りあひ

澄むことなき身の物憂さよ

と打咏め明暮過ぎ給ふ。此世にまだあるを知らせ給はず、父宰相殿、姫君の御孝養をなされ、百日に當る時、六萬本の卒堵婆を立て、五部の大乘經を供養し、樣々の御弔ひ有りしなり。偖少將殿は大津の濱にて、舟の便を尋ね給ふ處に、翁の舟さして來りたるに、召されてかくなん、

乘りて行く舟とおもひのあはれこそ水の上にはこがれ行くらん

翁、今の御詠歌面白く覺え候ふとて、感じけり。偖日暮れぬれば、舟より上り給ふ時、翁申すやう、今夜は尉が家に御とまりへ候と申しければ、少將殿嬉しく思召して、御とまりあり。七間造りの家に請じ金の盃、銀の銚子取出し、酌取には十七八ばかりの女房、飽くまで氣高く出立ちて少將殿に酒すゝめけり。夜も明けければ翁申すやう、御尋ねの御方は東にとこそ承りて候へ、何處を指しておはしますぞと申す。何處を指すとも無けれども、只出家の習ひにて候へば、諸國を志し候ふと言へば、又翁、如何樣只ならぬ御心にて、遠き旅人と見えさせ給ふと申せば、少將殿いと恥しく思召し給ふ。翁重ねて

たらちを—父の意に用ふ

來りし人—來し人の行なるべし

うきね—憂き音と浮寐とにかく

思ひ續けて淸水の　流れて澄まぬ物ゆゑに
逢坂越えて近江なる　海の底にも捨てられて
憂目(うきめ)を獨り見るぞ憂き　大津の浦の怨みねに
甲斐もなくして東路(あづまぢ)の　不破の關にも留らで
落つる涙と諸共に　流れ來りて信濃なる
獨り伏屋に旅寐して　都の方を遙々と
思ひやるこそ悲しけれ　なみに夜晝(よるひる)身に添ひて
哀と言ひしたらちをの　果無(はかな)く我を失ひて
如何に心をつくし船　漕がれ行くらん笹蟹の
糸縒り難き事故に　今宵の契深くこそ
常に契りて來りし人の　無き面影も忘られず
心ひとつに焦れ居て　遣方(やるかた)も無き池水に
汀に遊ぶ鴛鴦(をしどり)の　うきねに鳴きていたづらに
杉の板間の明け來れば　思ひ亂れて白糸の

いく國々―幾多の國

なき言葉―ながき言葉の誤なるべし

の頭地に投げて祈り給へば、七日に滿ずる曉方の御夢想に、神勅有りけるやう、

君がこふ人はこれより國遠くあづまの方をたづねても見よ

と御夢想ありければ、少將殿夢打ち醒めて、

あづまにはいく國々のあるものを戀をするがかいかにしなのか

斯樣に御返しをしつると思召しつるうちに、御夢醒めて、扨は此姫未だ世にあるやと嬉しく思召して、愈祈誓し給ひて、都へ歸り、御所を密に只一人忍び出で、清水の邊にて、山伏に出立たせ給ひ、摺の直垂を召し、御髮を亂し、兜巾被き給ひ、坂東方へ赴き給ふ。先づ近江に著き給ひて、

逢坂の關にも心とめられずあはれ戀路のいそがしの身や

斯樣に打詠じ急がせ給ふ。去程に姫君は、信濃の伏屋にて月日を送り、都の御事戀しさ限なく、父宰相殿、夫の少將殿の事のみ、思ひ出だして、なき言葉に打怨みさせ給ふ。

空搔曇り時雨して　峯の木枯しげしくて
梢淋しくなりはてて　錦と見えし紅葉ばも
思ひの中に散り失せて　訪ふ人も無き悲しさに

夫妻ー妻といふ意に用ふ

美人くらべ　下

去程に丹後の少將殿は、野もせ姫の事を聞召して、憧れ悲み給ふ事限なし。せめての事に姫君の常におはせし所に入らせ給ひて、琴彈き鳴らしかくなん、

ひきならす琴の音きけばもろともにたもとの露をはらひこそせね

又鏡のあるを御覽じて、

ますかゞみ曇りはてなばいかにして迷ふ心のやみを晴らさん

斯樣に口吟み給ひて、誠に心凄げにおはしければ、繼母思召す樣は、男女の契、何れ劣るべきならねば、自らが姫を參らせばやと思ひ、人して申されけるは、野もせ姫に離れ給ひて、さこそ思召し候はん、また紫蘭の姫を召し置かれ候へと申されければ、中々聞きも敢へず、恐しの女やとて、御返事もなし。少將殿思召すは、妻の野もせ姫、まだ浮世にあるやらん、又露とも消えて亡せ給ふらん、祈誓をせばやと思召し、住吉に參り七日籠り給ひ、南無住吉大明神、願はくば夫妻の野もせ姫の行方知らせて給べと、五度

に仰ぎ地に伏し祈誓し給へば、繼母御前は侘びたる氣色にて、蓼を擂り目に塗り、俯伏に伏して、目顔腫らしてぞ偽り給ひける。帝王も哀れと思召し、御幸ありては弔ひあり、誠に歎くは理なりとて、

おとにきく言の葉だにもあはれなりまして身のうへさこそあるらめ

と遊ばし、是迄の御幸も姫ゆゑぞかしとて、

をしきぞよきのふけふまで撫子の花は夜風にちらしこそすれ

帝王仰せけるやうは、斯程までさこそ思ふらん、唯後世をよく〳〵弔へとて、還御なり給ふ。宰相殿は宣旨忝しとて、御弔ひの儀式にて、尊き僧を供養し、樣々の御弔ひ目を驚かすばかりなり。野もせ姫の祖父御三條殿を初めとして、一門の公卿達、御弔ひの座に連り給ひ、惆悵としたる御有樣にて、悼みの歌など遊ばし給へる中に、彼の繼母御前の目に、蓼を擂りて塗り腫らし給へる目元は、何とやらん變りたれば、人々皆顔を不審さよと言はぬばかりに見ぬ人は無かりけり。御弔ひも過ぎぬれば、父御は所詮自害をやせん、又發心をやせんと、思召すこそ哀なりける次第なれ。

さへづればー「ば」は「ど」の誤なるべし
しゆてんー主殿か
七間そへとのにー誤字あるべし
きわうなる人ー器量なる人の誤か
思ひ子ー愛子
このみー木實と此身とにかく

又不破の關に著き給ひて、

秋の野に蟲のこゑ〴〵さへづれば心とまらぬ不破の關かな

斯樣に打眺め給ふ程に、信濃の伏屋に著き給ひて御覽ずれば、五間三間のしゆてんあり、七間そへとのに中門を造り添へ、總じて家の數は七軒造り竝べたり。誠にきわうなる人百人ばかり出入しけり。南面には池を掘り、鴛鴦、鷗浮うだり。池の汀には、柳、梅櫻、行末久しき姫小松、草花は、牡丹、芍藥、葵、撫子、桔梗、刈萱、女郎花、其外花の數を調へ、四季の色を揃へたり。裏に入りて見給へば、銀の金物したる脇息に、金の銚子、提子を竝べたり。側には古今、萬葉集、千載、源氏、伊勢物語、萬の草紙を取り竝べ、又碁、雙六の盤に至るまで、見事は飽くまで多けれど、御心にも染まず、只都の事のみ思召すなり。偖都には父宰相殿日數經るにつけて、愈姫君の事歎き堪へかね給ひて、花園に立出でおはしまし、色々の花は見つらん、語れかし、わが思ひ子の行方聞かまほしさとて、かくなん、

あだなりと思ひし花の咲きたちていかにこのみのなりてゆくらん

斯樣に詠じ給ひて、南無十方三世の諸佛、願はくば野もせ姫が壽命安穩に守り給へと、天

うづみし―うつさじの衍なるべし

尼君近く立寄りて見給へば、御年十五六ばかりにて、誠にいつくしき御顏容、色雪の肌、翡翠の髮ざしまで、三十二相の御容貌、類少き姫にてぞ候ひける。尼君思ふやう、いかさま只人にてはよもあらじと、愛しさ限なし。偖も如何なる人ぞ、試みばやと思ひて、

あはれなる言の葉みればもろともにたもとの露を拂ひこそせね

と有りければ、姫君もかくなん、

露の身のきえても失せでかゝる世にうき言の葉をきくにつけても

斯樣に口吟み給へば、尼君申しけるは、偖何方へ心ざして行かせ給ふぞと問へば、姫君、何處へなりとも具しておはしませと宣へば、是こそ熊野の御利生なれとて、長持より綾の袴を取出して著せ參らせ、わが身は馬に乘り、我乘りたる輿に乘せ參らせて下りけり。偖姫君は、鏡の山を通り給ふ時かくなん、

近江なるかゞみの山はくもらねど戀しき人のかげはうづみし

近くなるうみとほければ都なる人の姿はいかでうつらむ

とうちすさみて、美濃の國府に宿り給へり。風身に染み給ひければかくなん、

旅の空ふく浦風の身にしみていとゞ都の人ぞこひしき

夜もほの〴〵と明けぬれば、とある家に立寄り、亭主を頼み、上に召したる小袖を脱ぎ給ひ、麻の狭衣上に召し更へ、綾菅笠にて顔隠し、召しも習はぬ草鞋はき、杖つき給ひ、行方何處ともわかずして、よろ〳〵と歩み給ふは、目も當てられぬ有様なり。斯くて都には、野もせ姫の見えさせ給はぬ事は、天魔の業かとて、父宰相殿の御歎きは言ふも愚なりけり。繼母も虚泣して歎き顔そし給ひける。痛はしや野もせ姫は、勢多より東を指して下り給ひしが、習はせ給はぬ事なれば、歩みかね給ひ、十町ばかり行きて、とある所に暫く休らひ給ひけり。頃は葉月十日の事なれば、初雁の鳴きて行きけるを御覽じて、斯くなん、

かりがねはしばしとまりて旅の空こしぢのかたを物がたりせよ

わが住みし都へゆかばかりがねよこのありさまを物がたりせよ

斯様に打詠めておはしける處に、信濃の國より、熊野へ參りて下向申す尼君、三十人ばかり連れて通りけるが、此野もせ姫を見參らせ、如何なる人にてましませば、只一人かゝる路中におはしますやらんと申せば、姫君泣く〳〵宣ふやう、我は都の者にて候ふが、主の勘當を蒙りて候ふ、何處とも知らず迷ひ出で露の命と消えん程を待ち候ふと宣へば、

花園庭―花園の庭の誤脱なるべし

しやうあらば―情あらばか

邪なるにいはされて―邪なる人に言ひ伏せられて

月を眺めよと申すべし、其時荒けなき樣にて、しどろに走り出で、中有に取つて行けとぞ仰せける。月もはや羊の歩みに暮れゆく、有明も東の山の端に出で殊更さやけし。紫竹の局は野もせ姫を勸め申し、いざや月を眺めんとて、花園庭に出でければ、約束の如く件の武夫走り出で、丈なる御髪を粗悍なる手にて掴み、中有に取つてぞ失せにける。乳母の靱負の局是は〳〵と言へども、はや行方知らず成りにけり。偖武夫は姫君を具して、近江の國勢多へ參り、既に橋の上より落し奉らんとせし時、野もせ姫仰せられけるは、如何に武夫共、しやうあらば物を聞け、繼母御に頼まれ、今自らを失はん事、當座の依怙なり、邪なるにいはされて、咎なき自らが命を取らば、などか天罰逃るべき、又助くること汝等が爲に自らは主なれば、義を重んずるに似たるべし、然らば天道の冥利に叶ふべきぞ、自ら命惜しくて斯く言ふには有らず、汝等が餘り不得心なる者共なれば、人間の五常を言ひ聞かするなり、此上は汝等が心にまかせよとて、袂を顔に押し當て、潸然とぞ泣き給ふ。猛き武夫も此道理を承り、涙を流して申すやう、實に〳〵誤り申したり、此上は御命助け參らせん、何方へも見えぬ國へ忍び候へ、都へ歸り繼母御へは、勢多の橋へ沈め申したる由を申すべしとぞ言ひける。姫君は夢の醒めたる心地して、

いまめかしき事
一事新しく改まりたる事

召し、折々忍びくに通ひ給ひて、少將殿よき折からに母上に申し候ひて、内へ入れ奉るべきとの誓ひを立てさせ給ひ、深く契をこめ給ふ。かゝりし處に繼母御前此事聞き給ひ、紫蘭の姫を差置き、野もせ姫に契をこめ給ふ事の腹立ちさよと、胸を焦し給ひ、乳母の紫竹の局を召して宣ふは、今夜野もせ姫を失はんと思ふなり、武夫を召せとぞ仰せける。承り候ふとて、武夫二人具して參りければ、御臺宣ふ樣、如何に武夫ども、言ふべき子細有り、叶へて得さすべきかと仰せければ、武夫承り、是はいまめかしき事を仰せ候ふものかな、假令火の中水の底までも、御諚をいかで背き申すべきと申し上げければ、御臺斜に思召し、別の事にてはなし、野もせ姫を、深く人知れず失ひてくれよと仰せければ、武夫申すやう、餘所の御方にても候はゞこそ、三代相傳の君を失ひ奉るべきやと申しければ、繼母御前大きに怒り給ひ、さればこそ、初めより言ひし時、何事にても叶へ申すべきよし申せし程に、賴もしく思ひて、斯程の大事を言ひ出しつるに、時に當つて虛言を申しけると、荒々と宣へば、彼等心苦しくて、兎も角も御意次第にて候ふと申す。その時繼母斜に悅び、彼等に酒を羞め、砂金を取らせて賺し給ふ。偖武夫申すやう、何として亡ひ申すべきぞと申しければ、今宵紫竹の局に具せさせ、花園に出で

野もせ姫だに―野もせ姫にだにの意
野干―狐

らず、野もせ姫だに相馴れば、如何なる山の奥、野干の住む野の末なりとも、諸共に住むべけれ、はや〳〵行きて思ふ人の返事を取りて來るべしと宣へば、使重ねて來り、野もせ姫の乳母靱負の局に、彼の玉章を參らせければ、靱負の局は、野もせ姫に此由斯くと申して、玉章を參らせければ、野もせ姫、乳母に仰せけるは、偖是は何とかあらんと宣へば、乳母申すやう、此程の美人くらべに、勝たせ給ふ事のめでたさよ、御兄弟とは申しながら、繼母の御事なれば、常々憎ませ給へば、妾如きの者まで、腹の立つ事のみにておはせしに、少將殿への緣の道、思ひの儘なる御事なり、はやく御返事あれとぞ申しける。やがて姫君返し、

わが袖はしほひに見えぬ沖の石の人こそしらね乾くまもなし

古言ながら御返事申しまゐらせ候ふと書きて、送らせ給ひけり。使返事を取りて、少將殿へ參らせければ、少將殿斜ならず思召し、開きて御覽ずれば、古き歌あり、其心はわが戀は知る人もなし、又思ふ人にも言ひも出さず、打語るべき友もなし、沖の石なる程に、人こそ知らね、心の中は乾くまもなく、此方にも思ふなりとの心なり。少將殿此歌を御覽じて、先づ〳〵美しき筆のすさびかな、又斯樣に相思ひなる事かなとて、愈淺からず思

花ならぬ人に心のうつろひてなにはの蘆のほのめかすらん

斯樣に書き給ひて、乳母の正木に遣はされければ、正木御玉章をもちて、五條の宰相殿へ參り、靱負の局に見參申したき由申しければ、折節妹の乳母と、紫竹の局あり合ひて、何方よりの御使ぞと問へば、丹後の少將殿より參り候ふ、この玉章を野もせ姬へ參らせて給べと申す。暫く御待ち候へとて、野もせ姬へは參らせずして、御臺所へ此由かくと申しければ、御臺所は此文をそと開きて見給ひ、偖は淸水にての美人くらべに負けたりとて、乳母も共に安からず思へども、力及ばぬ次第なり。御臺所宣ふは、先づ其使を此方へ召せとて、中の庭へ呼び寄せられ、使に御臺所申されけるは、あの野もせ姬は、腰より下に大瘡出で來候て、時々死に入り給ふなり、顏ばかりこそ人にて候へ、同じくは紫蘭の姬を仰せなつけさせ給へ、形は野もせ姬には勝りて候ふと申されければ、此使申すやう、偖淺ましき事にて候ふものかな、其由をこそ申し候はめとて歸りければ、袖を控へて、よきやうに御申し候はゞ、祝を申すべしと申されければ、いかでわたくしにては申すべきとて、使は歸りて少將殿へ此由申し上げければ、少將殿宣ひけるは、紫蘭の姬へ相馴れて、其日のうちに十善の位には卽くといふとも、宿緣無ければ叶ふべか

なきと思召し、少將殿は是をこそと思はれけれ。又其次に妹の紫蘭の姫、御輿より下り給ふを見給へば、花山吹の上に、薄紅梅の袿、紅の袴踏みしだき、是も顏容姿美しさ類少き裝なり。然れども姉には劣りたると、少將殿心に思召されけり。偖少將殿はそれより御下向あれば、姫君達もやがて御下向ありけり。二人の乳母面々に思ふやうは、今日の美人くらべには、何れが勝り、何れが劣りたるならんと、少將殿よりの便を聞かまほしくぞ思ひける。去程に少將殿は、野もせ姫を迎へんとて、先づ御母上に此事申させ給へば、母上は聞召し、五條の宰相殿の姫は、事の子細のあれば叶ふまじき由仰せられけり。少將殿は此由聞召し、偖是は如何すべきぞや、たつて申せば不孝なり、又此姫の外浮世に迎へんと思ふ人なしとて、深く思ひに伏し沈み給ひけり。かゝりける處に、少將殿の乳母に正木の局申すやう、御心地は何とましますぞ、野もせ姫の御事においては、自ら叶へて參らせん、急いで御文を遣はされとぞ申しける。少將殿は此由聞召し、御枕をあげさせ給ひ、嬉しくも申すものかな、さらば文を參らせんとて、紅の薄樣に引重ねてかくなん。

清水のそこにて君をゆめばかり見しおもかげの色はわすれじ

りしを、繼母御に申すも如何あらん、父御に申すべきやと思案し居たり。又妹の乳母は内證申し來りし事、母御に申し聞かせ候へば、母御は悅びて申させ給ふやう、丹後の少將殿と申すは、器量世に勝れ、諸藝達し、時めく人なり、是は思ひの儘なる婿殿なれば、急ぎ見せ參らすべし、淸水詣によそへて見せ參らせん由申しつがひ候へとて、則ち乳母方より少將殿へ其通り申し遣はしけり。靭負の局は是を聞き、やがて父御へ申しければ、父宰相殿仰せられけるは、娘を見するといふ事如何なり、何れも物詣の時分知らせ申べき由、其方が心得の由にて、申し遣はすべきとの御事にて、則ち申し遣はしけり。偖丹後の少將殿は、彼の姬君達の淸水詣を、今や遲しと待ち給ふ。斯くて彌生十八日の事なりしに、宰相殿の北の方御娘御二人召具し、御輿十挺ばかり遣り續け、ざゞめかいて淸水詣ありけり。丹後の少將殿は此由を聞召し、女の姿に出立ちて、先に立ちて參り給ひ、觀音の御前の傍に、輿を立てさせて彼の人々を待ち給ふ處に、宰相殿の北の方、御輿より下り給へば、次に野もせ姬御輿より出で見給ふを給へば、櫻重の上に萌黃の袿、紅の袴踏みしだき、中門より步み給ふ御姿、御髮は袿に等しく御顏容の美しさ、目元口付、姿いとらうたく言ふも愚なり。廣き都の其内に斯程の美人は、遂に目馴れたる事も

美人くらべ上

遠國波濤―遠國や波濤の末なる島々といふ意

古の事かとよ、都に隱れなき丹後の少將殿とて、時めける人あり。器量骨柄人に勝れ、詩歌管絃何につけても暗からず、御年二十に餘り給へども、御臺所ましまさず、都廣しと申せども、御心に入りにし方なくして、遠國波濤まで御尋ね候へども、未だ何れとも定まり難し。爰に五條の宰相殿の御娘御二人おはします、姉御は御年十六になり給ひしが、其頃世に類なき美人にてましますが、母上に後れさせ給ひて、繼母御にかゝりておはします。又其妹十四にならせ給ひしは、後腹の御子なり、是も美人にてましませども、姉御には劣り給ふと聞えし。姉御をば野もせの姫、妹を紫蘭の姫とぞ申しける。丹後の少將殿は、兄弟の姫君の事聞及び給ひ、只一目見たきと思召し、姉野もせ姫の乳母、靭負の局の方へ、緣を尋ねて、内證仰せ遣はさる。又妹紫蘭姫の乳母紫竹の局の方へも、内證仰せ遣はされ、一日御覽ありたきとの御事なり。靭負の局は少將殿よりの内證申し來

美人くらべ

末の露もとの雫や世の中の後れ先だつならひなりけり

よもの海濱のまさごを數へつゝ君が千年(ちとせ)のありかずにせん

むにん—無き人の音讀なるべし

又一つの文御父の方へとあり、言葉はなくて歌ばかり、

をしまれぬ身は山陰のさくら花散るともたれか哀とは見ん

かやうに書きおかせ給ひける程に、此由を里へ告ぐる程に、岡部さればこそ不思議の事いできけると思ひて、急ぎ寺へ上りければ、是非の次第なか〱言葉に及ばざりければ、孝養營み、空しき野邊の夕煙となし、月光、大ふ、しよう殿、まつわう丸ともに行きがた知らずなりにけり。別當も又うき世にありても何かせんとて、ある山深く閉ぢこもり、行ひ澄ましておはしけり。さる程に岡部も花みつには死して別れ、月光には生きて別れ、彼是せん方もなければ、髻を切りて猶も子どもの行末の悲しさに、別當の住み給ひける山の奥を尋ねゆきて、花を摘み香を焚き薪を採り水を汲み、亡者の菩提をとぶらひけるは、現世後生の然るべき善知識とぞおぼえける。

月光、大ふ、しよう、まつわう丸四人の人々は、高野山へ上り奥の院近く閉ぢこもり、難行苦行してむにんの御あとをとぶらひけるこそやさしけれ。昔より今に至るまで繼子繼母ほどうたてしき事はなしと言ひ傳へたり。さりながら順縁逆縁皆佛菩薩の御方便なれば、此人々の發心修行しけるも、誠に賴もしく有難くこそ思ひはんべりけれ。

き給へば、一山の老若は申すに及ばす、賤しき者までも皆感涙を流しけり。さる程に文ども數多あり、一の文は坊主の御方へとあり、見れば幼少の時より今まで人となされまゐらせ候へば、朝夕御手をも引きまゐらせ候ふと思ひ、又後の世をもとぶらひ申さんと思ひて候ひしかど、かやうにことの外なる有樣、誠に生々世々の御うらみとこそ思ひ候へとて、二首の歌あり。

花はちり跡はさびしくなりぬればしもうらめしき心こそすれ

さこそなほ月をぞ人のもてあそぶ花はあだなる物と思へば

又一つの文は大ふしょう殿へとて、さても御手にかゝりかやうになり候ふ事、後の世をば賴み入り候ふとて、二首の歌あり。

久方のあま照る月に名をとめて散る花みつとたれか言はまし

二つあらば一つの命のこしおき君がなさけを思ひ知らばや

又一つの文は月光殿へとあり、又もなき兄弟にかやうになりゆき候へば、さこそ思はせ給ふらんと、それのみ心にかゝり候ふとて、一首の歌あり。

花の雲風に散りなば月ひとり殘らん世こそ羨しけれ

二人の法師は今は何をか隱し申すべき、花みつ殿をば我等二人が殺し申すなり、いつぞやの頃本堂にて我等を賴み給ふやうは、弟の月光を害してくれよ、其子細は餘りに母のうたてしく我に當り給ひ候ふ事の憎ければ、子を殺して思ひ知らせんとありければ、かく仕り候ふといへば、別當何事かわが心中に變り候ふべき、さこそ〳〵思はせ給ふらん、此老僧をさへ打棄て給ひ、自害をし給ひ候はゞ、悲みの中の悲みを、何となれとか思ひ給ひしやらん、今はたゞいかにも共々に此人をとぶらひ申すべけれとの給へば、これ又たゝなかなり。

かゝりける所に月光殿、此事は面々の道理なり、花みつ殿とわれと比ぶれば、月光をこそ失はんめと思召し候ふ心中御ことわりなり、我におきては更に怨みとも思ひ候はず、今は只われらも共々にいかやうにもとぶらひ申すべしと、泣く〳〵の給へば、これ又理をわけての給ふものかなとて、自害をばやみぬ。只一筋にきやうをしたてまつりて、その後發心修行をも仕り候ふべけれと思ひ直し、二人の法師別當ともに死骸をとり、孝養せんとしける。泣く〳〵別當申されけるは、此兒十歲といひしとき親父に請ひ申し、十六歲の今に至るまで露おろかなく育て奉るに、かやうに憂き目を見せ給ふ事の悲しさよと歎

これ又たゝなかなり―これ又ただなくばかりなりの誤脫か

失はんめ―失はめの音便

きやうをし―孝養しの誤なるべし

夜こめて―夜中に

二つともなし―他の方法なし

へといへば、子細なしと領承す。さらばとて皆々夜こめて歸りけり。二人の法師は一所にゐて、さてもうき世のならひとて、かゝる憂き目を見ん事よ、さりながら力なし、後の世をこそとぶらひ申すべけれとぞ言ひける。兒はわがやに歸りけり。露消えん花の朝顏いつまでと、はかなき命ありあけの、月も傾く名殘にて、月日を待つこそ悲しけれ。さる程に十六日の暮方に入相の鐘もつくぐ\鳴り、月影も山の端に忍びて出でもやらざるに、二人の法師は用意して、わざと具足は著ず、打刀ばかりにて、花みつ殿の局の前に立つ。花みつ殿は月光殿の姿に身をなして、暫く叩き給ひければ、内より聲もせざりければ、餘所へ御いでかと、獨言をいひ歸り給ふ所を、大ふは餘りの悲しさに走りより、足をむんずと抱きつく。しょうは思ひ切らではとて、肘のかゝりを二刀さしてすて奉る。二人の者泣くく\歸りて、さてもく\われは情なき事をしたるものかな、法師の身にて兒を殺害する事は例なき次第なり、但し後の世をとぶらひ申すべしとて、泣き悲む所に、こはいかにしつる事ぞや、花みつ殿を今宵人の殺したるぞとて、上下騷ぎければ、二人の法師これを聞き、見まがひてぞあるらんと思ひながら、行きて見れば花みつ殿なり。さては此兒にたばかられてこそとて、二つともなし、自害するより外はなしと思ひ切りて、

たとへば—實を申せばの意
討つて賜はり候へと—との字不要なるべし
これはよもと—これは決して口外せじと

一定—きつと

思ひ切りて—決心して
領承し—領承すの衍
よしそれも云々—二人の語

の御事を申し候へと、ねんごろに喜びて、たとへば弟の月光討つて賜はり候へと、これこそ一大事の御ようとは申し候へといへば、二人返事に及び難く、赤面してあり。兒されぱこそこれはよもと思ひつるものを、心易くゆひいだしたるくちをしさよ、此事漏れて聞ゆるならば、坊主にも里にもさこそあらめ、今はなかの坊へも歸るまじといへば、とかくする程に、夜も更けゆき候ふに、皆々御歸り候へ、御名殘をしくは候へども、とても長らへて添ひはて申すべき身とも思ひ候はねば、われはこれよりいづくの浪曲の末、山の奥までも、身をすごし候ふべき、さすが棄て難き命にて候へ、長らへて候はゞ互に見え申すべし、もし露の身のならひにて、消えぬと聞召し候はゞ、後の世を賴み入り候ふといへば、此兒は一定自害をすべき、さなしとて此人を失ふべきにあらず、火に入るも、水に入るも、前世の因果なり、二人の兒をばいづれとも思はねども、そも此兒を無體に失はんより、彼の月光をこそとにもかくにもなし參らせんとて同心し思ひ切りて、さらば子細なしと領承し、花みつ殿淚を流し、さこそ面々不得心に思召し候はん、御心中どもも恥ぢ入り候ふ。よしそれも今はいらぬ事なり、さてもいつといへば、兒は我所へ十六日に定めて來り候はん時、われ聲もせずしてゐる候ふべし、歸り候はん所を討たせ給ひ候

茅店云々―温庭筠の雞聲茅店月、人跡板橋霜の句に據る

言語道斷―言語にいひ得ぬ程よき景色なるとの意

御里の樣の事は―御實家の例の一件の事は

いかゞとし給ひしが―色々といたはりしが

面々樣―あなた方

○以下下卷

背くべきと―との字不要なるべし

折節人もなかりしに、比は八月十五夜中の事なれば、茅店まさに明かにして、板橋おのづから靜かに、松風颯々と吹いて谷川の聲りん〳〵と響きけるは、言語道斷の次第なり。皆諸共に心を澄まして、いと信心に念誦し、その後はこし方行く末の物語どもまで言ひいだして、涙を流し、假令月影も兒の袂に浮ぶ程に見えければ、二人の法師怪しく思ひて、兒の心を慰めんとて、何事にても候へ、われ〳〵かくて候ふ上は御心安く思召せ、心を殘さず承り候へ、御里の樣の事は、今一旦の人の申しなしにてぞ候ふらん、やがて思し直さるべし、其外は何事をか御心にかけさせ給ふべき、いかやうの御事なりとも、我等に深く御心を殘させ給ふなと申せば、兒も暫く打案じて、今は何をか包むべき、母にて候ひし人世にありし時は、坊主も人々もわれ〳〵をいかゞとし給ひしが、今此頃は人々の心も變り候ふ、面々樣ばかりこそ、われらを不便と思召し候へ、それのみ御嬉しく候ふ情にて候ふとて、かきくどきの給へば、二人諸共に袖をぬらしけり。

稍久しくありて、所詮面々に申したき事候ふ、聞召し入れ候はゞ申すべし、一大事の事にて候ふといへば、何事をか仰せを背くべきと一命をすつる事にても候へ、露塵とや思ひ候ふべきと、誠に思ひ入つたる體に申せば、さては嬉しく候ふ、誠の御志とはかやう

鰭板―板屏

大ふしろう―二人の名と聞ゆ

いだされざる事よと思へば、酒も心にそまずして、座敷を立ちければ、花みつは父の戀しさに鰭板のすきより次第に見送りて見れば、岡部も涙ぐみて、無慚や此子われらを戀しと思へばこそ、彼所の蔭よりもや覗きて見るらんと、こゝかしこのすきより見る程に、鰭板のすきより目と目と見合せけり。岡部さればこそ此子よと思へども、何といふべき樣もなければ、さながらにて歸れば、見遙かに見送りて、稍久しく立ちて、遂に泣く〱部屋へ歸りて、つく〲案じて思ひ給ふやうは、われは父の不興のみならず、坊主の御心にもちがひ、憎まれまゐらせてありけるものを、たとひ我親は人のゆひなしにより不興との給ふとも、坊主だにとりもちて御詫言あらんに、などか許されざるべけれども、坊主の御氣にちがひ申すによりてこそ、是程にうたてしくあるらめと思ひ入りければ、われは今は母親はなし、父親はあれども不興の咎を蒙りて、師匠にも憎まれぬる上は、うき世にありても何かせん、とにもかくにもなるより外はと思ひ、召使ふまつわう丸を呼びて、大ふしょう二人のこしの方へ此夜この月の面白さに社に參り申し、面々諸共に月を眺めて、御心をも慰めばやと思ひ立ちてとの給へば、二人同じく、易き事といふまゝに二人が一人は前に、一人はうしろに立ち、まつわう丸を引具して、如意輪堂にまゐりけり。

上りたれば―上りたらばの意

疾くして―早く

一二と―一一ことの誤なるべし

は候はじ、もしさもあらばよきやうに申させ給へ、やがて某も下りたく候ふ、下らせ給へば心安くて候ふとて、うち涙ぐみて、さすが人目も恥しければ、露に爭ふ袖の上、打添ふ母の面影の、今更いとゞ戀しくて、わが住む部屋に歸りつゝ、さめ〴〵と泣きければ、餘(よ)所(そ)の袖までもあはれにて、皆感涙を流しけり。月光も兄の心もとなさに、泣く〳〵里へぞ下りける。岡部は月光が成人したるを見るにつけても、花みつかくこそあるらん、猶も大人(おとな)しくぞあるらん、彼の母の草の蔭にても、不興といふ事をさこそうたてく思すらん、所詮寺へ上りたれば、定めて事の樣(やう)は知るべし、別當に大方(おほかた)の事にて言ひ許して見せんずるものをと思ひて、やがて月光を打連れて上りけり。別當いであひ、雜餉とりはやし、自(じ)餘(よ)の兒達も座敷に直られけれども、花みつ殿はさしいづる事なし。別當花みつに仰せけるは、機嫌を窺ひ御身の事を申し許しまゐらせんと言ひ慰めてありけり。岡部所詮只今急ぎて上るも只我子のゆかしきにこそあれ、疾くして別當の此事ゆひいだして許せとあれかし、思ふ事なくて酒をのみて歸らんと思へども、別當も心中に此事をのみ思ひけれども、岡部殿の機嫌打解けぬ體(てい)を見、心をとりかねてゆひ出ださゞりけり。

岡部思ひけるは、無慚や此子は別當の氣にも誠にちがひけるぞ、此者の事を一二とゆひ

案の如く月光殿の母上は本の家に移りて、よろづ思ふやうなり。かゝりける所に京都又亂れ天下亂世となりしかば、國土の軍兵共京へ上りければ、赤松殿も上洛あり、岡部も御供申して上りけり。多くの日數積りしかば、繼子繼母の事なれば、花みつの方へは月に一度も何事かありとだにも問はず、たまへ小袖風情の物を仕立てて上する時も、つぎなる小袖をのぼせけり。月光殿の方へはよき小袖を數をつくして上せけり。これは坊主の御方へ、これはこしの御方へとて、雜餉かまへ送りけり。人の心のつたなさは皆月光殿と賞翫す。されば花みつ殿は何事につきてもよろづ物あぢきなくして、一日二日と過ぎ給ふ。岡部都より下りけるに、女房語りけるは、花みつ殿は坊主の御方より暫くの間不興あるべしと語りければ、岡部思ふやう、繼子繼母の事なれば、空言にてもあるらんと思へども、まづへ女の心を破らじと思へば、寺へ人を遣して、月光がかたへ文を上せていふやうは、急ぎ此使と下るべし、花みつには思ふ子細あり、此方より申さん時に下るべしとありければ、花みつ殿我らこそ兄なれば、まづ文をも賜はりて下るべきに、月光が方へ御文ありて下さるゝに、なんぞ怨しや、仰せごとのうたてさよと言ひければ、月光申すやうは、定めて母の讒奏にてや候ふらんとて、打ち涙ぐみいへば、花みつ殿にもさ

つぎなる小袖—上等ならぬ小袖

こし—御師か尚考ふべし

讒奏—讒訴の轉訛

に酒盛も過ぎければ、岡部花みつを呼びて、汝はこのまゝこれに在るべしとて、若黨小斷を相添へて置きけり。さる程に岡部下向して思ひけるは、今は月みつもいかに羨しく思ふらんとて、吉日をえらみて同じ坊へぞ上せける。さる程にこの兒達は成人するに隨つて、容顏人に勝れ、芙蓉のまなじり鮮かに、青黛の眉うるはしく、丹花の唇うつくしく、翡翠の髮ざし、誠に以て濃かなり。見る人は申すに及ばず、聞き傳へし人も心を懸けずといふ事なし。されば情も色深く、心ざまも正しくしてたぐひなし。書寫は三百坊と申せども、一千餘人の老若おしなべて此兒に心を寄せざるはなし。さる程に花みつ殿の母上は本臺にてましますが上は、四季に從つて衣裝色々をつくして、折節の雜餉何に乏しき事はなし。月光殿の母上はいまだ何事も心にまかせざる事なれば、引きかへたる氣色なりければ、人の心のうたてさは皆花みつ殿にぞ靡きける。花みつ殿十四と申せし春の比、母上生死無常のならひなれば、既に危く見え給へば、花みつを近づけて、われとにもかくにもなるならば、定めてあたらし殿此家に移り給ひて、月光を世に立てらるべし、さやうになるとも相構へて威勢爭ふべからず、只汝は思ひ切つて法師になつて妾が後の世をとぶらはゞ、誠の孝子と思ふべしとゆひ含め、遂に空しくなりにけり。

本臺—本妻

ゆひ含め—いひ含めの訛

こ精好―「こ」は色濃く染めたるをいふか

再遍―再度

恥、我家の恥ぞかし、思へば山寺へも上せばやと思へども、よろづの事共案じける時、書寫山へまゐらばやと思ひ、花みつをば輿に乗せて別當の御房へぞまゐりける。別當守護代御上りとて座敷を飾り、寶物を調へ待ちける程に、花みつの輿をば椽近くかゝせければ、別當も同宿も怪しく思ふ所に、年の齢十歳ばかりと見えたる兒の色白く美しきが、色小袖にこ精好の大口たわ〳〵と著なし、薄化粧したるが輿の内より出で給ひければ、別當喜びて、やがて坊中の兒達を請じ、座敷の體美々しく見えけり。盃三獻に及びければ、少人を初めとして打亂れ、既に酒盛になりければ、別當既に酩酊して、酒を飲み得ず。岡部心に思ふやう、花みつを見に請へかし、請はればこのまゝなりとも置くべきものをと思ひければ、別當に酒を强ひて、今一つ聞召せ、御所望の事御座候はゞ、何事にても承り候へ、奉公申すべきといひければ、別當酒たふ〳〵とうけて、法師は別して何も所望にも候はず、只今これに御座候ふ少人は、定めていづかたへも御約束候はんずれども、暫くの間別當に御預け候へ、後見申したく候ふと仰せければ、岡部一往は辭退しけるが、再遍に及びければ、子細なしと領承しけり。別當餘りの嬉しさに三盃飲みて、花みつ殿に思ひざして、其盃を祝著して、われ又飲みて岡部にさしけり。色々の藝能をつくして、既

わが殿―足利殿の意か
ゆひがひ―いひがひの訛

はかなくならんよと、思ひながらも下向する。岡部が見る夢にも盛なる花一枝賜はるとありければ、青き葉の風に散ると見る程に、われに子を賜はる事は疑ひなけれども、葉の散ると見る事の心もとなけれと、思ひながら下向する。程なく女房懐妊して産の紐をぞ解きにける。男子なりければ斜ならず喜うで、名をば花みつ殿とぞつけたりける。

かゝりける所に、赤松殿岡部を召して仰せけるは、われ三年三月の大番を仰せ下されたり、某上るべけれども、御邊某が苗字を名のりて御番勤めよとありければ、主の苗字を許さるゝ所面目これに過ぐべからずと、急ぎ都へ上り御番をうけとり、日數を送りゆく程に、傍輩の方より、暫く在京の程召使はれ候へとて、優なる女房を一人つかはしけり。心ざま人に勝れければ、岡部在京の程愛して比翼連理の思ひをなしければ、程なく子を一人まうけたり。比は九月十三夜の事なれば、月によそへて月光とぞ名づけける。大番も過ぎければ、月光同じく母上を相具して下り、始めて家を作り、あたらし殿とぞ申しける。花みつが母にも劣らずもてなしけり。やう〳〵月日を送りゆく程に、花みつ十歳になりける時、岡部思ふやう、赤松殿は久しくわが殿の御一族なれば、大殿久しくわが殿の奉公仕りけり、二人の者共を相具して其時ゆひがひなくふるまひたらん時は、主の

花みつ

いこくはつ申すに及ばず―威光は申すに及ばずの誤なるべし
しうしんのきもよく―主臣の義もよくか

尊氏將軍の御時、旣に一天下親子になり給ひしかば、尊氏都にこらへ難くして、筑紫をさして落ちさせ給ふ所を、菊池大勢にて追かけ奉る。尊氏の御勢僅に一千餘騎には過ぎざりし。されども御運いかめしく鞴濱の合戰に打勝ち給ふ。其故は赤松の妙善律師則祐といふ人、手を碎き合戰し、高名大きに勝れたり。されば赤松は播磨十六郡を賜はりて、入國のいこくはつ申すに及ばず、一族若黨其數を知らず。こゝに岡部といふ新參の者一人はんべり、器量骨柄人に勝れて文武二道のつはものなり。しうしんのきもよく心に相叶へり。しかれば播磨西八郡を賜はつて、草木を靡かし給ひけるが、一人の子をもたずして、或時心に思ひけるは、申子をせばやと思ひ立ち、やがて女房は法華寺に參り、岡部は書寫山に參籠申し、深く祈請を申しける。七日に滿ずる夢に莟める花を一房賜はるに、靑き葉の風に散ると見て、夢はさめにけり。さては子を賜はらん事は疑ひなけれども、妾が

花みつ

われも〳〵と參り、分々所領を給はりて榮えけり。さるほどに月日かさなりて、若君十九にて大政をうけ給へり。姫君は女御に參り給ふ。對の屋は北の政所と申してめでたく榮え給ふを、遠きは聞きてうらやみ、近きはたのしむ。出入のもすそをつらね、ひかりをかざし、富貴萬福たとへんかたもましまさず。かゝるたぐひすくなき姫君は、上古も今も末の世も、有難しとぞおぼえける。人だめによきものは現世安穩、後生善所と、佛も說きておき給へり。御ちぎり淺からずして、後にはもろともに往生の素懐をとげ給ふ、世のちぎりこそめでたけれ。

さむひやう―未詳
神は非禮をうけ給はず―性理字義「神不歆非禮」

る時は見參し、又ある時はよそながら御聲ばかりを聞きなどして、歸りたまふ事もあり。大納言殿の心の内のうれしさ、たとへんかたぞなかりける。北の御方はふるさとへ行かずして、直に稻荷へこもり、南無大明神、ねがはくば對の屋にさむひやうをつけてたび給へと、祈られけるこそおそろしけれ。神は非禮をうけ給はずして、對の屋はうけ給はで、繼母狂亂して、都を狂ひありき給ふ。京わらんべ是を見て、むくいの程のおそろしさよとて、笑ひ打擲す。四十二と申すには、終に狂ひ死にぞたて給ふ。對の屋きこしめし、あら痛はしの次第やとて、御菩提ねんごろにとぶらひ給ふ。御乳の人をばいよ〳〵痛はり給ひけり。殿下明石の海士人をめしのぼせ給ふ。無官にては內裏へ參らぬ事なれば、掃部の助になされて參る。明石の浦を子々孫々まで給はりけり。女をば大床まで召されて、姬君見參なされ、紫のうす衣十二かさね、紅の袴そへて、これはみづからに添ふと思へとて下さるゝ。其外漢家本朝の寶物、數をつくしてたびにけり。榮花にほこりけるとかや。佐藤左衞門を召して、伊豫の目代をたびければ、御恩はかたじけなけれども、何のよろこびに榮花には誇るべき、世に住めばかゝる事を承るとて、元結きり高野山へ上りしを、ほめぬ人こそなかりけれ。姬君の母宮の御時の人々、此よしをうけたまはり、

うらめしさよとぞの給ひける。さて又姫君明石の浦にて岩の上に五日潮にうたれし事、來世にまします母宮の御聲きこえし事、海士つれてかへり、つれ〴〵慰めし事、色々かたり給へば、日も暮方にぞなりにける。

師殿は御いとま申し給はりて、明日又こそ參上仕るべく候へとて、我屋にかへり給ひけり。北の方の給ひけるは、みな人々はとくかへり給ふに、などおそくかへり給ふぞとの給へば、さればとよ人にすぐれたる喜びありてとの給へば、扨は我子御乳に參りたるによりてと思はれ、さぞおはしますらん、美しき若君、姫君を見給ふらん、うらやましやとのたまべば、やゝありて師殿、北の方は何の咎ありて、對の屋をば明石の浦にて海へはしづめ給ふぞ、今まで知らざる事の返す〴〵も口をしさよとて、やがてふる里へ送り給ふ。扨師殿次日中將殿へ參り給ひて、姫君に見參まし〳〵て、昨日は夢の心地にて、さらに前後をもわきまへず候ふ、今日の見參こそ誠にうれしく存じ候へとて、姫君ちとこなたへたたせ給へ、そなたへゆかせ給ひ候へとて、御姿をかみから下へ、下からかみへ見くだし見あげて、十一年が間の思ひ、今こゝにて晴れぬとて、又涙をぞ流し給ふ。それより毎日通ひ給へば、あまりに人目もつゝましや、中將殿の御心の内もいかゞと思しめして、あ

しを、中將殿御覽じて、つれて都へ上り給ふと仰せ出だされ候へば、御門をはじめ奉り、殿下、北の政所、中將殿、大臣、公卿、殿上人、子をもちたるも、もたざるも、一同に聲をあげてぞ泣き給ふ。師殿はあまりの事にあきれはて、扨もこれは夢かや、うつゝかや、夢ならばさめて後はいかゞならん、誠はうつゝなる間、うれしき今の涙とて、一入ぬるゝ袂かな。大臣殿も此人ゆゑにこそ、少將も世をうき事に思ひて、遁世修行に出でけるとて、ふしまろびてぞ悲び給ふ。さて師殿をみすの内へ請じて、姫君見參まし〳〵、色色の引出物、中將殿よりたび給ふ。扨姫君、大納言殿にの給ひけるは、都に上りし事、とくにも申したく候ひつれども、繼母御前の不興の咎おそろしくて、かくとも申し侍らず、後の親を親とすべしといふ法文の候へば、今まで申さで過ぎしかども、みづからあの若君姫君いつも見れどもめがれせず、いとほしく思ひ奉るにつけても、さてこそ我父も明暮みづからを玉のごとくし給ひしに、行くへなくなりて後、いかばかりものを思ひ給ふべきと思へば、けふ喜びのついでに、かくは知らせ奉るなりとの給へば、師殿も東西をもわきまへ給はで、さめ〴〵と泣きゐ給ふが、やゝありて仰せ候ふは、御ことわりはさる事にて候へども、老いたる我にかく今まで物を思はせ給ふ、あまりに御心ふかき故なり、

ぢさうゐんの刑部卿參り給ふ。天下の御子の袴著なれば、大臣公卿殿上人、一人ものこらず參り給ふ。姬君思召しけるは、かゝるめでたきわが身のしぎ、父師の大納言殿に何ともして知らせ奉りたく思召し、二人の公達にの給ひけるは、刑部卿御袴の腰ゆひ給ひて後、御座になほらせ給はで、公卿の內八番目にまします堀河の大納言殿を、三度づつをがませ給へと敎へ給ふ。扨刑部卿の宮御袴めさせ給へば、公卿の中へはるかにおりさせ給ひて、師殿を三度づつ拜し給へば、師殿おどろき、こはいかなる事ぞと、かぶりの巾子を地につけてこそましましけれ。皆人不思議に思召しけり。殿下も不思議に思召し、何の故に大納言を拜み給ふぞといひ給へば、公達、母上のをがめと仰せ候ふとの給へは、左近の丞をめして、このいはれを簾中へ尋ね給へば、簾の內には淚にくれて、しばしは物もの給はず、やゝありてみづからかやうのめでたきしぎになる事も、まことに父の御恩なり、みづからは五人の親をもちたり、誠の父は師殿也、母は大田の御門の二の宮なり、やしなひ親は明石のあま人夫婦なり、今一人は佐藤左衞門なり、十三の年師殿筑紫へ御下りの時、明石の浦にて繼母御前に海へ沈めらるべきを、佐藤左衞門がなさけより、岩の上に助けおきたりしを、海士見つけてわがやにかへり、四年が間月星の如くあがめ養ひ

幡へ神馬を參らせらる。何事の祈ぞときくに、姫君たゞならず渡らせ給ふが、はや五月にならせ給ふ其祈のためとぞ聞えける。その後殿下の仰せには、中將殿あまの子に具しぬれば、わが子にあらず、生れたらん子、男子にても女子にてもそれを我子にすべし、生れたらん時母が膝におかずして、いだき取りこれへ渡すべしと有りけり。ほどなく月日かさなりて、御産たひらかにせさせ給ふ。あたりもかゞやく程の、しかも若君にてぞまし〳〵ける。大納言の助絹の袖につゝみ取りまゐらする。二條西洞院の中納言殿を御めのとに召されてけり。御車には大納言の局いだきまゐらせて乘せ給ふ。御太刀はきには、よき諸太夫百餘人ざゝめきつれてまゐりけり、けだかくぞ覺えける。殿下大きに御よろこびまし〳〵て、御産湯殿下の御所にてせさせ給ふ。去程に御乳の人には、まま母のむすめぞ參られける。あまりにあしきとの所へ母やり給へば、子ながらもあしきふるまひさがなしとて、大納言殿不興し給へども、殿下の御子の御乳に參り給ふめでたしとて、御不興ゆるされて參りけり。かくて月日かさなりて、又姫君出來て是は中將殿に置き奉りて、姫君しろしめしたる事ども教へんとて止め置き給ふ。つながぬ月日の程なさは、わか君七歳、姫君五歳の八月十日に、御袴著の御用意なり。御袴著の親には、

御心にかゝらねば—御心にかゝらぬはの衍か

かちめ—荒布の一種

日々にも御入りましく〳〵て、みづから慰めてたび候へ、中將にぐし給へば、子供にかはる事はなく候ふ、又此者ども見ぐるしく候へども、年來のめしつかひどもにて候ふ、恥ぢさせ給はで御つかひ候へとて、おくられけるこそ有難けれ。姫君御文ごらんじて、今はすこしのたよりもありと御喜びましく〳〵て、世にすぐれたる御手跡にて、御返事をぞ遊ばしける。北の政所四人の公達ともに御らんじて、扨もいつくしき御手かな、墨付筆のたてど文字のならびに至るまで、人間のわざとは見えざりけるとぞの給ひける。その時中將殿仰せけるは、今は何とてかほどまでつゝませ給ふべからず、ありのまゝに語り給へ、みづからにさのみに物な思はせ給ひそとの給へば、姫君さめ〴〵と打ち泣き給ひて、親なればあまのそゞろに戀しくて、袂のかわくひまもなし、御心にかゝらねば理なり、我らがためには親なれば、忘るゝ事も候はずと、なほもつゝませ給ひけり。去程に明石のあまは、出家の志ふかくて、所の目代ゆるさねば力なくして、女のあまばかり髮そり、御孝養さま〴〵いたす。總じて生あるものをば取らずして、わかめ、かちめ、あまのり、こぶのりなどのたぐひを採りて世をぞ渡りける。をり〳〵は山に入り野にまよひ、花を手折り水を掬びて、明暮姫君の御菩提深くとむらひけり。ある時中將殿賀茂八

手書學匠にて歌連歌の道、何につけても暗からず、琵琶、琴、和琴などをば、十歳より内にてその源をきはめらるゝ、さらに凡夫とは覺えずとて、人々心をかけられし、我も中將のためにこはんとせしかども、四位の少將にこされて力及ばでありしに、其頃大納言太宰府へ下りしに、明石の浦にて日本に相應せずとて、龍宮へとられて、扨こそ四位の少將は書寫の山にありとは聞け、其姫君も今夜のあまの娘にはよもまさらじ、にくしと思ふ我等だに、あしき所は見出さず、見れども〳〵あく事なし、何といふとも中將この人をばよも捨てじ、すてぬものゆゑに憎みてかひもなし、右大臣の娘も中將のみねば嫁ならず、あまの子なりとも、我子の見るこそ嫁なれ、此人につきたる人なし、痛はしやさこそたよりのなかるらん、人をつかはすべしとて、衞門督、兵衞の助、衞門のつぼね、小女房三人、はしたもの三人、うへわらは三人、十二の者どもを、車三輛にのせてつかはし給ひけり。

おくり文に、ゆふべは見參に入り參らせ、うれしくこそ候へ、誠にさま〴〵の御いとなみに心も消えかへり、生涯のおもひでとこそ存じ候へ、はじめての見參なれども、百年もなじみたる心地して、御かへりさの名殘をしさ、いかばかりとか思召す、今よりのちは

生涯―原本「生界」とあり

霰玉ちる―霰たばしるの訛
ひの御座―禁裏以外になし、例の文盲なり
りやうぜん―流泉
はうけう―方磐

て鳴らし給ふ撥音槇の板戸をことぐしく、霰玉ちる音よりも、なほ氣高くぞ聞えける。扨ひの御座の上にゐなほり、盤渉に音をとり、りやうぜん啄木の三曲一返までこそ引かれけれ。雲の上までも澄みのぼり、天人も天降り菩薩もこゝに影向あるかや、神もめでたくゐみ給ふらんと、聞きしらぬ者までも、そゞろに袖をぞしぼりける。小將殿の心のうち何にたとへんかたぞなき。扨暁にもなりければ、御迎の車參りぬ、いとま申してとの給へば、今しばらくと引きとゞめて、其時麗景殿は琴の役、御息所は琵琶の役、そのほかはうけう、篳篥とりぐにて、姫君は和琴を參らせ給ひて、樂をぞ始めたまひける。まことに極樂淨土にて、廿五の菩薩たちのあそばす樂も、かくやと思ひ知られたり。夜もほのぐと明けければ、いとまごひましまして、御車にぞめし給ふ。人々御名殘をしさに、御車よせまで出で給ひ、是まで參りて候ふとの給ふ。さだめておそれ入りて候ふとの給はんと思ひしに、さはの給はで、車の下すだれをあげて、何事も善惡二つのならひ、むくいある事にて、まるるまじきと申しけるを、頻に召しつるむくいに、是までの御出ではとて、旣におりさせ給はんとし給ふ御けしき、言葉の品にいたるまで、優にやさしくおはします。北の政所の仰せには、不思議なりとよ、中頃堀河大納言の宮ばらの姬君こそ

りようかく—龍角、琴の頭の方の角

仰せけれども、知る人なかりければ、御返事申す人もなし。後に多武の峰のれうれん僧都とて、學匠ましますを召して問ひ給ふに、さる事候ふと申されけるにぞ、こらう壺をば皆しり給ふ。姫君物の給ふ御聲色、琴のしらべ迦陵頻迦の要文吟ずる聲よりもなほ面白き御こわねなり。其時麗景殿琴をとり出だし、ちと遊ばし給へと有りければ、姫君のたまふは、磯にしぐるゝ松の風、沖の鷗の友よぶ聲よりほかは、聞きならはぬ身にて候へば、かやうの琴とやらんは思ひもよらぬ事との給へば、中將殿板敷の下にてきこしめし、かほどの事とかねて知りなば、などか琵琶、琴教へざるべき、よし〳〵琵琶琴引けずとも、九品蓮臺の雲の上までもはなれまじき物をとおぼしめして、扨聞き給へば、麗景殿、是非遊ばせとありしかば、姫君、爪もなく候ふ物をとの給へば、御手をりようかくのもとに添へられければ、背きがたき仰せやとて、御膝の上にかきのせ給ひて、琴柱たてなほし、二七の緒かき合せ引き給へば、心ことばも及ばれず。つひにかほどの琴の上手はきかずと皆々思召しける。おもしろき事申すばかりなし。扨又琵琶を參らせて、これ遊ばせと有りければ、思ひもよらず候ふと、頻に辭退ありしかども、御琴のやうに遊ばし給へとて、御琵琶をさしよせ給へば、あらそむきがたやとて、御琵琶をとりなほし緒合をし

げすしさ―下品なること
めかれせず―目を離さず
とうりん―忉利天の衍なるべし
ちやうあんせい―長安城か

こしらへ給ひしにまさりたりとも覺えず、昔をこふる涙つゝむにたへぬ亂れ髪、かぞふる袖にあまれるを、さらぬ體にもてなし給ふ御けしき、たとへんかたなくらうたげなり。北の政所御覽じて、白き裝束はなか〳〵氣高く侍るものなり、わが四人の公達をあまの子に見合せぬれば、げすしさ限なし、されば世にはかゝる人もありけるよ、中將のつれて上りしも理なりと、笑ひ憎むべき事は忘れて、めかれせずまぼり給ふ。扨蓬萊の作り物を取出しみせ給へば、一目御らんじて又とも見給はず、日頃見馴れたる我らだにも面白く飽く事なきに、何と思召して又とも見給はぬぞ、物をの給へかし、聲をきかんと思召し、麗景殿の給ひけるは、かやうの物めづらしからず候へども、見せ奉らんためにと申させ給へば、姫君よく御覽じての給ひけるは、とうりんと申すは雲の上の都、蓬萊山とは海の底の都なり、仙人來りて藥をとらんとせしほどに、五つの峯六つにくづれて、殘り三つになる、彼の蓬萊に一つの家あり、不老門と名付け、長生殿これなり、不老のさかひに一つの市たつ、ちやあうんせいの市といふ、此市に一つの車あり、藥をしる車なり、其車のうちに壺あり、此壺くづれてわれぬれば、あらぬ月日出づるなり、倶舍の二十五卷めに、こらうが壺といはれしは此壺の事なり、されば此蓬萊にはこらうが壺はなきやらんと

下簾—車の簾の下にかけたる帷

ふき亂れ—ふき亂りの訛

さこんのゆか—さこんの語解しがたし

のきてかしこまる。車よせのつま戸の前には高燈臺に火かきたてて、女房三人手ごとに紙燭ふとくしてもちたれば、九夏三伏の夏の日、草もゆるがず照る日よりも猶明かにくまなし。女房さしよりて下簾をかきあげ、はや〳〵おりたち給へと申せども、返事もし給はず、いかにも簾をおさへてかきあげ給はねば、おの〳〵さゝやき申しけるは、宮殿樓閣玉のうてな夢にも見じ、さうなくおりかねたるも理なりとぞ申しける。やゝしばらくありて、今は人々思ひ忘れたりと思ふ折ふしおりさせ給ひて、たれかいしやくも申さねば、みづから衣のつま引合せ袴のきぎは引きつくろひ、御ぐしかき撫で小袖の上にゆりながし、扇かざし給はず、おしたゝみてぞもたせ給ふ。母屋のみすの前を上殿はるかにあゆみ給ふ御すがたは、五月雨に水まさる六田の淀の川柳の、あやめ眞菰の上をこすよりなほたをやかなり。翡翠のかんざしは衣のすそにあまりて、八尺豐に椽の上をぞ引かれける。柳の絲を春風のふき亂れたるよりなほ細くたをかなり。あはれ御姿を繪にかきて、あまねく人に見せばやな、いかなる繪師も筆にうつし難くぞおぼえける。扨御座の上に直り、うちそばみてぞおはします。さて見まはし給へば、錦のしとね綾の几帳、さこんのゆか、玉のすだれ、一の人の御所なれば、心にて思ひしに、我父の西の對を

ここ—來んの衍なるべし

いもり—誤字あるべし

しやうの林—未詳

しゆてん—主殿か

事なり、扨はこじと思ふかや、いざやまうけせんとて、こゝをはれと出立ち給ふ。麗景殿はをみなへしの十五に、萌黄にほひのうちぎ、くれなゐの單にくれなゐの三重の袴めしたり。中宮の御息所は紅葉がさねの十五に、はじのにほひのうちぎ、薄紅の一重に、これも三重の袴めしぬ。關白の北の政所は、いもりの御ぞ十五に、薄紅の三重の袴めされけり。内大臣殿の北の御方は、菊の匂の十五に、紫の一重に、是も紅の三重の袴めしたり。一人の公達に三人づつの女房を附け、色々こしらへ花をむすびて出でたちけり。四人の公達をならべ置き母上御覽じて、七夕彦星のあまの川原に立ち出でて鵲の橋をわたし、しやうの林を遊び給ふも、我公達にはよもまさらじ、ましてやいはん、田舍のもの、しかも海士の子、さこそかたくなしくをかしかるらん、はやこよかし、見て笑はんとの給ふ所に、御車近くなりぬると申せば、中門へ寄せさせよ、母屋の簾のまへをしゆてんへ、上殿はるかにねらすべしとさだめられたり。老若をきらはず、上臈、女房われも〳〵と、あまの子見んとてひしめきけるよそほひ、中將の御ため恥がましくぞ覺えける。さるほどに中將殿は此人はいかゞあらんと、おぼつかなく思召して、御さまをやつし、板敷の下に入りてあそびのやうを聞き給ふ。姫君の御供には左近の丞なり。御車よせて遙かに

かまひてーかまへての訛

きんかくー金閣

のものは東西をもわきまへず候ふ、八重だつ雲の外はみず、都のまじはり思ひもよらず候ふ、かくて一日も候へば、中將殿御ため恥がましく候ふ程に、思ひもよらずとの給へば、大覺かへりて此由を申せば、言葉のつゞきはおもしろし、されども聲はなまりてをかしかるらん、たゞ呼びよせて拂はんとて、かさねての御使には、白き裝束に唐綾の袴そへて、御乳の人にもたせ、又大覺をつかはさる。四人の公達の仰せには、御つれ〴〵おし量り參らせて、かやうにたび〴〵申すに、などや御出でましまさぬぞ、中將殿御ゆるしなきやらん、かまひてとく〳〵渡らせ給へ、又北の政所の仰せには、これにも若き女房のあまた候へば、何かは苦しかるべき、かまひなく御入りまし〳〵て遊ばせ給ひ候へとの仰せにて候ふと申しければ、中將殿まことに度々仰せ下さるゝ事恐れ入りて候ふ、みづからいかで制すべき、はや御返事申させ給へと有りしかば、姫君の給ふは、殿上のうてなの住ひ、きんかくの御わざ、かりそめにも耳にふるゝ事なければ、はゞかり參らせ候へども、千引の石をうごかしてと申させ給へとありしかば、大覺歸りて此由を申す。四人の公達千引の石とはいかなる事やらんとの給へば、政所の給ひけるは、千引の石をうごかしてとは、千人して引くとも動くまじき石なれども、仰せの重さにゆらぎ出づるといふ

めく叶ふまじき御事と、色々申し給へば、御不興は許されけり。さて北の政所四人の公達をめして、此事をなげかせ給ふ。四人の公達と申すは中將殿あね君三人、妹君一人なり。一には時の女御麗景殿、二には中宮の御息女、三には長岡の關白殿の北の政所、四には内大臣殿の北のかた。此公達に向ひ歎きおぼしめすやうを語り給へば、きんだち仰せけるやうは、やすき程の御事なり、中將殿はきはめて物はぢする人なり、思ふ中をさけぬれば、其思ひにあくがれ、山林に入れば親も子も共に身をいたづらになし、長夜の闇にまよふ事あり、たゞこのあまの子を思ふよしにて、われらが中へ呼びいだし、かたくなしき事を見あらはし、聲々に笑ひのゝしらば、などか恥ぢて棄てざるべき、いづくのあまの子なるらん、はるぐつれてのぼり棄てさるべき事よとの給へば、げにもとて、さらばめづらしき作り物なさんとて、蓬萊の山を物の上手につくらせらる。扨大覺のすけと申す女房世にすぐれたる物わらひのわんざん人なり、これをつかひにて中將殿へ參り申すべきやうは、四人の公達の御使にまゐりて候ふ、さこそ御つれぐにぞ候ふらんとおしはかられて候ふ、こなたへ入らせ給ひて御遊び候へとありければ、大覺參りてそのとほりをぞ申しける。中將殿姫君にそれぐ御返事申させ給へとの給へば、姫君仰せけるは、遠國

わんざん人―佞猾者

いはやのさうし　下

さるほどにつぐ日内裏へ参り給ひて、御門に御見參し給ひて後は、花見の御幸、月見の御會にも出で給はで、天にすまば比翼の鳥、地にあらば連理の枝とならんと、生々世々はなれじとこそ契られけれ。たがひの心ざしなのめならずぞ深かりける。皆々の上達部の人ならば、あまの娘ぐしたりとて笑ひのゝしるべけれども、一の人の公達なれば、とかくの沙汰もなかりけり。

扨北の御方へは、伊豫へ下りて鹽風に吹かれ色くろみ見ぐるしく候へば、みゝえん事もはづかしくて參り候はず、いかばかり御つれ〴〵にぞ候ふらん、ふる里へまし〳〵て御なぐさみもや候ふべしと、文つかはし給へば、北の方思ひまうけたる事なりとて、時をうつさず出で給ふ。殿下とゞめ給へども、終に出でさせ給ふ。其後殿下殿中將殿を不興とありければ、北の政所の仰せには、みろく御めみせてこそおかせらるべけれ、御不興はゆ

皆々の—なみなみの誤なるべし

みろく—しろくの衍にて白眼を以て見る意か

こが―山城の久我
作道―鳥羽のつくりみち
らせい門―羅生門
御かひな云々―さきに落馬のために怪我せし肘なり

に關守すわらず、とかくしつらひ行くほどに、淀へぞつかせ給ひける。人々我も〳〵と御迎に參る。田舍女房は車にはならはじとて、御馬にのせ給ふ。御供には左京大夫、六位の臣、左近の丞、先陣にぞ參りける。御馬には少しもたまり給はねば、こがと云ふ所にて御車にのせ奉りて、作道をらせい門へとはやめける。姫君稻荷をふしをがみ、御前にて車の物見をあげて念誦し給ふ。人々あやしくぞ覺えける。扨殿下の御所へ入れ奉るべけれども、それには大臣殿の姫君、此三年むかへ置きましませば、飛驒の前司が家に入れ奉るべきと有りければ、前司衞門の督といふ侍の家にうつりて、我家をばゆづりまゐらせけり。次日中將殿殿下の御所へ參り給ひて、御母北の政所に見參ありければ、人々申しけるは、中將殿はそゞろに嬉しげにわたらせ給ふは、いかなる事にかといへば、ある女房達の申しけるは、はやく御かひな直らせ給へば、さこそあらめと申しあひけり。扨中將殿の北の御方へまゐり、中將殿こそ只今これへ渡らせ給ひ候へとて、皆々簾几帳をあげ、まうけしてひしめきける。中將殿北の御方へは目も見やり給はで、いそぎ飛驒の前司のやかたへ入らせ給ふ。みな人不思議にぞ思ひける。

住み侍るべきとの給へば―此下に脱文あるべし意味連續せず

ば御船ども出ださるゝ。又いましめ置かれたるあまども許さる。あまは我身のいましめられたる事をば歎かで、さこそ姫君待ちかね給ふらんとて走り歸り、さても不思議の事にて、今まで參り候はず、さこそたよりなくおばしますらんと申してみれは居給はず。いつのならひに片時も出でさせ給ふべき、悲しきかなやとて、走りまはりもだえこがれけり。あまりの事に海のかたへ向ひていふやう、たとひ龍宮へ御歸り候ふとも、海の上にて今一度をがまれさせ給へ、天人の影向ならば、雲の上にて見えさせ給へ、此四年の間月星の如くにあがめ奉りし事、御なさけの程をば、いつの世にかは忘れ候ふべきと、流涕こがれけれどもかひぞなし。さる程に姫君をばやかたの中にて、綾羅錦繡のふすま引ききせ奉りて、とかくなぐさめ給へども、泣かせ給ふばかり也。中將心ぐるしく思召し、御顏だにも見せ給はず、かほどに疎まれまるらせて、浮世にありてもせんなし、海にもしづみて底の藻屑とならんとの給へば、姫君涙のひまよりも、かくみづからを召しつれられ候て、親のあまをも召しぐしたまぬぞ、あとに殘りていかばかり歎かん事の物うさよとの給へば、中將殿いやあまの子にてはましまさぬものを、何とてつゝませ給ふぞと有りければ、姫君あまの子ならずば、何しにかゝる所には住み侍るべきとの給へば、月日

たらちを—父の意に用ふ

さてほの〴〵と明けければ、かの所のあま人を召して、かづきせよとの給へば、きのふの大風に波しづまらず候へば叶ふまじとぞ申しける。仰せを背くは不思議のものとて、汀の松にいましめ付けて、扨左近の丞と只二人、彼の岩屋へ御入りありて、さし入り見給へば、ゆふべ御覧せじは物の數ならず、けさは猶みまさりて雪の膚の隈なさは、いふべき樣もなかりけり。岩屋の中にあまたある歌の中に、

月はさし波はよせ來てたゝく戸をあるじ顔にもあぐるしのゝめ

たらちをにいかに知らせん浦にきてちひろの底をのがれたる身ぞ

月かげはあまの岩屋にやどれどもながらへはてんことぞ悲しき

いかにせん浦のあま人なかりせば波の底にて朽ちやはてなん

かくて姫君昨日今日とは思へども、はや四年までこそおはしけれ。扨中將殿さしよりて、おきさせ給へとの給へば、姫君うちおどろき給ひて見給へば、織物の狩衣に、かねぐろなるにうす化粧、太眉つくりてあてやかなる人なれば、都の御事きつと思召しいださせ給ひて、夢かやと衣引きかづき臥し給ふ。竿なる御小袖うちかづきまゐらせて、左近の丞かきいだき負ひ奉る。黄金づくりの御佩刀みづからもたせ給ひて歸らせ給ふ。扨風もしづまれ

かき殘せる志もなし―「志」は者の誤か

始終の人―末長くつれそふ人

浦そこ―浦底の意か

とうちあがめ給ひて、御涙はら〳〵とながさせ給ひて、見まはし給ふ御目のうち、あくまで氣高くらうたき事かぎりなし。岩屋の内をよく見給へば、北と西は岩屋なり、南の方に竿をつり、うら山吹の十三にうはがさね、紅の袴そへてかけられたり。岩の上には、來迎の阿彌陀の三尊墨繪にかゝれけり。御前には麻の絲にて四季の花を結びて立てられたり。金泥の法華經皆水晶の珠數もたれ給へり。あるかなきかの薄墨にて、要文法文經論かゝれたり。かき殘せる志もなし。墨繪をかしきに、色々かゝれたる風情、弘徽殿の細殿のかゝれし清涼殿の屛風もかくやと思ひしられたり。中將不思議におぼしめし、左近の丞申しけるは、よく御覽じつるかと申せば、よく〳〵見つるなり、此人を見るより胸うちさわぎ、あはれ一つ蓮とも生ればやと、心ちもうか〳〵しうなるぞや、いざや内へ入らんとの給へば、御覽じてうち捨てんとおぼしめさば入らせ給へ、もし始終の人におぼしめさば、まづ只今は歸らせ給ひて、明けてともかくも御はからひ候へと申せば、げにもとて歸り給ふ。その夜の明くるを待つも久しく思召して、左近の丞に仰せられけるは、さるにても浦そこのあま人に、かほどいつくしき人あるべしとも覺えず、たとひいかなる魔緣のものにて、我ためあしくなりなんとも、つれて上らでは叶ふまじとぞ仰せける。

火をあかして—火をあかくしての意か

藻屑ひとり—藻屑火とりての誤なるべし

ちて、心詞もおよばれず、物ごとにおもしろし。此程の思ひ出など、めん〱に口ずさみ給ひけり。さるほどにあまの岩屋にありつき給ひて、いざや田舎の下﨟の住居みん、人多くてはよしなし、二三人づゝ見んとて、左近の丞、六位の臣をつれて、中將殿あまの岩屋を忍びやかにのぞき給へば、口には刈藻かきつみて、きりめも見えぬくひせを碎きくべて、袖もすそもなかりけり。あまの衣を腰のほどにぬぎかけて、男あませなをあぶり、女はあとにゐて釣の絲をよりたりけり。三人の人々是をごらんじて、いざや歸らん、田舎の下﨟の住家は、犬の臥戸にさも似たり、こもを軒にかこひたれば、藁屋のうちのむくつけさ、土をふしどの埴生の小屋のいぶせさよ、さりながら上の岩屋みんとて、ひそかに上り給へば、六位の臣ははや歸りぬ。左近の丞とたゞ二人のぞき給へば、思ひもよらぬさもいうなりし姫君、御年十五六と見えつるが、髮のかゝりより初めて、姿有樣みめいつくしき、あひかゞやく氣色にて、ひとり火をあかしておはしけり。こはいかにと思召して、まぢかくよりて見給へども、姫君は知らせ給はで、御聲いとやさしきを打ちあげて、

おもひきや身をあま人になしはてて藻屑ひとりあかすべしとは

殿下—原本天下とあり

うたのかしま—歌島か

あぢ—鴨の一種

げられしかば、御よろこびに大納言にぞなされける。辭退申し給へども、綸言なれば喜びの中にもさき立つものは涙なり。さるほどに殿下の御子に二位の中納言と申す人、八月十五夜の隈なきに、侍あまた召しぐして、賀茂の河原に立ち出でて、駒くらべして遊び給ふが、中將馬より落ちさせ給ひて、左のかひなをつき損じ給ふ。伊豫の國は御領なれば、療治のために下り給ふ。いくほどなくしてよくならせ給ひて、都へはや〳〵のぼり給ふが、備後のうたのかしまより、播磨の室につき給ふ。月の出しほの夕なぎに、あぢのむら鳥渡るなり、書寫の嵐はげしくて、暮れゆくまゝに風あらく、しどろもどろに波たちて、五艘の船どももみだれけり。心ぼそさは限なし、艪櫂も舵も叶はずして、風にまかせてゆられ行く。されどもとある島へ吹き付くる。其時船のともづなをとり汀へおりさせ給ひて、浦の者どもに此浦は何といふぞと尋ね給へば、島の者これは明石の浦と申す。扨は聞ゆる名所なり、月の光もおもしろし、たゞいまの風に命たすかる悦に、是こそ西海の思出に、いざや浦まはりして遊ばんとて、御めのと子の六位の臣左近の丞、右京の大夫經春、左京の大夫これはる、御いとこの唐橋の少將殿、中山中納言殿、此人達を引きぐして、汀のかたをめぐり給ふ。磯べの松のむらだ

うき別れ給ひけり—うき別れし給ひけりの誤か

しき人のかたみと思ひ、つく〲とながめておはします。帥殿の給ひけるは、筑紫へくだりし時、さま〲姫をおとめありしに、つれて下りし事かゝる難に遭はんためかや、今さら後悔千萬なり、よしそれとても前世の事、還らざる身とは思へども、はかなき親のまよひにて候ふ、姫うせにし時とにもかくにもならばやと、千度百度思ひしかども、我さへ空しく成るならば、草葉のかげにて姫がおもひ、重きが上のさゝ衣、かさねてうき目を三瀬川に、しづみはてんも悲しければ、せめて殘りあとの營みし侍らんと、かひなき此身はとゞまりぬとの給へば、少將は只泣くより外の事ましまさず。帥殿も御孝養さまざましたまへども、少將はいまだ逢ひみぬ御かたゆゑに、かくとぶらはせ給ふ、あはれなりし御事ども、よその袂もしぼりかねたる有樣なり。扨いとまごひして立ち別れ給ふ。筑紫へ御くだりの時はのぼりの時と契りしに、けふ離れての其後は、又いつの世にめぐりあふべき、戀しき人のかたみのいとま、互にぬるゝ袂かな。おつる淚も櫂のしづくも、わきまへかねたる風情なり。今をかぎりと思へば、輪廻生死の道の古里を、此たび長くへだてぬる心地して、うき別れ給ひけり。少將は書寫山へのぼり給ふ、帥殿は都へ上り給ひ、御門に出家のいとまを頻に乞ひ給へども叶はず。宇佐の宮の勅使ゆゑなくと

めかぶ―海藻

くる罪なければ地獄にもおちず、六道にたゞよひぬ、朝夕守るかひもなく、何の咎により對の屋をば明石の海へは沈め給ふぞ、あら本意なやうらめしやとの給ひて、さめ〴〵とぞ泣き給ひける。

かやうに名のり給へども、北の御方對の屋の御事をば深くなげく色をみせて、御孝養さまざましたまへば、さる事と推したるものもなし。然れども邪氣かくあらはれて、後よく成り給ひけり。扨も明石の蜑は姫君の御ぞ、うら山吹の十二うはがさね、御袴など紫竹の竿にかけおきて、朝な夕なかしづき奉る。をつとの蜑はつりをしに出づれば、女のあまおとぎを申し、又男おとぎをして女青海苔めかぶ取りに行くもあり、たがひに影の如くそひ奉りけり。明けぬくれぬと過ぎゆき給ふ。扨師殿は三とせにも成りぬれば、姫君の第三年をも明石の浦にてとて、急ぎのぼらせたまひけり。尾上高砂の沖を通らせ給へば、海中に大きなる旗ぞ見えける。あれは何ばたぞと問ひ給へば、四位の少將近き里の上人たちを請じて、莊嚴道場をこしらへて、八軸の法華經をかゝれけるみせばたとぞ申しける。對の屋このへんにて沈ませ給ふらんとて、海の中へ御法樂し給はりける。師殿さてはとて恥かしながら、御對面ありければ、少將みるより涙はら〴〵とながし、戀

よりまし—物怪をよせ移す人

る人にてましますぞ、かゝる岩の上に只一人おはしまし候ふぞと申せば、是は都の者なるが、通舟より捨てられたりとの給へば、さも候ふかや御痛はしくこそ候へ、さらば我等が住所へ入り給へと申しければ、嬉しくこそ候へけれとの給へば、舟にいだき乗せ奉り、我在所へ漕ぎ戻り、舟よりかきおひ奉り、おのれが岩屋は住みあらしたるとて、うへの岩屋をしつらひ置きまゐらせけり。

さる程に帥殿太宰府につかせ給ひて、北の方の風のこゝちとて、邪氣ありて物くるはしくおはしませば、さるべき行者を請じて祈らせ給へば、よりましにつかずして、北の御方みづから几帳のうちよりとび出で、行者の前へおはしければ、行者數珠おしもみ、邪氣は物語にぞ來るらん、何ものぞ、名のれ〳〵と責めければ、北の御かた恥かしげにて、衣引きかづき、さめ〴〵と泣き給ふ。やゝしばらくありてかくぞのたまひける。

われはこれ都の者なり、鎮西の行者にみゆべからず、されどもあまりの苦しさにたゞ今參りたり、大田の御門の二の宮なり、對のやの母にて候ふ、恩愛の道こそ悲しけれ、對の屋十歳にて無常の風にさそはれて、はかなくなりて候ふ、嫗をすておき冥途の旅に赴く事のかなしさよと、思ひし妄念に菩提の道に入らずして、孝養すれども往生せず、又つ

墨染の袈裟を肌にかけさせ給ひて、御念佛ありけり。扨有るべきにあらねば、泣く〳〵筑紫へ下り給ふ。姫君は岩の上に五日まで潮にうたれておはしける。片時も生きておはしますまじき事なれども、佛の御はからひとぞ覺えけり。たゞ夢の心地にておぼしけるは、いかなる罪のむくいにて、かゝる憂き目を見る事ぞ、なか〳〵佐藤左衛門に海へ沈められなば、今の思ひはあるまじきにと、いつまでものを思ふべき、此度みちくる潮に引かれて海へ入りなんとおぼすに、來世にまします母宮の御聲虛空にありて、海へ入りなんとな思召しそ、今しばし待ちたまへ、よるひる我たち添ひて守るなりとの給へば、扨は母宮にてましますかや、何とて命をとり給はで、いかさせて物を思はせ給ふぞ、とくとく迎へとり給へと、祈誓してこそおはしけれ。さる程に明石の蜑潮の滿ち干るを窺ひて、あさりしに出でけるが、岩の上を見ければ、繪にかける如くなる上﨟見え給ふ。蜑思ふやう、こはいかに只人にはあらじ、天人の影向か、龍女の遊び給ふか、かゝる人をばいまだ見ずと思うて、舟さしとゞめつく〴〵とまぼりけり。姫君は又かゝる者をば見習はせ給はねば、人にてはあらじ、我を失はんとてぞ來りたるらんと、恐しくてよくよく見給へば、人なり。姫君さめ〴〵と泣き給へば、おま舟を漕ぎよせ申すやう、いかな

をしくは候へども、心づよくもてなし、涙とともに漕ぎてぞ歸りける。姫君は岩ほの上に捨てられて、天にあふぎ地にふし、流涕こがれ給ひけり。はるかの波をへだてて、御聲ばかり聞えて、佐藤左衞門も泣く／＼舟さしもどりけり。さるほどに明石には、上臈海へ入り給ひぬとて騷ぎければ、帥殿おどろき、急ぎ姫君の御舟に乘りうつり、やかたの內を見給へば、たゞ今までおはしけるとおぼえて、ふすまも床もあたゝかなり。急ぎ女房達を起し、姫君はいかに、まづともしびをかき立てよと有りたれば、めのと、女房達、皆々あわてまどひ、やう／＼紙燭一つもち來つて、彼方此方とたづねけれども見え給はねば、一度にわつと泣きあげければ、その聲何にたとへんかたもなし。播磨の守綱を百ちやうおろし、そのあたりを引かせけれども死骸もなし。帥殿の給ひけるは、少將淀まで來てとゞめしを聞かずしてつれて下りたれば、もし盜み取りてや上るらんとて、急ぎ都へ人を上せらる。少將かくときゝて、流涕こがれ給ひて、緑の髮をきり、御年二十五と申すに遁世修行に出で給ふ。隨身侍雜色、牛飼に至る迄、皆修行にぞ出でにけり。明石には、めのと初め皆々もとゞり切り、思ひ／＼の寺々に上りけり。帥殿も御さまかへたく思召したれども、宇佐の宮の御勅使にたち給ひて、心にまかせ給はねば力なく、

腹々に—原本「はらはらに」とあり、今改む

きこふる—原本のまゝ
時雨る—傍訓原本のまゝ

觀じ、思ひけるは、何しにをのことは生れけん、をのこの身ならずば、かゝる憂き目はよも見じと淺ましくこそ覺えけれ。われも腹々に子を六人持ちたるが、一人見えぬだに心もとなく思ひつるに、まして此父只一人もち給へる姫君、御姿心ばへ優にやさしくましませば、さこそは歎かせ給ふべきと思ひつゞけて申しけるは、いかに姫君きこしめせ、北のかたさまの仰せはそむきがたく候ふ、これまで具し申して候へども、あまりに御いたはしくて、海へも入れ奉らず候ふ、ともかくもみづから御はからひ候へと申せば、さやうに申され候ふ事嬉しくはさふらへども、自害は罪深き事なれば、とにもかくにも汝が手にかゝらではと思ふなり、夜もあけ人もしらば、繼母御前の御名もたちなんぞ、早とく〳〵との給へば、まことに上臈の御心ほどいかめしき物はなし、下臈ならば、叶はぬまでも助けよとこそ云ふべけれ、かやうの仰せられ事こそまことに有難き御わざなれ。きこふる明石のくまなき月も、泪にくれて定かならず、松に時雨る風の音、汀の波にあらそひて、琴のしらべに異ならず。とかく漕がれゆくほどに、淡路の繪島が磯へぞゆられ行く。佐藤左衞門海の面を見わたせば、大なる岩はあり、うれしく思ひて、此岩穴のうへにいだきあげ奉り、是にてともかくもみづからにて御はからひ候へ、御なごり

十惡 五逆ー殺生、偸盗、邪淫、妄語綺語、惡口、兩舌、貪欲、瞋恚、愚痴を十惡とし、殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出佛身血を五逆とす

湯をあびせ給ひしかば、そのくたびれによりて、けふは御經よみはてず、讀みはてなば沈めよとおほせければ、佐藤左衛門ふところより御經數珠とり出だし奉る。姫君うれしくおぼしめし、扨御經三巻あそばして、一巻の御經は此世にまします父、現世安穩後生善所のため、たとひ其身は奈落に沈み給ふとも、此御經の功力にてわれ〳〵一つはちすの臺に迎へとり給へ、故なきことに繼母御前に、只今海へしづめられ候ふ、此世にましまさば、かゝる憂きめは見候はじものをと、戀しく思ふばかりなり、今一巻の御經は、十惡五逆の罪人をも、上品蓮臺にやどし給へ、たとひ此身は千尋の底に沈むとも、御手のうへあなうらをむすばせ給ひて、諸共に一佛淨土の縁となし給へとて伏しをがみ、さての給ひけるは、何事も思ひおく事はなけれども、今一度父御前とめのとを見たきばかりなり、見んといふとも見せじ、よしそれとても彌陀の來迎にあづからば、いとをしき人々にそひ奉るべしと、つい立ちあがり袴のそば高くとり、裝束引きつくろひ、きぬの袖引きむすびて肩にかけ、舟ばたに立ちより念佛百ぺんばかり申して、今や〳〵と待ち給ふ。思召したる體見るに涙もとゞまらず、貞家つく〴〵と見奉りて、よそながら聞きしは物の數ならず、雪のはだへ隈もなし。あまりの御いたはしさに海へも入れ奉らず、わが身を

やわらーやをらに同じ

三月十八日の夜の事なるに、母宮の御命日とて、來迎の阿彌陀の繪像一幅かけ奉り、燒香の香薫じて、姫君は御本尊の御前に、うら山吹の十三萠黄のうちき、濃き紅の袴めして、御手には金泥の法華經、皆水晶の珠數とりそへもたせ給へりとおぼしきが、御湯にくたびれさせ給ひて、机によりかゝりねぶりましますが、御經數珠机におちてぞありけり。佐藤左衞門やわらさしより、御經珠數まづとりて袖にさし入れ、ともしび打消しかきいだき奉る。めのとかとおぼしめし、御手をさしのべていだかれ給ふ、つや〳〵御目もあかさせ給はず。佐藤左衞門おのれが舟に乘りうつり、はるかの沖へ漕ぎ出づる。扨このまま海に入れ奉るべきか、いや〳〵おこし奉り臨終をすゝめ申さんと思ひ、おこし奉りければ、姫君おどろかせ給ひて、あたりを見給へば、召したる御舟にはあらで、いやしき男一人ゐたり。是は夢かやとおぼしめし、いかなる事ぞとの給へば、これは繼母御前の御かたに、佐藤左衞門と申すものにて候ふが、いかなる御咎やらん海へしづめよと仰せ候ふ、御臨終の念佛申させ給へと申せば、姫君きこしめし、我なにの咎ありともおぼえず、さりながら汝こゝろありて臨終を知らする事のうれしさよ、とてもの情にしばしのいとまを得させよ、母上におくれ奉りて後、毎日御經よみ奉るに、まゝ母御前けしからず

みうら―たからの衍なるべし

せがい―舟の左右の端

そ本意なけれ、末の世こそ思ひやらるれ、何ともして對の屋をぬすみ出し、海へしづめよとありければ、やすき御事なりと申す。北の方此事かなひてあらば、みづから母上より賜はりたるみうらを汝が心にまかせよとの給へば、貞家それまでも候ふまじ、さらば夕さり盜みいだし參らせ候ふべし、御心得渡らせ給へと申せば、なのめならず悅び給ふ。扨播磨の守餘りの御もてなしに、けつかうに御湯殿こしらへて、對の屋を入れ奉る。繼母よき事と思ひ、われも御湯殿へ參らんとて、いろ〳〵の肴に酒そへてもたせ參り給ひて、めのと、かいしやく、其外の女房達に至るまで、よく〳〵酒をしひ給ひしかば、皆々申しけるは、繼母にて渡らせ給へども、父大事におぼしめす姫君なるにより、かやうにかいしやく遊ばす、かゝる繼母世にあらじと思ひけるこそはかなけれ。扨皆々は前後もしらず醉ひければ、繼母の給ふは、人々は酒にゑひ給ふ、みづから御かいしやくし奉らんとて入れ給ふ。さてあがらんとし給へば、今ちとと引きとめて、消え入るほどあつき湯をあびせ給へば、泣く〳〵やう〳〵あがらせ給ふ。七日にもなりぬれば、あかつき御舟いだすべしとて、各々舟にめしぬ。去程に夜更けぬれば、佐藤左衛門は小舟にのり、對の屋の御舟に漕ぎつき乘りうつり、おのれが舟をせがいにつなぎて、やかたの内を見れば、

藻鹽たれつゝ—「わくらはに問ふ人あらば須磨の浦のもしほたれつゝわぶと答へん」

くわんざつ—未詳

そぶく—背く

羅錦繡を數を知らずたびにけり。西の宮なんぐうの沖をすぎて筑紫へ通り給ふが、帥殿は播磨の國司にておはしければ、播磨の守明石にて御まうけをかまへもてなし奉る。七日の逗留と披露す。聞ゆる明石の浦なれば、色ある袖にぞやどりける。光る源氏の大將の須磨より明石の浦づたひ、よせくる波をながむれば、くだけて月ぞやどりけると、ながめしたくなは立つ煙、春霞にぞ似たりける。松吹く風波の音厭ふ嵐の苫やかた、汀にたつえいや聲、あまの釣舟おもしろく、かの行平の中納言藻鹽たれつゝと詠じしも、蜑のたく藻の夕けぶり、さながら薄墨の繪にぞ似たりけり。當國書寫の山、ひろさはより淸げなる遊君ども參りたり。對の屋の舟をもてなせとありければ、彼の御舟にぞあつまりける。くわんざつの袖をひるがへし、ばんみん曲をもよほし、希代のあそびなり。其時北の方めのとの佐藤左衛門を召しての給ふやう、我心に思ふ事あり、叶へんと思はゞ知らせんとありければ、貞家かしこまりて申す樣、千騎萬騎のかたきの中、又いかなる磐石を碎きわりて入る路なりとも、仰せをいかでそぶくべきと申しければ、北の方うちゑみ給ひて、此事ゆめ〱人に知らすな、心のうらみといふは、我も人も只ひとりづゝもちたる姫ぞかし、我姫をば親子とも思はぬ有樣にて、たゞ對の屋をのみもてなし給ふこ

き右大臣の一人子にて御座候へば、おろか候ふまじ、御同心あれかしと申せば、さらばとて領承申させ給ひけり。さればいかなる不思議の事にや、對の屋十三の御年、父中納言筑紫の帥に成り給ふが、太宰府の旅に赴き給ふが、北の方親子、たいのやの姫君をも具し給ふべきよし聞えければ、四位の少將めのとして中納言殿への給ふは、鎭西までは波の上おぼつかなく侍れば、對の屋をば都に留め給へかし、とても御約束の事にて候へばと申されければ、中納言仰せられけるは、太宰府へ下るべきにはあらねども、對の屋母上におくれて後、いつとなく露おもげなる有樣をいつかは晴るべき、しのびかねたる袖の上、ほしあへぬさまのかなしみを、いつ慰むべしともおぼえねば、引具して浦々島々をも見せんため、北の御方親子をも、對の屋のとぎに具するなれば、對の屋とゞめん事は、ゆめ／＼叶ふまじきよしをのたまふ。少將力およばず。扨都を立ちて淀へつき給へば少將も淀まで下りて、さま／＼とゞめ申されけれども叶はずして、既にともづな解きて御舟どもいだしければ、少將見送り給ひて、泣く／＼都へ歸られけり。さて帥殿下り給へば、江口神崎の遊君ども參りをり、帥殿御らんじて我を思はゞ、對の屋の舟をもてなせとありければ、遊君ども對の屋の御舟に參り、今樣おもしろく歌ひすましければ、綾

にかけて、常は御本尊の御前に參り、無常を觀じ、あはれみをなし給ふ。されば文珠の化現と皆人申し合ひにけり。さるあひだ此姫君、十の御年三月十五日の曉より、母宮風の心地とて惱み給ふが、次第におもりて十八日の曉終にはかなく成り給ふ。御年二十八、惜しかるべき御よはひなり。中納言同じ道にと悲み給へども、姫君の御ゆくへ覺束なくて力及ばず。生死無常のならひ、鳥邊野のほとりに送り、御跡のいとなみ樣々とり行ひ給ふ。御かたみには姫君を明暮まほり給ふ。繫がぬ月日なれば、程なく一周忌、第三年も過ぎにけり。さてあるべき事ならずとて、御一門の人々すゝめ給ひて、はじめて北の方を迎へさせ給ふが、姫君に一つ姉なる御娘をもち給へり。我姫君、人の姫君もへだてなくおろかなるまじとて、迎へ給ひけり。扨北の方めやすくもてなし給へば、中納言世にうれしくぞ思しける。北の方入らせ給ふ日より、西の對をしつらひ、玉の如く磨きたて、宮腹の姫君をすゑおき給ひけり。それより對の屋の姫君とは申しけれ。明暮母宮の御事のみ思召して、御本尊の御前にばかりおはします。さて間近くおはします右大臣と申す人のひとり子四位の少將と申す人、かの對の屋の御事を聞き給ひて、めのとを語らひ中納言殿に申し給へば、いかゞあるべきと思召して申しけるは、何か苦しう候ふべ

西の對—正殿に對して西にある屋

いはやのさうし 上

そも〳〵清和天皇の御時、三條堀河に中納言有末(ありすゑ)の卿と申す人おはしけるが、家富み榮え、何事につけても乏(とも)しき事ましまさねば、よろづ御心に叶はぬといふ事なし。しかるに大田の御門(みかど)の宮白河の姫君と申すを見給ひしより、御心あくがれさま〴〵御心をつくさせ給へども、靡かせ給ふけしきもおはしまさで、明かし暮らし給ふ所に、御志の色深くありしかば、男女(なんによ)のならひのわりなさは、浦吹く風と終に靡かせ給ひけり。たびかさなれば人知りて、誠に雲の上人もてなしかしづき奉る。契くちせぬ習ひにて、宮懐姙し給ひぬ。月日かさなれば程なく御產平安せさせ給ふ。あたりも輝くばかりなる姫君にてぞおはしける。

中納言世に嬉しく思召し、いつきかしづき給ふこと限なし。御年のゆくに隨ひて、いよいよねびまさり、又琵琶、琴などをも、十六歳よりうちにて其源を究(きは)め、要文(えうもん)、法文(ほふもん)心

いはやのさうし

結句所領を賜はつて、一門共に引具して所知入りするぞめでたき。

やまう―病

月のたい―月の臺か

なかさ―中座か

とて、常座の恥を與ゆるこれ一つ、又駿河の國吹上濱にて不慮のやまう惱みしを左右なく見棄てて下る事、何よりもつて恨みなり、吉次いかにと仰せける。秀衡此由承り、されば夢か現か、昨日までも今日までも、只一人下らせ給ふかとこそ思ひしに、あの賤しき吉次が供をして、あらぬ風情にて下らせ給ふかよ、其義ならば人手にかけて何かせん、討つて君へ參らせんとて、薙刀の鞘はづし吉次にとつてかゝれは、露の命は危げにぞ見えにける。元より御曹子は早業の事なれば、秀衡がうつ薙刀を中有にて奪ひ取り、物をきけ秀衡、恩の得て恩を知らざるは鬼畜木石に譬へたり、港なうして船つかず、橋なくて渡りなし、それをいかにと申すに、我ら鞍馬の寺よりはるゞこれまで下る事、ひとへに吉次が故ぞかし、思ひとゞまれ秀衡殿とぞ仰せける。秀衡承つて進むに及ばず、薙刀鞘へぞ納めける。御曹子はこれは一旦の恨みまで、それゞ吉次に盃いだせと仰せける。承ると申し、月のたいに日の盃なかさにいだせば、御曹子御盃取上げさせ給ひて、吉次に下さるゝ。吉次餘りの有難さに、御盃賜はつて三度までこそ汲んだりけれ。御曹子は墨すり流し筆にそめ、薄樣をとつて一重ね、一のへいの傍に八百町の所をば吉次に下さるゝと、御判をあそばし賜はりける。吉次御判を戴き、命を助かるのみならず、

さんくう—未詳
十四五ばかりな—十四五ばかりなるの誤脫か
ざふだ—雜馱にて荷馬の意
そくけさする—そゝげさするの衍か

さんくうを參らせて候ふが、奧よりも年の齡は十四五ばかりな少人一人いで、御身はいづくの者ぞと問うてある程に、其時某申しけるは、これは佐藤秀衡殿の御代官金賣吉次とはわが事也と申しければ、都三條室町絲屋が小路のこめやが息子にて候ふが、父母の勘當を得て、いづくの方へも行かん方の候はぬが、あはれ連れて下りてたび給へ、其義ならば道の間の御奉公をば隨分申さんと申されける程に、誰やの人とも知らずして、名をばきやうとうだと付け、太刀をかつがせ、馬追となして、これまで連れて下りて候ふが、今聞けば源氏の御大將牛若樣と聞いてあり、牛若樣の御手にかゝり討たれん事は治定なり、空しくなるならば死出の山にて待ち申さん、名殘をしの母上樣や、いとま申してさらばとて、御所をさいてぞ參りける。遙かの末座に畏まり、上座をきつと見てあれば、案の如く鏡の宿にてきやうとうだとなしたる君にてあり。はつと思ひて物をもえ言はで、赤面してこそ居たりけれ。御曹子は御覽じて、いかにあれなるは吉次信高か。さん候ふ。いかに吉次、只人には情あれ、情は人のためならず、まはれば我身に報ふぞかし、それをいかんと申すに、近江の國鏡の宿にて四十二匹のざふだ共に水をそくけさするとて、鞭ふり上げしこれ一つ、又美濃の國青墓の宿、長者の前にて酌とり損じたる

宿―しゆくの傍訓原本に從ふ恐らくば非

とも催して、驕る平家を平げ、源氏の御代となしてまゐらすべし、若君樣とぞ申しける。それはともあれかくもあれ、まづ風呂を結構に飾つて、旅の御やつれを直し申せや人々と仰せける。御曹子は聞召し、なのめならずに思召し、御風呂へ入らせ給ふ。昨日までも今日までも、只一人すご〳〵と下らせ給ふとはいへども、風呂の御供は三千餘騎とぞ聞えける。秀衡の總領錦戶、次男泰衡、三男泉の三郎を初めとして、五人の子どもは弓手馬手より御垢にまゐりける。かくて風呂より上らせ給へば、山海の珍物、國土の菓子を調へもてなし奉る。酒もなかばと見えし時、よき女房たち十二人すぐりて中の出居へ出し、順の盃めぐらし、逆の盃飛ばせ、七日七夜の御遊び、申すもなか〳〵おろかなり。奥方の者共これを聞き、鞍馬におはします源氏の御大將牛若君の下らせ給ふと聞いてあり、いざや行きて拜まん、尤も然るべしとて、日々に出仕は隙もなし。御曹子は御覽じて、軍奉行のてるいを召して、かほど多き人中に何とて吉次は參らぬぞ、それ〳〵吉次が宿へ使を立てよと仰せける。承ると申して、吉次が宿へ使を立てられける。吉次大きに驚き、胸打騷ぎ母の御前に參りつゝ、いかに申さん母上さま、某は秀衡殿の御代官として、年に一度づゝ都へ上り候ふが、東への往來の道の祈禱と存じ、鞍馬へ參りかねの

白河二所の關―旗宿村の首尾に二ケ所に關門を設けしよりいふなるべし

百姓―傍訓原本に從ふ

とうくわう―鞍馬の別當東光房

せ候はんものを、御代に渡らせ給はぬとて、遙々の此道を只一人下らせ給ふ事こそ何よりもつて口惜しけれ、秀衡夢にも存じ申さば、二三千餘騎を催して白河二所の關までも御迎ひに參らんものを、夢にも御下向を存じ申さず、何よりもつてくちをしけれ、御許させ給へとて、涙を流して申しければ、御曹子聞召し、いや苦しうもなきぞとよ、われ遙遙これまで下る事別の子細にても候はず、我ら二歳にて父に後れ母の懐に抱かれ、大和の國宇陀の郡龍門の牧へ遁げ上り、土民百姓等に交りしより後は、敵の中へ母諸共に生捕られ、七歳まで甲斐なき母に育てられ〔七歳の年鞍馬へ上り、とうくわうを師と頼み、生年十五まで學問致して候ふが、都に平家の誇るを見れば、手にとる筆も身にしまず、學問心にしまず、餘りにくちをしさのまゝに、鞍馬の寺を忍びいで、遙々これまで尋ね下りて候ふぞや、萬事は御身を頼み申す也、せめて十萬餘騎を催し、都へ攻め上り驕る平家を平げて、源氏の代となしてたべ秀衡殿とぞ仰せける。承りて秀衡は、をゝ有難の御諚かな、御代が御代にてましまさば、御目にかゝりたきと申すとも、いかでか御目にかゝるべき、御代にてましまさねばこそ、我に從はせ給ひて頼まんなんどとの御事は、一入有難う存ずる也、御心安く思召せ、秀衡かくて候へば十萬餘騎はさておきぬ、百萬騎をなり

へい―閉伊
まふしさは―未詳
えびすがしやう―夷が城か
御ゆう―御恩又は御ゆゑの誤か

大薙刀にすそ―誤脱あるにや通ぜず

め、越後七郡、佐渡三郡、出羽は十二郡、奥州五十四郡、合せて七十六郡の所下さるゝ、源の義朝判とあそばして、某に下されける。御判を戴き急ぎ此所に下りつき、へいまふしさはえびすがしやうに至るまで、百萬騎をたなびき所知入りして、今において土御門の御所樣と仰がれ申すも、ひとへに此君の御ゆうぞかし、はやく〳〵參りて拜み申せ、あさのうとぞ仰せける。さる程にあさのうは時の面目施して急ぎ座敷へかへりつゝ、三代承恩の君と聞くよりも、頭を地につけ三度までこそ拜みけれ。

高く物をば申さず呟き聲にて、相構へてあやまちばしすなとぞふれにける。其後秀衡殿は御對面のそのために風呂よりあがらせ給ひ、淸げなる者を七八人つれ、大薙刀にすそなかの出居へゆらり〳〵と出でけるが、御曹子を一目見るよりも、薙刀かしこへからりと捨て、椽より下へ飛んでおり、頭を地につけ畏まる。人々は此由を見るよりも飛びおり飛びおり、或は椽より下へまろび落ち、頭を下へとひしめきける。御曹子は御覽じて、いかにあれなるは秀衡禪門か、これへ〳〵と仰せけれども、暫く恐れて參らず。重ねていかにと仰せければ、御座間近くに畏まり、淚を流し頭を地につけ、三度拜み、こは淺ましき次第かな、御代が御代にてましまさば、輿車に召され御供には大名小名つきまるら

冑千はね―庭訓往來にも甲各一刎とあり
眞羽―鷲の羽をいふ
千ほへ―千ほんの衍か
こふくの綿―こふくは御福にて祝ひていふにや

に、これまで參りて候ふとぞ申しける。

さる程に秀衡殿はつたと横手を打ち、これは夢かや現かや、それこそまがひなきわがためには三代承恩の主君にてましますぞや、いかにやあさのう、物を語つて聞かせん、よく〳〵それにて承れ、某一とせ奥州五十四郡のみ年貢を供へんために都へ上りて候ふ也、年號を申せば平治元年正月一日の事なるに、義朝めでたき若君一人まうけさせ給ふ、義朝よりの御諚には、奥秀衡は果報めでたき者なれば、此若を汝に取らするぞ、よくば主とも仰ぐべし、あしくば子とも思へとて、鎌田兵衛を御使として七度の御使を下されける、某隨分辭退申せしかども、重ねて御諚の下るゆゑ一間所へ立寄りて、指を折り數ふれば、其年は丁の丑の年の丑の日の丑の刻、則ち丑の方へ向はせ給ひて、御産ならせ給ひし君なれば、御名を牛若君とつけんとて、さてこそ牛若君とは申すなり、かくて若君への御祝言に名馬を揃へて千匹、鞍を千口、鎧千領、冑千はね、箙刀千枝、太刀千振、刀千腰、槍千筋、弓千張、眞羽の矢すぐつて一萬筋、靫千ほへ、白綾百反、巻絹千匹、沙金千兩、料足千貫、白銀千枚、こふくの綿八千は、かやうの祝をまゐらする。義朝この由御覧じて、御喜びは限なし、いで〳〵秀衡に知行を取らせんとて墨すり流し筆に染

十二ほかけたる—未詳

ほゝ眉—ぼうぼう眉毛

歯さきとつて—とつてはそつてか

たびあまかは—旅雨皮にて油紙をいふ

ども、ちつとも動顚し給はず、知らざる由にておはします。

かゝりける所にこゝにあさのうとて生年十九になりけるが、折節其日の奉行なり。何を騒ぐぞ、鎭まり給へ方々たち、こゝに思ひ當りたる事のあり、今は都は平家にて源氏の御代とては一つもなし、自然都におはします牛若君なんど下らせ給ふ事もあるらん、慌てて事を仕損ずな、まづこれをば秀衡樣へ伺ひ申してのち、湯とも水ともなさん事はいと易しとて、奥へつつと入り、秀衡樣はと問へば、御風呂へとぞ答へける。あさのうはやがて御風呂へまゐり、いかに申しあげ候ふ、只今不思議なる事の候ふ、年の程十四五ばかりの少人十二ほかけたる編笠に、物見の窓を明けさせて深々と召したりけるが、ほゝ眉に薄化粧、歯さきとつて鐵漿黑なり、およそ此人を見申すに百萬騎が大將と申すとも是にはいかで勝るべき、召したる衣裝は十八五色の絲をもつて七所に縫物縫うたる直垂を折目氣高く召したりける、黃金作りの御佩刀をたびあまかはにて包ませ、草鞋をはきながら大勢の大名小名の中を憚らず通らせ給ひて、とつひの御座に直らせ給ひ候ふを、皆この由を見、御座より引きおろせ、打てはれなんどとひしめきけれども、ちつとも動顚し給はずおはします、今日の御座敷の御番はそれがしにて候ふ程に、伺ひ申さんため

てるい―義經記に照日太郎たかはるとある人なるべし
かららうと―唐櫃
かつた―刈田
にた云々―未詳
とつひ―未詳
むら雲やつて―未詳
きんじよ―近所

れば、てるい殿が奉行にて八百八十八つのかららうとよりも物具共を取出だし、名つがひする所もあり。其次を見てあれば、番場、醒井、かつた、柴田、にたつてかさいではの御屋形を初めとして、以上大名達の其數は七千餘騎のつもりなり。御曹子は御覽じて、あつぱれ大果報なる牛若かな、かゝる東のはてまでもよき郎等をもちたるよな、當時都にときめき給ふ平家の清盛もかほどゆゝしき事はなし。さても其次を見給へば、四十二坪の座敷あり、中にも秀衡殿のいつもの座敷と打見えて、紫檀で床を張らせつゝ、疊にとりて何々ぞ、繧繝緣に高麗緣、錦の緣、綾の緣、紫緣に虎の皮に豹の皮、華氈、毛氈、木綿氈、とつひの御座を初めとして、段々にむら雲やつて、さつ〳〵とまはり敷きにぞ敷かれける。うしろには白銀のよりかゝり、ぶんどう添へて置かれたり。御曹子は御覽じて、あれこそ牛若直るべき座敷よと思召し、大勢の番衆共が心をひき見んそのために、草鞋をはきながら編笠を召し、大勢の其中を憚らずすぐにつゝと通らせ給ひて、とつひの御座にむずと直らせ給ひ、遙かの末座をはつたと睨まれければ、きんじよ外樣の人々がこれを見て、あれは天から降りたるか、又は地よりも湧きたるか、たとひ天よりも降らうとも、たとひ地より湧かうとも、急ぎ白洲に引きおろせ打擲せよ、打て搦めよとひしめきけれ

その門を見て、あれが入口には玉の反橋五十四間にかけさせて瑠璃の擬寶珠磨きたて、その橋のしたには弘誓の舟を繋がせける。天より桂男が天降り、法華經八巻帆にかけ黄金の棹をさゝせつゝ、西方へきりゝ〳〵と漕がせたるは、法性眞如の極樂世界と申すとも、これにはいかで勝るべき。其次を見てあれば、番の者三千餘騎ぞすゑられける。御曹子は御覽じて、是をすぐに通るものならば、彼奴めらが眼に霧の印を結びてかけ候はでは通る事なるまじきと思召し、彼の者どもに霧の印をかけ、我身には小鷹をめされ中有へ飛んで舞ひあがり、高き築土ひらり〳〵と飛んで越え、屋形をさいてぞ入られける。さて其次を見てあれば、釣鐘が七十五、調子がねが七十五あり、半鐘細工が百餘人、冑細工が百餘人。其次を見てあれば、秀衡殿の若黨共と打見えて二三百人集りて、蟇目くつたり箭矧いだり、碁將棊雙六に心を入れたる所もあり。又傍を見てあれば、相撲を習ふ所もあり。その次を見てあれば、年寄共とおぼしきが集りて、弓矢の評定とり〴〵なり。その次を見てあれば、十四五なる兒達が四五十人集りて、歌や草子に心を入るゝ所もあり。その次を見てあれば、上下を著たる者共が四五百人集りたるを、あれは何者ぞと人に問へば、あれこそ秋田、坂田の者共が秀衡樣への訴訟の者よとぞ語りける。其次を見てあ

言ひごとかな、辱くも秀衡殿と申すは田舍においてさすが上こす人もなければ、兩國に誰か爭ふべきぞ、土御門の御所樣とてあだに申さぬに、旅のわつぱが分として秀衡がなんどと言ひける事こそ推參なれ、こゝは一つ咎めばやと思ひしが、待てしばし我心、今は平家の世にて源氏の御代とては一つもなし、自然都におはします源氏の大將三代承恩の御主牛若君なんど下らせ給ふ事もあるらん、是を咎むるものならば、我等が命はあるまじき、只教へ申さんとて、いとこまぐ〵とぞ申しける。

秀衡殿を御尋ねある、秀衡殿はあの壕の中に見えたる、壕のうち屋形の數は六萬九千三百八十四あり、御所樣をば八町四方に建てさせ、四方に門をぞすゑられける、東の門は御成の門、西の門は上臈達の御いである門、北の門はいやしき者が出入る門、南の門は朝夕大名高家の御出仕の門、乾にたつたる門はあれこそ都におはします源氏の大將三代承恩主君牛若君なんどの下らせ給ふ事もあり、その殿入れ奉らんとて、常に人の出入る事なき門なれ、則ち名をばあけずの門とも申す也、かのあけずの門の口に、玉の反橋五十四間に掛けさせたり、いとま申してさらばとて通りける。御曹子はなのめならずに思召し、雲ゐに屆くばかりにて急がせ給ひける程に、佐藤の館にぞつき給ふ。彼のあけず

秀衡入

さても御曹子は駿河の國吹上の濱を立出でて、あづまをさしてぞ下られける。通らせ給ふはどこ〳〵ぞ、にげ松、おい松、さがり松、いその松原打過ぎて、武藏の國へぞつかれける。御曹子は一首の歌をあそばしける。

武藏野は行けども秋のはてもなしいかなる風の末に吹くらん

とあそばし、下らせ給ひける間、あしがら山を左手(ゆんで)に見て日光山を右手(めて)に見て、花は咲かねど櫻川、身には著ねども衣川(ころもがは)をも打過ぎて、都を出でて昨日今日とは思へども、七十五日と申すには、遙かの奧に聞えたる奧州平泉磐井(いはゐ)の郡にぞつかせ給ふ。かゝりける所に二十(はたち)ばかりの男隼鷹(はいたか)一もと据ゑさせて通りける。御曹子は御覽じてなのめならずに喜び給ひ、左手(ゆんで)の袂を控へつゝ、のういかに、みづからは都の者にて候ふが、遙かの奧に聞えたる秀衡が館(たち)を教へてたべやとの給へば、此者聞いて腹をたて、推參なるわつぱが

にげ松云々—盛衰記に八松原といへる所なるべし

花は咲かねど櫻川身には著ねども衣川—此句十二段草子にもあり

わつぱ—童

秀衡入

扨も俵藤太秀郷は宣旨を頂戴し、一門を引具して、下野に下りつゝ、本領に安堵し給ふ。其繁昌は月日に増りて、門外に駒の立所もなく、堂上に酒宴の暇もなし。國中の萬民忠ある者をば、望まざるに過分の恩賞を當て行はる。罪ある者をば、速かに是を懲らさしめ、賞罰正しければ、人の懐き從ふ事際限もなかりけり。其上子孫もゆゝしくて、後將軍に任ず。次に小山の二郎、宇都宮の三郎、足利の四郎、結城の五郎なんどとて、男子數十人に及べり、嚴しかりし榮華なり。

抑も俵藤太秀郷の將門を打亡ぼし、東國に威勢を施し給ふ事、偏へに龍神の擁護し給ふなるべし。それを如何にと申すに、龍神は女人に變化し給ふなれば、彼の小宰相の御局、又時雨と申す女房、いさしら雲の餘所にして、秀郷大切に可愛み、大事を語り聞かせて、高名を極めさせし事、能く〳〵思へば、彼の女の心に龍神入り代り給ふか、覺束なし。其上三井寺の御本尊彌勒薩埵の御恵み深き故、子孫の繁昌相續す。日本六十餘州に弓矢を取りて、藤原と名告る家、恐らくば秀郷の後胤たらぬは無かるべし、嚴しかりし例也。

抽んでらるゝには一抽んでらる、武士にはの誤なるべし

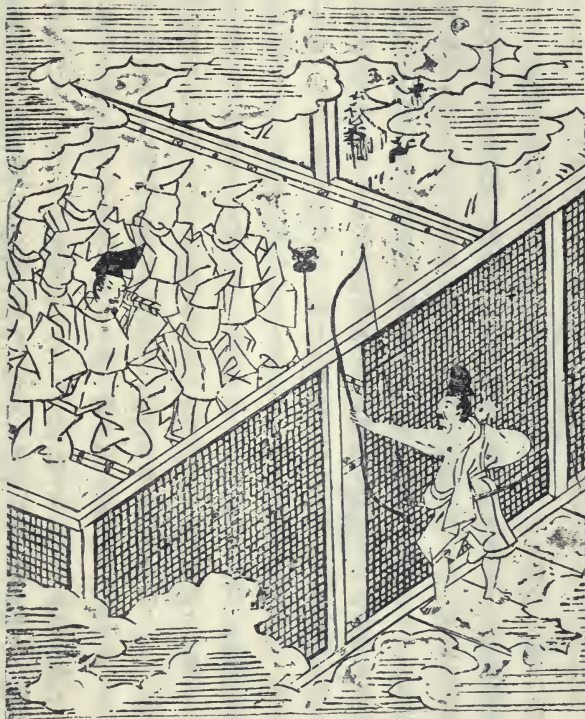
も八坂の淨藏貴所は今度將門が攻め上るといふ事は、全くもつて虛言なるべし、若しさもなくば、法驗徒事なるべし、但し彼の首の上り候ふにやと勅答申されけるが、果して四月廿五日、貞盛秀鄕の兩人、將門の首を持ちて上洛せられけり。是によつて君も御物思ひを安められ、臣も悅び勇みつゝ、一天四海の人民安堵の思ひをなしたりけり。則ち檢非違使を遣はされ、將門以下の首受取らせて、大路を渡し、左の獄門の木に懸けさせけるに、將門一人の首は、未だ眼も枯れず、色も變ぜず、時々は切齒をなして怒る景色也、恐しといふばかりなり。是を或從者の者が見て、

將門はこめかみよりも射られけりたはら藤太がはかりごとにて

と詠みければ、此首呵々と笑ひて、其後色も變じ、眼も閉がりけるとかや。

去程に內裏には、公卿、殿上人參內し給ひて、今度兇徒退治につき、恩賞を行はる。僧衆には尊意僧正、僧都淨藏貴所なり。是皆武士の賞に抽んでらるゝには、平の貞盛無位より正五位上に任じて將軍に任ずべき由の宣旨を下され、藤原の秀鄕は從四位下に任じて武藏下野兩國を賜はり、貞盛秀鄕の兩人を召されて宣旨を賜はる。儀式誠にゆゝしさ、子々孫々弓矢の面目とぞ見えし。

ば、藤太よく〳〵聞て、天晴大事をも聞きつる物かな、是こそ誠に我生國の大明神御託宣にてあるべしと、いと有難くて、そなたの方に向つて、祈念の氣色をしたりけり。扨は此後將門を、只一矢に射伏せん事は、案の內と思ひとり、其後は夜な〳〵彼の御局へ參るには竊に弓と矢を挾み、忍び窺ひけり。案の如く又將門彼の御局へ入らせ給うて、打解けて御物語などし給へり。藤太物の隙より能く〳〵見れば、實にも六人には燈火に映る影もなし、本體には影のありと言ふについて、目を澄まし見れば、時々彼の蟀谷といふ所動きけり。藤太天晴幸かなと弓と矢を打番ひ、ひようと射たりけり。元來秀鄕は精兵の巧手、養由が百步の藝にも越えたる上、矢頃は間近し、何かは以つて射損ずべき、小耳の根と思ふ所を彼方へづんと射通しければ、さしもに猛き將門も仰向に倒れて空しくなれば、殘る六人の形も電光石火の如くにて、光と共に失せにけり。

去程に將門亡びぬれば、貞盛秀鄕は悅びの眉を開き、打取る處の首、竝びに捕虜共を召連れざゝめかいて上らるゝ威勢の程こそゆゝしけれ。道遠ければ、王城へは誠の左右は未だ聞えず、官軍は戰に打負け、將門は已に帝都へ攻め入るなどと聞えければ、主上大きに驚かせ給ひつゝ、諸寺諸山に勅使立て、調伏の法頻に行ふべきよし、宣下せらるゝ。中に

に此女房の扮裝御覽じて、御心に染みて思しければ、時々は此御局へ通はせ給ふが、折節親王此局におはしける時、秀鄕參り合うたり。怪しく思うて物の隙間より窺ひ見れば、同じ男體の上﨟束帶にて七人ひとしく座し給ふ。こは不思議の事かなと思うて、其夜は歸りけり。明の夜また御局へ參りて、樣々に睦じき事も言ひかはして後、藤太、扨も過ぎし夜この御局に人音のしけるを、誰人やらんと差寄りて、物の隙より見てあれば、さしも氣高き上﨟のおはしまして候ふは、誰人やらんと問はれければ、小宰相、それこそ將門の君にておはしませ、見紛ひ給ふにやと宣へば、藤太重ねて申すやう、殿ならば只御一人こそおはすべけれ、同じ體配の上﨟七人見えおはしつるこそ不思議なれと申す時に、小宰相、扨は未だ知し召さずや、殿は世の常に越え、御形は一人なれども、御影の六體ましますが故に、人目には七人に見え給ふなり。藤太奇異の思ひをなし、さて御本體には見知の候ふやと問はれて、女房、夢現人に語らぬ事なれども、御身なれば申す也、うはの空に思召し、他人に漏し給ふなよ、かの將門は御形七人にて、御振舞かはる事なしといへども、本體には日に向ひ、燈火に向ふ時、御影うつり給ふ、六體には影なし、扨又御身體悉く金なりといへども、御耳の側に、蟀谷といふ所こそ、肉身なりと語らせ給へ

日に向ひ—原本「日に向ふ」とあり、今改む

じゆつばが―じゆつばかがの術なるべし、天竺の術婆伽といふ漁夫、王女を戀ひて悶死したる話大智度論にあり

と書きて、引結びて渡しけり。時雨この玉章を取りて、小宰相の御方へ持ちて參り、是是の物を拾ひて候ふ、讀みて給はれと申しければ、小宰相何心もなく開きて見給ひつゝ、は忍ぶ戀の心を詠める歌なりと仰せられければ、時雨さし寄りて、何をか包み申すべき、云々の方より御前へ捧げ奉り、一筆の御返事をも伺ひて得させよと賴むに辭み難くて、恐れながら捧げ奉るなり、何かは苦しう候ふべき、笹の小笹の露の間の御情はあれかしと佗ぶれば、女房顏打赤めて、中々物も宣はず。時雨重ねて申すやう、夷心の分く方なくて戀ひ死なば、長き世の御物思ひとなるべし、天竺のじゆつばが后を戀ひ、思ひの焰に身を焦しける例思し知らずやと、漸うに言ひ慰むる程に、女房も流石岩木にあらねば、人の思ひの積りなば、末如何ならんと悲しくて、かの玉章の端に、一筆書きて引結びて出されたり。時雨嬉しく思ひて、やがて藤太の許に來りて渡しけり。藤太取る手もたど〳〵しく、開きて見れば、

　人はいさかはるも知らでいかばかり心のすゑをとげて契らん

と遊ばしけるを見て、喜ぶ事は限なし。それより忍び〳〵に參りつゝ、わりなき中とぞなりにけり。此事深く包み隱しければ、御所中に知る人更になし。去程に平親王將門常

へかし、力に叶ふ事ならば、叶へ奉るべし、御心を置かせ給ふなよと懇に申すなり。藤太此由聞て嬉しくも問ひ寄る物かな、人の心はいさしら雪の餘所にして、わりなき事を語り出し、とても叶はぬ物故に、身を亡き物と成し果てなば、後代の嘲なるべしと思ひ廻らしける、かまへて暫時我心誰か百年の齢を越えし人やある、露とならば閻浮の塵秋の鹿の笛に寄るも、妻戀ふ故ぞかし、我も此人ゆゑと思はゞ、捨つる命も惜からじと思ひ定めつゝ、起き來りて私語きけるは、恥しや、思ひ内にあれば色外に現はるゝとは、斯樣の例や申すらん、自らが思ひの種をば如何なる事とか申すらん、日外御前へ參りし御局の簾中より見出されたる上﨟の、御立姿を一目見しより戀の病となり、死生定めぬ我身の風情、誰か哀れと問ふべきやと、潸然と泣きければ、時雨此由聞きて僞ならぬ思ひの色哀れに思ひ、さればこそ自らが賢くも見知り參らせたる物かな、其の御事は我が主の御乳母子にておはしますし小宰相の御方にてましますなり、色には人の染む事もあり、思召す言の葉あらば、一筆遊ばし給はれかし、參らせて見んと言へば、藤太いと嬉しくて、取る手も薫るばかりなる紫の薄樣に、中々言葉は無くて、

戀ひ死なばやすかりぬべき露の身のあふをかぎりにながらへぞする

思ひ廻らしける かまへて暫時—思ひ廻らしけるが待て暫時の誤なるべし

御事—御方

ぶきう—武勇の誤か
淡海公—藤原不比等

事程近く候ふべし、物の數には候はねども、此藤太が身をも一方の御役に召使はれ候はゞ、弓矢の本意にて候ふべしと、誠しかやに申しければ、將門心淺く悅びて申さるゝ、殊に各々の力を賴んで一天を治め侍り、先祖のぶきうを耀かさんと思ふなり、御邊とても先祖を問へば、正しく淡海公の流ぞかし、國土太平の後は、君臣和合の政を爲すべしとて、數獻の興に及びけり。理なるかな、將門は我身悉く金體なり、敵にあうて恐るゝ所無ければ、今藤太が來るをも憚り給はぬは、兎角申すに及ばず、運命の末と淺ましかりし有樣なり。藤太は館の南なる寢殿を預りつゝ、朝夕ばかり出仕しけり。或時藤太内侍へ出たりしに、年の齡は二十ばかりと覺えし上臈の、優に艶しきが、西の對の簾中より見出し給ふ事あり。藤太此有樣を一目見參らせ、夢現やるかたなく、そゞろに覺えければ、宿所に歸りて前後も知らず臥したりけり。是や誠に夏の虫の焰に身を焦す思ひなれば、由なかりける戀路なりと思ひ返せど、さすがに猶そよと見染めし顏容の忘れもやらず苦しければ、せめては斯くと知らせなば、死ぬる命も惜しからじと、思ひ沈みて居たりけり。爰にまた時雨と申して館より通ひ物する女房あり、秀鄕の許に來りて言ふやうは、御有樣を見參らするに、徒事とも覺えず、思召す事あらば、妾に仰せられ候

魯陽云々—淮南子に「魯陽公韓と難を構へ戰酣にして方に暮れんとす戈を援きて日を招き返す」とあり

あざむき—侮る意なり

の御眼に瞳二つあり。將門に相も變らぬ人體同じく六人あり。されば何れを將門と見分けたる者は無かりけり。將門打つて出で給へば、將武、將爲以下の軍兵一千餘人、前後左右に從ひ、寄手の眞中へ會釋もなく打つて入る其氣色、魯陽が日を返し、項王が三將を靡けし勢にも越えたれば、面を合する敵もなし。されば未の時より申の刻に及ぶ迄、討たるゝ官軍八十餘人、疵を蒙る者數百人、其外半落ち失せて、今は戰ふに術無かりしかば、貞盛は後陣を待ちて戰はんと思ひ、其夜武藏の國へ引退きぬ。將門は元來驕れる人なれば、官軍をあざむき、何程の事か有るべしとて、そのまゝ逃ぐるをも追はず、勝鬨をつくりて城の中へぞ入り給ふ。

去程に藤太秀郷は、將門の有樣を見て、これは人間の振舞には有らず、日本國を合せて戰ふとも、此人に勝負をせん事は叶ふまじ、元より將門は謀短うして智慧淺き人と聞けば、如何にも方便を廻らし、たばかり討たんには如かじと思ひ、貞盛に能く〳〵言ひ合せ、自らは只一人相馬の館へ行かれけり。將門は藤太に對面して樣々に饗應るゝ。藤太諂ひて申すやう、君の御有樣を見るに、誠に四天王の御勢にも越え給ふ、其上正しく葛原の親王の御子孫にてましませば、十善の位を踐み給ふに憚りなし、一天四海を治め給はん

伏せ、兜を脱いで、君の御方に參るべしと呼はりけり。將賴聞て呵々と打笑ひ、正しき兄弟を捨てて君に參らば、忠臣とや申すべき、聖代の昔は王位も重くましますらん、當時將門の威勢に、十善の君と申すとも、いかでかたいようし給ふべき、かつうは軍神の御手向に、只一矢受けて見給へといふまゝに、五人張に十五束、劍のやうに磨いたるを取つて、からりと打番ひかなぐり放ちに放ちけり。胸板に弦や塞かれけん、思ふ矢壺には中らず、貞盛が乘つたる馬の三途に中つてつと貫けにけり。馬は屏風を反す如くに倒れければ、貞盛は副馬に乘つたりけり。將賴一の矢を射損じ、安からず思へば、三尺八寸の打物拔いて、貞盛を目に掛けて打つて掛る。官軍には貞盛の兄弟村岡の二郎忠賴、同三郎賴高、余五の維盛維茂なんどとて、一人當千の兵三百餘人打づて掛る。敵の方よりも、將賴討すなとて、常陸守つるもち、武藏守興世、坂上の遂高以下の兵一萬餘騎、我も〳〵と攻め戰ふ程に、山河草木動搖して、ゆゝしかりし有樣なり。平親王將門は此由を聞召し、左程の奴輩を我領内に引き入れて、駒の蹄をかけさするこそ奇怪なれ、斯樣の奴輩を一々に首切つて捨てんとて、御著長を召されつゝ、葦毛の馬に打乘つて、鞭を揚げて出で給ふ、その有樣殊に世の常ならず、身長は七尺に餘りて、五體は悉く鐵なり、左

たいようー對應か

かつうー且

三途ー和訓栞に「骨相の三行なるをもて也相馬經に三封と見えたり盛衰記にはさうづとも見ゆ」とあり

つるもちー玄茂の訓なるべし

著長ー大將の著る鎧をいふ

ぬ儀なり、彼の藤太は謀賢き者なるが、先陣に向うたり、若し彼一人の高名となしなば、我等弓矢の瑕瑾なるべし、然る時は悔ゆとも益あらじ、いざや此處を馳せ過ぎて、夜を日につぎて藤太が勢に加はらんと宣へば、兵共實にも此儀尤なりと申して、駒を早め打ちにける程に、足柄箱根のさかしき山路を、朧月夜にたど〳〵と駒に任せて急ぎけり。

去程に平の貞盛は、官兵二千餘騎を從へ、足柄箱根を夜の中に打越え、天慶九年二月十三日と申すには、武藏野に著きにけり。こゝにして秀鄕の勢と合せて三千餘騎、利根川を打渡して、明くれば二月十四日下總の國磯橋に陣を取る。將門此由聞くよりも、我城へ入らせては叶ふまじとて、舍弟下野守將賴、同じく大葦原の四郎將平に、上總常陸の勢四千餘騎を相添へ、同じ日の午の刻に辛島の郡北山といふ所に出して陣を取らる。貞盛敵の陣に馳せ寄せ、大音揚げて申す樣、只今こゝに進み出たる兵を、如何なる者とか思ふらん、近くは目にも見よ、遠からん者は音にも聞け、人王五十代の帝の後胤鎭守府の將軍平の國香が一男上平太貞盛なり、梟賊の亂逆を靜めん爲に、一天の君の宣旨を蒙り、只今爰に向うたり、土も木も我大君の國なれば、何處か兇徒の住處ならん、速かに弓を

下總―傍訓原本のまゝ

土も木も―「草も木も我大君の國なればいづくか鬼のすみかなるべき」の古歌に據る

を賜はり、弓場殿の南の小門より搖めいて出らるゝ、嚴しかりし有樣なり。

時は朱雀院の御宇、天慶三年正月十八日巳午の刻の事なるに、今日諸大將朝敵追伐の爲に、東國へ發向せらるゝ由聞えしかば、近き邊は申すにや及ぶ、遠國他國の道俗男女上下聞き及ぶに從つて、袖を連ね踵をついで、我も〳〵と巷に群集す。都をこの平安城へ移されてより以來、未だ四海の激浪もなければ、武士は弓矢を知らざるが如し、今初めて干戈を動かす珍しさに、馬、物具、太刀、刀、邊も輝くばかりに出立ちければ、何れもゆゆしき見物なり。路次に少しも障りなければ、多くの難所を馳せ越えて、やう〳〵二月の初めには駿河の國淸見ヶ關に著きにけり。此處にして大將忠文は暫く休らひ、富士の絕景、三保の入海、田子の浦の眺望を見物し給ふ折節、淸原のしげふちといへるしつくり大將軍にて侍りしが、此浦の有樣を感じて、漁舟の火の影はすさまじうして波を燒く、驛路の鈴の聲夜山を過ぐと作られければ、大將も士卒も感涙をなして、悅びの袖を濡らし給ふ。玆に副將軍平の貞盛は、家の子郎從を近づけ、汝等は何とか思ふ、かくて大軍と同じく路次に日數を經るならば、大事のせんには遇ふべからず、殊更此將門は朝敵たる上に、我身の爲には親の敵なれば、自餘に抽んでて、勝負を決せずしては叶は

しつくり—者つくりの誤か
感涙をなして—なしはながしての誤か
せん—詮か

こんさ—ごま（護摩）の衍か
せつと—節刀か
ぶよう—武勇か
おのゝ殿—誤衍あるべし
中儀—儀式に大中小の別あるよりいふ

右に向へる獅子狛犬も動く氣色に見えければ、藤太難有く尊く覺えて信心再拜す。それよりも藤太は駒に鞭を打つて、東國指して下りける。去程に内裏には公卿僉議ましまして、今度將門が亂逆について、神佛の擁護を賴まずば、速かに靜謐すべからずとて、諸寺諸山の碩德に仰せて、調伏の法行はせられ給ふべしとて、先づ天台座主法性房の阿闍梨尊意僧正は比叡山に壇を構へ、大威德の法を行はる。金剛寺の淨藏貴所は橫川に壇を構へて、降三世の法を行はる。根本中堂には碩德こんさを焚き、美作の明達は神宮寺に壇を構へて、四天王の法を行はる。是皆朝家有驗碩德なれば、行法何れも成就して、朝敵滅亡疑ひあらじと、賴もしくぞ覺えける。斯くて東國の討手には源平兩家の氏族の中に、文武二道の器量を選んで、大將軍の宣旨を下され、せつとを賜はるべしとて、先づ宇治の民部卿藤原の忠文を召さる。又鎭守府の將軍國香が嫡男上平太貞盛、父がぶようをついで、殊更多勢の者なれば、副將軍にぞ召されつる。それ將軍にせつとを賜はり、外土へ赴くには、定まれる儀式の侍れば、主上南殿に出御なる。關白殿はおのゝ殿に出させ給ふ。大臣は九條殿、其外大納言中納言八座七辨諸司八省、階に陣を張り、中儀の節會を行はれ、せつとを出さる。時に大將軍副將軍威儀を正しくして參内し、禮儀をなして是

此上は猶豫すべからず、秀郷は東國の案内を存じたる者なれば、先づ彼を討手に差下されし、其後大勢の討手を遣さるべきかと有りしかば、此議尤も然るべしとて、乃ち藤太を禁庭に召され、今度梟賊追伐の事、然しながら汝が謀を頼み思召す也、急ぎ罷下りて、能く〳〵手段を廻らし、逆臣を誅伐し、君豐かに民安からしめよ、軍功は功によるべし、如何樣諸軍勢を重ねて後より下さるべし、汝は夜を日につぎて急ぎ下るべしと宣へば、藤太宣旨を承り、弓矢の面目何事か是に若かんと、勇をなして退出す。さらば時刻を廻らさず急ぎ下るべしとて、都をばまだ夜をこめて、白川や粟田口をも打過ぎて、日岡峠に差掛れば、夜はほの〴〵と明けにけり。四の宮河原を餘所に見て、關の山路に差掛り、三井寺に參りつゝ、講堂の御前に頭を傾け、南無や彌勒大菩薩、此度もし秀郷が敵の爲に討たるゝとも、頼みを掛けし一念の功力によりて、三惡道に返し給ふなと祈念し、それより新羅大明神の御前に參り、歸命頂禮大明神、願はくは藤太が謀に御力を添へられ、難なく敵を打平げ、君も豐かに民榮え、國土安全長久の御世と爲し給へ、然らば我々が一門永く當社の氏子となつて、社頭に頭を傾け奉るべしと、丹心の誠を抽んで暫く祈り給へば、誠に神慮も御納受ましく〳〵、御風なうして、御前の斗帳も搖めき、左

三惡道に返し─返しはおとしの衍か

御れう―御寮か

秀郷御れうの御目にかゝより申したき事侍りて、是まで參りて候ふと申しければ、禁門警固の侍某此由を將門に申し上げけり。折節將門は髮を亂し梳りて居給ひしが、如何思しけん、取敢ず大童にて、而も白衣のまゝにて中門に出合ひ、秀鄕に對面し給ふ。元來藤太は目賢き人なれば、此有樣を見留めて、はかぐしからずと思ふ所に、將門秀郷を饗さむ爲に、椀飯を搔据ゑて是を羞む。將門の食ひ給ふ御料袴の上に落ち散りけるを自ら拂ひ拭はれたり。藤太心中に思ふ樣、是は偏へに卑しき民の振舞なり、さて餘り輕忽至極なれば、日本の主とならんこと、思ひも寄らぬ事なるべしと、初對面に心がはりし、申し語らふべき言葉も出さず、疎み果ててぞ歸りける。それよりも秀郷は夜を日についで都に上り、案内申して奏聞申しけるやうは、相馬の小次郎將門が叛逆を企て、東八ヶ國を橫領し、剩へ軍勢を催し、王城へ討つて上るべしと結構仕り侍るなり、速かに追討使を下さるべし、若し事緩怠に及ばゝ、ゆゝしき朝家の御大事と罷成り候ふべし、それに就き候ては、秀郷が身不肖に候へども、一方の大將をも宣下せられ候はゞ、兎も角も謀を廻らし、誅伐仕るべきよし申しければ、帝大きに驚かせ給ひて、公卿殿上人を召され、此事は如何あるべしとの僉議まちくなり。其上將門叛逆の事東國より重ねて奏聞申しければ、

國香ー原本此所のみコツカとあり、今改む

○將門記には將頼を下野守、經明を上野守。藤原ダ茂を常陸介、興　王を上總介、文屋好立を安房守、將文を相摸守、將武を伊豆守、將爲を下總守に叙すとあり

俵藤太物語　下

扨も俵藤太秀鄕は、下野の國に居住して、國中を治めしかば、其勢近國に振ひけり。かかりける所に下總の國相馬の郡に將門といふ人あり、此人は桓武天皇の御裔葛原の親王には、四代の孫、鎭守府の將軍良將が子なり。承平五年二月伯父常陸の大椽國香を討つて勢漸く八州を呑み、相馬の郡磯橋を限りて王城を構へ、我身自らは新皇と號し、百臣を召使ふ。舍弟御厨の三郎將頼をば下野守、同次郎大葦原の將平をば上野介、同五郎將爲をば伊豆守、多治見の經明をば常陸介、藤原の春道をば上總守、藤原の興世をば安房守、文屋のよしかねをば相摸守に赴任せしむ。斯くて大軍を催して、帝都へ打ちて上り、日本國の主となるべしとて、其催有りけるを、藤太秀鄕熟々と聞きて、實にも誠に大剛の勇士なるうへ、猛勢を靡け從へり、此人に同心し、日本國を半分づつ管領せばやと思ひて相馬の郡に下りけり。彼處にも著きしかば、館へ人を差遣はし、下野の國の住人俵藤太

四至のけんけい—未詳

囘祿—火災

らせ給ふ時、一人の老僧立ち出でて名告りて曰く、我はこれ教待和尙と言ふ者なり、此寺に住して大師を待つ事二百餘歳と言ひ終つて、四至のけんけいを授けて、虚空をさして飛び去りぬ。大師は奇異の思ひをなし、此寺に住持して眞言祕密の教法を行ひ給ふ。大講堂は八間四面、三重一基の寶塔、七間四面の阿彌陀堂、四足一宇の寶殿には山王權現勸請す。唐本の一切經七千餘巻をば、廣院にこめ給ふ。其外今熊野御社護法善神の御拜殿、普賢堂、靑龍院、尊星王塔、大法院、四面の廻廊、十二間の五輪院、總て堂舍の數は六百三十餘、佛の數は二千體、淸淨堅固の靈地なれば、大師此寺の井花の水を汲んで、三部灌頂の閼伽として、慈尊三會の曉を待ち給ふ故に、三井寺とは申すとかや。斯程めでたき道場、如何なる事の仔細によつて囘祿に及ぶぞといへば、彼の大師御入滅ましまして後、御門徒の大衆、戒壇興隆の事を申し行ひしによつて、山門の大衆嗷訴をなし、柔和忍辱の衣を著し、志賀唐崎に馳け合うて、或は討たれ、組んで落ち、道場に血をあへし修羅の巷と爲す事は、法滅の基と淺ましかりし事どもなり。

申しつゝ、彼の寺を移して、父の家跡に造りつゝ、園城寺と改め給ふ。此寺の傍に淸潔なる岩井の水あり、此水を持つて、天智、天武、持統三代の帝の御產湯に用ゆる故に、御井寺とは申すなり。斯くて星霜を經る事漸く二百年に垂んたり。時に智證大師と申して有德碩學の名僧まします、此人は弘法大師の御甥讃州那賀郡の住人宅成の嫡男也。竹馬の比よりも其相世人に勝れ、兩の御眼に各瞳二つぞおはします。御年十四にて都に入り給ふ。十五歲にて叡山に登り、天台座主義眞和尙の門弟として髮を剃り、三密瑜伽の道場の中に、一乘圓頓の敎法を極め給ふ。其後仁壽三年の秋の比、求法の爲に、入唐し給ふ所に、惡風俄かに吹き來つて、海上の御船忽ちに覆らんとせし時、大師舷に立出でて、十方を一禮し誓請を爲し給へば、佛法護持の不動明王金色の身相を現じ、船の舳に立ち給ふ。又新羅大明神目前船の艫に化現して、自ら舵を取り給ふ。是によつて御船恙なく明州の津につきにけり。御在唐六年の其間、國淸寺の物外、開元寺の良諝、靑龍寺大德、興善寺の智慧輪、かゝる明德高僧に顯密の奧義を學び、玄旨を極め給ひつゝ、天安二年に至つて御歸朝ましましけり。斯くて御法流盛にして、一朝の綱領四海の倚賴として寶祚の護持を爲し給ふ程に、帝より詔して園城寺を賜はりけり。大師園城寺に入

三密瑜伽—行者の身口意の三密能く如來の三密と相背離せず即身成佛を成すをいふ

一乘圓頓—賢愚を論ぜず皆一樣に佛果を得べき圓融無碍自在の敎法をいふ

しゆぐわん—園城寺歷代長吏中に此名見えず

苦輪—衆生の生死輪廻すべき苦界なる故にいふ

とぶらへば—問へばの意

御息所、女御、更衣に至るまで、三會の曉慈尊出世の結緣の爲と思しければ、道場に車を軋らし、佛前に踵をつきて、五障の雲を霽らし給ふ。既に時刻にもなりしかば、乃ち供養の儀式嚴重也。當寺導師は當寺の長吏大僧正しゆぐわんは天台座主とぞ聞えし。其外諸寺の明德碩學數千人會座に連り給ふ。導師高座に上り、發願の鐘打鳴らし、秀鄕の朝臣この善根に應へて、今生にては無比の樂みを極め、來世にては上品蓮臺に生れ、乃至七世の父母速かに三界の苦輪を出でて、天上の快樂を極め、法界衆生平等利益出離生死頓生菩提と、回向の聽聞難有く、皆感涙をぞ流しける。

聽聞の道俗おしなべて隨喜の涙を流しけり。難有や、此鐘と申すは祇園精舍の無常院に響くなり、諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂の四句の音を寫されたれば、是を聞く人おしなべて無明長夜の夢を醒し、發心菩提の岸に到る。誠に末代不思議の奇特なり。抑も當寺草創の濫觴をとぶらへば、昔人皇三十九代天智天皇の御時、此湖に近き大津に都を移し給ふ。爰に帝御夢の告げましますにより、皇子大友の太子に詔して、樂浪や志賀の花園に靈地を占め、一の伽藍を建立し、丈六の彌勒薩埵を安置せらる、其名を壽福寺と號す。其後皇子大友事に遇うて崩れ給ひしかば、その御子與多王帝へ奏し

千常―秀郷の子
長吏―三井寺の主長たる僧をいふ

井寺へ參らすべしとて、園城寺へ遣さる。千常三井寺へ參り、時の長吏大僧正に謁して、件の趣申しける。

僧正大いに悅び給ひて、寺中の衆徒達を會合し僉議まち〳〵なり。僧正仰せけるやうは、當寺は伽藍草創の後大檀那繁昌して、佛法最中の道場なれば、梵鐘の響は心に任せて、龍宮より取りて歸りし鐘なれば、天下無雙の重寶、末代の名譽なり、兎角の沙汰に及ばず、報謝を受け給ふべしとありしかば、滿座の大衆一同に皆尤と領承し、吉日を選んで、彼の釣鐘を寄進し給へ、卽ち供養をなすべしとて、千常をば返されける。藤太此由承り、唐崎の濱へ行き見れば、夜の間に龍宮より上げ給ふと思しくて、件の釣鐘おはします。是より三井寺へ引きつけんには、數多の人夫を持ち給はずば、容易く引きつくまじと案じける處に、明日供養と相定めし今宵、海より小さき蛇來りて、彼の釣鐘の龍頭を銜へ、大講堂の大庭までいと易く引きつけて、搔消すやうに失せにけり。僧正大衆達も、奇異の思ひをなし給へり。去程に園城寺には龍宮より釣鐘上りつく、今日供養し給ふ由兼ねて諸國に聞えしかば、近國は申すに及ばず、遠國の道俗男女、われ劣らじと參詣す。都よりは殊に程近ければ、貴賤老若群集してけり。時の關白、大臣、公卿、女院、

あよむ—歩む

梵ぜん—梵刹又は梵砌の衍か

慈尊—彌勒

北嶺—叡山

去程に龍女は俵藤太秀鄕を樣々に饗應し慰め給ひける程に、漸々時刻も移りければ、藤太は大王に暇を乞ひ龍宮を出られける。海中をあよむ事刹那の程と覺ゆれば、勢多の橋にぞ著かれける。それより父の許に行き、村雄朝臣に對面して、此程の有樣始めより詳しく語り給へば、父母不思議の思ひをなし、斜ならずに悅び給ふ。それに就き龍王の引出物に金作の劍、金札の鎧、赤銅の釣鐘を賜はりたり、劍、鎧は武士の重寶なれば、末代子孫に相傳すべし、鐘は梵ぜんの物なれば、俗の身に從へ詮もなし、三寶へ供養すべし、されば南都へや奉らん、比叡山へや奉らんと申されければ、父の朝臣此由を聞きて、實にも誠に一々の稀代重寶なり、中にも彼の突鐘を精舍に寄進し奉り、當來の値遇を祈らんこそ難有けれ、諸佛菩薩の御內證何れも一體方便と言ひながら、殊更三井寺の本尊へ奉り給へ、それを如何にといふに、一つは當國なり、又彼の寺の鎭守新羅大明神と申すは弓矢神にておはしませば、子孫の武藝を祈るべし。さて又彼の寺の御本尊は彌勒薩埵にておはします、此度の功德によりて、五十六億七千萬歲三會の曉、慈尊の出世の御時、見佛聞法の結緣ともなるべし、其上南都も北嶺も突鐘既に成就せり、彼の三井寺と申すに今に鳧鐘の響もなし、速かに思ひ立ち給へと有りしかば、藤太委細に承り、さらば三

此由承り、鎧劍は誠に家の寶なり、釣鐘の事はわれ武士の身なれば、さのみ望み申すには有らねども、由來を詳しく承れば、末代吾朝の寶何か是に勝らん、是猶以つて難有し、さりながら斯程の重き釣鐘を、いかでか賜はり歸るべしや、是ぞ難儀なりと申されければ、其時龍王微笑みて、いみじくも申されたる物かな、弓矢を取つて强き者を滅す手段こそ、方々には及ばずとも、斯樣の物を持扱ふ事は、吾眷屬の自由なり、心にかけ給ふ事勿れとて、乃ち異類異形の鱗輩に仰せて、水中に引かされけり。既に時刻も移りければ、藤太心に思はれけるは、昔丹後の國與謝の郡水の江の浦島が子とやらんも、少女に遇ひて、偶然にこの常世の國に到りしに、かゝる快樂に耽りつゝ往にしへ行く末を忘れて年を經る事三年なり、或時故鄕の戀しさに、少女に暇を乞ひ、水の江に歸りて見てあれば、住みし故鄕も變り果て、見知れる人も無き程に、斯く有るべしやはと訝しく、能く〳〵問へば、それ昔三百餘年の事なりといふ人あるに驚きて、遂に空しくなると聞く、かゝる例も有るぞかし、我は殊更朝家奉公の身なり、殊更故鄕に年老いたる父母のましませば、時の間も見まほしくて、早々御暇を申されければ、龍神は猶も名殘惜しげにて、樣々の興を盡して慰め給ふ。

さし受け〳〵飲みけるなり。山海の珍菓を蓬萊の如くに積み上げて饗應し傅きける上に、樣々の引出物をせられけるこそゆゝしけれ。藤太心に思ひけるは、扨も斯程の樂みは、大梵皇帝の榮華と申すとも、是にや及ぶべき、斯程難有き國土にも苦は侍るかと問ひ給へば、其時龍王の御諚には、中々の事申すにや及ぶ、天上の五衰、人間の八苦、龍宮の三熱とて、何れも苦のなき國は無し、就中此國に年比重き苦患の侍りしを、御邊此度神變を振ひ、たやすく滅亡し給ひける事、佛神の御助けに等しく、難有く覺え侍るなり、一死萬生の悅びとは、然しながら是をぞ申べき、この御恩は報じても報じ盡し難ければ、未來永々に限るまじ、御身の子孫の爲に、必ず恩を謝すべしと宣ひて、金札の鎧、同じく太刀一口取り添へ、藤太に與へ給ふ。此鎧を召し、此劍を持つて朝敵を滅し、將軍に任じ給ふべし。又赤銅の釣鐘一つ取り出させ、此突鐘と申すは昔大聖釋迦如來中天竺に出世し給ふ時、須達長者と申す人、祇園精舍を造りて佛に供養し奉りし時、無常院の鐘の音をば寫したる鐘なれば、諸行無常と響くなり、此鐘の聲を聞く時は、無明煩惱忽ちに消滅し、菩提の岸に到るなり、かゝる不思議の重寶なれば、此國に星霜年久しく保つと言へども、此度の捧物に是も同じく奉る、日本國の寶に爲し給へと宣ひければ、藤太

さうくわん―佐官か

沆瀣―海の氣をいふ、楚辭に餐六氣飲沆瀣兮とあり

こんずい―羮をコンヅといふ是なるべし

種の樹木花咲き開けて、一々の花の中よりも七寶の果實滿ちたる、極樂世界もかくやらん。扨樓門を打過ぎて、歩む足も香しき玉の階攀ぢ登れば紫宸殿と思しくて、數千間に造り磨ける宮殿あり。庭には瑠璃の砂、眞珠の砂、際もなく撒き滿てり。黃金の柱、玉の鐺、七寶の欄干、玉の甃溫かなり。御殿の奇麗さは、莊嚴は目に見る事は申すに及ばず、曾て耳にも聞き及ばず。龍女藤太の袖を控へ、神殿の眞中に玉の曲彔を構へて、是へと言うて据ゑ置かる。暫くあつて音樂を奏する事あり。其後八大龍王の第一娑伽羅龍王、八萬四千の眷屬を引連れ、玉座に直り給ふ。龍女も同じく玉座に直り給ふ。玉座に定まつて互ひの一禮こと濃やかなり。時にさうくわんの龍女百味の珍膳を捧げ出る。龍王の御前に据ゑ、其次には藤太、其次には龍女に据ゑたり。其飲食世の常ならず、服するに心よく、香しき事類なし。暫し有りて又金の盤に、沆瀣の杯を据ゑ、銀の銚子に、天のこんずい盛りて出たり。これも先づ龍王の飲み初め給ふ事三度、其後藤太の前に持ちて參る。藤太も同じく三度受けたり。其味ひ天の甘露なれば申すにや及ばず、ふらんうつゝらが八萬歲を經たりしも、此酒の德にこそ有りつらめと、いと難有くぞ思はれける。酒宴の儀式日本には樣變りて盃も廻さず、思ひざしもなければ、只心のゆく程

ちよかー直下なるべし

五じやうー五城か

かと、初めて驚くばかりなり。扨も龍女のまたふ樣は、最前に申しゝ如く、年比の大敵をたやすく亡し給へる事、吾等が一門眷屬共に悦び侍るといへども、數多の物の悉くこれまで現れ來りて、御恩を報じ申さん事いと易き樣にて障あり、されば恐れ多き事なりといへども、君を吾故郷に具し參らせばやとの願ひにて、これまで妾は御迎ひの爲に參りたり、迚もの芳志を蒙りし上は、御心を置かせ給ふまじ、疾く〳〵御出あれかしと申しければ、藤太此由承り、是程に大切に侍るなれば、よも我身の爲は惡しからじと思ひて、彼の龍女と打連れ龍宮へと急ぎけり。

去程に龍女は俵藤太を伴ひ、漫々として涯もなき湖水の中に入りにけり。ちよかと見れども底もなく涯も見えぬ海底の、烟の波を凌げば、雲の波靜かならず、雲の波を分け行けば水輪際も極まりぬ。水輪際を打過ぎて金輪際に及べば、風輪際に近くなり、風輪際をも過ぎしかば、浮世の中と思しき國に出でにけり。これなん我住む所と言ふにつけて見れば五じやう峙ち、七寶の宮殿、黄金の樓門赫き渡れり。龍王の眷屬、異類の異形の鱗は、役々に從つて樓門樓閣に徘徊す。我日域の帝城禁門警固の衞士に異ならず。藤太を伴ひし龍女の門に入らせ給へば、諸々の龍神は頭を傾け禮をなす。門より内には種

首結うたる―俵の口を強くくびり結ひたるなり
候へける―候ひけるの訛
みやう―妙か

るにものなし、せめては私に持つ所の物にても、先づ〳〵進らせんと思ひて來りたりとて、藤太が前に据ゑ並べたる物を見れば、巻絹二つ、首結うたる俵、赤銅の鍋一つぞ候へける。田原藤太は此由を見るよりも、誠に難有き御志かな、然れば今度の御事はみやうの方便によつて高名を極め候へば、御身の悦びは申すに及ばず、我等の家の面目何事か是に若かんや、其上斯樣に御寶物給はり候ふ事、悦びの中の悦びにて侍ると、色代して申されければ、扨女房も心よげにて、さらば先づ今宵は歸り侍るべし、返す〳〵も今度の悦び、吾身一人に比へ難し、千萬人のためによろしければ、重ねて其徳を報じ申さんとて、女房は何地ともなく歸りけり。秀郷件の女房に得たりし巻絹を取出し衣裳に仕立つる處に、裁てども〳〵盡きず。又米の俵を開きつゝ、米を取出すに、これも遂に盡きずせ。さてこそ藤太をば俵藤太とは申しけり。扨又鍋の内には思ふまゝの食物沸き出でけるこそ不思議なれ。藤太は尚も奇特を見る事もこそと思ひて待つ處に、案の如く月明き夜の更け方に、件の女性訪れ給ふ。藤太急ぎ立ち出でて、中門へ請じつゝ、其有樣を見てあれば、美麗なる事前の姿には樣かはれり。傳へ承る、天竺の耶輸陀羅女、唐の西施、李夫人と申すとも、これにはいかでか及び給ふべければ、只喜見城の天女の天降り給ふ

一筋、是を射損じては如何せんと、とり〴〵に思ひ廻しつゝ、此度の鏃には、唾を吐き掛け打番ひ、南無八幡大菩薩と心中に祈念して、又同じ矢壺と心掛け、よつぴいてひやうど放ちければ、手應してははたと中ると覺えしより、二三千見えつる松明一度にばつと消え、百千萬の雷の音も鳴り止みけり。扨は化物は滅したる事疑ひなしと思ひ、下部共に松明點させ、化物をよく〳〵見れば、紛ふべくもなき百足なり。二三千の松明と見えしは足にてやあるらん、頭は牛鬼の如くにて其形大なる事譬へん方もなし。件の矢は眉間の只中を通つて喉の下まで拔け通りけり。急所なれば理と言ひながら、斯程の大きなる化物一筋通る矢に痛み滅びける弓勢の程こそゆゝしけれ。去程に初め二筋の矢は鐵を射る如くにて立たず、後の矢の通りし事は唾を鏃に塗りたる故也。唾は總じて百足の毒なればなり。日比勢を振ひし物なれば、尙も仇をなすこともやとて、件の百足をばずた〳〵に切り捨て、湖水にこそは流されたれ。藤太は宿所に歸り給ひけり。明の夜又夕べの女性來りけり。此度すぐに出居まで入りて、藤太殿に見參せんと言ふ。藤太やがて出會ひ對面しければ、女房うらやかなる聲にて、扨々貴方の勇力にて日比の敵を平け、安全の代となし給ふこそ返す〴〵も神妙なり、悅び身にあまりてはんべれば、恩を報ず

矢壺と—矢壺をの衍か

此度—此度はの誤か

うらやか—うららかと同意なるべし

關弦ー伊勢鈴鹿郡の關にて製したる弦

忘るゝばかりー長き間

を蒼海の龍神に現し給へりと承り及ぶ時は、異議に及ぶまじと思ひ定めければ、時刻を廻さず、今夜の中に罷りて、かの敵を亡し侍るべしと申しければ、女房斜に悅びて掻消すやうに失せにけり。去程に藤太は約束の時を違へじと、重代の太刀を佩き、一生身を離たず持ちたりし重籐の弓の五人張ありけるに關弦かけて挾み、十五束三伏ある三年竹の大矢の鏃半過ぎたるを三筋手挾んで、勢多をさして急ぎけり。湖水の汀に打臨みて、三上の山を眺むれば、稻光すること頻りなり。さればこそ件の化物來るにこそと守り居ける所に、暫く有つて雨風夥しくする程に、比良の高嶺の方よりも、松明二三千あまり焚き上げて、三上の動く如くに動搖して來る事あり。山を動かし谷を響かす音は、百千萬の雷もかくやらん、恐しなんどははかりなし。されども藤太は少しも騒がず、龍宮の敵といふは是ならんと思ひ定めて、件の弓矢を差加へ、化物の近づくを待つ程に、矢頃にもなりしかば、飽くまで引き、眉間の眞中と思しき所を射たりしに、その手應鐵の板などを射るやうに聞えて、筈を返して立たざりければ、安からず思ひて、又二の矢を取つて番ひ、折れし矢壺を心掛け、忘るゝばかり引絞りて射たりけるが、此矢も又踊り返つて、身には少しも立たざりけり。只三筋持つたる矢を二筋は射損じたり、賴む處は只

水に居を占め、七度まで桑原となりしにも、形貌を人に見せず、しかるところに人皇四十四代に當つて、元正天皇と申す帝の御時に、日本第二のゐんこの神、彼の湖水の邊三上の嶽に天降らせ給ふ、それよりをちつかた、かの山に百足といふもの出で來て、野山の獸、江河の鱗を貪る事年久し、これに妾が類度々彼に服せられ、三熱の苦みの上に、愁歎の涙乾くひまなし、如何にもしてこの敵を亡し、安全の古へに爲さばやとばかり、事を廻すといへども、妾が類としてたやすく平げん事叶ひ難し、若し人間に然るべき器量の人ましまさば、因み緣りて頼み侍らばやと思ひ、勢多の橋に横はつて往來の人を窺ふに、遂に近邊へ近づくものもなし、かゝる處に今日の御邊の御振舞誠に堪へ難き御心根かな、此上はかの敵を亡さん人は御身に限りて有るべからずと、頼み申して來りたり、我國の安危は御言葉によるべしとて、誠に餘儀無き有樣也。

藤太此由を熟々と聞き侍りて、さても難儀の事かな、世の常ならぬ物の頼みて來りしを、違變するも臆れり、又大事を仕損じたらんは、先祖の名折、末代の恥辱なるべし、さりながら我頼む神の惠のましませばこそ、日本六十餘州に抽んでて我を目當てゝ來るらめ、就中龍宮と和國とは金胎兩部の國なれば、天照太神も本地を大日の尊像にかくし、垂跡

桑原云々—湖水變じて桑田となるをいふ
ゐんこ—未詳
をちつかた—以後
堪へ難き—感に堪へざる
御身に限りて云云—御身以外他にあるべからず
金胎—金剛界胎藏界

郷聞きて、あら思ひ寄らずや、そも何處の人にてましませば、我に見參せんとは宣ふぞ、更にこそ心得ね、さりながら思召す仔細のましませばこそ、是まで御出あれ、尋ね給ふべき事あらば、此方へ入らせ給へと有りければ、主彼の女性に斯くと申す時に、女性言ふやうは、いや〳〵是は苦しからず都の方の者なるが、此處にて聊か申し入るべき事有り、恐れながらこれまで御出あれかしと申す。去程に秀郷辭退するに及ばねば、居たる所を突立て、門外に出て見てあれば、二十餘りの女性只一人佇み居たり。その形貌を見るに、容顏美麗にして、邊も耀く程なり。髮のかゝり麗しう、さながら此世の人とは思はれず、怪しさは限なし。面はゆげにて、日頃物申したりとも覺えぬ人の、夜更けて殊更尋ね給ふこそ覺束無く候へどもと申されければ、彼の女房藤太が側に差寄り、小聲に申すやう、誠に妾を見知り給はぬこそ道理なれ、われはこれ世の常の人にあらず、今日しも勢多の唐橋にて、見え申せし大蛇の、變化したる女なりとぞ申しける。藤太此由聞きて、さればこそと思ひ、さて如何なる事の仔細にか、變化して來り給ふと申されければ、女房申すやう、日比は定めて聞召し及び給ふべし、妾は近江の湖に住むなり、昔久方の天の道開け、あらがねの土固まりて、この秋津洲の國定まりし時より、かの湖

○この所の文太平記卷十五三井寺合戰の條によれり

に差置かれければ、秀鄕此由承り、餘りの事の嬉しさに、三度戴き謹んで退出す。されば此劍を相傳して後は、いよ〳〵心も勇み、何事も思ふ儘なり。打物取つても、弓を引くにも、肩を竝ぶべき輩もなし。君の御爲忠孝を勵ます事甚しければ、下野の國に恩賞を賜はつて、罷下るべきにぞ定まりけるこそ難有けれ。然るに其比近江の國勢多の橋には、大蛇の横はり臥せりて、上下の貴賤行惱む事あり。秀鄕怪しく思ひて行きて見れば、誠に其丈二十丈もや有るらんと思しき大蛇の橋の上に横はり臥せり。二つの眼の耀けるさまは、天に日の竝び給ふが如し。十二の角の鋭利なる事は、冬枯の森の梢に異ならず。鐵の牙上下に生ひ違ひたる中より、紅の舌を振出しけるは、焰を吐くかと怪まる。もし世の常の人見るならば、肝魂も失ひ、其儘倒れぬべけれども、元來秀鄕は大剛の男子なれば、少しも憚らず、彼の大蛇の背をむず〳〵と踏んで彼方へ通りけり。されども大蛇は、敢て驚く氣色も無し。秀鄕も後を顧みず、遙かに行き隔りぬ。それより東海道に赴き、日も西山に入りぬれば、或宿の出居に宿られける。既に其夜も更け行くまゝに、夢も結ばぬ假寢の枕傾けんとし給ふ所に、宿の主の申すやう、誰人にやらん、旅人に對面申さんと申して、怪しげなる女房一人、門の邊に佇みておはしますと申す。秀

體配—態度

俵藤太物語上

朱雀院の御時に、俵藤太秀郷と申して名高き勇士侍り。此人は昔大織冠鎌足の大臣の御裔、安部の左大臣魚名公より五代の孫、從五位の上村雄朝臣の嫡男也。村雄朝臣田原の里に住しけり。然るに秀郷十四歳に成りしかば、初冠をさせて其名を田原藤太とぞよばれけり。若輩の比より朝家に召され、宮仕し侍る事年久し。或時秀郷父の許に行きければ、村雄朝臣いつよりも心よげにて秀郷に對面し、御酒を樣々に羞めて申されけるは、人の親の身として、我子をいみじく申すことは、嗚呼がましくや侍らん、さりながら御事は世の人の子に勝れて、行儀・體配ゆゝしく見え給ふものかな、如何樣に御事は、先祖の譽を繼ぎ給ふべき人とこそ見れ、それにつき我家に鎌足の大臣より相傳し來りし靈劍あり、我老耄の身として、從へ持つべきに侍らじ、只今御邊に讓り侍るべし、此劍を持つて、高名を極め給へとて、三尺餘りに見えたる金作の太刀を取出して、秀郷の前

俵藤太物語

享錄四年二月二日書寫畢

べ給ふ。されば汙穢不淨をもきらはず、行住座臥時所諸緣とて、ねてもさめても他事なく念佛をだに申せば、三輩中輩をこえて、淨土の往生をとげんこと何のうたがひ候ふべき、又念佛誹謗の者は阿鼻大城におちて、長く苦惱をうく、かへすぐも諸法を謗ずることなかれと、迦陵頻の御聲にて、午の時より說法始まりて酉の時まで御說法ある。近きも遠きも御聲の及ばずと云ふ事なし。聽聞の人々も袖をぬらさぬはなかりけり。鐘うち鳴らしゆすよりおりさせ給へば、公卿殿上人輿車よりおり、又武士等は狩衣束帶の袖を合せて、各禮拜したてまつる處に、惡僧進み出でて聖人に申すやう、謗法の罪人は阿鼻大城に墮ちて長時に苦惱を受くると說き給へるは、いづれの經の文ぞやと問ふ。聖人とりあへず大佛頂經の文なりと答へ給へば、此僧合掌して後生たすけ給へと、聖人を禮したてまつれば、粗鼻うそやきてぞ見えたまひける。さて其後あぶらくらに入れ奉り、もてなしたてまつる。御布施には大將殿より御馬六百疋、北の御方よりは長持三百枝、その外大名達御馬十疋二十疋、長持十枝二十枝まゐらせらるれば、いくらといふ數をしらず。されども奈良へみな修理料に參らせられて、聖人の御德分には一つもめされ給はず。さてしもあるべき御事ならねば、いそぎ大將殿關東へ下向ましくき。祕すべしく。

ゆすー倚子

うそやくー未詳

無生忍―無生無滅の眞理を認知すること

入りて、無生忍を證語す、又一切の女人もし彌陀の名願によらずは、千劫萬劫恒沙劫をふるとも、つひに女身を轉ずる事を得べからず、まして知るべし、いま道俗ありて女人淨土に生まるゝ事をえずといはゞ、よく忌惡すべし、信ずべからず、女性たちよくよく此法を聞きたもち念佛申させ給ふべし、油斷して地獄へおちさせ給ひ候ふな、それ女人の惡名をたて申すにはあらず、又天女成佛經には女人の方人をせられて候ふ、天なくして雨ふらず、地なくして草木生ひず、天と地とのめぐみによりて、草木は出生し候へば、それにたがはず、女人は三千世界の佛の藏とこそ說き給ひて候へ、女人なからんにはいかでか佛のたねをばつぐべく候ふ、されば文には女人誹謗罪佛誹謗斷とて、女人一人を謗じつれば、諸佛を謗ずるとも說けり、たのもしきかなや。又觀無量壽經に三輩をわけられたり、上輩の念佛は讀誦大乘解第一義如法如說に、勇猛精進にして一日七日一心不亂に申す念佛は、大乘の念佛ときこえて候ふ、中輩の念佛は戒を保ち時をして申す念佛にて候ふ、下輩の念佛は阿彌陀佛の仰せに、そもそも人となるは種々の不淨をあつめて人とはなれる物なり、身のきたなきこと大海をかたぶけてすゝぐと云ふとも、いかでかきよくなるべき、阿彌陀佛の誓には不論不淨、不論心亂、但念彌陀則得往生との

人の頂に鼎あり、肩に火毒のほむらあり、腹に釼ほくのつるぎの山あり、かくのごとくの不淨惡業のとがを心中につゝめるによつて、女人をば深く忌まれけるものと說きたまへり、されば女體の御門は此涅槃經を御覽じて不當の佛の仰せかな、さながら女人の惡名をたて給ふ事の口惜しさよとて、涅槃經四十卷をみな燒きはらはせ給ひたりしを、御子の德一大師碩學にてわたらせ給ひしかば、空に覺えて書き留め、日本國にひろめ給ひし御事也、女人の業障の深き事かくのごとし、淺ましきことかぎり無しといへども、阿彌陀如來廣大無邊の御慈悲にて、四十八願の中に第三十五の願にのたまはく、設我得佛十方無量不可思議諸佛世界其有女人聞我名號觀喜信樂發菩提心厭惡女身壽終之後復爲女像不取正覺と說きたまへり、此願の心は、たとへわれ佛をえたらんに、十方無量の不可思議諸佛の世界に、それ女人ありて我名號をきゝて喜びたのしみ、菩提心をおこして女身をいとひにくまんに、命終りて後、又女像とならば正覺をとらじと誓ひ給へり、まさに知るべし、又女人成佛の願成就の文に云く、すなはち彌陀の本願力によるがゆゑに女人佛の名號を稱して、まさしく命終の時、女身を轉じて男子となる事をえて、彌陀の御手をさづけ菩薩身をたすけ、法華の上にましますに佛にしたがひて、往生して佛の大會に

女人は地獄の使永く佛子の種をたつ、外面は菩薩に似たりと云へども、内心は夜叉のごとし、同じき經の二十一卷にのたまはく、諸有三千界男子諸煩惱合集以一人女人爲業障とのたまへり、此文の心はあらゆる三千世界の男子のもろ〳〵の煩惱を合せ集めてもつて、女人一人の業障とすとのたまへり、同じき經の二十三卷に、女人大魔王能食一切人現世作纒縛後生爲怨敵とのたまふ、此文の心は女人は大魔なり、よく一切の人をくらふ、現世には纒縛となり、後には怨敵となるとのたまへり、心地觀經の文一の卷四丁めにとき給ふ、三世諸佛眼墮落於大地法界諸女人永無成佛願とのべ給へり、此文の心は、三世の諸佛の御眼は大地に墮落すと云へども、法界の女人ながく成佛の願なし、又阿閦經の一の卷二十一丁にのたまはく、一見於女人永結三途業、何況於一犯定墮無間獄とのたまへり、此文の心は一度女人を見れば、長く三途の業をうく、いかにいはんや一度をかしぬれば、定めて無間獄におつと云へり、法華經の五の卷にも一者不得作梵天王、二者帝釋、三者魔王、四者轉輪聖王、五者佛身とのたまへり、此文の心は女人一には梵天王となる事をえず、二には帝釋とならず、三には魔王とならず、四には轉輪聖王とならず、五には佛身とならずとのたまへり。されば女人は三世の諸佛に捨てられたり、女

者箭を射出したらんが如く、東西南北をめぐり、おこたらず百千年吹きゆきたらん遠さの間に、金銀七寶の堂塔をひとしく造りたらんと、一念の功德と對すれば、毘嵐風の吹きゆきたらん跡の堂塔は、十分一も一念の功德によりつくべからずと見えて候ふ。さて十念の功德は天竺に洹河と云ふ河あり、無熱池の池より流れたる河也、廣さ四十里、深さ四十里あり、水上より湊まで百萬三千六百里流れたる河なり、此河のいさごの數の金銀七寶の堂塔を造立したらん功德とくらぶれば、かの洹河の沙の數の堂塔は、千分の一も十念の功德には及ぶべからずとこそ見えて候へ、又一大三千世界の草木をあつめて灰にやきて、是は其山の木の灰、かれは草の灰と佛はしろしめせども、一念十念の功德とは說きつくしがたしと佛は說きたまふ、中にも此法は女人のために おこし給ひたる願にて候ふ、三業をしづめて耳をそばだて御聞召し候へ、女人は三世の諸佛に棄てられて、佛と成るべきことなし、吾朝は小國たりといへども、女人のまゐらぬ所おほく候ふ、吉野の奥には不動院、比叡山には坂本をかぎる、高野山には不動坂、天王寺には寶塔、善光寺には堂の内へはまゐれども、御格子の内へはまゐらず候ふ、あさましと云ふばかりなし。されば涅槃經には女人地獄使永斷佛種子外面似菩薩內心如夜叉とのたまへり、此文の心は

五劫思惟の間―阿彌陀佛が未だ佛となり給はざる時長大時限の間思惟分別をこらし給ひしをいふ

毘闌―迅猛風と譯す

極樂の阿彌陀佛は十惡五逆の衆生永く三途にしづみて浮ぶまじきかとなげかせ給ひ、五劫思惟の間結跏趺座し給ひて、四十八願をおこさせ給ひ、第十八の願に六字の名號を造らせたまひ、乃至十念の願をおこしたまへり。そもそも五劫思惟と申すは、一切の深き事高さ八十里の磐石を天人のあまの羽衣をきて、三年に一度あまくだらせ給ひて、此岩を撫ではのぼりのぼり、皆なでつくすを一劫と申す也、又八十里の箱に芥子といふ物の菜種よりも小きを、此箱に滿ちたらんを、天人三年に一度下りて、一つづつ取りつくせるを一劫と申す也、如レ此方八十里の岩をなでつくし、八十里の箱の芥子を取りつくすことを、五劫思惟とは申す事にて候ふ、是ほど久しく案じまします功能いかほどとか思召し給ふ、念佛をば立つ子這ふ子をさなき者まで、南無阿彌陀佛と申すはやすき事にて候へども、佛の兆載永劫の間衆生を佛になさんとして、案じましける有り難さよとて、南無阿彌陀佛と申すこそ八十億劫の罪の重罪消滅するとこそ候へ、中にも一念十念の功能のふかき事、喩をとつて申さんに、高堅樹と云ふ木はおひのぼること一日に百丈づゝ、百年おひのぼる、此木の高さに金銀七寶の塔をくみたらんと、一念の功能と對し候へば、高堅樹の高さの七寶の塔の功德は十分の一も念佛一念に及ぶべからずと見えて候ふ。又毘闌風といふ風は大力の

三業―身、口、意

善導―唐の高僧にて淨土教を究む、法然の教は此流を繼承す

らんとする時、北斗さきだち座をはなれ出で給ふ、玉のいづるを人光物の出づると申す事にて候ふ、かゝるめでたき法も七年の兼行五年三年して、いかに悟るといへども、百日の精進潔齋にてこそ、傳法灌頂はつかまつり候へ、かくの如く候ふ間、下界の衆生この法をいかでかたもち候ふべき。又座禪修行と申すは、達磨いにしへの智人達、樹下石上にこもり、岩の上を座と定め、膝をくみ手をむすびて、三業をしづめ身をはたらかさず、七年五年三年通して得法仕り候へども、末世の衆生は風の梢を鳴らすがごとく、海の波の荒れたるごとく、散亂疎動の心なれば、いかでかたすやくかゝる座禪をば仕るべき、此ことわりを存知し給ひて、釋尊世に出でさせ給ひ、すでに八萬四千の教法を說き給ふ、中にも大無量壽經に云ふ、末法萬年餘經悉滅彌陀一教利物遍增と說きたまへり。此經を善導釋してのたまはく、萬年三寶滅此經住百年爾時聞一念皆當德生彼と說きたまへり。かゝる御事にて候へば、源空淨土門を取り立て候へば、外道の法をとりたてて、衆生を地獄へおとさんと仕るとあつて、山中を追ひいだされて候へば、いかでか聖教の所判のまこと尊き處を背くべき、三世の諸佛は十萬佛土を建立して、衆生をみちびかんと誓ひましませども、餘佛は顯密兼學淨行持律のものをこそ迎へんとは誓ひましませ、西方

しれう―未詳

胸には八葉の蓮華あり、佛みなこれにまし〳〵給へり、かるが故に惡業もとより常にな
し、妄想轉倒よりおこる、心藏みなきよければ、衆生もとより佛なり、かるが故に法花經を
そしらん者は、只我身の體をやぶるに似たり。そも〳〵法花經と申すは中天竺のあるじ淨
飯大王の御子悉達太子、十九歳にて大道心をおこさせ給ひ、御ちぎり深かりし耶修多羅夫
人をそむき、いとをしみの御子羅睺羅をふりすて、檀特山にいたらせ、阿私仙人につかへ、
難行六年苦行六年し給ひて、三十成道御ぐし剃除し給ひて、釋尊とあらはれ給ふ、一字
一點なりとも、この御經をあだに申すべき事なし。されば書寫供養して筒に奉納し侍らん
に、口に覆面をして臭き息をあてじと奉納したてまつるべし。かゝる御經をば末代惡世
の衆生等いかでかよく保ちたてまつらざらん。又眞言の教と申すは、たとへば人となる
事は父の婬母の婬をもつてなり、いかなれば父母の婬をもつて人と成るべきぞや、北斗
七星延命經には、九曜七曜の星のあつまりて、作りこしらへる事なれば、大骨、小骨、肉
肝、目、口、耳、鼻、六根六境佛ならずと云ふ事なし、出入の息は金剛界、胎藏界、動き
はたらくこと印契ならずと云ふ事なし、就中北斗七星は、頂を座とせり、最後臨終の時ま
でもしれうを定め、常に其人を守護し給ふ。九曜七曜は、酒飯ともなれり、その人をは

て、高野日笠を顔にあて、いと事もなげなる體にて入堂し給ふ。御供には小坂の善惠坊、長樂寺の隆寛引接坊、筑紫の聖光坊を初めとして、御弟子十二人にてぞ侍りける。聖人の倚子ちかくつらなり給ふ若殿三人、あないやしげの御房や、輿車にてこそまゐらるべきに、かちやはだしで見苦しさよ、是は本よりの貧僧かなんどとさゝやき笑ふ。聖人東西をしづかに御覽じて、幾千萬ともなき聽聞衆を、皆死人ぞかしとおぼしめし、御涙をながさせ給ひければ、北面の下臈どものいひけるは、あれ見給へや、說法すべき智分が無くてこそ泣き給ふにやと、笑ひあひけり。聖人かね打ち鳴らし、東西をごらんじ、人の身の欲心はおそろしきものにて候ふ、碩學達の御說法のあとで、源空がまゐり候へば、何條の法を說きのぶべき、いかさま施物にこそ心をかけて參りたるらめと思召し候ふらん、それもつともにて候ふ、又聽聞衆の御耳才學宏才博覽の人あまた御わたり候へば、はづかしき御事にて候へども、一座の說法はつかまつるべく候ふ、定めて山の大衆はいかさまにも淨土門をほめて、餘衆をきらはゞ恥にあたへんとぞ思しめし候ふらん、八萬四千の法はみな衆生の機根にしたがひて說き置きたまへる法なれば、いづれをそしり、いづれを正しとすべきやらんおぼえず候ふ、中にも我身の體は妙法蓮華經の五字をも建立し給へる事なり、

餘衆―餘宗の衍か
恥にあたへん―恥をあたへんの誤か

伽陀—譯して頌といふ偈に同じ

いきずみ—息を凝らし澄ます意か

四王—持國、廣目、增長、多聞の四天王をいふ

八部—天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅迦をいふ

六靑—綠靑の宛字か

たち、廻る錫杖の役には山より圓入房に定まりぬ。伽陀の役には南都より率の法印但馬の阿闍梨、戒壇院の大夫房、圓明院の式部の阿闍梨を初めとして、十二人とぞきこえし。鐃鉢の役には寺より覺乘坊、道永坊、この淸僧たち我劣らじといきずみけるは、天人も影向し、堅牢地神、梵天四王龍神八部も御納受ましますらんとぞおぼえける。去程に上臈達輿車に乘りつれて御聽聞せらる。座主の御說法始まるに、近き遠きのもの一文一句にても御聽聞とおぼしき事もなかりけり。是を始めとして三座の御說法は過ぎ侍れども、たが耳に入る御聽聞更になかりけり。鎌倉殿の北の御方、大將殿へ御使をもつて仰せありけるは、東國より佛の御說法聽聞のためにはる〳〵上りて候へども、何事の聽聞事も候はねば、法然聖人の御說法聽聞申して下向し候はでと申させ給ひければ、賴朝もさこそ存じ候へとて、御使者まゐらせける。聖人も今こそ參り候ふと御返事ある。さるほどに山の大衆是をきゝて不思議の法然房の振舞かな、碩學達の御說法ありつる後に、何條の法をのぶべき、必ず淨土門をほめて餘宗をそしらんとぞ思ふらん、もしさもあらば倚子より引きおとし、恥をあたへん物をとて、あらき大衆一二百人、姿をかへて聽聞衆にまじはる。聖人是をしろしめされたれども、六靑の小袖のさる體なるに薄墨ぞめの衣めし

淡海公―藤原不比等の諡號

相論―爭論の意

御心せばき御事にて御座候ふ、賤しき者さへ富貴の家に生れつれば、堂を作り塔をくみて、二座三座の說法をばせさする事にて候ふ、いはんや大日本一番の大佛の御供養に、一座の御說法はすけなき御事にこそ候はんずれ、只三人ながら召され候へと申しければ、然るべしとて、三座の說法に定まりぬ。又一二番をぞあらそはれける。さてたれか一番の御導師をせらるべきと申されければ、山の大衆我山の上をばたが期すべき、座主一番とぞ申しける。又奈良法師の申しけるは、花族をたてんずるにたれか山に劣るべき、東大寺は聖武皇帝の御願所、興福寺は淡海公の氏寺なり、花族榮葉、南都の上をばたがおすべき、得業一番とぞ申しける。又寺の僧綱申しけるは、其義ならば我寺の法印こそ九條殿の御子息に壽樂院の寛明僧正の御弟子也、顯密兼學淨行持律の御事也、法印御導師とこそ申しける。相論によつていづれを一番に定むべしともおぼしめさず。又梶原申しけるは、さらばくじを取らせ候へ、くじの籌はかた恨み候はじとて、三人の御代官をめして、足立の藤九郎くじを持ちてとらす。げに山王權現の御はからひにてや候ひけん、山は一番に取りあたる、南都は二番に取り當る、寺は三番に定まりける。さて法會の儀式には山の大衆一千人、奈良法師一千人、寺の僧綱一千人、そうじて三千人は大行道に

顯密—天台華嚴淨土等の敎を顯敎といひ、眞言を密敎と名づく

りしに、死出の山より郭公に女御の御歌を詠みて、娑婆へ言傳られし事ありしぞかし、其歌に云く、

わくらはに問ふ人あらばほとゝぎす死出の山をばひとりこそ行け

と假名に書きて、郭公の足にゆひつけてつかはされければ、卯月八日に內裏の上を鳴きめぐるを、公卿殿上人鞠の會ありけるが、初音めづらしく聞ゆる物かなと、雲井を御覽ずれば、文をくひきつて落したりければ、大臣達不思議と思召し、是をとりて帝王に奏し申しければ、是を開き御覽ずるに、女御の御手跡にて此歌をよみ給へば、御淚にむせばせ給ひ、あらむざんや御存生の時は百官萬乘の位にそなはり、國母女院とかしづかれましましけれども、死出の山をば只ひとり行き給ひけん事よとて、金銅十六丈の瑠遮那佛を手づからみづから鑄たてまつり、行基菩薩を御使として、中天竺より婆羅門尊者を請じ渡し奉りて、供養をとげさせ給ひたりし事ぞかし、我寺の本願を思うて得業こそ導師をばせらるべけれと申しければ、寺の僧綱是をきゝて、さらば我寺の誦源法印こそ顯密の家にてましませば、御導師はせらるべきとぞ申されける。帝王を初めまゐらせて、いづれを導師に定むべきとぞ仰せける。かゝる所に梶原、鎌倉殿の御前に參りて、地體

得業―昔奈良の寺にありし學位にて維摩會最勝會法華會を勤めたる者をいふ
三臺―みだい（御臺）の宛字なるべし

供養の御導師に源空をめされ候ふべき由候ふ、尤も導師にめされん事面目と存じ候へども、淨土門をとり立てて、愚癡闇鈍の衆生を佛道なさんと營み候へば、山の大衆不思議の法然房、外道の法をとり立てて、衆生を地獄へおとさんとせらるゝ不思議さよとて撰擇の形木をうちわりし刻に、黑谷を退出せられ、當時は大原にすみ候ふ、まして導師つかまつると聞えては、廣座とも憚る事は候はん、狼藉仕り候はん哉、かゝる大事の御供養に障碍をなさん事口惜しかるべき事に候ふ、餘の御導師をめされ候へ、源空におき候うては叶ひ候ふまじきよしを申されければ、鎌倉殿賴朝のはからひたるべからずとて、當帝へ奏問せらる。帝王を初めまゐらせて公卿殿上人、さていかゞあるべきと詮義したまふ。大宮の左大將忠光の公の申されけるは、白河の院の仰せにも何事も丸が心にそむける事はなけれども、賀茂河の水と雙六のさいと山法師の心、これ三つは丸の心に叶はぬ物ぞと仰せられし事なれば、今もかくこそ候はんずらんめ、さ候はゞ天台座主をめされ候へと申されければ、しかるべしとて、天台座主を召さるべしとぞ聞く。奈良法師此事を承り謂候はず、其義ならば我寺の得業こそ御導師はせらるべけれ、ゆゑいかんとなるに、聖武皇帝の御ちぎり淺からざりし三臺女御に過ぎおくれたてまつり、御歎き深か

大佛供養物語

春乘房重源東大寺やうやく勸めつくりて入唐す。歸朝のとき極樂の曼陀羅、五祖の眞影をわたし奉り、東大寺半作の軒の下にて、法然聖人御導師として、供養あるべきよし風聞あり。しかる間建久六年乙巳十一月廿八日と定めおかれし事なれば、東國大將殿を初めまゐらせて、宗徒の大名千葉、北條、畠山、宇都宮を初めとして、大名高家三百八十四人、其外數をしらず。又鎌倉殿の北の御方を初めまゐらせて、畠山の內樣、宇都宮の內方は鎌倉殿の北の御方には妹御前にてましくければ、申すにおよばず、大名小名の女房達、法然聖人の御說法聽聞せんとて、六百人ときこえし。京上﨟達には帝王を初めまゐらせて、關白殿卿上雲客籠居日みす達を始めまゐらせて、南都へ輿車をやりつゞくるぞおびたゞしき。其外大和、山城、和泉、河內、近江、越前よりまゐりつどふ聽聞者は、いくらと云ふ數をしらず。かゝる所に法然聖人鎌倉殿へ案內を申されけるは、承り候へば

五祖—善導和尙を指す

日みす達—誤字あるか

大佛供養物語

が思ふ事はよし人のはあしく候てわが身さへいやしく候ふなどと人毎に申しあへり」とあり、一本によりて改む

らあだ事や、よく〳〵工夫ありて見候へ、世の中のことわりは、能智慧も、又千兩の黄金も、其身のながらへ候ふ程也、一たび無常の風におもむかん時は、たゞ一念の發心こそ、まことの道に入るなれと、御心得候へと申し合せけり。はんかいもかの女房に逢ひたてまつらずは、いかで發心有るべき、色こそかはれ、何れも思ひよらざる道心也。あながちに惡をも嫌ふべからず、善のうら也、戀をも嫌ふべからず、心のほそきよりおこり候ふ、かの一大事は、心ぼそく候はでは、いかで御入り候ふべき、かゝることわりも、皆心を知らしめ、佛道ならしめたまはん方便なるとぞ侍りき。

ものごしに―人づてにの意

今より後―一本「向後」とあり

わがなす事はよしと思ひ人のわざをばあしゝと思ふ―原本「わ

只寝ても覺めても、念佛三昧にて、月日をおくり候ふ、めん〳〵にまじはり申す事も、けふはじめにて候へ、過ぎにし春のころ、河内よりこの山へ參りて候ふ人の、ある人にあひて物がたりし候ひつるは、かれらが事を、くすの木が聞きてふびんがり、その時六つになり候ひし男子を取りたてて、篠崎を取らせらるゝ也。又姉は比丘尼になりて候ふよし、ものごしにうけ給り候へば、心安くこそ候へと語りければ、二人の僧、ありがたき御發心にて候ふ、ことさら殊勝におぼえ候ふとて、おの〳〵袖をしぼりけり。さて御身をば何と申すぞと問へは、玄梅と申す也、はんかい入道をば玄松と申し、荒五郎入道をは玄竹と申す也。三人の僧一度に手をうちて、あら不思議や、上の字のかはらぬ殊勝さよ、下の字は松竹梅の字なり、さては我等今生ばかりの契にては無かりけり、たとひ同じ知識の下にて、心を給はり候ふとも、かゝる事はよもあらじ、誠にありがたきしゆくしふどもかな、此あひだ此山にありながら、かくとも申さで過ぎつる事こそ悔しけれ、今より後は同心あるべき事に侍らん、かへす〴〵も皆世の中のありさま、前世の業因きたり迷ひとなる也、こゝを知るを禪といひ、知らざるを凡夫と申す、位も樂みも、智慧も愚痴もみな過去の行ひ也、わが爲す事はよしと思ひ、人のわざをばあしゝと思ふ、あ

見るたびに涙ぞまさる玉手箱ふたおやともに無しと思へば

玉手箱ふたとかけごの黒髪をいふかたもなき身をいかゞせん

是を上人あそばしもはてず、御衣の袖を顔にあてさせ給ひて泣き給ふ、道場のうちの聴衆、貴賤上下道俗男女、袖をしぼらぬ人はなし。是を聞き見る人、あるひはもとゆひを切り、かたなに添へて上人の御かたへまゐらせ、御弟子になるもあり、或は女性はかさの下より髪を切りて上人に參らせ、發心する人もあり、そのほか遁世する人かずを知らず。其時の愚僧が心の內思ひやらせ給へ、しばらく御說法をも聽聞申したく候ひしかども、あはや棄てしきづなに、繋がれん事ぞと驚き、目をふさぎ思ひ切り、たゞ合戰場にて千騎萬騎が中へ斬り入り候て、一命を捨つるもかくやと思ひ、篠崎を出でしよりも、猶大事に候ひし也。さてはるゞゝまかり出で候て、ある木のもとに休み、思案つかまつる事は、座禪工夫も道なるべからず、所詮高野山は弘法大師の入定のところ、諸佛くんじゆの靈地也、いかなる所と申すとも、此御山にまさるべからずと存じ候て、奥の院のかたはらに、柴のいほりを結びて、一大事を修行せばやと思ひし心をさきとして、此山に上りてよりこのかた、更に他念なし。われをも人をも知らず、まして故鄕の事をも知らず、

とりあげさせ給ひてー此下に一本「ひとへに讀誦願文などよむやうに」の一句あり

奥に一首の歌をかきたりー一本「奥にかうこそかきたりし」とあり

く、御涙にむせび給ひ、しばらく物をも仰せられず、上人御落涙はかぎりなし、聽衆の人々も、遠きも近きも袖をぬらさぬ人ぞなき。さて姉が袂より、一つの卷物を取り出し上人に奉る、上人是を取りあげさせ給ひて、たか〴〵とあそばし候ひしを、うけたまはり候へば、それ人間のさかひを聞けば、閻浮の衆生は命不定なりと申せども、その中にも成人する迄、親にそふ人の子多く候へども、いかなる宿執の報によつて、われら三歳の時、父には生きての別れ、母には死しての別れとなりぬらん、今ははや頼む方なくなりはてて、迷ひの心はやるかたもなし、思ひのけぶりは胸をこがし、かなしびの涙かわくまもなし、わが身のやうなる人しあらば、うれへの道を語りなぐさむかたも有るべきに、まどろむ事もなき程に、夢にだにも見たてまつらず、只身に添ふものは、有るか無きかの陽炎ばかり也、三日をすごしけん思ひは、たゞ千年萬年を暮すもかくやと思ひ知られたり、ましてや行末のかなしき事はやるかたぞなき、露の命いく秋をか保つべきともおぼえず、かやうにみなし子となりはてて、誰かあはれとも問ふべき、たゞ願はくはわれら二人をあはれみ給ひ、母もろ共に一つはちすの臺にむかへ給へと、こざかしく年號日付まで書きて、奥に一首の歌をかきたり、

たうば—たふばにて靈廟の意に用ひたるにや

諸佛—類從本「諸天」とあり

し。去程に此をさなきもの共、たうばの内へ入るべきやうもなし。何とあるらんと見候へば、案内申し候はん、是は上人に近づき申すべき事候ふとて、おしわけ〳〵入るほどに、誠に諸神諸佛もあはれみ給ふとおぼえて、人ごとに道をあけてぞとほしける。法會の座にいたり、上人の御前に二人の者どもひざまづき居たりけり。さていかやうにあるらんと見れば、二三人ばかりへだてて、姉が手箱のふたを、上人の御前にさし置きて、三度禮して手をあはせ、ひざまづきゐたり。上人是をつく〴〵と御覽じて、をさなき人はいかなる人ぞと御尋ねあれば、是はくすの木が一門に、篠崎六郎左衞門が子供にて候ふが、わらは三歳の時、父にて候ふものは、くすの木と中をたがひ、遁世して今に行きがたも知らず候ふ、此程は母ひとりに、添ひたてまつり、浮世をあかし暮して候ふが、有爲無常のならひの悲しさは、母にて候ふ者にさへ別れて、けふはや三日になり候ふ、御骨をだにも取るべきものなく候て、兄弟のもの共とりて、箱に入れては候へども、置くべき所をしらず候て、上人をたのみ參らせんがために、これ迄もちて參り候ふ、ねがはくはいかなる所にも納め、母を早く淨土へ入らせ給へと囘向して給はり候はゞ、ひとへに御利益にて有るべしと申せば、上人誠にあはれに思しめし、とかくの御ことばもな

せいちやうしや―生長者か

相續して―一本「滅亡して」とあるよろし

はいてんだう―拜殿堂か

ちりとり―前出

申し候へば、いとけなき人の有るまじき事と、叱り候ふ程に、思ひながら參らず候ふと申す。さらば御とも申し候て、上人をもをがみ申し、結緣をも申し候はんとて、つきて行き候へば、なか〳〵物も申されず。道すがら此姉申し候ふは、われらが父いまだ生きてましまさば、御僧の年頃にこそ渡らせ給ふべきに、淺ましや、いかなる罪のむくいにや、父には生きてはなれ、母には死して別れをなす事の悲しさよ、せいちやうしやの事ならば、父御のおもかげは身にそひて、うき心の友ともなるべきに、なさけなの父御やと申し、聲も惜まず泣きし時、弟が申すやう、父御は佛になりてましますと、朝夕母御の仰せ候ひつるものを、さのみ泣き給ひそと、こざかしげに申せし程に、それがし前後を失ひて、行く道も見えず候ひし也。さても此御寺と申すは、聖德太子の御建立也。元弘建武の動亂に、所領こと〴〵く相續して、はいでんだうすたりしを、くすの木が代になりて、所領を元のごとく返しつけ、修理をなし、京都より妙法上人を請じくだし申して、供養をのぶるよし申すあひだ、見ばやと思ひてゆく程に、ほうにんじも近くなりければ、げに貴賤上下袖をつらね、道俗男女市をなす、輿ちりとり鞍おき馬、いく千萬とも數しらず、すでに三ヶ國の人々群集す。木の下萱のもとまでも、皆人ならずといふことな

しがたく候ふと言ひしもはてず、袂を顔におしあてて、聲もをしまず泣きゐたり。弟はいまだ聞きわけたる事もなく、姉に取りつき、もだえこがれて泣く計り也。その時さらにむも消え、目もあてられず、何にたとへんかたも無くて、たゞはらを切るもかくぞと思ひきり、立ち出で候ふ程に、かれらも見おくり候ふ。それがしも見かへり〳〵行き候へば、是ら母の骨をばこの蓋に入れもちて、我宿の方へは行かずして、よそへまかり候ふ程に、又立ちかへりて、そなたへはいづくへわたり給ふぞと申せば、是はほうにんじと申す御寺に、都よりたつとき上人御くだり候て、七日の御說法にて候ふが、今日はや五日になり候ふ、人々參り候ふ程に、われらもまゐり御聽聞申し、此御骨をもをさめばやと思ひ候て、扨御寺へ參り候ふと申し候ひし程に、それがし申すやう、あらいたはしや、いとけなき心にも、かやうに思ひよらせ給へば、いかに母御の草のかげにて嬉しく思はせ給ふらん、さてもほうにん寺と申すは、これよりいか程候ふらんと尋ねて候へば、いまだ知らず候へども、人の行くにまかせてまかり候ふと申す。などや人を召し具し給はで、御わたり候ふぞ、あまりに御いたはしく候ふものかな、明日おうぢとやらんをも召しつれて、御參り候へかしと申せば、姉申すやう、此程參るべきよし、おうぢに

言語道斷に―言にいへぬ程おもしろく

草木までわれをあはれと思ひてや涙に似たる露を見すらん

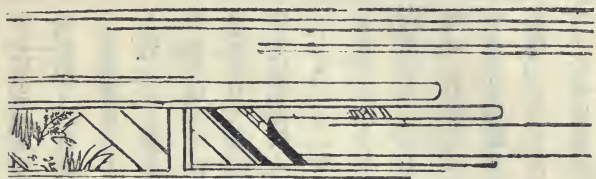
此歌をきゝて、強き心も失せはてて、せんかたなくして、露霜ならばすでに消えぬべき心ちして、いや〳〵今は包むとも叶ふまじ、われこそ汝が父の六郎左衛門入道よと、いはゞやと思ひしかども、心よわくてかなふまじ、年來思ひ立ちて、遁世したる身の、けふ子といふ首枷をになふべきか、かく思ふ事は甲斐なき心かなと、我と心を恥ぢしめて後に、それがし申すやう、此歌こそ言語道斷にあそばして候へ、まことに神も佛もいかであはれと思しめしたまはざるべき、父母も草のかげにて、いかに嬉しく思ひたまはん、我らは物のあはれも、なさけの道も知らず、かゝる賤しき身にて候へども、今の御歌をきゝては、涙もせきあへず、いかで心あらん人きゝ給ひて、御心の内をあはれみ給はで候ふべき、只今是をまかり通り、かゝる御いたはしき事を見まゐらせ候ふも、思へば前世の宿執にてこそ候ふらん、見はなしがたく思ひ參らせ候へども、中々いとま申すとて立ち出で候へば、姉が申すやう、仰せのごとく一樹の蔭にやどり、一河の流れを汲むも、皆他生の緣とこそうけ給はり候へ、またいつの世にか、めぐりあひ參らせ候ふべき、返す〴〵も御名殘をしくこそ候へ、ことさら御經あそばしてたまはり候ふ事、申し盡

てこれらが玉の手箱の蓋をば、姉がもち、かけごをば弟がもちて、たれか教へけん、竹と木とのはしをもちて、骨をひろひけるが、尙いふ言の葉もなく、袖をかほにおしあて〻泣き候ひし時、はる〴〵ありて、それがし申すやう、上﨟たちはいとけなくわたり候ふが、何とておとなしきものは候はぬか、みづから骨をとり給ふと申せば、我等が父にて候ふ人は遁世し、いまだ行くへも知らず候ふ、其のちはたゞ下のおうぢと申すもの一人候ひしも、けふは供をもせずとて、詞すくなになりて、涙にむせび、物をも言はざりしとき、愚僧陀羅尼をよみ候はんも聲も出でず、古郷へ二たび來りけん事の悔しさよと、我が身をうらめしく思ひし也。いや〳〵かくては叶ふまじ、陀羅尼をみてんと思ひて、みて候ひしをり節、時雨さつとして、木の葉の露も、涙のごとく見え候ひしを、姉が見て申すやうは、母にて候ひし人は、京の人にてわたり候ひしが、わらはに教へさせ給ひしは、歌の道にはいかなる恐しき鬼神も、又うとき人も、聞きては心もやはらぎ、佛も納受し給ふ也、女の身として歌の道に心をつけずば、淺ましき事と仰せ候て、わらはは七歳の年よりも、かたのごとく文字をつらね候ふ、たゞ今思ひいだされて候ふとて、一首かくなん、

かつら—且

て思ふやう、發心して家を出で候ふ時、初めは妻子をふりすてて出でゆきしに、今は死してすでに三日にあたり候ふ、茶毘所を見ながら通らん事、無道心也、知らずは力なし、たまたま法師の身とはなりて、立ちより陀羅尼の一へんも滿てずして、通らん事は邪見也、かつうは利益もかけ、かつうは、亡者の草の蔭にて怨みもあらん、かへりて見ばやと存じ候て、たちより見るに、木かげにいとけなき二人の者つくばひゐたり。あれそれよと思ひて申すやう、上﨟たちはいかなる御事なれば、かやうの所に御わたり候ふぞと問ひ候へば、其返事をばいはで、あら嬉しや、これはわれらが母の御他界にて、けふ三日になり候ふ程に、骨をひろひ候ふ所に、けふしも御僧の御通り候ふ事の、うれしさよ、恐れながら御經あそばして給はり候はゞ、御利益にて候ふらめと、かきくどき申すあひだ、その時目もくれ心も消えて、さらに夢うつゝとも思はず候ひし也。しばらく心をとりなほし、此をさなき者をつくゞゝと見候へば、姉は九つ弟は六つ也。さすがに下﨟の子どもにも似ず、かたちいたいけに見えたり。親子恩愛の道なれば、いだきつき、父よと名乘らばやと思ふ心は、ちたびもゝたび候ひしかども、いやゝゝ心弱く候ては、此程の辛勞無になり、佛道に入りがたしと存じ候て、こらへて候ひし事、思召しやらせ給ひ候へ。さ

子孫—一本「子息や孫達」とあり
末—一本「行末」とあり
ゆき過ぎ—一本「かへり過ぎ」とあり

そその六郎左衛門入道よと、言はゞやと思ひしかども、いや〳〵さては此間の修行いたづらごと也と存じ候て申すやう、まことに有難くこそ候へ、いかなる人か、尉殿のやうなる心ざしの人か候ふべき、あらいたはしや、世の中にかゝるあはれなる事も候ひけるよと、そのをさなき人の御なげき思ひやるも、ともかくも申しがたく存じ候ふ、此僧もさほどの事までは候はねども、さやうの思ひをして候ふ也、何よりもをさなき者の父母におくれたる程の、世に悲しき物はなかりけりと申して、衣の袖を顔にあてて泣き候へば、扨は御僧もいにしへさやうの思ひをして御座候ふやと申し候て、聲も惜まず泣きゐたり。やゝ久しくありて、それがし申すやう、尉殿よ、これよりのちも、見はなし給ふなよ、いかに〳〵父母の草のかげにて嬉しく思ひ給ふらん、又尉殿の子孫にむくい候て、末もめでたくあるべし、返す〴〵も其をさなき人たち、いとをしみ給はゞ、佛神三寳も尉殿をまもり給ふべし、いとま申して尉殿、日もくれ候へばとて、たち行きけるに、はる〴〵と送りねんごろに物語り申し、何につけても此尉は、泣くよりほかの事はなし。われらも涙をおさへて、尉殿ははやとまり給へと申せば、とまりぬ。少し行きて見れば、げにある木の下に、人を荼毘して見え候ふ程に、中々と存じ候てゆき過ぎ候ひしが、又心をかへし

御方便候て一手段をめぐらして

いやしき一本浅ましきとあり

様を見まゐらせ候て、あまりに御いたはしく存じ候て、わたくしを打ちすてて、此五六年があひだ宮仕ひ申し候ふ、六郎左衛門殿御遁世の時、三歳になり給ひし姫君、いとけなき若君をふりすてて、御遁世候ひし程に、母御のとかく御方便候て、御はごくみ候ひしが、此上臈さまも飽かぬ別れの思ひにや、病者とならせ給ひ候て、こぞの春のころよりいたはらせ給ひ候ひしが、此程は食事をたやし給ひ候て、はや御他界候て、今日三日になりたまひ候ふが、此公達の御なげき見申し候ふに、中々に目もくれ心も消ゆるばかりに覺え候ふ也、あれに見えて候ふ松の本に茶毘し申し候て候ふ、このをさなき人は二人ながら、毎日泣く〳〵茶毘所へ御參り候ふ、けふも御供申すべき由申して候へども、よし今日はともをせずともと仰せ候ふ程に、人なみ〳〵にこの田を打ち候ふなり、是も尉がためにはあらず、君達の行末を思ひやり候て、御いたはしく候ふ程に、此田を打ち候ふ、此尉をばおうぢと申し、おうぢならでは御頼みありがたく候ふ程に、けふも君達のおそく御歸り候ふ程に、あなたのみまほり申し候へば、田を打つも身にそまず候ふと申し候て、さめ〴〵と泣きにけり。其時餘りに不便におぼえ、かゝるいやしき者だにも、かやうの情は知りたりけるに、わが身はあまりに邪見にて棄てける事よと存じ候て、是こ

その近き道の邊に淺ましき尉が、一人田をうちて見えたり。此尉はいかにもいにしへの事をば知りたるらんと存じ候て、立ちよりて問はゞやとおもひ、やあ、ぜうどのよ、此所をばなにと申す所ぞと問ひて候へば、ぜうが著たりし日笠をぬぎ候て、しのざきと申す所にて候ふと答へ申すなり。さていかなる人の御領ぞと尋ね候へば、篠崎殿の御領にて候ふと申す程に、さてはわれらが事をば知れるかと存じ候て、それがし田のくろに腰をやすめ、此ぜうも鍬を杖につき候て、心しづかに事の子細をかたりけり。是は篠崎のかもんの介殿と申して、何事も人にすぐれておはせし候ふ程に、くすの木殿も一大事の御事に思しめして、深く御たのみ候て、同じ御一族ながらも、賞翫御申し候ひしが、其御子息に六郎左衞門殿とて、くすの木殿京方へ御降參候ふを御うらみ候て、御遁世にて御座候ふが、御行方も知らず、當時は北國方に御座候ふとも聞え候ふ。又御他界ともうけたまはり候ふ、誠に御左右のある事は候はずと申し候て、涙を流し候ふ間、それがしも涙をおさへて申すやう、さて御身は御内の人か、又は御領の人かと申せば、此尉は御領のとしごろの御百姓にて候ふ、六郎左衞門殿御遁世の後は、當所あれて、みやづかひ申すもの一人もなく候ふ程に、我らは人數ならぬ身にて候へども、御臺御君達の御有

他界―死去
御左右―たより

會下—僧の門下

三人法師　下

さる程に河内の國篠崎をまかりいで候ひし時、三つになり候ふ女子一人男子一人、ふたりの幼きもの、妻にて候ふもの共を打ち捨ていでし時は、さすがに多年の夫妻のよしみと申し、なごりをしき事千萬に候ひしかども、是ぞ十分の遁世と思ひきり、やがて關東へ修行にいでゝ、松島の會下に三年候て、その後北國を修行の心ざし候ひし間、とてもかやうなる半出家のものは、諸國をめぐり、いかなる知識にも結緣をもなげき、名所舊跡をも見て、心をもなぐさめ、又とてもありはつべき浮世の中ならねば、ありきたふれてと存じ候て、日本國をめぐり、西國をさしてのぼり候ふ程に、不思議に河内の國を通り候ふ間、古鄕篠崎のありさまをも見ばやと思ひ候て、身がいほりのほとりへ立ち寄りて見候へば、築地はあれども、おほひも無し、門はあれども扉もなし、庭には草ふかく生ひしげり、家どもは皆こぼれ失せて、わづかにあやしの賤がいほり二つ三つ殘りたり、夫さへ雨風たまるべくもなし。見るに目もあてられず、涙を流しまかり通り候ひしが、

申して候へば、上洛して東寺にて管領に對面しけるとうけたまはり候ひし程に、君の御運命も盡きさせ給ひぬ、身一人くすの木をはなれて、功をなす事ありがたし、またつれて降參は、本意をそむき候ふあひだ、是こそ善知識よとぞんじ候て、遁世つかまつり候ふぞや。

所存のほか―案外

わろがり―非難する

師―君とあるべきなれど諸本皆此の如し

ふ程に、所存のほかに存じ候ふ間、くすの木にあひ候て申せしことは、まことしからず候へども、足利殿へ御降參あるべき由うけ給はり候ふ、まことさやうに思召し候ふやと申して候へば、あまりに君の御うらめしき事ども御座候ふ程に、さやうに思ひ立ちて候ふと申せし程に、身が申すやうは、君を御うらみ候はゞ、我が身をすてて、遁世したまひてこそ、まことの御うらみにては候へ、足利殿へいでさせ給ひ候ては、君に弓を引き給はん事、御うらみにては候はず、君の御運盡きさせ給ひ候ふを、見限り申し候て、わが身を立てんがために、足利殿へ降參と人申すべし、降參の事はゆめ〳〵有るまじく候ふ。などや是程の大事を思しめし立ち候はゞ、まづわが身かひ〴〵しく候はずとも、うけたまはり候はずと申せしなり。くすの木が申すやう、御分さだめて此事をわろがらせ給はんと存じ候て、申さず候ふと申す程に、わが身わろがり申し候はんずるを思召して候ふ御心をもつて、諸人のあざけりを思ひやらせ給へ、一代ならず宮方にて討死つかまつり、名を後代にあげ給ふが、御分の代として、未練のふるまひ口惜しき事にて候ふなり。何の御うらみが御入り候ふべき、今の拜領も師の御恩にてこそ御わたり候へ、君きみたらずといへども、臣をもつて臣たりといふ古人のことばあり、只思しめしとまり給へと

隨分のもの—相應の位地あるもの

ゆゐせき—遺跡か

はや〳〵語り候へとせめられて申すやう、めん〳〵の御發心のやうをうけ給はり候ふに、言語道斷に覺えて候ふ、前世の宿執と存じ候ふ、それがしが遁世はさほどの事までは候はず、語り申しても中々無益にて候へども、御兩人御かたり候ふに、語り申さねば、同心申し候はぬに似たり、工夫のいとま惜しく候へども、きこしめし候へ。わが身は河内の國くすの木には一族にて候ふ、篠崎のかもんのすけと申すものの子に、六郎左衛門と申すものにて候ふが、親にて候ふものは、くすの木の正成がためには、隨分のものにて候ふ間、一大事をも内談し、何事をもあひはからひ候ひし程に、一門他門、くすの木にさるものあると、人に知られたるものにて候ふ也。正成討死の時も、一所にて腹を切りぬ、正行もゆゐせきにて、われらが事をば、疎略なく候ひしあひだ、われらも是が事をば一大事に存じ候ひしなり。その後正行うちじにし候ひし時は、一所にて身も討たれ候ひしかども、かたきに首を取られずして、少し息のかよひけるを、知れる僧見あひて、或所にかきて行き、看病せられて、不思議に命いき候てかへりて候へば、今のくすの木正儀悅喜をなし、親にて候ふものを、正成が存じ候ふごとく、たがひに思ひあひ候ひし處に、人づてにうけたまはり候へば、足利殿へ降參申すべき由をうけたまはり候

寸々—一本「ぶん〳〵」とあり
命をしみ申すべきにあらず—一本「命をしむに似たれども」とあり

七條—袈裟の名
だうぎやう—道行にて佛道修行をいふ

のぼり候ひし也。さこそ無念におぼしめし候はん、いかやうにも愚僧を殺したまへ、身を寸々に斬り給ふとも、さらにいたみ申すべからず、只愚僧をころし給ふとも、上臈の御ためには中々業因なるべし。かく申し候へば命をしみ申すにはあらず、三寶も御示現候へ、申しいづるうへは、ともかくも御はからひたるべしと語りて、衣の袖をぬらしけり。糟谷入道申しけるは、たとひ世の常の發心なりとも、たがひにこの姿になり候て、なにの心が候ふべき、まして此人ゆゑの御發心なれば、ことさらになつかしく思ひ申す也、まことにさも候はゞ、この人は菩薩の變化なり、かゝる女人とあらはれて、無緣のわれらを助けんがために、大慈大悲の御方便と思ひ候へば、なほ〳〵いにしへこそ忘れがたく候へ、かゝる事候はでは、いかでわれら出家して浮世をいとひ、かの無爲のらくを受けん事は憂ひの中のよろこび也、けふより後は道心なるべき事こそ、かへすぐ〵も嬉しく候へといひて、墨染の袖をぬらしける。

さて今一人の僧の、發心の由來うけ給はり候はんと申せば、是も老僧なり、衣の破れたるに、七條をかけて、看經ありしが、だうぎやうに痩せて色くろみ、そのさま衰へてあれども、さすがよき人にてぞあるらん、誠に道者と見えて、いねぶりてまし〳〵しを、

なさけをだにも知らぬ身となり―なさけをだに知らん身となるべきになどあるべき所なり

り候ふべし、小袖には換へべからずとて、茶碗に湯をうめてふりすゝぎ、竿に掛けほしをどりはね嬉しがり喜ぶ事かぎりなし。さても女の寶まうけたり、あら嬉しやと申し候ひし、此女のありさまをつくゞゝと見て、あらあさましや、不得心や、前世に佛法の結縁あればこそ、人とも生れてあるらん、たまゝゝ人身をうけだる時、佛法をも修行して、善人までこそ無くとも、せめて世の中のなさけをだにも知らぬ身となり、大惡人となりて、よるひる思ふ事は、たゞ人をころし、盗みをせんたくみならでは思ふ事なく、因果のがれず、つひには無間地獄の業因と思ひ知られたり、かやうの惡業をつくり、露の命をつなぎ、ゆめの夢を知らぬ事よと、わが身ながらも口をしや、又めのこらが心の内不道さよ、中々申せばおろかなり。かゝる女に枕をならべ、契を結びし事こそ、かへすゞゝも悔しけれ、あら淺ましの女の心やと思ひとり、なにしに此上臈をも殺し參らせつらん、いたはしさよと思ふばかりにて、肝心も消え入る心地して候ひしが、いやゝゝかくては叶ふまじ、是を菩提心の善知識として髻をきりて、此上臈の御跡をもとぶらひ、又我身の菩提をも願ひ候はんと思ひ立ち、やがてその夜のうちに、一條北小路へゆき、玄慧法印に逢ひたてまつり、御弟子になり、名をばげんちくと付けられ申し、やがてこの山に

めのこら―妻子等の意

あらいかにと―「と」は「も」の誤か

大名にて候ふものかな―寛仁大度なりとの意

たてまつり、袋をふところにおし入れて申すやう、いかに女どものよろこび候はんと、ひとり言を申し、家にいそぎ歸り、戸をたゝき候へば、女にて候ふもの申すやう、あまりに早きは何事もせぬかと申しける。はやく戸をあけよと申して、袋をうちへ投げ入れ候へば、いつのまに取りつらんとて、袋の口あくるをおそしと、つゞりを引き切り、取りいだし見るに、異香くんじたり。十二一重の御裝束なり、紅花綠葉のきぬ、皆紅の袴取りいだせば、にほひ滿ちたり。小路をゆく人もあやしめ、となりあたりの家までも、おどろく程のにほひ也。めのこらよろこぶ事限なし。女房かたじけなくも御はだぎをば打ちきて、このやうなる小袖きたる事、いまだ生れてよりこのかたはじめなり、かほどの裝束き給ふ女房の、年も若くこそ御わたりあるらん、いくつばかりの人ぞと申す程に、なさけをも知りて問ふぞと心得て、夜目に見つれども、今二十二三まではよもなり給はじ、十八九の人なりと申しければ、中々と申し、是非をいはず、そとへ出づるほどに、たゞいかやうの用にもいで候ふかと思ひ候へば、やゝ久しくありて來り申すやう、あらいかにと御身は、大名にて候ふものかな、とても罪つくるならば、少しも得のあるやうにはさせ給はで、現在わらは行きて、髮を切りて取りたり、是程の髮こそなけれ、かづらにひね

まぼり―守袋
異香薫じて……かやうに候へ―一本によりて補ふ

上の方より異香薫じて有りしかば、すはやさりぬべき人のくるよと思ひ、されどもいまだわが身が運はありけるよと、うれしくて見れば、あたりもかゞやく程の上臈の、異香くんじてさゞめきわたりたり。下女二人つれて、一人をばさきに立て、一人をば跡に、うはざしの包もたせて、身が候ひしをば、見ぬやうにて通り給ひしを、やりすぐし申しておつかけたり。まへに立ちたる女房は、あら心うやと申して、行くかた知らず、あとなる女房は御包うち棄てて助け給へとて走りにげにけり。されどもこの上臈は少しも騒ぎ給はず、聲をも出ださずおはしゝを、太刀をばひきそばめてつつと寄り、なさけなくも剝ぎたてまつり、はだ小袖をも給はらんと申し候へば、いかでかはだ小袖は、女のはぢにて候へば、許したまへとおほせ候て、御まぼりを持ちて、是をはだ小袖のかはりと仰せ候て、投げいださせ給ひしが、異香くんじて咽ぶばかりに候ひし也、さらに人間のたぐひにてはなし、天人にて御わたり候ひし也。かやうには候へども不道のものの悲しさは、こればかりにてはかなふまじ、御はだ小袖をもたまはらんと申せしかば、はだぎを脱ぎては、命いきても甲斐なし、たゞ命を失ひ給へとのたまふ。それこそ本より好む所なればと申し、たゞ一刀にさし殺したてまつりて、はだ小袖に血をつけじと、あわてて肌著を剝ぎ

のうさく―農作

てうほう―重寶（チヨウハウ）かをさあい―をさない者の訛

くるまだち―いかなる太刀をいふにや

ちりとり―屋根のなき輿

すがるやか―すは接頭辭にて輕やかにの意

扶持すべき營みし候はん、もとより所領も持ちたまはず、あきなひもせず、のうさくもなし、只一圓に人の物を取り給ひしも今はかなはず、子どもの行末も知らず、あまつさへ家をもうち棄てて、よそを家とし給ひしも、たゞみづから故なりと覺えたり、たとひ家をこそすさまじく思ひ給ふとも、などや子どもの渴命をもはからせ給はぬぞ、此二三日はわれらもあさゆふてうほう盡きて、けぶりをも立てず、あのをさあい者どもが、泣き悲む事、見るもいかほど悲しく候ふぞと、かきくどき申し候ふ程に、わが身申すやうは、前世の因果やつもりたるらん、さりともと思ふ事も皆ちがひ候ふ程に、此あひだはほかへ行きてありしかども、子どもの事ゆかしくありし程に、歸り來てあるなり、やすき事なり待ち給へ、けふあすの程に何事も候はんと申して、それがしが心に思ふやう、こよひにおきてはと存じ候て、日の暮るゝをおそしと待つ程に、寺々の鐘もひゞき、たそがれ時にもなりしかば、例のくるまだちを持ちて、あるふる築地の陰にたち、往きくる人を今やおそしと待ちゐたり。その時の心の内、いかなる樊噲張良なりとも、たゞ一太刀の勝負と存じ候て、手を握り待ちゐたり。さる程にちりとり一ちやう、すがるやかにいでたち、何れも若きもの雜談して通る。これは心なきよと心得てやりすごしぬ。又一町ばかり

しゆくしやう―宿障
山だち―山賊

近くなり候へば―原本「近く候へば」とあり、一本によりて補ふ

づまり候へ、事の子細くはしく語り申さんといへば、はんかい思ひなほし、はやとくとくとありければ、あら入道申すやう、京の人とうけ給り候へば、定めてきこしめしても候ふらん、それがしが名をば三條の荒五郎と申すものにて候ふ、九つの年より盗みをしそめて、十三の年人を切りそめ、その上臈までは三百八十餘人也、夜打強盜を身の能と思ひ候ふ也。然るにしゆくしやう因果のつもりけるか、其年の十月の頃より、ぬすみをすれどもかなはず、山だちをするも取りえず、是ぞと思ふ事も、にはかに違ふ事のみにて、苦勞せしほどに、朝夕のけぶりも立たず、妻子のありさまもすさまじく候ふあひだ、心うく候て、霜月の比よりよそを家とし候て、こゝやかしこの古き御堂のひさし、あるひは都のやしろの拜殿などにて、夜をあかし日をくらし、まはり行くほどに、あるとき家のありさまをも見ばやと思ひ、さし入り見れば、女にて候ふもの、それがし袂をひかへ、さめ〴〵と泣きて申すやう、あらうらめしや、などなさけなく候ふぞや、夫婦のちぎり不定なる事、めづらしからぬ事なれば、あながち歎くべきにもあらねども、今ははや緣つき心かはり候へば、なにと慕ひ悲み申すともかなふまじ、はや〳〵いとまをたび給へ、女の身ひとつは過ぎわびまじく候ふ、正月も近くなり候へば、をさなき者どもも、

はんかい―かす谷を半谷と誤書しそれをはんがいと讀みたるにや

髪をだにゝ切りて候ふ程に、ともかくも申すばかりなく呆れはて候ひし也。いかなる罪の報にや、かゝる憂きめを見る事の悲しさよ、逢ふを嬉しと思ひしも、今はかへりてうらみなり、さきだち行きし人ゆゑに、なにしに心を盡しつらん、我ゆゑに君もいまだ廿にも足らずして、女房の身として、邪見のつるぎのさきにかゝり給ふ事よと思ひし、その時わが身が心のうちをば思しめしやらせ給へ、いかなる鬼神、乃至五百騎三百騎が中へわつて入り、心ばかりのはたらき、棄つるいのち露ちり程も惜しからず候ひつれども、知らねば力およばず、やがて其夜に髻をきりて僧になり、この御山にはや廿年ばかり、その女房の菩提をとぶらひ候ふなりと語りければ、二人の僧、墨染の袖をぬらしけり。

又一人の僧、年五十ばかりになりけるが、たけは六尺ばかりにて、くびの骨ぬけ出で、おとがひそり、頰骨あれ、脣あつく目鼻大きに、色くろく、きはめて骨がちなるが、やぶれたるぬの衣に、おなじくくわらふところにおし入れて、大きなる數珠をつまぐりて申すやう、此次をばそれがし語り申さんといふ。さらばとく〳〵語り給へといひける。不思議やな、その上﨟をばそれがしが殺しまゐらせしといふ。はんかい聞きてきつとゐなほり、色かはりて思ひきりたる體なり。その時入道僧申すやう、しばらく御し

せ、緑のまゆずみ、丹花の脣、まことにむつまじき御姿にて、椽へ立ちいでさせたまひ、一首かくこそあそばし候ひしぞや。

ならはずよたまに逢ひぬる人ゆゑにけさは置きつる袖の白露

かへし

こひえては逢ふ夜の袖の白露を君がかたみに包みてぞ置く

さて其のちは御所へも參り候ふ、又身が宿へも忍びてときどき御入り候ひし事なれば、定めて御ひろうにもあるらんとて、將軍より近江の國に千石千貫の所をまゐらせられ候ひしなり。次にわれらは北野の天神を信じ申し候て、毎月廿四日に參籠仕り候ひしが、此女房ゆゑに懈怠申し候ふ程に、をりふし頃は十二月廿四日の夜にて候ふ程に、歲末と申し、此程の懈怠をも懺悔申さんがために參りて、夜のふくるまで念誦申し候ひし處に、あるかたはらに、あらいたはしや、何れの人にて御わたりあるやらんと申すを、あやしと聞き、よくよく尋ね候へば、都近くなるところに、年十七八ほどの女房をころし、衣裳を剝ぎとりたると申す程に、あまりに怪しく思ひ、取るものも取り敢へず走り行きて見候へば、少しもたがはせ給はず、かの女房にて候ふあひだ、夢うつゝともおぼえず、あまつさへ

御ちうさく—御中媒か
けつこう—結構にて用意すること
けてう—嚴重にていかめしくの意
女房又—女房またの術か

なき世かな、たとへをのへ殿に逢ひたてまつり候ふとも、たゞ一夜の夢のちぎりなるべし、是こそ遁世する所と存じ候ひしが、又打返し思ひ候ふ事は、糟谷こそ二條殿の女房たちを戀ひ申し、將軍の御ちうさくにて有りけるが、臆してあひ申さで遁世したるなどと言はれん事、生涯の恥と存じて、せめて一夜なりとも逢ひ申し、そののちはともかくもと存じ候て、ある夜おもひ立ち、さしてけつこうするとはおぼえず候ひしかども、けてうに出立ちて、若黨三人めし具して、案內者をもつて、夜ふけがたに二條殿の御所へ參りて候へば、きようがる座敷を屛風唐繪にてかざり、同じ程の女房達四五人、花やかにいでたたせ給ひて有りし所へ入りぬ。さておの〳〵酒二三獻すぎ候て後は、茶香のあそびさまざまに候ひしなり。只一目見申せしことなれば、何れがをのへ殿にて御わたり候ふやらん、いづれも〳〵うつくしく御入り候ふ程に、迷惑仕り候ふ所に、きこしめしたる御盃を持ちながら、我身が候ひし所ちか〴〵とさし寄らせ給ひて、人一人へだて候て御思ひざし候ふ時こそ、是が尾上殿よと心得て、御さかづき給はり候ふ。さて夜も明けがたになりしかば、八聲のとりも告げわたり。寺々の鐘もきぬ〴〵のわかれをもよほし、行くへ久しく契りおき、女房又夜ふかきにかへり給ふ。ねみだれ髮のひまよりも、花やかなるかほば

をもせさせ、心の内をも尋ね候へと御諚なれば、佐々木まゐり、まづ身をうらみ候ひしやうは、傍輩多きその中に、御邊とそれがしは深き契約申し候て、兄弟の如くに候ひつるに、などや是ほどの御いたはりをばうけたまはり候はぬと、色々に怨み候ひし間、それがしが返事には、さしていたはりなく候ふ程に、一人もちて候ふ老母にさへ知らせず候ふ、御うらみは御ことわりにて候ふ、その上大事候はゞ、これより申すべく候ふ、事々しく候ふに御かへり候へ、身こそ候ふらめ、御所中の事は不思議なる事も候てはと、かさねて申し候ひしかども、看病すべきよし申し候て、四五日打添ひて、わが心の内を問ひ候ひしに、しばらくは包みしかども、あまり心ふかしと思ひ候て、ありのまゝに語り候へば、佐々木此よしを聞き候て、さては御分は戀をしけるものを、あら易き事やとて、さらぬやうにて座敷をたち、やがて御所へ参り、此よしを申上げけり。さては易き事よと仰せありて、かたじけなくも御所樣御文をあそばして、佐々木を御つかひにて、二條殿へ参らせられける、御返事には、をのへと申す女房にてわたり候ふ程に、地下へくだすまじきにて候ふ、その人をこなたへ給はり候ふべきよしあそばされ候ひし文の御返事を、我らが宿へ給はり候ふ、御所樣の御恩報じ申すべきやうもなし。これにつきてもあぢき

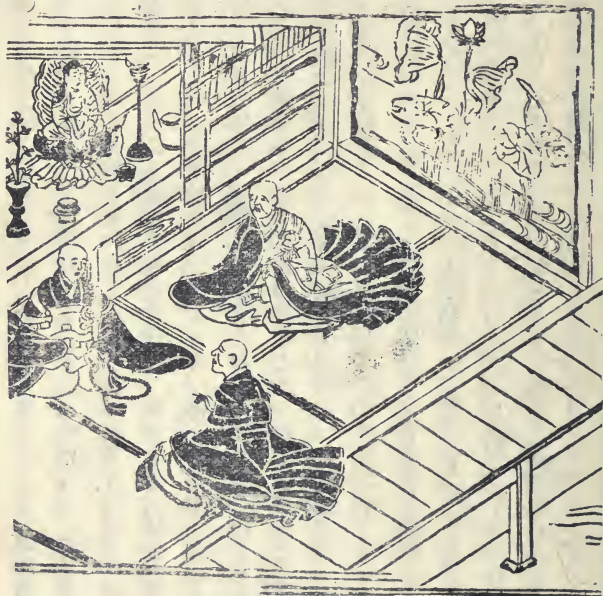
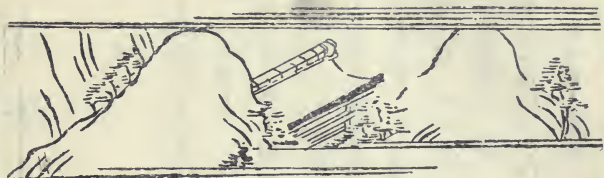
心ふかし—用心深し

給はり—一本下されとあり

いたはり—所勞病氣

昔ならば戀云々—戀情を卑みし時世を見るべし

さる程に將軍も還御なりぬ、わが身も宿所にかへり候ふ。さてそののち上﨟のおもかげ忘れがたく候て、食事をたやし打ち臥して、四五日出仕をも申さず候ふほどに、御所樣より、何とて此程はかすやはまゐらぬぞと御尋ね候ふに、違例のよし申して候へば、やがて藥師を召されて、療治をもせよと仰せられ候ふ程に、くすしわが宿へ參りぬ。起き直り烏帽子直垂うちかぶり候て、對面つかまつり候へば、脈をしばらく取りて、もとの座敷へなほり、申すやうは、あら不思議や、べちに本病とはおぼえ候はず、人を怨みさせ給ふやらん、または大事の御訴訟を御もち候ふかと申しけり。其時さらぬ體にもてなし、われら幼少に候ひし時、かやうのいたはりをして候ひしが、養生つかまつり候て、十四五日にてなほり候ひし程に、其日かずを待ち候ふべし、何の大事をもち候ふべきと申して候へば、くすし御前へまゐり申しけるは、さすがわづらひとは存じ候はず、身に大事をもちたる人にて候ふか、げにや昔ならば戀とも申すべきいたはりにて候ふと申し上げければ、將軍仰せけるやうは、今なればとて戀といふ事のあるまじきにてもなし、かすやが心のうちを問はせばやと仰せ出されける。佐々木三郎左衞門こそ、深き知音にて候へと申し上げければ、佐々木を召されて仰せ付けられけるは、かすやが方へゆき、看病

京中の事にて候へば、定めてきこしめしても候ひつらん、尊氏將軍の御時、それがしは糟谷の四郎左衞門と申して、近習にめしつかはれ候ひしが、十三のとしより御所へまゐり、靈佛靈社の御とも、月見花見の御ともに、はづれ申す事なく候ふほどに、二條殿へ御成候ひし程に、をりふし傍輩ども會合仕り、身がもとへ使を二三度たて、おそしと申し候ふほどに、それに心をひき候ひてよりも、御ともの過ぎ候へかしと存じ候て、御座敷の體をのぞき見し所に、御酒二三獻目とおぼえ候ふ時、御引出物と見えて、廣蓋に御小袖をおきて、女房たちのもちて御出候ひしが、御年はいまだ二十にはならせ給ひ候はじと見えさせ給ひしが、ねりぬきのはだ小袖に、紅花緑葉の一かさねに、くれなゐの袴をふみ、たけなる髮をゆりかけて、何と申すばかりなくうつくしく御わたり候ひしが、ものに譬へば楊貴妃、漢の李夫人、我朝のそとほり姫、小野の小町、染殿のきさき、女御更衣と申すとも、いかでかこれには勝るべき、あはれ人間に生まれば、かやうなる人に詞をまじへ、枕を竝べばや、せめて今一たび出でさせ給へかし、一目なりとも見參らせんと思ひ染めしより、心うく胸のけぶりとなり、心あこがれ忘れんとすれどもわすられず、更にうつゝともなき戀となりぬ。

三人法師上

王城—一本帝城とあり
三會のあかつき—彌勒菩薩出世の時をいふ
をひろなる—未詳
くわらし—掛羅、禪僧の用ふる袈裟の名

そもそも高野山と申すは、王城をさつて遠く、舊里を離れて無人聲、八葉の峰峨々として高し、八の谷しんしんとして靜なる所なれば、弘法大師入定し給ひて、世尊の出世、三會のあかつきを待ち給ふ靈地なれば、或は坐禪入定の床もあり、あるひは念佛三昧の所もあり、思ひ思ひに浮世を厭ひ給ふ處に、半出家の僧三人、所々にすまひし給ひしが、一所によりあひて物語をする程に、一人の僧申されけるは、われらみな半出家也、何ゆゑに遁世しけるぞ、いざ坐禪のめんめん懺悔物がたり申し候はん、懺悔に罪を滅すると申す事の候へば、何かは苦しかるべきと申しける。其中に年頃四十二三計りなる僧の、難行苦行に身は瘦せて衰へたれども、かねふかぶかとじんじやうなる僧、ころものこゝやかしこ破れたるに、をひろなるくわらかけて、まことに思ひ入りたる體なるが、さらば愚僧まづ語り申し候はん。

三人法師

大坂心齋橋順慶町

書林　　澁川清右衛門

乗物にて、人々を都へ送り給ひけり。都には此事を聞くよりも、頼光の御上りを見物せんとて、ざゝめき渡りてひかへたり。

その中に姫を取られし池田の中納言夫婦の人も出で給ひ、いづくまでも逢ひ次第と、迎ひに出でさせ給ひしが、頼光を見つけつゝ、すはや是へとの給へば、はや姫君も御覧じて、母上さまとて泣き給ふ。母うへ此由御覧じて、するくと走り寄り、姫君にとり付きて、是は夢かや現かと、消え入るやうに泣き給へば、中納言も聞しめし、一度別れしわが姫に、二たび逢ふこそ嬉しけれと、急ぎ宿所に歸らせ給ふ。頼光は參内あり、帝叡覽ましくて、御感は申すばかりなし。御褒美限りなかりける。それよりも國土安全長久に、治まる御代とぞなりにける。彼の頼光の御手柄、ためしすくなき弓取とて、上一人より下萬民に至るまで、感ぜぬものはなかりける。

ば、父母によきに屆けて參らすべし、姫君いかにとおりければ、此由を聞しめし、美しの人々や、かく淺ましき露の身の、早くもさきに消えもせで、かやうの姿を人々に見せまゐらする恥しさよ、都に上らせ給ひつゝ、父母の此事をしろしめされてあるならば、わが身の事を中々に歎き給はん悲しさよ、記念は思ひの種なれど、姫がかたみとの給ひて、わが黒髮を切りてたべ、又此小袖はみづからが、最後の時まで著たる小袖との給ひて、その黒髮をおし包み、母上さまに參らせて、後世をばとうてたび給へと、よく〲屆けてたび給へ、いかにあれなる客僧達、歸らせ給はぬそのさきに、みづからにはとゞめをさして給はれとて、消え入るやうに泣き給ふ。賴光此由聞召し、げに道理なり、ことわりなり、さりながら都に上りて候はゞ、父母に此事をよきに案內申しつゝ、明日にも成るならば、迎ひの人を下すべし、暇申してさらばとて、物憂き洞を立ち出でて、谷嶺過ぎて急がせ給へば、程もなく大江山の麓なるしもむらの在所につく。賴光仰せけるは、いかに所の者どもよ、急ぎ傳馬を觸れさせて、女房たちを都へ送るべし、いかに〱とありければ、うけ給はると申すとき、其頃丹波の國司をば大宮の大臣殿とぞ申しけるが、此由を聞召し、さてもめでたき次第とて、急ぎ雜餉かまへまゐらせけり。そのひまに馬

給ふべし、今は子細も候ふまじと仰せければ、此聲を聞くよりも、捕られてましまする女房たち、囚屋のうちより轉び落ち、頼光を目にかけて、これは夢かや現かや、われをも助けてたび給へと、われもわれもと手を合せて歎き悲む有樣を、物によく〳〵譬ふれば、罪深き罪人が獄卒の手に渡り、無間地獄に落されしを、地藏菩薩の錫杖にて、をんかあかみせんさいそはかと救ひ取らせ給ひしも、かくやと思ひ知られたり。

其時六人の人々は、姫君を先にたて、奥の體を見給へば、宮殿樓閣玉をたれ、四節の四季をまなびつゝ、甍を竝べて立てたるは、心も言もおよばれず。また傍を見給へば、死骨白骨生しき人、或は人を鮓にして目もあてられぬ其中に、十七八の上臈の片腕おとし股そがれ、いまだ命は消えやらで、泣き悲みてましますを、頼光御覽じて、あの姫君は都にて誰の姫君にてましますぞ。姫君たちは聞召し、さん候ふ、あれこそは堀河の姫君にて候ふとて、急ぎそばに走り寄りて、いかに姫君、いたはしや、みづからどもは客僧たちの、鬼悉く平げて都へつれて歸らせ給ふが、御身一人殘し置き歸るべきかや、悲しやな、かく恐しき地獄にも、御身に心の引かされて、跡に心の殘るぞと、髮掻き撫でて、何事にても御心に思しめさるゝ事あらば、われ〳〵に語らせ給へ、都へ上りて候は

ども、更に勝負は見えざりけり。おし竝べてむずと組み、うへを下へともて返す。綱が力は三百人、茨木力や强かりけん、綱を取つておし伏する。賴光此由御覽じて、走り掛つて茨木が細首ちうにうち落せば、いしくま童子、かね童子、其外門を固めたる十人あまりの鬼どもが、此由を見るよりも、今は童子もましまさず、いづくを住所となすべきぞ、鬼の岩屋も崩れよと、をめき叫んでかゝりける。六人の人々は、此山を見給ひて、やさしのやつばらや、手なみの程を見せんとて、習ひ給ひし兵法をとり出ださせ給ひて、あなたこなたへ追ひつめて、數多の鬼ども悉く平げて、姑く息をぞつがれける。賴光仰せけるやうは、いかに女房たち、早々出でさせ

おこゑ—おほごゑの誤脫か
刀はつるぎ—刀は利刀なりとの意か
おうつ—追ひつ

參りたり、さりながら心やすく思ふべし、鬼の足手をわれ〳〵が鎖にてつなぎつゝ、四方の柱に結ひつけて、働く氣色はあるまじきぞ、賴光は首を切れ、殘る五人の者どもは、あとやさきに立ちまはり、ずん〳〵に切りすてよ、子細はあらじとのたまひて、門の扉をおし開き、かき消すやうに失せ給ふ。さては三社の神達の、これまで現れ給ふかと、感涙肝に銘じつゝ、たのもしく思ひつゝ、敎へにまかせて、賴光は頭の方に立ちまはり、ちするゝをするりと拔き給ひて、南無や三社の御神、力を合せてたび給へと、三度禮して切り給へば、鬼神眼を見開きて、なさけなしとよ、客僧達、いつはりなしと聞きつるに、鬼神に橫道なき物をと、起きあがらんとせしかども、足手は鎖につながれて、起くべき樣のあらざれば、おこゑをあげて叫ぶ聲、雷電いかづち天地も響くばかりなり。もとよりも兵共、刀はつるぎ、太刀ばやにずん〳〵に切り給へば、首は天にぞ舞ひ上る。賴光を目にかけて、只一嚙にとねらひしが、星冑に恐れをなし、其身に子細はなかりけり。足手胴まで切り、大庭さして出で給ふ。數多の鬼の中に茨木童子と名のりて、主を討つ奴原に手並の程を見せんとて、面もふらずかゝりける。綱は此由見るよりも、手なみの程は知りつらん、目に物見せてくれんとて、おうつ、まくりつ、暫しが程戰ひけれ

とありければ、姫君たちは聞召し、是は夢かやうつゝかやと、其儀にてあるならば、鬼の臥所をわれ〳〵がよきに案内申すべし、御用意あれとありければ、頼光斜に思召し、其儀にて候はゞ、面々物具し給へとて、まづ傍にぞ忍ばれける。頼光の出でたちには、らんでん鎖と申して、緋おどしの鎧を召し、三社の神の給ひし星冑に、同じけの獅子王の御冑おしかさねて召されつゝ、ちするゐと申せしつるぎを持ち、南無や八幡大菩薩と、心のうちに祈念して進み出で給ふ。残る五人の人々も、思ひ〳〵の鎧を著、いづれも劣らぬつるぎを持ち、女房たちを先にたて、心靜に忍び行く。廣き座敷をさしすぎて、石橋をうち渡り、内の體を見給へば、皆々酒にゑひふして、たぞと咎むる鬼もなし。乘り越え〳〵見給へば、廣き座敷のその中に、くろがねにて館をたて、同じ扉に鐵の太きくわんぬきさし立てて、凡夫の力に中々内へ入るべきやうはなし。廊の隙より打見れば、四方に燈火高くたて、鐵杖逆鉾立て竝べ、童子が姿を見てあれば、宵の形とかはりはて、そのたけ二丈あまりにして、髮は赤く、倒に髮の間より角生ひて、鬢髯も眉毛も繁り合ひ、足手は熊の如くにて、四方へ足手をうち投げてふしたる姿を見る時は、身の毛もよだつばかりなり。ありがたや、三神あらはれ給ひつゝ、六人の者どもに能く〳〵これまで

代官ー名代

て花を散らさん、おもしろやと、これも又おし返し二三べんこそ舞うたりける。此歌の心もち、これにありあふ鬼どもを、嵐に花の散る如くになすべしとの歌の心を、鬼は少しも聞き知らず、あらおもしろやと感じつゝ、次第々々にゑひほれて、童子申されけるやうは、いかにありあふ鬼どもよ、客僧たちをよきに慰め申すべし、それがしが代官には二人の姫を殘し置く、それに姑くおやすみあれ、明日對面申すべしとて、童子は奥にぞ入りにける。殘る鬼ども童子の歸らせ給ふを見て、此處や彼處に臥したるは、さながら死人の如くなり。賴光此由御覽じて、二人の姫君を近づけて、御身たちは都にては誰の姫にてましますぞ。さん候ふ、みづからは池田の中納言くにたかのひとり姫にてありけるが、近き程にとられ來て、戀しき二人の父母や、お乳やめのとに逢ひもせで、かく淺ましき姿をば、あはれと思召せやとて、只さめ〴〵と泣き給ふ。今一人の姫君はと問はせ給へば、さん候ふ、みづからは吉田の宰相のおと姫にてさふらひしが、中々命の消えやらで、恨しさよとかきくどき、二人の姫君諸共に、聲もをしまず消え入るやうに泣き給ふ。賴光此由聞しめし、道理なり、さりながら鬼を今夜平げて御身たちを都へ御とも申しつゝ、戀しきふたりの父母に見參させ申すべし、鬼の臥所をわれ〳〵に導き給へ

ちり程も惜しからじと、さも有りさうにの給へば、童子はこれにたばかられ、おもての色をなほしつゝ、仰せを聞けばありがたや、彼の奴原が是まではよも來らじとは思へども、常に心にかゝるゆゑ、ゑひても本地忘れずとて、御持參の酒にゑひ、只繰言とおぼしめせ、赤きは酒の咎ぞかし、鬼となな思しめされそよ、われもそなたの御姿打ち見には、おそろしけれど、馴れてつほいは山伏と、歌ひ奏でて心うちとけ、さしうけさしうけ呑む程に、これぞ神便鬼毒の酒なれば、五臟六腑にしみわたり、心も姿もうち亂れ、いかにありあふ鬼どもよ、かくめづらしき御しゆ一つ御前にて下されて、客僧達を慰めよ、一さし舞へとぞ仰せける。うけ給はると起つところを、頼光此由御覽じて、まづ御しゆ一つ申さんとて、並び居たりし鬼どもに件の酒を盛りたまへば、五臟六腑にしみわたり、前後もさらに辨へず。されどもその中に、いしくま童子はずんと立つて舞うたりける。都よりいかなる人の迷ひ來て、酒肴のかざしとはなる、おもしろやと、おし返し二三べんこそは奏でける。此心を能く聞けば、是にありける山伏どもを、酒や肴になすべしとの歌の心と覺えたり。やがて頼光お酌にこそは立たれける。童子がうけたる盃を、綱は此由見るよりも、ずんと立つてぞ舞うたりける。年をへし鬼の岩屋に春の來て、風やさそひ

たるを返せといひければ釋迦は鳩の代にものが股をさきて秤にかけし事をいふ
本地忘れず―本性忘れずの意
つほい―強いか

はんげのもん―半偈の文

鳩の秤―帝釋天が釋迦を試みんとて毗首羯磨を語らひ毗首羯磨は鳩に變じ帝釋は鷹に變じて之を追ひ鳩が釋迦の腋下にかくれ

只今仰せを能く聞けば、惡逆無道の人ときく、あら勿體なや、あさましや、さやうの人には似るもいや、われらが行のならひとして、物の命を助けんため、山路を家とする事も、餓ゑたる虎狼に身をあたへ、有情非情を救はんため、釋迦牟尼如來の古はしうふうと名をつけて、諸國を修行に出で給ふ、或時山路を通らせ給へば、深き谷の底よりも何者なるとは知らねども、諸行無常と唱へければ、谷に下りて御覽ずるに、九足八面の鬼神とて、かしらは八つに足九つ、さも恐しき鬼にぞある、しうふう彼に近づきて、只今唱へしはんげのもん、われに授けよかしとある、鬼神答へて云ふやうは、授けんことは易けれど、饑にのぞみて力なし、人の身をだに服するならば、唱へんとこそ申しけれ、しうふう此由聞召し、それこそやすき事なるべし、殘りの文を唱ふるならば、汝が餌食に某成らんと仰せければ、鬼神斜によろこび、殘りし文をぞ唱へける。是生滅法生滅滅已寂滅爲樂と唱へければ、しうふう是をさづかりて、あらありがたやと禮しつゝ、鬼神が口に入らせ給へば、則ち菩薩と現れ、鬼神はすなはち毗盧遮那佛、しうふうは釋迦佛なり、又ある時はこれやこの、鳩の秤に身をかけしも、皆これ生けるを助けんため、是にありあふ山伏も同じ行にて候へば、文を一つさづけつゝ、早く命をめさるべし、露

なり、これら六人の者どもこそ心にかゝり候ふなり、それをいかにと申すに、過ぎつる春の事なるに、某が召しつかふ茨木童子といふ鬼を、都へ使にのぼせしとき、七條の堀河にて彼の綱に渡りあふ、茨木、やがて心得て、女の姿に樣をかへ、綱があたりに立ちより、髻むづと執り、つかんで來んとせしところを、綱此よし見るよりも、三尺五寸するりと拔き、茨木がかた腕を水もたまらず打ちおとす、やうく武略をめぐらして、かひなを取りかへし、今は子細も候はず、彼奴ばらがむつかしさに、われは都に行くことなし。其後酒呑童子は賴光の御姿を目をも放さず打ち詠め、さても不思議の人々や、御身が眼をよく見るに、賴光にておはします、さてその次は茨木が肘を切りし綱にてあり、のこる四人の人々は、定光、季武、公時や、保昌とこそ覺えたり、われらが見る目は違ふまじ、いぶしう候ふ、お立ちあれ、これにありあふ鬼どもよ、心ゆるして怪我するな、われらもまかり立つぞとて、色をかへてぞひしめきける。賴光此由御覽じて、こゝを陳じ損ずるならば、事の大事と思しめし、元より文武二道の人なれば、少しも騷がぬけしきにて、からくと打ちわらひ、さても嬉しの仰せかな、日本一のつはものに山伏共が似たるとや、その賴光も、季武も、名を聞くだにも初めにて、まして目に見る事はなし、

いぶしう—いぶせくの意か
陳じ損ずる—辯解しそこなふ

わがたつ杣—新古今、傳教、比叡山の中堂建立のとき「阿耨多羅三藐三菩提の佛たちわが立つ杣に冥加あらせたまへ」

まの前—目の前

大惡人—大勇士の意

だし、座敷におく。頼光此由御覧じて、これは又都よりの上臈たちに參らせんと、お酌にこそは立たれける。童子あまりの嬉しさに、ゑひほれ申しけるやうは、それがしが古をかたりて聞かせ申すべし、本國は越後の者、山寺そだちの兒なりしが、法師に妬あるにより、數多の法師を刺殺し、その夜に比叡の山につき、我が住む山ぞと思ひしに、傳教といふ法師、佛たちをかたらひて、わがたつ杣とて追ひ出だす、力及ばず山をいで、又此峰に住みしとき、弘法大師といふえせもの封じて、こゝをも追ひいだせば力およばぬ處に、今はさやうの法師もなし、高野の山に入定す、今又こゝに立ち歸り、何の子細も候はず、都よりもわがほしき上臈達を召しよせて、思ひのまゝに召しつかひ、座敷の體を御覧ぜよ、瑠璃の宮殿玉をたれ、甍をならべ立ておきて、萬木千草まの前に、春かと思へば夏もあり、秋かと思へば冬もあり、かゝる座敷のその内に、鐵の御所とて、くろがねにて館をたて、よるにもなればその内にて女房たちを集めおき、足手をさすらせ起き臥し申すが、いかなる諸天王の身なりとも、これにはいかで勝るべき、されども心にかゝるは、都の中に隱れなき頼光と申して、大惡人のつはものなり、力は日本にならびなし、又頼光が郎黨に、定光、季武、金時、綱、保昌、いづれも文武二道のつはもの

くう—空と食ふとにかく

鬼神に横道なし—諺

てこそまゐりけれ。綱は此由見るよりも、御心ざしのありがたさを、某も給はらんと、これも四五寸おし切りて、うまさうにこそ食はれける。童子此由みるよりも、客僧達はいかなる山に住み馴れて、かくめづらしき酒肴をまゐる事こそ不思議なれ。頼光は聞召し、御不審は御ことわりなり、われらが行のならひにて、慈悲とて給はる物あれば、たとひ心にうけずとも、いやといふ事更になし、殊にかやうの酒肴をくうに浮みしいはれあり、討つも討たるゝも夢の中、卽神卽佛是なるゆゑ、くうに二つの味ひなし、われらもともに浮ぶなり、あらかたじけなと禮すれば、鬼神に横道なきとかや、童子も却りて頼光に禮拜するこそ嬉しけれ。童子申されけるやうは、心に染まぬ酒肴を參らせけるこそ悲しけれ、餘の客僧へは無益とて、心とけてぞ見えにける。其時頼光座敷を立ち、件の酒をとり出だし、これは又都よりの持參の酒にて候へば、恐れながら童子へも御しゆ一つまゐらせん、御こゝろみの爲にとて、頼光一つさらりとほし、酒呑童子にさゝれける。童子盃うけとり、これもさらりと乾されたり。げにも神便ありがたや、不思議の酒の事なれば、その味甘露の如くにて、心も詞もおよばれず。斜ならずに喜びて、わが最愛の女あり、よび出だして呑ませんとて、くにたかの姫君と、花園の姫君を呼び出

もたせの―持参したる

こめ立ち出づるが、せんのだうより踏み迷ひ、道あるやうに心えて、これまで來りて候ふなり。童子の御目にかゝる事、ひとへに役の行者の御引合せ、何より以て嬉しう候ふ、一樹の蔭一河の流を汲む事も、皆これ他生の縁と聞く、御宿を少しかし給へ、御酒をもたせて候へば、恐れながら童子へも御しゆ一つ申さん、我等ゝ是にて御酒給はり、終夜酒盛せんとぞ申されける。童子は此由聞くよりも、さては苦しうなき人かと、椽より上へ呼びあげて、猶も心を知らんため、童子申されけるやうは、もたせの御しゆのありと聞く、われらも又客僧達にも御しゆ一つ申さん、それ〲と有りければ、うけ給はると申して、酒と名づけて血を搾り、銚子に入れて盃そへ、童子が前にぞ置きにける。童子盃とりあげて、頼光にこそさしにけれ。頼光盃とりあげて、これもさらりと乾されけり。酒呑童子が是を見て、その盃を次へといふ。うけ給はるとて綱にさす。綱も盃一つうけ、さらりとこそは乾しにける。童子申しけるやうは、肴は無きかとありければ、うけ給はると申して、今切りたるとおぼしくて、肘と股とを板にすゑ、童子が前に置きにける。童子此由見るよりも、それこしらへて參らせよ。うけ給はるとて立つ所を、頼光は御覽じて、某こしらへ給はらんと、腰の差添するりとぬき、截四五寸おし切りて、舌打ちし

せきがん—石巖か

ごき、ぜんき、あつき—後鬼、前鬼、惡鬼か

り申しけるは、あわてて事を仕損ずな、かくめづらしき肴をば、わたくしにては叶ふまじ、上へことわり、御意次第に引きさき食はんとぞ申しける。げに尤もとて、それより奥をさしてまゐりつゝ、此由かくといひければ、童子此由聞くよりも、こは不思議なる次第かな、何さま對面申すべし、こなたへ請じ申せとありければ、六人の人々を椽の上にぞ請じける。其後醒き風吹き來り、雷電いなづま頻にして、前後を忘ずるその中に、色うす赤くせい高く、髮はかぶろにおし亂し、大格子のおり物に、紅の袴を著て、鐵杖を杖につき、あたりを睨んで立つたるは、身の毛もよだつばかりなり。童子申しけるやう、わが住む山は常ならず、せきがん峨々と聳えつゝ、谷深くして道もなし、天をかける翅、地を走る獸まで、道が無ければ來る事なし、況や面々人として、天をかけりて來るかや、語れ、聞かんと申しける。

頼光は聞召し、われらが行の習ひにて、役の行者と申せし人、路無き山をふみわけて、ごき、ぜんき、あつきとて鬼神のありしに行きあうて、呪文を授け餌食を與へ、今に絶えせぬ年々に餌食をあたへ憐むなり、此客僧も流を汲む、本國は出羽の羽黒の者なりしが、大峯山に年ごもり、やう〳〵春にもなりければ、都一見そのために、ゆふべ夜を

四節―佛教にて結夏、解夏、冬至、元旦をいふ

らう―廓か

愚人夏の蟲云々―諺

鬼が集りて番をしてこそ居るべけれ、いかにもして門より内へ忍び入りて御覽ぜよ、瑠璃の宮殿玉をたれ、甍を竝べて建て置きたり、四節の四季をまなびつゝ、鐵の御所と名づけて、くろがねにて館をたて、よるになればその内にて、われらを集めて愛せさせ、足手をさすらせ、起き臥し申すが、らうの口には眷族どもにほしくま童子、熊童子、虎熊童子、かね童子、四天王と名づけて番をさせておきける、彼ら四人の力の程は、いか程とも譬へん方なしと聞く、酒呑童子がその姿、色うす赤くせい高く、髮はかぶろにおし亂し、晝の間は人なれども、夜にもなれば恐しき、そのたけ一丈餘にして、譬へていはん方もなし、かの鬼常に酒を呑む、ゑひて伏したる時なれば、わが身の失するも知らぬなり、いかにもして忍び入り、酒呑童子に酒をもり、ゑひて臥したる所を見て、思ひのまゝにうち給へ、鬼神は天命つきはてて、つひには討たれ申すべし、いかにも才覺おはしませ、客僧たちとぞ仰せける。さて六人の人々は、姫君の教へにまかせて、河上をのぼらせ給へば、程もなく鐵の門につく。番の鬼どもこれを見て、こは何者ぞめづらしや、此ほど人を喰はずして、人を戀ひける折ふしに、愚人夏の蟲、飛んで火に入るとは、今こそ思ひ知られたり、いざや引き裂きくはんとて、われも〳〵と勇みける。その中に鬼ひと

きて其後は、身のうちより血を搾り、酒となづけて血をば呑み、肴と名づけてしゝむらを、剝ぎ喰はるゝ悲みを、側にて見るもあはれなり、堀河の中納言の姫君も、今朝血を搾られ給ひしぞや、そのかたびらをわれ〳〵が、洗ふことこそ悲しけれ、まことに物憂き事ぞとて、さめざめと泣き給へば、鬼を欺く人々も、げにことわりとて、共に涙にむせび給ふ。頼光仰せけるやうは、鬼をたやすく平げ、御身達を悉く都へ返さん其爲に、是まで尋ね參りたり、鬼の栖を懇にかたらせ給へと有りければ、姫君此由聞召し、是は夢かや現かや、其義ならば語り申さんと、此河上をのぼらせ給ひて御覽ぜよ、くろがねの築地を築き、くろがねの門をたて、口には

みつぐ―助力する意

細谷川に出で給ひ、翁仰せけるやうは、此河上を上らせ給ひて御覽ぜよ、十七八なる上臈のおはすべし、くはしく逢ひて問ひ給へ、鬼神の討つべきその時は、なほ〳〵われらもみつぐべし、住吉、八幡、熊野の神これまで現じ來るとて、かき消すやうに失せ給ふ。六人の人々は此由を見給ひて、三社の神の歸らせ給ふ御あとを伏し拜み給ひつゝ、教へにまかせて河上をのぼらせ給ひて見給へば、をしへの如く十七八の上臈の、血のつきたるものを洗ふとて、涙と共にましますが、賴光此由御覽じて、いかなるものぞと問はせ給へば、姫君此由聞召し、さん候ふ、みづからは都の者にて候ふが、ある夜鬼神につかまれて、是までまゐりて候ふが、戀しきふたりの父母や、お乳やめのとに逢ひもせで、かく淺ましき姿をば、あはれと思召せやとて、只さめ〴〵と泣き給ふ。おつる涙のひまよりも、あら淺ましや、此所は鬼の岩屋と申して、人間更に來る事なし、客僧等は是まで來らせ給ふぞや、いかにもしてみづからを都へ歸してたび給へと、仰せもあへず只さめ〴〵と泣き給ふ。賴光此由聞召し、御身は都にて誰の御子と問はせ給へば、さん候ふ、みづからは花園の中納言のひとり姫にて有りけるが、われらばかりに限らず、十餘人おはします、此程池田の中納言くにたかの姫君も、捕られてこれにましますが、愛してお

先達―嚮導

じんべんきどくしゆ―神變奇特を神便鬼毒ともぢりたるなり

此三人の翁こそ妻子をとられて候へば、是非先達を申すべし、笈をもおろし心とけ、疲れをやすめ給ふべし、客僧達とぞ申されける。頼光此由聞召し、仰せの如く我々は山路に踏み迷ひくたびれて候へば、さらば疲れを休めんと、笈どもをおろし置き、さゝへの酒をとり出だし、三人の人々に御酒きこしめせとて參らせける。翁仰せけるやうは、いかにもして忍び入らせ給ふべし、かの鬼常に酒をのむ、その名をよそへて酒呑童子と名付けたり、酒をもり醉ひて臥したる時は、前後もしらず候ふなり、此三人の翁こそこゝに不思議の酒をもつ、その名をじんべんきどくしゆといひ、神の方便鬼の毒酒と讀む文字ぞかし、この酒鬼が呑むならば、飛行自在の力も失せ、切るともつくとも知るまじき、御身たちが此酒を飲めば、かへつて藥となる、さてこそじんべんきどく酒とは、後の世までも申すべし、なほ〳〵奇特を見すべしとて、星冑をとり出だし、御身は是を著て、鬼神が首を切り給へ、何の子細もあるまじきと、件の酒を相添へて、頼光にぞ下されける。六人の人々は此由を御覽じて、さては三社の御神のこれまで現じましますかと、感涙肝に銘じつゝ、かたじけなしとも中々に言葉にもいひがたし。その時翁は岩屋を立ち出で、なほ〳〵先達申さんと、千丈嶽を登りつゝ、暗き岩穴十丈ばかりくゞり出で、

つけだけ―附木
あまがみ―雨を防ぐ油紙

破旬―魔の王の名、殺者と譯す

覺束なし―原本無臆の字をあてたり

を笈の中にぞ入れにける。さゝへと名づけて酒を持ち、火打、つけだけ、あまがみを笈のうへに取りつけて、思ひ〳〵のうち刀、兜巾、鈴懸、法螺の貝、金剛杖をつきつれて、日本國の神佛に深く祈誓を申しつゝ、都を出でて丹波の國へと急がせ給ふ。此人々の有樣、いかなる天魔破旬も恐れをなすべきと覺えたり。いそがせ給へば、程もなく丹波の國に聞えたる大江山にぞつき給ふ。柴刈り人に行き逢うて、賴光仰せけるやうは、いかに山人、此國の千丈嶽はいづくぞや、鬼の岩屋を懇に敎へてたべとぞ仰せける。山人この由承り、此峰をあなたへ越えさせ給ひつゝ、又谷峰のあなたこそ、鬼の栖と申して、人間更に行くことなしと語りけり。賴光聞召し、さらば此峰越えやとて、谷よ峰よと分け上り、とある岩穴見給へば、柴の庵の其中に翁三人ありけるを、賴光此由御覽じて、いかなる人にてましますぞ、覺束なしと仰せける。翁答へてせ仰ける、我々はまよひ變化の物にてなし、一人は津の國のかけの郡の者にてあり、一人は紀の國のおとなし里の者にてあり、今一人は京近き山城の者にてあり、此山のあなたなる酒呑童子といふ鬼に、妻子をとられ無念さに、その敵をも討たんため、この頃こゝに來りたり、客僧たちをよく見るに、常の人にてましまさず、勅諚を蒙りて、酒顚童子を亡ぼせとの御使と見えてあり、

らんでん鎖—未詳

き、急ぎわが家に歸りつゝ、人々を召しよせて、われらが力に叶ふまじ、佛神に祈をかけ、神の力をたのむべし。尤も然るべしとて、賴光と保昌は八幡に社參ありければ、綱金時は住吉へ、定光と季武は熊野へ參籠仕り、さま〴〵の御立願。もとより佛法神國にて、神も納受まし〳〵て、いづれもあらたに御利生あり、喜びこれにしかじとて、皆々わが家に歸りつゝ、一つ所に集りて、色々詮議まち〳〵なり。

賴光仰せけるやうは、この度は人數多にて叶ふまじ、以上六人が山伏に樣をかへ、山路に通ふ風情にて、丹波の國鬼が城へ尋ね行き、栖だにも知るならば、いかにも武略をめぐらして、討つべきことは易かるべし、面々笈を拵へて具足冑を入れ給へ、人々いかにとありければ、うけ給はると申して、面々笈を拵へける。まづ賴光の笈には、らんでん鎖と申して緋威の御鎧、同じ色の五枚冑に、獅子王とこそ申しける、ちするると申しゝ劒二尺一寸候ひしを、笈の中にぞ入れ給ふ。保昌は紫をどしの腹卷に、同じ毛の冑を添へ、岩切と申して二尺ありける小薙刀、二重に金を延べつけて、三束あまり捩ぢ切りて、笈の中へぞ入れ給ふ。綱は萠黄の腹卷に同じけの冑をそへ、鬼切と云ふ太刀を笈の中にぞ入れ給ふ。定光と季武、金時も、思ひ〳〵の腹卷におなじけの冑をそへ、いづれも劣らぬ劒

頼光ノ訓謗兩樣なるは原本のまゝなり

見えてあり、觀音へ御まゐりあり、よきに御祈誓ましまさば、姫君左右なく都にかへらせ給はんと、見透すやうに占ひて、博士はわが家にかへりけり。中納言も御臺所も聞召し、これは夢かや現かやと歎かせ給ふ御有様、何に譬へんかたもなし。中納言殿はおつる涙の隙よりも、急ぎ内裏へ奏聞ありければ、帝叡覽ましく〳〵て、公卿大臣集りて、色々詮議まち〳〵なり。その中に關白殿進み出でて、嵯峨の天皇の御代の時、是に似たりし事有りしに、弘法大師の封じこめ、國土をさつて子細なし、さりながら今こゝに頼光を召されつゝ、鬼神うてよとの給はゞ、定光、季武、綱、金時、保昌をはじめとし、此人々には鬼神も怖ぢをのゝきて、恐れをなすとうけ給はる。此者共に仰せつけられ候へかし。帝げにもと思召し、頼光を召されける。頼光勅をうけ給はり、急ぎ參内仕りければ、帝叡覽ましく〳〵て、いかに頼光うけ給はれ、丹波の國大江山には鬼神が住みて仇をなす、わが國なれば卒土のうち、いづくに鬼神の住むべきぞ、況やまぢかきあたりにて、人を悩ますいはれなし、平げよとの宣旨なり。頼光勅命うけ給はり、天晴大事の宣旨かな、鬼神は變化の物なれば、討手向ふと知るならば、塵や木の葉と身を變じ、我等凡夫の眼にて見つけん事は難かるべし、さりながら勅をばいかで背くべ

まよひ―迷はかし神

お乳や乳母や女房たち、その外ありあふ者までも、上を下へとかへしけり。中納言は餘りのことの悲さに、左近を召され、いかに左近、うけ給はれ、此程都に隱れなき、村岡のまさときとて、名譽の博士のありと聞く、つれて參れと仰せけるに、うけ給はると申して、つれて御所へぞまゐりける。いたはしや、父くにたかも御臺所も、恥も人目も入らばこそ、博士に對面めされつゝ、いかにまさときうけ給はれ、それ人のならひにて、五人十人ある子さへ、いづれおろかは無きならひ、みづからは只ひとりの姫を、昨夕のくれほどに、行きがた知らず見失ふ、ことし十三寅の年、生れてよりもこのかたは、椽より下へおるゝさへ、お乳やめのとのつき添ひて、荒き風をもいとひしに、まよひ變化の業ならば、みづからをも諸共に、などや連れては行かざりしと、袂を顏におしあてて、トひ給へ、博士とて、料足萬疋博士が前に積ませつゝ、姫が行方を知るならば、數の寶をえさすべし、よく〳〵トひ給ふべし。もとより博士は名人にて、一つの卷物とりいだし、件の體を見渡し横手をちやうどうち、姫君の御行方は、丹波の國大江山の鬼神が業にて候ふなり、御命には子細なし、猶某が方便にて、延命と祈らん、何の疑ひ有るべきぞ、此卜形をよく見るに、觀世音に御祈誓あり、誕生なりしその願いまだ成就せぬ御咎めと

酒呑童子

宮づき―かしづきの意

むかし我朝の事なるに、天地開けしこのかたは神國といひながら、又は佛法盛にて、人皇の始めより延喜の帝に至るまで、王法ともに備はり、政事すなほにして、民をも憐み給ふこと、堯舜の御代とても、是にはいかで勝るべき。然れども世の中に不思議の事の出できたり、丹波の國大江山には鬼神の住みて、日暮るれば近國他國の者までも、數をしらず執りて行く。都のうちにてとる人は、みめよき女房の十七八を頭として、是をも數多とりて行く。いづれもあはれは劣らねども、こゝにあはれをとゞめしは、院に宮づき奉る池田の中納言くにたかとて、御おぼえめでたくし、寶は內に滿ち〳〵て、富貴の家にてましますが、ひとり姬を持ち給ふ。三十二相の形をうけ、美人の姬君を見聞く人、心をかけぬ者はなし。二人の親の御寵愛斜ならず。かほどにやさしき姬君を、或日の暮方のことなるに、行きかた知らず失せ給ふ。父くにたかを初めとし、北の御方の御歎き、

酒呑童子

軒をてらざる―軒を照らさゞるの意

とおぼすらん、よし恨みとも思ふなよ、わづかの夢の世に、たれか永らへはつべきぞ、ことさら中にも若きが先立つあはれさよ、又かやうにならせ給ふも、此世ならぬ因果ぞとおぼしめし、今こそうらみの淵に沈むとも、わが命のあらんかぎりは、後世をばとぶらひ申すべし、さらぬだに女人は五障三しよにえらばれて、罪ふかし、かたぶく日は中空にかへる事なし、人はさらに死して再びかへらず、さぞ苦みの思ひやられていたはしや、さてもいにしへの姿はつきはてて、軒をてらざる夕顔の花の色こそ悲しけれ。

かくてあるべきにあらざれば、程近き鳥部野の邊にて、ゆふべの煙となしはてて、骨をばひろひ、もとの庵室にかへり、いよ〳〵道心おこしつゝ、なほ〳〵とぶらひ給ひけり。さるほどに都に此事かくれなし、小松殿も女院も、あはれと思しめし、やさしき者のふるまひや、人の契をなすならば、かやうにこそあるべけれとて、女院を初めまゐらせ、聞く人々も袖をしぼらぬものは無し。小松殿の御大臣、御所へ仰せられけるやうは、瀧口を召しいだし、いかなる寺をも御造り候て、御とらせ候へとありければ、瀧口きゝて、都近く住めばこそ、かやうの事をば聞き給へ、仰せなきその先にとて、横笛がためにとて、高野山に上りつゝ、案じすましてゐたりけり。

とほるとて、友人にかたるやう、近頃あはれなる事をこそ只今みて候へ、大井川へ十七八の女房の身を投げ給へるを、あれよ〳〵と言ひつれど、川よりこなたを通る事なれば、あはれさ申すばかりなしと、こま〴〵と語りければ、友人是をきゝ、あはれなる事かなと、泪をながし通りける。瀧口是をきゝつけて、胸うちさわぎ、もし横笛なるらんと、取る物も取りあへず、本尊首にかけ、しもの僧一人めしぐして、身の憂きかずは大井川、涙のみちはかき暮れて、いそぐとすれど程遠く、泣く〳〵はしり行くほどに、法輪寺の橋になりしかば、峯の梢に薄衣かゝり、嵐にひらめけば、われを招ぐかと、おのづからいとゞあはれぞ勝りつゝ、やう〳〵大井川につき、かなたこなたと尋ぬるに、川の末に流れとまりてありつるが、昔のかたちは失せはてて、空しき死骸をとりいだし、泣くよりほかの事はなし。さても今朝往生院にて、柴の編戸をへだてつゝ、此人は外、われは内にて、悶えこがれしありさまを、今の姿にくらぶれば、物のかずにてかずならず。あだなるも、つれなきも命、うきに限らぬならひかや。いかなる過去の因果にて、かゝる思ひをするやらん。瀧口あまりの悲しさに、膝のうへにかきのせて、無慚のものの有様や、かくあるべしと知りたらば、などかは見もし、見えざらん、さこそは草の陰にて恨めし

梓弓そるを何しにうらむべき引きとゞむべき道にあらねばと、泣く〳〵打ちながめ、悶えこがれて泣きゐたり。今は頼みも盡きはてて、かくてこゝに在るべき身ならねば、泣く〳〵迷ひ行くほどに、又立ちかへり恨しげに見て、扨も瀧口なさけなく、みづからを何になれとて、かほどに捨てはてけるぞと、うたてやと思へば、いとゞあとへひく心地して、いそぐ心はさゝがにの、絲より細きわが身かな、鮑の貝の片思ひ、人はかほどにつれなきを思ふも苦し、とにかくにつれなき命あればこそ、飽かぬ別れも戀しけれと、只一すぢに思ひきり、大井川の汀なる岩間づたひの細路を三町ばかり行きすぎて、千鳥が淵といふ所に、うへなる衣を木の枝にかけ、踏み馴らしたる草履をば岩の上にぬぎすてて、嵐の山のおと、友よぶ千鳥横笛が、いまを最後の泣く聲は、いづれともなき哀かな。むざんや、横笛西にむかひて手をあはせ、南無西方彌陀如來、あかで別れし瀧口と、同じ臺に迎へさせ給へと、是を最期の詞にて、終に身をこそ投げにける。惜しかるべきよはひかな、年十七と申すに、終に空しくなりにけり。かゝりける所に、つま木とる山人、川向ひにてあれよ〳〵とよばはれど、程遠ければ終にはかなくなりにけり。かくて山人は、瀧口の庵室の前を

神鳴も思ふ中云云―古今「天の原ふみとゞろかし鳴る神も思ふ中をばさくるものかは」

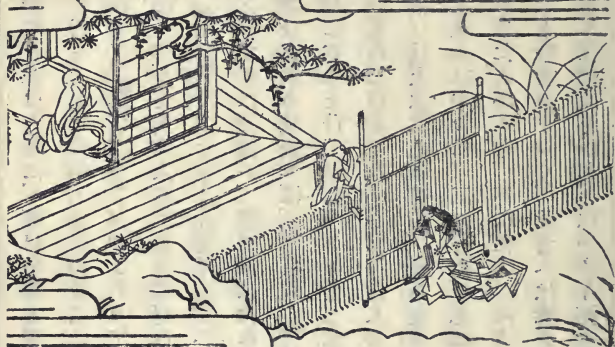
けり。横笛是を見給ひて、情なの有樣や、昔にかはらで今も契らんといはゞこそ、變りし姿只一目みせさせ給へと、時雨にぬれぬ松だにも、又色かはる事もあり、火の中水の底までも變らじとこそ思ひしに、早くも變る心かな、ありし情をかけよと言はゞこそ、みづからも共に樣をかへ、おなじ庵室にすまひして、御身は花を摘むならば、みづからは水をむすび、一蓮の緣とならばやと思ひ、是まで尋ねてまゐり、夫妻は二世の契と聞きしかど、今生の對面だに叶ふまじきか、あさましや、親の不興をかうぶりて、かやうにならせ給へば、みづからを深く恨みさせ給ふもことわりなり、思へば又みづからは、御身ゆゑに深き思ひにしづみ、たがひに思ひ深かるべしと、涙をながし申すやう、さてもいにしへは雲をうごかす神鳴も、思ふ中をばよもさけじと、契りつる言の葉は、今のごとくに忘れず、睦言の袖のうつり香は、今もかはらず匂へども、いつのまにかは變りはて、うたての瀧口やとて、聲もをしまず泣きければ、瀧口是を見て、あまり歎くもいたはし、せめては聲なりとも聞かせばやと、思ひてかくなん、

あづさ弓そるをうらみと思ふなよまことの道に入るぞうれしき

とありければ、瀧口が聲と聞くよりも、あまりの嬉しさに、横笛とりあへず、

もがなと思ひし所に、瀧口の聲と覺しくて、かくこそ詠じ給ひける。

　ひとりねて今宵もあけぬ今こんとたのまばこそは待ちもうらみん

と詠じて、鉦打ち鳴らし、やゝありて法華經の提婆品を高聲に讀み給へば、瀧口と聞くからに、やがて消え入るばかりに思ひしかど、しばし心をとりなほし、よろ〳〵と歩みより、柴の扉をほと〳〵と叩きければ、内より下の僧をいだし、いづくよりと問ひければ、横笛と申す者にて候ふ、瀧口殿に物申さんと申す。横笛と聞くよりも、胸打ちさわぎ、障子のひまより見給へば、裾は露、袖は涙にしをれつゝ、誠に尋ねわびたると打見えて、柴の戸に立ちそひて、しづ〳〵としたる有樣なり。いにしへの有樣になほ勝りてぞ覺えける。見れば目もくれ、心も消え入るばかりなり。いづれを夢とも思ひわかず、又思ふやうは、此上ははしり出で、變る姿を一目みせばやとは思へども、心に心を引きとゞめ、逢はぬ恨みは中々に、二たび物を思はせん、むざんや、横笛が三年ばかりの情を忍びて、尋ねきたる心ざし、何にたとへん方もなく、袂を顏におしあてて、泣くより外の事ぞなき。下の僧申すやう、此寺へは女人のまゐらぬ所なり、そのうへ瀧口とやらんは、聞きもならはぬ人ぞかし、はや〳〵歸り給へとて、柴の編戸をおし立てて、其後音もせざり

今生の對面は思ひもよらぬ事と、懇ろにのたまひ、かき消すやうに失せたまふ。夢打ちさめて横笛は、涙をながし申すやう、もとよりも叶はぬ事は是非もなし、さりながら叶はぬ事を叶へさせ給ふこそ、神や佛の誓なりと、泣くより外の事はなし。今ははや頼みもつきし事なれど、夜もほの〴〵と明けければ、虚空藏をふし拜み、たどりたどりと行くほどに、道行く人にあひ給ひ、往生院とやらんはいづくの方と問ひければ、是より乾のかたに見えて、住みあらしたる寺あり、草茫々と露ふかしと、こまやかにこそ教へけれ。往生院と聞くからに、さきへとばかり急ぎけり。やう〳〵尋ね行く程に、教へのごとく、住みあらしたる寺あり。あたりをめぐりやすらひ、便

春を忘れぬ梅の花—道眞「吹く風に匂ひおこせよ梅の花あるじなしとて春を忘るな」

三さうまん—未詳

とくせ—となせ(戸無瀨)の衍か

ぎんの聲—琴の聲の衍か

たどろ〳〵と—たどり〳〵との衍か

つ松に吹く風も心細くぞ覺えける。北を遙にながむれば、春を忘れぬ梅の花、あるじ忘れぬ匂にて、思ひやられて玉鉾の、道さだかに見えねども、ならびの里にかゝりつゝ、染殿の后御山莊ほうゐ院をさし過ぎて、つり殿三さうまんの嵐の、おのづからぎんの聲をしらべ、谷の水音すさまじく、とくせの瀧のながれも、筏をくだす大井川、ゐぜきの水を詠めつゝ、かき集めたる藻鹽草、やるかたなきの餘りに、かくぞ詠じける。

せきあへぬ涙の川の早き瀬にあふより外のしがらみぞなき

といふ古歌を思ひ出でられける。たどろ〳〵と行く程に、嵯峨の道をば知らずして北山に迷ひける。所々に立つけぶり、すゐ消えはてて跡もなし。行きかふ人は絶えはてて、人を咎むる里の犬、聲澄む程に成りしかば、やう〳〵迷ひ行く程に、法輪寺の橋うち渡り、其夜は虚空藏に參り通夜を申して、夜もすがら申すやうこそ哀なり。ねがはくは御佛納受まし〳〵て、夫婦の道をかなしみて、野にふし山に住むまでも、翼をかさね、契をなすとかや承り候へば、衆生を助けましまさば、飽かで別れし瀧口を、一目みせてたび給へと涙をながし、夜もすがら少しまどろむ所に、八十ばかりの老僧、墨染の衣に香の袈裟をかけさせ給ひしが、横笛が伏したる枕にたちより、北の方往生院にさふらへど、

何とたゞ筧の水の絶え〳〵におとづれきては袖ぬらすらん

と口ずさみて、よるひるの勤ひまなくこそ聞えける。さても横笛がかよる事をば夢にも知らず、空しき夜半のひとり寝も、思ひそめし初めより、野の末、山の奥、千尋の底に至るまで、かはらじとこそ契りしに、我ならず、いかなる人にあひ馴れて、いつしかすさみ給ふらん、うらめしやとて思ひしづみし所に、爰に人の申すやう、ちかき頃物の哀をとゞめしは、三條齋藤左衛門の子息瀧口殿こそ、親の不興をかうぶりて遁世しけるが、行方しらずと言ひければ、此由横笛聞きつけて、あな浅ましや、是は夢かやうつゝかと、委しくこれを尋ぬるに、嵯峨の奥とやらんにおはしますと言ひければ、浅ましや、みづからがそれをば夢にも知らずして、恨み申すぞ悲しけれ、かくとだにも知りたらば、野のすゑ、山の奥なりとも、おなじ道に入るならば、蓮の縁となりて、さこそは嬉しからましと、天にあこがれ地にふし給ひしその風情、譬へんかたも無かりけり、餘りのおもひに堪へかねて、むざんや横笛、御所を忍び出で給ひ、あこがれ行く程に、乾のかたと聞くなれば、内野に迷ひ出でて、南を遙にながむれば、内裏のあととおぼしくて、羅城門は荒れはてて、礎ばかりぞ殘りける。又鳥羽院の西へ行き、春夏過ぎて秋の山、むらだ

へいしやう―平生か
そふるて―そびえての衍か

よりも睦じげなる風情にて、名残をしさはいかばかり。いたはしや横笛が、われが思ひ立つ事を、露ほども知るならば、いかに悲むべき物と、横笛が心のうち思ひそめつる始めより、こよひの今に至るまで、思ひつゞけてよもすがら、包むとすれど涙川、袖のしがらみ堰きかねて、千夜を一夜とちぎる身の、たれにとてかは、鷄の夜深きに音をば鳴きぬらん、へいしやうのやもめ烏のうかれ聲、耳にそふるて、夜もほの〴〵と明けければ、何となく出で立ちて、笛をばとり忘れたる風情にて、枕に置きて出でけるが、又立ち歸り一目見て、又よといひし言の葉は、何となくいひしかど、それが限の言葉なり。其後横笛、けふも過ぎ明日も空しく待ちかねて、暮るれば門に立ち出でて、ふけゆく月ももろともに、只すご〴〵とひとりゐの、うらみの數ぞつもりける。扨も瀧口墨染に身をかへて、年はつもりて十九と申すに、嵯峨の奥に聞えたる、往生院と申すに閉ぢこもり、行ひすましてゐたりけり。瀧口が心のうち褒めぬ人こそなかりける。たま〳〵言とふ物とては、嶺に木づたふ猿のこゑ、松の嵐、後枕にきけば鹿のこゑ、夜寒に弱る蟲の音も、筧の水の絶え〴〵に、かけても習はぬ煙にそめなし、うき世の事を觀じつゝ、いとゞ哀ぞ増りける。

おくり候へ—誤謬あるべし意味通ぜず

けんねん—繫念なり、一念の安想も五百生の間其報を受く況や思念繫着する時は無量の長時に亙りて其報を受く

かの一節も契りそむれば、ある時は里へ出で、忍びて通ふ時もあり。又風の心ちといひなして、忍び〱に通はれける。比翼連理の契をこめ、ことかりそめとは思へども、年來年月かさなりける。さる程に父のもちより此事を聞きて、瀧口を召してのたまふやう、汝をばいかなる人の聟にもなし、互にたよりとも成るならば、見る目も心やすかるべきに、世になし者にあひなれ、身をいたづらになす事こそ口惜しけれ、やがておくり候へと、たびたび教訓しけれども、用ひず通ひ給へれば、重ねて申されけるやうは、さのみ聞かれ給はずば、恨み申すべしとて、不興の使ありければ、瀧口此由聞くよりも、つく〲物を案ずるに、此世ばかりの夢ぞかし、かゝる思ひをする事よ、東方朔が九千歲、西王母が一萬歲も、名のみ殘りて跡もなし、浮世を物にたとふれば、岸の額の根なし草、入江の水に捨小舟、波にひかれて行くへなく、花のうへなる露よりも、あやふき人間の知らですむこそ拙けれ、大梵王の樂みも、思へば夢のうちぞかし、か程かりなるあだし世に、思ふ人になぐさみてこそ、思ひ出とは成るべけれ、又いかに榮ふるとも、思はぬものはいかにせん、親の命を背かんも罪深かるべし、女の心をやぶれば、一念五百生けんねん無量劫の罪たるべし、是を菩提の心と思ひつゝ、殊更その夜は靜に横笛に打ちむかひ、いつ

ふみたがへし踏みに文をかく

文參りて候ふぞや、御返事とりて得させよと申す人の候ふなり、されば人間の習ひは、一樹のかげ一河のながれを汲む事も、他生の緣と申すなり、ひと村雨のあまやどり、いづれもこの世ならぬ緣とこそ聞き傳へ候へ、いつぞや小松殿の御使に參り給ひし瀧口殿の、君を一目見參らせ候ふより、御面影の忘られがたくて、遂に息の通ふばかりにて候へば、人をば人こそ助けさふらへ、されば小野の小町は、人の思ひのするゐとほり、後には淺ましき身となりたる由うけ給はる、殊更わりなきは此戀の道とこそ申し侍れ、中川の逢瀨はしらせ給はずとも、一筆はやすき御事なれば、御返事あそばし給へかしと、こまごまと申し侍りければ、橫笛思ひよらずとて、みやまぎのふみたがへたるにやとて、

埋火の下にこがると聞くからに消えなん後ぞさびしからまし

とあそばし、引き結びて、よに恥しげに出だしたる有樣、誠にうつくしさ何にたとへん方もなし。殿の戀ひけるもことわりとこそ思ひけれ。

御返事取りて歸りけり。さて瀧口今や〳〵と胸打ちさわぎ待ち給ふ心の中ぞ哀なる。さる程に乳母ひそかに立ちより、かの文取り出だして奉る。瀧口是を見て、うれしさは何に譬へんかたもなし。その後たび〳〵文どもありて、あふせの中となり給ふ。小笹のな

立石―庭の置石

が心のうち譬へんかたぞ無かりける。めのと横笛にあひて、しばしは何となき物語などして、泉殿の立石の陰にて、おもしろき文をひろひ侍りしが、御身はいまだ若くましませども、源氏、狭衣、古今、萬葉、伊勢物語などあそばし給へば、言の葉の品をば知らせ給ふべし、あそばしわけて御聞せさふらへと言ひければ、横笛わがみの上とは知らずして、文こま〴〵と見給へば、筆のたてやうなど、由ある御文と見え侍りける。歌を見給へば、身はうき雲のごとくなり、梅の立枝の鶯は、岸うつ波のふぜいして、野中の清水、谷のうもれ木と書きとゞめ、

人はいさ思ひもよらじ我戀のしたにこがれて燃ゆる心も

君ゆゑに流す涙の露ほどもわれを思はゞ嬉しからまし

横笛申しけるは、葛の下葉とは、われ爰にありながら、千々に心のかよふ事なり、身はうき雲のやうぞとは、天のよそなる君故に、心は空にあこがるゝ事なり、梅の立枝の鶯は、聲ふりたてて鳴くばかりの事なり、岸うつ波のふぜいとは、心を砕くらん、野中の清水とは、人に問はれずひとりすむ事なり、埋火とは、こがれて物思ふの心なりとぞ語り給ひける。めのと此由聞き給ひて申しけるは、今は何をか隱し參らせん、横笛殿へ此

たみつけたる—彩色したる

へとて、やがて懸想詞をぞかけにける。

秋の田のかりそめぶしのみなりとも君が枕を見るよしもがな

横笛顏うちあかめてぞ受取り參らせける、御返事をばよの人してぞ出だしける。瀧口御所よりかへりて、心そらにあこがれて、寢もせず、起きもせず、いづれをか夢とも思ひ分けたるかたもなし。いかにと問へども言はずして、只寄り臥して見えければ、ある時乳母枕にそひ給ひ、御心のやうを懇に御物語候へ、つや〱さやうに只ならぬ御煩ひと見まゐらせてさふらふ、御心を殘さず御物語さふらへと申しければ、瀧口打ちとけのたまふは、いつぞや女院の御所へ御使に參り候ひし時、横笛とやらんを一目みしより、かた時も忘るゝひまもなく、つゝむ思ひはうづみ火の、けぶりは胸にせきあへず、いとゞ思ひはます鏡、かき曇りたるばかりなりと、懇に語りければ、その御事にてさふらはゞ、やすき御事にて候ふぞ、御文あそばし候へ、女院の御所へ常々みづからこそ參り候へ、御機嫌よき時に申さんとて、世にたのもしく申し侍りければ、瀧口あまりの嬉しさに、急ぎ起きあひ、紅の短冊櫻たみつけたるを引き重ね、墨すりながし筆をそめ、心のうちを書きつけ、ひき結びてぞ出だしける。めのと文給はりて、女院の御所へぞ參りける。瀧口

からがき—唐垣

面廊—座敷へ行く所の廊下

横笛草紙

中ごろの事にや、建禮門院の御時、刈藻、横笛とて、二人の女房侍りけり。刈藻は平家のとき、越前の前司もりつぐと最愛して下り給へり。今一人の横笛が行くへを尋ぬるに、まことにあはれなる事どもなり。そのかたち、容顏美麗にしていつくしく、霞に匂ふ春の花、風にみだるゝ青柳のいとたをやかに、秋の月に異ならず。彼の頃都に聞え給ひし淨海入道どのにうへこす人ぞなかりける。津の國兵庫に都を立て、後の世までのかたみと思召し、築島をぞつかれたる、殊に末代まで絶えずとかや。其御子小松殿の御うちに、三條の齋藤、瀧口時頼とて、花やかなる男子あり。小松殿の御つかひに女院の御所へ參りつゝ、からがきの内へ入り、面廊にやすらひ、物申さんと窺ひたる所に、横笛櫻重ねの薄衣に紅の袴のそばをとり、身を押しのけて出でたる形、をんけんとして楊貴妃李夫人も、是にはいかで優るべきとぞ覺えける。さて瀧口文とり出だし、とく御返事御申しさふら

横笛草紙

が與へしかたみの箱、あひかまへて明けさせ給ふなと言ひけれども、今は何かせん、あけて見ばやと思ひ、見るこそ悔しかりけれ。此箱をあけて見れば、中より紫の雲三筋のぼりけり。是をみれば二十四五のよはひも忽ち變りはてにける。

扨浦島は鶴になりて、虚空に飛びのぼりける折、此浦島が年を龜がはからひとして、箱の中にたゝみ入れにけり、さてこそ七百年の齡を保ちけれ。明けて見るなとありしを明けにけるこそ由なけれ。

君にあふ夜は浦島が玉手箱あけて悔しきわが涙かな

と歌にもよまれてこそ候へ。生あるもの、いづれも情を知らぬといふことなし。いはんや人間の身として、恩をみて恩を知らぬは、木石にたとへたり。情ふかき夫婦は二世の契と申すが、寔にあり難き事どもかな。浦島は鶴になり、蓬萊の山にあひをなす。龜は甲に三せきのいわゐをそなへ、萬代を經しとなり。扨こそめでたきためしにも鶴龜をこそ申し候へ。只人には情あれ、情のある人は行末めでたき由申し傳へたり。其のち浦島太郎は丹後の國に浦島の明神と顯はれ、衆生濟度し給へり。龜も同じ所に神とあらはれ、夫婦の明神となり給ふ。めでたかりけるためしなり。

あひをなす―愛をなすか
三せきのいわゐ―未詳

浦島のゆくへ―ゆくへはゆかりの意

かりそめに契りし人のおもかげを忘れもやらぬ身をいかゞせん

さて浦島は故鄕へ歸りみてあれば、人跡絶えはてて、虎ふす野邊となりにけり。浦島これを見て、こはいかなる事やらんと思ひける。かたはらを見れば、柴の庵のありけるにたち、物いはんと言ひければ、内より八十ばかりの翁いであひ、誰にてわたり候ふぞと申せば、浦島申しけるは、此所に浦島のゆくへは候はぬかと言ひければ、翁申すやう、いかなる人にて候へば、浦島の行方をば御尋ね候ふやらん、不思議にこそ候へ、その浦島とやらんは、はや七百年以前の事と申し傳へ候ふと申しければ、太郎大きに驚き、こはいかなる事ぞとて、そのいはれをありのまゝに語りければ、翁も不思議のおもひをなし、淚を流し申しけるは、あれに見えて候ふふるき塚、ふるき石塔こそ、その人の廟所と申し傳へてさふらへとて、指をさして敎へける。

太郎は泣く〳〵、草ふかく露しげき野邊をわけ、ふるき塚にまゐり淚をながし、かくなん、

かりそめに出でにし跡を來てみれば虎ふす野邊となるぞかなしき

さて浦島太郎は一本の松の木陰にたちより、呆れはててゐたりける。太郎思ふやう、龜

たち別れつゝ—衣を裁つと立ち別るとにかく—きて見ん—着と來とにかく

くやあらんと、心をつくし申せしに、今別れなば又いつの世にか逢ひまゐらせ候はんや、二世の縁と申せば、たとひ此世にてこそ夢幻の契にてさふらふとも、必ず來世にては一つはちすの縁と生まれさせおはしませとて、さめ〴〵と泣き給ひけり。又女房申しけるは、今は何をか包みさふらふべき、みづからはこの龍宮城の龜にて候ふが、ゑじまが磯にて御身に命を助けられまゐらせて候ふ、其御恩報じ申さんとて、かく夫婦とはなりまゐらせて候ふ、又是はみづからがかたみに御覽じ候へとて、ひだりの脇よりいつくしき筥を一つ取りいだし、相構へてこの筥を明けさせ給ふなとて渡しけり。

會者定離のならひとて、逢ふものは必ず別るゝとは知りながら、とゞめ難くてかくなん、

日かずへてかさねし夜半の旅衣たち別れつゝいつかきて見ん

浦島返歌、

別れゆくうはの空なるから衣ちぎり深くば又もきてみん

さて浦島太郎は互に名殘をしみつゝ、かくてあるべき事ならねば、かたみの筥を取りもちて、故郷へこそかへりけれ。忘れもやらぬこしかた行末の事ども思ひつゞけて、はるかの波路をかへるとて、浦島太郎かくなん、

あけて見ければ、春のけしきと覺えて、梅や櫻の咲き亂れ、柳の糸も春風に、なびく霞のうちよりも、黄鳥の音も軒近く、いづれの木末も花なれや。南面をみてあれば、夏の景色とうちみえて、春をへだつる垣穂には、卯の花やまづ咲きぬらん、池のはちすは露かけて、汀涼しき漣に、水鳥あまた遊びけり。木々の梢も茂りつゝ、空に鳴きぬる蟬の聲、夕立過ぐる雲間より、聲たて通るほとゝぎす、鳴きて夏とは知らせけり。西は秋とうちみえて、四方の梢紅葉して、ませのうちなる白菊や、霧たちこもる野べのすゑ、まさきが露をわけ〳〵て、聲ものすごき鹿のねに、秋とのみこそ知られけれ。さて又北をながむれば、冬の景色とうちみえて、四方の木末も冬がれて、枯葉における初霜や、山々や只白妙の雪にむもるゝ谷の戸に、心ぼそくも炭竈の煙にしるき賤がわざ、冬としらする景色かな。かくて面白き事どもに心を慰め、榮華に誇り、あかしくらし、年月をふるほどに、三年になるは程もなし。浦島太郎申しけるは、我に三十日のいとまをたび候へかし、故里の父母をみすて、かりそめに出でて、三年を送り候へば、父母の御事を心もとなく候へば、あひ奉りて心安くまゐり候はんと申しければ、女房仰せけるは、三とせが程は、鴛鴦の衾のしたに比翼の契をなし、片時みえさせ給はぬさへ、とやあらんか

房の申しけるは、一樹の影に宿り、一河の流を汲むことも、皆これ他生の縁ぞかし、ましてやはるかの波路を、遙々とおくらせ給ふ事、偏に他生の縁なれば、何かは苦しかるべき、わらはと夫婦の契をもなし給ひて、おなじ所にあかし暮らし候はんやと、こまぐ\と語りける。

浦島太郎申しけるは、ともかくも仰せに從ふべしとぞ申しける。さて偕老同穴のかたらひも淺からず、天にあらば比翼の鳥、地にあらば連理の枝とならんと、互に鴛鴦のちぎり淺からずして、明かし暮らさせ給ふ。さて女房申しけるは、これは龍宮城と申す所なり、此所に四方に四季の草木をあらはせり、入らせ給へ、見せ申さんとて、引具して出でにけり。まづ東の戸を

はし舟―小舟
此世ならぬ縁―前世よりの宿縁

身いかなる人にてましませば、かゝる恐しき海上に、只一人乘りて御入り候ふやらんと申しければ、女房いひけるは、さればさる方へ便船申して候へば、をりふし浪風荒くして、人あまた海の中へはね入れられしを、心ある人ありてみづからをば、此はし舟に載せて放されけり、悲しく思ひ鬼の島へや行かんと、行きかた知らぬをりふし、只今人に逢ひまゐらせ候ふ、此世ならぬ御緣にてこそ候へ、されば虎狼も人をえんとこそし候へとて、さめ〴〵と泣きにけり。浦島太郎もさすが岩木にあらざれば、あはれと思ひ綱をとりて引きよせにけり。

さて女房申しけるは、あはれわれらを本國へ送らせ給ひてたび候へかし、これにて棄てられまゐらせば、わらはは何處へ何となり候ふべき、すて給ひ候はゞ、海上にての物思ひも同じ事にてこそ候はめと、かきくどきさめ〴〵と泣きければ、浦島太郎もあはれと思ひ、おなじ船に乘り沖の方へ漕ぎ出だす。かの女房のをしへに從ひて、はるか十日あまりの船路を送り、故里へぞ著きにける。さて船よりあがり、いかなる所やらんと思へば、白銀の築地をつきて、黄金の甍をならべ、門をたて、いかなる天上の住居も、これにはいかで勝るべき、此女房のすみ所詞にも及ばれず、中々申すもおろかなり。さて女

うろくづ―魚類

つぐの日―次日

浦島太郎

昔丹後の國に浦島といふもの侍りしに、其子に浦島太郎と申して、年のよはひ二十四五の男ありけり。あけくれ海のうろくづを取りて、父母を養ひけるが、ある日のつれ〴〵に釣をせんとて出でにけり。浦々島々入江々々、至らぬ所もなく釣をし、貝をひろひ、みるめを刈りなどしける所に、ゑじまが磯といふ所にて、龜を一つ釣り上げける。浦島太郎此龜にいふやう、汝生あるものの中にも、鶴は千年龜は萬年とて、いのち久しきものなり、忽ちこゝにて命をたゝん事、いたはしければ助くるなり、常には此恩を思ひいだすべしとて、此龜をもとの海にかへしける。

かくて浦島太郎、其日は暮れて歸りぬ。又つぐの日、浦のかたへ出でて釣をせんと思ひ見ければ、はるかの海上に小船一艘浮べり。怪みやすらひ見れば、うつくしき女房只ひとり波にゆられて、次第に太郎が立ちたる所へ著きにけり。浦島太郎が申しけるは、御

浦島太郎

の深きゆゑなれば、共に出家せんとて、やがて髪切り捨てて、同じ庵室にとぢ籠り、行ひすましてゐたりけり。

佐伯は二人の女房に捨てられて、あるに甲斐なき身のほどとて、髻きりて西へ投げ、高野山へぞ登りける。是も清水の觀音の御方便にて、三人ともに救ひとらせ給ひて、いづれも行ひ澄まして、往生の素懷をとげ、彌陀、觀音、勢至とあらはれ、三尊是なりといへり。誠にありがたくたつとかりける惠みなり。

素懷―本意

く、御嬉しくながめ入り候ふ、すなはち御むかひまゐらせ候ふまゝ、急ぎ御下り候べく候、くはしくはとても御みづからにてと書かせたり。さるほどに程なくむかひは京へ上りつきけり。その間にうつくしく御所をたて待たれけり。京には嬉しく思ひて、やがて下られける間、程なく豐前の國につき給へり。御下りとておの〳〵ひしめき、やがて新造へ入れ奉りて、女房いであひて、あらいつくしの女房や、李夫人、楊貴妃、衣通姫、小野の小町と聞きつたへしも、是にはいかで勝るべき、われさへ見れば餘りのうつくしさに、たちども更に覺えず、かほど美しき人をさへ言ひ出だす事もなし、ましてわらはが事とては、年月長々の在京に一度も思ひ出だすまじ、かほど無得心なる男を賴みしわれこそ淺ましけれとて、髮剃り落し出家せんと、たゞ一すぢに思ひ定めし女房の、心のうちこそやさしけれ。かくて夫にいふやうば、是迄京のまれ人を呼びくだして候ふうへは、いそぎ御見參候へかしと言ひければ、すなはち新造へぞうつりける。

其あとに女房は髮を切り文にそへおき、やがて家をぞ出でにける。京の女房此由を聞き、やさしやな、高きも賤しきも妬むならひの候ふに、かやうにやさしき人をいかでか一人おくべきぞ、佐伯に二たび見參して、過ぎにし戀をはれつるも、偏に彼の本妻のなさけ

空なる事までも、契りと聞けばうらやまし、行きがた知らぬあま小舟、獨り物をやこがるらん、野寺の鐘の入相も、心つきぬるうき身かなと書きて、あまのみるめもはづかしや、いそぎ煙となし給へとて、おくに歌あり、

見るたびに心つくしのかみなればうさにぞかへすもとの社へ

とかゝれたり。佐伯くだりの時、かたみとて一ふさ切りて置きつる鬢の髪を、巻きそへてあり。うちの女房是を見て、あらうつくしや、おもしろや、かゝる優なる女房を呼ばではいかゞあるべきぞ、かほど福人なる男に、かくと物いはゞいかゞあるべき、たばかりごとを言ひて見んと思ひて、佐伯鷹野より歸りけるに、女房いふやうは、みづからが妹都に人にたのめられて此程候ひしが、夫の心のうたてさは、とあるちやうに思ひつきいとまを出だして候ふ程に、萬事たのみて下り候はんと、文をことづて下し候へば、むかひを上せてたび候へと言ひければ、やすき程の事なりとて、いそぎ迎ひを上すべきといひて、やがて言ひつけて、人を上せんとありしかば、その時此女房はそらやみをして、文を書きえず候ふ、殿に一筆あそばして御やり候へと言ひければ、ともかくもとて書かれけり。久しく御おとづれも申し候はで、心より外に候ふ處に、御文給はりうち置きがた

うさ—憂さ、宇佐

たのめられて—たのもしくせられて

ちやう—傾城屋の主人を長といふ事あり、そこにある女をいふにや

そらやみ—假病

鷹野―鷹狩

じと申し給へば、此文只とゞきて候はゞ、よろこび入りまゐらせ候ふべしとて、さめ〴〵と泣き給へば、僧もあはれに思ひ給ひて、いかなる御事の御文にて候ふやらん、いたはしやと思ひて、いそぎゆく程に、程なく豊前の國佐伯の館にたづね入り、此文都より御ことづて候ふとありければ、折ふし佐伯は鷹野に出で、二三日もかへられず。たしかにとゞけて、僧はすなはち歸られけり。

内の女房此文をとりて見てあれば、便宜よろこび申しまゐらせ候ふ、さても〳〵御下りのその後は、よもの荻原霜枯れて、たよりの風の音もなし、下葉の露も秋すぎて、おき所なき葛の葉を、うらみんとすれども枯れ〳〵の、かつらばかりの身にそひて、しがらむ今の我心、せめて思ひも慰むと、傾く月を見おくれども、ながむる人のあらざれば、空しき夜半のあか月は、したしき寢屋にたちかへり、あくるも遲き戀衣、君が姿を夢にても、せめて見ばやと思へども、ねられぬ夜はの癖として、夢さへうすくなりにけり、かたしく袖のひとりねは、雲居の雁のひとつらも、つがはぬ鴛鴦のこゝちして、霜さむしろの鶴が音は、あふと見る夜の夢もなし、思ふ心のおもかげは、身にそふばかりますかゞみ、見てと申す人もあらばこそ、さながら夢の心地して、空飛ぶ鳥の一つがひ、うはの

本望候ふまじ—返事を取りかへることを期待する勿れ

ひけり。
かくて筑紫につきければ、安堵の喜びかぎりなし。日々夜々の亂舞、酒盛美々しき事かぎりなし。かくて日數をおくりしかば、三とせになりけれども迎ひものぼせず。京の女房は今やいつやと待ちけれども音もせず。そよと風の吹くも此おとれづかと待ちかねて、餘りの苦しさに淸水にまゐりて、此いのりをぞ申されける。あるとき鎌倉へ下りける僧のありけるに、文一つかきてことづて、下さんとかたらひければ、此僧やすきほどの御事なりとありければ、うれしく思ひて、ふみをかきて此御僧に奉る。御僧は文うけとりて、行脚の事にて候ふほどに、屆け參らせ候はんずれども、御返事までは本望候ふま

さんらうかん――
栄鮮

いそぎ歸り、ありのまゝに申しければ、佐伯聞き給ひて、うち案じつゝ暫くありて、さては嬉しきものかな、歌の本歌にさる事あり、

物かげにありと見えなばおきなせそこよひすぐすな鵙の草莖

此歌の心なりと思ひて、事尋常に出で立ちて、彼の宿所へぞいそがれける。もとより彼の女房も、今宵といひし事なれば、今やいつやと待ちゐたり。さる程に佐伯、このうちへつかくと入るほどに、とかくの事もなく、偕老同穴のかたらひ淺からず。此女房は世にある人にて、禁中さまへもだいくさんらうかんを參らせ給ひける程に、佐伯の本領も程なくみちゆきて、豐前へ下らんとぞの給ひて、こしらへられけり。此女房、すこしの間もたち離れん事を悲みつゝ、下りかねてぞありしが、あるとき此女房に申されけるは、只今もつれまゐらせて下りたくは侍れども、竹松一人候へば、とかくの事にも及び候はず、やがて御迎ひに上せ候ふべし、それまで離れがたく思ひまゐらせ候へとの給ひ、たがひに御心も一つにて候はゞ、道すがらの事もおしはからせ給ひて、御忘れもせずおぼしめし給はゞ、御むかひをまゐらせんまで、是をかたみに御覽じて御待ち候へと、鬢の髪をすこし切りて、女房に參らせけり。女房も離れがたく思はれけれどもとばかりの給

聞かぬ顔にて候ひし程に、もし主ばしあたりに在るやらんと、しづ心もなかりけり。扨夜もやう〳〵明けければ、けうがる下女に包を持たせ、舞臺をさして出でられける程に、あまりの名殘をしさに、立寄り袂をひかへて、一首かくなん、

別るればわれこそうけれあか月の鳥はなにしに音をば鳴くらん

きて見てぞ宿のつらさも知られける君ゆゑぬるゝ袖とおもへば

かやうによみければ、女房も打案じ、歌の返事せぬものは、舌なきものに生まるゝときけば、ふりかへりてなん、

われも只おなじ心に旅衣きてこそ宿のつらさをも知れ

斯樣によみ捨てて歸りければ、あまりの名殘をしさに、竹松をよびて、今の女房のあとに行きて、宿を見て歸れよと言ひければ、此童みえがくれに行きければ、四條高倉にて、さもいうなる所へ入りけるほどに、つゞきて入りみれば、廣椽にうちあがり、妻戸へ入らせ給ひけるが、うしろを見給へばわらはの來りしを、つく〴〵と見給ひて、うち笑みて立たせ給ひける程に、此童さしよりければ、この女房の給ひけるやうは、汝が主にはもずのくさぐきと言へとばかりにて、内へ入らせたまひけり。

さいき—原本「さかき」とあれど誤なること明なれば改む

沙汰—訴訟

みちゆかず—はかどらず

ほうたん—牡丹か

さいき

豊前の國うだの佐伯と申す人、一族に所領をとられ、京都へ上り沙汰するといへども、更にみちゆかずして、年月をおくれども甲斐なし。かくては叶はじと思ひ、清水にまゐりて、一七日こもりて、御夢想にまかせ、とにもかくにもならんと思ひたち、竹松と申す童を一人具してまゐり、祈念を深く申せども、さしたる御夢想もなかりけり。あたりをきつと見てあれば、年のほど二十ばかりの女房の、みめかたち世にすぐれて、翡翠のかんざしは青黛が立板に唐墨をかけたるに異ならず。かつらのまゆずみ青うして、丹花の唇うつくしくして、ほうたんのかさねをに異ならず。三十二相のかたちは、月をねたみ花をそねむばかりなる女房の、みな水晶の珠數をつまぐり、念誦半と見えけるに、佐伯心におもふやう、おなじ人間にすむならば、かやうの人と一夜の枕を竝ぶるよしもがなと、あまり心の堪へかねて、詞をかけんと思ひ立ちより、御こもり候ふかと申せども、

さいき

さる程に少將殿中納言になり給ふ。心かたちは初めよりよろづ人にすぐれ給へば、御一門のおぼえいみじく思しける。宰相殿きこしめし喜び給ひける。その後若君三人いできけり。めでたく榮え給ひけり。住吉の御誓に末繁昌に榮えたまふ。よのめでたきためし、これに過ぎたる事はあらじとぞ申し侍りける。

（「御伽草子」による）

しもつ―撞木(しもく)又はしもとの衍か
らんばうし―濫妨にて横領する意か
おうぢ―ここにては老父といふ程の意
うば―老母

のきて、是はたゞ者ならず、たゞ地獄に亂こそいできたれ、たゞ逃げよと言ふまゝに、打出の小槌、杖しもつ、何に至るまで打捨てて、極樂淨土のいぬゐの、いかにも暗き所へ、やう〳〵に逃げにけり。さて一寸法師は是を見て、まづ打出の小槌をらんばうし、われ〳〵がせいを大きになれとぞ、どうと打ち候へば、程なくせいおほきになり、さて此程つかれにのぞみたることなれば、まづ〳〵飯を打ちいだし、いかにもうまさうなる飯、いづくともなく出でにけり。不思議なる仕合となりにけり。其後金銀うちいだし、姫君ともに都へのぼり、五條あたりに宿をとり、十日ばかりありけるが、此事かくれなければ、内裏にきこしめされて、急ぎ一寸法師をぞ召されけり。すなはち參内つかまつり、大王御覽じて、まことにいつくしきわらはにて侍る、いかさまこれは賤しからず。先祖を尋ね給ふ。おうぢは堀河の中納言と申す人の子なり、人の讒言により、流され人となりたまふ、田舍にてまうけし子なり、うばは伏見の少將と申す人の子なり、幼き時より父母に後れ給ひ、かやうに心もいやしからざれば、殿上へ召され、堀河の少將になし給ふこそめでたけれ。父母をも呼びまゐらせ、もてなしかしづき給ふ事、世の常にてはなかりけり。

給ひかし―給へかしの訛

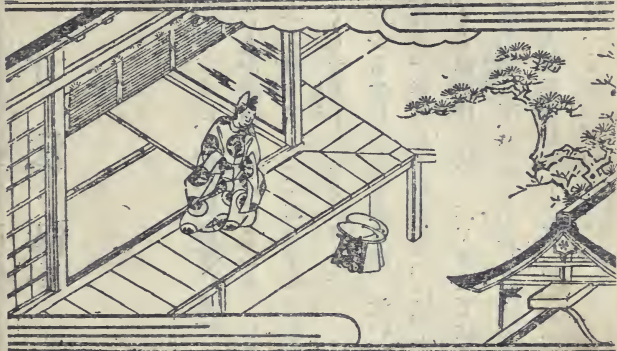
きようがる島―一風かはりたる島

一寸法師申しけるは、わらはが物を取らせ給ひて候ふ程に、とにかくにもはからひ候へとありけるとて、心のうちに嬉しく思ふ事かぎりなし。姫君はたゞ夢の心地して、呆れはてゝぞおはしける。一寸法師とく〳〵とすゝめ申せば、闇へ遠く行くふぜいにて、都を出でて足にまかせて歩み給ふ、御心のうちおしはかられてこそ候へ。あらいたはしや、一寸法師は姫君をさきに立てゝぞ出でにけり。宰相殿はあはれ此事をとゞめ給ひかしと思しけれども、繼母のことなれば、さしてとゞめ給はず、女房たちもつき添ひ給はず。姫君あさましき事に思しめして、かくていづかたへも行くべきならねど、難波の浦へ行かばやとて、鳥羽の津より舟にのり給ふ。折ふし風あらくして、きようがる島へぞつけにける。舟よりあがり見れば、人住むとも見えざりけり。かやうに風わろく吹きて、かの島へぞ吹きあげける。とやせんかくやせんと思ひ煩ひけれども、かひもなく舟よりあがり、一寸法師はこゝかしこと見めぐれば、いづくともなく鬼二人來りて、一人は打出の小槌を持ち、いま一人が申すやうは、呑みてあの女房とり候はんと申す。くちより呑み候へば、目のうちより出でにけり。鬼申すやうは、是は曲者かな、口をふさげば目より出づる。一寸法師は鬼に呑まれては、目よりいでて飛びありきければ、鬼もおぢをの

いつきやう——一興か
みつもの——未詳
うちまき——散米
わらは——一寸法師みづからをいふ

といひければ、宰相殿はきこしめし、面白き聲と聞き、椽のはなへたち出でて御覽ずれども人もなし。一寸法師かくて人にも踏み殺されんとて、ありつる足駄の下にて、物申さんと申せば、宰相殿不思議のことかな、人は見えずして、おもしろき聲にてよばはる、出でて見ばやと思しめし、そこなる足駄はかんと召されければ、足駄の下より、人な踏ませ給ひそと申す。不思議に思ひてみれば、いつきやうなるものにて有りけり。宰相殿御覽じて、げにも面白き者なりとて、御笑ひなされけり。

かくて年月をおくる程に、一寸法師十六になり、せいは元のまゝなり。さる程に宰相殿に十三にならせ給ふ姫君おはします。御かたちすぐれ候へば、一寸法師姫君を見たてまつりしより思ひとなり、いかにもして案をめぐらし、わが女房にせばやと思ひ、ある時みつもののうちまき取り茶袋に入れ、姫君のふしておはしけるに、謀事をめぐらし、姫君の御口にぬり、さて茶袋ばかりもちて泣きゐたり。宰相殿御覽じて、御尋ねありければ、姫君の、わらはが此程とり集めておき候ふうちまきを、取らせ給ひ御まゐり候ふと申せば、宰相殿大きに怒らせ給ひければ、案のごとく姫君の御口につきてあり、まことに僞ならず、かゝる者を都におきて何かせん、いかにも失ふべしとて、一寸法師に仰せつけらるる。

御器一椀

いづ方へも行かばやと思ひ、刀なくてはいかゞと思ひ、針を一つうばに乞ひ給へば、取りいだしたびにける。すなはち麥稈にて柄鞘をこしらへ、都へ上らばやと思ひしが、自然舟なくてはいかゞあるべきとて、又うばに御器と箸とたべと申しうけ、名殘をしくとむれども、たち出でにけり。住吉の浦より御器を舟としてうち乘りて、都へぞ上りける。

すみなれし難波の浦をたちいでて都へいそぐわが心かな

かくて鳥羽の津にもつきしかば、そこもとに乘り捨てて都に上り、こゝやかしこと見るほどに、四條五條の有樣、心も詞にも及ばれず。さて三條の宰相殿と申す人のもとに立寄りて、物申さん

せいも人ならず
―身長ものびず

一寸法師

中頃の事なるに、津の國難波の里に、おうぢとうばと侍り。うば四十に及ぶまで、子のなきことを悲み、住吉にまゐり、なき子を祈り申すに、大明神あはれとおぼしめして、四十一と申すに、たゞならずなりぬれば、おうぢ喜びかぎりなし。やがて十月と申すに、いつくしき男子をまうけけり。

さりながら生れおちてより後、せい一寸ありぬれば、やがて其名を一寸ぼうしと名づけられたり。年月をふるほどに、はや十二三になるまで育てぬれども、せいも人ならず。つくづくと思ひけるは、たゞ者にてはあらざれ、たゞ化物風情にてこそ候へ、われらいかなる罪の報にて、かやうの者をば住吉より給はりたるぞや、淺ましさよと、見るめも不便なり。夫婦思ひけるやうは、あの一寸法師めをいづ方へもやらばやと思ひけると申せば、やがて一寸法師、此由うけ給はり、親にもかやうに思はるゝも、くちをしき次第かな、

一寸法師

暗きより―此歌正しくは「暗きより暗き道にぞ入りぬべき遙に照らせ山の端の月」なり

ぎ雲をわけ、播磨の國書寫へ上り、性空上人の御弟子となり、六十一の年得心し給ひける

とき、書寫の鎭守の柱に、御歌を書きつけ給ひ、かくばかり、

暗きより暗きやみぢにうまれきてさやかに照らせ山のはの月

とよみて、書きつけ給ひけるによりて、歌の柱といふことは、播磨の國書寫よりこそは

始まりたると申すなり。

なり候ふと語りければ、産衣は何にて候ふと問ひ給へば、あやめの小袖のつまに、一首の歌を書きたり。いかにと仰せければ、やがて道命、かくとあり、

もゝとせに又もゝとせは重ぬとも七つ〱の名をばたえじな

とよみ候ふ歌なりといへば、和泉式部は捨てし時、鞘をばとめ給ひて、是をばわがみのかたみと思ひし故に、身をはなたず持ちたりし程に、鞘をとり出だしてあはすれば、疑ひもなき元の鞘なり。こは何事ぞ親子を知らであふ事も、かかる浮世にすむゆゑなり。是を菩提のたねとして、都をいまだ夜深に出でて、をのへの鐘のうらづたひ、ひゞきは何としかまがた、霞をしの

じつけて、下女一人つれて内裏をいで、道命が宿へ行きて、戸をほと〳〵と叩きてかくなん、

出でてほせこよひばかりの月影にふり〳〵ぬらす戀の袂を

とよみ給ひければ、道命うちにて是をきゝ、夢のこゝちして表の戸をあけて、さらば外へも出でずして、かこち顔なる風情してかくばかり、

出でずとも心のあらば影さして闇をばてらせ有明の月

とよみて、うちほれたる風情、もとより彼の女房なさけ深きにより、うちにさし入りて、其夜は鴛鴦のふすまのしたに比翼の契をこめ、夜もやう〳〵更け、きぬ〴〵なりし折しも、道命がもちける守刀を、などやらん心にかけ給ふけしきにて、仰せけるやうは、女房の身こそあれ、男の守刀をかけたるためしはいかにと仰せければ、道命、これは由ある刀にて候ふ、いかにと申すに、われは是五條の橋の捨子にて候ふを、養子の父のそだてて、人となされ候ふなり、又われに此刀をそへて捨てられし刀なれば、これを母と思ひ、身をもはなたず持ちたると申しければ、女房なほ怪しく思ひ、さては御身はいくつになり給ふぞと問ひ給へば、道命、子にて捨てられ候ふよしうけ給はり候ふ、今ははや大に

養子の父—養父といふに同じ

二十一と、一度のなさけこめんとて多くのことば語りつくしつと詠みてんければ、彼下女道命をつく〲と見て、かほどやさしき業をして、かんし賣り給ふぞといひければ、ふり〲してと答へける。

下女は心えず思ひける。さる間禁中此事をきこしめされ、只今の商人の歸るさき見よとて、人をそへて見せ給ふに、道命内裏を出でて、心に思はれけるは、今日は日もくれぬ、あすこそと思ひ宿をとりけり。さる間下女宿をよく見おきて歸り、此由かくと申しあぐれば、禁中より仰せけるやうは、彼の商人のいひつることばをよも知らじ、伊勢が源氏をこひてよみし歌なり。

君こふる涙の雨に袖ぬれてほさんとすれば又はふり〲

といふ歌の心ばへなりと、仰せごとありければ、彼の局の女房、さては淺からぬ心あこがれけるよと、つく〲と思ひつゞけて、小野の小町は若盛の姿よきによりて人に戀ひられて、其怨念解けざれば、無量のとがによりて、その因果のがれず、遂に小町四位の少將おもひはなれず、いひすつる言の葉までもなさけあるなり、只いたづらに朽ちはつる身をといふ歌の心を忘れずして、常に人にわりなきなさけを、こめたき事にてと案

よくほる―よくばる

九つとや、こゝであはずば極樂の彌陀の淨土であふ世あるべし
十とかや、とやをはなれし荒鷹をいつかわが手にひきすゑて見ん
十一や、一度まことのあるならば人の言の葉うれしからまし
十二とや、にくしと人の思ふらん叶はぬことに心つくせば
十三や、さのみなさけをふり棄てそなさけは人のためにあらねば
十四とや、しなん命もをしからず君ゆゑながすわが身なりせば
十五とや、後世のさはりとなりやせん身のはかなくも逢はではてなば
十六や、陸地の程をすぐるにも君に心をつれてこそ行け
十七や、七度まうでのたび〳〵も君にあふよと祈りこそすれ
十八や、はづかしながら言ふことを心つよくもあはぬ君かな
十九とや、くるし夜ごとに待ちかねて袖いたづらに朽ちやはてまし
二十とや、にくしと人の思ふらんわれならぬ身を人のこふれば

といひければ、かの下女是を聞きて、柑子よくほるべきにはあらねども、あまりに歌の心の面白さに、柑子一つそへよといへば、一つ添へてかくなん、

しけるを、道命只一目みしよりも、淺からぬ身にあこがれて、我宿に歸り、山にあがり給ひても、見し人のおもかげ身にそひて、忘れぬは前世の宿業なり。
又都へのぼりて、あこがれ見し人のおもかげを、今一目見ばやと思ひ、柑子あき人になりて、内裏にこし入りて柑子を賣りけるに、彼の見し人の局より、下女一人出でて、おあし二十ばかりにて柑子をぞ買ひにける。それは二十かぞへて賣りけるが、詞にてはかぞへず、戀の歌に數へつゝかくなん、

一つとや、ひとりまろねの草枕袂しぼらぬあかつきもなし
二つとや、ふたへ屏風のうちに寢てこひしき人をいつか見るべき
三つとかや、みても心のなぐさまでなどうき人の戀しかるらん
四つとや、よぶかに君を思ふらん枕かたしく袖ぞ露けき
五つとや、今や〳〵とまつ程に身をかげろふになすぞ悲しき
六つとかや、むかひの野べにすむ鹿もつまゆゑにこそ鳴きあかしけれ
七つとや、なき名の立つもつらからじ君ゆゑ流すわが名なりけり
八つとかや、やよひの月の光をばおもはぬ君が宿にとゞめよ

和泉式部

八講―法華八巻を講說する式

中ごろ花の都にて、一條の院の御時、和泉式部と申して、やさしき遊女あり。內裏に橘の保昌とて男あり。保昌は十九、和泉式部は十三と申すより、不思議の契をこめ、なさけ深くして、十四と申す春の頃、若一人まうけ給ひ、あひの枕の睦言に、はづかしとや思ひけん、五條の橋に捨てにけり。產衣あやめの小袖のつまに、一首の歌を書き、鞘なき守刀をそへて捨てけるを、町人ひろひ養育して、比叡の山へのぼせけり。

さる程に學問心ざし深く、ならびなく、みな心をかけぬ法師もなく、其名總山にかくれなく、なさけの色もわりなきさまなり。總山のもてあそびのみならず、佛道の道をたのもしく、其名天下に廣まり、道命阿闍梨とて、世にかくれなくして、道明十八のとし、內裏の八講をつとめ給ひし時、風ふきてつぼねの簾を二三度吹きあげて、年の程二十ばかりなる女房の、眉はこぼれてよしありて、論議聽聞して、おもひ入りたる風情にておは

和泉式部

しくわうそだち—未詳
めいとう—名童か
一たう—不明
りんたいは—輪臺の衍か、輪臺は唐樂なり
ことりしよ—古鳥蘇か、これも唐樂
船きやうたう—船行道なるべし
けもんかくち—玄文學地にて幽玄なる佛道を學修せんとする輩の意なるべし

の役をば、北の御方ひきたまふ。一面の琵琶をば、北條殿の御內樣、上總の介の御內樣、和琴をしらべ給ひけり。けんくわんいづれも名にし負うたる上手なり。舞臺のうへの舞ちごに、秩父殿の二男ふぢいしどのと申して、十三にならせ給ふ、しくわうそだちのめいとうなり。左の一たううけとりの、高坂殿の鶴若どの、總じてちごは十八人、九人づつに分ちて、左右の舞をまひ給ふ、いづれも舞は上手なり。

龍王に一をどり還城樂のさしあし、拔頭の舞のはちかへし、りんたいはにはさすかひな、青海波にはひらく手、ことりしよに羽がへし、いづれも曲をもらさず。夜日三日ぞ舞うたりける。打つも吹くも奏づるも、菩薩の行これなり。天人は天降り、龍神は浮きあがり、船きやうたうにめぐるらん。けもんかくちのともがら、浮かれてこゝに立ち給ふ。御まへの人々御所領給はり、所知入りとこそ聞えけれ。

したんくわりはく—紫檀、花梨木
みづひき—水引の幕
けんくわん—絃管か

かずをそろへ、思ひ〳〵に引かれけり。三日の日の雑餉には、江の島まうでに事よせて、御はまいでとぞ聞えける。かたじけなくも御寮の北の御方いでさせ給ふ。そのうへ人々の北の方も皆御供とこそ聞えけれ。船のうへに舞臺を高く飾りたて、したんくわりほくやり渡し、高欄ぎぼし磨きたて、舞臺のうへに綾をしき、みづひきに錦をさげぬれば、浦吹く風に飄飖して、極樂淨土は海のおもてに浮き出でぬるかと疑はる。おん賀の舞あるべしとて、けんくわんの役をぞさゝれける。秩父の六郎どのは笛の役とぞ聞えける、なかぬまの五郎はとびやうしの役なり、梶原の源太景季は太鼓の役とぞ聞えける。御簾中には、琵琶三面、琴二ちやう、きんの琴

ちはや—巫女のきる小忌衣の類
左近の右大将—文盲なる語なり、右大將は右近の大將なれば左近なるべきに非ず
くわんど—官途か
てうしやう—未詳
ざつしやう—雜餉
りふじん—蜜柑の一種に李夫人と稱するものあり
さうふのしる云云—未詳
しゆみをなす—未詳
ちんのほた—沈の榾にて沈香の根株なるべし
じやかうのへそ—麝香の臍

もがらは、諸願必ず滿足せり。ていとうの鼓の音、さつ〳〵の鈴のころ〴〵に、ちはやの袖をふりかざす、神慮すゞしめの、御神樂の音はひまもなし。

かゝるめでたきをりふし、頼朝上洛まし〳〵て、大佛供養をのべさせ給ひ、御身は左近の右大將に經あがらせ給ひ、兵衞づかさ十人、左衞門づかさ十人、廿人のくわんどを申し給ひて、そのころちうの人々に、當て行はせ給ふ。中にも左衞門づかさをば、梶原の平三景時に下されけるを、嫡子の源太にゆづる。源太つかさをたまはり、いそぎ國にくだり、此事披露申さでであるべきかと、大名小名、てうしやう申し、いつきかしづき奉る。まづ初番のざつしやうには、蓬萊の山をからくみ、中に甘露の酒をいれ、不死の藥と名づけ、しろがねの竿に、こがねの釣瓶をむすび、はねつるべにてこれを汲む。酒にあまたの威德あり。うとき人さへ近づき、親しき中はなほしたしむ。をちこちのたづきも知らぬ旅人に、馴るゝも酒の威德なり。蓬萊の山のうへには、りふじんが橘、けんぽの梨、さうふのしるかゝくるゆとう、なんせいのくりとかや。皆いろ〳〵になりつれて、その味ひはしゆみをなす。まことに不死の藥ぞと、醉をすゝめてまゐらする。二日の日の雜餉には、肴のかずを集め、ちんのほた、じやかうのへそ、鎧、腹卷、太刀、刀、名馬の

たいふー大分か

給はりしー給はりての衍か

はつかいー須彌山說に九山八海ありそれにかたどりて云へるにや

濱出草紙

そも鎌倉と申すは、むかしは一足ふめば三丈ゆるぐたいふの沼にて候ひしを、和田、畠山、總奉行を給はりし、石切、鶴の嘴をもつて、高き所を切りたひらげ、たいふの沼をうめ給ふ。上はつかい、中はつかい、下はつかいとて三つにわる。上はつかいは山、中はつかいは在家、下はつかいは海なりけり。上はつかいの一段高きところには、源氏の氏神、正八幡大菩薩をあがめ祝ひ奉る。中はつかいの在家を、鎌倉やつ七郷にぞわられける。あらおもしろのやつ〳〵や。春はまづさく梅が谷、つゞきの里に匂ふらん。夏は涼しき扇が谷、秋はつゆくさゝめがやつ、冬はげにも雪の下、龜がえやつこそ久しけれ。

はるかの沖を見渡せば、船に帆かくる稻村が崎とかや、いひ島、江の島、つゞいたり。蓬萊宮と申すとも、いかでこれには優るべき。かるがゆゑに名づけて、あゆみを運ぶと

濱出草紙

たるまで、ありがたき御事なり、君もゆたかに民さかえ、久しくめでたき事ばかりにて、心ゆるがせなるのみなり。

きんへん―近邊か

つ、白鬚の明神きんへん、うちおろし、今津、海津、しなづ、志賀の浦、便船あらば竹生島、ちやうめんじ、おきの島などへもおし渡り、野老蕨などを掘りくひ、一旦身命をつながんと存じ候ふ、何より心の殘り候ふは、やがて正月に、かゞみ、はなびら、煎餅、あられ、かき餅、おこし米など、春雨の中徒然なぐさみにかぶりくひて、じょめいて遊ばんとたくみしに、大敵の猫どのに、おつ立てられ、のき退くこそ無念なれ、さりながら猫どのも犬といふこはものに、あそこゝを追ひまはされ、辻川にたふれふし雨露にしほたれたるを見れば、報いはありと勇みつゝ、方々へのき退く。その中に公家門跡などに久しくすみける鼠、三首の腰折をつらねたり。

鼠とる猫のうしろに犬のゐてねらふものこそねらはれにけり

あらざらん此世の中の思ひでに今一たびは猫なくもがな

じょといへば聞耳たつる猫どののまなこのうちの光おそろし

僧心に思ふやう、かゝることわざ人に語るならば、狂氣とや風聞せん、深くつゝしむべしと思へども、まれなる夢のたはぶれは、近き友に語り傳へ、笑草かなといへば、仰せのごとく、鼠うすくなり物をもひかず、枕本をもありかず、かやうの御政道は昔が今にい

命の中たがひ―生命をすつること

かざ―にほひ

めんあひ―未詳

木のもと―伊香郡木之本

忍なりがたしとて、上京下京の鼠どもよりあひ、ふれをまはし、にしぢん組は舟岡山のすそ、小川組は御靈の藪、立賣組は相國寺の藪、聚樂組は北野の森、下京組は六角堂のうちへ、よりあひ〲談合す。其中に分別顔する鼠、すゝみ出でて申すやう、所詮此體ならば、命と中たがひの外はあるべからず、いかゞしてか此度の命のびなんと、いろ〲評定したりけり。はや都の御ふれ、五十日になるといへども、魚の骨を一つ齒にあてず、油あげ、やき鳥のかざをだにもかゞず、猫どのに參りあはねば、自然に干死にまかりなるなり。

きつと案じいだしたる事あり、此程聞き及びしは、近江の國御檢地ありしかば、めんあひについて、百姓稻を刈らぬよし、慥に聞きとゞくるなり。まづ〲冬中はまかりこし、稻の下に妻子共をかゞませ、年をこえ暖にならば、きたの郡、木のもとの地藏をたのみ、ゆんでめての山々、伊香郷山、おくだに山、おそろしけれど膽吹山に關が原、醒が井、摺針、佐和山、たかのはた所の山、はくさんじ山、かみかまうのこなりのはた、ふせ山、布引山、觀音寺、八幡山、鏡山、朝日山、こうの郡わしの尾の山、村々里々、三上山、信樂山、石山、粟津、まつもと、打出の濱、長柄山、園城寺、延曆寺、坂本、堅田、比良、こま

やうの心を思へば、きるゝともいかでかへん、さりながらこゝに詫びたき事あり、出家の役にて、かやうの事を見てはおかぬ法なり、あつかひに入りたきとのことわりなり、殺生ばかりをするものは、因果車輪の如く、死しては生じ、生じては死し、流轉にさんりんしては、其因果のがれ難し、一切のこくうをしらんによつて、生死もろ〳〵の諸惡をはなれ、三界六趣輪廻生滅して、すなはち解脱を得ると見えたり、殺生をやめられ候へ、其方の食物には、くごにかつうをまぜて與へ、またをり〳〵はたつくり鯡乾鮭などを、朝夕の餌食には、いかゞと問ひ給へば、御諚の如くにては候へども、まづ〳〵案じても御覽ぜられ候へ、人間は米をもつてこそ、五臓六腑をとゝのへ、足手達者に利口をものたまへ、山海の珍物は、飯をすゝめんがためなりとうけ給り候へば、われ〳〵もその如く、天道より食物にあたへ下され候ふ故に、鼠をたべ候へば、無病にして飛びありくこと、鳥にも劣るまじと存じ候ふなり、またゆる〳〵と晝寢つかまつるも、鼠をたべんと存ずるためなり、しかるを今より堪忍のこと、同心申しがたし、御分別候へと申せば、さしも廣大無量の御僧なれども、返答しかね、感涙肝を消すばかりなり。夢さめて、曉がたにまどろめば、例の鼠きたつて申すやう、とかく此體にては、京中の堪

やうー南泉三明
あつかひー仲裁
さんりんー三輪か
くごにかつうをーくごは供御より轉じて食物の義、かつうをは
たつくりーごまめ
堪忍のことー鼠を食ふをやむること

外道の上盛—惡魔の骨張

その子細—その理由

柏木のもと—源氏物語の柏木右衛門督の事をいふ

たいりやく〳〵—大略にて概しての意

にふがく—未詳

なんせんさんみ

すは、外道の上盛なるべし、御僧の御慈悲を垂れ給ひても、やがて物をひかん事必定なり、又我らの系圖をあら〳〵語り申すべし、聞召し候へ、箇樣に申し候へば、鼠とたけくらべのやうに候へども、いはれをしろし召されずば、いやしめ給はんまゝ、猫背中におしつくばひ、大の眼に角をたて申すやう、われは是天竺唐土におそれをなす虎の子孫なり、日本は小國なり、國に相應してこれを渡さるゝ、その子細によつて、日本に虎これなし、延喜の帝の御代より、御寵愛あつて、柏木のもと、下簾のうちにおき給ふ、又後白河の法皇の御時より、綱を付けて腰もとに置き給ふ、綱のつきたるゆゑに、一寸さきを鼠徘徊するといへども、心ばかりにて取りつくことならず、湯水のたべたき時も、咽を鳴らし聲を出だしてたべたけれども、あたまをはりいためらるれば是非なし、詞を通ずといへども、天竺の梵語なれば、大和人の聞き知ることなし、たいりやく繋ぎ殺さるゝばかりなり、にふがくの御慈悲廣大にて、賤が伏屋に月の宿り給ふがごとく、猫風情までに御心をつけさせ給ひ、綱をとき、苦をゆるさるゝこと、ありがたき御事なり、此君の御代、五百八十年の御齢をたもち給へと、朝日にむかつて餘念なう、のんどを鳴らし拜み申すなり。僧答へていはく、猫のいはれやう、近頃神妙なり、なんせんさんみ

六條—六條の袈裟
御たとへ—例を引きていはれし話
あらひぼうしやう云々—未詳
ちやこ—茶子にて茶汲女か
あかはだかつけ紐の時—毛の生えぬ幼少の時
かぶきたるなり—ふさげたる姿

てなさんとて、いり豆座禪豆をたしなみ置けば、一夜のうちにみなになし、袈裟衣ともいはず、扇、物の本、張付屏風、かき餅、六條などをたまらせず、いかなる柔和忍辱の阿闍梨なりとも、命を絕ちたき事勿論なり、いはんや大俗の身にては道理至極せり。其時鼠答へていはく、我らも御たとへの如く存じて　わかき鼠どもに意見をなすといへども、忠言耳にさかひ、良藥口ににがしと申せば、中々聞きも入れず、なほ〳〵惡逆つかまつらんと申す、そのなかにも、まづ第一、人に憎まるゝこと勿れ、お東どの、お北どのの、あらひぼうしやうつきおひ、ちやこ、おはしたの前垂、かたびら、足袋、また袴、肩衣のはし、唐櫃のすみ、つゝみ、葛籠の中へとりこもりて家を作り、餌食にもならず、手柄にもならざる物をくふこと勿れ、壺のはたなどまはるなと、あかはだか、つけ紐の時よりも申し聞かせ候へども、かぶきたるなりばかりを好み、人の枕もと、こも天井ふる屋根などをすみかとして、惡逆ばかりを仕り候ふ事、是非なき體と、語り申すうちに夢さめて、既にその夜は明けにけり。又つぎの夜の夢に、虎毛の猫來り、げに〳〵しく語り申すやう、御僧様たつときにより、鼠根性とて、人の憎むやつにて候ふ、かゝる奴原まゐりて、いろ〳〵の事を申すよし、やがて告げ知らするかたあり、總じてかの鼠と申

僧答へていはく、汝らがふぜいとして、かゝるやさしきことを申すものかなと、なのめならず思ひ、草木國土悉皆成佛となれば、非情草木も成佛すと見えたり、況や生ある物として、一念彌陀佛則滅無量罪、唯心の彌陀、己身の淨土なり、爰を去ること遠らずと說き給へば、たとひ鳥類畜類たりといふとも、一念の道理によつて成佛せずといふ事やあるとのたまへば、さらば懺悔の物語を申し候はんとて、鼠鳴きのなんだを押拭ひ申すやうは、今度洛中の猫の綱をはなされ申すゆゑ、我々一門悉く影をかくし、或は逃げ、或は亡び、今すこし殘り申すものどもも、けふあすの命と思ひ、心細くいしずゑのかげ、椽の下にかゞむといへども、寸の油斷も候はず、又穴の住居を仕りて見るといへども、一日二日の事にもあらず、中にばかりも息ごもりてゐられ申さず、たまたま憂き世間へまかり出でんとすれども、しや取つておさへ、あたまより嚙みひしがれ、しゝむらを引きさかれ、かゝるいぶせき事に逢ひまつる事、前世の因果悲しうこそ候へと申せば、僧答へていはく、汝らがしほたれて言ふ所いたはしく思ふなり、殊に一句をも授けたれば、弟子同前に思ふなり、まづまづくせごとに人に憎まるゝ事を、語つて聞かすべし、わらは如きのひとり法師、たまたま傘をはりたてて置けば、やがてしまもとをくひ破り、又且那をも

しまもと—未詳

けうくわんのふたつ—敎觀の二つにて敎相觀心の二門をいふ
れん〳〵—連々か
さんぎ—ざんぎ(慚愧)か

なりしに、よにたつとき御發心者あり。惡を捨てて善にすゝみ、あしたには天長地久、夕には現世安穩、後生善所のいたり、法界平等利益と願ひしけうくわんのふたつ明かなり。道俗男女、殊勝感涙をながす、誠に大日如來ともいつべし。かゝる殊勝の道理をば、鳥類までも知りはんべるか、ある夜不思議の夢をみる。鼠の和尚とおぼしきが、進み出でて申すやう、御僧樣へむかひ詞をかはすこと、憚りに存じ候へども、御教趣のほど、れん〳〵椽のしたにて、日夜朝暮御談義を聽聞仕り候ふに、懺悔に罪を滅すと仰せられ候ふについて、まかり出でて候ふなり、さんぎ懺悔をも仕り候はゞ、一句の御道理をも、御授けあつて下され候へかしと申しければ、

猫の草紙

慶長―傍訓原本のまゝ

ひとしく―同時に

遊山といひ―自由に遊行も出來

さなりもなく―小鳴の意にて音せぬことか

きのうまき事―きは機なるべし

天下太平國土安穩、かゝるめでたき御代にあふこと、人間は申すに及ばず、鳥類畜類に至るまで、ありがたき御政道なり。まことに堯舜の御代にも勝れたることなり。まづ慶長七年八月中旬に、洛中に猫の綱を解きて放ち給ふべき御沙汰あり。ひとしく御奉行より、一條の辻に高札を御立てあり。そのおもてに曰く、一、洛中猫の綱をとき、放ちがひにすべき事。一、同じく猫うりかひ停止の事。此旨相背くにおいては、堅く罪科に處せらるべきものなり、よつて件の如し。右かくのごとく御政道ある上は、々祕藏せし猫どもに札をつけて、はなち申せば、猫斜ならずに喜びて、こゝかしこに飛びまはること、遊山といひ、鼠を捕るにたよりあり。程なく鼠おぢ恐れて逃げかくれ、桁梁をもはしらず、ありくといへども、さなりもなく、忍びありきの體なり。かゝるきのうまき事なし、願はくば此御法度、つゝがなく懈怠する事なかれと、萬民かくの如し。爰に上京邊の人

猫の草紙

今もかゝる御幸あらじと、めでたき事かずかぎりなし。

をちこちの云々―此歌「をちこちのたづきも知らぬ山中に覺束なくも呼子鳥かな」の古歌を取れり
こん〳〵―狐の鳴聲を來んにかく

をちこちのたづきも知らぬ山猿のおぼつかなくもわれを問ふかやと、筆もしどろに書きながし、さしおき給ふを、取る手もうれしくて、やがてこん〳〵と言ひちらし、狐のゐなかは歸りけり。いそぎ苔丸どのに持ちてゆき見せければ、うれしくてふと起きあがり、三度いたゞき見て、うつくしの御手やと、胸にあて顏にあて、それよりなほいやましに思ひつゝ、たび〳〵の御文をやり給へば、ふたかはの行末はやがて逢瀬となり給ふ。げにや小笹の一節も、なれての後はしのび〳〵に通ひつゝ、今は淺からぬ中とならせ給ふ。父いきのかみ、北の方きゝ給ひ、げにも丹波ののせのましをのごんの守の苔丸殿は、聞き及びし色好み、いかなる公卿殿上人の中にも無き姿なり、今は御見參とて、いろ〳〵深山の菓子とり集めてもてはやさせ給ふ。此事丹波のごんのかみ聞召し、此頃いづかたへも渡らせ給ふぞと思ひしに、さてはかやうの事にてありしを、知らざる事よとて、御むかひに馬乘物、木葉猿共を、おびたゞしくつかはし給ふ。こけまるどの、たまよの姫君を引具し丹波へ越え給ふ。父母吉日をえらび、御見參ありて見給ふに、世にはかゝるうつくしき姫君もあるかや、こけ丸の心をつくしつるもことわりやとて、とりはやさせ給ふ。その後御子あまたいできさせ給ひ、末繁昌に榮えさせ給ふ。昔も

けしやうのまひ—まひはまへの訛なるべし

岩木にあらぬ身—白氏文集「人非木石皆有情」

文たまづさの通ふ事、ふる雨よりしげ〳〵しくさふらへども、女御后、もしは公卿殿上人ならでは、御婿にとらじとて、秘藏し給ふ姫にてさふらふが、御ことはたゞならぬ御方と見參らせ候ふまゝ、叶へてまゐらすべし、御心やすく思しめせ、幸わらはが娘を、その姫君へ御宮仕に參らせ、けしやうのまひと召されさふらふ、みづからもさい〳〵かの姫の御方へ參り候ふ、御文あそばせ、屆けてまゐらせんといへは、苔丸殿いとうれしくて、

君ゆゑにかき集めたる木の葉どもの散りなんのちをたれか問はまし

かやうにあそばし渡し給へば、ゐなかどの袂に入れ、やがて彼方へまゐらせんとて、白河の御所へまゐりければ、姫君つく〴〵と見させ給ひ、何とて此程は、うちたえ給ひしと、雪をあざむく御顏をもたげさせ給ひ、いとなつかしげに仰せさふらへば、ゐなかどの、御まへに人の無きをりを得て、しか〴〵の御文とてそばに置く。姫は耳をそばめ、恥しげにうつぶき給へども、ゐなかどの、人たらしの上手にて、昔よりつれなき人は、淺ましくなりはて候ふ。いたづらになりし小野の小町が事まで言ひきかせければ、さすが心づよきも罪ふかし、岩木にあらぬ身なればとて、かくぞかし、

物や思ふ云々―上句「忍ぶれど色に出にけり吾戀は」

色をも香をも云云―信明集「君ならで誰にか見せん梅の花」

を御覽じて、しづ心なき戀に沈ませ給ふと見參らせ候ふ、心のうちを殘さず語り給へと、たのもしげにしみ〴〵と申しければ、苔丸殿、涙をはら〳〵と流し、物や思ふと人の問ふまでと、いふことさふらふとて、御恥しげに顏を赤らめさせ給ひ、うちふし給へば、その時ゐなかどの、色をも香をも知る人ぞしる、みづからもわかく候らひし時は、さやうの事も候ひしなり、おもひも戀も、若きときのならひなり、つゝまず申させ給へ、命とともに賴まれ申さんと言ひければ、たのもしの人の詞やな、かくて消えなば罪ふかし、今は何をか隱し參らせん、過ぎにしころ白河の花木のまを辿りしに、思ひもよらぬ君を見て、今は命の玉の緒の、絕えなん後にたれ人か、つゆもあはれと思ふまじき、もしも此事叶はずば、猿澤の池へも身をなげて、死なん命はをしからじと、たゞさめ〴〵とばかりなり。ゐなかどの聞き給ひて、さてはいきの守どののひとり姬にてさふらふべし、心を碎き思しめすもことわりや、此君と申すは、いきのかみ御ふたり四十ぢにならせ給ふまで、子の無きことを悲みて、八月十五夜の月に向ひて祈らせたまへば、北の方の右の袂へ月の宿らせ給ふと、御示現あらたに蒙らせ給ひ、出できさせおはします姬にてましませば、うつくしきことは理（ことわり）なり、御名をばたまよの姬と申しさふらふ、いかなる方（かた）さまよりも

になりつゝ、まだたきもなくまほらせ給ふ。かやうに心をうつし給ふも道理かな、兎のいきのかみ殿の、ひとり姫にてぞおはしける。そのかたち尋常に、耳のあたりぬれ〳〵と色白く、世には並びなき御姿にてぞありける。こけまるどのはつく〴〵と見給ひて、世の中の人にはかやうの姿あらじ、いかにしてつてもがなと、それより踏む足もしどろにて、夢に道を辿るやうにして、日吉の御社にまゐりて、鰐口打鳴らし、歸命頂禮山王二十一社、白河邊にて見し君のおもかげ忘れやらで、今は露の命も消え失せなんと思ふ此身をたすけ、かの姫に逢はせてたび給へと、肝膽を碎き涙ながら口說き給ひて、御まへをたゝせ給ふが、目もまひ心きえ〴〵となれば、故里へ歸らん事もなりがたく、木の葉かきよせ枕として、苔路のむしろに倒れふし、ほれ〴〵として明かさせ給ふ。しかる所に狐のゐなかどのまゐりあはせ給ひ、かのこけまる殿をつく〴〵と見て、御目元、手足の尋常さよ、いかなる御方なればかくてこゝに渡らせたまふぞ、定めて此みやしろへまうで給ふが、旅やつれにくたびれさせ給ふかと、打ちとけて問ひしかば、苔丸殿、いやこれは行くへもなき下﨟の子にてさふらふと答へさせ給ふに、ゐなかどの、いや〳〵それは空言と思ひまゐらする、いかさま此御神へまうでさせ給ふ人のなかに、たれぞの姫など

の說にも、われを稻負鳥、ましらの聲などとてよみおく和歌を人しらずや、おそらくば系圖におきては誰人にか劣るべき、なまじひなるやからに身をそめ、何かせんと思しめし、春は岩のはざまにて花を見、秋は木々の梢にては月をながめ、萬の木のみを愛し、いとやさしき色好みておはしける。さる間立願の子細ありて、日吉の御神にまゐらせ給ふが、をりしも都は柳櫻をこきまぜたる春にてありければ、こゝかしこ東山のあたりを眺めありかせたまふ。こゝに北白河の邊に、さもありげに造りたる草木の御所あり。是はいかなる人のすみかやらんと、立ちより霞のたえまより眺め給へば、うつくしき姬君、琴ひきてゐ給へり。いかなる方やらんと、心そら

のせざる草紙

さるほどに丹波の國のせの山に年をへし猿あり、名をばましをのごんのかみと申しける。その子にこけまるどのとて、世に超えて智慧才覺、藝能すぐれけるかたあり。此こけまるどの扇おつとり一さし舞うて入り給ふを、いかなる者も見るより心そらになし、おもしろがらずといふ事なし。さる間こけまるどのやう〳〵二十ばかりに成らせ給ふ。父母いかなるかたよりも御嫁ごをと申させ給へども、耳にも聞き入れ給はず、われ思ふ子細あり、なみ〳〵ならん者をいかでか妻に迎へん、いかなる公卿殿上人の娘ならでは、久しからぬ浮世に何かせんと思しめしける。世の中の人たち、身の程しらぬ望と思ひ給はんやからもあるべし、こともおろかや、われらが先祖猿丸太夫は皆しれる歌人なり、

　奥山にもみぢ踏みわけ鳴く鹿の聲きく時ぞ秋はかなしき

とよみ給ひし歌は、これを小倉の色紙の和歌に定家も入れられしなり、其外世々の歌人

のせざる草紙

羅刹國にて御宿かしまゐらせし、翁媼は成相寺のかきとりの御前これなり。當代までもはやらせ給ふ。成相の觀音、くせのとの文珠の御本地、すなはち此御事なり。

一

しんせき—親戚か

きうたい—舊苔

みすちか—前に出でざれど中納言の名なるべし

くせと—久世戸

り。さても二人の人々は鰐の口をのがれ、鬼神の門を去つて、夢の道行くこゝちして、五條の御所へぞおはしける。いつしか御所は荒れはてて門はあれど扉なし、庭にはしんせき道たえて、軒にはあさがほ、しのぶまじりの忘草、たれまつ風の音も心細さぞまさるらん。岩間をくゞる忘れ水、絶え〴〵傳ひて流れ行く。嵐は簾をまきあげて、青苔きうたいかげ見えていとゞあはれぞまさりける。やゝありて奥の方よりも人一人出でて、あやしげに咎めける。中納言やゝみすちかにてあるぞ、物いはんとのたまへば、御聲におどろき御まへに參りけり。御涙にむせびて、とかく仰せ出ださるゝこともなし。藏人申しけるは、そも〳〵君の御出家ありしより後、今日まで六十六ヶ國を尋ねまゐらせぬ所なく候ひつるが、いづくにおはしましけんとぞ申しける。いそぎ内裏へまゐらんと仰せければ、御車なんど奉り、御參内あり。もとの御身をかへずして、梵天王の故に羅刹國まで御覽じけること、ありがたき事とおぼしめすなり。本領なれば丹後但馬の兩國を下さるるとの宣旨なり。中納言かゝる物憂き都にあとをとゞめじとて、いそぎ丹後へ下り給ひて、御年八十と申すに、姫君は成相の觀音とあらはれ給ふ。中納言はくせのとの文珠となり給ひて、衆生を濟度したまふなり。かたじけなしとも中々申すばかりはなかりけり。

からかみ—かしらがみ（頭髮）の衍か

とて、三千里かける車に乘りて飛ばせければ、刹那が程に飛びつきぬ。夜叉女走りいでて、ありのまゝに申しける。やすからぬものかな、爰にありつる修行者は葦原國の中納言にてありけるぞや、さりながら二千里かける車なり、追ひつかんこと易きほどの事とて、われを思はん者どもは供せよと怒りける。人の腹立つをばはくもん王のやうなると申すに、まことにからかみ天にすくみあがり、眼は舍利のごとくなり、齒がみをして躍りあがり立ちける。さる程にほどなく姬君の車に飛びつきぬ。中納言御覽じて、さばかり申しつる物を、わが身の事はともかくも、命はさらに惜しからず、御身に憂きめを見せ申さんこそ悲しけれとのたまへば、姬君は今はいふとも叶ふまじ、二世とかけたる契なり、浪の底へ入りて一つ道にと思ふなりと仰せける。かゝりける所に、內裏にて舞はせたりし迦陵頻と孔雀の鳥二つ飛び來り、迦陵頻がつゝと寄り、はくもん王が車をはたと蹴のけたり。孔雀の鳥がつゝと寄り、姬君の御車をさきへはたと蹴やり、後には御車をさきへ〳〵と蹴やりけり。

此鳥また一つになり、はくもん王の車をあなたこなたへ蹴る程に、奈落の底まで蹴入れたり。其後此鳥は歸りぬ。姬君の御車は葦原國に聞えたる花の都、五條の橋につきにけ

ぬれども―眠れども

もし月もしろければ―此句の下に脱文あるべし

申し給へば、只つれて落ちさせ候へ、三千里かける車には、はくもん王が乘りて行きぬ、二千里かける車あり、これに召させよとて、車寄に立ちいで御袖をぞ引き給ふ。中納言は夢うつゝとも覺えず車に乘り給ふ。飛行自在の車とは申せども、はくもん王の車なれば、ぬしの心をや憚りけん、更に飛ぶ事なかりけり。二千里を飛びすみてこそ、徒歩はだしにもなるべけれ、いまだ二千里をさへ過ぎざれば、かゝる所にはさら女とて色黑くして夜叉の如くなる女あり、人はぬれどもまどろまず、笛のねも聞えず、姫君も御心もとなく思ひて、かつぱと起きて走りまはりて見るに、后も修行者も見えざりけり。いかにせん、じんつう女、あくとく女、二三人起きあがりて、もし月もしろければ、南二千里かける車もし。

偖はくちをしき事なり、はくもん王のいかばかり怒り給はんずらん、われ〳〵憂きめを見んずる悲しさよと叫びける。中にも夜叉女が申すやうは、自然の事もあらばとて、合圖の太鼓を一里に一つづつ置かせたりけるを、打たせばやと申して、打ちつゞけけるほどに、けいしん國への道のほど五百里の所なり。四五百打ちつゞけければ、けいしん國へぞ聞えける。はぐもん王きこしめし、羅刹國には何事のいできたるらん、合圖の太鼓鳴る

けいしん國—けいひん(罽賓)の誤か、然らば印度の西北境の地なり

にならびの國のけいしん國のみかどは、りうき王とぞ申しける。はくもん王へ勅使を奉る。うけたまはるとて一千人の勢にて三千里かける車に乘り、后には修行者に笛をふかせ御なぐさみ候へとて、五十日と申さんには、必ず歸り參らせんとて、女房たち、后の御伽申すべし、もしさもなき物ならば、八つざきにすべしとのたまひて、吹く風のごとくにて、羅刹國をうち出でて、けいしん國へぞ御つきある。さる程に姫君の仰せには、眞砂のうへの修行者はさこそ冷えぬらめ、又みづからが母の孝養のために七日笛を吹きて供養せんと思ふなり、皆々女房たちも心を一つにして聽聞し給へと仰せければ、うけたまはるとぞ申しける。七日の間酒をすゝめ給ひける。女房たちも醉ひふしぬ。さるほどにわれこそ中納言よと名のりたくは思しけれども、いかにして見え奉るべきやうも無かりしところに、折ふし風一とほり吹き、簾を吹き上げける。姫君と目と目と見あはせ給ひけり。姫君さ夜更けぬれば、間の障子をあけ、いかにみづからをば連れて落ちさせ給へとのたまへば、我もさこそと思へども、心にまかせぬ事なれば、落ちすまし候はん事、なか〳〵叶はぬもの故、とりかへされて憂き目を見せ申さんこと、あしかるべし、わが身はともかくも成りぬべし、たゞかくていつまでも笛を吹きて、聞かせまゐらせんと、

夜とともに――夜中

しゆんしや女とて、數多の女房を后につけ申され候ふ、其うへ修行者をばはくもん王も御寵愛候ふぞ、參らせ給へとぞ申しける。さる程にはくもん王より御使あり、今宵不思議の鳴る物あり、吹きつる者を急ぎ内裏へまゐらせよとの仰せなり、すなはち内裏へ參りけり。はくもん王御覽じて、今宵吹きつる物を吹けとのたまへば、則ち吹き給ふ。おもしろしとの仰せなり。后の宮のあさ夕は葦原國を戀ひ給ふ御慰にとて、しんけん殿へぞ召されける。さる程にこゝをせんとぞ吹き給ふ。姫君は聞召し、中納言の笛の音と聞き知り給へば、扨もいかやうにして、此所まではおはしましけんと、思召してまろび出で、とりもつかんと千度百度思しめしけれども、あしかるべき事なれば、心ながく聞き給ふ。じんつう女が申しけるは、此修行者が參りてより、后の例ならずとぞ腹だちける。中にもしやこん女が申しけるは、さる事もおはしますらん、葦原國には笛を吹き、いやしき賤までも管絃の道をたしなむなり、又梵天王の池の汀にあそぶ鴛鴦や、迦陵頻、孔雀、鸚鵡といふ鳥は、皆管絃の聲をまなぶなり、今この笛を聞き給ひて、さこそ故郷の父大王も戀しくおぼしめし候ふらん、御けしきの變りたるも道理ぞかしと申せば、げにもとぞ申しける。壺のうちの白洲にて、夜とともに笛を吹きてぞおはしける。さるほど

べちに―別に

んなんどといふ。此土はいづくと問ひ給へば、是こそ羅刹國、此國の御主ははくもん王とぞ申しける。

一年梵天王の姫君をとらんとて、梵天へおはせしが、四天王の搦め捕り給ひておかれしに、大王のうちの米を喰ひ、神力を得て牢をやぶり、姫を奪ひとり、一の后にあがめかしづき給ふなり、此頃は姫君の御母孝養の爲とて、べちに内裏をたて、千日經を讀み給ふなり、葦原國の者どもをば敵と宣へば、此國へは入れぬなり、相構へて葦原國の者とばし仰せ有るな、修行者と申しける。誠にまめやかに語りける。いかに修行者、わが身はもとは日本の丹後の國のものなるが、西風におとされて今此國にあるなり、日本はいづくの人にてましますぞ、御なつかしやと申しけり。さん候ふ、われ〳〵は筑紫の者にて候ふが、遁世修行の者にてあり、いづくを住所と定めねば、宿なきまゝの宿としていくたび夢やさますらん、されば今生は夢まぼろしの如くなり、さる程にわれらも御身のごとく、惡風に吹きおとされ、今この國に來りたり、さてはくもん王の内裏はいづくにて候ふぞ、拜み奉りたくとのたまへば、やすき程の事、みづからが娘をば、しやこん女と申して、姫君の御方にさぶらふなり、其外はさら女、じんつう女、あくとう女、

よもめ烏―やもめ烏の訛

給ふ事なければ、夢にだにも見たまはず。さる程に篠の小笹の一ふしも、あくるかと思しくて、よもめ烏のうかれ聲、森をはなるゝけしきにて、ほの〴〵と見えければ、御もとゆひ切り給ひて清水へぞ參られける。さもいとけなき時よりも、月ごとに七日のあゆみを運び奉りつる御利生に、今一度今生にて姫に逢はせてたび給へ、とても對面叶はずば、命をめして後生の緣となしてたべと、涙と共に祈られけり。曉がたの事なるに、八十ばかりの老僧の中納言の枕に立ち給ひて、汝姫君の行くへ聞きたく思はゞ、是より修行をして、筑紫の博多へ行き、便船こうて千日と申すには、必ず聞え候ふべしとあり。夢ともうつゝとも覺えず、則ち觀音の御告ぞと思ひ、すぐに筑紫へ行く唐船ぶねに便船して、蒼海萬里の波路を經て、いづくをはかりともなく思ひ給ふ御心の中こそ哀れなれ。此土を離れて十三日と申すに、大かぜ吹きて波荒く、光りもの飛びわたり、二十四艘の舟の帆あひの綱も吹き切りて、散り〴〵になりけれども、中納言の召されたる船をば吹きも切らずして、羅刹國へぞ吹きつけたり。ある湊に上り、心ぼそく笛をぞ吹き給ふ。折ふし此世の人とも覺えず、頭は空へ生ひのぼり、色黑くせい高き者あまた集りて、吹きける物はおもしろやと、感に堪へてぞ聞きにけり。いか樣これは葦原國の人にて有るら

秋はいかなる色なればー新古今、西行「覺束な秋はいかなる故のあればすゞろに物の悲しかるらん」
所せくまでー所せきまでの訛

のたまへば、中納言しらぬ國とはおもへども、姫君の父の御許とおもへば名殘惜しさは限なし。遙々日本へ歸りても、姫君のおはしまさばこそ賴みもあれと、涙に咽び給ひけり。梵天王もいとあはれに思召して、さりとも姫もその音信なかるべきと、慰め仰せられける。官人あまた門前まで送り奉り、はじめの駒今まではありとも覺えざりけるが、まゐりて斷いける。猶ゆくすゑは賴もしくてうち乘りたまふ。やゝありて陸地に駒は飛びつきぬ。御目をひらき御覽ずれば、花の都五條の館につき給ふ。すぐに內裏へ參內あり、梵天王の自筆の判をまゐらせければ、不思議さよとて、內匠寮の倉に納められけり。さて中納言わが御所へ歸り御覽ずれば、たゞ其まゝにて、もしや中納言ふり來り給ふとて、女房たち走りまはる。はくもん王が入りたる跡もさながらなり。女房たち、御乳母、中納言を見つけて、彌悲しくして伏し沈みてぞ泣き給ふ。姫君のおはしましたる御座に、いまだ御枕も、ふるき衾もさながらあり。夢かうつゝか、夢ならばさめてのけと、伏ししづみ給ひけり。頃は八月なかばの頃なれば、いつしか庭の落葉もそよめきて、松ふく風も閨寒く聞えつゝ、さらぬだに秋はいかなる色なればと申しつたへたる悲しさに、わが身ひとりのたぐひぞと、涙の露も所せくまで浮くばかりなり。夜なく〳〵もまどろみ

笑止一氣の毒なる事

ましや、さても果報少き御事と、悵しげに云ひすてて歸りけり。中納言むね打ちさわぎ居たまへる所に、梵天王玉のかぶりを召され、威光たゞしくて出で給ふ。玉の御座にぞおはします。汝これまで來ること、姫と一所に有るうへは、返す返すも嬉しけれ、爰に一つの笑止あり、唯今の權者こそ羅刹國のはくもん王といふ者なり、姫が七歳の年よりも奪ひ取りて、一の后にそなへんと窺ふよしを聞きて、四天王をかたらひ、天地を逃ぐるを追ひつめ戒め置く、此國のならひにて、千日をすごして八裂にして捨つるなり、さても只今供へつる飯は、たゞ世のつねの飯にてはなし、是より南七寶淨土の池のほとりに作りたる米なり、是を一粒服すれば千人の力つき、千年の齡をたもつなり、大事の客人とおもひて、參らせてあるに、うたてさよ、姫ははくもん王が奪ひとり、羅刹國へ行きつらん、此米を服したるによつて神力を得て、鎖をも踏み切りたるなりとて、かたじけなくも大王御涙を流し給ふなり。中納言肝たましひも身に添はず、とりあへず涙をおさへ、姫君の御事を聞く。それはさる御事にて候へども、御自筆の御判を賜はりて、天下に名をとゞめ、其のちともかくも罷りなるべしと申させ給ひければ、金札に御判を遊ばし、中納言にたびたり。其後たれかある、葦原國へ送り奉れと

ごきー御器

中納言心に思はれけるは、梵天のならひにかゝるくひ物、酒更に呑めども醉はざるなり、欲しき程は呑むと聞く物を、呑まばやと思ひのむなり。折敷に入れたる物を皆めて御覽ずるに、芳しく甘き物なり。扨又後に二十四五ばかりの天女瑠璃のごきに、長さ一尺有る米の白く美しき飯を備へて來りたり、御前におきぬ。中納言まゐらんとする所に、傍なる間を御覽ずれば、骸骨のやうなる物あり、人にもあらず、また鬼にもあらず。金の鎖にて八方へつながれて居たり。彼の飯を見て、あら羨まし、あれ一口給はり候へかし、わが食物に餓ゑて、既に存命極まりぬ、しばしが程の命を助かり候はんと歎きけり。中納言もとより大慈悲ふかき人なれば、すなはち日本にて咎ある者を牢に入れたるがごとし、さこそ食にかつえて、悲しかるらんと憐みて、汝舌をさし出だせとの給へば、斜ならず喜びて、鎖をゆすり舌を出だしたるを御覽ずれば、長さ一尺ばかりなり。あな恐しや、この者のありさま、せいにも似ずして舌の大きさよ、いかさま只者ならじと、身の毛もよだちて、此飯をすくひ投げ給へば、立所にて忽ち八方の鎖を皆々引き切り、くろがねの格子を蹈み破り、殘りの飯をも攫んで打ち喰ひ、さしも玉の如くなる内裏を踏みやぶり、大風大雨をふらせて、虛空をさして飛び出でにけり。ありつる天女あわてて來り、あな淺

きりの柱しるりの柱の衍か

漫々たる砂の地にぞ著き給ふ。此馬三度いばえて、人ならば暇を乞ふと思しくて、虚空に行きぬ。さて何となく細道をしるべに辿り〳〵とあゆみ給ふ程に、人に逢ひて此國をばいづくと申すぞと問ひ給へば、梵天國とぞ傳へける。さて梵天國の内裏はいづくにて候ふぞと問ひ給へば、是なる道を南へ行きて御覧ぜよ、卽ち内裏なるべしと答へける。嬉しく思しめして、行き給ふ程に、野にてもなく、山にてもなく、蒲々平々として、又里もなく、限りほとりもなし。次第々々に砂の色を見れば、皆黄金の如くなり。白銀の門をたて、黄金の門をたて、見れば金の砂一町ばかり敷きみてり。その内にきりの柱、瑪瑙の石、七寶荘嚴のすべて、極樂世界を音に聞きしに違はず。歩み入りて御覧ずれば、玉のきざはし、玉の床、玉のうてな、玉のすだれあり。やう〳〵ありて三十ばかりなる天女瓔珞を垂れて來り、南へ指をさし給ひける程に、扨は參れと御をしへありと思召して、南へめぐり御覧ずれば、日本の内裏紫宸殿とおぼしくて、きりの柱二三本立てたる御殿あり、玉の床數を知らずありけるが、其向ひなる座敷の中に中納言居給ひけり。又廿四五ばかりなる天女、金の折敷に瑠璃の盃をすゑて來り、又三十ばかりの天女、金の瓶子白銀の銚子を持ちて出で、うちおきて何とも物をもいはで歸りけり。

やすき程の事とて、北の倉なる色よき金三千兩とり出だし、大豆三石三斗にさせて、此馬に飼はせ給ひける。喰ひはてて水のみて、三度身ぶるひして立ちければ、しまの如くになりにけり。此馬明日の卯の刻に東向に引立ててめさるべし、しばし有りて此馬身ぶるひして足搔せば、兩眼を強く塞ぎ給へ、あなかしこ、道にて御目をばし開き給ふな、此馬取りつきて身震ひせん時御目を開きて御覽ぜよと、こまぐと仰せければ、敎への如く兩眼をつよく塞ぎて、鞭をしとゝあてられけるとき、馬は虛空へあがりける。

やゝありて陸地とおぼしき所にて、身ぶるひを三度したりける時、兩眼を開きて御覽ずれば、

ひて涙を流して、誠に是はたやすからぬ事なり、みづから葦原國に契あるによつて、しばし人間にて候ふ間、又梵天へ上らん事たやすからず、又中納言殿はるぐ\の道なれば梵天國へおはしまさん程の別れいかゞ有るべきとて、伏し沈み泣き給ふ。中納言聞召し御身内裏へ參り給はずば、震旦百濟に流されて、一たびは失せぬべし、たゞ内裏へまゐらせ給へと、泣くぐ\のたまへば、姫君、それ日本葦原をばぬす人國と申して、人の心が人間にあらず、梵天國のならひにて、人に契を結び、又と契叶はず、情なくもかゝる仰せを承るこそおろかなれ、虎ふす野邊、火の中、水の底までも、おくれ奉るまじきなり、さりながらみづからが申さんやうにおはしませ、今日より七日精進に身を清め、七度の垢離をかき給へ、其後愛宕山の嶽にあがりて御覽ぜよ、乾の方へ細道あり、七里ばかり行きて、大木一本あるべし、その木の本に馬三疋あるべし、中にも痩せたる馬を牽きておはしませと仰せければ、中納言教への如く行きて見給へば、實にも六つの道あり、乾の道を七里程歩みゆきて大木あり、葦毛の馬、月毛の馬、鹿毛の馬三疋あり、葦毛馬の痩せたるを牽きて歸り、姫君に此由仰せければ、秣なくてはいかゞすべきとのたまへば、中納言、いかなる草の入り候ふぞと宣へば、黄金三千兩入るべしと申させ給へば、

耳のこ—鼓膜の事か

しんさ—しんきん（宸襟）の誤脫か

れよ、中將どの、さして神鳴らば、耳のこもぬけ、稻光まなこを取るべしとて奉り給ひける。さる程に初めはかみなり一つ二つ鳴りまはる。それだに膽を消しつるに、四つ五つともなりしかば、傘ほどの光りもの一つ二つこそ飛びちがひ、のちは一二千こそ光りけり。

雷稻妻のみならず、國土の岸を穿ちける事にが〱しく、女童部、若き公卿、殿上人は黄水を吐き倒れ伏し、半死半生の人數をしらず。天皇ばかりこそ院宣汗の如く七日をば待つべしと、御心に思しめせども、耳のこもぬけ、御心もまどひて、すべてしんさなやましく、御命も危く御衣をかづきて臥し給ひける。中將殿の耳には更に聞えずして大事もなし。さのみ皇子をなやまし奉るべきならねば、龍王たち鎭まり給へと、中將どののたまへば、すなはち雷鎭まりけり。さる程に黑雲消え、緣の雲になりけり。中將殿もわが御所へ歸り給ひて、其後中納言に成り給ふ。かくて五十日ばかりありて、內裏へ中納言を召して、迦陵頻、孔雀、鬼が娘の十郎姬、雷電にいたるまで、只事とも覺えず、ありがたきまるが宣旨にしたがふ事神妙なり、然りといへども梵天王の直の御判を取りてたべとぞ宣旨なる。かしこまつて候ふとて御所へ歸り、姬君にぞ申させ給ひける。姬君聞き給

うなし―未詳
なんだ―難陀、歡喜と譯す
はつなんだ―跋難陀、善歡喜と譯す
しかつら―沙喝羅、鹹海と譯す
しゆきつ―和修吉の術、多頭と譯す
とくしやか―德叉迦、多舌と譯す
あなはたつ―阿那婆達多、無熱と譯す
まなし―摩那斯、大力と譯す
うはつら―優鉢羅、黛色蓮華池と譯す

震旦鬼界へも中將を流罪して、姫君をとらんとこそ思召しける。さて中將を召して、鬼が娘の十郎姫を見たれば、猶々戀しく覺ゆるなり、思ふが中をさくるなる天の鳴る神をよびくだして、七日內裏へ參らせて、鳴らせて見せよ、まるが戀の心を慰さまんとの宣旨なり。中將殿畏まつて候ふとて、わが御所へ歸り給ひ、叶ひがたき事なれば、左右なく姫君にものたまはず。姫君立ち寄りて、又何事か宣旨ぞ、みづからに仰せられ候へとのたまへば、ありのまゝに仰せける。それこそいと易く候はん、天の鳴る神と葦原國には申せども、梵天國のうなしの下づかひにて候ふなり、やすき程の事とて椽に立ち出で、て、扇ほと〳〵と打ち鳴らし、なんだ龍王、はつなんだ龍王、しかつら龍王、しゆきつ龍王、とくしやか龍王、あなはたつ龍王、まなし龍王、うはつら龍王、八龍王達とぞ召されける。いづくよりとは見えねども、傘ほどの黑雲愛宕の嶽に飛び來り、姫君の御前に舞ひさがる。いかに龍王たち聞き給へ、葦原國のみかど、あまりに御心さうにて、鳴神內裏へ參らせて、七日鳴らせよとの宣旨なり、急ぎ內裏へ參り、七日鳴りて御目にかけよと、實にうらめしげにぞのたまひける。八龍王、各御暇申し、すなはち雨風となりて、內裏の御殿に飛び移りけり。中將殿も參り給ひぬ。姫君かぶり取りいだし、これを召さ

じける。

かくて七日も過ぎければ、かき消すやうに失せにける。漸う廿日も過ぎざるに、中將殿を召されて、鬼が娘の十郎姫を呼び寄せて、七日内裏へ參らせよ、それが叶はぬ物ならば汝が夫妻を召さるべしとの宣旨なり。うけ給はつて歸られける。面目無きことにて候へども、かゝる次第と申されける。姫君うち笑ひ、それこそ易き事なれ、わらはが父の召し仕ふはしたの物にて候へば、みづから召し候はんに、參らぬ事はあらじとて、南面へ立ち出で、十郎姫とて召されける。刹那が程に參りたり。葦原國の御門あまりに御心敏うにて、十郎姫が姿が見たきよし宣旨なり、急ぎ内裏へ參り、七日あそび參らせよ、七日も過ぎば御暇申せとのたまひて、中將殿に奉れば、連れて參内ましましける。みかど叡覽ましまして、公家大臣集まりて、十郎姫を見給へば、いづくにて著かへたるとは見えねども、七日の間七度衣裳を著かへ、色々の御遊ども心言葉も及ばれず、一つも洩したることなかりけり。七日も過ぎければ、かき消すやうに失せにけり。天皇御心に思しめしけるは、たとへにこそ聞きつるに、十郎姫を始めて見る、彼をはしたのものに仕ふなる梵天王の姫君は、さこそとこそ思しめし、いよいよ戀しく思はるれ、叶はぬ事を言ひかけて

かうを穿き、くれなゐの袴ふみくゝみ、すべてあだなる言の葉までは、ありぬべしとも覺えず。待從こなたへとのたまへば、經の前に錦の褥の上に居給へり。互に見えつ見えられつ、鴛鴦比翼のかたらひも、淺からずとぞ聞えける。かゝるめでたき折ふしに、みかど此由きこしめし、我十善の位を受け、一天四海をたなごころにまかすといへども、梵天王の婿にはならぬと御歎きあり。或時待從は中將になり給ふ。中將急ぎまゐれとて召されけるが、天皇よりの宣旨には、汝が夫妻七日内裏へまゐらせよ、それが叶はずば伽陵頻と孔雀の鳥を召しよせて、七日内裏にて舞はせて見せよ、まるが心をなぐさめん、それにも叶はずば、日本國には叶ふまじきとの宣旨なり。うけたまはると申し、急ぎ館へ歸られける。姫君を近づけ、此由かくと語らせ給へば、それこそみづからが父の内裏にいか程も候ふぞ、呼びよせて舞はせ候はんとて、南面に出でて、迦陵頻の御聲にて、梵天國の鳥をぞ召されける。刹那が間に參りける。姫君斜に思召し、中將殿に奉れば、みかどへつれて參内あり。みかど叡覽ましく〳〵て、ことの譬へにこそ迦陵頻の聲とは申しつたへたれ、おもしろく囀りて、二つの鳥が入り亂れて舞ふ程に、物によく〳〵譬ふれば、かの極樂の七寶淨土の御池かと、煩惱のねぶりをさまし、おの〳〵感涙を流して御覽

とうかうたい―未詳

ひつかう―未詳

さる程に北の御方は無常の風にさそはれて、あしたの露と消え給ふ。大臣殿は此若君にのみ慰みて、明し暮し給ひけるに、十三と申す春の頃、大臣殿も空しくなり給ふ。待從の御歎き申すばかりもなかりけり。父の御孝養には笛を吹き、梵天帝釋までもおもしろく、とうかうたいの上に手向け給ひける。七日と申す午の時ばかりに、紫の雲一村あまくだりけるを見れば、天女と童子十六人、玉のかぶり、黄金の輿をかたぶけて、ゆゝしき官人一人天くだり、待從に向ひ御涙を流して、汝七日の間吹き給ふ笛、則ち梵天國へ通じ、孝行の心ざし二つともなきを、上品上生、下界の龍神までも納受したまふなり。我一人の姫をもてり、來る十八日に床を淸め、鳴をしづめて待ち給へ、姫を御身に參らせんわれこそ梵天王にて侍れとて、紫の雲たち上りぬ。待從は夢とも現ともわきまへず、床よりおり給ひて、經を讀誦し給ひて、父母の御菩提の爲と回向したまふ。さるほどに約束の日にもなりしかば、まことしからぬ事なれども、床を淸め香を焚き、鳴をしづめて笛を吹き給ふ。十八日の月漸う澄み昇り、千里萬里にあきらかなり。いと芳しき風吹きて、花ふり異香薫ずるうちよりも、十六人の童子玉のかぶりを戴きて、黄金の輿をさしよせ、十四五ばかりの姫君、額には天冠をあて、身には玉の瓔珞を垂れ、黄金のひつ

しやうめう—淨名居士即ち維摩

具足—同伴すること

童殿上—攝關大臣等の子弟の幼少にて昇殿を許さるゝ者をいふ

すべし、金泥の觀音經三千三百三番書かせて參らすべしと、祈られける程に、七日と申す曉、いと氣高き御聲にて、こなたへと召されけるが、寶殿なる所に香の衣に同じ袈裟かけて、いとかうばしき高僧おはします。彼のしやうめう、うしろの方丈の間に、三萬六千の床を並べけるも思ひ知られて、いとたつとくて、いづくに立ち寄るべきとも覺えず。高僧重ねてそれへ〳〵と召されければ、御前に畏まり給へば、いかに汝が申す所のけうしなるべしとて、磨ける玉を取り出だし、すなはち大臣の左の袖に移させ給ふと御覽じて、夢さめぬ。其後下向ありて、程なく北の御方懷妊あり、若君一人生み給ひ、やがて玉若殿とて喜び給ふ。日に增して成人し給ふにつけて、光るやうにぞおはしける。父の大臣、一時も御身を離さずかしづき給ふ。二歲と申す時、內裏へ參內ありけるにも具足し給ふ。天皇聞しめして、いまだ例も無きことかな、七歲の童殿上と申す事はあれども、二歲の殿上は珍しき事なり、たかふぢが子の事なればとて、四位の侍從になし給ひて、公卿の座へぞ召されける。昇殿の始めにしるしなくてはいかゞとて、丹後但馬兩國を給はりける。大臣斜ならず御喜びありて、いよ〳〵いつきかしづき給ひける程に、やう〳〵七歲にもなり給へば、殊にすぐれて笛をぞ吹き給ひける。

梵天國

淳和天皇の御代に五條の右大臣たかふぢとておはしけるが、容顏美麗に才覺いみじきのみならず、四方に四萬の藏をたて、乏しき事ましまさず、年月を送り給へども、一人の孝子を持ち給はであけくれ歎き給ふ。或時つくづくと案じ思しめしけるは、われ前の世にいかなる罪を作りてか、一人の子をもたず、七十八十のよはひを保つとも、つひに止まるべきにあらず、亡からん跡を誰かとふべき、昔より今に至るまで神佛に申すこと叶へばこそ、萬の人も申すらめとて、夫婦諸共に淸水に參り、五體を地に投げ、三千三百卅三度の禮拜を參らせて、願はくば一人の孝子を與へ給へと、種々の願を立て給ひける。

此願成就せば、八花形の御帳臺を、黃金白銀にて三十三枚づつ、月ごとにかけて參らすべし、又每日萬燈を三年ともして、百人の僧にて法花三昧の不斷經を、三年讀ませて參ら

梵天國

「以一知萬、以微知明」

るなれば、其外の孝行推し量られたるとて、此人の孝義天下にあらはれたるとなり。この山谷のことは餘の人にかはりて、名の高き人なり。

陸　績　字公紀

孝悌皆天性　人間六歳の兒　袖中に懷して綠橘を　遺て母に報ず含飴を

陸績六歳の時、袁術といふ人の所へ行き侍り。袁術陸績がために菓子に橘を出だせり。陸績これを三つ取りて、袖に入れて歸るとて、袁術に禮をいたすとて、袂より落せり。袁術これを見て、陸績どのは幼き人に似合はぬことと言ひ侍りければ、あまりに見事なるほどに、家にかへり母にあたへんためなりと申し侍り。袁術これを聞きて、幼き心にてかやうの心づけ古今希なりとほめたるとなり。さてこそ天下の人、かれが孝行なることを知りたりとなり。

り。

田眞　田廣　田慶

海底紫珊瑚　群芳總不レ如　春風花滿樹　兄弟復同レ居

此三人は兄弟なり。親におくれてのち、親の財寶を三つに分けて取れるが、庭前に紫荊樹とて、枝葉榮え花も咲き亂れたる木一本あり。これをも三つにわけて取るべしとて、終夜三人詮議しけるが、夜の既に明けければ、木を切らんとて、木のもとへ至りければ、昨日まで榮えたる木が俄に枯れたり。田眞之を見て、草木心ありて切りわかたんといへるを聞いて枯れたり、まことに人として、これを辨へざるべしやとて、分たずしておきたれば、又ふたゝびもとの如く榮えたるとなり。

山谷

貴顯聞二天下一　平生孝事レ親　汲レ泉滌二溺器一　婢妾豈無レ人

山谷は宋の代の詩人なり、今にいたりて詩人の祖師といはるゝ人なり。あまたつかひ人もあり、又妻も有りといへども、みづから母の大小便の器物をとり扱ひて、汚れたる時は手づからこれを洗ひて母にあたへ、朝夕よく仕へて怠る事なし。さらば一を以て萬を知

群芳總不如—原本「群芳總不知」とあり、一本によりて改む

一を以て萬を知る—荀子非相篇

らはにして蚊に喰はせたらば、蚊もわが身を喰ひ親を助けんと思ひ、すなはちいつも夜もすがら裸體になり、わが身を蚊にくはせて、親の方へ蚊の行かぬやうにして仕へたるとなり。いとけなき者のかやうの孝行は、不思議なりし事共なり。

張孝張禮

偶値二綠林兒一代レ烹云二瘦肥一　人皆有二兄弟一　張氏古今稀

張孝張禮は兄弟なり。世間饑饉の時に、八十餘の母を養へり。木實を拾ひに行きたれば、一人の民疲れたる者來りて、張禮を殺して喰はんと云へり。張禮云ふ樣は、われ老いたる母をもてり、けふはいまだ食事を參らせざりつる程に、すこしの暇を賜はれ、母に食物を參らせて、やがて參らん、もし此約束をたがへば、家に來りて一族までを殺し給へと云うて歸る。母に食事を進めて、約束の如くに彼の者の所へ至りけり。兄の張孝是を聞きて、又跡より行きて盜人にいふ樣は、我は張禮より肥えたる程に、食するによかるべし、我を殺して張禮を助けよと云へり。又張禮は我はじめよりの約束なりとて、死を爭ひければ、彼の無道なる者も兄弟の孝義を感じて、共に死を免し、かやうの兄弟古今稀なりとて、米二石鹽一駄とあたへたる。是を取りて歸り、いよ〳〵孝道をなせるとな

南齊—原本「南亭」とあり、一本によりて改む

たへ、又みづからも常に食すれども、一期の間盡きずして有りたるとなり。これ孝行のしるしなり。

庾黔婁

到レ縣未ニ旬日一　椿庭逢ニ疾深一　願將レ身代レ死　北望啓ニ憂心一

庾黔婁は南齊の時の人なり。孱陵といふ所の官人になりて、すなはち孱陵縣へ至りけるが、いまだ十日にもならざるに、忽ちに胸さわぎしけるほどに、父の病み給ふかと思ひ、官を捨てて歸りければ、案の如く大に病めり。黔婁、醫師によしあしを問ひければ、醫師病者の糞を嘗めてみるに、甘く苦からばよかるべしと語りければ、黔婁やすき事なりとて、嘗めて見ければ、味よからざりける程に、死せんことを悲み、北斗の星に祈をかけて、身がはりにたゝん事を祈りたるとなり。

呉猛

夏夜無ニ帷帳一　蚊多不ニ敢揮一　恣ニ渠膏血一飽　免レ使レ入ニ親闈一

呉猛は八歲にして孝ある人なり。家まどしくしてよろづ心に足らざりけり。されば夏になりけれども帷帳もなし。呉猛みづから思へり、わが衣をぬぎて親に著せ、わが身はあ

みをかなへたく思ひ、すなはち鹿の皮を著て、數多むらがりたる鹿の中へまぎれ入り侍れば、獵人これを見て、實の鹿ぞと心得て、弓にて射んとしけり。其時剡子是は實の鹿にはあらず、剡子といふ者なるが、親の望みを叶へたく思ひ、僞りて鹿の形となれりと、聲をあげて言ひければ、獵人驚いて其故を問へば、ありすがたを語る。されば孝行の志深き故に、矢をのがれて返りたり。そも〳〵人として鹿の乳を求むればとていかでか得さすべき。されども思ひ入りたる孝行の思ひやられてあはれなり。

蔡順

黑椹奉二親闈一　啼レ飢涙滿レ衣　赤眉知二孝順一　牛米贈レ君歸

蔡順は汝南といふ所の人なり。王莽といへる人の時分の末に天下大に亂れ、又飢饉して食事に乏しければ、母のために桑の實を拾ひけるが、熟したると熟せざるとを分けたり。このとき世の亂により、人を殺し剝ぎ取りなどする者ども來つて、蔡順に問ふ樣は、何とて二色に拾ひ分けたるぞと言ひければ、蔡順ひとりの母をもてるが、此熟したるは母にあたへ、いまだ熟せざるは我がためなりと語りければ、心づよき不道の者なれども、かれが孝を感じて、米二斗と牛の足一つ與へて去りけり。その米と牛の腿とを母にあ

り。其文に曰く、天賜ニ孝子郭巨ニ不レ得レ奪　民不レ得レ取　と云々。此心は天道より郭巨に給ふ程に、餘人取るべからずとなり。則ち其釜をえて喜び、兒をも埋まず、ともに歸り、母にいよ〳〵孝行をつくせるとなり。

朱壽昌

七歲生ニ離母一　參商五十年　一朝相ニ見面一　喜氣動ニ皇天一

朱壽昌は七歲の時、父その母を去りけり。されば其母をよく知らざりければ、此事を歎き侍れども、つひに逢はざること五十年に及べり。ある時壽昌官人なりといへども、官祿をもすて、妻子をもすてて、秦といふ所へ尋ねに行きけるとて、母に逢はせて給へとて、みづから身より血を出だして、經を書きて天道へ祈りをかけて尋ねたれば、心ざしの深きゆゑに、つひに尋ねあへるとなり。

剡子

老親思ニ鹿乳一　身掛ニ褐毛衣一　若不ニ高聲語一　山中帶レ矢皈

剡子は親のために命を捨てんとしける程の孝行なる人なり。其故は父母老いて共に兩眼を煩ひし程に、眼の藥なるとて鹿の乳を望めり。剡子もとより孝なる者なれば、親の望

柏の木—支那にては墓所に柏を植うる習俗なり

光彩—原本「光頼」とあり、一本によりて改む

夫婦云ひければ—夫婦談合したるに

づき禮拜して、柏の木に取り付きて泣き悲む程に、泪かゝりて木も枯れたるとなり。母は平生かみなりを恐れたる人なりければ、母むなしくなれる後にも、雷電のしける折には、急ぎ母の墓所へゆき、王裒これにありとて、「墓をめぐり」死したる母に力を添へたり。かやうに死して後まで孝行をなしけるを以て、生ける時の孝行まで推しはかられて、有りがたき事どもなり。

郭巨

貧乏思ニ供給一　埋レ兒願ニ母存一　黄金天所レ賜　光彩照ニ寒門一

郭巨は河内といふ所の人なり。家貧しうして母を養へり。妻一の子を生みて三歳になれり。郭巨が老母、彼の孫をいつくしみ、わが食事を分け與へけり。或時、郭巨妻に語る様は、貧しければ母の食事さへ心に不足と思ひしに、其内を分けて孫に賜はれば乏しかるべし、是偏に我子の有りし故なり、所詮汝と夫婦たらば子ニ度有るべし、母は二度有るべからず、とかく此子を埋みて母を能く養ひたく思ふなりと夫婦云ひければ、「妻もさすがに悲しく思へども、夫の命に違はず、彼の三歳の兒を引きつれて、埋みに行き侍る。則ち郭巨泪を押へて、すこし掘りたれば、黄金の釜を掘り出だせり。其釜に不思議の文字すわれ

おひめ—負債

すゞしめ—涼し

法度に行はれ—刑罰を蒙り

たれば、王もこれを感じて、董永が身をゆるしたり。其後婦人董永にいふ樣は、我は天上の織女なるが、汝が孝を感じて、我を降しておひめを償はせせりとて、天へぞあがりけり。

黃　香

冬月溫レ衾煖　夏天扇レ枕涼　兒童知二子職一　千古一黃香

黃香は安陵といふ所の人なり。九歲の時母におくれ、父に能く仕へて力を盡せり。されば夏の極めて暑き折には、枕や座を扇いですゞしめて、また冬の至つて寒き時には、衾のつめたきことを悲んで、わが身をもつて煖めて與へたり。かやうに孝行なるとて、太守劉讙といひし人、札をたてて彼が孝行をほめたる程に、それよりして人皆黃香こそ孝行第一の人なりと知りたるとなり。

王　裒

慈母怕レ聞レ雷　氷魂宿二夜臺一　阿香時一震　到レ墓遶千廻

王裒は營陰といふ所の人なり。父の王義、不慮の事によりて、帝王より法度に行はれ死にけるを恨みて、一期の間その方へは向うて坐せざりしなり。父の墓所にゐて、ひざま

方香—一本方品とあり

かとりの絹—こまやかに織りたる絹布の一種、縑

の奇特をあらはせるなるべし。

董　永

葬レ父貸ニ方香一　天姫陌上迎
織レ絹償ニ債主一　孝感盡知レ名

董永はいとけなき時に母に離れ、家まどしくして常に人に雇はれ農作をし、賃をとりて日を送りたり。父さて足も起たざれば小車を作り、父を乗せて、田のあぜにおいて養ひたり。ある時父におくれ、葬禮をとゝのへたく思ひ侍れども、もとよりまどしければ叶はず。されば料足十貫に身をうり、葬禮を營み侍り。偖かの錢主の許へ行きけるが、道にて一人の美女にあへり。かの董永が妻になるべしとて、ともに行きて、一月にかとりの絹三百疋織りて、主のかたへ返し

唐夫人は姑長孫夫人年たけ、よろづ食事歯に叶はざれば、つねに乳をふくめ、あるひは朝ごとに髪をけづり、其外よく仕へて、數年養ひ侍り。ある時長孫夫人わづらひつきて、このたびは死せんと思ひ、一門一家を集めていへる事は、わが唐夫人の數年の恩を報ぜずして、今死せん事殘り多し、わが子孫唐夫人の孝義をまねてあるならば、必ず末も繁昌すべしといひ侍り。かやうに姑に孝行なるは古今稀なるとて、人みな之をほめたりと。さればやがて報いて、末繁昌する事きはまりもなくありたるとなり。

楊香

深山逢二白額一　努力轉二腥風一　父子倶無レ恙　脱二身饞口中一

楊香はひとりの父をもてり。ある時父と共に山中へ行きしに、忽ちあらき虎にあへり。楊香、父の命を失はんことを恐れて、虎を追ひ去らしめんとし侍りけれども叶はざる程に、天の御あはれみを頼み、こひねがはくは我命を虎にあたへ、父を助けて給へと、心ざし深くして祈りければ、さすがに天も哀とおもひ給ひけるにや、今まで猛きかたちにて執りくらはんとせしに、虎俄に尾をすべて逃げ退きければ、父子ともに虎口の難をまぬがれ、つゝがなく家に歸り侍るとなり。これひとへに孝行の心ざし深きゆゑに、かやう

饞口—原本「饞甲」とあり、一本によりて改む

尾をすべて—尾をすぼめて

したゝめて―調理して

轉び、いとけなき者の泣くやうに泣きけり。この心は七十になりければ、年よりて形麗しからざるほどに、さこそこの形を親の見給はゞ、わが身の年よりたるを悲しく思ひ給はんことを恐れ、また親の年よりたると思はれざるやうにとの爲に、かやうの擧動をなしたるとなり。

姜詩

舍側甘泉出　一朝雙鯉魚　子能知レ事レ母　婦更孝二於姑一

姜詩は母に孝行なる人なり。母つねに江の水を飲みたく思ひ、又なまいをの鱠をほしく思へり。すなはち姜詩妻をして、六七里の道を隔てたる江の水を汲ましめ、又いをの鱠をよくしたゝめて與へ、夫婦共に常によく仕へり。或時姜詩が家の傍に、忽ちに江の如くして水湧きいで、朝ごとに水中に鯉あり、すなはち之をとりて母にあたへ侍り。かやうの不思議なる事のありけるは、ひとへに姜詩夫婦の孝行を感じて、天道より與へたまふなるべし。

唐夫人

孝敬崔家婦　乳レ姑晨盥櫛　此恩無二以報一　願得二子孫如一

いを｜魚

の事は、人にかはりて心と心のうへの事をいへり。奥深きことわりあるべし。

王祥

繼母人間有　王祥天下無　至レ今河水上　一片臥二氷摸一

王祥はいとけなくして母を失へり。父また妻をもとむ、其名を朱氏といひ侍り。繼母の癖なれば、父子の中をあしく言ひなして、惡まし侍れども怨とせずして、繼母にもよく孝行をいたしけり。かやうの人なる程に、本の母冬の極めて寒き折ふし、生魚をほしく思ひける故に、肇府といふ所の河へもとめに行き侍り。されども冬の事なれば、氷とぢていを見えず。すなはち衣をぬぎて裸になり、氷の上にふし、いを無きことを悲み居たれば、かの氷すこしとけて、いを二つをどり出でたり。乃ち取りて歸り、母にあたへ侍り。是ひとへに孝行のゆゑに、その所には毎年人の臥したる形、氷のうへにあるとなり。

老萊子

戯舞學二嬌癡一　春風動二綵衣一　雙親開レ口笑　喜色滿二庭闈一

老萊子は二人の親に仕へたる人なり。されば老萊子七十にして、身にいつくしき衣を著て、幼きものの形になり、舞ひ戯れ、又親のために給仕をするとて、わざとけつまづきて

閔子騫いとけなくして母を失へり。父また妻をもとめて、二人の子をもてり。彼の妻、我子を深く愛して繼子を惡み、寒き冬も蘆の穗を取りて、著る物に入れて著せ侍るあひだ、身も冷えて堪へかねたるを見て、父、後の妻を去らんとしければ、閔子騫がいふやうには、彼の妻を去りたらば、三たりの子寒かるべし、今われ一人寒きをこらへたらば、弟の二人はあたゝかなるべしとて、父を諫めたるゆゑに、これを感じて繼母も後には隔てなく慈しみ、もとの母とおなじくなれり。只人のよしあしはみづからの心にありと、古人の言ひ侍りけるも、ことわりとこそ思ひ侍る。

曾參

母指纔方嚙　兒心痛不レ禁　負レ薪歸來晩　骨肉至情深

曾參ある時山中へ薪を取りに行き侍り、母留主にゐたりけるに、したしき友來れり。これをもてなしたく思へども、曾參はうちにあらず、もとより家まどしければ叶はず。曾參が歸れかしとて、みづから指をかめり。曾參山に薪を拾ひゐたるが、俄に胸さわぎしける程に、急ぎ家に歸りたれば、母ありすがたを具に語り侍り、かくの如く指を嚙みたるが、遠きにこたへたるは、一段孝行にして、親子のなさけ深きしるしなり。總じて曾參

まどし—貧し

ありすがた—ありのまゝの樣子

の音して、木像はみづから内へ歸りたるなり。それよりしてかりそめの事をも、木像のけしきを伺ひたるとなり。かやうに不思議なる事のあるほどに、孝行をなしたるはたぐひすくなき事なるべし。

いたはり―苦痛する意

孟宗　字恭武或子恭

泪滴朔風寒　蕭々竹數竿　須臾春筍出　天意報平安

孟宗はいとけなくして父に後れ、ひとりの母を養へり。母年老いて常に病みいたはり、食の味ひもたびごとに變りければ、よしなき物を望めり。冬の事たるに竹子をほしく思へり。すなはち孟宗竹林に行き求むれども、雪ふかき折なればなどかたやすく得べき。ひとへに天道の御あはれみを賴み奉るとて、祈をかけて大きに悲み、竹によりそひける所に、俄に大地ひらけて、竹の子あまた生ひ出で侍りける。大に喜び、乃ちとりて歸りあつものにつくり、母に與へ侍りければ、母是を食してそのまゝ病もいえて齡をのべけり。是ひとへに孝行の深き心を感じて、天道より與へ給へり。

閔子騫

閔氏有賢郞　何曾怨晩娘　尊前留母在　三子免風霜

奇特―靈妙不思議の意

漢の文帝は漢の高祖の御子なり。いとけなき御名をば恒とぞ申し侍りき。母薄太后に孝行なり。よろづの食事を參らせらるゝ時は、まづみづからきこしめし試み給へり。兄弟も數多ましくけれども、此帝ほど仁義を行ひ孝行なるはなかりけり。此故に陳平、周勃などいひける臣下等、王になし參らせたり。それより漢の文帝と申し侍りき。然るに孝行の道は、上一人より下萬民まであるべき事なりと知るといへども、身に行ひ心に思ひ入る事はなり難きを、かたじけなくも四百餘州の天子の御身として、かくの如き御ことわざは、尊かりし御こゝろざしとぞ。さる程に世もゆたかに民も安く住みけるとなり。

丁蘭

刻レ木爲ニ父母一　形容在日新　寄レ言諸子姪　聞早孝ニ其親一

丁蘭は河内の野王といふ所の人なり。十五のとし母におくれ、永くわかれを悲み、母の形を木像につくり、生ける人に事へぬる如くせり。丁蘭が妻ある夜の事なるに、火をもつて木像のおもてを焦したれば、瘡の如くにはれいで、膿血ながれて、二日を過しぬれば、妻の頭の髮が刀にて切りたる樣になりて落ちたる程に、驚いて詫言をする間、丁蘭も奇特に思ひ、木像を大道へうつしおき、妻に三年わびことをさせたれば、一夜の内に雨風

二十四孝

娥黄―原本嫁皇とあり

大舜

隊々耕レ春象　紛々耘レ草禽　嗣レ堯登二寶位一　孝感動二天心一

大舜は至つて孝行なる人なり。父の名は瞽叟といへり、一段頑にして、母は嚚しき人なり。弟はおほいに傲りて、いたづら人なり。然れども大舜はひたすら孝行をいたせり。ある時歴山といふ所に耕作しけるに、かれが孝行を感じて、大象が來つて田をたがへし、又鳥飛び來つて田の草をくさぎり、耕作の助けをなしたるなり。扨其時天下の御あるじをば堯王と名づけ奉る。姫君まします。姉をば娥黄と申し、妹は女英と申し侍り。堯王すなはち舜の孝行なることをきこしめし及ばれ、御娘を后にそなへ、終に天下をゆづり給へり。これひとへに孝行の深き心よりおこれり。

漢文帝

仁孝臨二天下一　巍々冠二百王一　漢廷事二賢母一　湯藥必親嘗

二十四孝

をば記念に見たくは思へども、見れば中々ものうきに、法然上人へ返さばやと思しめし、うきことにまた憂きことを思ひつゞけて、泣く〳〵こそ別れたまひけり。かくて今ははや我身一つに成り給ひ、いつまで物を思ふべき、いかなる淵瀬へも身を投げばやと思へども、柴の庵を結び、敦盛の菩提を弔ひ、御骨ををさめ、水を手向け花を折り、行ひすまして、終に往生を遂げ給ふ。いよ〳〵是を見る人々、よく〳〵後生肝要なるべきなり。

袖より—袖にの衍か

しるべに行き給ふ。さて左の袖より一首の歌を遊ばしける。

何なげくこやの生田の草枕露と消えにしわれな思ひそ

此歌を顔にあて、伏し沈み歎き給ふ。暫くありて蘇生し給ひけり。かくて有るべきにあらざればとて、御歌と膝の骨とを首に掛け、泣く〳〵都へぞ上りける。さて御歌を母御前にまゐらせられ給へば、敦盛の日頃遊ばしたる御手なり。わかれの時の御面影、今見るやうに思はれて、二たび物を思はする、歎きの中の喜びなり。とにかくにいかにも成らばやと思しめすが、待てしばし我心、みづから空しくなるならば、若君何とかなるべきぞ。また憂き人の後世をも、たれか弔ふべきと思召し、思ひ返してとゞまり給ふ。さるほどに北の御方はよく〳〵物を案じたまふに、いたづらに月日を送らんよりも、いかなる所にも堂を立て、敦盛の御あとを弔らはゞやと思しめし、都あたりに柴の庵を結び、わが身は二たび憂き世にかへること難し、まことや此世にて、敦盛に逢ひ奉らん事は及びなしと、流涕こがれ給へば、共に若君も天に仰ぎ地に伏して悲み給ふなり。北の御方思しめしけるは、釋迦佛の御敎に、後世を願ひて極樂に參れば、同じ蓮に生るゝと說かせ給ふとうけ給はる、是を菩提の種として、御身を引きかへて、花の袂を墨染の袖となし、若君

一たび見えさせ給へと申されければ、敦盛御涙を流しのたまふやう、あらむざんやな、生れてよりして此道は、さなきだに名殘惜しきならひぞとて、髪掻き撫でて涙を流しの給ふやう、若君はさてこれより都へはのぼるまじきとて、流涕こがれ給ひけり。敦盛思しめしけるは、心弱くて叶ふまじ、ことに時うつりいかゞせんと思しめしけり。若君はいまだ習はぬ旅の疲勞(くたびれ)に、敦盛の膝を枕としてすこしまどろみ給ふ。さる程に敦盛名殘の惜しさは限なしとは思へども、よき序(ついで)と思しめして、心づよくなして、腰より矢立(やたて)を取り出だし、若君の左の袖に一首の歌を遊ばして、さて行きては歸り、歸りては行き、名殘をぞ惜み給ふ。さてあるべきにあらざれば、かき消すやうに失せにけり。やゝありて若君起きあがり給ひ、父にいだき付かんとし給へば、ありつる堂なり。夜もやう〳〵明ければ、やもめ烏も告げ渡る。こはいかなるぞ、不思議や、父の膝を枕として臥したりと思ひしが、五寸ばかりの膝の骨の、苔蒸したるを見つけて、さてはわが父の骨にて有るよと思しめして、天に仰ぎ地に伏して流涕こがれ、いかなる事ぞとて悲み給ふ。たゞわれをも連れて、死出の山、三途の川の御供申すべしとて、聲も惜まず泣き給ふ。さて有るべきにあらざれば、爲ん方もなく力及ばず、父の膝の骨を首に掛けて、泣く〳〵涙を

者ぞとの給ふ時、小人仰せけるは、父にて候ふ人は、平家の一門修理の大夫經盛の御子、無官の大夫敦盛と申す人なり、一の谷の合戰に討たれさせ給ひ候ふを、みづから戀しく思ひ申し、賀茂の大明神へ參り、百日祈りければあらたに靈夢を蒙り、足に任せて迷ひ申すなりとぞのたまふ。敦盛聞しめして、やがて倒れふし泣き給ふ。やゝありて起きあがりて、泣く〳〵小人の手を執り引きよせて、召したる物の雨に濡れたるを、脱ぎかへさせ給ひて、ほと〳〵と抱き付かせ給ふ。敦盛仰せ有りけるやうは、むざんや汝は、いまだ見ぬ父をかほどに思ひけるこそあはれなれ、汝胎内にして七月と申すに、一の谷の合戰に出で、熊谷が手に掛り、十六の年討れて此八年が間、他生の苦患申すばかりなし、まことに汝心ざしあらば、善根をして敦盛が後生に得さすべしとぞのたまふ。其時若君、さては我が父にてましますかとて、斜ならず喜びてとり付き給ふ。其後敦盛のたまふやう、我が事をかほどに思ひ給ふべからず、汝肝膽を碎き祈り申す心ざしを、賀茂の大明神あはれに思しめして、閻魔王に仰せありて、刹那の暇をこひて、今汝に見ゆるぞ、かまへて今より後、わが事をかほどに思ふべからずとのたまふ。若君仰せけるは、閻魔王に仰せありて、みづから御前に參るべし、父は是より都へ御上りありて、みづからが母に今

かせ杖―撞木杖

椽行道―椽側を誦經念佛などしつゝ歩むこと

やうこそあはれなれ。願はくば父の敦盛に今一度逢はせてたび給へと、肝膽をぞ砕き給ふ。滿ずる曉、年の齡八十ばかりの老僧、かせ杖にすがり、彼のちごの枕がみに立ち、仰せ有りけるは、あはれや汝、いまだ見ぬ父をかほどに思ひけるか、これより末津の國昆陽の生田と尋ねよとの御夢想ありけり。

さるほどに小人は起きあがり、斜ならず喜び、あくればやがて下向申し、足にまかせて行くほどに、都を出でて十餘日と申すには、津の國一の谷にぞつき給ふ。折ふし雨はふる、かみなり電繁ければ、心ほそさは限なし。磯うつ浪のこゑ、かれを聞きこれを見るに、いとゞつらさは限なし。それより行くすゑを見給へば、小さき堂あり、燈火かすかなり。いかなる天魔魔緣の者の火か、または人もあらばと嬉しくて行きて見給へば、薄化粧に眉つくりたる氣色にて、いかにも花やかに出で立ちたる人の椽行道しておはしますなり。若君はとく／＼と叩き、物申さんとありければ、たぞやこの人も住まぬ所に、物申さんといふはいかなる者ぞとありければ、小人泣く／＼のたまふやう、これは都の者にて候ふが、父の行方を尋ねて、此十餘日と申すに足にまかせて來り候ふが、雨はふる暗さはくらし、行くべき方もなし、今宵一夜の御宿を御かし候へとのたまふ。さて父はいかなる

大將の入道しんぜい云々し何人とも定め難し

上にのせ愛し給ふが、幼き人ははや目も塞がり消え入り給ふやうに見えければ、容顏美麗の女房も、流涕こがれ給ひけり。上人も椅子より轉び落ち、流涕こがれたまひけり。其時女房仰せける樣は、みづからをばいかなる者とか思しめす、御恥しながら、大將の入道しんぜいの爲には孫の局の妹、ならのないでんとはみづからが事なり、敦盛は十三、みづから十の年より、便のふみを取りかはし、妹背の中と成りしに、はかなくも元暦元年一の谷の合戰に討たれさせ給ひし時、みづから只ならずありしを、男子にて有るならば、これを記念に取らせよとて、その刀をおかせたまふ、また女子にてあらばとて、十一面觀音を紅のほろに包み給ひて留めたまふ、かやうに色々あり、さてやう〳〵産の紐を解きしかば、見れば敦盛に少しも違ひ給はぬ男子なれば、いづくにも隱し置き、記念に見ばやと思へども、平家の末をば堅く探しとり出だし、おとなしきをば首を切り、幼きをば水に入れ、二たび物を思はする、歎きの中のよろこびなり。さる程に若君、母の名殘のこゑを聞しめし、佛神三寶の加護とおぼしくて、よみがへりし給ふかと、憂きにも涙、嬉しきにも涙、さきだつものは涙なり。
さる程に其後、若君人目を御包みあり、賀茂の大明神へ御まゐりありて、祈誓申しある

大液の芙蓉云々―長恨歌「大液芙蓉未央柳、芙蓉如面柳如眉」
はくじゆつ―白朮か

やうにもてなして歸らせ給ひけるを、見まゐらせてこそ候へと申しければ、上人聞しめし、さらば明日より說法をのぶべしとあり。必ずその中に此ちごの母とおぼしき人有るべしと思しめして、御說法をそのべ給ふ。其時上人やがて涙を流し、御衣の袖をぬらし給ふ。やゝありてのたまふやう、此中の聽聞の人々聞しめせ、一とせ賀茂の大明神へまゐり候ふとき、さがり松にて幼き者を拾ひ、乳母を添へ育てて候ふが、七歲にまかり成り候ふが、此程何とやらん父母をこひて、けふ七日が間物をも喰はず、湯水をさへ呑み給はず、はや存命不定にて候ふ、この聽聞の中に行方をしろしめされたる人や御入り候ふ、幼き者に行方を知らせて給はりたる事ならば、何かは苦しかるべき、明日になり六波羅へ聞え、平家の末なればとて殺し給ふとても苦しからず、行方を知らせて心安く殺してたび給へと仰せもあへず、御衣の袖をぬらし給ふ。見る人聞く人、共に涙を流し給ふなり。その時左の方より、十二ひとへに出でたちたる女房の參りたまふが、此人の御姿を見れば青黛のまゆずみ、丹花の唇にほやかに、あやめの姿にて、大液の芙蓉のくれなゐ、未央の柳の綠、まゆずみ匂ひきて、はくじゆつの肌、蘭麝のにほひ、容顏美麗にして、心も心ならず、いつくしき女房の參り給ひて、此小人を見まゐらせ給ひて、そのまゝ膝の

からはいかならん、父母とても無かりけるとて、伏し沈み泣き給ふ。上人ともに涙をながし、むざんや汝は父母といふ人もなし、みなし子にて有りしを、この愚僧が今まで育ておきぬるぞ、かやうに言ふ言の葉を汝が父母とも思ふべしとぞのたまひける。若君聞召し、あら父母戀しやと伏し沈み、湯水をさへ呑み給はず、煩はせ給ふ事、七日にぞ成り給ふ。上人仰せ有りけるは、もし面々の中に、怪しきことを見出したる人も有るかと、御尋ねありける。さる程に御うちの熊谷入道申すやう、六歳の年說法の御時年の齡二十ばかりの上臈の、容顏美麗に御わたり候ふが、十二一重に出で立ちたる御方の、此小人を召して愛し侍りけるが、人目繁ければさらぬ

えんたんづかー
未詳

ば水に入れ、七歳八歳をばさし殺す。人のうへさへ悲しく思ひけるに、みづから此若君をとられ、憂き目を見んことも悲しきやと思しめして、袷にさし巻きて、えんたんづかの刀を添へて、泣く〳〵さがり松にぞ捨てたまふ。折節法然上人、御弟子十餘人を引きつれて、賀茂の大明神へ御參りありけるが、さがり松にて幼き者の泣くこゑを聞しめして、立ちより御覽ずれば、いつくしき若君にてましますなり。法然上人御覽じて、不思議や刀を添へ、衣に卷きて捨てけるやうは、直人にてはあるべからず、いか樣これは賀茂の大明神の御利生なりと喜びて、拾ひ給ひ、御下向ありて乳母を添へ、いつきかしづき育て給ふ。さる程に成人まし〳〵て學問人に優れ、一字を二字と悟り給ふ兒なり。或時熊谷入道、此小人を見申し、さても人多しとは申せども、一の谷の合戰に討たれさせ給ふ敦盛に、此ちご少しも違ひ給はぬ不思議さよとて、常に涙を流したまふ。さて此ちごのたまふ樣、われは父母も無き孤子にて有りけるを、上人とりあげさせ給ひて候ふと申されければ、近づく法師此事を咎めばやと思へども、今更命失ふに及ばずして斟酌しけり。扨若君涙をながし仰せけるは、世の小人には父母をもち給ふが、みづからはいかならん、父母ともに無かりけるぞとて泣き給ふが、上人の御前へまゐられて、偖もみづ

小敦盛

さても敦盛の北の御方は、都西山の傍に深く忍び給ひけるが、敦盛の討たれさせ給ひぬると聞しめし、夢かうつゝか、こはいかなる事ぞと伏し沈み泣き給ふ。世の常の事ならねば、叫べど聲も出でざりけり。身に餘り悲しく思しめし、衣引きかづき臥したまふ。いたはしや敦盛、源氏謀反を企てて、みづからはいかならん東男に見馴れ給ひて、敦盛が事をば忘れこそ候はんずらんとたはぶれ給ひけり。又御身は只ならぬ身なり、男子にてあるならば、これを記念にとらせよとて、金づくりの太刀、女子にてあるならば、十一面觀音を取らせよとて、取出だし留め給ふ。かやうに色々あり。又何につけてもあはれさを、これに譬へんかたもなし。さて月日を送りたまふ程に、御産の紐をぞ解き給ふ。見ればいつくしき若君にてましますなり。さる程にいかなる所にも預けおき、記念に見ばやと思しめせども、平家の末をば堅く探し出だし、十歳以後は首を切り、二歳三歳を

小敦盛

して富貴繁昌して、親を心やすく養ひ給ふ。さてしどらはおのづから成佛得道の緣をうけ、佛の位となり、七千年と申すに天にあがり給ふ。其時紫雲たなびきて、いきやう四方にみち〳〵て花ふり、不老不死の風ふきて、音樂の聲ひまもなく、廿五の菩薩三十三の童子、廿八ぶしや三千佛みないろめき、十六の天童、四天五大尊、みな〳〵虛空にみち〳〵給ふ。是ひとへに親孝行のしるしなり。後々とても此草子見給うて親孝行に候はゞ、かくの如くに富み榮えて、現當二世のねがひたちどころに叶ふべし。まづ現世にては七難卽滅しさはりもなく、しゆにん愛敬ありて、末繁昌なるべし。後の世にては必ず佛果を得べき事疑なし。偏に親孝行にして、此草子を人にも御讀み聞かせあるべし〳〵。

現當―現世と當來(未來)

此布おり出だし候て、金錢三千貫に賣りまゐらせ候ておき候ふ事も、ことなる如く思しめすまじく候ふ、是にて一世を御過ぎ候はんなり、是ひとへにしどら親孝行なるしるしなり、南方普陀落世界の觀音の淨土より、御つかひとしてまゐり候ふ、今は何をかつゝむべき、われは童男童女身といふ、觀音に仕へ奉るものなり、布賣りにおはせし所は、南方普陀落世界の觀音の淨土なり、これよりのちは七千年のよはひなり、これは七德ほうしゆの酒七杯のみ給ふゆゑなり、此のちはいよ〳〵富貴繁昌にて、佛神三寶の加護あるべし。かの酒まゐり候ふとき、三人出でてしやく取り候ひしこそ、我々と肩をならべたる人にて候ふ、名をば聲聞じんとくどしや、一人は毘沙門じんとくどしや、一人は婆羅門じんとくどしやと申すなり、これもひとへに親孝行の德により、かくの如くあはれみ給ふ事まぎれなし、さらばと言ひてしどらが宿をたち出でて、門にていとまごひさせ給ふ事、四鳥の別れのごとくなり。名殘をしやとて、南の空にあがらせ給ふかと見れば、白雲にのり給うてあがらせ給ふなり。虛空に音樂ひゞきて、異香四方に薫じ、花ふり、もろ〳〵の菩薩たち迎ひにまゐらせ給ふ。さてもしどらは呆れたゝずみけるが、何と思ふともかさねて逢ふべき事ならねば、思ひきりつゝ親子わが宿へ歸りける。それより

きたりければ─送りければの衍か

此三人に仰せつけさせたまひて、三千貫の金錢を、たゞ一度にしどらが宿へきたりければ、其時しどら御いとま申さんと言ひければ、老人仰せけるは、今飮みたる七德ほうしゆの酒は、觀音の淨土にある酒なり一杯のめば一千年のよはひを保つなり、ましてや汝は、七杯のむ間、七千年の齡あるべし、此後は物を食はずともほしくもあるまじき、物を著ずともさむくあるまじきなり。是ぞ親孝行のしるしよとて、御立ちましく〳〵て雲の上にのりて行き給へば、五色の光さして、南の天にあがり給ふと思へば、しどら我宿へ歸るなり。女房にとく語らんとしければ、其時の有樣をいはぬさきに、少しもたがはず女房語りたまへば、しどら心に思ふやう、おそろしの事や、是は神通をさとる化身ぞやと思ふ所に、此女房仰せけるは、さらばわれ〳〵は御いとま申し候はんとのたまへば、母きゝてうたてしき御ことかな、此程は思ひのほかなる人を迎へまるらせて、しどらともに嬉しく思ひまるらせ、何にたとへんかたも候はぬに、かやうに仰せ候ふ事、あら情なやとて、天に仰ぎ地に俯して、なげき給ふ事はかぎりなし。女房仰せけるは、かやうに永々しく居候はんづる事ならば、いかなる事をもかせぎ出だし候うて、後のかたみにも見せまるらせ、又過ぎにしかたの事をも、御忘れ候ふやうにと思ひ候へども、われ〳〵が業には

くわうゑん—廣園か

大床—椽

ほうしゆ—保壽か

言語—言語道斷の意

らも誘ひ給うて、それより南の方へさして行く。くわうゑんまん〳〵として、雲に聳えて門あり。見れば瑪瑙の礎に水晶の珠を柱とし、瑠璃のたるき、硨磲瑪瑙にてうはぶきし、なか〳〵目を驚かすばかりなり。門のうちへ入りて見れば、異香薫じて花降り、音樂のころ天に滿ち〳〵て、心も若くよはひも久しくある心ちして、歸らんことを忘れたり。此馬にのり給ふ老人、椽のきは迄のりつけておりさせ給ひ、うちへ入りて金錢三千貫三人してもちて出でたり。あらかゝる力の強き人もあるやと、しどろ恐しく思ひけり。扨今の布賣をこなたへ呼べとて、座敷に呼びあげ給ふ。しどろ足ふるひて心も亂れ、身のおき所もなく思ひゐる。餘りにおよび給ふほどに、階段をあがり大床にあがる。心はさながら薄氷をふむが如くにて上りけり。さて老人のたまふは、其七徳ほうしゆの酒飲ませよとのたまへば、もとよりしどろ上戸にて、一杯飲みて見れば、中々甘露の味ひみち〳〵て、言語えこらへぬ酒なり。いかほど飲むべけれども、老人おほせけるは、七杯より多く飲むべからずとの仰せなれば、七杯飲ませけり。

さて金錢三千貫をば、是より送り候はんとて、おそろしげなる人三人呼び出だされけり。名をば聲聞じんとくどしや、毘沙門じんとくどしや、婆羅門じんとくどしやと申す。

持ちてゆき—持ちてゆくの衍か

候ふ布は、よの常やすく候ふが、是は餘りにおびたゞしく候ふとて、をかしげに申しければ、女房仰せけるは、只よのつねの布にて候はず、われ〳〵が織る布は、定めて鹿野園の市にて見知る人もあるべし、代は限るべからず候ふ、はや〳〵市へ人も立つらん、行き給へと仰せければ、しどら持ちてゆき、鹿野園の市にて、是はいかなる物にて候ふとて笑ひ、又は不審さうに見る人もあり。一日もちてまはれども、たれにても取りて見る人だにもなし。しどら心に思ふやう、さればこそ知らぬ事をして、かゝる物を市へ出だし、人の笑草になる事の無念さよとて、持ちて歸らんとする所に、道にて年のよはひ六十に餘りたる老人の、鬢鬚いかにも白く、其身は人にすぐれ、葦毛の馬にのり、ともの人三十三人あるに、行きあひたり。此馬に乘り給ひたる老人仰せけるは、汝はいづくの者ぞと問はせ給へば、われはしどらと申すものにて候ふが、鹿野園へ布を賣りにまかりて候ふが、買主なくして持ちて歸り候ふと申す。汝は聞き及びたる者なり、其布みんとのたまひ候ふほどに、馬の上へさしあげたり。三十三人の人々、此布をひろげければ、長さ三十三尋なり。近頃めづらしき布かな。われ買はん、代はいかほどと仰せければ、金錢三千貫に賣り候はんと申しければ、あらやすの布やとて、さらばわれ〳〵が所へとて、しど

黒木—皮のつきたるまゝの木

こばん—碁盤か

なし。いざ機を織らんとて、しどらにのたまひけるは、此家ははたばりせばくて織らるまじく候ふ、そばに機屋をつくりてたび給へとのたまへば、しどら俄に黒木をとりて、機屋をつくりてまゐらせけり。

其時女房仰せけるは、かまへて此機おり見んほど、此方へ人を入れまじきと仰せければ、しどら心得候ふとて、母に此由語りけり。夕ぐれに若き女一人いづくよりとも知らず來りて、宿をかり給ふ。しどらの女房やがて此機屋をかしけり。しどらの母仰せけるは、此機屋へ人を入れまじと仰せ候ふが、何とて宿を御かし候ふやと仰せければ、此人は苦しからぬとて、二人して機を織り給ふ音こそめづらしけれ。妙法蓮華經觀世音菩薩、普門品第二十五の菩薩、玉の御はたを織り給ふ。誠に法華經の、一の巻より八の巻に至るまで、二十八品ことごく織り入れ給ふ御こゝろ、耳に聞えてありがたく、よるひるの境もしらずして、十二月の間に織り出だし給ひて、女房仰せけるは、今おりいだし候ふとて、こばんの如くに厚さ六寸ばかり、廣さ二尺四方にたゝみ給ひて、しどらに仰せけるは、あす摩迦多國鹿野園の市にもちて行き、御賣り候へとのたまひければ、しどら代はいか程と申し候はん。金錢三千貫に御賣り候へと仰せければ、あら不思議や、此程賣りかひ

泣くより外の事はなく候ふと語り給へば、女房聞き給ひてのたまふやう、誠に羨ましのしどらの心や、いかなる佛の御惠みもなどか有らざらん、か程に親孝行の人は世にめづらしき事やとて、やがて物語をぞし給ひける。たとへば越鳥南枝に巣をかくる翼も、親のはごくみを思ひ、巣をたてられて諸共にたつとき、四鳥の別れとて、母子のわかれを知らぬ妄執の雲にへだたれども、親孝行の鳥は、生まれたる木の枝に百日が間、日に一度づつ來りて羽をやすむるを、母の鳥、さては是こそ我子よとて喜びけるとて、やがてしどらを慰め給ひける。孝行の鳥の奇特は、何と捕らばやとて網をかけぬれども、とられまじきなり、ことに鷹鷲などにも捕られまじきなり、まして人間と生をうけて、親にしたがはぬ人、この世にては禍をうけ、七難あやまちにあひて、その身おもふ事叶ひ難し、親孝行の人には天より福を與へ、七難則滅七福則生とて、何事も思ふ事の日のうちに叶ひ、じゆにん愛敬ありて、おのづから今生にては、上ぐう菩提の道にゆきて、安穩快樂の氣をうけ、九品蓮臺の座をさして、東方藥師の淨土、西方阿彌陀の淨土にて、諸佛の上の淨土にもとづき、おのづから示現神通力の身となりて、念彼觀音と唱へさせん事疑なしと語り給ひける。息のにほひは異香薰じて、まんまんと滿ち滿ちて、夜晝のさかひも

越鳥云々—文選「胡馬依北風、越鳥巣南枝」
四鳥の別れ—孔子家語「桓山之鳥生四子焉、羽翼旣成、將分于四海、其母悲鳴而送之」
しゆにん—衆人か
まんまん—滿々

具足―器具

本―手本

くわうしゆちはうべんのせつ―未詳

又てがいと申す物をとり給ふ時は、南無妙と響き、つむがせ給ひけるほどに、二十五月と申すにつむぎ出だし給ひて、さて機の具足ほしきと仰せければ、さらばとてこしらへ見んとするを、御覽じてのたまひけるは、よの常の機の具足にてはわろく候ふ、われ〳〵が機の具足は常のにかはり候ふとて、本をいだし給へば、御好みのやうにこしらへて參らせければ、此女房よろこび給ひて、何として卷きたてみんと宣ひける所に、示現神通力者はやがて心えさせ給ひ、くわうしゆちはうべんのせつなれば、いかでかわろかるべきぞや。一度も見ぬ人二人來りて、一夜の宿を借りたまふ。此機をともに卷き給へり。是を始めてしどらの母不思議の事かなとて、いよ〳〵あがめさせ給ふこと限なし。しどらは此機たちて、母のなぐさまれ候ふ事の嬉しさよ、いつよりも心やすく過ぎゆかれ、又營みのわざをし、此程は心勞とも覺ず、是ほど天竺の飢饉世にすぐれけれども、我々心やすく候ふ事こそ嬉しけれとて、母の御足をわが額の上におきて、寢させまゐらせり。其時しどらがそばに寢させ給ひたる女房、しどらに尋ね給ふやうは、何とて泣き給ひ候ふぞと仰せければ、若き時御ふとり候ふこころは、御足を額にねさせ申すに、重くおはしまし候ひしが、はや御年もより給へは、次第に身も細らせ給ひて、ことの外に輕く候ふ程に、

ふり人—天より降りし人
くましね—洗米
つむ—紡錘
阿耨多羅云々—無上正偏知と譯す

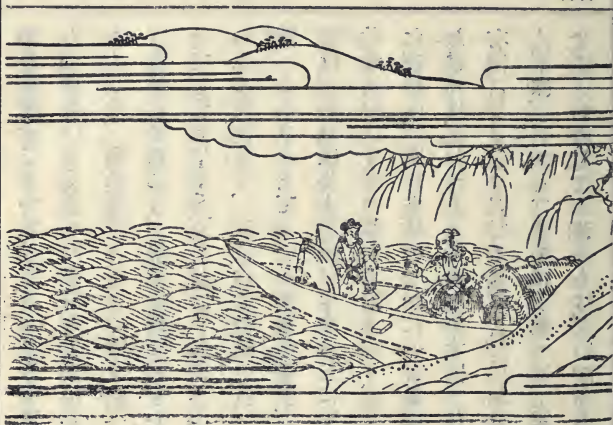
とより行くへも知らぬ身なれば、いかやうにもしどらと置かせ給へ、われ人しらぬ營みをもして、諸共に浮世をわたり候はんとのたまひければ、母なのめに喜び給ひて、さらばといひて、しどらに此由いひければ、もとより親孝行の人なれば、ともかくも母の御はからひと御返事申されければ、天竺も人の心の甚しきところなれば、みな〱人申しけるは、しどらの所にこそ不思議のふり人わたり候ふ、いざやまゐり拜まんとて、道俗男女にいたるまで、くましねを包みなどしてまゐりけり。さるほどに白米三石六斗、日のうちによりたり。其時まゐりたる女房にのたまひけるは、われはさだかなるものなれば、苧と申す物あらばくれよと仰せければ、その次の日は苧をもちてまゐりけり。しどら心にめでたき事のありて、まへの日よりまゐらせ候ふ米にて、母をすごし候はん事の嬉しさよとて喜びけり。また此女房は苧をこしらへてひそかにし給ふほどに、いつうませ給ふとは見えねども、夥しくうませ給ひけり。さる程につむといふ物ほしき由のたまへば、しどらやがて尋ね求めて參らせけり。此苧をつむぎ給ひし音こそ面白く聞えけれ。よく〱きゝて文字に寫して見れば、やるてには南無常住佛と響き、引きいれよれるてには、南無常住法と響き、巻き給ふときは、阿耨多羅三藐三菩提と巻きをさめ給ふ。

棚をかき―棚を懸けの意にて一段高き座を設くること

よそへは更にまゐりたくも無し、そなたのすみかへならば行き候はんとのたまへば、すこし御待ち候へ、先づわれ〳〵宿にゆきて、母に伺ひ申して御むかひに參り候はんとて、しゞらはすみかに歸りて、母に此由申しければ、母なのめならず喜び給ひて、いそぎ座敷を清め、こなたへ迎へ申さんとのたまひければ、しゞら喜びて、いそぎ海のはたへ御むかひにぞまゐりける。此女房待ちかね給ひてわたりける。道のほとりにて行きあひ奉りける。しゞら申しけるは、御はだしにては御足いたく候はん程に、此賤しき賤(しづ)の男がうしろに負はれ給へと申せば、よろこび給ひて負はれさせ給ひけり。さて我宿へ行きつきおろしければ、やがて母出であひ見たてまつりて、あら冥加(みやうが)もなや、是ぞ天人と申す人なりとて、わがゐる所にはいかゞとて俄に棚をかき、われより高く置き奉りて、あがめさせ給ふ事かぎりなし。其時しゞらが母の申す、冥加(みやうが)もなき申し事にて候へども、などしゞらが妻にならせ給ふ人にておはしまし候はずや、しゞらもはや四十になりまゐらせ候ふが、いまだ妻ももたず、子の一人も候はぬこそ、明暮(あけくれ)わびまゐらせ候ひつれ、我身ははや六十にあまり、明日をも知らぬ身の、此事をのみ案じさふらふ、あはれ〳〵似あはしき妻もがなとて歎きければ、女房仰せけるやうは、われはこれ來りし方(かた)も知らず、も

物のゆくへ—物のなりゆき

母を無沙汰にあつかひ申さん事もや候はんと思ひ、母の氣をそむくと存じ候へば、妻をもつ事思ひもよらぬ事やとて、けしからず聞えければ、此女房仰せけるは、なさけなき人かな、物のゆくへをよく聞き給へ、袖のふり合せも他生の緣と聞くぞかし、たとへば鳥類などだにも、緣ある枝に羽をやすむるぞかし、ましてや是までそなたを賴み參らせて、此舟にもとづきし甲斐もなく、歸れと仰せ候ふことの淺ましさよとて、誠に思ひ入りたる氣色にて、涙にむせび給へば、しどら是を見てつら〱思ふやう、さらばせめて陸へおろさんとて、いそぎ舟を漕ぎ、汀につきて舟よりいそぎおろしまゐらせて申しけるは、われは是まで届け申すことにて候ふ、さらば御暇申さんとて、歸らんとしければ、此女房袖にすがり歎かせ給ふやう、せめてそなたの宿まで御つれ候へ、一夜を明かさせてたび給へ、明けなばいづかたへも足にまかせて行き候はんとのたまひけり。しどら申されけるは、われ〱が家と申すは、たゞ世の常の家にてもなく、誠にしづの男のねやの有樣、目もあてられざる所なれば、おき奉らん所更になく候ふ、常の座敷に置きまゐらせん事は、冥加もなき事にて候へば、家をつくりまゐらせて置き奉らん、御まち候へと申せば、女房のたまひけるは、いかなる金銀瑠璃硨磲瑪瑙をもつて作りたる家なりとも、

じつはう―十方にて只十の裝飾語として用ひたるにや

姿を見れば春の花、形を見れば秋の月、じつはう十の指までも、瑠璃をのべたる如くなる女房の、海よりあがらせたまふ事の不思議さよ、若しも龍女などと申す人にておはしまし候ふか、此しづの男の舟に上り給ふ事、冥加もなき事なり、たゞ御すみかへ歸り給へと申す。其時女房仰せけるは、われは來たるかたも知らず、又ゆくすゑも知らずさふらへば、そなたの宿へつれて御ゆき候へ、たがひの營みをして浮世をわたらんとのたまへば、しづゝ申すやう、あらおそろしや、思ひもよらぬ事なり、われははや四十になり候へども、いまだ女房ももたず候ふ、其いはれは六十に餘りたる母を一人もち候へば、もしわれ女房をもち候はゞ、心もそばになりて、

釣する心もそばになりて—釣する心もよそになりて

給はんとて、釣する心もそばになりて、母の事をのみ案じゐたりしが、釣竿も心のありけるにや、すは魚こそかゝりたるらめと思ひ、ひそかに釣りあげて見れば、うつくしき蛤一つ釣りあげたり。しどら心に思ひけるは、是はいかなる事やらん、何の役にたつべきとて、海へ投げ入れたり。さてこゝには魚なきとて、西の海へ舟こぎて行き、つりたれしかば、又以前の南の海にて釣りあげたりし蛤なり。しどら心に思ふやう、あら〳〵不思議の事やとて、又とりはなして海へ投げ入れたり。それより又、北の海へ漕ぎ行きて、つりをたれし所に、又西の海にてつり上げし蛤あがりけり。その時しどら思ふやう、是は希代不思議のことなり、一度ならず二度ならず、三度までつりあげたり、たゞかりそめながらも三世の契を得たる物かなとて、此たびは取りあげて舟のうちへ投げ入れて、又つりを垂れければ、彼の蛤俄に大きになりけり。あら不思議の事やとて、しどら取りて海へ入れんとする所に、この蛤のうちより金色のひかり三筋さしけり。是はいかなる事ぞやとて、目を驚かし、肝を消し、おそれをなして遠ざかりける。此蛤がひ二つに開き、其中より容顔美麗なる女房の、年のよはひ十七八ばかりなるが出でたり。しじらこれを見て、潮をむすび、手水をつかひつゝ申しけるは、是ほどいつくしき女房の

まどしき―貧しき

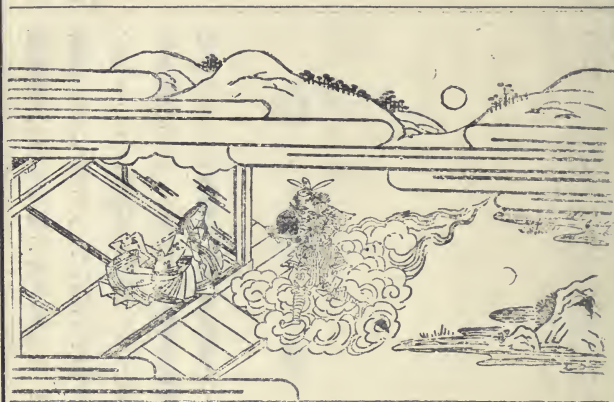
うろくづ―魚

蛤の草紙

天竺摩迦多國の傍に、しゞらと申す人あり、世にすぐれてまどしき人にておはしけり。父には早く離れ、母親一人もち給ひけるが、その頃天竺ことのほか飢饉ゆきて、人つかれて死する事かぎりなし。しゞら母を養ひかねて、よろづの營みをして母をすごさんために、天に仰ぎ地に俯して營めども、更に其甲斐なかりけり。こゝに思ひいだしたる事ありとて、浦回に出でて釣をして、うろくづを取りて母をすごさんとて、浦へ出でて小舟に乘り、沖中へ漕ぎいだし釣をたれ給へり。色々の魚をつりて、毎日母を養ひけり。さればしゞらは是を嬉しき事に思ひけるが、ある時又浦へ出でて釣を垂れ給ひしが、其日もはや暮方になりけれども、魚一つも釣りえざりき。しゞら心に思ふやう、此程いくらの殺生をして、母を養ひたる報にや、更に魚つられざりけるとて、しゞら心に思ふやう、いかに母の我を待ちかねさせ給ふらん、今まで物をまゐらずして、さぞ御心つかれ

蛤の草紙

八苦—生苦、老苦、病苦、死苦、愛別離苦、五盛陰苦、求不得苦、怨憎會苦

契深き人は、目の前に並み居つゝ、何事も心のまゝの極樂なれば、さのみはいかで八苦の世界にあらんとて、いはほの宮を東方淨瑠璃世界に導き給ふ。其身をもかへずして成佛し給ふこと、稀代不思議のためしとかや。上代も末代もかゝるめでたきためしなし。今は末世のこと、か程にこそはおはせずとも、神や佛を念ずる人は、やはか其しるしの無かるべき。南無藥師瑠璃光如來〳〵、おんころ〳〵せんだりまとうきそはか〳〵。

功皇后、應神天皇、仁德天皇、履仲天皇、反正天皇、允恭天皇、安康天皇、雄略天皇、淸寧天皇、十一代の間、いつもかはらぬ御姿にて、榮えさせ給ふなり。さゞれ石の宮、あるよもすがら燈火を掲げ、藥師眞言を念じおはしけるに、かたじけなくも藥師如來、いとも貴き御姿にて、いはほの宮に對ひのたまふは、汝はいつまで此世界にあらん、人間の樂はわづかの事なり、それ淨瑠璃世界の地は、すなはち瑠璃なり、汝を移さん淨土は、七寶の蓮花の上に玉の寶殿を立てて、黄金の扉をならべ、玉のすだれをかけ、床には錦のしとねを敷き、綾羅莊嚴を以て身を飾りたる、數千人の女官、時々刻々に守護を加へ、百味の飲食をさゞぐる事ひまもなし、此世界にて

くわんにん—官人

あまた—甚だの意

めし、獨りたゝずみ給ふに、御前に虚空より黄金の天冠を額にあてたるくわんにん一人まゐり、さゞれ石の宮に瑠璃の壺を捧げ申しければ、藥師如來の御つかはしめ、金毘羅大將なりとぞ申しける。此壺に妙藥あり、これすなはち不老不死の藥なり。これをきこしめされば、御年もよりたまはず、わづらはしき御心ちもなく、いつも變らぬ御姿にて、御命の終もなく、いつまでもめでたく榮え給はんとて、かき消すやうに失せにけり。さゞれ石の宮、此壺をうけ取らせ給ひ、あらありがたや、年月願ひ奉るしるしかなとて、三度禮し、良藥嘗め給ふに、あまた味ひ言ふばかりなし。青き壺に白き文字あり、よみて御覽ずれば、歌なり。

君が代は千代に八千代にさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで

とあり。これすなはち藥師如來の御詠歌なるべし。それより御名を引きかへて、いはほの宮とぞ申しける。

其後年月を送り給ふに、聊か物の悲しき事もなく、いつも常磐の御姿にて、榮花にほこり給ふ。御命長く渡らせ給ふことは、すべて八百餘歳なり。成務天皇、仲哀天皇、神

さゞれいし

神武天皇より十二代成務天皇と申し奉るは、限なくめでたき御世なり。此帝に男みこ、姫宮三十八人の皇子おはしける。卅八人めは姫宮にて渡らせ給ふ。數も知らぬほどの皇子たちの御末なればとて、その御名をさゞれ石の宮とぞ申しける。御容貌世に勝れてめでたくおはしければ、數多の御中にもこえて、御寵愛斜ならずいつきかしづき給ひける。さるほどに御年十四にて、攝政殿の北の政所に移しまるらせ給ふ。めでたき御おぼえ、一天四海のうちに上こす人こそなかりけり。

さゞれ石の宮、世間の有爲轉變のことわりを、つくづく思召しよりて、それ佛道を願ふに、淨土は十方にありと聞けども、中にもめでたき淨土は、東方淨瑠璃世界に若くはなしと思しとりて、つねに怠らず、藥師の御名號、南無藥師瑠璃光如來と唱へ給ふ。ある夕暮の事なるに、月の出づる山の端打ちながめ給ひ、わが生れん淨土はそなたぞと思し

さゞれいし

せん人は、財寶にあきみちて、さいはひ心にまかすべしとの御誓なり。めでたき事なかなか申すもおろかなり。

あたがー御多賀
しゆくぜんー宿善か
三熱の苦みー一日に三度づつ受くる熱の苦み

申す人、信濃へ流されて、年月を送り給ひしが、一人の御子もなし、これを悲み給ひて、善光寺の如來にまゐりて、一人の御子を申しうけ給ひて、御年三歳にて、二人の親におくれ給ひて、其後凡夫の塵にまじはり給ひて、かゝる賤しき身となり給へり。みかど叡覽ましく〳〵て、皇子をはなれて程近き人にておはしけるよとて、信濃の中將になして、甲斐信濃兩國を給はりて、此女房相具して信濃へ下り、あさひの郷につき給ふ。あたらしの郷の地頭左衛門尉をば、忠ふかき人なればとて、甲斐信濃の兩國の總政所に定めたまふ。又三年養ひたる百姓にも、みな〳〵所領をとらせて、我身はつるまの郷に御所を建てて、眷族をおき、貴賤上下にかしづかれ、國の政事おだやかにありしかば、佛神三寶の加護ありて、百廿年の春秋をおくり、御子あまた出できて、七珍萬寶に飽き充ちて、長生の神となり給ふ。殿はおたがの大明神、女房はあさひの權現と現れたまふ。是は文德天皇の御時なりし。かれはしゆくぜんむすぶの神とあらはれ、男女をきらはず、戀せん人はみづからが前に參らば叶へんと、誓深くおはしますなり。およそ凡夫は本地を申せば腹をたて、神は本地をあらはせば、三熱の苦みをさまして、直に喜びたまふなり。人の心もかくの如く、物くさくとも身はすぐなるものなり。毎日一度此草子を讀みて、人に聞か

もつかう車―帽額の簾をかけたる車をいふか

此は由聞しめし、見參のために召さる。ひきつくろひてまゐられたり。豐前の守是を見て男美男におはしける、苗字はたれと問ひ給へば、物くさ太郎と答へける。殊の外なる御名かなとて、はじめてうたの左衛門になし奉る。かやうにとかくする程に、此事內裏へ聞召して、いそぎ參れとの宣旨なり。辭退申せど叶はず。もつかう車にのりて院參する。大極殿にめし、汝はまことに連歌の上手にて侍るなる、歌二首つかまつれと宣旨なり。折ふし梅花に鶯のとびちりて囀るをきゝ、かくなん、

鶯のぬれたる聲のきこゆるは梅の花笠もるや春雨

みかど是を叡覽ありて、汝が方にも梅といふかと宣旨なりければ、うけたまはりもあへず、

信濃にはばいかといふも梅の花みやこの事はいかゞあるらん

みかど是をきこしめし、御感に入りて、汝が先祖を申せと宣旨なり。先祖もなき者にて候ふと申しけり。さらば信濃の國の目代へ尋ねよとて、その所の地頭へ宣旨をなし、御尋ねありければ、こもに卷いたる文書をとり寄せて、見參に入れ奉る。これを開き御覽ずれば、人王五十三代のみかど、仁明天皇の第二の皇子深草の天皇の御子、二位の中將と

ことわり―道理と琴破とにかけていふ

してかくなん、

　けふよりはわが慰みに何かせん

物くさ太郎、いまだ起きもあがらず、あさましと思ひて、女房のかたを打見て、

　ことわりなれば物もいはれず

と申しければ、あなやさしの男の心やと思しめして、よし〳〵是も前世の宿縁なり、箇樣に物思ひかけらるゝも、今生ならぬ緣にてこそ、かくも有るらんと思しめして、比翼のかたらひをなしたまふ。今宵も旣に明けければ、いそぎ歸らんとする時、女房仰せらるゝやうは、力及ばず、かやうに見參に入りぬるうへは、われ人この世ならぬ緣なり、心ざし思召めさば、是にとゞまり給へ、われらは宮づかひの身なれども、何か苦しかるべきとありければ、承るとてとゞまりぬ。其後は此女房下女二人そへ、よるひるこれをこしらへて、七日湯風呂に入れければ、七日と申すにはうつくしき玉の如くになりけり。其後は日々にしたがつて玉の光あるに似たり。をとこ美男の名をとり、うた連歌人にすぐれたり。女房かしこき人にて、男の禮法を敎へける。しかるに直垂の衣紋がかり、袴のけまはし、烏帽子の著ぎは、鬢つきまでも、いかなる公卿殿上人にも勝れたり。かゝる程に豐前の守の殿

大口—袴の一種

ちはやぶるかみをつかひにたびたるはわれをやしろと思ふかや君
此うへは力なし、具してまゐり候へとて、小袖一かさね、大口、直垂、烏帽子、刀とゝのへて、是を召して參られよとぞ申しける。ひぢかす大きに喜び、めでたや〳〵とて、此程著たりける重代のきる物を、竹の杖にまきつけて、小袖をば今宵ばかりこそ貸し給はんずらん、あしたは著てかへらんずるぞ、いぬ、ゑのこ喰ふな、ぬす人とるなとて、椽の下へ投げ入れて、其後大口直垂きるやうを知らずして、首にあて、肩にかけ、是を煩はしくしけるを、下女とりつくろひて、烏帽子をきせんとす。髮を見るに塵埃虱など、いつの世に手をいれて、解きあげたるけしきもなし。されども漸うこしらへて、烏帽子をばおしかぶせ、なでしこ手をひきて、こなたへ〳〵とつれて行きければ、物くさ太郎、我國信濃にては、山岩石をこそありき習ひたれ、かやうに油さしたる板の上をば步みならはず、こなたかなたと辷りまゐりけり。されども障子の內へおし入れて、なでしこは歸りけり。上臈の御前にまゐるとて、踏みすべりてあふのきにまろびけり。さらば餘の所にてもなくして、上臈の寶とも思召すてひきまるといふ琴の上に倒れかゝりて、琴をば微塵に損ひぬ。女房是を見て、あさまし、いかにせんと涙ぐみて、顏に紅葉をひき散ら

敷きゐたりけり。かなたこなた身をもだへ、ありきくたびれ、あはれ何にてもとくくれよかし、何をくるべきやらん、栗をくれられなば燒きてくふべし、柹、梨、もちひなどをくれたらば、すきもなく食ふべし、酒をくれたらば十四五六七八杯も呑まう、何にてもとくくれよかしと、心を色々になして待ち居たる所に、栗、柹、梨、鬚籠に入れて、しほと小刀取りそへて出だしける。物くさ太郎是を見て、あな淺ましや、女房のみめには似ず、あまたの木實を、箱の蓋、たんしにも入れてくれよかし、馬牛などに物をくる如くに、一つにとり具してくれたる事よ、まさなや、たゞし子細あるべし、このみあまた一つにし、くれたるは、われに一つになりあはんと思ふ心かや、栗をたびたるは、くりごとすなとの心にや、梨をたびたるは、われは男もなしといふ心、柹としほとはなどやらん、いづれも歌によまばやと思ひて、

津の國のなにはの浦のかきなればうみわたらねどしほはつきけり

女房これを聞き、あなやさしの者の心や、泥の蓮、藁苞黃金とは、箇樣の事にてもや侍らん、是とらせよとて、紙を十かさねばかり出だされたり。是は何事やらんと思ひけるが、水莖のあとなき返事をせよといふ心ござんなれと思ひて、かくなん、

しほ—原本「しい」とあり、後文によりて改む
たんし—檀紙か
うみ—熟み、海
泥の蓮云々—泥中の蓮、藁苞に包める黃金といふ諺

大空なる—茫然たる

五障さんしゆ—五障は轉輪王、梵天王、帝釋、魔王、佛となること能はざるをいふ、さんしゆは三從か、されば幼にして父母に從ひ長じて夫に從ひ老いて子に從ふをいふ

き逢ひたらば、命もあらじなどと語り給へば、いま〳〵し、何のゆゑにか是までは來り候ふべき、なか〳〵仰せさふらへば、面影にたちて候ふと申しければ、物くさ太郎椽の下にて是をきゝ、是にこそ我北の方はあれ、扨も緣はつきぬものぞと嬉しくて、椽の下より躍りいで、いかにや女房、わごぜ故に心をつくし、骨をば折るぞとて、椽より上へあがりける。をみなへし是をきゝ、肝心も失せはてて、ころびまろびて、障子のうちへにげ入りて、しばしは呆れて肝魂も身にそはず、秋の夜に夢みる心ちして、大空なるけしきにておはしけるが、やゝありて、あな恐しのものの心や、是まで尋ねて來る不思議さよ、人こそ多きに、あれ程きたなげにいぶせき者に思ひかけられ、戀ひられたるこそ悲しけれとて、なでしこに語り歎き給ひける。かゝる所に、番の者ども立ち出でいふやうは、人のけしきのあるやらん、犬が吠ゆるといひて、人々さわぎけり。

女房おぼしめしけるは、あら淺ましや、あの者を打殺さんも恐しや、さなきだに女は五障さんしゆに罪深きにとて、涙をながし給ひける。今宵ばかりは何か苦しき、かり宿してあけぼのにすかしてやれとて、ふるき疊をしきて居よとてたびたり。下女來りて、明けなば人に見えず、とく〳〵歸れとて、ある妻戸のきはに、いとならはぬ高麗緣の疊を

さいじよ―最初か

も人もなし。往來の人に問ひければ、知らずと答へて通りける。清水にて立つたりし所へ歸りきて、こなたむきにこそ女房は立つたりつれ、あなたへ向きてこそ、かやうの事をば言ひつれ、いづかたへ行きつらんと、もだへこがれけれども詮ぞなき。けに〳〵思ひ出だしたる事あり、からたちばな紫のかどとありつるに、尋ねて見ばやと思ひて、紙一かさねを竹にはさみ、あるさぶらひ所へ立ち入りて、是は田舍の者にて候ふが、門ふみ忘れて候ふが、さいじよからたちばな紫のかどにこそ仰せられしが、それしきの門はいづくに候ふらんと尋ねければ、七條の末に豐前の守の殿の御所こそからたちばな紫は有りしぞ、其小路むきて尋ねよと敎へける。たづね行きて見れば、實にもそれなりけり。はやわが女房にあひたる心地して、うれしき事申すばかりなし。彼のやかたには、犬追物、笠懸、まりあそび、或は管絃碁將棊雙六をうち、今樣早歌、思ひ〳〵のあそびなり。あなたこなたへ行きて見れども、わが女房はなかりけり。もしも出づることもありなんと、椽のしたに隱れける。此女房御所にては侍從の局と申しける。更けゆくまで宮づかひして、わが局へ入らせたまふが、廣椽にたち出でて、なでしことい ふ下女を召して、いまだ月は出でさせ給はぬか、さもあれ、清水にての男は、いかにこれ程くらきに、それにゆ

しさよと、思しめして、

はなせかし網の絲目のしげければこの手をはなれ物語せん

物くさ太郎是を聞き、さて手を許せとござんなれ、いかゞせんと思ひて、又かくぞ、

何かこの網の絲目はしげくともくちを吸はせよ手をばゆるさん

とよみかへし申しければ、女房時刻うつりて叶はじと思しめして、又かくなん、

思ふなら問ひても來ませ我宿はからたちばなの紫のかど

物くさ太郎此御詞を案じ、少しゆるす所にふりはなし、笠をも御衣裝などまでも打ち捨てて、裏なしをも踏みぬぎ、かちはだしにて下女をもつれず、散り〴〵になりて逃げられけり。物くさ太郎あな淺ましや、わが女房取りにがしつる事よと思ひて、唐竹の杖くきみじかにおつとり、女房いづかたへ行くぞとて追ひまはりけり。

女房は是を最後と思しめして、案内は知り給ひたり、あなたの小路、こなたの辻、こゝかしこを巡りちがへ逃げ、春の風に花の散る如く逃げかくれ給へり。物くさ太郎是を見て、わごぜはいづくへ行くぞとて、あなたの小路へつゝと寄り、こなたの辻へ行きあひたり、すきをあらせず追ひつめけり。ある所にて追ひ失ひ、あとへ返りてさきを見れど

近江―逢ふ身にかけていふ
因幡―稲葉にかけていふ
ふし―節、臥し
よごと―節毎、夜毎

ぞ。日くるゝ里も心得たり、鞍馬の奥はどのほどぞ。これもわらはが故里よ、ともし火の小路をたづねよや。油の小路はどのほどぞ。是もわらはがふる里よ、はづかしの里に候ふよ。しのぶの里とはどのほどぞ。これもわらはが故里よ、うはぎの里に候ふ。錦の小路はどの程ぞ。是もわらはが故里よ、なぐさむ國に候ふは。それはこひして、近江の國はどの程ぞ。けしやうする曇なき里とのたまへば、鏡の宿はどの程ぞ。秋する國に候ふよ。因幡の國にはどのほどぞ。これもわらはが故里よ、はたちの國に候ふよ。若狹の國にはどのほどぞ。かやうにとかくいふ程に、此うへは吾身のがるべきやうなし、いやいや此者に、歌をよみかけ、それを案ぜぬ折ふしに、逃げ去らばやと思ひて、男のもちたる唐竹の杖によそへて、かくなん、

から竹を杖につきたる物なれば　ふし添ひがたき人を見るかな

物くさ太郎これを聞き、あなくちをしや、さてわれと寝じとござんなれと思ひ、御返ごと、

よろづ世の竹のよごとに添ふふしの　などからたけに節なかるべき

あなおそろしや、此男は吾とねんといふ、又姿には似ず、かゝる道を知りたることやさ

東西くれはてー前後不覺に

芹生ー傍訓原本のまゝ

てうしの言葉ー調子か

ふくせんー言ひ伏せんとの意か

くしげなる笠の内へ、きたなげなる面をさし入れて、顔に顔をさしあはせて、いかにや女房といひて、腰に抱きつきて見あげければ、東西くれはてて、更に御返事もの給はず。ゆききの人是を見て、あな恐しや、いたはしやとて、おの〳〵見ては通れども、よりつく者は更になし。男とりつめていふやうは、いかにや女房、遙にこそおぼえて候へ、をはら、しづはら、芹生の里、かうだう、かはさき、中山、長樂寺、淸水、六波羅、六角堂、嵯峨法輪寺、太秦、醍醐、栗栖、木幡山、淀、八幡、住吉、鞍馬寺、五條の天神、貴船の明神、日吉、山王、祇園、北野、加茂、春日、所々にてまゐりあひて候ひしは、いかにいかにと申しける。女房是をきゝ、此者はいかさまにも田舍の者にてありけるを、宿の男の敎へて、辻とりをせよと申してせさするよと思ひ、あれ體の者をばすかさばやと思ひ、それはさる事も候はん、今はこれにては人目もしげし、わらはがさぶらふ所へ、訪うて入らせ給へとありければ、いづくにて候ふぞと問ひければ、てうしの言葉をかけ、それをふくせんその内に、逃げばやと思しめし、わらはが候ふ所をば、松の本といふ所にて候ふ。物くさ太郎是をきゝ、松の本とは心得たり、明石の浦の事。かゝるきたいの事はなし、是一つをこそ聞き知るとも、よの事は知らじと思ひて、たゞし日くるゝ里に候ふ

よけ道をして通れども、近づくものは更になし。あるひは十七八、二十よりうちの女房五人十人、うちつれ〳〵通れども、一目より外みざりける。かやうに立ちたる事、朝より其日の暮るゝまで、人數幾千萬と云ふ事なし。あれもわろし、是もわろしとためらひゐたる所に、女房一人出で來り、年ならば十七八かと見え侍り、形は春の花、翡翠のかんざしたをやかに、青黛のまゆずみは花やかにして、遠山の櫻に異ならず、嬋妍たる兩鬢は秋の蟬の羽に異ならず。三十二相八十種好の飽き滿ちて、金色の如來のごとし。踏みたる足のつまさきまでも、眉の愛敬とゝのへて、いろ〳〵の一重衣に、紅の千入の袴ふみしだき、うらなしうちはきて、たけに餘れるかんざしを、梅のにほひによせて、われに劣らね下女一人供に具してぞ參りたる。物くさ太郎是をみて、爰にこそわが北の方は出できぬれ、あつばれ疾く近づけかし、抱きつかん、口をも吸はゞやと思ひて、手ぐすねをひき、大手をひろげて待ち居たり。女房是を御覽じて、ともの下女を近づけて、あれは何ぞと問ひ給へば、人にて候ふと申しければ、あな恐しや、あのあたりをばいかにして通るべきぞとて、よけ道をして通りける。物くさ太郎是を見て、あら淺ましや、あなたへ行くぞや、手のびにしては叶ふまじと思ひて、大手をひろげて、つゝと寄り、いつ

たくらだ—愚人

さゆみ—さよみの轉訛、麻布の粗なるもの

れを聞き、いかなる者かおのれが女房になるべきと言ひて笑ひける。さりながらかれが言ふことにつきて言ふやう、尋ねんことは易き事なれども、夫妻といふ事は、大事の物ぞ、色ごのみ尋ねて呼べかし。いろ好みとは何事ぞ、いかなる物を申すぞと問ひければ、主(ぬし)なき女を呼びて、料足(れうそく)を取らせて逢ふ事を、色ごのみといふなり。其義ならばたづねてたび候へ、下り用意につかひ錢(せん)十二三文あり、是をとらせてたび候へと申しければ、宿の亭主は是をきゝ、扨も〳〵是程のたくらだは無しと思ひて、又いふ樣は、その義ならば、辻とりをせよといふ。辻とりとは何事ぞや。辻とりとは男もつれず、輿車(こしくるま)にも乘らぬ女房のみめよき、わが目にかゝるを取る事、天下の御ゆるしにてあるなりと教へければ、其義にて候はゞ取りてみんと申す。十一月十八日の事なるに、淸水へ參りてねらへと教へければ、さらばとて出でたつ。其日の有樣は信濃より年をへて著たりけるさゆみのかたびらの、何色とも文(もん)も見えぬに、藁繩帶にして、物くさ草履(ざうり)のやぶれたるをはき、吳竹の杖をつき、十一月十八日の事なれば、風烈しく吹きて、いかにも寒きに、鼻をすすりて淸水の大門(おほもん)にやけそとばの如く、立ちずくみにして、大手を廣げて待つところに、參り下向の人々是を見て、あなおそろしや、何を待ちてかやうにはあるらんとて、皆々

料足一錢

都へ上り、心あらん人にも相具して、心をもつき給はぬかと、やう〳〵に教訓すれば、物くさ太郎是を聞き、それこそ候ふなれ、その儀にて候はゞ、いそぎ上せてたび給へとて、出でたゝんとする。百姓ども皆々大きに悦び、料足をあつめて京へのぼせけり。是は信濃の國より參りたるながふにて候ふと申しければ、人々是を見て笑ひけり。あれ程色黑くきたなげなる者も、世にはありけるぞとて笑ひける。大納言殿は聞召し、いかやうにもあれ、まめにて使はれなば然るべしとて召しつかはれける。都にてのありさま、信濃の國にはまさりけり。東山、西山、御所内裏、堂、宮、社、面白くたつとさ、申すばかりなし。少しも物くさげなるけしきもなし。是程にまめなる者あらじとて、三月のながふを七月まで召しつかはれ、やう〳〵十一月の頃にもなりぬれば、いとまを給はりて國に下りなんと、此程の宿にかへり、我身を觀じて思ふやう、都へ上りたらん時は、よき女房にあひつれて下れなんどと言ひしに、ひとり下らんこと餘りにさびしからん、女房一人たづねばやと思ひ、宿の亭主を近づけて、信濃へ下り候ふ、しかるべくば我等がやうなるものの妻になり候はんずる女、一人たづねてたび候へと申しければ　宿の男はこ

みくじ—御鬮

かつう—且

心つく—心の勇み立つをいふ

くわん—官

もせで、地頭殿の通り給ふに、取りて給へといふ程の者なりと申しければ、ゝる人足を聞き、それ體の者をすかせば、よき事もあり、いざ寄合ひてすかして見んとて、おとなしき人四五人よりあひて、かれが許に行きて、いかに物くさ太郎殿、われらが大事のみくじに當りて候ふを助けてたべ。何事にて候ふぞと申しければ、ながふといふものをあたりて候ふ。それはいくひろばかり長き物にて候ふぞ、おびたゝしの事やと言ひければ、いやさやうに長き物にてはなし、わがやうなる百姓の中より、都へ人をのぼせてつかはせ參らするをながふとは申すなり、御身を此三年が間養ひたる情に、のぼり給へといひければ、それはさら〳〵殿ばらの志にあらず、地頭殿より仰せにてこそあれとて、上るべきやうなし。またある人申しけるやうは、かつうは和殿のためなり、それをいかにと申すに、男は妻を具して心つく、女房は夫にそひて心つくなり、かくていぶせき賤が伏屋に、只ひとりおはせんより、心つく仕度をし給はぬか、それいはれあり、男はみたびの晴業に心つく、元服して魂つく、妻を具して魂つく、くわんをして魂つく、または海道なんどを通るに、殊更心つくなり、田舎の人こそ情をしらぬ、都の人はなさけありていかなる人をも嫌はず、色ふかき御人も、互に夫妻と頼み頼まるゝならひなり、されば

あはぬは君の仰せ―無理なるは主君の命令といふ意にて諺なり

ながふ―長夫にて長期の人夫の意か

せ者かな、いでさらば助かるやうにせんとて、硯を取りよせて札を書きて、わが領内をまはす。此物くさ太郎に毎日三合飯を二度くはせ、酒を一度のますべし、さなからん者はわが領には叶ふべからずとふれられけり。まことに〳〵これぞあはぬは君の仰せかなとは思へども、かくの如くあるほどに、三年ぞ養ひける。三年と申す春の末に信濃の國の國司二條の大納言ありするゝと申す人、このあたらしの郷へながふをあてらる。百姓共寄りあひて、たがもとより誰をのぼせんぞ、遙にたえて習はぬこと、いかゞせんと歎く。ある人申すやう、いざ此物くさ太郎をしたてて上せんと言ひければ、思ひもよらず、もちひを大道へころばかし、おのれは立ち出で取り

くれ候はん—くれ候はぬの訛

もち候はん—もち候はぬの訛

鎌首もちあげて、のう申し候はん、それにもちひの候ふ、取りてたび候へと申しけれども、耳にも聞き入れずうち通りけり。物くさ太郎是を見て、世間にあれほど物くさき人の、いかにして所知所領をしるらん、あのもちひを馬よりおりて、取りてつたへん程の事はいと易き事、世の中に物くさきもの、われひとりと思へば多くありけるよと、あらうたての殿やとて、斜ならずつぶやき、腹をぞ立てにける。兵衛尉あらき人ならば腹をも立て、いか様にもあたり給ふべきに、馬をひかへて是を聞き、きやつめが事か、聞ゆる物くさ太郎といふものか。さん候ふ。ふたりとも候はゞこそ、是が事にて候ふ。さておのれはいかやうにして過ぐるぞ。さん候ふ、人の物をくれ候ふ時は、何をもたぶる、くれ候はん時は、四五日も十日ばかりも、たゞ空しく過ぎ候ふと申しければ、さては不便の次第かな、命たすかる仕度をせよ、一樹の影に宿るとも、一河の流れを汲むことも、他生の縁となり、所こそ多きにわが所領の内に生れあふこと、前世の宿縁なり、地をつくりて過ぎよとありければ、もち候はんと申す。さらば取らせんとあり。物くさく候ふ程に地もほしからず候ふと申せば、商をして過ぎよとあれば、もとで候はずと申す。取らせんとありければ、今更習はぬ事、知らぬ事、成りがたく候ふと申せば、さてはかゝるく

ふるにも、日の照るにも、習はぬすまひしてゐたり。かやうに作りわろしとは申せども、あし手のあかがり、のみ、虱、ひぢの苔にいたるまで、足らはずといふ事なし。もとでなければ商ひせず。物を作らねば食物なし。四五日のうちにも起きあがらず、ふせりゐたりけり。

ある時なさけある人の、もとあいきやうのもちひを五つ、いかにひだるかるらんとて得させければ、たまさかに待ち得たる事なれば、四つをば一度に喰ひ侍り。今一つを心に思ひけるやうは、ありと思ひて喰はねば、のちの頼みあり、無しと思へばひだるくなれども頼みなし、まぼらえてあるも頼みなり、いつまでも人の物をえさせんまでは、もたばやと思ひて、寝ながら胸の上にてあそばかして、鼻油をひきて、口にぬらし、頭にいたゞき、とりあそぶ程にとりすべらかし、大道までぞころびける。その時物くさ太郎見渡して思ふやう、取りに行きかへらんも物ぐさし、いつの頃にても、人の通らぬ事はあらじと、竹の棹を捧げて、犬烏のよるを追ひのけて、三日まで待つに人みえず。三日と申すに、たゞの人にはあらず、その所の地頭あたらしの左衛門の尉のぶよりといふ人、小鷹狩まじろの鷹をすゑさせて、其勢五六十騎にてとほり給ふ。物くさ太郎これを見て、

ひぢの苔―肱の垢をいふ

もと―まへかどの意

小鷹狩―小鷹狩にの衍か

物くさ—無精者

しゆてん—主殿か

物くさ太郎

東山道陸奥の末、信濃の國十郡のその内に、つるまの郡あたらしの鄉といふ所に、不思議の男一人侍りけり。其名を物くさ太郎ひぢかすと申し候ふ。名を物くさ太郎と申す事は、國にならびなき程の物くさしなり。たゞし名こそ物くさ太郎と申せども、家づくりの有樣、人にすぐれてめでたくぞ侍りける。四面四町に築地をつき、三方に門を立て、東西南北に池を掘り、島を築き松杉をうゑ、島より陸地へ反橋をかけ、高欄にぎぼうしを磨き、まことに結構世にこえたり。十二間の遠侍、九間のわたり廊下、釣殿、細殿、梅壺、桐壺、籬が壺にいたるまで、百種の花をうゑ、しゆてん十二間につくり、檜皮葺にふかせ、錦をもつて天井をはり、桁うつばりたる木のくみ入には、白銀黃金を金物にうち、瓔珞の簾をかけ、厩さぶらひ所にいたるまで、ゆゝしく作り立てて居ばやと、心には思へども、いろ〳〵事足らねば、たゞ竹を四本たて、薦をかけてぞ居たりける。雨の

物くさ太郎

たは歌の道淺かざりし故なれば、かへすぐ人毎に學び給ふべきは歌の道なるべし。

ながめ—詠じ

思ひ内にあれば云々—諺

倉の内の財云々—實語敎に「倉内財有朽、身内才無朽、雖積千兩金、不如一日學」

とながめ給へば、保昌聞き給ひて、色をなほして言ひけるは、はだへを溫め、ことに女の顏色をます藥魚なれば、用ひ給ひしを咎めしことよとて、それよりしてなほ〱淺からず契りしとなり、しかれば此心はめづらしかるべしと思ひめぐらして、案じ煩ひしほどに、いわしといふ寢言も申しつらん、あらむつかしの咎言や、今は何と問ひ給ふとも、返事をも申すまじと言ひければ、螢火其時おもふやう、まことの鰯賣ならば、かやうにさま〲の歌の道をばよも知らじ、げにや宇都宮はじめて上洛し給ひつれば、殿中の御ことばにまじはり給ふこと一大事と、思ひ内にあれば、色ほかに現れ、かやうに寢言をし給ふらんと、いとことわりに思ひなほして、互に下紐うち解けて、比翼連理のかたらひ淺からず見えにける。これと云ふもなあみにつかはれ、常に歌の道に心がけしゆゑ、當座の恥を隱すのみならず、及ばぬ戀の本意をとげし事、ひとへに物を知りたる威德なり。されば孔子のいはく、倉のうちの財はくつる事あり、身のうちの財はくつることなしとありしこと、今こそ思ひ知られけれ。さても宇都宮そののちは鰯賣の名をあらはし給へども、高きも賤しきも戀の道にへだてなければとて、阿漕が浦へうちつれて下りつゝ、富み榮えて子孫繁昌なりしも、たがひの志ふかきゆゑ、ま

当座―即席の歌詠

陳じ―辯解し

なごりをりの云云―百韻連歌の最終の紙の裏へかゝる處

御參詣のをりふし、猿澤の池を御見物ありしに、いにしへの釆女が身を投げし事をおぼしめし出でて、當座など遊ばして、御とぶらひありし時、よみ人しらず、

猿澤の池の柳やわきもこが寢みだれ髪のかたみなるらん

とよみ侍りし其心を思ひよせ案じければ、猿源氏などと寢言申しつらん、あらむつかしや、とく〳〵寢させ給へと申しけり。螢火又申すやうは、それのみならず、鰯かうえいとの給ひし寢言はいかゞ陳じ給ふべきぞやと言ひつゝ、をかしさに螢火から〳〵と笑ひければ、其時は宇都宮赤面して、既に鰯賣に極まらんとしけるが、心を沈めて申すやう、さやうの寢言をも申しつらん、連歌やう〳〵なごりをりのうら返しめと思しきに、

男山なにをいのりのいはし水

といふ句あり、人々の付けふるしは面白からず、只今申すごとく、和泉式部いわしと申すうをを食ひ給ふ所へ、保昌來りければ、和泉式部はづかしく思ひて、あわたゞしく鰯をかくし給へば、保昌みて鰯とは思ひよらず、道命法師よりの文をかくし給ふと心えて、何を深くかくさせ給ふぞや、心もとなしとて、あながちに問ひければ、

日の本にいはゝれ給ふいはしみづまゐらぬ人はあらじとぞ思ふ

しやうがい―生害か
中のきさき―未詳
きやう―未詳

しやうがいをのがれけるも、道命、和歌の道心得たりし故なり、此心もちをもつて思ひしことをば、此心をめづらかに付けばやと思ひて、案じ煩ひし程に、はしといふ寐言も申すべしと言ひければ、螢火それもさうあるらん、猿源氏といふ寐言はいかにといへば、宇都宮きゝて、さやうの事も申すべし、さるほどに中のきさきに參りければ、神祇、釋敎、戀、無常、述懷、きやうに至るまで、心をくばりし折ふしに、

うらみわびたる猿澤の池

といふ句あり、これは昔あめのみかどの御時、采女といひし女に淺からず契り給ひし程なく思しめし捨てさせ給ひしを、采女うらみ奉り、夜半にまぎれ立ち出でて猿澤の池に身をなげ、空しくなりければ、みかど世に悲しく思しめし、いそぎ猿澤の池に御幸ありて、すなはち采女が屍骸をさがし、取りあげさせ給ひて、御覽あれば、さしもいつくしかりし翡翠のかんざし、嬋娟たる鬟、かつらのまゆずみ、柔和の姿引きかへて、池の藻屑とりつき、かはりはてたる有樣を御覽じて、かたじけなくも、みかど、

わぎも子が寢亂れ髮を猿澤の池の玉藻と見るぞかなしき

と御とぶらひの御歌なり、かの句は此歌の心をまねびける、そののち源氏春日大明神へ

さゝやき―原本「さゝき」とあり一本によりて補ふ
ふるまひて―ふるみてにて付けふるしたりとの意

みちのくのさゝやきの橋中たえてふみだに今はかよはざりけり

熊野なるおとなし川に渡さばやさゝやきのはし忍び〳〵に

とあり、此二首のうちを取りて付けばやと思ひしが、いや〳〵これは都の上手衆のつけふるまひて、めづらしからず、こゝに和泉式部と申す女に、保昌といふ人通ひはんべりて、淺からず契りしに、又道命法師といふもの通ひて契をこめしに、保昌此事をきゝて、和泉式部にいはく、わがいふ如く文をかき給へといへば、和泉式部はいかなる文をかけとはのたまふぞやと有りしかば、保昌も此程は見え候はず、御身は急ぎこし給へ、道命法師へまゐる、和泉式部と書き給へとありければ、和泉式部は顔うちあかめて、これは思ひもよらぬ事をのたまふものかなとありければ、力およばずして、文をかゝれけるが、いつのひまにかしたりけん、箸を五つに折りて、文にそへてやりけり、道命法師此文を見て、不思議やな、只今きたれと書かれけるが、はしを五つに折りて添へし事の不思議さよ、ある歌に、

やるはしをまことばししてきばししてうたればししてくやみばしすれ

といふことあり、一定此心なるべし、さては保昌ゐたまひて、かくなんと悟りて行かず、

いぬ、かさかけ、しゝ、まるもの―犬、笠懸、草鹿、丸物の射藝

ば、われは宇都宮の彈正とこそ申し侍れ、鰯賣といふ名は知らず候ふ、今こそきゝ侍れと申せば、螢火思ふやう、一度にいはゞ、あまり恥がましかるべしとて、一つづゝ問はれけるに、まづ阿漕が浦の寐言はいかにと申しければ、宇都宮申せしは、其事にて候ふ、それがし上洛は、此度がいまだ初めにて候へば、かたじけなくも御所樣御諚にて、何にても宇都宮を慰めよ、いぬ、かさかけ、しゝ、まるものの遊びはめづらしからず、常世人のもてあそぶは、詩歌連歌の道なり、ことに宇都宮は歌の道すきなるよし聞きたり、それそれとありしかば、佐々木四郎、はんかい四郎左衞門うけ給はり、天下の宗匠へ案内申し、各連衆まゐられけり、執筆は德大寺殿の御舍弟、十三にならせ給ふ御ちご、靑蓮院殿の御弟子にて、手跡世にこえ給ふ、既に將軍御發句をいだされければ、それより次第に、おの／＼あそばし、一順もすぐるをりふしに、「いとまあらずも鹽木とる浦」といふ句ありしに、「しほきとる阿漕が浦にひく網もたびかさなれば露れぞする」といふ歌の心をつけばやと、くりかへし／＼案ずるまゝ、あこぎの浦といふ、寢言も申しつらんと陳じければ、それのみならず、はしといふ寢言はいかにといひければ、その事にて候、「渡りかねたるかくれがのはし」といふ句ありしに、ある歌に、

うへなしげ—上に憚る氣色なき

ねのび—寢伸

宇都宮かほ—宇都宮がかほの衍か

かば、さま〴〵慰めけり。螢火心に思ふやう、あら不思議や、宇都宮は大名とこそ聞きしにちがひ、家の子、又は同苗(どうみやう)などもなくして、たゞ一人座敷にいで、よろづ賤しき有樣にて、内の者どもは聲高にして、うへなしげなる事のをかしさよと思ひ、しばしうちも寢入らずして、案じ煩ひしをりふし、宇都宮酒に醉ひ、さ夜ふけねのびして、大あくびをするまゝに、寢言に阿漕が浦の猿源氏が、鰯かうえいと言ひければ、螢火是を聞き、さればこそ初めより何とやらんをかしげに見えしが違(たが)はず、鰯賣にちぎりしことの悲しさよ、さてこれは何となり行くべきぞ、此事かくれあるまじければ、鰯賣に契をこめし心のほどきたなさよ、なまぐさやとて、召さるゝ人もあるまじければ、髪おろし、是よりいづくへも足にまかせて行かばやと思ひつゝ、さめ〴〵と泣く涙、宇都宮かほにかゝりければ、時雨(しぐれ)がすると心得、やれ〳〵雨がふるさうな、子ども苫をふけと言ひもあへず、起きなほりてあたりを見れば、かゞやくほどの女房の、さめ〴〵と泣きゐたり。はづかしや、淺ましや、まさしく寐言をしつると覺えて申すやう、今の沈醉(ちんすゐ)に正體(しやうたい)もなく醉ひ伏し、何事を申したるも知らず候ふ、何とていね給はぬぞや。螢火きゝて、何事をのたまふぞや、御身は鰯賣にてましますぞや、とにかくに恕しきはなあみなりと言ひけれ

いうくー悠々

本ー元手

螢火まぎれや、かほどに多き螢火なれば、一定盃をさし損ずべし、さし損ずるものならば、笑はれ候はん事の口をしかるべしと思ひ亂れ、彼是見まはしける中に、いうくとしたる遊君に盃をさしければ、螢火にてぞありける。螢火時の興をもよほし、めづらしの御盃さふらふやとて、取りあげて次第にめぐらしければ、のこりの君ども是を見て、あなうらやましの螢火かな、今より後のすて盃、さゝれても詮なしとて、座敷をたちし遊君もあり、居殘りてもてはやすもあり。その時なあみ申すやう、いかに宇都宮殿、洛中は日くれぬれば、小路物騒に候ふ間、まづく御歸りなされ、あすまた必ず御いで候へと申しければ、宇都宮まことにことの外のおほ酒にて、たちばを忘れて候ふ、いとま申さん人々とて、宿へこそ歸りけれ。なあみはやがてきたり給ひて、さても宇都宮はよくもしあはせたるものかな、さりながら夕さり螢火來るべし、座敷よろづあるべきやうにこしらへて待つべし、又つかふ者ども醉ひたりしまぎれに、問はず語りをして、われも鰯を賣りそこなうた、われもけふは本を失うたなどと言はせては、恥がましかるべし、又寢言などして、いやしき風情をしては淺ましかるべしなどと、ねんごろに言ひ敎へて、なあみは宿へ歸りけり。案のごとく螢火たそがれ時に、宇都宮殿の宿とたづねて來りし

こうろぎの盃ー黒漆にてこうろぎ色の盃

とて、鐙に取りつきければ、かのにせ宇都宮馬よりゆらりとおりて、仰せのごとく内々は、それへおとづれ申さんと存じ候ひつれども、とかくまかり過ぎ、ことさら出仕などの様體をも談合申さんと存じ候へば、急ぎまかり出づべきよし仰せいだされ、一兩日以前に出仕申して候ふ、無沙汰のいたり、御ゆるしあれ、必ず御宿所へまゐりて申すべしとて、馬ひき寄せて乘らんとせし處に、螢火、薄雲、春雨とて、その外の遊君十人ばかり立ち出でて、いかにや〳〵、情なくもまのあたりを通らせ給ふとて、打過ぎんとし給ふぞやといひて、袂にすがりつゝ、座敷へ手をひかれ、心ならぬ風情にて、座敷へ入りにけり。かくて宇都宮思ふやう、あら恥しや、思はずや、われ洛中をめぐり、鰯賣りし有樣、ひきかへたるさまかなと、思ふにつけても、なあみの心のうちこそ恥かしけれ。

さるほどに亭主は、物のひまより宇都宮をつく〴〵と見て、さても宇都宮は遠國ざぶらひなれども、器用骨柄尋常なる人かなと感じけり。さてあるじは蒔繪の盤にこうろぎの盃をすゑて、いかにや宇都宮殿、一つきこし召されて、たれにも御心ざしある方へさし給へと申しければ、宇都宮たぶ〳〵と受けて、心に思ふやう、われに心をつくさせける螢火とやらんは、いづれならんと見るに、いづれも螢火に劣らぬ遊君どもなれば、あら

れらも關東にてまゐり逢ひたる人にて候ふまゝ、定めておとづれ給ふべし、上洛は一定にて候ふまゝ、其時わがみ出であひで、ない／＼御上洛の事うけ給はり候ふゆゑ、御宿を申しつけ候ふまゝ、こなたへ御入り候へとて、請じ入れまゐらせんまゝ、その支度を御こしらへ候へ、座敷などの御掃除、また大軍にて候はんまゝ、小姓、若黨、道具持、その外家來の者までも、みな／＼入れ申す所など、假屋なりとも御たて候へよ、其上座敷の飾物、なに／＼御こしらへおき候ふや、御馳走のしな／＼をいかにも結構めされつつ、御慰めの人々はたれ／＼にてや候ふらん。其時亭主申すやう、いかやうにも、なあみ頼み申すうへは、女房どもどれ／＼かとて、物ごとにこれらをも御見立て候ひて給はり候へとて、三十人ばかり出でたゝせて、なあみに見せ候へば、なあみこれを見て、いづれもうつくしく候へども、其内を十人えり出だし申す所に、門のほとりを見れば、廿二三ばかりなる男子、月毛の馬に梨地の蒔繪の鞍おかせ、白木の弓のまん中にぎり、腰より蟇目をいだし、犬を追ひつめ駒を引きかへす所を、なあみやがて申すやう、宇都宮殿とこそ見申して候へとて、はしり出でて見れば、件の宇都宮なりければ、なあみ いかにやいかに宇都宮殿と見申して候ふ、亭主のうらみも候はんに、まづ立ち寄らせ給へ

おとな―家老

公方―將軍

殿のみうちに、親類をもちて候ふほどに、かの殿のふだんの行儀を委しく知りて候ふと申せば、なあみ、さては事とゝのへり、さりながら宇都宮は大名なれば、殿原、小姓、同朋、其外小者中間にいたるまで、次第々々の人なくしては成るべからずとの給へば、それは御心安くおぼしめせ、鰯賣の傍輩二三百人もさふらふ、彼等をそれ〴〵に出でたゝせ、さぶらひにも、小者にもなし申すべし、われらが東隣の六郎左衛門と申す人は、よき人物なれば、これをおとなになし申すべしと申しければ、なあみ、もつともとぞ申しける。さるほどに猿源氏は、まづ五條へ行きて申すやう、宇都宮殿は上洛とて、近江の國鏡守山に宿をとり給ふと、風聞させければ、宇都宮殿大名なれば、京中の遊君ども定めておとづれあるべしとて、座敷を飾り心待ちしてゐたり。さる程に又二三日すぎて、猿源氏五條あたりにて申す樣、宇都宮ははや京入し給ひて、既にけさ公方樣へ出仕なりと風聞させて、なあみはまづ螢火がもとへ行きければ、亭主出であひて、何とて此程は久しく御尋ねなされ候はぬぞや、只今はいづくへの御通りに候ふか、さだめて御道たがひならんと、戯れつゝ、はや若き女房十人ばかりいだし、盃をひかへ、主申すやう、誠やらん、宇都宮どの御上洛と風聞候ふが、いかゞと尋ねければ、その御事にて候ふ。わ

きんないー畿内

ぞや、それは皆々主(ぬし)をたれと、そのあり所を知りての戀なり、汝が戀はたれとも知らず、其すみかも知らずして、五條の橋にてかりそめに行きちがふとて、簾(みす)のひまよりちらと見たりし人を、虚空(こくう)をさす如くなる戀をする物かなとのたまへば、猿源氏申すやう、人にたづねて候へば、五條の東の洞院に螢火(けいぐわ)と申す上臈にておはしますと敎へ侍ると申しければ、なあみ聞き給ひて、それこそ洛中にかくれなき遊君にて、日のくるれば、光りかゞやく女なれば、螢火(けいぐわ)と名づけたり、けいぐわとは、螢火(ほたるび)と書きたり、たゞし公家門跡などの御娘ならば、いかなる量見もおよぶべかりしが、これは流れをたつる川竹の遊女なれば、大名高家よりほかへは出でず、汝は洛中をまはり、隱れもなき鰯賣なれば何としてか引きあはすべき、所詮大名のまねをせよかしとありければ、猿源氏かしこまつて、われ〳〵もさやうに、かね〴〵思ひ候ふと申しければ、なあみの給ふは、ふゑい、細川、畠山、一色、赤松、土岐、佐々木、これらをはじめきんない近國の大名は、不斷(ふだん)知りたる事なれば似せがたし、關東ざぶらひには宇都宮の彈正どのは、いまだ上洛なし、しかも近きうちに在京あるべきよし聞きてあれば、よき仕合なり、宇都宮のまねをして見よかしとの給へば、猿源氏申しけるは、われらもさやうに存じ候ふ、その子細は宇都宮

孝養―供養の意

九泉―冥土

ぬきがたな―抜きたる刀

戀のゆゑならず―下にやの字脱落か

ひければ、天女のたまふは、御身に靡き候へば、貞女の法をそむく、又いなと申せば人の怨を被るといひ、既にはや御身空しくならんとのたまへば、思ひわけたるかたもなし、所詮只おもふ事あり、只今夫をもちながら、御身に靡くこともいかゞなり、さほどに思ひよる事ならば、つまの左衞門を殺し給はゞ、其後は淺からず契りなんとありしを、まことと思ひ、御身を討つと心得て、かやうにたばかられしことの口をしさよ、急ぎそれがしが首をうたせ給ひて、天女の孝養にもし給ひて、御身の胸の炎をも消し給へといひて、首をさしのべ待ちければ、左衞門あまりの無念さに、既に討たんとしたりしが、中にて心をひきかへし、いかに盛遠殿、御身を討ちたればとて、天女がかへるべきにあらず、其うへ九泉にかゝりし女なれば、わが菩提を弔はずば、たれかは跡を弔ふべき、助け參らすとて、そのぬきがたなにて元結をきり、墨染の身をやつし、天女御前を弔ひけり、盛遠もやがてそこにて元結をきり、天女の菩提をとはんとて、同じ様にぞなりにける、盛遠は十九、左衞門は廿にて、もんしやうと名をつき、盛遠は文覺といひて、かくれなき智識となり給ふ、すなはち一目見し戀のゆゑならずと申しければ、なあみ此由聞き給ひ、汝はさて、たれやの人か言ひしを聞きて、さやうなるたとへどもをば申しける

朱にそめて―朱にそみてとありたし

天女御姿―天女の御姿の衍か

あり、盛遠腰の刀をひきぬき、首を打落したりと思ひつゝ、しのびて宿にかへる、さるほどに天女の夫の左衛門は、目覺めてあたり見れば、天女はなし、不思議さよとて、一間所へゆきて見れば、天女は空しくなり、朱にそめてぞ臥しにける、左衛門あまりの悲しさに、屍骸に抱きつき、さてもこれは天女かや、いかなる者のしわざなりとも、うつつにも知るならば、かく憂目にはあはせじ物を、夢かやうつゝかと、流涕こがれ悲みけり、盛遠此由きくよりも、あら不思議や、左衛門をこそ討ちたりしか、天女といふこそ不思議なれ、もし天罰もあたり、天女を殺したるも知らずとて、行きて見つれば、疑ひもなく天女にてありける、盛遠心におもふやう、天女にたばかられし事の口をしさよ、腹を切らんと思ひしが、待てしばしわが心、夫の左衛門が心のうち、おし量られてあはれなり、死せん命を左衛門が手にかゝり死なばやと思ひて、盛遠は天女の首をもちて、左衛門が所へゆきて、いかに左衛門どの、心をしづめて聞き給へ、天女御前をば某が手にかけ殺し申し候ふ、その子細は過ぎにし頃、難波の橋の供養の時、天女御姿を一目みしより戀となり、ある時不思議のたよりに、われ〳〵が申すやう、夢ばかり枕をならべてたび給へ、さもなき事ならば、御身故何か命を惜しかるべき、爰にて空しくならんとい

易きあひだ―易き程といふに同じ

が夫の左衛門を討ち給へ、さもあらば御身と二世までの契をこむべし、只今かりの枕をならべなば、後の思ひものこるべし、さもなく左衛門をおきながら、御身になびく物ならば、貞女の道もちがひ、夫をうちての後は、心やすく契るべしと、ことこまやかに語りければ、その時盛遠よろこびて、さては左衛門を討ちなば、われに靡き給ふべきと、天や、それこそ易きあひだの事なれ、さりながらいかにして討つべきぞと言ひければ、天女の給ふは、酒を強ひて醉ひ臥したる所を、一間所へ忍び入り、うたせ給へと約束し、天女は宿へ歸りける、心細くおぼえて、御身にいつまで添ひたてまつらんなどと語りければ、左衛門は何となく胸うちさわぎ、尼御前の風の心ちはいかゞ御入り候ふや、さ月おめ降りつゞきて、時鳥の鳴くをりふしは、たれもさやうに物さびしく心細きぞかし、いざ〳〵慰まんとて、かずの肴を調へさせて、互に盃とりかはし、さ夜もなかばになりぬれば、袖に袖をとりちがへ睦じげにぞ臥しにける、左衛門は酒にゑひふし、前後もしらず臥しゐたり、その時天女静に起き、左衛門が小袖をとり、天女これを著給ひて、左衛門が姿をまねびて臥したりけり、盛遠は約束の如く、宵より忍び入りて、一間所を見ければ、油火かすかにかき立てて、左衛門とおぼしくて、前後もしらず臥して

まゐられ給ふ—まゐらせ給ふの衍なるべし

母のぎ—母の義にて、命令の意か

もなるべければ、申し上げ候ふ、すぎにし頃、難波の橋の供養のありし時、御身の娵天女御ぜんを一目み參らせしよりも、御おもかげ忘れがたくて、かやうに成りゆき候ふ、せめて此門のほとりに佇みなば、もし天女御前をも見奉ることもやと語りつゝ、われ空しくなり候はゞ、天女の君にかくと傳へてたび候へと語りければ、尼御前このよしを聞き給ひて、こはそも淺ましや、我子に人の思ひをかけしとすれば、貞女の法に背く、又はてなば長き怨を歸すべし、いかゞせんと思ひ煩ひ給ひしが、いや〳〵ものの命をたつ事は、ことに佛の戒め給ふなり、死して二たびかへらぬ冥途黃泉の路ぞかし、人を助くるは菩薩の行なりとおぼして、俄に尼御前風の心地のよし告げしらせ給へば、天女御ぜんは取るものも取りあへず、輿をはやめて來り給へば、尼御前はいそぎ盛遠を一間所へ忍ばせ入れおきて、天女御前をおなじ所へ入れまゐられ給ふ。盛遠ゆめの心ちして、はじめよりの事どもをこま〴〵と語りければ、天女は此由きこしめし、こはそも何とゆふがほの露とも消えばやとおぼしけるが、又引きかへし思ふやう、待てしばし我心、母の仰せに從へば貞女の法をそむく、母のぎを背けば不孝のいたり淺からず、とかく詐らばやとおぼしめし、いかに盛遠殿きこしめせ、げにみづからに御心をよせ給はゞ、みづから

覧じて、

たが世にか種をまきしと人問はゞいふゞいはまの松はこたへん

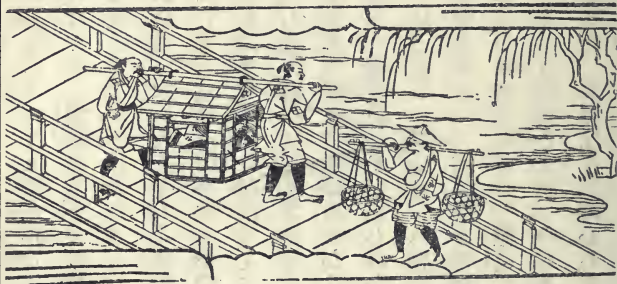
とあそばし、其後は御おとづれも無かりしかば、女三の宮御樣をかへさせ給ふ、右衛門督は、其思ひのつもりにや、やがてはかなくなり給ふと、源氏物語に見えたり、それのみならず、一とせ難波いり江に橋の供養ありし時、渡邊左衛門盛遠は、時の奉行にてありしが、貴賤群集してかの供養を聽聞しける中に、苫屋形をしたる舟一艘、供養のきはまで漕ぎよせて、聽聞し侍るに、をりふし浦風はげしくて、下簾ふきあげける、そのひまより簾の内の上﨟を一目みしより戀となり、都へも上らず、それよりすぐに男山にまゐり、難波の浦にて見そめし人の行くへ知らせてたび候へと、祈誓を申しければ、かたじけなくも八幡枕上にたち給ひ、汝が戀ふる女は鳥羽の尼御前といふものの娘に、天女とて渡邊の左衛門が妻女なりしと教へ給ひて、夢は醒めぬ、それよりも鳥羽の尼御前の家の門のほとりに、ひれ臥して居たりければ、尼御前御覧じて、これはいづくより、いかなる人にて、何故わらはが門にうち臥し給ふぞと、たづね給へば、盛遠苦しげなる息をつぎ、その御事にて候ふ、恥しき申しごとに候へども、このまゝ消えなば冥途の障と

腹の中よりこま〴〵と書きたる文いでにける、君御覽じて、いとあはれに思しめし、かたじけなくも、雲居をすべらせ給ひ、かの魚賣に契をこめ給ひしとなり、さればその心をある歌に、

いにしへはいともかしこき堅田鮒つゝみ燒きたる中のたまづさ

とよみしも、魚ゆゑの事ならずやと申しければ、なあみ聞き給ひて、さても汝はたとへを申すものかな、さりながら、それは御立姿までよく見ての戀、たゞ一目みての戀はおぼつかなしとの給へば、猿源氏申すやう、一目みての戀したるためし、われに限らず、源氏の大將は女三の宮を御寵愛ありしに、程なく思しめし棄てさせ給ひ、葵の上に御心をうつさせ給ふ、源氏いかゞと思しめしけん、ある夕暮に、みやの車をやり入れさせ給ひて、鞠をあそばしける、御つめには柏木の右衞門督參り給ふ、女三の宮は、みす近うかけさせ、鞠を御覽ありしに、其頃猫を御寵愛ありしに、あけの綱にてつながせ給ひしが、折ふしかゝりへかけ出でんとせし程に、猫の綱にてみす上げければ、其隙より右衞門督、女三の宮を一目み給ひしより、心もそらになり給ひて、風の便に玉章を參らせ給へば、御返事ありて、其後は互の御心あさからず、あまつさへ御子いでき給ふ、源氏此若君を御

みやの―みやへか

あけの綱―あけは赤色

戀をしたりといふためしいまだ聞かず、かまへて〳〵風聞すべからずとの給ひける。猿源氏申しけるは、これは御詞とも覺えぬものかな、魚賣の戀をしたるためしには、近江の國に堅田の浦より、鮒といふ魚を都にて賣りしに、あるとき内裏へもちてまゐりしに、折ふし今出川の局と申す上﨟を拜みまつり、肝も魂も消えはてて、あまり思ひやまさりしに、御まへの女房たちを賴みまゐらせて、まことに賤の身として、恐れ多き申し事にて候へども、此魚を今出川の君さまへ奉り候ふまゝ、燒かせ給ひて參らせられ候はゞ、いかばかりかたじけなく思ひ奉らんと申しければ、下﨟の身としてやさしき心ざしかなとて、かの鮒を燒きて參らせければ、鮒の

あらぬかぎり―あらんかぎりの

ふと〳〵―いたく、甚しく

し、一首、

わればかり物思ふ人は又もあらじと思へば水のしたにも有りけり

と、ふるき歌など思ひ出だし、又かくなん、

命あらば又もやめぐり見もやせん結ぶの神のあらぬかぎりは

とよみ、淺ましき有樣、天命不定に見えにけり。なあみだぶ、此由きゝ給ひて、かれが宿へゆき、ありさま見給ひて、「それ病といふものは、寒熱二つより起りて、五體を苦むるなり、汝が氣色は何とも見分けず、たゞふとく物を思ふと見えたり、いかにもして養生すべしと、ねんごろにの給へば、猿源氏おもふやう、此人と申すは、才學世にこえたりし人なれば、此事を語りなば、いかなる量見もありやせんと思ひ、申すやう、かやうの申し事、間柄にこそより候へ、はづかしき申し事にて侍れども、申さずして果てなば、妄執ふかき身となるべければ、恐れながら申すなり、わたくし不慮に戀といふ病にをかされてこそ候へ、いつぞや鰯をになひ候て、五條の橋を通りしに、網代の輿にゆき合ひしが、輿のうちなる上臈を一目見しより、その面影忘れかね、かりそめながらかやうになり候ふと、恥をすてて語りければ、なあみ聞きて、から〳〵とうち笑ひ給ひ、鰯賣の

猿源氏草子

鰯かうえい｜鰯買へといふ賣聲

中頃の事にやありけん、伊勢の國阿漕が浦に鰯賣一人あり。もとは海老名の六郎左衛門とて、關東ざぶらひにてぞありける。妻におくれて娘を一人もちたりしを、日頃召使ひける猿源氏といふものに取らせて、すなはち鰯賣の職をゆづり、わが身は都へのぼり、もとゆひ切り、えびなのなあみだぶつとて、隱れなき遁世者にぞありける。大名高家近づけ給へり。さるほどに婿の猿源氏鰯賣、都へ上りて、洛中を伊勢の國に阿漕が浦の猿源氏が、鰯かうえいといひて、商ひければ、人々これを聞きて、面白き鰯賣かなとて、人人買ひとる間、猿源氏、程なく有徳の身となりにけり。猿源氏鰯賣るとて、五條の橋をわたりしが、折ふし網代の輿に行きあひしが、川風はげしくて、下簾をばつと吹きあげたる其隙より、輿の内の上臈を一目みしより戀となり、あけくれ思ひ煩ひて、心もそぞろに成りはてて、明くれば五條、暮るれば橋へ出でて、商賣更に身にしまずうちふ

猿源氏草子

のためになるとかや。大しう親を深くあはれみける故に、大王の御位になり給ふ。ありがたき事なりけるためしなり。

とうせん―前にはとうこうせんとあり、案ずるにとうせんは東山、とうこうせんは東皐山か

は、たびらこといふ草、丑の時には佛の座といふ草、寅の時にはすゞなといふ草、卯の時にはすゞしろといふ草をうちて、辰の時には七種の草を合せて、東の方より岩井の水をむすびあげて若水と名づけ、此水にて白鵞鳥の渡らぬさきに服するならば、一時に十年づゝの齢を經かへり、七時には七十年の年を忽ちに若くなりて、その後八千年までの壽命を汝親子三人へ授くるなりと、敎へ給ふぞありがたき。大しう大きに喜び、とうせんより立ちかへり、をりしも頃は新玉の元日より、この草をあつめて、父母にこそ與へける。すでに正月七日には二人の親の御姿を見奉れば、忽ち二十ばかりに經かへりけり。大しうこれを見て、喜ぶこと限りなし。七草を正月七日に、みかどへ供ふる事は、この時より始まれり。又若菜、若水などといふことも、このいはれなるべし。さるほどに此事天下にかくれなし。帝も叡聞ましまして、世にたぐひなき事なりとて、いそぎ大しうを雲上へめされ、長安城のみかどの御位を、大しうにゆりづ給ふ。これすなはち親に孝あるゆゑなりと、聞く人殊勝にありがたく、皆感涙をもよほしけり。正月に筋もなき者を位になし給ふを、あるためしといふ事あり。これもこの時より始まれり。今の世までも、親孝行の人は天道の惠にあづかるべし。必ず人をあはれめば、其報早くしてわが身

りんしんかいほ
ん―りんしんは
龍神の訛なるべ
し、かいほんは
考へ得ず

つての給ふやうは、汝淺からず親をあはれみ、偏に天道に訴ふる事、上は梵天帝釋上品上生、下はりんしんかいほんまでも、納受を垂れ給ふによつて、われこれまで來るなり、いでく汝が親を若くなさんとて、藥を與へ給ふぞありがたき。しかるに須彌の南に白鵞鳥といふ鳥あり、かの鳥の長生をする事八千年なり、この鳥春の初ごとに、七色の草を集めて服するゆゑに、長生をするなり、白鵞鳥の命を、汝が親の命に轉じかへて取らせん、七種の草をあつめて、柳の木の盤にのせて、玉椿の枝にて、正月六日の酉の時より始めて、この草をうつべし、酉の時には芹といふ草をうつべし、戌の時には薺といふ草をうち、亥の時には、五形といふ草、子の時に

七草草紙

そも〲正月七日に野に出でて、七草をつみて、みかどへ供御に備ふるといふなる由來を尋ぬるに、もろこし楚國のかたはらに、大しうといふ者あり。かれは親に孝あるものなり。既にはや百年に及ぶ父母あり、腰などもかゞみ、目などもかすみ、言ふことも聞えず。さるほどに老いければ、大しうこの朽ちはてたる御姿を見まゐらするたびに、歎き悲むこと限りなし。大しう思ふやうは、二人の親の御姿を、二たび若くなさまほしく思ひて、あけくれ天道に禱りけるは、わが親の御姿ふたゝび若くなしてたび給へと、佛神三寶に訴へ、これ叶はぬものならば、わが姿に轉じかへてたび給へ、わが身は老となりて朽ちはつるとも、二人の親をわかくなし給へと、あたり近きとうこう山によぢ上りて、三七日が間つまさきをつまだてて、肝膽を碎き祈りける。さても諸天諸佛は、これを憐み給ひ、三七日滿ずる暮方に、かたじけなくも、帝釋天王は天降り給ひ、大しうに向

七草草紙

只この御別れのみ歎かせ給ひけり。かやうにして年月を送り給ふほどに、若君はとりどり繁昌させたまひ、する繁昌と聞え給ふ。さるほどに、かの庵室には都の事のみ戀しくてすごし給ふ。さりながら若君の御榮えよそ〳〵ながら見給ひて、嬉しさかぎりなし。若君はいよ〳〵峯に上り、花を折り、谷の水をむすび、少納言もろともに彌陀の名號唱へ、行ひすまし給ひけり。かゝる畜類だにも、後生菩提の道を願ふならひなり、いはんや人間としてなどか此道をなげかざらん。かやうにやさしき事なれば、書きつたへ申すなり書きつたへ申すなり。

われこそ—汝こそ

しくて、さら〳〵浮世に御心もとまらず、樣をかへさせ、菩提の道に入らんと案じ、又こはたの塚を立ちいでて、嵯峨野のかたへ分け入りて、庵室を結び、みどりの髪を剃りおとし、この世は假の宿、電光朝露ゆめまぼろしの事なれば、今此時生死輪廻を免れ、未來は必ず一つはちすの臺に生れんと願はれけり。さても都には、中將殿内裏より御いとま申して、わが御所に歸り給ふが、御前も少納言も見えたまはず、若君は乳母の膝によりふして、母上のうせ給ひし御事、深く歎きたまひけり。中將殿はいかなる御事ぞやと、御歎きなか〳〵たとへん方もなし。常に住み給ひし所御覽ずれば、さま〴〵の御名殘をしき御事、かきつくし給ふ御事かぎりなし。われこそ緣つくるとも、若君さへ生ひたちたまはゞ、何の怨にか出でたまふぞと、御歎きかぎりなし。春日の御局、若君の御乳の人に事の子細をたづね給へども、何とも知りまゐらせ候はず、若君さまへ犬まゐり候てより、少納言殿ことのほか顏の色かはり、世に怨しげにのたまひしよりほかは、見まゐらせず候ふ、何事も候はず候ふと申しけり。中將殿きこしめし、よし〳〵その身は何にてもあれ、せめて此若七歲までは、などか一つにあらざらんと、御歎きは申すばかりなし。しかるに其後こゝかしこより、北の方むかへさせ給へと申しけれども、其色もましまさず。

歸らぬまでは—歸らんまではの誤
まほらせ—守らせ

で、稲荷の明神さま、われふるさとへ歸らぬまでは、難なくまほらせ給へとて、涙と共に出でたまふ、心のうちぞあはれなる。深草を通るとて、都の方を見送りて、たゞずみたまへば、折ふし荻の葉に露じめ〴〵とうち置きて、いとものあはれに、

　　おもひいづる身は深草の荻の葉の露にしをるゝわが袂かな

かやうにうちながめ、やう〳〵行く程に、古塚にこそ著きにけれ。きしゆごぜんの歸らせ給ふと、はした狐のいひければ、父母きゝもあへず、こはいかにとて驅けいで、此三年が程みえたまはねば、いかならん獵人などにも行き遇ひ給ひて、雁股の一筋もあたり給ふらんか、または鷹犬などにもくはれさせ給ふらんと、さま〴〵歎きくらせしに、これは夢かや、うつゝかや、嬉しき中にも涙にて、袂にすがりつき、あらめづらしや、こん〳〵、いづくにおはせしぞ、こん〳〵と、のみ言ひければ、めのと少納言はじめをはりの事どもを、こま〴〵と語りけり。父母きゝて、さてはかやうに近きあたりに住みながらへておはせしに、今まで知らせざりし少納言こそ恨しけれとて、一門眷屬さし集りて、よろこびの酒盛はことわりとぞ聞えけり。
かやうにめでたき事限りなし。中にもきしゆごぜんは、たゞ若君、中將殿の御事のみ戀

是非叶はぬ事なればとて、涙にむせび給ひけり。さるほどに中將殿みかどより御召ありて、七日の管絃とありしかば、姫君にのたまふやう、われ笛の役とて、内裏へまゐり候ふ、留守の程よくよく、若君なぐさめ給ふべしとて出でさせ給ふ。姫君御覽じて、これぞ限りなる、よそ〳〵ながらは見まゐらせ候ふとも、詞をかはし申さんことは、今ばかりなり。扨そののち少納言をちかづけて、これこそよきひまよ、いざ出で候はんとて、少納言御裝束など取りひそめければ、姫君御覽じて、涙のひまよりかくぞよみ給ふ。

わかれても又もあふせのあるならば涙の淵に身をばしづめじ

かやうに詠じ給ひて、少納言もろともに都をい

いかならぬ—いかならんの訛

かくてさふらはずは—かくてさふらはふの誤か、或はかくてさぶらはずはの意か

との給へば、憚りながらかやうにの給ふうへはとて、とり〴〵の御裝束などこしらへて、吉日御とり御見參ありけり。

大納言殿北の方御覽じて、かゝる美しき女房も、世にはありけるよ、いかならぬ宮腹の姫君といふとも、かゝる姿はあるまじ、中將殿の思ひ給ふもことわりとぞ思しける。かくて思ふ事なくて、月日をおくり給ふ程に、若君三歳にならせ給ふほどに、御内の人々も、此若君の御機嫌よきやうにとたしなみ、いろ〳〵御もてなし、御あそび物など奉る。あるとき中將殿の御めのと中務のもとよりとて、世にたぐひなき逸物とてうつくしき犬を進上いたしけり。少納言此由をきゝて、身の毛もよだつばかりにて、急ぎ姫君の御前にまゐりて申しけるは、不思議の御大事出來さふらふぞや、この犬かくてさふらはずは、大事これに過ぎ候はずとて、涙にむせぶばかりなり。姫君きこしめし、まことに是こそ限りなれ、この内いづるより外の事あらじ、中將殿、若君の御なごりいかゞすべきとて涙せきあへず。やゝありて仰せけるは、たとひ千年萬年をふるとも、なごりは盡くる事あらじ、ひまを窺ひ立ちいで、是を菩提の種として、世を厭ひなんことは、いと易き事なれども、中將殿さこそは歎かせ給はんずらん、若君のなごり、かへす〴〵も悲しけれども、

おろかならぬ—おろかならんの訛

姫君かへし、

思ひきやこよひはじめの旅寢して鳥のなく音を歎くべしとは

かやうにさま〴〵ながめさせ給ひ、よるも終夜（よもすがら）ひるはひめもすにたはぶれて、明かし暮らし給ふ程に、月日に關守あらざれば、水無月の頃かの姫君惱み給ふ。中將殿御覽じて、心苦しき有樣かな、いかならん事ぞやとて、さま〴〵御祈ども言ふばかりなし。此事をのみ歎かせ給へば、たゞならず見えたまふ。中將殿もめのとも御よろこびにて、その年も過ぎあらたま如月（きさらぎ）もたち、やよひと申すには、さもうつくしき若君をまうけ給ふ。中將殿御覽じて、たぐひなき御事に思ひ給ふ。御めのと數々、その外おの〳〵參り、いつきかしづき給ふこと限りなし。かくて日にそへて、光さしたまふ心ちして、うつくしく生ひたち給ふ。大納言殿の北の御方もよそ〳〵ながら聞召し、中將殿は何とてかやうの御事、つゝませ給ふぞや、其身はいかやうの人にてもあれ、中將殿の御覽ぜん人、そのうへ美しき若君も出來（いでき）させ給へば、我々いかでおろかならぬ、姫君にも對面して、諸共にかしづきまゐらせんと思召し、中將殿へこま〴〵と仰せられければ、なのめならずに喜び給ひ、是よりかく〳〵と申し入れたく候へども、はゞかりに存じ候へばとて、姫君にかく

さもあり〳〵と ―さもありげに

御めのとに―に 文字不用なるべし

かやうのまより ―かやうのたよりの術か

ひて、是までまゐりて候ふが、憚おほく候へども、一夜の御宿を仰せ付けられ候ひてたび給へと、さもあり〳〵と申しければ、中將嬉しくおぼしめし、此年月色ごのみし侍りしかば、かやうの人に逢はんとの事にてこそありつらん、よし〳〵誰にてもあれ、これも前世の宿緣とおぼしめし、こなたへ入らせたまへとて、わが御館へ伴ひ、御めのとに春日の局に仰せつけ、さま〴〵に御もてなしかしづき給ふ事いふばかりは無かりけり。其後おの〳〵休みたまへば、いとゞ中將殿のあこがれさせ給へば、姫君の御枕に寄りそひて、かやうのまより、二世ならぬさき〴〵の奇緣とこそ思ひ侍れ、何と御心深くのたまふとも、この內をばいだし申すまじとて、さま〴〵御言葉をつくし給ふ。もとより姫はたくみたる事なれば、嬉しさかぎりなし。さりながらいと恥しげなる風情して、うち靡くけしきもなくて居給ひけり。夜もやう〳〵更けければ、鴛鴦のふすまのしたにたはぶれけり。たがひに御心ざし淺からず、生きては偕老の契とおぼしめし、よるの明けやすき夜半にて、程なく鳥も音づれ、寺々の鐘もはや明けぬと響きけり。中將殿は餘りなごり惜しさのあまりに、一首かくなん、

むつごともまだ盡きせぬにいかばかり明けぬとつぐる鳥の音ぞうき

とくわらはが云云—早くも妾が所爲なりと

ていかに聞き給へ、われ思ふ子細あり、いざや都に上りさふらふべし、さりながら此姿にて上りなば、人目もいかゞさふらはん、十二ひとへ袴きせてたべ。めのと此由をきゝ、今程都には鷹犬などと申して、家々ごとに多ければ、道の程も御大事にてさふらふぞや、そのうへ御父みやうぶどの、御二所さまきこしめし、とくわらはが仕業とのたまはん事疑なし、思しめしとまり候へと申しける。姫君きこしめし、いかにとゞめ給ふとも、われ思ふ子細ありて、思ひ立ちぬる事なれば、いかにとゞめ給ふとも止るべきにてあらずとて、美しく化けなしてこそ出でにけり。さる程に中將殿は此姫君を御覧じて、夢かうつゝか、覺束なしと御覧じけるに、そのかたち言ふばかりなく、まことに玄宗皇帝の楊貴妃、漢の武帝の世なりせば李夫人かと思ふべし、さて我朝には小野の良實が娘小野の小町などといふとも、是程にありつらん、いかさまいづくの人にてもあれ、よき便ぞとおぼしめし、めのとと覺しき女房に、これはいづくよりいづかたへ通らせ給ふ人やらんと、御尋ねさせたまふ。めのと嬉しくて申しけるやうは、これはさる人の姫君にてましますが、繼母にいひ隔てられさせ給ひ、父の不興を蒙りたまひ、これを菩提の種として、いかならん山寺にも引きこもり給はんとの御事にて候ふが、是をはじめの旅なれば、道ふみ迷

の世の中に、心をとめて何かせん、いかなる深山の奥にも引き籠り、浮世を厭ひ、偏に後世を願ひ侍らばやと思ひ、あかしくらし給ふほどに、十六歳にぞなり給ふ。父母御覧じて多き子どもの中にも、此きしゆごぜんは世にすぐれ見えたまふ、いかなる御かたさまをも婿にとり、心安きさまをも見ばやと思ひて、さま〴〵教訓したまふ。

さてまた爰に三條大納言殿とておはします。其御子に三位の中將殿とて、容顔美麗にして、まことに昔の光源氏、在原の中將殿と聞えしも、是には勝るべからず、高きも賤しきも心を惑はしける程に、父大納言殿に仰せあはせて、さるかたさまより御使ありしかども、中將殿御心にそむ色もましまさず、いかならん賤の女の子なりとも、そのかたち勝れたらん人ならばと思しめし、常は詩歌管絃にのみ心をすまし給ふ。頃は三月下旬の事なるに、花園にたち出で給ひ、散りなん花を御覧じて、業平のけふの今宵にと詠みけるも、かゝる折にやと眺め給ふをりふし、かのきしゆごぜん稲荷の山より見おろして、うつくしの中將殿や、われ人間と生れなば、かゝる人にこそ逢ひ馴るべきに、いかなるかいぎやうによりて、かやうの身とは生れけるぞや、淺ましさよと思ひけるが、よし〳〵ひとまづ人間のかたちと化け、一旦の契をも結びさふらではと思しめし、めのとの少納言を近づけ

けふのこよひに―伊勢物語「花にあかぬ歎きはいつもせしかどもけふの今宵に似る時はなし」
かいぎやう―戒行

御めのと思ひ思ひに云々ー思ひ思ひに乳母のつてを求めて

木幡ぎつね

中頃の事にやありけん、山城の國木幡の里に年を經て久しき狐あり。稲荷の明神の御使者たるによつて、何事も心にまかせずといふ事なし。殊には男子、女子、そのかず數多もち給ふ。どれ〳〵も智慧、才覺、藝能いふばかりなく、世にならびなく聞えありて、とり〴〵にさいはひ給ふ中にも、弟姫にあたらせ給ふはきしゆごぜんとぞ申しける。いづれよりも殊にすぐれて、容顔美麗にうつくしく、心ざま並びなく侍りて、春は花のもとにて日をくらし、秋は限なき月かげに心をすまし、詩歌、管絃に暗からず。聞きつたへし人々は、心をかけずといふことなし。御めのと思ひ〳〵に縁をとり、我も〳〵とかずの文をつかはし、心をつくすと申せども、行く水にかずかく如し、うち靡くけしきもましまさず。姫君うき世に長らへば、いかならん殿上人か、關白殿下などの北の方ともいはれなん、なみ〳〵ならん住居は思ひもよらず、それさなき物ならば、電光朝露夢幻

木幡ぎつね

御覽じて、うれし泣きにぞ泣き給ふ。一族一家のものまでも、よろこびの涙を流す。されば萬壽、親孝行なるゆゑにより、鶴が岡の八幡大菩薩の御方便にて、今様をうたひ、所領を給はり、二とせあまり牢舍せし母をたすけ、かずの寶を給はりて、子孫ともに繁昌するなり。萬壽姫の親孝行ゆゑなりとうけ給はり候ふ。かゝるめでたき物語かなと、感ぜぬ人はなかりけり。

ふしのゆひわた―富士の結綿か
御ひき―御引出物
美濃のじやうほん―美濃絹の上品
ばんじの床―萬事休する程の重病の床に泣き伏すとの意なるべし

召し具して、萬壽にこそ渡されける。萬壽なのめによろこびて、母にひしと抱きつき、嬉し泣きに泣きければ、母もろともに涙をながす。頼朝をはじめ奉り、大御所御臺いづれもましますさぶらひ達、人の寶には子にましたる寶なし、さても萬壽は女とも思はず、十二三のものが、これまでまゐり、鰐の淵なる親を助けたる、不思議なりと、みな感涙を流しけり。其後頼朝は萬壽に引出物をえさせんとて、信濃の國手塚の里一萬貫の所をば、萬壽にとてぞ下されける。御臺さまより黄金千兩ふしのゆひ綿一千把、萬壽が宿へぞ送られける。大御所さまの御ひきには砂金五百兩、美濃のじやうほん一千匹下されける。これをはじめて鎌倉中の諸大名、われも〳〵と引出物萬壽姫にたまはりける。頼朝仰せけるやうは、萬壽をば鎌倉にとゞめたくは思へども、母が心の恐しきものなれば、いそぎ信濃へかへれとて、御いとまをぞ給はりける。萬壽なのめに喜びて、唐糸をひきつれて信濃へとてこそ歸りけれ。のぼりには三十二日に上りしが、かへりには五日にこそは下られける。手塚の里におちついて、うばの尼公を見申すに、ばんじの床に泣きふして、今をかぎりと泣き給ふ所へ、萬壽まゐりて候ふ、いかにや申さん尼公さま、われわれは萬壽にて候ふぞ、これは唐糸にておはしますと申しければ、尼公は親子のものを

てくるゝまで酒盛とこそ聞えけれ。其日もかたぶけば皆々鎌倉へぞ歸らせたまふ。さて次の日、賴朝は萬壽を御前に召し出だして、さて汝は今樣の上手かな、めでたうこそは歌うたれ、國はいづくの者なるぞや、親をばたれと申すらん、親をなのれ、御引出物給はるべきとぞ仰せける。萬壽うけたまはり、名のり申すまじと思へども、此たび名のり申さずは叶はじとや思ひけん、思ひきりてぞ名のりける。みづからが親は御所樣の御うらの石の牢につきこめ給ふ唐糸にて候ふなり、されば四つ子にて棄てられさふらふが、去年の春の頃、母が牢舍のよしを、信濃の國にて承り、今はあるにもあられずして、母の命に代らんとおもひ、これまでまゐりて候ふぞや、このたびの今樣の御引出物には、母が命にみづからを取代へてたび給へとぞ申しける。賴朝きこしめし、大きに御おどろかせ給ひ、しばらく物をものたまはず。稍あつて仰せけるは、唐糸は汝が母にてありけるぞや、唐糸を助くる事は、烏の頭が白くなりて、駒に角のはゆるとも助くまじとは思へども、此たびのよろこびには、いづれの物か惜からん、唐糸が露の命、今まで存命にてあるならば、急ぎ召しいだし、萬壽に取らせよとぞ仰せける。土屋うけたまはると申して、石の牢を引きやぶらせ、二とせに餘る牢舍せし唐糸をめしいだし、御所さまの庭に

うつゝら―未詳

みなしろ―皆白にて全部白きをいふ

たんこふしき―未詳

はんで―誤脫あるべし意味通じ難し

だき參られたり、君が代はさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで、高砂や相生の松萬歲樂に、御命をのぶ、東方朔の九千歲、うつゝらの八萬歲、長命居士の一千歲、西王母の園の桃三千年に一度花さき、實のなると申せども、相生の松にしくことさふらふまじ、そも〳〵君は、千代をかさねて六千歲さかえさせ給ふべき、かほどめでたき御ことに相生の松がえ、福壽無量のよろこびを、君に捧け申さんと、小松の枝をゆりかづき、みなしろの大まくへ、二三度四五度まひかゝりたりければ、賴朝御覽じて、ほうらいにたちゐぼし、白鞘卷をさしながら、みなしろの大幕を、投げあげて、かゝるめでたき御ことに、相生の松が枝を給ふらんとて出で給ふ。もとより賴朝は今樣は上手なり、たつ波ゐる波よする波、引きしほの拍子足を、たんこふしきと踏んで、扇流しを歌ひすまし、萬壽が花のたもとへ、賴朝の狩衣の御袖、まひかさね〳〵、二三度四五度舞はせたまへば、風も吹かぬに大宮のたまの戶もきり〳〵ばつと開き、八幡も御納受ありときこえける。さるほどに八百八つのみす簾の几帳もざゝめいて、貴賤群集を返しける。そののち賴朝は座敷のうちへ入り給ふ。萬壽姬は樂屋のうちへと引いて入る。賴朝仰せけるやうは、たれやの人か計らふべしめでたくもはんでをさめよとて、今樣はましまさず、春の日の

ひきま―遠江の引馬
せと―駿河の瀨戸山
しほりはぎ―しをり萩
すゞりわり―硯破
くじ―鬮
はぶき―羽を振る
やつ―谷
谷―「たに」と傍訓せるは「やつ」の誤なるべし
から聲―頃聲
ふくでん―福田か

あま小舟、こがれて物や思ふらん、ま弓つき弓ひきまの宿、さよの中山せとを過ぎ、うつの山邊の蔦のみち、手越をすぎて行くほどに、月を清見が關の戸を、おし明けがたの空みれば、富士の煙や靡くらん、夢にもみやこ人こそめでたや、御代にはいづの國、浦島が玉手筥、あけて悔しき箱根山、鎌倉山をきてみれば、鶴が岡とや申すらん、鶴は千年名鳥、松は千とせの名木、めでたしと歌うたり。二番は黃瀨川の龜鶴、しほりはぎを歌うたり。伊勢の濱荻なにはの蘆、鎌倉や武藏野の、草の名多しと申せども、しほりはぎにしくものは候はじと、歌うたり。三番はゆやが娘の侍從、太平樂をふむ。四番は入間河のぼたん、すゞりわりを歌うたり。五番のくじは萬壽なり。御臺さまより御裝束給はる。としは十三の春なれば、十二ひとへを著しつゝ、花のまそでを返し、樂屋のうちより出でけるを、物によく／＼譬ふれば、花木に鶯のはぶき出でたる風情も、是にはいかで勝るべき、はたとあげて歌うたり。鎌倉はやつ七鄕とうけ給はる、春はまづさく梅がやつ、扇の谷に住む人の心はいとゞ涼しかるらん、秋は露おくさゝめがたに、いづみふるかや雪のした、萬年かはらぬ龜がへの谷、鶴のからごゑ打ちかはし、由比の濱にたつ波は、いくしま、江の島つゞいたり、えのしまのふくでんは、福壽海無量の寶珠をい

むしのいせい―虫の威勢か

づから何と計らふべき、思ひもよらずと仰せける。更科大きに腹をたて、かやうなる時、今様をうたはせ給ひてこそ、御よろこびもましまさんとて、御局さまへ參り、萬壽こそ、今様の上手にて候へと申し上ぐる。御局よりも、御臺さま、賴朝さまへ御披露あり。賴朝大きによろこび給ひ、萬壽一目みんとて御前にめされ、御覽じて大きによろこび、御臺さまより十二ひとへの御裝束をぞ下されける。もとより姿すぐれたり、肩をならぶる女はなし。頃は正月十五日、御前に山をたて、大宮のゆんでには賴朝の御座敷、八ヶ國の大名小名の御座敷、かず八百八とぞ聞えける。さて又めてには、大御所さまと御臺さまの御座敷をはじめとして、八ヶ國の大名衆のうへがた上﨟衆の御座敷かずを知らず。鎌倉中の貴賤上下がまゐりて見物申しけるほどに、鶴が岡に駒を立つべきかたもなし。十二人のやをとめ、七十五人の宮人、神樂を奏して奉り、手越の長者が娘、千壽の前ときこえける、貴賤群集の言の葉に、海道くだりをつゞけたり。逢坂山のよるの月、くもらぬ影をやながむらん、勢多の唐橋野路の里、霞にくもる鏡山、不破の關屋の板庇、假寢の夢はやがて醒が井の宿、むしのいせいやをはりの國、みかはなる三河にかけし八橋の、くもでに物や思ふらん、知るも知らぬも遠江の、濱名の橋のいるしほに、さゝねど上る

ちんやさいかい
―未詳

か、天下の亂れか、占へとぞ仰せける。博士承り、そも〳〵荻萩の、花の命をのぶること、あまたとは申せども、西王母が園の桃、三千年に一度花さき、實のなると申せども、見る人も候はず、ちんやさいかい八千世の年をふることも、ちくさの八千年をふることも聞くに、一千年の壽命も、相生の松にしくことはなし、そも〳〵君が千代をかさねて六千歳、鎌倉山に年をよせ、榮えさせ給ふべき、かほどめでたき御事に、相生の松が枝を鶴が岡の玉垣の御内に蓬萊をうつしかへ、十二人の手弱女をうつして、今様を歌はせたまはゞ、神德を深く君もめでたうましまさんと、占ひたるこそめでたけれ。賴朝なのめに思召し、六本の小松を鶴が岡の玉垣の內へうつし、十二人の手弱女を揃へらるゝ。まづ一番には手越の長者が娘千壽のまへ、二番には遠江の國ゆやが娘の侍從、三番には黃瀨川の龜鶴、四番は相摸の國山下の長者が娘虎御前、五番は武藏の國入間川のほたんといひし白拍子、これをはじめて十一人なり。鎌倉中廣しと申せども、ひと一人に事を缺き、色々尋ねらるゝ。其後萬壽の姬のめのとは、萬壽を近づけて、御身はみめよく、今様は上手にてましませば、此度出でて今様を歌はせ給へ、萬壽さまとぞ申しける。萬壽きこしめし、このたびの今様は世の常の今様にかはりて、めでたき事をばみ

思ひきり—決心し

はつたと—斷じて

しろがへて—賣りしろなして食物などを求めて

しゝの間—獅子の間なるべし

して、浮世の妄執はれてあり、更科をひとへに頼み申すぞ、つれて信濃へ歸り申せと仰せける。萬壽うけ給はり、信濃の國を出でしより此かた、御命に代らんと思ひきり、まゐりて候ふ、はつたと信濃へ歸るまじと泣きければ、唐糸きこしめし、その義ならば、たび〳〵まゐるなよ、人に知られて候はゞ、君よりも唐糸が子なりとて、我よりさきに死罪流罪に行はれ奉らん、よく〳〵忍べと泣かれける。萬壽承り、國をも名のり候はねば、存ずる人も候ふまじと、涙を流し語る。夜すでに明けければいとま申して、さらばとて御所のうちへ歸りつゝ、小袖を町へいだし、しろがへて、めのとが忍ぶ時もあり、みづからが忍ぶ時もあり、九月がその間、母を養ふあはれさよ。次の年の正月二日に、鎌倉殿の常に御祈念をなさるゝ、しゝの間の御座敷に小松六本、疊のへりに根をさし、生えいでたるこそ不思議なれ。頼朝大きに騷がせ給ひ、かやうなる草木は、土にこそ根のさすに、疊のへりに根をさし、生ひいでたるこそ不審なれ、鎌倉中のわづらひか、又は頼朝が身のうへか、博士を召せとの給ひて、其頃鎌倉中に隱れなき安倍の中もちと申す博士をめされて問はせ給ひける。いかにや、中もちうけ給はれ、常に祈念するしゝの間の座敷に、今夜の内に、小松が六本生ひいでたり、鎌倉中のわづらひか、頼朝が身の上

涙は淵となる。唐糸聞きて、萬壽は信濃にこそおきつるが、今年は十二になると覺えたり、夢かうつゝか幻か、夢ならばとく醒めよ、さめての後はうらめしやと、かき口說きてぞ泣かれける。萬壽、おほせの如く信濃の國にさふらふか、御牢舍のよし風のたよりに承り、御命に代らんと、これまで參りて候ふぞ。唐糸きこしめし、其時萬壽が手をとり、嬉し泣きにぞ泣き給ふ。御涙をおさへ、うばさまの御命はいまだめでたうましますか、なつかしさよと仰せける。萬壽うけ給はり、何事もましまさず、御心やすかれと申しければ、唐糸聞きて、汝ばかり參りたるか。萬壽うけ給はり、更科をつれてまゐりける。唐糸きこしめし、いづくに忍ばせ置きけるぞや。萬壽申しけるやうは、よその見る目のいぶせさに、御門の脇にたゝせておき申し候ふとて、やがてつれてぞ參られける。唐糸御覽じて、更科めづらしや、唐糸がありさまを、不便と思ふべし、萬壽は親子の契なれば、尋ねてのぼるもことわりなり、汝はめのとと云ひながら、他人にて候ふものが、これまで上るは不思議なり、昔より世にある主をば尋ぬれども、世におちぶれたる主の跡たづぬるものは、上代にも聞き及ばず、末代にもあらじと、互に流す涙の色、ふる雨のごとくなり。其後唐糸、涙をおさへて仰せけるは、御身も人も、生きて浮世の對面

人の咎めぬ—人を咎めぬの誤か
あま—天
岩が根さわぎあたる—岩が根にさわぎあたる意
ゐなか—亥中、十時頃

めのとも喜びの涙をぞ流しけり。
頃は三月廿日に鎌倉山の花見とて、をりふし御所には人もなし。萬壽は、こよひ母の御ゆくへを尋ねて見んとて、御所のうちをば忍び出でて、釘門をみてあれば、正八幡の御方便かや、をりふし番衆もなかりけり。門も細目にあいたるなり。萬壽は嬉しけれども、よその見る目もあるらん、人の咎めぬ里犬あるやとばかり疑はれ、めのとをば御門の脇にたゝせて、わが身は内へたづね入り、かなたこなたを尋ねけり。あま吹きおろす松風の、岩が根さわぎあたるをば、人やあるかと疑はれ、心を靜めてあたりを見る。廿日ゐなかの雲はれて、月すこし見え給ふ。松の一むらある中に、尋ね入りて見てあれば、石の牢こそ見えにけれ。萬壽うれしさに急ぎたちより、牢の扉に手をかけて、内の體を聞きけるに、唐糸は人音を聞きつけて、そも〳〵門におとづるゝは誰なるらん、變化のものか、又は唐糸が討手にばし向く人か、御使にてましまさば、浮世のひまをあけたしと、かきくどきてぞ泣きにけり。
萬壽は承り、いとゞ哀れはまさりけり。牢のすきより手を入れて、母の手をとり、これは母の手にてましますか、わが身は萬壽にてさふらふぞや、なつかしさよと泣きにける

萬事はとまれ一是非とも留りくれよ

みづし一下女

て、逢はではつべき悲しさよと、ふし沈みてぞ泣かれける。めのとは大きに腹をたて、信濃を御いでの時は、二年も三年も、鎌倉中にましまさんと仰せありしが、いまだ廿日も過ぎざるに、さやうに御涙をながさせ給はゞ、涙の色にて人に知られ、必ず死罪におひたまはん、其儀ならばみづからは是にて憂目をみんよりも、あすは信濃へ歸り申さん、御身ばかりになり給へ、萬壽さまとぞ腹をたつ。萬壽大きに驚き、めのと更科にいだきつき、其儀ならば今より後は歎くまじ、萬事はとまれと泣き給ふ。めのとも主も泣きあかす。夜も既に明けければ、萬壽姫は御主さまの御うらへ出でて、あたりを眺めて御覽ずる所に、いづくともなく御みづし一人まゐり、いかにやのう萬壽、此釘門のうらへ入らせ給ふな、御法度なるとぞ申しける。萬壽きこしめし、御法度はいかにと問はせ給へば、みづしうけ給はり、御所樣がたの御女房、唐糸の前と申すは、石の牢につきこめられしに、これよりあなたへは、男女によらず、御法度なりとぞ申しける。萬壽きこしめし、唐糸といはれて、雪ならば消え入るばかりに嬉しくて、みづしはよく教へ給ふ、われは夢にも知らぬなりと、喜ぶ體にて御所へまゐり、めのとを近づけて、唐糸さまの御ゆくへを、只今きいて候ふぞ、よろこび給へと言ひながら、又かきくどき泣きたまふ。

尋ぬるものが―たのめるものがの衍か

人の返事をわがにして―他人の返事したる用も自分にて辨じてきよう―器用か

ばあはせ給ふべけれと書きとめて、鎌倉山より手塚の里のうばさまへ、萬壽姫とかきて、五郎丸をば鶴が岡へつき、これまでなり、さらばとて、それより手塚の里へ返さる。そののち萬壽姫は、御所さまへまゐり、御奉行をのぞまれける。御臺さまには聞召し、國はいづくの者なるぞ、親をばたれと申すやらん。萬壽うけ給はり、武藏の國六所別當の者にて候ふ、親を名のり申すまじ、御奉公申すならば、尋ぬるものが親にて候はんとぞ申されける。御臺此由きこしめし、親を名のり申さねば、御氣づかひに思しめす。まづまづ侍從の局にて奉公申せとのたまひ、御局がたへ預け給ふ。萬壽は侍從の局にてよきに奉公つかまつり、人の返事をわがにして、人の立たん所へも、わがものと立ちゆけば、御局がたにも、萬壽はきようの者なりとて、御なさけをぞかけ給ふ。廿日の過ぐるその間、萬壽は人の物いふたびごとに、わが母の唐糸と、名にても人の申すかと、聞けども聞けども言はざりけり。ある夜の寢覺に萬壽、乳母に語られけるは、いかにや、更科うけたまはれ、今まで廿日あまり過ぐるうちに、唐糸と名にても人の申すかと、聞けどもく申さぬは、浮世にもなきか、生きて浮世にあるならば、人をばよかれあしかれ沙汰する習ひなり、名をだに申す人もなし、必ずこれは死したる人なり、卅二日たづねき

入山—上野にあり

星の谷—相摸にあり

とがみ—砥上、相摸にあり

命をまたう云々—諺

はらふ涙のひまぞなき。萬壽の姫は、雨の宮を立ち出でて通る所はどこ〳〵ぞ。親子の契は、ふかしの里こそめでたけれ。淺間の嶽に立つけぶり、身には餘れる思ひにや、いま入山をうち過ぎて、上野の國に隱れなき、常盤の宿をもうちこえて、一の御宮をふし拜み、二のたまはらに出でしかば、親の名のみか、ちょぶ山、末まつ山をうち過ぎて、霞の關をもわけこして、入間の郡、やせの里、いくらの里をか越しつらん。曇らぬかげは星の谷の、とがみ河原をもうち過ぎて、鎌倉山につき給ふ。鶴が岡に參り、南無や八幡大菩薩、よろづの御神にこえさせ給ひ、親孝行の御神とうけたまはりて候へば、わが母の唐糸の露の命のうちにめぐり逢はせてたび給へと、肝膽をくだいて祈られける。

其夜はこもりゐて、明けぬれば、文こま〴〵と書かれける。みづから何事なう鎌倉まで參りて候ふ、とにかくに、うばさまの、御命をよく〳〵惜ませたまふべし、命をまたう持つ龜は蓬萊にあふとかや、ある歌に、

命あらばいくよの秋の月や見ん消えてはいかに露の玉の緒

と聞く時は、たゞ命がせんにて候ふぞや、御命まし〳〵てこそ、唐糸にもみづからにも又

こしめし、人目を忍ぶ旅なれば、多勢つれては叶ふまじ、其儀ならば、いかなる淵瀬へも身を投げて、浮世のひまをあけんと泣き給へば、尼公きこしめし、人の子の親を思ふこと、稀なる道と聞きつるに、さても汝は親孝行のものかな、其儀ならば力なし、尋ねてもみよ、更科をひとへに頼むなり、よきに供してくれよかし、更科とぞ仰せける。めのとは承り、御供申していづるより、野の末山の奥、火の中水の底までも、共に入り、共に沈み申すべし、御心安くおぼしめせ、尼公さまとぞ申しける。尼公はきこしめし、其儀ならば鎌倉へ下るまで、男ひとりつけんとて、五郎丸をぞつけ給ふ。さらばと言ひて立ち別れ、そなたこなたへ行く袖の、

立たれける。萬壽仰せけるやうは、いかに更科うけたまはれ、鎌倉は東の方と承る、月日は東の空より出でて、夕日は西に入り給ふ、月日を心にあてててゆけ、更科とのたまひて、月をしるべに行くほどに、既に其夜も明けければ、手塚の里には、萬壽の姫、失せさせ給ふとて、貴賤群集をなしければ、尼公此由きこしめし、いか樣これは、鎌倉の方へ出でたるらん、いそいでそれをとゞめよとて、かちや徒跣にて出でられける。信濃の國雨の宮といふ所にて、やがておつつき給ひける。

尼公萬壽に抱きつき、いかに聞くかや、萬壽の姫、唐糸は、はや死にたるものと思ひしに、汝までみづからを捨て、鰐の口へ尋ね行き、鎌倉殿へきこしめさば、にくき唐糸が子なりとて、必ず死罪に行はれ奉らん、思ひとまれと泣き給へば、萬壽承り、みづから鎌倉へまゐりて、唐糸を親と申して、尋ねてまゐらばこそ、人も不審に思はんずれ、鎌倉殿か、和田殿か、秩父殿へ、二年も三年も御奉公を申すならば、いかでか母の御ゆくへ、尋ねいださで候ふべきと思ひ立ちてさふらふぞや。尼公聞しめし、其儀ならば鎌倉の近くに、藤澤の道場と申して、遊行和尚の建て給ふ御寺あり、知る人のあれば、みづからは藤澤の道場に隱れゐて、御身たちは鎌倉へこすべきなりとぞ仰せける。萬壽き

尋ねきかまほしく候へ、更科をひとへに賴む、つれて鎌倉へ上りてくれよと申されける。更科うけ給はり、をとこ(よ)とも思はず、親をば何とか尋ね給ふべき、萬壽さまとぞ申しける。萬壽きこしめし、これはいはれぬ申しごと、みづから鎌倉へ上り、唐糸を親なると尋ねて參らばこそ人も不審をたて候ふべき、鎌倉殿か、それなくば秩父殿か、和田殿へ、五年も三年も、奉公を申し、鎌倉にあるならば、いかでか母の御ゆくへを聞きいださゞるべきぞ、更科いかにとの給ひける。更科うけ給はり、をさあいの心にさへ親の御恩を思しめす、たとひ賤しき者なりとも、お主の御恩をわすれ申さんや、野の末山の奥までも、みづから御とも申すべしとぞ申しける。まんじゆ聞しめし、なのめならずに思しめし、さらば今宵に思ひたち、旅の裝束せんとて、萬壽その夜の裝束には、肌には練のあはせを召し、親を尋ぬる門出なれば、めでたき事を菊染の御小袖、しげむらさきの織物に、十二一重をひきかさね、柳色の袴をきて、市女笠をめされける。めのとが其夜の裝束には、そめつけにみのぎぬの染小袖、七つひとへをひき重ね、麻の袴をきるまゝに、しけもんのつゝみには、よろづの物を忍ばせて、乳母がこれをいたゞいて、故里を出でられける。萬壽の姫も更科も、あとさき知らぬ旅なれば、山路のすゑに行きまよひ、呆れはててぞ

をとこ(よ)とも思はず―まことゝも思はずの誤か

をさあい―をさなき人といふ意

みのぎぬ―美濃絹

しけもん―恩しき絹絲をしけといふ、それにて織りたる絹をいふにや

ふのわるさ—ふは分にて天運の意「ぶがわるい」といふに同じ

んとてまゐらせける。頼朝は御覽じて、これは何たる土產にもましたるとて、大きに悅び給ひて、いかさまこれは唐糸がひとりの謀叛にてはよもあらじ、鎌倉中にては、大名か小名の人數あるべきぞ、松が崎にて七十五度の問狀して問へとて、ものゝふどもにぞ仰せける。松が岡殿には此由を聞しめし、梶原と死なんとて、鎌倉へ御輿がたつ。頼朝このよし聞しめし、まづ〳〵こなたへ引けやとて、御うらの石の牢へぞ入れられける。唐糸がふのわるさ、君の御果報申すに及ばず。其後唐糸は信濃の國に六十にあまる老母と、十二になる姫をもたれけるが、唐糸十八歲の年、鎌倉へ上りしが、ことしは十二になると覺えたり。名をば萬壽の姫と申しけり。唐糸の牢舍のよし、信濃の國へ風の便に聞えければ、そもこれは何事ぞとて、天に仰ぎ地に俯して、流涕こがれて泣きにける。萬壽淚をおさへて申しけるは、我身鳥ならば飛びも越し、母の行くへを聞かまほしうこそ候へ。尼公きこしめし、みづからが歎きも汝には劣るまじ、今より後に逢ふ事もありもやせんと歎かれける。萬壽も一間所へ歸り、衣ひきかつぎて、流涕こがれ泣きけるが、さ夜ふけ方に、乳母の更科をめされ、いかにや、更科うけたまはれ、わが母の唐糸は、鎌倉に石の牢にましますとうけ給はり候ふぞ、わが身いかやうにも鎌倉へ尋ねこし、御ゆくへを

さんりん―未詳

舌を喰はん―舌を噛みて自害せんと也

ちやうにち―上日又は直日の意にて當番の者をいふ

ために、出家は佛舍をたつるなり、たとひ主に向つて弓を引き、親に向つて太刀をぬき、牛馬の首をきりたりとも、さんりんしたる惡人に子細はあらじと思ふなり、さやうに咎を責むべくば、在家にあづけて置かずして、みづからに預け置き、咎をせむべきとて還せとは、もとすけが不屆か、頼朝の不屆か、申すに及ばず、殊にみづから出家と申し、女といひ、頼朝はもとめて恥をかゝするか、舌を喰はんと御腹たつ。力及ばず、もとすけは御所さまへまゐり、此由をぞ申しける。頼朝きこしめし、その儀ならば、松が岡殿の御腹のなほるまで預けおき奉れとて、かさねて子細はましまさず。其後松が岡殿には、とにかくに唐糸は大事のものにて候へば、鎌倉中に置きてはあしかりなん、いそいで信濃へ下れとて、ちやうにちの者を添へらるゝを、忍びて信濃の國へぞ送られける。武藏の國六所と申すところにて、梶原平三景時は、上野の國沼田の庄にて、百日の日をふんで、いま鎌倉へ上るとて、唐糸と行きあふこそ本意なけれ。景時見るよりも、それなるは唐糸か、我君の御命をねらひ奉るくせものなり、それ〳〵たぞと下知すれば、ちやうにちのものも、西東へばつと散る。そのとき景時は唐糸をおしこめて、鎌倉へ上りけるこそ本意なけれ。梶原はわが家にも歸らず、唐糸をすぐに御所へひかせて參り、上野土產奉ら

ざしの光盛が娘なり、いかさまこれは我君樣の御命をねらひ奉るなり、御身近く寄せられ召使はるゝ御事、なか〳〵君の御不覺なりとぞ申しける。賴朝きこしめし大きに驚き、唐糸召せとぞ仰せける。うけたまはると申して、御前へ召しいだす。御まへにかしこまる。賴朝御覽じて、何とて汝は木曾が重代にちやくいと申す脇差をばさしたるらんと問はせ給へば、これは木曾に仕へ申す時、かたみに見よとて給はりて候ふと申しける。賴朝きこしめし、女の形見に重代は似合はぬなり、先づかひに思しめすまゝ、世のしづまるまで、松が岡殿へあづけ奉れ、土屋とぞ仰せける。土屋うけたまはり、唐糸を引き具して、松が岡にあづけ奉る。其後土屋は唐糸の前が局にて、木曾殿よりの御文を見つけいだし、賴朝へ奉る。兵衞の佐殿御覽じて、天の與ふる寶なりとて、八幡の寶殿に深くこめおかる。もとすけはとにかくに、守護神なりとて、武藏の國池の庄、一萬貫の所を土屋にとてこそ下されける。其後唐糸召せとぞ仰せける。土屋うけ給はり、松が岡へまるり、このよし申し上ぐる。松が岡にはきこしめし、そも〳〵賴朝は日本の主となるべきものが、禮儀法度をしらで、日本の主になりがたし、いかにもとすけ物をきけ、佛は悪人を助けんため、淨土をたてさせ給ふ、その如くにこの界にても、悪人を助けんが

睡眠―傍訓原本のまゝ

これを給はりて、鎌倉へこそ下りけれ。

唐糸御文見まゐらせ、なのめならず喜びて、かの脇差を肌身をゆるさず差しもつて、頼朝の睡眠のたびごとに、狙ひけるこそ恐しけれ。さすがに頼朝は果報いみじき大將軍にてましましければ、とかく遁れ給ふぞめでたけれ。をりふしその頃、大御所さま、御臺さまの、藥の風呂の候ふに、かの唐糸も御とも申してまゐられける。其日の風呂の奉行には、土屋の三郎もとすけなり。もとすけ、唐糸の前が小袖のしたより、かの脇差を見つけつゝ、此きぬの主はたれ人ぞと尋ねける。ともの女房うけ給はり、唐糸さまの御小袖なりと申す。もとすけ、大きに驚き、あの唐糸と申すは木曾殿の内に手塚の太郎が娘なり、いかさまこれは我君さまの御命をねらひ奉る女なり、君に此事をしらせ奉らんとて、御所をさしてぞまゐりける。頼朝は御覽じて、何とてもとすけは風呂の奉行は申さぬぞ。もとすけうけ給はり、土屋が風呂の奉行に、寶を見つけて候ふぞ、御覽ぜよと奉る。頼朝御覽じて、さても不思議の事どもかな、これは木曾に傳はる重代にちやくいと申す脇差なり、何とてもとすけは見つけたるぞとの給へば、御所方の女房唐糸の前が、小袖のしたより見つけ申して候ふ、そも唐糸と申すは、木曾殿の御内なる手塚の太郎かな

奏者―取次

忠臣―忠義の意

倉へ召しのぼせ、管絃の座敷を預けらるゝが、唐糸は此由をうけ給はり、なさけなの事どもや、木曾殿の御滅亡は、親一門の滅亡なり、いかにもして此事を、木曾殿へきかせ奉らんとて、ひとま所へ忍び入り、文こまぐ\と書き、下人の男にもたせて都へとてこそ上せらるゝ。下人鎌倉を出でて、十三日と申すには都につきて、父の手塚が奏者にて、かの文を木曾殿へ奉る。義仲ひらきて御覽じて、これはいかなる風のたよりと思しめし讀み給ふに、鎌倉中にては木曾殿御退治の御評談、奥兩國と關東勢が、一つになり、十月の中頃に都のぼりと申すなり、此たびのよろこびには、父の手塚に越後信濃をくだされよ、これにて唐糸がいかやうにも賴朝の御命を、一脇差あてがひ奉らん、木曾殿の御重代に、ちやくいと申す脇差をそへて給はれとこそ書いたりけり。義仲御覽じてなのめならずに思しめし、御返事をあそばしける。そもく\唐糸が忠臣をば山ほどに思しめす、此度のよろこびには越後信濃を取らするなり、唐糸それにて賴朝が命をとるならば、關東八ヶ國を父の手塚にとらせ、あめがしたの副將軍となさうずるなり、唐糸をば、義仲が御臺になすべし、もし又露の命を失はゞ、父の恩に報ぜよかし、此事人にしらすなと書きとゞめ、木曾に傳はる重代のちやくいと申す脇差をさしそへ下されける。下人は

きつくわい―奇怪

かなざし―金刺

唐糸草紙

壽永二年の秋の頃、鎌倉の兵衛佐賴朝は、八ヶ國のさぶらひたちを、皆鎌倉へ召しのぼせ、中門に出でさせ給ひて、さぶらひたちに向つて仰せけるは、いかに方々聞き給へ、そも〳〵平家、賴朝が威勢に恐れてこそ、都をばおちて候ふに、木曾の左馬の頭義仲、十郎藏人行家らが高名顏に關白にやならん、主上にや參らん、法皇にやならんと、天下をほしいまゝに振舞ふことこそ、きつくわいなれ、平家退治のさきに義仲を退治せん、佐竹の冠者もその由を申し、奥州の秀衡も九郎冠者義經をのぼせんと申すなり、この十月の頃なるべし、勢をのこさでつれたまへ、支度せよとぞ仰せける。さぶらひたちはうけ給はり、かしこまると申して、皆國々へぞくだられける。をりふし其頃、鎌倉殿に唐糸の前と申して、御所方の女房あり。これは信濃の國の木曾殿のさぶらひに、手塚の太郎かなざしの光盛が娘なり。あまりに琵琶の上手なり、琴もすぐれてあればとて、十八の年、鎌

唐糸草紙

ゆゑ日本國を思ひのまゝにしたがへて、源氏の御代とならせ給ひけり。

いねう―圍繞（ゐねう）か

の御代になさんため、鬼の娘に生れさせ給ひ、兵法傳へんそのため、かやうの方便ありとかや。さるほどに義經、兵法の卷物取らせ給ひて、土佐の港へつき給ふ。奥州に下りたまひ秀衡にかくと仰せければ、秀衡はうけたまはり、さても御命のはてさせ給ふかと案じ申すところに、兵法傳へ歸らせ給ふ事、日本はやす〳〵切りとらせ給ひ、源氏百代の世とならんこと疑なしとて、喜ぶ事限りなし。是ほどの君はあらじとて、いねう渇仰申しけり。さる程に義經少しまどろみ給へば、天女枕がみに立ちそひての給ふやう、御身は何ともなく渡らせ給ふ物かな、みづからは大王の手にかゝり、空しくなり候へども、御身ゆゑの事なれば、命はつゆも惜しからず、二世のちぎりは朽ちせじと、涙をながし給ふかと見えさせ給ひければ、御曹子かつぱと起きさせ給ひ、いかにやと言はんとし給へども、夢にてあり。あはれと思しめし、涙をながし給ひ、あまりの不思議さに、天女いとまごひありし時の給ひける如く、けんさんに水を入れ、大日の法の一の卷にぬれての法を行ひて、あふむの二字をかきて見給へば、約束にたがはず血一滴うかびたり。さては疑なしとて、歎き給ふ事かぎりなし。さて御僧を供養し、御經をよみ、さま〴〵弔はせ給ひけり。昔より今にいたるまで、夫婦の中ほど切なる事はよもあらじ、かくて兵法

てんくわんのぼう－前には、てんくわのぼうとあり

きに驚き、築地に腰をかけ給ひ、つくゞ物を案じ、かのくわんきよが、兵法を望みてこれまで渡りしを、許さずしてありつるが、天女がありどころを教へ取らせけるぞと思へば、忽ちしらかみの巻物、一二三巻御まへに吹き降る。案にも違はざれば、おつかけよとありしかば、阿防羅刹の鬼ども、千人ばかり出であひて、我さきにと急ぎつゝ、てんくわんのぼうにぶすの矢をはめて、浮沓といふ馬などにうち乗りてぞおつかけける。御曹子あとをきつと見、案にも違はず、天地をひゞかしおつかけける。既に御舟まぢかく見えしかば、天女の教へ給ひし、ゐんさんの法を行ひ、うしろへ投げさせ給へば、平々たりし海の面に、潮の山七つまでこそいできたれ。この山を尋ぬるそのひまに、早かぜの法を行ひつゝ、さきへ投げ給へば、俄に大風ふき來り、四百三十餘日にわたりしを、七十五日と申すには、日本土佐の港につき給ふ。

さる程に鬼ども、御曹子を見失ひ、せんかたなくて立ちかへり、此由かくと申せば、大王大きに腹をたて、天女がくわんきよに心を合せたること疑なし、天女がしわざなれば、助けおきて詮なしとて、花のやうなる天女を、八つにさきてぞ棄てたりける。この天女の本地をくはしく尋ぬるに、日本相摸の國江の島の辨財天の化身なり。義經をあはれみ、源氏

けんさん—建盞、天目の一種
あふむ—阿吽か

天女見給ひ、いかにや、御身きゝ給へ、此巻物の白紙になるうへは、定めてしるしあるべし、大事の出で來ぬそのさきに、はや〳〵歸り給へとぞ仰せける。義經きこしめし、大事出來御身の命のがれずば、われも共に御身の如くなるべし、さらずは葦原國へいらせ給へ、御とも申さんとありければ、天女是を聞き給ひ、葦原國へまゐる事、ゆめ〳〵成らざる事にてあり、名殘をしみの物語に、此兵法の威德を語りきかすべし、御身を返し申さんに、さだめて討手むかふべし、其時ゑんさんといふ法を行ひ、うしろへ投げさせ給ふべし、海のおもてに、しほ山出來あひへだたるべし、山を尋ねんそのひまに、逃げのびさせ給ふべし、第三の巻物に、らむふう、ひらんふうといふ法を行ひ給ふものならば、日本の地に程なくつかせ給ふべく、みづからが事を思しめし給はゞ、大日の一の巻に、ぬれての法と申すを行ひ給ひて、けんさんに水を入れ、あふむといふ文字を書きてみ給はば、その水に血うかび申すべし、其時父の手にかゝり、最後ぞと思しめし、御經よみて弔ひたまへ、大事いできぬそのさきに、とく〳〵歸り給へとて、天女はうちに入り給ふ。御曹子は忍びて内裏を出でさせ給ひ、かんふう川へ御舟を乘り出ださせたまへば、案にもたがはず、内裏には火の雨ふり、いかづち鳴り、くらやみにこそなりにけれ。大王大

りやう｜龍か
こそうの點｜こ
そうは虎爪か

はやとく〳〵とありければ、此内裏に大日の兵法のましますほうけ給はる、一日みせ給へとの給へば、それは是よりうしとらの方より七里奥に、壇を築き注連を張り、石の倉にこめおき、金の箱に納めつゝ、たゞ世の常の事ならず、ことさら女のまゐる事、なかなかならざる處なり、その事ばかりは思ひもよらぬ事とぞ仰せける。義經きこしめし、こゝにたとへの候ふぞや、父の恩の高きこと須彌山よりもなほ高し、母の恩の深き事は大海よりも倘ふかしとは申せども、親は一世のむすびなり、不思議なりとよ、夫婦は二世の契ぞかし、一夜の枕をならべしも、百生の契にて侍るなり、御身と我とはこと更に蒼波萬里をへだてたれども、誠に他生の契深きことなり、何とぞ案をめぐらして、かの巻物を一目みせてたべとぞ仰せける。天女は此由きこしめし、おもふ中の事なれば、父の勘當は蒙るとも、見せばやと思召し、ふしやうなる身ながらも守刀を持ち給ひ、七里山の奥におしいらせ給ひ、七重の注連をひき拂ひ、石の土藏を見たまへば、文字三ながれあり、是にりやうといふ字をかきて、こそうの點を打ち給へば、石の土藏はひらけにけり。金の箱の蓋を開き、ふしやうの手にとり、我屋にかへり給へば、御曹子斜ならずに思しめし、三日三夜に書きうつし給ふ。奇特の兵法なれば、あとは白紙とぞなりにける。

大庾嶺—傍訓原本のまゝ

八十すいかう—八十種好の訛なるべし

がさね、唐綾織一かさね、十二ひとへを引き重ね、女房たち十二人ひきつれ、七重の屏風、八重の几帳、九重の幔(まん)の内より出でさせ給ふ御有樣を、物によく〳〵たとふれば、十五夜の月の、山の端をほの〴〵出でし御姿、ませのうちの八重菊、大庾嶺(たいゆふれんい)の梅の花かと疑はれ、いでさせ給ひて、父大王の右手(めて)の脇になほらせ給ふ御姿を見たてまつれば、三十二相、八十すいかうのかたちをもたせ給ひたる姫君にてこそおはしけれ。御曹子は御覽じて、たとひ命はすつるとも、一夜(いちや)なりとも馴れてこそ、この世の思出ともなるべしと、心そらにあこがれて、樂はさま〴〵多けれども、男は女を戀ふる樂、女は男を戀ふる樂、想夫戀(さうふれん)といふ樂を吹かせ給へば、天女はこれを聞き咎め、くわんきよがみづからを心にかけるやさしさよと思しめす。大王仰せけるやうは、あの姫は去年(きよねん)三月に母に離れ、心慰むかたもなし、竹を鳴らして聞かせよと仰せあり。酒もすぐれば、大王御座敷をたち給へば、天女も共にたち給ふ。御曹子も慕ひゆかせ給ひ、一日二日と思へども、日かず積りければ、天女も岩木ならねば靡かせたまひ、淺からず契をこめ、心うちとけ給ふ時、御曹子天女にの給ひけるは、われ葦原國より望ありてまゐりたり、叶へ給はゞゆめばかり語り申さんと仰せければ、天女はきこしめし、何事なりとも叶へ申さん、

まき染ー布を巻きたるまゝ所々くゝりて染むるをいふ

は、いづくにあるぞ、見てまゐれとありしかば、ゐしやき立ち出で見て、もとの處にありけるを、よく〳〵見てぞ歸りける。

大王にかくと申しければ、大王聞召し、さては不思議のものかな、さらば出でて酒盛して、竹を鳴らさせ聞かんとて、今度は姿をひきかへて出でばやとの給ひて、阿傍羅刹を千人ばかり引き具して出でさせ給ふ。大王の出でたちには、年の齢四十ばかりの男にいでたち給ひ、烏帽子裝束を引きつくろひ、三でう重ねのたゝみの中程に、むずとなほり御曹子を左手の方へ呼び寄せなほらせ給へば、前見し姿はかはりけり。御盃はじめ給ふ。くわんきよは竹を鳴らせとの給へば、たいとう丸を拔きいだして、くわいはいらくといふ樂を吹かせ給へば、面白いぞや、くわんきよ、廻盃樂といふ樂は、盃をめぐらすと云ふ樂なり、さらば盃めぐらせとて、順逆なりとさす程に、酒もなかばと見えしかば、大王扇とりなほし、錦の暖簾かきあげて、あさひ天女は聞くかとよ、葦原國のくわんきよが、竹を鳴らすがおもしろきに、出でて聞けやとの給へば、天女はきこしめして、出づまじき物とは思へども、父の仰せにてありければ、出でばやと思しめし、出でたち給ふ御裝束、しげまき染の花のやうなるに唐卷染、菊がさね、むらがさね、このはがさね、八重

字千金のことわり、師匠の恩は七百歳と說かれたり、されば御身渡りて河の案内知りたるらん、その河をば、かんふう河と申すなり、水の底より大風ふき、白波たちて、葦原國の氷に百千まさりつめたかるらん、その河にて、朝三百卅三度、ゆふに三百卅度垢離を取り、三年三月精進をして、八月十五日に一度習ふ大事なり、葦原國の大天狗太郎坊もわが弟子なり、四十二卷の卷物を相傳せんと申せしが、やう〳〵に廿一卷、いのほうまで行ひて、それより末は習はぬなり、もしそれを習ひてやあるらん、それを習ひてあるならば、われ〳〵が目の前にて、こと〴〵く語るべし、其後大事を傳ふべしとの給ひければ、御曹子は聞召し、もとより鞍馬育ちの事なれば、毘沙門天王の化身、文珠の再誕にてましますうへ、文字にくらき事ましまさず、鞍馬の奥にて習はせたまひし、四十二卷の卷物を、こと〴〵く行ひ給ふ。大王御覽じて、誠に汝は心ざし深きものなり、神妙なりと仰せありて、さらば許し申さんとて、師弟の契約をなし給ふ。先りんしゆの法、かすみの法、こたかの法、きりの法、雲井に飛び去る鳥の法などを、御傳へあり。是より奧は無益なりとて、御座敷をたゝせ給ひにけり。御曹子はたゞ一人、廣庭におはしまし、とやせんかくやあらましと、佇みたまへば、大王は、ゐしやきといふものを使にして、くわんきよ

ひやうし—袋しか

油單—笛の衣をいふ

見給ふに、五色をひやうし出で立ちて、十六丈のせいにて、手足は八つ、角は三十ありて、よばはる聲は百里が間も響きわたるなり。肝たましひも身にそはず。大王は大の眼に角をたて、日本葦原國より渡りたるくわんきよとは汝が事かとの給へば、まなこは朝日のかゞやく如くなり。汝は竹とやらんを鳴らすと聞く、吹けきかんと云ひし有樣、おそろしき事は限りなけれども、思ひ設けたる事なれば、たいとう丸を取り出だし、錦の油單はづし、ねとりすまし給ひて、樂はさま〴〵多けれども、それ天竺にてはしょとり、へいとり、とくてん、とやかてん、りんせい、さうふれん、しゆみやうわう、にちはんらく、鷲破霓裳羽衣の曲と申せし樂、爰をせんどと吹き給ふなり。大王うつら〳〵と聞きたまひてなのめならず喜び、さても奇特に鳴らすものかな、よき小くわんきよはこれまで渡りたり、三百年以前に葦原國よりわたり、忽ち道にて命を失ふもののあるが、汝はこれまで難なう來る不思議さよ、望のありて來りけるか、隱さず申せとありしかば、御曹子聞召し、恐れがましき事なれども、此內裏に大日の兵法のましますよし承りおよび、是まで參りて候ふなり、御なさけに御傳へありて給はり候へかしとの給へば、大王聞召し、あらやさしのくわんきよの心ざしや、難なく是まで來り、師弟の契約となのるぞや、七生の契なり、一

霞の息云々―蝦夷人は息を吹きて霞となすと云へり

あふちう―皇麞か

かんしゆ―甘州

さうふれん―想夫戀

まんしゆらく―萬秋樂

しゆみやうりう―春楊柳の訛

やこんらく―夜半樂の訛

くわんきよ―冠者といふべきを、わざと蝦夷語めかして言ひかへたるなるべし

十丈ばかりに見えにけり。十二の角をふりたてて、霞の息をつきければ、長夜の闇とぞなりにけり。義經は御覽じて、日本にてあるならば、十萬餘騎が來るとも、物のかずとも思はじに、かゝる處にてとやせんかくやあらましと、思ひまはせば小車のやるかた更になかりけり。せめての名殘とおぼし召し、少しの暇を乞ひ給ひ、たいとう丸を取り出だし、千五上句中六下九とて、八つの歌口花の露にて打ちしめし、時の調子をとり合せ、黄鐘にあふちう、かんしゆ、さうふれん、まんしゆらく、しゆみやうりう、やこんらくといふ樂を、今ぞかぎりと吹き給へば、阿防羅刹は是を聞き、餌食にはしたけれども、竹を鳴らすが面白ければ、ゆるして吹かせ聞かんとて、霞の息を引きければ、もとの空にぞ晴れにける。御曹子は時の命をたすかりて、こゝをせんどと吹き給へば、あまり面白きに、いざや習ひて吹かんとて、竹をもとめて穴をあけ、吹きて見れども鳴らざれば、只くわんきよが吹くほど面白き事よもあらじとて、東西をしづめて聞きけるが、ある鬼がいふやうは、是程おもしろき事を我等ばかり聞かんより、いざ大王へ申さんと申しければ、もつともと申しつゝ、やがて奏聞申しけり。大王きこしめし、いかなる事ぞや、見給はんとて、八十二間の廣椽まで呼びたまひければ、やがてまゐり給ひて、大王の出でさせ給ふ姿を

たゝせいめうしゆやしやき―未詳、但しやしやきは夜叉鬼なり

蝦夷が島とて隱れもなき島なりと申しければ、御曹子きこしめし、これより千島の都へは、いかほどの船路ぞと問はせ給へば。これより都へは、順風よくして七十餘日、只よの常の船路ならず、同じくは是にとゞまり給ふべし、住めばいづくも都なり、竹を鳴らしてきかせ給へ、命を助くるうへなれば、何に恐れ給ふぞや。義經聞召し、とゞまるべきにもあらずとて、暇ごひをぞし給ひける。島人は色々止め申しけれども、十日ばかりは休み給ひて、そののち船をおしいだし、あたりの體を見給ふに、渡るべきやう更になし。御曹子垢離をとり、潮をむすび手水として、珠數さら〳〵とおしもみて、南無や梵天帝釋、四大天王、日輪月輪、總じては氏神正八幡、ねがはくば、島へ難なくわたしてたび給へと、祈念ふかく申させ給ひ、艪かいかぢを取りなほし、風にまかせて行くほどに、はるかに遠き船路なれども、祈誓のしるし現れて、音にきゝし千島の都につき給ふ。大王のうちを見てあれば、心も言も及ばれず。地よりは三里たかく、八十町のくろがねの築地、鐵の網をはり、くろがねの門を立てたりけり。門のあたりを見てあれば、牛頭馬頭阿傍羅刹、たゝせいめうしゆやしやきとて、鬼どもあまた居たりしが、御曹子をみつけ、横手をはたとうち、あら嬉しや、餌食にせんとて中にとりこめけり。彼等がせいを見給へば、

てんくわのぼう—アイノ語に得物をふりまはす事を「テンカコンナ」といへばそれを訛りてテンクワの棒といふならん

ぶすの矢—附子の毒を塗りたる矢

打ち、あら嬉しやといふまゝに、てんくわのぼうに、ぶすの矢を持ちて、中にとりこめければ、いたはしや御曹子、既に御命あやふかりける有樣なり。淺ましや、かゝる憂目(うきめ)にあふ事も、前世の因果めぐりきて、かゝる憂目にあふ事よと、心細くて、すこし心をとりなほし、島人にの給ふやうは、少しのいとまをたび給へ、竹を鳴らして聞かせんとありければ、少しくつろげ奉る。其ひまにたいとう丸を取りいだし、ねとりすまして、萬壽樂(まんじゆらく)といふ樂を、しばし吹かせ給へば、島人是をきくよりも、竹を鳴らすが面白きに、いかほども鳴らせとて、皆々しづまり笛を聞きてぞゐたりける。義經は御覽じて、物語をし給ひける。此島の名をば、何といふぞと問ひ給へば、

へば、せいの高さは一尺二寸ばかり、扇のたけに等しきほどの者、三十人ばかり出で來れり。御曹子は御覽じて、此島の名は何といふぞと問はせ給へば、島人まなこに角をたて、何といふぞや、冠者は、是こそは隱れもなきちひさご島とは此ところなり、又ぼさつ島とも申すなり、ちひさご島と申すは、餘りせいのちひさき故なり、またぼさつ島とは、よるも三度、ひるも三度、南方極樂世界より二十五の菩薩たち、管絃を奏し影向なり、異香薫じ、花ふり、紫雲たちて殊勝なり、しかるゆゑに此島をぼさつ島とは申すなり、人の命も長くして、八百歳を保つなりと申す。義經きこしめし、扨は菩薩のましますかや、一日なりとも留り、拜まばやと思召しければ、案のごとく二十五の菩薩影向ならせ給ひて、管絃音樂し給ひて、心も詞も及ばれず。法華經に說かれたり、らうりくとくあんおんらくと聞く時は、ありがたしありがたし、上品上生、極樂世界うたがひなしと思しつつ、隨喜の淚を流したまふ。誠にあり難しとは思へども、こゝに心をとめてもせんなしとて、また御船をおし出だし、風にまかせて行き給ふ。明けぬ暮れぬとせし程に、九十五日と申すには、又不思議の島につき給ふ。さるほどに御船を渚によせて見給へば、年の程四十ばかりを先として、二三十人いで來り、御曹子を見たてまつり、橫手をはたと

むくり―蒙古

なんしう―南州か

最愛―最愛の夫の意

んとて、たいとう丸を拔きいだし、干、五、上、勻、中、六、下、九とて、八つの歌口に花の露を吹きしめし、時の調子を取り、黃鐘にて吹き給へば、女共は是をきゝ、面白いぞや冠者、島のまほりにしたけれども、竹を鳴らすおもしろさに、しばし許し申さんと、鉾を投げすて笛をこそは聞きにけれ。さる程に御曹子は、たばかりたると思召し、そのあひ〳〵に物語をぞし給ひける。われ日本葦原國より、むくり退治のそのために、十萬餘騎のつはものを揃へて渡るなり、これらをとり給ふべし、われ〳〵を斬りて、少しづつまほりにかけ給はんより、男一人づつ夫と定めてもち給へ、十萬餘騎の人かずはわれらのまゝにて候へば、いそぎ歸りてわたさんと仰せければ、島の女どもよろこび、心うちとけ語りける。此島は隱れなき女ごの島とぞ申しける。義經仰せけるやうは、女ばかりにて、和合のかたらひなくして、種をばつくるぞとの給へば、さればこそとよ、是より南にあたり、なんしうといふ國あり、その方より吹きくる風、南風と申す、これふくみて最愛とす、又生るゝも女にて、かやうに多く侍るなり。御曹子は聞召し、やがて男をまゐらせんと、いとま乞ひしてたばかりすまし、御船をおし出だす。風にまかせて行くほどに、三十餘日と申すには、又ある島につき給ふ。さるほどに御船なぎさに寄せて見給

まほり―守、護符

のたまふは、是より千島の都へはいかほどの舟路ぞやと問はせ給へば、島人うけたまはりて、喜見城の都へならば、順風よくして三年、風あしくば七年にもわたるなりと申しければ、御曹子きこしめし、かなたこなたの島わたりして、心勞をせんよりは、これより歸らばやと思しめして、案じ煩はせ給ひけり。島人ども申しけるは、此島に御とゞまりあれとぞ申しける。さるほどに義經案じかねておはしけるが、待てしばし我心、此まゝ歸る物ならば、秀衡に何といふべきやうもなし、見限られては叶ふまじと思しめし、又御舟を漕ぎいだし、日數つもりて七十二日と申すに、又ある島につき給ふ。渚により て見給へば、年の程四十ばかりを先として、十七八なるものもあり、女あまた出で合ひて、御曹子をとりこめ、あら嬉しや、島のまほりこそ來れとて喜び、既に害せんとしけるに、御曹子仰せけるは、いかに島人たち、まづ物を聞き給へとありければ、それには取りあひ申さずして、おのれら互にいふやうは、二三百年がそのさきに、葦原國より男三人來りしを、おさへて斬りて島人のまほりにし給へば、それより島はめでたうして何事も思ふまゝなり、皆々よりてきり取りて、まほりにせよと言ふまゝに、鉾をよこたへかかりたり。義經今を限りとおぼしめし、少しのいとまをたび給へ、竹を鳴らして聞かせ

ゑちー越にて南越國の事にやはたひゐんーゐんは印なるべし

給へば、島人うけ給はり、是は王せん島と申して、かくれもなき馬人島とはこの所なり。御曹子はきこしめし、面々の腰につけたるは、いかなる物ぞと問ひ給へば、是は太鼓と申す物なり。何のために付くるとの給へば、島人申すやう、われ〱が背のあまり高くして倒れてあれば起きあがる事なし、叫べど聲の出でざる時、是を打鳴らし候ふと申す。義經しばらく物語して、逗留も詮なしとて、又御舟をおし出だす。風にまかせて行くほどに、八十餘日と申すには、又ある島へぞ著き給ふ。渚によせて見給へば、男女の隔てはしらず、三十人ばかり裸にて居たりしを御覧じて、いかに島人、この島をば、いかなる島との給ひければ、さん候ふ此島はかしまと申して、かくれなき裸島と申すなり。御曹子きこしめし、これは神の誓かや、所のならひか、不思議なりと仰せければ、神の誓にてもましまさず、只昔より此所のならひにて候ふとて、かくなん、

　風ふけばさむくはあれど裸島麻の衣のやうを知らねば

義經きこしめし、やさしき事を申すものかな、さらば麻の衣をまゐらすべしとて、南に向はせ給ひ、はたひゐんと申すを行ひ給ひて、三度まねかせ給へば、ゑちの上品七八十船中にみえたり。すなはち是を島へ與へ給へば、島人ども喜ぶ事かぎりなし。其後義經

熊野三所―本宮、新宮、那智

入り候ふと申せば、名船いかほどとの給へば、船頭共うけ給はり、船の數は一千艘と申す、その中に七艘さふらふ、こたか、はやつき、波くゞり、はやかぜ、いはわり、なみわたし、いはくだきとて御座あると申す。義經きこしめし、餘の船はほしからず、はや風と好ませ給ひ、こがね百兩に買ひとり給ひ、御座船と號して、尋常に飾り、かしらには鞍馬の大悲多聞天、ともに氏神正八幡大菩薩、ろかいには廿五の菩薩を書きたてまつり、勸請し、祈誓を申させ給ひ、土佐の港を漕ぎ出だし、蒼波萬里へおしいだす。潮をむすび手水とし、日本の神々を拜みたまふ。上は梵天帝釋、下は四大天王、熊野三所の大權現、大小の神祇、ことには下界の龍神、鹽竈六所の明神、ねがはくは千島へ渡してたびたまへ、大慈大悲と祈念して、風にまかせて行くほどに、通る所はどこ〳〵ぞ、こんろが島、大手島、猫島、犬島、まつ島、うし人島、おかの島、とゝ島、かぶと島、たけ島、もろが島、ゆみ島、きかいが島、ひるが島を、明けぬ暮れぬと行くほどに、七十五日と申すに、きようがる島につき給ふ。渚より見給へば、高さ十丈ばかりのもの二三十人出で來りしが、腰より上は馬にてあり、下は人なりしが、腰のあたりを見給へば、太鼓をつけてぞ居たりける。義經見給ひ、あまりの事の不思議さに、いかに島人たち、此島は何といふぞとの

わがてう―我朝

御曹子島わたり

さる程に御曹子、秀衡を召されて、都へ上るべきやうを問はせ給へば、秀衡うけ給はり、日本國は神國にてましませば、ものゝふの手柄ばかりにては成りがたし、是よりも北州に一つの國あり、千島とも、蝦夷が島とも申す、その内に喜見城の都あり、其王の名をばかねひら大王と申しけり、かの内裏に一つの卷物あり、其名を大日の法と申してかたき事なり、されば現世にては祈禱の法、後世にては佛道の法なり、此兵法を行ひ給ふ物ならば、日本國は君の御まゝになるべし、何とぞ御てうほふあつて御覽候へと申したてまつれば、義經此由聞しめし、とやせんかくやあらましと、しばし物をもの給はず。やゝあつて所詮只かの島へ渡らばやと思しめして、秀衡にいとま乞ひ、旅の裝束し給ひて、吾に聞きしわがてう四國土佐の港へつきたまふ。船頭を近付けて、是はいづくへ行く舟ぞ、數はいかほどあると問はせ給へば、船頭共うけ給はり、これは北國、又は高麗の船も御

御曹子島わたり

如意輪―傍訓原本のまゝ

これはたしかなる幽靈なるとて、草叢をかきわけて見たまへば、女はなし、たゞ白骨と薄一むら生ひにけり。これを見たまひしより、いよ〳〵世の中のあはれ、人のうへと思ふことをば、いかにも山坂を隔ててもとひ給ふべし。

此物語を聽く人、まして讀まん人は、すなはち觀音の三十三體をつくり、供養したるにも等しきなり。小町は如意輪觀音の化身なり、又業平は十一面觀音の化身なり、あだにもこれを思ふべからず、南無大慈觀音菩薩と回向あるべし。

をうの心―誤字あるべし
名所みち―名所みんなるべし
けふの郡云々―後拾遺、能因「錦木は立てながらこそ朽ちにけれけふの細布胸あはじとや」
かの小町は―「は」は「が」の衍なるべし
候へ―原本「候ひ」とあり、今改む

ひたる絲薄、よる〳〵風の吹きにけり。をうの心あるやうに聞きにけり。尋ぬる人もなきまゝに、とぶらふかたらひ更になし。不思議やな、在原の業平は、歌の名所みちとかや、けふの郡、織る細布の胸うちさわぎ、かの小町は朽ちはてしあとをとぶらはゞやと思ひしが、しばし心にうかゞはせ給ふことありて、休らひ給へば、歌の上の文字、吹きくる風につたはりて、

くれごとに秋風吹けばあさな〳〵

と、さやかに聲の吹きければ、業平、下の文字をつぎたまふ。

おのれとは言はじすゝきの一むらと詠じ給へば、いづくともなく、みめかたちいつくしき女房出でて、いかなる人にてましませば、この草むらに立ちよりて、歌の下をつけたまふらん、これこそ古きこえし色好みの小町が老い衰へて、白骨となりて失せにしあとにて候へ、もし都人にてましまさば、かやうなる所ありと、業平にかたり給へとなり、それをいかにと申すに、業平はなさけも深き慈悲の人にてましませば、さて小町はこの世にはや無きかと聞かせ給はゞ、とぶらひにもありぬべしと、業平とは、業をたひらむると書きたれば、おのづからこの業平を呼びたてまつれば、惡業も皆消えにけりとなり。業平、

かけくまの松云云ーたけくまの誤なり、後拾遺、季通「武隈の松はふた木を都人いかゞと問はゞみきと答へん」

人ならば都の旅云々ー伊勢物語「栗原の姉歯の松の人ならば都のつとにいざといはましを」

くるしののー此歌誤脱あるべし意義通ぜず

雪をいたゞきてー此上に「頭に」の二字脱せしか

ぶ摺、袖にもうつしとゞめばやと、宮城野の小萩が花のむらずすき、靡くけぶりは鹽竈の、八十島かけて千賀の浦波、淺香の沼のかつみ草、緒絕の橋や阿武隈川のわたりして、ゆきみの里のほど近し。はなかの櫻、かけくまの松の木立もみきときく、あこやの松やあねはの松、人ならば都の旅にさそふべきと、よみし歌の枕を、せめて筆にうつしても、見ばやと思ひし言の葉の、いまは目に見ることの嬉しけれども、いたづらに歌枕よむとても、たれか小町が歌とて、もてあそぶ人もなし。

くるしののいたづきやするこものてうありし昔に君をとゝける

とありし歌の心かや。雪をいたゞきて、額に苦海の浪をたゝへ、身には首までおひずりをかけ、ねぶりのうちにも果てよかしと思へど、つれなく殘る有明の、影も形も衰へていづくともなくあこがれて、細杖に草の衣ひぢにかけ、笠と簑と棄てもやられぬ身のはてしがなと思へども、いつの時をか待つべきと、歎き悲みけれども、さすがに惜しきは命なり。厭へども厭はざるをば老の坂、願へども叶はぬは和歌の浦のたづの聲かなと、年をへて今日はみちのくの玉造の小野といふ草原に宿りして、あさなゆふなを暮しけり。岩木にもあらざれば、つひにはかなく露と消えにけり。あたりを見れば、草ふかく繁りあ

さいぎやうじ―西行法師の誤なるべし

さすがにかけし云々―伊勢物語「武藏鐙さすがにかけて賴むには問はぬもつらし問ふもうるさし」

都をば云々―後拾遺、能因「都をば霞とともにたちしかど秋風ぞ吹く白川の關」

ゆるしほけぶり、われは八十路あまりの身なれども、いにしへの歌人のよみしことは、なほもおろかと思はれて、かくなん、

　淸見潟こゝろに關はなかりけりおぼろ月夜のかすむ浪路を

又さいぎやうじの歌に、

　風になびく富士のけぶりの空にきえて行くへも知らぬわが思ひかな

とよまれしも、今こそ思ひ知られたれ。さらぬだに物憂きことは東路の、埴生の小屋のいぶせきに、都の空を見て、けふはうき身を浮島が原にまよひ出でて、行きかふ人の道しるべとて、たどり〳〵行くほどに、ゆくへも知らず、はてもなき、武藏野のすゑになる、草葉におく露の玉鉾の、道のほとりの早蕨を、折りてもち居たり。これもものうき露の命たすけんために、ひぢかけがさ、さすがにかけし武藏鐙と、古歌にも有るぞかし。などか人の情のなかるらんと、ゆふべ〳〵の假枕、草の衣に草むしろの、深き心はあらずして、日かず積れば陸奥の、しのぶの里にほど近し、都をば霞とともに出でしかど、けふしら川の關にもつきにけり。げにや命ほどつれなきものはよもあらじ、遠きあづまの旅衣、きつゝ怨むるかひもなし。都にて身のむかしをみちのくや、しのぶの山のしの

思ひきや美濃のお山の一つ松契りしことはいつもかはらじ

とよみしは、これはいつはりなり。契ることはかはりきて、月よりほかの友はなし。はや行末はみのをはり、何となるみの潮干がた、あしやをさして鳴くたづの、ゆふべの聲までも身のうへかと、潮汲むあまの衣ほすまもなき、わが袖かなとあらそひて、こゝやかしこを打過ぎぬ。もしもやわがよびつぎの里もやあると聞きゐたり。松風の里のあたりさびしやな、さよ千鳥聲こそ近くなるみがた、かたぶく月にしほや滿つらんと、八つ橋の蜘手に物やおもふらん、一むら山や、みやぢ山、日もはや既にくれはどり、あやはかなき身の、いつか身のゆくへをとはたふみ、さよの中山こえやすし、憂きにもかこつ命なりけり、露の枕にかたぶきて、

たびねする木の下露の袖にだにしぐれぬるなりさよの中山

と詠じけるこそやさしけれ。いかなる罪のむくいにて、かゝる憂き身の旅をするがなる、宇津の山路をこえにけり。昔は夢かうつゝの山路を、あとも見えぬ蔦の細道かきわけて、草のこもともしをれけり。今はまた何をか身にも纒へんと、なく〳〵おきつの濱千鳥、淸見が關につきにけり。富士の高嶺に立つけぶりをながめ、漕ぎゆく舟をみほの浦、松原こ

あしや—葦間の誤か

よびつぎの里—原本「よひ月の里」とあり、今改む

草のこもと—草のたもとの衍なるべし

いざ立ちよりて云々ー古今十七「鏡山いざ立ちよりて見てゆかん年へぬる身は老いやしぬると」

山路をたどりゆく程に、遠きあづまに思ひきぬ。をちこち人に問ひ給へば、はや逢坂山につきにけり。これやこの蟬丸のすてられし跡かとよ。たづぬれど小町に答ふる人もなし。たづきも知らぬ旅人を、とむる關屋はあれども、小町をとゞむる關守はなし。わが身一つのひとりごと、よしや人をも怨むまじ、たゞわが身のありさまを、ゆふつけ鳥の聲までも、泣く涙おちそひて、頼む力は竹の杖、ふすかとすれば草莚、枕となるは、この宿のなさけの人もなきまゝに、立ちよる蔭は松のした、休み〳〵ゆく程に、鏡の山につきにけり。いざ立ちよりて、老の形をも見るやとて、しばしは足を休めつゝ、いまは賤しき身とはなりぬれど、一首かくなん、

花の色もうつしとゞめよ鏡山春よりのちの影もみるやと

かやうに詠じ、又小町、

人影もせぬものゆゑに呼子鳥何を鏡の山になくらん

とうちながめて、人伴はねども、又とふ人もなけれども、むかひの里につきにけり。さだめし宿はなけれども、雨はふりきぬ美濃の國、みののおやまの一つ松、語らふ友はまれにして、いそぎ〳〵ぞ下りける。

たゞそふ—たゞよふの衍か

さてしもあらざる—さてしもあらざればの衍か

そんをひろげ物をたて給へ—そでをひろげ物をたて給への誤にや

夢につたはりたることわり、明けくれ思ひすつる言の葉、誰かは老の坂を越えざらん、のがるべき道もなし、花もさすが萎めるうちに、嵐はげしくして、さそひぬる時もあり、入らずして雲にたゞそふ月もあり、これ生死の境にひとしくして、よろづ身のうへと思ひける、ある歌に、

世の中を何にたとへんあさぼらけ漕ぎゆく舟のあとの白波

とよまれけるも、ことわりなりと思ふにも、ひまもなくして、淨土を願はざりけり、いかでか馴れにし人も助からざるべき、みづからも狂言綺語のことわりをふり棄てて、大悲をたのみ申すべしとて、かき消すやうに失せにけり。不思議やな、夢にたはぶれつる心して、ゆき方しらず歸りたまひし面影を、かい見えさせ給はずて、うせ給ひつるは、是は業平にてはましまさずや、觀音菩薩と思ふなり。さてしもあらざる草のとぼそ引きたてて、又里へとて出でにけり。こゝやかしこの門に立ちて、そんをひろげ物をたて給へと、聲をあげて立ちゐたり。見る人ごとに、いにしへの小町がなれる姿を見よやと有りければ、集りこぞりてさゝやきける。

あさましや、あまりに都のほとりは、われを知らぬ人もなしとて、足にまかせて、足曳の

みづからが、衰へはてたる有樣、譬へんかたもなき心なりとて、又袖を顏におしあてければ、業平、むかしを忍び給ふなよ、逢ふは別れのはじめ、生るゝは死すべきはじめ、ただ水の泡なる世に、何事をいま語り給へる、ふみのかずを打忘れ、思ひしことを拂ひすて、南無西方極樂世界へ迎へさせ給へと念じ給ひて、わが苦患をものがれ、馴れにし情の人をも助け給へと、在原の業平くどき給へば、小町、いよ／＼心をひるがへし、あら嬉しの御詞ぞや、生死流浪の迷ひの道しるべ、敎へ給ふことの有りがたさよ、よく／＼思ひつゞくるに、妄執の深きは女人なり、觀音とも、地藏とも、御身を賴み申さんとありければ、まことの道を願ふこそ、佛も慈悲を垂れ給へ、われも過ぎにし古事を語りてきかせ申さんとて、同じ懺悔をし給ふ。われも心をうつし、身をすてて色ごのみは數をしらず逢ひ馴れしかども、その中にも思ひとめしはわづかなり、以上十三人、第一染殿の后、第二には紀の有常がむすめ、第三には齋宮の女御なり、そのほか伊勢物語にかきつけし筆のあとに見えぬべし。

みづからも千人としるしたり、これ皆いつはりの情なり、まことに妄執の雲晴れにけり、などか成佛ならざらんや、されば世の中のさだめしことは定めありと、むばたまの

ますだのいけみ—益田の池を、生けみ殺しとかけたり
鮒包焼き—鮒の包焼は近江の名物なり、それを焼きすつるとかたりけり

なばたの逢瀬の中のふみも有り、妹背の中のふみもあり、思ひあかしの文も有り、宇治の柴舟のふみもあり、戀をするがのふみもあり、富士のけぶりの文もあり、難波津の細道たえし身をつくしのふみもあり、すみよしや、きくに人なきふみもあり、濱の眞砂のふみもあり、よみつくしえぬふみも、歌にそへたるふみもあり、やどりの文もあり、おもひますだのいけみ殺しのふみもあり、堅田の鮒包焼きすつるふみもあり、阿漕が浦にひく網の、目にあまりたるふみもあり、藻にうづもれしたまがしはの文もあり、あはれみても兒手柏の文もあり、蓬生の宿とかきたる文もあり、淺香の沼のかつみぐさ、かつ見しより思ひの種と書きたるふみもあり、珍しき初雁がねのおとづれのふみもあり、うはの空にも聞くやいかにと書きたるふみもあり、さゝがにのいとはかなき文もあり、逢坂山のさねかづら、くる人もなきふみも、おぼつかなくも呼子鳥のふみもあり、八つ橋や、蜘手にちかひたるふみもあり、へだてもあらじ杜若、色紫のふみもあり、箒木のよそながら見し文もあり、風のたよりの文もあり、細谷川の丸木橋のふみもあり、室の八島に立つけぶりの文もあり、野中の清水とかきたるふみもあり、雪のしたがさねの、紅染のふみもあり、われ知らぬふみもあり、山時鳥きかまほしさは一聲をと、戀ひそめし

いくへふたすき—いくゆふだすきの誤にて、幾多の木綿襷の意にや

げなる心地して、おちぶるうちにも誰にか靡かんと、うしろめたくも思ひしに、いつのまに變りはてたる花園の、かれ〴〵になる草の葉をとぶらひ給ふは不思議さよ。その歌人の色にふけりしこと、かずを白玉の、手にとる文のかず數多ありしかども、身のはてしまではなさけのつまは無かりけり。

ありがたの在原や、これこそよき便なれ、いで過ぎにし愛念のうちをかたり申さんと、恥しながらいくへふたすきかけて、頼みはありそ海の底ひなく、懺悔申さんと有りければ、涙にむせび給ひて、業平仰せけるは、さらぬだに女は罪ふかくして、業障の雲あつく、眞如の月も晴れやらず、心の水も濁りつゝ思ひと思ふことは、惡業煩惱の絆なり、されば佛も經に第一嫌ひたまふ、しかりとはいへども、男なくして女なし、佛なくしては衆生なし、愛別離苦のことわり、皆目の前ぞかしと語り給へば、小町は手をあはせて禮し、その後懺悔をかたりけり。それ戀路にまよひし人は、第一にみかどの御歌、第二に貫之が玉章、さては花に結びし文もあり、あさがほの黄昏時のふみもあり。よそめを包むふみも、涙おとしたるふみも有り、岩もる水のふみもあり、うきを名をしどりの文もあり、筧の水の文もあり、つまのをじかの文もあり、うらみを葛の葉のふみも有り、た

昔むかへさせ給へとて念じつゝ、ありがたや、はや行末は近く、なぎさの法の舟うかぶ、たよりは六つの文字、唱ふる聲はひまもなし、いかでか諸佛も助け給はざるらんと思ひつゝ、をりふし小野の細道かきわけて、草のとぼそをうちならし、いにしへの色好みの小野の小町はこれに渡らせ給ふかととはれければ、はづかしや、こはそも夢かうつゝか幻か、いかなる人にてましませば、いやしき柴の戸に竹の柱のふしどころをば問はせ給ふは、こなたの事か、よそのためか、何事ぞや、よく〱思へば同じ色好みの、なさけも殊に在原の、おもかげは業平の、あらはづかしわが姿、さしもこそ、花の姿の袖かさね、にほひも深き梅衣、たち姿は女郎花の、露おも

ちり〴〵袖やしぼるらん、戀しの昔や、しのばしの心や。いにしへはかりに住みにし宿までも、玉をみがき庭には瓔珞をかけ、戸には水晶をつらね、臥し待つ月の床のうへには花のにしき、玉をつらね、戸をそばだてて、枕の塵を拂ひ、心にかゝる人あまたねてのながれなり、あはれなるやうにて强からず。さればよみし歌にも、

　思ひつゝぬればや人の見えつらん夢と知りせばさめざらましを

またうたに、

　色みえでうつろふものは世の中の人の心の花にぞ有りける

と詠じ給ひしも、げにことわりと詠みしなり。今も思ひあはすれば、業平の歌に、

　月やあらぬ春や昔の春ならぬわがみ一つはもとの身にして

とえいじ給ひしもげにことわりと、口ずさみして泣くより外の事ぞなき。身の有樣を思ひつゞけてかくなん、

　わびぬれば身を浮草のねを絶えてさそふ水あらばいなんとぞ思ふ

かやうに詠みおける言の葉までもあはれなり。今は只たのむかたとては、南無大悲觀世

狂言綺語の身なれども、今は只朽木の柳いとゞしく、姿は女の歌、此小町が歌は衣通姫

御さうみやうし ―誤脱あるべし、意義通ぜず

來の御さうみやうし、されども一の御さうはあまりに申しいだすも恐れなりとて殘し給へり。されば歌をよくよめば、佛をつくり、供養したてまつり申すと同じ。わるくよめば、佛をつくり損ざするると見えたり。又小町は男にあふこと、まづ千人としるしたれども、あうて逢はぬとも見えたり。かたちのよきこと、李夫人、衣通姫にも異ならず。見るもの、聞くもの、これを偲ぶこと筑波根のこのもの繁きこと數を知らずして、ありし事も今は淺香山の淺ましき身となり、難波津にさくやこの花と、さかりにありしことも失せはてて、あはれ催す秋の野に、鳴く虫の聲までも、わが身のうへと思ひつる、いつまで命の露、草のいほりに宿りして、昔をしのぶ草の垣にしげく、露のおちぶれいでたる我身かなと、硯をならし筆をそめて、藻鹽草のすける道とて、八そぢあまりにてかき集めたる水莖のあとはかなく成りゆく世の中に、長らへはつべき身ともなきに、などかは人の願はざるらん、知らずしてつもれることは罪の業をしづのめが、明くるをも知らず、只いたづらに年月を、つくも髮のわれらが有樣は、かほどに鶯の音にはや夏にうつりきて、次第々々よわりはてたる身なりけり、さりながら心は花になりにけり。

色につき香にふけることは、いにしへよりは勝りつゝと思へども、かへらぬは老の波の

も禮せず、神をも拜まずして、いたづらに月日をおくり給ふことを悲び、色ごのみの遊女とうまれ、飛花落葉の世の中、ひとたびは榮え、ひとたびは衰ふ。妙なる花の散りはてて、苔のしたに朽ちはつる有樣をみせ、よろづの心にまかせぬ言の葉を、空ゆく月のくもりなき夜も、しぐれの空のたち迷ひて、さはりとなれるをも、これにて眺め、これにつけても歌の姿、人丸の歌に、

ほのぼのとあかしの浦の朝霧に島がくれゆく舟をしぞおもふ

と詠じ給ひし歌も衆生のためなり。明石の浦とは衆生の迷ひの心なり、島がくれゆくとは三界流轉の心なり、舟をしぞおもふとは、大慈大悲のあはれみ給ふ心なり。されば神世には、あらがねの地にして、素盞男尊より起りける。いまだ文字も定まらず、すなほにしてことの心もわきまへがたし、人の世となりて文字もさだまりぬ。ここに出雲の國に八色の雲の立ちけるをよみ給へり。

八雲たつ出雲八重垣つまごめに八重垣つくるその八重垣を

これよりして文字のかず三十一字に定まりぬ。花にあそぶ鶯、水にすめる蛙までも知れり。ましていはんや、人としていかでか歌をよまざらん。三十一字はこともおろかや、如

種となれり｜種となせりの誤か

神佛のたまふげ｜神佛より人に給はる偈の意にや

有あく無あく｜有惑無惑の訛か

小町草紙

そも〳〵淸和のころ、内裏に小町といふ色ごのみの遊女あり。春は花に心をつくし、秋は月の前の雲を厭ひ、あしたに一さいの曙のけしきを眺めて、言葉の種となれり、ゆふべには哀れをさそふ鐘の聲、つく〴〵と世の中を思ふにも、たゞ夢まぼろしの心地して、草葉における露衣、尙あだなるは命なりと思ふにも、日本の歌の道ほど、もてあそぶべき物はなし、よろづの言の葉となりにけり。歌の德あまたあり、世の中の憂きにもつらきにも詠じ、神佛のたまふげにもなり、又は力をも入れずして、天地を動かし、目にみえぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をもやはらげ、猛きものゝふの心をも慰むるは歌なりとて、この小町は歌をよむこと勝れたり。

いにしへの衣通姫の流とも申し、觀音の化身とも申す。かりにこの世にうまれ給ひて、有あく、無あく、衆生の、まよひ深き女人、餘りに心もなき者の、あはれをも知らず、佛を

小町草紙

せ給ふ。さてまた宰相どのは、伊賀の國に御所をつくらせ、子孫繁昌にすませ給ひけり。
これたゞ長谷の觀音の御利生とぞ聞えける。今に至るまで觀音を信じ申せば、あらたに御利生ありと申し傳へはんべりける。この物語をきく人は、常に觀音の名號を十返づつ御唱へあるべきものなり。南無大慈大悲觀世音菩薩。

頼みてもなほかひありや觀世音二世安樂のちかひ聞くにも

しされ―退け

わがせんぞ―せんぞは先祖にて、自家の來歴との意なるべし

今一度めぐり逢はせてたびたまへと、肝膽を碎き祈り給ひける。その後宰相殿、帝の御意にいらせ給ひ、みかどより大和、河内、伊賀、三箇國をくだされければ、御よろこびのために長谷の觀音へ御まゐりある。御一門御公達花をかざり、金銀をちりばめざゝめき給ふ。さるほどに姫君の父御ぜんは、觀音の御前に念誦してゐ給ひけるを、殿ばらどもがこれを見て、御堂のうちが狹きとて、そこなる修行者あなたへしされとて、椽よりそとへ追ひいだす。かたはらに立ちより給ひ、公達を見奉り、さめ〴〵と泣き給ふ。人々これを見て、こゝなる修行者はいかなる事を思ひ泣くぞと問ひければ、わがせんぞありのまゝに語り、恐れながらこの御公達、わが尋ぬる姫に似させ給ふとのたまへば、姫君きこしめして、その修行者爰へ呼べとありければ、椽の上まで呼びあげける。姫君御覽じて、御年より面やせ給へども、さすが親子の御事なれば、人目も憚らず、これこそいにしへの鉢かづきの姫にて候へとて、御いでありければ、父御前きこしめし、これは夢か現か、ひとへに觀音の御利生なりとの給ひければ、宰相殿きこしめし、さては姫君は河内の交野の人にてましますか、さればこそたゞ人とは思はぬものをとの給ひて、御公達一人と、姫君の父御ぜんとをば、河内の國のぬしになしまゐらせ、する〴〵繁昌にすま

身はたゞ人とは思はぬなり、御名のり候へとありければ、ありのまゝに語らんとは思しめしけれども、まゝはゝの名を立つるにやあたらんと思ひ、かれこれとりまぎらかし名のり給はず。其後姫君は母上の御菩提懇にとぶらひ給ふ。かくて過ぎゆく程に、公達あまた設け給ひて、御よろこび限りなし。これにつけても捨てられし故郷の父御前を戀しく、御公達をも見せまゐらせたく思しめしける。さるほどに故郷のまゝはゝ御前は、慳貪者なるゆゑに召使はるゝものも、かなたこなたへ逃げはしり、後には貧しくなり、ひとりもちたる姫をもとふ人もなし。御ふたりの中もあしくなりければ、貧しきすまひ何かせん、心にのこる事もなしとて、父御ぜんはいづくとも知らず、修行にたち出で給ふ。つく〴〵物を案ずるに、さりにし北の方、子なき事を悲みて長谷にまうで、さま〴〵祈り、觀音の御利生により、姫を一人まうけしに、母むなしくなり給ひて後、あらぬかたはつきけるを不思議に思ひしに、親ならぬ親とて、おそろしや、いろ〳〵にざんそうを言ひけるを、まことと思ひ追ひいだしつる事の不便さよ、其身が人のやうにもあらばこそ、いづくの浦に住み、いかなる憂きめをも見るらん、不便のものかなと思しめしたまふ。さるほどに父御ぜん長谷の觀音へ御まゐりありて、鉢かづきの姫いまだ浮世にあるならば、

御容もじ―何々文字といふことして、御容といふに同じ一時流行の語に

あはぬ事―道理に合はぬ事

たちあそばされ候へ、其後はともかくも申して見んとありければ、御ぜんたち仰せけるは、姫君はけふの御容もじにてましませば、まづ〳〵一首あそばし候へと責められける。その時姫君一首とりあへず、

春は花夏はたちばな秋は菊いづれの露におくものぞうき

と、かやうにあそばしける。御筆のすさび、道風が震ひ筆もかくやらんと目をおどろかすばかりなり。人々これを見て、いかさま此人は、古の玉藻の前か、恐しやなどと申す。さるほどにまた御盃いでければ、しうと御ぜんきこしめし、姫君に御さしありて、御肴申さんとて、我所領七百町とは申せども、二千三百町のところなり、一千町をば姫君にまゐらする、また一千町をば宰相の君にとらすべし、残る三百町をば三人の子どもに取らするなり、百町づゝわけて取れ、これを不足に思ふものあらば、親とも子とも思ふべからずと仰せければ、兄御たちきこしめし、あはぬ事とは思へども、貴命なれば力なし、今よりしては、宰相の君を總領と思ふべしと、三人同心し給ひけり。さるほどに姫君にはれんぜいを初めとして、女房たち二十四人つけ奉り、宰相殿のすませ給ふたけの御所へうつらせ給ふ。かくて過ぎゆきける程に、ある時宰相殿仰せけるやうは、いかさま御

には教へ給ふとも、今夜のうちには教へ給ふことなるまじ、いざや始めんとて、兄嫁御ぜんは琵琶の役、次郎よめごは笙を吹き給ふ。とのうへは鼓うち、姫君は和琴御しらべ候へと責められけるを。其時姫君おほせけるやうは、かやうの事はいまだ聞きはじめにて候へば、すこしも存ぜず候ふと御辭退あり。宰相殿御覽じて、我身を姫君と見よかし、ゆきてひかんものをと思しめしける。其時姫君御心のうちに思すやうは、われを賤しきものと思ひ、かやうにして笑はんためと思召し、われもむかし母にかしづかれし時には、朝夕手なれし樂の道なれば、ひかうずものと思召し、さらば引きてみ申し候はんとて、そばなる和琴ひきよせ、三べんしらべ給ひける。宰相殿御覽じて、嬉しきことかぎりなし。御ぜんたち御覽じて、歌をよみ、手かくことも、後には宰相殿御教へあるべし、只今のうちには教ふることもなるまじ、さらば歌をよませ笑はんと、談合なされ、これ御覽ぜよ姫君、櫻が枝に藤の花、春と夏とは隣なり、秋はことさら菊の花、これにつき姫君一首あそばし候へと仰せければ、姫君きこしめし、あらむつかしの事を仰せ候ふものかな、われ〳〵が能には、此ほど湯殿にさぶらひて、朝夕てなれし水車、汲みあげしより外のことはなし、歌といふことはいかやうなる物やらん、すこしも存ぜず候ふ、まづ〳〵御ぜん

目を驚かすー原本「目を」の二字なし、一本によりて補ふ

たえいりー執心に

こがね十兩、唐綾、織物の御小袖三十かさね、唐錦十反、卷絹五十疋、廣蓋につませまゐらせらる。しうとめ御前への御引出物には、染物百端、黄金のまるかせ、しろがねにて作りたるけんぽの梨の枝をり、こがねの臺にすゑて參らせらるゝ。人々みてみめかたち、衣裳、御引出物にいたるまで、勝りはすれども人に劣らずと、目を驚かすばかりなり。三人の兄嫁御ぜんたちをも、初めはうつくしく思召しけれども、此姫君にあはすれば、佛の御前に惡魔外道がゐたるに異ならず。兄御たち仰せけるは、いざやのぞきて見んとて、のぞき見給へば、あたりもかゞやくほどの美人なり。皆々不思議に思しめして、何と申すべき言の葉もなし。楊貴妃李夫人もこれにはいかゞ優るべき、とても人間に生れなば、かやうの人とこそ一夜なりとも契りおかまほしけれと、人々うらやみ給ひけり。三位の中將殿おぼしめしけるは、このほど宰相の君たえいり思ひつることこそことわりなれと思しめしける。さて御盃まゐりければ、しうとめ御前きこしめし、やがて姫君にさし給ふ。其後獻々まはりければ、三人の兄嫁御ぜんたち、談合あるやうは、みめは下臈によらぬなり、管絃をはじめ、和琴をしらべさすべし、和琴はことにその源を知らせざれば、左右なくひかれぬものなり、宰相殿はそのみなもとをもあきらめ給へば、のち

翡翠のかんざし——綠髮

いとほしきに——いとほしさにの衍か

ば、宰相殿きこしめし、只今それへまゐると仰せければ、人々見て笑はんとぞじょめきける。出でさせ給ふありさま、物によく〳〵譬ふれば、ほのかに出でんとする月に雲のかゝる風情にて、御かほばせ氣高くいつくしく、御姿は春のはじめの糸櫻の、露のひまよりもほの見えて、朝日のうつろふ風情に異ならず、霞のまゆずみほの〴〵と、鮮妍たる兩鬢は秋の蟬の羽にたぐへ、宛轉たる御かほばせは、春は花にねたまれ、秋は月にそねまれたまふ御風情なり。御年のよはひ十五六ほどに見えさせ給ふ。御裝束には、肌には白き練のきぬ、上には唐綾、紅梅、紫、いろ〳〵の御小袖、くれなゐの千入の御袴ふみくゝみ、翡翠のかんざしゆりかけて歩ませ給ふ御姿、偏に天人の影向もかくやと思ひしられけり。待ちうけて見たまふ人々、みな〳〵目を驚かし、興さめてぞおはしける。宰相殿の御心の中の嬉しさ限りなし。さるほどに御座敷一段さがりて、こしらへたる處になほらんとし給ふ時に、しうと三位の中將殿、いかで天人の影向を下座におくべきとて請じさせたまふ。

あまりのいとほしきに、母御前のひだりの膝元へ呼びまゐらせ給ひける。さてしうと殿への御引出物には、しろがねの臺に黃金の盃すゑ、黃金にてつくりたる三つなりの橘、

すゞしー生絹

き御小袖、上にはいろ〳〵の御小袖めし、くれなゐの袴ふみくゝみ、御ぐしはたけに餘り、あたりもかゞやく計りなり。次男の嫁ごは御年二十ばかりにて、御引出物には唐綾十疋、小袖十かさね、廣蓋に入れまゐらせ給ふ。御ぐしはたけと等しく、御裝束は肌にはすゞしの御袷、上には摺箔の御小袖、紅梅の縫物の御袴ふみくゝみ、さて引出物には、小袖三十がさねまゐらせ給ふ。三男のよめ御前もつとも御年十八ばかりとうち見え、御ぐしたけには足らねども、月に嫉まれ花にそねまれさせ給ふほどの御風情なり。御裝束は肌には紅梅の御小袖、上には唐綾著たまへり。御引出物には染物三十反まゐらせ給ふ。三人のよめ御前、いづれも劣らぬ御姿なり。さて遙にさがりたる處に、破れたる疊をしかせ、鉢かづき置かんとこしらへける。人人申しあひけるは、三人の嫁御前は見奉りぬ、鉢かづきが淺ましき體にて出でんを見て笑はんとて、軒端の鳥にはあらねども、羽づくろひして待ちゐたり。さて三人のよめごぜん等も、今や〳〵と待ち給ふ。又しうと御前仰せけるは、いづくへも行かずして、只今恥をかくべき事の悲しさよ、何しによめ合などといはずとも、善きも惡しきも知らぬ體にて、おくべきものをと仰せける。さるほどに鉢かづき遲しと、たび〳〵使たちけれ

千入の袴—幾度染めて色濃き袴

世間さゞめきける—世間の物音騒しくなる

不得心—心得の無きこと

れなるの千入(ちしほ)の袴、かずの寶物(たからもの)を入れられたり。姫君これを見たまひて、わが母長谷の觀音を信じ給ひし御利生とおぼしめして、嬉しきにも悲しきにも、さきだつものは涙なり。さて宰相殿これを見給ひて、これほどいみじき果報にてまします事の嬉しさよ、今はいづくへも行くべきにあらずとて、嫁合の座敷へいでんとこしらへ給ふ。既にはや夜も明けければ、世間(せけん)さゞめきける。人々いひけるは、これほどの御座敷へあの鉢かづきが出でんと思ひ、いづくへも行かぬことの、不得心(ふとくしん)さよと笑ひける。さる程にとくとくとふれければ、嫡子の御よめ御前は尋常なる御裝束にて、御年の程二十二三ばかりとうち見えて、頃は九月なかばの事なれば、肌には白

丸かせ―巾著
けんぽのなし―玄圃梨

と、かやうに遊ばし立ちいでんとし給ふ時、鉢かづきかくばかり、

わが思ふ心のうちも湧きかへる岩間の水を見るにつけても

などとうちながめ、また鉢かづきかくなん、

よしさらば野邊の草ともなりもせで君を露とともに消えなん

とあそばしければ、また宰相殿かくばかり、

路のべの萩の末葉の露ほども契りて知るぞわれもたまらん

とあそばして、既に出でんとし給ふが、さすが御なごりをしく、悲しく思ひ給ひて、左右なく出でやらず、たゞ御涙せきあへず。かくて留まるべきにもあらざれば、夜もやうやう明方になりぬれば、急ぎいでんとて涙とともに、二人ながら出でんとし給ふ時に、いたゞき給ふ鉢かつぱと前に落ちにけり。

宰相殿おどろき給ひて、姫君の御顔をつく〴〵と見給へば、十五夜の月の雲間を出づるに異ならず、髪のかゝり、姿かたち何に譬へんかたもなし。若君うれしく思召し、落ちたる鉢をあけて見給へば、二つかけごの其下に、金の丸かせ、金の盃、銀のこひさげ、砂金にて作りたる三つなりの橘、銀にてつくりたるけんぽのなし、十二ひとへの御小袖、く

しと、口々にふれさせける。さるほどに宰相殿鉢かづきがもとへ御入りありて、あれ聞きたまへ、われ〳〵を追ひ失はんために、嫁くらべといふこと申しいだしてふれ候へば、いかゞせんと涙を流し給ひければ、鉢かづきもともに涙を流し申すやう、われゆゑに君をいたづらになし申すべきか、われ〳〵いづくへも行かんと申しければ、宰相殿仰せけるは、御身に離れては片時もゐられ候ふまじ、いづかたへなりとも共に出でんとの給へば、鉢かづき何と思ひわけたる方もなく、涙を流しゐたりけり。さてとかく過ぎゆく程に、よめ合の日にもなりぬれば、宰相殿鉢かづきと二人、いづくへも立ちいでんと思召しけるこそあはれなり。さるほどに夜も明方になりぬれば、召しも習はぬ草鞋しめはき給ひて、さすが父母すみなれ給ふことなれば、御名残惜しくおぼしめし、おつる涙にかきくもり、今一度父母を見奉りて、いづくとも知らず出でんことこそ悲しけれと思召せども、遂に一度は離れまゐらせんものをと思ひきり給ふ。鉢かづきこの由みたてまつり、われひとりいづ方へも出でまゐらせん、契ふかく候はゞ又めぐりあひ候はんとの給へば、うらめしき事を仰せられ候ふものかな、いづく迄も御とも申し候はんとて、かくなん、

　君思ふ心のうちは湧きかへる岩間の水にたぐへても見よ

無間―無間地獄
とのうへ―殿、奥方
れんぜい―乳母の名冷泉
おぼろげ事―尋常の事
みたち―御性質

親の御不審かうぶりて、たちまち無間にしづむとも、おもふ夫婦の中ならば何か苦しかるべきぞ、とのうへの御耳に入り、たちまち御手にかゝるとも、かの鉢かづきゆゑならば、すつる命は露ちり程もをしからず、かの人を棄てんこと思ひもよらず、この事用ひ申さぬとて、鉢かづきもろともに追ひいだし給ひなば、いかなる野の末、山の奥に住むとても、思ふ人に添ふならば、ゆめ〳〵悲しかるまじとて、わが御かたを御いでありて、柴つむとぼそに入り給ふ。日頃は人目をつゝませ給ひしが、乳母まゐりて申してよりのちは、終日鉢かづきがもとにぞゐ給ひける。さるほどに御兄たちも一門ざしきに叶ふまじとありけれども、厭ふけしきもましまさず、いよ〳〵人目をも憚らず、朝夕通はせ給ひける。母上仰せけるやうは、さもあれ鉢かづきは、いか樣變化の者にて若君を失はんと思ふやらん、いかゞせん、れんぜいと仰せける。れんぜい申されけるは、かの君はさならぬことさへ、色深く物はぢをし給ひて、おぼろげ事までもつゝましげなるみたちにて渡らせ候へども、此事に於ては恥ぢ給ふけしきも候はず、さあらば公達のよめくらべをし給ひて御覽候へ、さやうに候はゞ、かの鉢かづき恥しく思ひて、いづくへも出で行くこと候はんと申されければ、げにもとおぼしめし、いつ〳〵公達のよめくらべあるべ

でひま入り、遲く入らせ給ひければ、鉢かづきおほつかなく思ひて、かくばかり、

　人まちてうはの空のみながむれば露けき袖に月ぞやどれる

と、かやうに打ちながめければ、いよ〳〵やさしく思召し、ちぎり深くはなりけれども、捨つべきやうはましまさず。昔が今に至るまで、わが身にかゝらぬ事までも、人のいふならひにて、宰相殿は世にも人なきやうに、かゝる御ふるまひかな、をかしき御心かなと笑ひけるほどに、母上きこしめし、みな〳〵僻言をや申すらんに、めのと見せよとの給へば、乳母見て、まことにて候ふと申しける。父母呆れしばし物をものたまはず、やゝあっていかに乳母きけ、とかく宰相の君を諫め、鉢かづきにちかづかぬやうに計らへとのたまへば、めのと若君の御前にまゐり、何となく御物がたり申し慰めて、いかに若君さま、まことしくは候はねども、湯殿の湯わかし鉢かづきがもとへ通はせ給ふよし、母上きこしめして、よもさやうには有るまじけれども、もしまことならば、父の耳に入らぬさきに鉢かづきを出だすべしとの仰にて候ふと申しければ、若君のたまふやうは、思ひまうけたる仰せかな、一樹のかげ一河の流を汲むことも、他生の縁とこそ聞け、いにしへもさる事あればこそ、主の勘當かうぶり、千尋の底にしづむとも、いもせの中はさもあらず、

まう／＼—濛々なるべし

ふとくじん—不得心にて、ふ心得の意

ばまう／＼として、口よりしたは見ゆれども、鼻よりうへは見えもせず、朋輩衆にも笑はれ、なか／＼恥しやと思ひもよらぬぞことわりなる。さるほどに春の日ながしと思へども、其日もやう／＼くれなゐの、たそがれ時や、ゆふがほの人の心は花ぞかし、彼の宰相の君、いつよりも花やかに裝束して、湯殿の側の柴の臥戸にたゝずみ給ふ。鉢かづきこれを知らずして、暮はと契りしかねごとの、はやよひのまも打過ぎぬ、人をとがむる里の犬、聲するほどになりにけり。來んまでとのかたみの枕と笛竹をとりそへもちてかくなん、

君こんとつげの枕や笛竹のなどふし多きちぎりなるらん

とうちながめければ、御曹子とりあへず、

いく千代とふしそひて見んくれたけの契は絕えじつげの枕に

さて宰相殿は、比翼連理と淺からず契らせ給ふ。包むとすれどくれなゐの、洩れてや人の知りぬらん、宰相殿こそ、鉢かづきがもとへ通はせ給ふ淺ましさよ、もとより高きも賤しきも、男はあるならひ、立ちより給ふとも、あの鉢かづきが近づき參らせんと思ふ心の、ふとくじんさよと、惡まぬ人はなかりけり。ある時よそより客人きたり、夜ふけがたま

つぶり—頭

かばの絲柳の風に亂るゝよそほひも、籬のうちの撫子の露重げに物よわく、はづかしげにてそばみたる顏の愛敬のいつくしく、楊貴妃李夫人もいかでか是にまさるべきと、不思議におぼしめしける。同じくは此鉢をとりのけて、十五夜の月の如くに見るよしもがなとぞ思はれける。さて若君は湯殿のかたはらの、柴つむ臥戶をたちいでて、わが御かたへ歸りつゝ、軒端の梅を御覽じても、いつしか鉢かづき如何にさびしく思ふらん、今日の暮るゝを待つほどは、住吉の根ざしそめにし姬小松、千代まつよりも尙久しくぞ思はれける。鉢かづきは黃楊の枕と、御笛をおくべき處のあらざれば、もち煩ひてゐたりける。かくてやう〳〵東雲もあくると告ぐる關路の鳥、まだ橫雲も引かざるに、御行水よ、鉢かづきと責められて、御湯はわきさふらふ、取らせ給へと答へつゝ、いぶせき柴を折りくべて、かくこそ詠じけれ、

くるしきは折り焚く柴のゆふけぶり戀しきかたへなど靡くらん

とうちながめければ、湯殿の奉行きゝつけて、かの鉢かづきはつぶりこそ人には似ず、ものいふ聲色わらひぐち、手足のはづれの美しさは、これに疾くから住ませ給ふ御女房衆も、究めてこれには劣りなり、ちかづきて彼の人と契らばやとは思へども、あたまを見れ

千尋―傍訓原本のまゝ
五道輪廻―地獄餓鬼畜生人間天上の五道に流轉すること
六道四生―六道は地獄餓鬼畜生修羅人間天上、四生は胎生卵生濕生化生
舟のゐる―舟のすわること
かきくらし―涙にかきくらし

に縁があればこそ、かくまで深く思はるれ、思ひそめにし昔より、今逢ふまでの言の葉こそ、末たのもしく思はるれ、鯨のよる島、虎ふす野邊、千尋の底、五道輪廻のあなたなる六道四生のこなたなる、妹背の川のみなかみの、涅槃の岸はかはるとも、君とわが中かはらじと、深く契をこめ給ふ。さて鉢かづきは漕ぐ舟のゐる風情して、君の仰せの強きまゝ、思はぬながら靡きそめ、その夜はこゝにふし竹の、よゝの契もあらがねの、末いかならんわが思ひ、知られぬそのさきに、いづくへも足にまかせて出でばやと、かきくらし思はれける。あはれなれば、宰相殿はいかに鉢かづき、さほどなにを歎かせ給ふぞよ、見そめ馴れにしよりも、露ちり程もおろかに思ふまじ、暮れなばやがてまゐりなんと、ひるもをり〳〵通ひ、これを見て慰みたまへとて、黄楊の枕と横笛をとり添へてぞおかれける。

其時いとゞ恥しさは、やるかたもなし。わが人のやうにもあらばこそ、人の心は飛鳥河、夜のまにかはる習ひのあるまでも、頼まんともおもひなん、あるに甲斐なきありさまにて、見えぬることの恥しさよと、かきくらし泣き給ふ。御曹子は御覧じて、この鉢かづきの風情を、ものによく〳〵譬ふれば、楊梅桃李の花の香に、雲間の月のさし出でて、二月な

さえやらで―はかく〳〵しからずして

とこせく―床堰くの意なるべし

きやうがい―境界

なるかたもあらば、逢はで空しく消ゆるとも、君ゆゑならばなか〳〵に、うらみと更に思ふまじ、いかに〳〵との給へば、野飼の駒の人馴れで、心はたけく思へども、妹背の川の中だちに、よしやあしやを知らざれば、何と申さんこともなし。よそに引く手もあるやらんと、の給ふことの恥しさに、調べの絲みな切れて、よそにひく手もさふらはず、なみのたちゐに悲しきは、空しく別れし母の事、さては此身のさえやらで、いつまで命ながらへて、あらぬ浮世にすみ染の、色にもならぬ怨めしさを、歎きはんべりけると申しければ、宰相の君は聞召し、げにもことわりなりと思召して、かさねて仰せあるやうは、さればとよ、有爲轉變の世の中に生れあひぬるはかなさよ、憂きはむくいと知らずして、神や佛を怨みつゝあかし暮らしてすごすなり、御身もさきの世に野邊の若木の枝を折り、思ひし中をおしへだて、人に歎きをせさせつる報のほどの事ありて、親にも早くおくれつゝ、いまだいとけなき心に、物をおもひねの涙とこせく風情なり、みづから二十のきやうがいまで、定むる妻はいまだなし、ひとり片敷くうたゝねの、枕さびしく住むことも、さきの世に御身と契ふかくして、その業因のつきねばこそ、めぐり〳〵てとにかくに、今こゝにおはすらん、世にいつくしき人なれど、縁なきかたへは目もゆかず、御身

御湯殿して—垢を流すこと

はなれえぬ—原本「はなれぬ」とあり、一本によりて改む

かくかへりごとも—「かく」は「とかく」の衍なるべし

て、ひとり湯殿へ入らせ給ふ。かの鉢かづき御湯うつしさふらふと申す聲やさしく聞えける。御行水とてさじいだす手足のうつくしさ、尋常げに見えければ、世に不思議におぼしめし、やあ鉢かづき、人もなきに何かは苦しかるべき、御湯殿してまゐらせよとの給へば、今更むかしを思ひいだして、人にこそ湯殿させつれ、人の湯殿をばいかゞするやらんと思へども、主命なれば力なし、御湯殿へこそまゐりける。御曹子は御覽じて、河内の國はせばしといへども、いかほどの人をも見てあれども、かほどにものよわく愛敬世にすぐれ、うつくしき人はいまだ見ず、ひととせ花の都へ上りし時、御室の院の花見のありし時、貴賤群集して門前に市をなしつれども、その時にもこの鉢かづきほどの人はなし、いかに思ふとも此人を見捨てがたしと思はれける。いかに鉢かづき、思ひそめにし紅の、色はうつろふことなりと、君とわが中かはらじと、千秋の松に契りをはるかにかけ、松の浦の龜に久しくむすばれける。今よりのちはかの鉢かづきは、軒端の梅に鶯の、またはなれえぬ風情して、かくかへりごとをものたまはず。

かさねて御曹子は、これやこの龍田にはあらねども、くちなし色にたとへつゝ、物をいはねの松やらん、引きすてられし琴のねの、よそに引く手もあるやらん、もしふみかさ

ありつき給ふ—妻常し給ふ

とのゐへ—殿と奥方

苦しきは折りたく柴のゆふけぶりうき身とともに立ちや消えまし

と、かやうに打ちながめ、いかなる因果のむくいにや、かゝる浮世に住みそめて、いつまで命ながらへ、かほどに物を思ひねの、昔を思ひいでのさと、胸は駿河の富士のだけ、袖は清見が關なれや、いつまで命ながらへて、憂きには絶えぬ涙河、流れて末もたのまれず、菊の裏葉におく露の、何となりゆく此身ぞと、ひとりくどきて、かくばかり、

松風の空吹きはらふよにいでてさやけき月をいつかながめん

かやうに詠じ、足の湯をぞ沸かしける。

さる程に此中將殿は御子四人持ち給ふ。三人は皆々ありつき給ふ。四番めの御子、宰相殿御曹子と申すは、みめかたち世にすぐれ、優にやさしき御姿、むかしを申せば源氏の大將、在原の業平かとぞ申すばかりなり。春は花のもとに日をくらし、散りなんことを悲み、夏はすゞしき泉の底、玉藻に心をいれ、秋は紅葉落葉のちりしく庭のもみぢを眺め、月の前にて夜をあかし、冬は蘆間のうす氷、池のはたに羽をとぢて鴛鴦の浮寝ものさびし、かさぬるつまもあらばこそ、ひとりすさみて立ち給ふ。御兄たちも、とのゐへも御湯殿へ入らせ給へども、かの御曹子ばかり殘らせ給ひ、さよ更けてはるかになり

結句―其末

ふしなれぬ―臥しと節とにかく

中將殿は御覽じて、鉢かづきはいづくへぞとの給へば、いづくともさして行くべき方もなし、母にはなれて結句かゝるかたはさへつき候へば、見る人ごとにおぢ恐れ、憎がる人は候へども、あはれむ人はなしと申しければ、中將殿きこしめて、人のもとには不思議なる物のあるもよきものにて候ふとのたまへば、仰せに從ひておかれける。さて身の能は何ぞとの給ひければ、何と申すべきやうもなし、母にかしづかれし時は、琴、琵琶、和琴、笙、篳篥、古今、萬葉、伊勢物語、法華經八卷、かずの御經ども讀みしよりほかの能もなし。さては能もなくば、湯殿におけとありければ、いまだ習はぬことなれど、時にしたがふ世の中なれば、湯殿の火をこそたかれけれ。明けぬれば見る人笑ひなぶり、にくがる人多けれども、なさけをかくる人はなし。あけくれ、御行水よ、鉢かづきとて、三更四更も過ぎざるに、五更の天も明けざるに、責め起されて、いたはしや、ふしなれぬ篠竹の、おのれと雪に埋れて、ふし倒れたる風情して、ものはかなげに起きなほる、思ひを柴のゆふけぶり、立つ名をもくるしと打ちながめ、行水は沸きまゐらせ候ふ、はやとり給へと催促する。くるれば御足の湯わかせや、鉢かづきと下知をする。うき身ながらも起きあがり、みだれた柴を引きよせながら、かくこそつらね給ひける。

久しき鉢—年ふりたる鉢

えんぎやうだう—緣行道、散歩すること

いかなるものやらん、かしらは鉢、したは人なり、いかなる山の奥よりか、久しき鉢が變化して、鉢かづいて化けけるぞ、いかさま人間にては無しとて、指をさして恐しがりて笑ひける。ある人申しけるやうは、たとへ化物にてもあれ、手足のはづれの美しさよと、とりぐ\に申しける。さる程にその處の國司にてまします人の、御名をば山陰の三位中將とこそ申しける、折節えんぎやうだうして四方の梢をながめつゝ、霞に遠里の賤が蚊遣火さしも草、そこひにくゆるうすけぶり、うはの空にてたち靡き、面白かりけるゆふぐれは、戀する人に見せばやと、眺めいだして立ち給ふところに、かの鉢かづき歩みよる。中將殿は御覽じて、あれ呼びよせよとの給へば、若ざぶらひども一二三人走りいで、かの鉢かづきをつれてまゐる。いづくの浦いかなるものぞとの給へば、鉢かづき申すやう、われは交野の邊の者にて候ふ、母にほどなく後れ、思ひのあまりにかゝるかたはさへつきて候へば、憐むものも無きまゝに、難波の浦によしなしと、足にまかせて迷ひありき候ふと申しければ、さてく\不便とおぼしめし、戴きたる鉢を取りのけて取らせよとて、皆々よりて取りけれども、しかと吸ひつきてなかく\取るべきやうもなし。これを人々御覽じて、いかなるくせ者ぞやとて笑ひける。

ふ。こゝに立ちとまりて、いづくをさして行くともなく迷ひありかんより、此河の水屑となり、母上のおはします處へ参りなんと思召して、河のはたへのぞき給へば、さすが幼き心のはかなさは、岸うつ浪もおそろしや、瀬々の白波はげしくて、そこはかとなき水の面、すさまじければいかゞあらんと思へども、これを心のたねとして、既におもひきり、河へ身を投げんとし給ふとき、かくこそ一首つらねけり。

河岸の柳の糸のひとすぢに思ひきる身を神もたすけよ

かやうにうちながめ、御身を投げしづめけれども、鉢にひかれて御顔ばかりさし出でて流れける程に、獵する船の通りけるが、こゝに鉢の流れける、何ものぞと言ひてあげて見れば、かしらは鉢にてしたは人なり。舟人是をみて、あらおもしろや、いかなる者やらんとて、河の岸へ投げあぐる。やゝしばらくありて、起きなほりつくづくとあんじ、かくばかり、

河波の底にこの身のとまれかしなど再びは浮きあがりけん

などとうちながめ、あるにあられぬ風情して、たどりかねてぞ立ち給ふ。さてあるべきにあらざれば、足にまかせて行くほどに、ある人里に出で給ふ。里人これを見て、これは

とくして―早くの意

ひなきうき身のいのち、とくして迎ひとり給へ、同じはちすの縁となり、心やすくあるべきと、流涕こがれて悲み給へども、生をへだつる悲しさは、さぞと答へる人もなし。まゝはゝ此由きゝ給ひて、鉢かづきが母の墓へまゐりて、殿をもみづから親子をも呪ふことこそ恐しけれと、まことをば一つもいひ給はず、虚言ばかりを父にたび〳〵言ひければ、男心のはかなきは、まことと思ひ、鉢かづき呼び出だし、不道のものの心やな、あらぬかたはのつきぬるを、よに痛はしく思ひしに、咎もなき母御前兄弟を呪ふことこそ不思議なれ、かたはものを内におきては何かせん、いづかたへも追ひいだし給へとのたまへば、繼母これを聞きて、そばへうちむきて、さも嬉しげなる風情して笑ひける。さていたはしや、鉢かづきを引寄せて、召したるものを剝ぎ取りて、淺ましげなるかたびら一つ著せ參らせ、或野の中の四つ辻へ捨てられけるこそあはれなれ。さてこはいかなる浮世ぞと、暗に迷ふこゝちして、いづくへ行くべきやうもなし、泣くよりほかの事はなし。やゝしばしありてかくなん、

　野の末の路ふみわけていづくともさして行きなん身とは思はず

とうちながめ、足にまかせて迷ひあるき給ひけるに、おほきなる川のはたへうちつき給

く、「をのこの一人すまんとて歎き明かし給ふとも」とあり

移つればかはる世の中の云々—小町「色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける」

なみの起居に—金葉七「あふ事はいつと渚の濱千鳥波の立居にねをのみぞ鳴く」の語を取れり

ざんそう—讒訴

おろか—我身におろそかなり

もかたらひて、憂きに別れしなごりをも慰み給へとすゝめられ、さきだつ人はとにかくに、殘るうき身の悲しさよと、思ひごともよしなしとて、ともかくも御はからひとありければ、一門の人々よろこびて、さるべき人をたづね、もとの如く迎ひとり、移ればかはる世の中の、心は花ぞかし。秋の紅葉のちり過ぎて、その面影は姫君ばかりぞ歎かるる。かくてかの繼母、此姫君を見たてまつりて、かゝる不思議のかたはもの、浮世にはありけることよとて、惡み給ふことかぎりなし。さてまゝはゝの御腹に、御子一人いできたまへば、いよ〳〵此鉢かづきを見じ聞かじと、なみの起居の事までも、そらごとのみばかりの給ひて、常には父にざんそう申す。鉢かづきは餘りやるかたなきまゝに、母の御墓へまゐりて、泣く〳〵申させ給ふやう、さらでだに憂きにかずそふ世の中の、わかれを慕ふ涙川、沈みも果てずながらへて、あるにかひなきわが身ぞと、思ふにいとゞ不思議なるかたはのつきぬる事のうらめしさよ、繼母御前のにくみ給ふもことわりなり、したしき母上に捨てられまゐらせ、わが身何ともなりての後に、父御ぜんいかゞ御歎きのあるべきと思ふばかりを、心ぐるしく思ひしに、今の御母に姫君いでき給へば、はや思召しおかんこともなし、まゝはゝ御前の惡み給ふゆゑ、たのみし父おろかなり、今はか

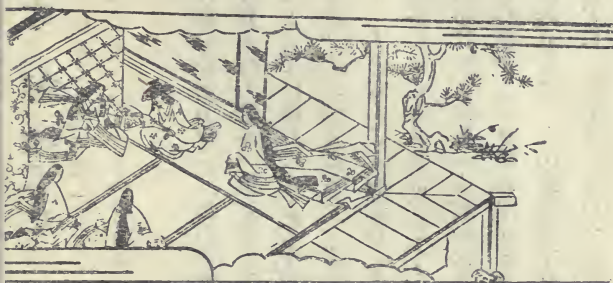
孝養—佛事供養

梅が枝の云々—文章つゞかず、一本には「春は軒端の梅の花櫻は風にちりぬれど又くる春に開きけり月は山の端に入りぬれど又こんゆふべに出で給ふ」とあり

そでまくら—袖を枕に歎く意、一本には此句な

ふ。父大きに驚き泣き給ひて、いとけなき姫をば何とて棄ておき、いづくとも知らずかくなり給ふと、泣き給へどかひぞなき。かくてさして有るべきならねば、なごりつきせず思へども、むなしき野邊に送りすて、花のすがたも煙となる、月のかたちは風となり、散りはつるこそいたはしけれ。かくて父御前姫君をちかづけまゐらせて、いたゞき給ひたる鉢とらんとしけれども、吸ひつきて更にとられず。父大きに驚きて、いかゞはせん、母上にこそは離れまゐらせめ、かゝるかたはのつきぬることの淺ましさよと、歎きたまふこと限りなし。かくて月日をたてければ、あとの孝養とり行ひたまふ。おもひは姫君の御まへにこそとゞまりけれ。春は軒端の梅が枝の、さくらは咲きて梢まばらの青葉とぞ、名殘をしくは思へども、又こん春を待ちてさく。月は山の端に入りぬれど、今夜の闇とへだつれど、又こんゆふべに出で給ふ。わかれし人の面かげ、夢路にだにも定かならず、いつの日のいつの暮にかわかれぢを、いかなる人の踏みそめて、現にも逢ふことなかるらん。思ひまはせば小車のやるかたもなき風情かなと、よその見るめもあはれなり。さるほどに父御前の一族、親しき人々よりあひて、いつまで男子のひとり住みがたしと、このそでまくら、歎きくどき給ふともそのかひはよもあらじ、いかなる人を

かんざし―髪

かくこそ詠じ給ひける―係結の破格なるも原本のまゝにして一切改めず

しほどに、今をかぎりに見えければ、姫君をちかづけて、緑のかんざしを撫であげ、あらむざんやな、十七八にもなし、いかなる縁にもつけおき、心やすく見おき、とにもかくにもならずして、いとけなき有様をすて置かんこと、あさましさよと涙をながし給ふ。姫君ももろともに涙をながし給ひける。母上は流るゝ涙をおしとどめ、そばなる手筥を取りいだし、中には何をか入れられけん、世におもげなるを姫君の御ぐしに戴かせ、その上に肩の隠るゝほどの鉢をきせまゐらせて、母上かくこそ詠じ給ひける。

さしも草ふかくぞ頼む観世音誓のまゝにいたゞかせぬる

かやうにうちながめ給ひて、遂に空しくなり給

はちかづき

中昔の事にやありけん、河内の國交野の邊に備中の守さねたかといふ人ましくけり。かずの寶を持ち給ふ。飽き滿ちて乏しきこともましまさず、詩歌管絃に心をよせけるが、花のもとにては散りなんことを悲み、歌をよみ詩をつくり、のどけき空をながめ暮らし給ひける。北の御方は古今、萬葉、伊勢物語、かずの艸子を御覽じて、月の前にて夜をあかし、入りなんことを悲み、あかし暮らし給ひつゝ心に殘ることもなし。鴛鴦のむすび隔つ事もましまさず、思ふまゝなる御中なるに御子一人もなし。朝夕悲み給ひしに、いかなる事にや、姫君一人設けたまひて、父母の御よろこび申すばかりは無かりけり。かくていつきかしづき給ふ事かぎりなし。あけくれ觀音を信じ申されけるほどに、長谷の觀音に參りては、かの姫君のすゑ繁昌の果報あらせ給へとぞ祈りたまふ。かくて年月をふるほどに、姫君十三と申せし年、母上例ならず風の心地との給ひて、一日二日と申せ

はちかづき

なみな繁昌して榮華にほこり、年さへわかく見え給ひ、下人若黨おほくめし使ひ、女房たち上下にいたるまで人に用ひられ、榮耀にほこり給ふ。さるほどに大納言は高きところに塔をたて、大河に舟をうかめ、小河に橋をかけ、善根かずをつくし給ふ。いづれも〳〵御いのち百歳にあまるまで保ち給ふぞめでたき。まづまづめでたき事のはじめには、此草子を御覧じあるべく候ふ。

おほぢこの宰相
—「こ」の字不用
なるべし

らんが子に生れ給ふらん、ひとへに天人の影向かと、御寵愛かぎりなし。こんどの御よろこびにとて、常陸の國を大宮司にたびにけり。さて中將殿みかどへまゐり給へば、此程は戀しきをりふしに、御よろこび譬へんかたなし。やがて大將になし給ふ。さて此程の事ども御尋ねありけるに、いちく語り給ふ。帝おほせありけるは、妹さだめてよかるらんとの給へば、姉よりもまさりて候ふと申し給へば、やがて宣旨をくだされけり。文正此由きゝ、宣旨かたじけなくは候へども、姉は力なし、妹は此國におき候うて、あさゆふ見參らせでは叶ふまじき由申しければ、そのよし奏しけるに、さらばとて父母ともに都へ召しけり。帝御覽ずれば、姉君よりもいつくしく思召し、御寵愛かぎりなし。よき子をもちぬれば、文正七十にて宰相にぞなされて、引きあげ給へば、五十ばかりにぞ見えにける。姫君は女御になり給ふ。さるほどに例ならず惱み給へば、帝をはじめさわぎ給へば、ひきかへ御よろこび限りなし。十月と申すに、御産平安し給ひて、皇子をぞ産み給ふ。御めのとには、關白殿の姫君、中宮にまゐり給ひぬ。又おほぢこの宰相は、やがて大納言になされけり。賤しき鹽賣の文正なれども、かやうにめでたき果報ども、中中申すにおよばれず、母も二位殿とぞ申しける。いかなる過去のおこなひにやらん、み

冥加につきなんと申し給へば、文正うけたまはり、肝たましひも失する心ちして、このほど商人と思ひつるに、てんかの御子にてわたらせ給ふを、夢にも知らずと赤面して、又うちへ戻りけり。聟どのは天下ぞ、天下は聟殿よと、ものに狂ふばかりに悦びける。大宮司どのは、手づから御輿をかき、わが宿へうつし申し、八箇國の大名にふれければ、われも〳〵とまゐり集りける。これほどめでたき幸をひき給はんとて、諸人を嫌ひ給ひけると申しける。中將殿は姫君を具して、都へのぼらんと思召し、御いで立ちたまふ。當國の大名一萬餘騎、御ともに參りけり。御かいしやくには、大宮司殿の北の方をはじめとして、われも〳〵とぞまゐりける。文正が四方の倉のたから物はいつの用ぞと、御車をば金銀にて飾り、女房たちをいつくしく飾り、都へ上り給へば、見る人きく人羨まざるはなかりける。

三月十日あまりに、都へつかせ給ふ。天下の北の政所も、たゞ夢の心ちせさせ給ひて、嬉しさかぎりなし。たとひ如何なるものの子なりとも、おろかには思ふべからずとて、もてなし給ふ。姫君は藤がさねの七重ぎぬに、えいその唐衣、さくらのくれなゐ袴、にほやかに著なし給へば、姿かゝり誠にいつくしさ譬へんかたなし。いかなる故に文正とや

いつの用ぞ—今此時に使用せずしていづれの時に用ふべきか

えいその唐衣—えびぞめ（葡萄染）の唐衣の術なるべし

わが君―大宮司を指す

がところにこそ、都より下りたる商人を愛しおきて管絃させるよし、大宮司殿きこしめし、御つかひありしかば、文正うけたまはり、かしこまつて候ふとて、商人に申しけるは、大宮司殿御聽聞あらんとの給ふあひだ、いつよりもひきつくろひて、管絃し給へと申しければ、今日こそあらはれんと思召し、皇子(みこ)にての御しやうぞく、いづれももたせ給へば、御かぶり束帶の姿にて、かねつけ眉つくり給へば、心も詞も及ばず、いつくしく見えたまふなり。文正がうちの者これを見て、商人はいづれやらん、たゞ神佛(かみほとけ)の現れたまふかと驚きける。大宮司殿、公達五人つれ給ひて、輿(こし)にて入らせ給ひ、御堂(みだう)の正面を見給へば、中將殿と見給ひ、肝をけし輿よりころび落ち、抑も天下の御子に、二位の中將殿うせさせたまふとて、國々を尋ねまゐらせ給ふとうけたまはり候ふ、これにましますを夢にも知りたてまつらぬこと、淺ましさよと呆れて、かしこまりてぞゐ給ふ。さるほどに兵衞のすけ立ち出でて、いかにさだみつ、これへまゐれとの給へば、文正いそぎ家にかへり、あさましや、人の目をみすまじきものは京の商人なり、かたじけなくもわが君をなめげに申すと、ふるひ泣きけり。大宮司殿は文正を召し、汝知らずや、かたじけなくもてんか殿の御子に、二位の中將殿と申して、竝ぶかたなき御人なり、さても

あふ人からの―古今十三「長しとも思ひぞはてぬ昔より逢ふ人からの秋の夜なれば」

こひ〱て―此歌一本に「こひこひて逢ふ夜は秋も短きに月はつれなく殘るありあけ」とあり

かずならぬ―此歌も「かずならぬ身は秋の夜の短きと思ひもあへず東雲の空」とあり

り給へば、姫君もありつる姿忘れやらず思ひ給ひ、格子もおろさず、月くまなきを眺めつゝ居給ふをりふし、中將殿八重の垣を忍び入りたまへば、例ならず男の影見えければ、胸うちさわぎ、かたはらに入り給へば、中將殿もともに入らせ給ひ、御そばに添ひふさせ給へば、かの人やらん、おそろしくもあさましく、さしも人々をきらひ、商人にちぎりを結びて、父母の聞き給はんこと、悲しくはづかしくて、思ひよるまじきよしの給へば、中將殿もことわりと思召し、衛府の藏人語りしより、はじめ今までかきくどき語り給ふに、姫君もうち解け給ひ、いつしか淺からず契り給ふ。さるほどに秋の長き夜なれども、あふ人からのしのゝめ早くしらみければ、

　こひ〱てあひ見しよはの短きは睦言つきぬにひまくらかな

と、か樣にの給へば、姫君打ちそばみつゝ、

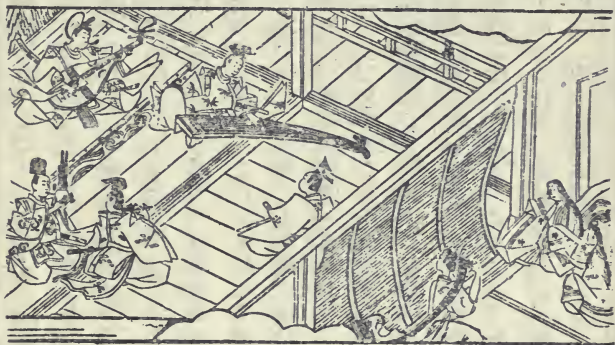
　かずならぬ身には短きよはならしさてしも知らぬしのゝめの空

それより天にあらば比翼の鳥、地にあらば連理の枝とぞ契り給ひけり。忍ぶとすれど露れてさゝやきあへり。母上も聞き給ひて、あさましや、大名たちを嫌ひて商人にちぎりし事の悲しさよ、商人につけて追ひいださんとぞ申しけるほどに、文正

中將殿みなく━中將殿を初め一同の意

盃をばしらめて━しらめはしらべにて調ふる意なるべし

中將殿みなく嬉しくおぼしめし、ひきつくろひて御堂へうつらせ給ふ。姫君たちもひきつくろひ、女房たち、はしたものにいたるまで、心も及ばず出でたゝせ、御堂へ入り給ふ。片田舍(かたゐなか)とも覺えず、心にくき風情にて、沈麝香(ちんじやかう)のにほひ滿ちくて、由あるさまなれば、いつよりも御心を澄まして、琵琶をひかせ給ふ。姫君はきゝしり給ひて撥音(ばちおと)のけだかさ、愛敬(あいきやう)つきたる手あつかひも、たとへんかたなし。御身をやつし給へども、優(いう)にけだかくいつくしく、いかなる風のたよりもがなと思召しける。をりふし嵐烈しく吹きて、簾(みす)をさつと吹きあげたるひまより、姫君と中將殿の御目を見あはせ給ひける。彼の姫君の御ありさま、姫の李夫人楊貴妃もこれには過ぎじとぞ見え給ふ。いよくたしなみ、琴琵琶をひきあはせ吹きならし給へば、聽聞の人々、あまりのおもしろさに隨喜の涙を流しける。姫たちの心のうちたとへんかたなし。文正又盃をばしらめて、中將殿にさしにけり。力なくまるりて、又つねをかに給へば、いつぞやも申して候ふ、御きらひ候ふか、姫のかたにみめよき女房たち多く候ふ、いづれにても召され候へ、これより北に候ふとて指をさして敎へける。人々目を見あはせて、御心の中(うち)おしはかり、嬉しく候ふとて笑ひ給ふ。さてその夜をすごし給ふべしとも覺えねば、人しづまりて忍び入

かねてより――前以て

らず。文正不思議に思ひて、いそぎ行きてみるに二三百人白洲になみ居たり。近くよりてきゝければ、管絃の音、耳にあきれたる風情なり。おもしろさ尊さ、心もおよばず。これほど面白くありがたきことを、今まで聞かざりし事のうたてさよ、ありがたく罪もきえ候ふ、御引出物申さんとて、さま〴〵の物まゐらせければ、此人人かねてより聟引出物取り給ふとて笑ひ給ふ。姫君はありし硯の下の文、人しれず心にかゝりけれども、いひ傳ふべきたよりもなし。其うへひととせ下り給ひし國司よりも、したの人にて有らんと思ひ亂れ給ひけり。文正つかひを立てて申しけるは、わが姫たち、今度は聞かすべく候ふあひだ、今一度面白く引き給へと申しける。

遲くかへる程に一未だ歸らざるに

いまだ見馴れぬなり、此年月多くの文を見つれども、これ程いつくしきは見ざりける。物を賣りつる詞つき、さればこそと思ひて、姉娘はかへし給ふを、かいしやくの女房たち、これ程やさしきものを、御かへし候へば、色をも知らぬやうに覺え候ふ、たゞ御とめ候へと申しければ、げにもとおぼしけん、とゞめ給ふなり。又妹、此いろ〳〵を御覧じて羨みければ、文正申しけるは、つねをか娘を二人もちて候ふ、さきに給はり候ふものを、いもうと羨み申し候ふ、これにも給はり候へと申しければ、かねてより用意しておき給へば、劣らぬいつくしき物どもを贈り給ひける。文正申しけるは、殿ばらたち、つれ〴〵にましまさば、此西の御堂へまゐりて、なぐさみ給へと申しけり。やがて御堂へ參り御覧ずるに、まことに尊くありがたき心ちして、かなたこなた見給へば、琵琶琴たて竝べおきたるを御覧じて、めづらしく思召し、琵琶をひき寄せひかせ給ふ。兵衛のすけ琴をひき、とうまのすけ笙を吹き、式部の大夫笛を吹き、おもしろく感涙をながしける。文正が內のものこれを聞きて、よしなき人を御堂へ入れ給ひて、垣壁をやぶるらん、ひしめき候ふと申しければ、文正申すは、見て來れと申しける。十人ばかり行きて、遲くかへるほどに、又二十人ほど行けどもかへらず。あれ行きこれゆき、行く程に皆々ゆきてかへ

つねをかし文正の名

君ゆゑに—此歌一本に「君ゆゑに迷ひきにける陸奥の忍ぶ心をあはれとも思へ」とあり

心ちして、戀ほど悲しきものはなし、院よりほかは、たれか君よりさきに盃をとらせ給ふべきとて、おの〳〵涙をながす。中將殿もあさましく思召しけれども、力なくまゐりける。さて文正、酒のゑひのまゝ申しけるは、つねをか賤しきものにて候へども、鹿島の大明神より給はりて、みめよき姫を二人もちて候ふが、主などのやうにもてなし候ふ、八箇國の大名たちわれも〳〵と申され候へども、更に靡かず、つねをか主の大宮司殿、よめにとおほせ候へども、從ひ申さず候ふ、又國司に下り給ひし京上臈も、とかく仰せ候へども、只一筋に佛道を願ひ申すなり、その女房たちにみめ能きがあまた候ふ、傾城ほしくば、十人も二十人もまゐらせ申すべし、しばらくこれに御逗留候うて、御あそび候へと申しけり。

中將殿をはじめて、をかしくぞ聞き給ふ。其後いつくしき物ども、箱のなかに入れて姫君のかたへとてつかはされける。姫たち御覽じて、多くの物を見つれども、これ程めづらしき物をいまだ見ずとて見給へば、硯の下に紅葉がさねの薄樣に、

君ゆゑに戀路にまよふ道芝のいろの深さをいかで知らせん

姫君これを見給ひて、顏打ちあかめて、つゝましながら見給へば、筆のながれ、墨つき

ねりぬき—生絲を經とし練絲を緯として織りたる絹

具足—食菜

横座—上座

あるじ關白—主人は最も貴きものとの諺

賣りたまふ。あまりおもしろきに、二三度までぞ賣らせける。いかにしてか此人々をこれにとゞめんと思ひ、あの殿ばらたち、宿はいづくにて候ふと問ひければ、宿は候はず、是へすぐにまゐりて候ふと申し給へば、うれしと思ひ、やがてなかの出居に入れたてまつり、御足の湯などいだしければ、とうまのすけ御足をすましければ、兵衛のすけ、ねりぬきの御手ぬぐひにてのごひ申しけり。中將殿は御身も衰へやせ給へども、なほ人にはすぐれ見え給ひけり。文正がうちの者ども申しけるは、せんだんびつもちたる男、大事のはんざう盥に足を入れて、一人は洗ひ、今一人はいつくしき絹にてのごひ候ふ惜しさよとて笑ひける。文正、京商人ははづかしきぞ、飯など尋常にしてまゐらせよと言ひければ、高坏に八種の具足し、皆々同じやうにして据ゑける。おの〳〵は取りおろしければ、都人はをかしきものや、あのやせ男に物をくはせて、ひれふすやうにして、食ひもならはぬやらん、そなへを皆とりおろして食ひけるをかしさよと笑ひける。文正出居に出でて、此人々に酒をすゝめんとて、色々の肴をこしらへいだし、横座に直り、さかづきを取りて申すやう、あるじ關白と申す事の候へば、まづ飲み候ふべしとて、三度のみて後に、中將殿にまゐらせければ、力なくてまゐりけり。御ともの人々、目もくるゝ

豐のあかりの節會には、くし、疊紙、紅、むらさき、色ふかき薄樣、すみ、筆、沈、麝香、たき物なども候ふなり。枕のすぐれて覺ゆるは、殊にやさしき花枕、こすげの枕、から枕、戀路に迷ふうき枕、沈の枕を並べつゝ、人にはじめて新枕、鏡にとりては、しろがねのうらなる、とりのむかひたる唐の鏡や、ひわ、小鳥、鶯、ひよ鳥などまでも、數をつくして鑄つけたる鏡や召され候ふと、詞に花を咲かせつゝ、かやうにやさしき賣物ども戀の心をたよりとや、聞きしる人もあるやとて賣り給ふ。文正が内のものども多けれども、やまがつなれば聞き知らず。女房たちのそのなかに都人にてありけるが、情も深く、讀みかき和歌の道にくらからず、みめかたちいつくしき人とて、姫君のかいしやくに付けたりしが、此商人をうち見つゝ、姿ありさまに至るまで、たゞ人ならぬ風情なり、賣物の言葉つゞき、いとやさしき人なり、不思議なり、もし若殿上人たち聞き及びあこがれて、是まで下り給ふかと、あやしげにこそ思ひけれ。いまだかやうのおもしろき賣物こそ候はね。聞かせ給へと言ひければ、文正も出居の窓あけて聞きつれば、さもおもしろくぞ覺えける。あの殿ばらは、いづくの人にてましませば、かく面白くは賣り給ふぞ、今一度賣り給へと申せ。人々目を見あはせて、これこそ聞ゆる文正よとて、又さきの如く

豐のあかり云々―一本に「豐のあかりの節會の櫛、疊紙にとりては云々」とあるよろし

やまがつ―原本「やましろ」とあり、一本によりて改む

あいさせ―愛させなるべし

具足―道具
みのつぼ―一本「るりのつぼ」とあり

やうの事をこそ是にあいさせ給ひ候へ、申し入れ候はんと言ひければ、嬉しくてやがてつゞきて入り給ふが、賣物にとりては、かぶり裝束、紫の指貫、笏、あふぎ、女房の裝束、春秋の吉野泊瀬の花、いろ〳〵をつくし織りたる紅梅、うめ、さくら、柳の絲の春風にみだれて物ぞ思ひける。契のほどは知らねども、音にのみきくの水、心つくしぶねこがれて出でにし山吹の、色をしるべにあこがれて、逢ふに命もながらへて、結びかけたる契をもめしたくや候ふ。夏は涼しき泉殿、鴨やをしどり織りかけて、菖蒲がさねの唐衣に、戀の百首を縫ひつくし、そのはながさねの十五夜のこひしき人をみちのくの、しのぶの里は尋ぬれど、あはれを誰かさゝがにの、蜘手に物や思ふらんをも、めしたくや。秋はもみぢの色ふかき、思ふ心のあるぞめかは、名のみして袖は朽葉にあこがれて、戀路にまよふ道芝の、露うちはらふ白菊の、うつろふ道もめしたくや候ふ。冬は雪間に根をませば、やがてか人を見るべき、富士のけぶりの空に消ゆる身のゆくへこそあはれなれ、風のたよりのことづてもがな、心のうちの苦しさも、せめてはかくと知らせばやと、色おりたるもめしたくや候ふ。春にとりては白きあかきかけおび、几帳ひきものなどもめしたくや候ふ。さて具足のいろ〳〵は、手筥硯にかけごなり、又みのつぼにあひそへて、

御手に物を思ふ比かな」

て候ふ、戀路に迷ひいでさせ給ひて候ふか、此くれにおぼしめす人に必ず逢はせ給ふべし、此翁よく見申して候ふぞと申しけるに、そらおそろしく思召しながら、思ふ人にひき合せべきといふが嬉しきにとて、御小袖一かさね取りいだして、彼の翁にたびける。これは聞ゆる見通しの尉にて候ふとて、かき消すやうに失せにけり。

さてその後はたのもしく思召して、御足のいたさも覺えずいそぎ下り給ふ。都には二位の中將殿うせ給へるとて、院中のさわぎなか〳〵申すもおろかなり。北の政所の御事は申すに及ばず、京中のさわぎ限りなし。いつとなくむすぼほれておはしませば、いかなる御恐みもやとて、住み給ひしかたを御覽じ給へば、ぬぎおき給ひし直垂の袖に、あそばしたるを御覽じて、すこしたのもしく思召しける。さるほどに常陸の國へつき給ふ。まづ鹿島の大明神へまゐり給ひて、御通夜申させたまひ、願くば文正が娘に引き合はせ給へと、終夜祈念申させ給ひて、あくれば下向し給ひけり。ある家にたちよりて尋ね給へば、あるじ道しるべして教へ申しけるに、文正が館七十町の築地をつき、かゝる田舍にもめでたき處ありけりと思召し、立ちやすらひておはしけるに、下女の出でて申しけるは、いかなる人ぞと問ひければ、都の方より物うりに下りて候ふなりとの給へば、さ

くもらん｜くもちめの衍か
から衣云々｜伊勢物語、「から衣きつゝ馴れにしつましあればはるゞゝきぬる旅をしぞ思ふ」
蜘手に物を云々｜續古今、十一「戀せよとなれる三河の八橋の

若殿上にて、いつくしかりける御姿にて、御身をやつし下り給へども、まがふべきかたもなし。十月十日あまりのころ、都をたち出でさせ給ひて、常陸の國へぞくだり給ふ。道すがら歌をよみ、心をすまし、物あはれにおぼしめし、よろづ草木までも、御目をとゞめて、人々と伴ひくだり給ふ程に、ある山を御覽じて、

身をしれば戀ぞくるしきものぞとてさこそは鹿のひとり鳴くらん

有明のくまなき空を御らんじて、うらやましとおぼしめし、

うらやまし影もかはらずすむ月のわれには曇れ秋のそらかな

しきぶの大夫、

めぐりあはん程こそくもらん月影はつひに雲井のひかりましなん

かくて物ごとに祝ひ申し、行くほどに三河の國八橋を過ぎ給ふに、から衣きつゝなれにし古も、今のやうに思召しつゞけて、蜘手に物をこそおもひ給ひけれ。ある山中にて、年のよはひ七八十ばかりなる翁の、見たてまつりて、おの／＼いかなる人にてましますぞと申しければ、これは都より物うりにくだる商人にて候ふが、常陸の國へくだり候ふとの給へば、いや／＼商人らとは見申さず候ふ、此頃天下の御子に二位の中將殿と見申し

せんだんびつ―千駄櫃とて商人の用ふる器なり

東路の―此歌一本に「逢ふまでのかたみなりけり脱ぎおくをかけれる袖と思ふなよ君」とあり

より戀の道かくこそ候へ、たゞ常陸の國へ御とも申してくだり候はんと申しければ、中將殿の御よろこびは限りなし。かくは申しながら、いかゞして下り申すべき、都にてだにもまぎれなく、いつくしくましますに、あづまの奥にては、いよ〳〵まがふかたも有るべからずと、案じめぐらすに、たゞ商人のまねをして、いろ〳〵の賣物をもちたらば然るべしとて、さま〴〵の物をもちて、各々せんだんびつを背負ひ、既に下らんとぞし給ひける。中將殿、さすがはる〴〵の道に赴き給はんに、今一度父母たちにも見えたてまつらんと思召し、御前に參り給へば、此程は何とやらん惱みがちにておはしませしが、立ちいで給ふうれしさよと、よろこびあひ給へば、中將殿は、遠國へ下らん事もしろしめさず、〳〵あとにて歎き給はんことよと、なげき御涙ぐみ給へば、御ふたところながら、袖を顔にあて給ふ。中將殿思ひきつていで給ひけり。御心のうちかきくれて、御裝束をぬぎおかせ給ひて、御直衣の袖にかくなん、

　東路のかたみとてこそぬぎ置くにかはるまでとは思ふなよ君

かやうにあそばして、いつ召しなれたる事もなき草鞋直垂をめして、御身をやつし給ふ。御とものの人々、同じくやつれくだり給ふ。中將殿は十八、式部の大夫二十五、いづれも

日もたちければ、秋のなかばなれば、隈なき月にあこがれ、中將殿たちいで給ひければ、なぐさみ申さんとて、管絃をぞはじめ給ひ、さま〴〵の御あそび共あり、中將殿かくなん、

　月見ればやらんかたなく悲しきをことゝふ人のなど無かるらん

かやうによませ給ひて、袖を顏にあて涙ぐませ給ひて、又うちふし給ふを、兵衛のすけみとゞめ申して、此ほど君の例ならぬ御うち、いかなる御事にやと思ひ候へば、人しれず物思はせ給ひけるを、今までさとり申さぬ事よとて、兵衛のすけ、式部の大夫、とうまのすけ、三人御まへにまゐりて申しけるは、これ程におぼしめし候ふ御ことを、仰せもいださせ給はず、いかなる唐土（もろこし）までも尋ね申すべし、何か苦しく候ふべきなどと申しければ、包めど色にいでけることの恥しさよとおぼしめし、われながらうはの空（そら）なるやうに、憚り多く侍れども、今は何をか包むべき、過ぎにし春のころ、衞府の藏人が物語り候ひし大宮司がうちの雜色に、文正むすめに、かたちすぐれたるを持ちたる由をきゝしより、一すぢに思ひ侍るなり、人をくだして召（め）したけれども、世のそしりも憚りあれば、たゞ思ひに身をくだき候ふとて、御涙にむせび給ひければ、人々申されけるは、昔

月見れば—此歌一本に「月見れどやるかたもなく悲しきは人もとひこぬ秋の夜すがら」とあり

みとゞめ—みとがめの衍か

御うち—御こゝちの衍なるべし

御事—原本「御申」とあり、今改む

天下―正しくは殿下とあるべし
二位―原本「三位」とあり、一本によりて改む
七萬寶―七珍萬寶の誤なるべし

まで語り給へば、此よし聞召し、此程はあひみん事を思ひて、ものうき鄙の住居もなぐさみぬ、今はそのかひなしとて、都へのぼり給ひける。日數かさなりて、都へつかせ給ふ。まづ天下の御所へ參りける。折ふし國々の物語ども侍りしに、衞府の藏人、わが心にかゝるまゝに申しけるは、いづれの國と申すとも、常陸の國ほど不思議なる者のある國は候ふまじと申しければ、てんかの御子に二位の中將殿、此由きこしめし、何事やらんと御尋ねありければ、鹿島の大宮司と申すものが雜色に、文正と申すもの、いかなる前世のいはれにや、七萬寶たからに飽きみち樂み榮ゆるのみならず候ふ、かの大明神より御利生に給はりたる姫を二人もちて候ふが、優にやさしく光る程のみめかたち、心ざま藝能にいたるまで、人間のわざとも覺えず候ふときゝ、みちしげもとかく申して候ひしかども、更に靡くけしきもなく候ふ、主の大宮司をはじめて、國々の大名共、われもくと申しけれども聞きいれず、ふたりの親が申すことも聽かず候ふと、語り申しければ、中將殿はつくぐくと聞召し、やがて見ぬ戀とならせ給ひて、いつとなく惱み給ふ。その頃しかるべき公卿殿上人の姫君たちを、われもくと申されけれども、更にきゝいれ給はす、うちふし給ひける。殿下もきたの政所、御祈りさまぐくなり。やうくく月

よろこび—返禮

めでたき事なり—此下に脱文あるべし

もちたる由うけ給はりて候ふ、御はからひにて給はり候へ、そのよろこびは國司をゆづり申すべしとの給へば、かしこまつて候へども、すべて人の申すことをも聞かず、親の命にも從はず候ふなり、さりながら申してみ候はんとて、御まへをたち給ふ。文正も御とも申しけるを召して、かゝるめでたき事なれば、汝が娘を國司の御みだいに參らせよと仰せあり、さあらば國司をわれに給はらんとなり、汝をば大官になすべきなり、面目此うへはあるべからずとの給へば、文正うれしげにて、かしこまつてうけ給はり候ふ、さりながら親の申すことを用ひぬものにて候へば、いかゞ申し候はんとて歸りける。門の程より、あなめでたや女子は持つべき物なり、國司の御舅になるぞや、みな〳〵用意して御とも申せと申しつゝ、娘に向ひて申すやう、さて〳〵めでたき事なり、いち〳〵に申せばこれをも受けでさめ〴〵と泣きて居たりける。母も文正もこれをさへ嫌ひ給ふことの淺ましさよ、此事叶はぬものならば、つねをか何となるべきと言ひて、いろ〳〵申せども返事もせず。あまりに口說きければ、姫たちは大宮司殿の公達を嫌ひて候へば、大宮司殿も心のうちは、さこそ思召さん、たゞ身を投げんとぞ申しける。

此うへはとて、大宮司殿へまゐり此よし申しければ、大宮司殿は、國司へはじめより終

見せけれども—女を見せたる也

主の大宮司—此下に「に」の字を添へて見るべし

思ひつき候はんずれ、さなくば尼になりて後世菩提を願ふべしと申しける。文正面目なく、大宮司殿に此有様を申せば、大宮司殿は腹をたて、汝が子共の分として、みづからを嫌はんこと不思議なれ、いそぎまゐらせずば汝を罪科に及ばすべしとの給へば、文正又娘のかたへ行き、此よし申しければ、姫たち仰せけるは、かやうの道はたかきも賤しきにもよらぬ事にて候へ、たゞ尼になりて、うき世を厭ふか、さなくば淵河へも身をいれんと歎きける。文正さめ〴〵と泣きて、又大宮司殿へまゐり、此よしを申しければ、それほどの儀ならば、力なしとぞ仰せける。さてその後、衞府の藏人みちしげと申す人、常陸の國司を給はりてくだり給ひけり。此人はなのめならず色好みにて、いかなるやまがつ賤の女なりとも、みめかたち世にすぐれたる人をと心がけておはしける。國中の大名たち、われも〳〵と見せけれども、心にあはずして、あかし暮し給ひけり。ある人申すやう、鹿島の大宮司の雜色に文正と申すもの、光るほどの娘を持ちて候ふ、國中大名われも〳〵と申されけれども、用ひ候はず、これは天人のあまくだり給ふかと、おぼえ候ほどの娘二人もちて候ふ、主の大宮司仰せられて召され候へかしと申しければ、よろこび給ひ、大宮司を召し、まことやみうちの雜色に、文正とやらんもの、ならびなき娘を

阿彌陀の三尊—中央に彌陀左右に觀音勢至を据うるをいふ

位たかき公達などこそ云々—位高き公達などならば或は望にも應ぜん

國の大名たち、われも〳〵と心をつくし、文玉章かぎりなし。姫たち思ひ給ふやう、かゝるあづまに生れけるぞや、都のほとりにも生れなば、世にあるかひには、女御后の位をも心がけ、さて世の常のことは思ひよらずと思はれける。文正は國中の大名、いづれも仰せをかうぶり、面目と思ひて、姫に此よし申せば、耳にも更に聞きいれず、あかし暮し給ふ。父母も子ながら心にたがはじと、もてなし給ふ。此姫たちは來世の事まで深く思ひいりて、常にものまゐりし給ひけるを、大名たち道にて取るべきよし聞えければ、文正此よしをきゝ、西の方に御堂をたて、阿彌陀の三尊をすゑ奉り、心のまゝに姫たちをまゐらせけり。かやうに用心深くいたせば、道にて奪ひとる事もかなはず。大宮司殿此よしを聞召し、文正を召して、汝まことや光るほどの姫をもちたると聞く、大名たちの方へいだすべからず、わが子にいだすべしとの給へば、文正うれしく思ひ、やがてわが家にかへり、あなめでたや、大宮司殿の公達を、婿にとるなり、皆々御ともせよとのよししりける。やがて姫たちのかたへ行きて、めでたや、大宮司殿よめにすべきよし仰せ候ふと申しける。姫たちは淺ましげなるけしきにて、涙の色みえければ、呆れはててぞゐたりける。姫たち仰せけるは、いかなる女御后にも、又は位たかき公達などこそ、もしも

おとなしき女房—頭だちたる老女
かいしやく—介錯、附添
夢想—夢中の神託

りける。文正腹をたて、約束申せしかひもなく、女を生みたる事よとて叱りける。そのなかに、おとなしき女房たち申すやう、人の子に姫君こそ末繁昌してめでたき御事にて候へと申しければ、さらばうちへ入れ申せとて、寵愛申しける。乳母かいしやくまでも、みめよきをすぐり付けにけり。又つぎの年も倚光るほどの姫御前をまうけける。文正なにぞと申せば、いつものものと申しける。文正腹をたて、さきこそ約束たがへめ、さのみはいかで人の命を背き給ふぞ、その子を具して、いそぎ出で給へと、叱りけること限りなし。その時御前にありし人々申しけるは、男子にてましまさば、大宮司殿にこそつかはれさせ給はんに、御かたち勝れたる姫たちにて候へば、國々の大名、いづれか婿にならせ給はざるべき、又は大宮司殿の公達と申すとも、御むこにならせ給ふべし、これほど然るべきことなしと申しければ、その時文正げにもと思ひ、さらばとく〱入れ申せとありければ、見るに姉御前よりもいつくしく有りければ、又乳母かいしやくまでも、みめかたちよきを揃へてつけにけり。姫たちの御名をば夢想にまかせ、れんげを給はると見たれば、姉は蓮華妹を蓮御前と付け、いつきかしづき給ふほどに、年月かさなり、光るほどの君に見え給ふ。よみ書よろづ利根にて歌草子ならぶかたなし。これを聞き八箇

つたなき―果報乏しき
是非なく―進二無二
既に―早くも
さり難き―否みがたき

それこそつたなきことなれ、人の身には子ほどの寶よもあらじ、たゞその寶を神佛にまゐらせん、一人にても子を申すべしとの給へば、文太げにもと思ひ、家に歸りて是非なく女房を叱り、既に追ひいだす。女房これはいかなる事ぞと騒ぎければ、文正申しけるは、大宮司殿一人の子をもたぬ事を、本意なくおぼしめすなり、いそぎ子を產みてたび候へと申しければ、廿卅の時だにうまぬ子が、四十になりて何として叶ふべき、その儀ならば力なしと言ひければ、文正げにもと思ひ、大宮司殿も神佛にも申せとこそ仰せられつれと思ひて、さらば神佛へまゐりて申しうくべしと申しける。女房げにもと思ひ、七日精進して、鹿島の大明神へぞまゐりける。いろ〳〵の寶をまゐらせ、三十三度の禮拜をして、ねがはくは一人の子をたび給へとぞ祈り申しける、七日と申す夜半に、かたじけなくも御寶殿の御戸を開き給ひ、誠にけだかき御聲にて、汝申すところさり難きにより、この七日のうち到らぬ處なく求むれども、汝が子になるべき者なし、さりながらこれをたぶとて、蓮華を二ふさ給はりて、かき消すやうに失せにけり。

さるほどに、文正よろこび、八箇國にすぐれたる男子を生ましめ給へとぞ申しける。九月の苦み十月のするには、產の紐をときたる。三十二相たらひたるいつくしき姫にてあ

御事—候事の誤にて、寶を持ちて候ふ事と續くなるべし、一本には「かやうに寶をもち候ことよと思ひ候まゝあやなく申して御座候へ」とあり

色、草刈、しもべに至るまで、そのかず知らず。たからはいかなる十善の君と申すとも、これには過ぎじとぞ覺えける。

さりながら男子(なんし)にても女子(にょし)にても、子はなかりける。あるとき大宮司殿此よしきこしめし、さても不思議におぼしめし、彼を召して尋ねんと思ひ給ひ、文太をぞ召されける。久しくまゐり候はねば、うれしく思ひて、いそぎまゐりける。大庭(おほには)にかしこまりてゐ申しける。大宮司殿御覧じて、その身こそ賤しきとも、めでたきものなれば、いかで庭には置くべきとて、これへ〳〵とこそ召されける。さるほどに文太は廣椽(ひろえん)までぞまゐりける。大宮司殿のたまひけるは、文太はまことや限りなき長者となり、十善の君にてましますとも、われにはいかで勝(まさ)り給ふべきと、かたじけなくも申すとかや、さやうに冥加なきこと、何とてか申すぞとのたまへば、文太かしこまつて申すやう、わが身のいやしき有樣にて、これ程の寶を持ちて御事おぼえず、あやなく申して候なりと申しければ、いか程のたからなれば、かやうに思ふぞとのたまへば、金銀綾錦、七珍萬寶かずしらず、四方につくり並べたる倉を申すにかず知らずとぞ申しける。大宮司殿きこしめし、誠にめでたきものの果報かな、さて末を繼ぐべき子はあるかとの給へば、未だ候はずと申しける。

おはせんより、鹽やく薪なりとも、取りたまへと言ひければ、いと易き事なりとて薪をぞ採りける。もとより大ぢからなれば、五六人して持ちけるよりも多くしてぞきたりける。

あるじなのめに悅びて、又なき者と思ひける。かくて年月をふるほどに文太申しけるは、われも鹽やきて賣らばやと思ひ、あるじに申すやう、この年月、奉公つかまつり候ふ御恩に、鹽竈一つ給はり候へかし、あまりにたよりなく候へば、あきなひしてみ候はんと申しければ、もとよりいとほしく思ひければ、鹽釜二つとらせけるに、鹽やきて賣りければ、此文太が鹽と申すは、こゝろよくてくふ人病なく若くなり、また鹽の多さつもりもなく、三十層倍にもなりければ、やがて德人になりたまふ。年月ふるほどに、いまは長者とぞなりにける。さる程につのをかが磯の鹽屋ども皆々從ひける。さるほどに名をかへて、文正つねをかとぞ申しける。堀のうち七十五町にかいこめて、四方に八十三の倉をたて、家の棟かず九十間つくり並べたり。昔の須達長者もかくやと思ひける。されば常陸の國のものども此頃のことなれば、主な嫌ひそ、恩をきらへ、なにか苦しかるべきとて、皆々文正にぞ使はれける。しかれば家の子郞黨に至るまで、三百餘人のほか、雜

德人―富人

なりにける―原本「なり にけり」とあり、今改む

須達長者―天竺の富豪

主な嫌ひそ云々―主人の身分を論ぜず恩の厚薄を思へとなり

いづくにこともおろか云々ー何處にありとも君を疎略に思ふことなし

うはの空なるものー風來の者

り、いかならん處へも行きて過ぐべし、また思ひもなほしたらんには、歸りまゐれとの給ひければ、文太おもひけるは、たとへ千人萬人ありといふとも、わが命あらんかぎりは、奉公申すべきと存じ候ひつるに、かゝる仰せくだるうへは力なし、さりながらいづくにこともおろかに思ひ申すべからず、又やがてこそまゐり申すべしとて、いづちともなく行くほどに、つのをかが磯、鹽燒く浦につきにけり。ある鹽屋に入りて申すやう、これは旅のものにて候ふ、御目をかけて給はれと申しければ、あるじ聞きて、うはの空なるものなれども、見るよりそゞろにいとほしく思ひて、その家におきける。日數ふるほどに、あるじ申しけるは、かくてつれ〴〵に

年頃のもの—多
年仕へしもの

文正ざうし

それ昔より今にいたるまで、めでたき事を聞き傳ふるに、賤しきものの殊のほかになりいでて、始よりのちまでも、物憂きことなくめでたきは、常陸の國に、鹽燒の文正と申すものにてぞ侍りける。そのゆゑを尋ぬれば、國中十六郡のうちに、鹿島の大明神とて、靈社まし〳〵けり。かの宮の神主に、大宮司と申す人おはしけるが、長者にてぞましましける。四方に四萬の倉をたて、七珍萬寶のたから滿ち〳〵て一つ缺けたることもなく、よろづ心にまかせて、いろ〳〵あり。家のかずは一萬八千軒なり。郎黨に至るまで數をしらず、女房たち仲居のもの、八百六十人なり。男子五人ともに、みめかたち藝能萬人にすぐれたり。又大宮司殿の雜色に、文太といふ者あり、年頃のものなり。下郎なれども心は正直に、主の事を大事におもひ、よるひる心にたがはじと、宮仕へしけれども、心をみんとや思はれけん、主の大宮司殿、汝年頃のものといへども、わが心にたがふな

文正ざうし

上……三七三
下……三九〇
秀衡入……四〇七
いはやのさうし……四一九
上……四一九
下……四三九
花みつ……四五七
美人くらべ……四七一
上……四七一
下……四八四
花鳥風月……四九九
紫式部の巻……五一七
伊香物語……五二九
ふくろふ……五四一
胡蝶物語……五五五
玉水物語……五七三
上……五七三
下……五八三
鶴のさうし……五九三
上……五九三
中……六〇五
下……六二〇
草木太平記……六二九
巻上……六二九
巻下……六四六
歌舞妓草子……六六三

御伽草紙　目錄

文正ざうし……一
はちかづき……二七
小町草紙……五五
御曹子島わたり……七一
唐糸草紙……九九
木幡ぎつね……一二一
七草草紙……一三一
猿源氏草子……一三五
物くさ太郎……一四七
さゞれいし……一六七
蛤の草紙……一七一
小敦盛……一八五
二十四孝……一九五
梵天國……二一一
のせざる草紙……二三三
猫の草紙……二四一
濱出草紙……二五一
和泉式部……二五五
一寸法師……二六三
さいき……二六九
浦島太郎……二七七
横笛草紙……二八五
酒呑童子……二九九
三人法師……三二三
上……三二三
下……三四一
大佛供養物語……三五七
俵藤太物語……三七三

草木に因みたる地口も頗る巧なり、思ふに德川時代の作物なるべし。
歌舞妓草子（寫本） お國が北野の社頭にて念佛踊を興行せし際、見物の中より名古屋山三郎の亡靈現れいでて、互に懷舊の情を逑ぶることを綴れり。小町草紙と似寄りたる趣向なれど、彼の和歌に代ふるにこれは小唄を以てしたれば、近代的の情味豐にして、本集中この一篇を見るは恰も累々たる頑石の間に、撫子の一もと咲き出でし感なくばあらず。山三郎お國死後の作なるべく、元和寬永頃のものならんか。

大正四年四月春雨花を催す夕　　校訂者　藤井紫影

携へもちし黄金にて家を作り、下人多く召使ひて樂しく日を送りしに、國守宮崎某遊獵のついでこの上﨟を垣間見て、軍兵を以て其家を圍み之を奪はんとす、時に空中より鷲雕等の鳥類群り來りて、宮崎の軍を惱まし退く。宰相は始めて上﨟のたゞ人ならぬを知り、その素性を問ふ、上﨟今は父母の許に歸るべき時節到來せり、また生を替へて再び君に契るべし、誠は君に助けられし澤邊の鶴なりとて、虚空高く飛び去りぬ。其後宰相は三條内大臣の女たまづる姫と二世の緣を結び、めでたく繁昌すとなり。

草木太平記(刊本)　吉野の里近き一むら薄、八重櫻の花の姿を籬の隙に見そめしより、色深き戀となり、小萩を仲立として言ひ寄り、いつしか花の下紐打解けて、草の枕をとりかはしたるに、梅聞きて大に怒り、薄が野邊に火をかけて燒き拂はんと、一味の木の勢を催せば、薄も草の一類を集めて相戰ひ、互に勝敗ありしが、楠の木の加勢に薄敗北して、はら一文字に掻切つて淺茅が原の露と消えにしかば、櫻は花の衣を改めて墨染となり菩提を弔ひしとなり。こは鴉鷺合戰物語、魚鳥平家の系統を引けるものにて、武器の名稱などいと詳かにして、

と語りて、各結縁のために一首の歌を詠むといふに終る。後水尾天皇の御作なりといふ。

玉水物語（寫本） 高柳宰相殿の姫君の優にやさしきを、或日狐の垣間見て思慕の情抑へ難くせめてあたり近く侍りて切なる心を慰めんものと、女子に變じて姫の侍女となり玉水姫と呼ばれしが、或時紅葉合のありしに、姫君のために珍しき紅葉の枝を求めいでて捧げ奉り、一時にほまれを揚ぐ。此事ありしより時の御門姫君を入内せしめ給ふ。玉水且喜び且悲み、一篇の長歌に苦衷を漏らして、もとのすみかに歸る。狐が姫を愛するあまり其身を汚すことを敢てせざりし點、此類の小說中において稍異色とすべし。紅葉合と題する異本あり、趣向は同一なれども文辭は全く別なり。

鶴のさうし（刊本） 宰相にて右兵衞督を兼ねし人あり、慈悲心深く他人の饑寒を見るに忍びず、常に衣食を施しゝかば家貧しくなりて片山里に籠りぬ。或日獵師の雛鶴を捕へて殺さんとするを見て、さまぐ〵に言ひ宥め、家寶の黃金作の太刀に代へて鶴を放ちやりぬ。翌日やごとなき上臈道に迷ひて宰相の庵室に一夜の宿を乞ひ、終に妹背のかたらひを爲す。上臈が

の時代は明かならねど、或は國學者などの手によりて修整せられしものにあらずや、猶考ふべし。

ふくろふ(刊本)　中むかし加賀の國かめわり坂の麓にふくろふ鳥あり、鷽姫を戀ひ山がらを媒として、さまぐ\かき口說き、終に思ひを遂げけるに、かねて鷽姫に心ありし上見ぬ鷲、嫉妬のあまり鷽姫を殺害せしかば、ふくろふ悲歎の情に堪へず、法師となりて其菩提を弔ふ。三浦爲春のあた物語(寬永十七年)は之を敷演せしものなれど、和漢儒佛の引事うるさく、德川期の色彩いちじるし。

胡蝶物語(寫本)　都近く妻子もなく、只春秋の花にうき身をやつし、さまぐ\草木の種を集め、前栽に植ゑて之を樂む胡蝶と譚名せられし隱士あり、一朝母を失ひて會者定離の理を感じ、草木の色香にめでて道心を失はんことを憂ひ、これをも棄てて東山の邊に墨染の衣を纏ひ行ひ澄ましゝに、或夜數多の上﨟の草庵を叩きて教化を請ふより、庵主は懇に佛道の難有き旨を說きたるに、いづれも感動して、まこと我等は嘗て上人の寵愛をうけたる花の精なり

らんといひて決せず、終に花鳥風月といふ姉妹の女巫を招き、梓にかけて卜はしむ。刊本と寫本とは文辭に異同少からず。

紫式部の卷(刊本)　紫式部が上東門院の仰せをうけ、石山寺に籠りて大齋院のために源氏物語を作りしこと、安居院法印澄憲僧都が源氏供養として石山寺にて表白文を述ぶることを記す。謠曲の源氏供養、宇治加賀掾の淨瑠璃の源氏供養等と同種のものにして、源氏表白に依據したる作物なり。

伊香物語(寫本)　近江伊香郡の郡司某の妻美にして才藝あり、國守某此女を得まほしく思ひ、郡司某を招き酒興のうへ、賭事に託して郡司勝たば我所領の半を與ふべし、勝たざれば汝の妻を得さすべしと約して、堅く封じたる文筥を出し、此内に和歌の上の句あり、此下の句をつゞけよ、和歌の上下付合ひたらば汝が勝なりといふ。郡司家に歸りて妻に謀る、妻石山の觀音に參籠して夢想を請ふべしといふ、郡司之に從ひ滿願の日神託を得て、首尾よく下の句をつけて、所領を得て富み榮えしとなり。文章よく調ひ同類の書中に一頭地を拔けり、著作

花みつ（寫本）　播磨の國守赤松則祐の臣岡部某、前妻の出に花みつ、後妻の腹に月みつといふ二人の男子をもてり、戰亂の世の習ひ、かゝる足手まとひありては奉公のさはりとなるべしと、二子をちごとして書寫山の別當に託す。繼母花みつの事を父に讒し、何彼につけて冷遇せしかば、花みつは世をはかなみて、日頃親しき二人の僧に弟月みつを殺害しくれよと頼みて、豫め手筈を定めおき、みづから月みつに代りて殺さるゝ事を敍せり。兒物語に繼子いぢめを結びつけたるが此書の特色なり。

美人くらべ（刊本）　丹後少將といふ人五條宰相の姉娘の美人なるを聞き之を娶らんとす、宰相の後妻おのが生みたる妹娘を進めんと欲し、侍に命じて前妻腹の姉娘を失はしめんとせしに、侍は私に姫を助けて逃れしむ。少將姫の行くへを尋ねて遙に東國に至り、遂に之を伴ひて歸り、めでたく夫婦の契を結ぶ。

花鳥風月（刊本）　葉室中納言の邸に人々集りて扇合を催しけるに、或人の出しゝ扇に風丰都雅なる貴公子と容顏美麗なる上臈とを畫きたるあり、或は業平ならんといひ、或は光源氏な

いはやのさうし(刊本)　一名をたいのやひめといふ。中納言有末卿といふ人白河の姫君と契りて一女を生む、此女十歳の時母死せしかば、新に後妻を迎ふ、この北方一人の娘をつれて嫁ぐ。有末卿前妻の姫君のために西の對の屋をしつらひて住ます、よりて彼の姫を對の屋姫と呼べり。對の屋十三歳の時中納言太宰帥に任ぜられ、家族を伴ひて下向す。下向の途次北方對の屋を失はんと謀り、おのが乳母子佐藤貞家を語らひ、姫を海中に投ぜしむ、貞家姫を殺すに忍びず、淡路の海邊に棄てて歸る、明石の漁夫之を見つけて、おのが住居とせる岩屋に伴ひ歸り、主の如くかしづき養ふ。其後姫は關白の子二位中將なる人の、伊豫の溫泉より歸京の途次、明石の浦に舟がかりせしに見出され、榮華を極むることを敍せり。二位中將が蜑の子をつれ歸りたりと聞きて、その母北政所これを歎き、姫を恥ぢしめ中將を懲らさんと謀り、中將の姊妹四人を美々しく著飾らせ、列座の中へ對の屋を引見したるに、容貌技藝いづれもおのが娘に立ち勝りたる見て、我を折りてめでくつがへる一節は、鉢かづき姫の趣向と頗る相似たり。

大佛供養物語(寫本)　東大寺の俊乘坊重源入唐して、極樂の曼陀羅、五祖の眞影を將來せしを、源賴朝、法然上人をして東大寺に供養せしめんとす、上人叡山を憚りて辭退せしかば、叡山、園城寺、奈良の僧をして三座の說法をなさしむる事となり、道俗男女來り集るもの無數なりしが、其說法いづれも傾聽するに足るものなく、群衆皆慊焉たり、賴朝の北方も亦失望して、法然上人の說法を聽聞せんことを請ふ、賴朝强ひて上人を請ず、是に於て上人來りて、唱名の功德を述べ念佛往生の事を說きたるに、聽衆皆感に堪へたりと。享祿四年の寫本なり。

俵藤太物語(刊本)　田原藤太秀郷が龍神の仇敵たる三上山の蜈蚣を退治して、龍宮より取れども盡きぬ米俵と祇園精舍の佛供養の時に鑄し釣鐘等を返禮として贈られ、又龍神の加護によりて將門を滅す事を記せり。

秀衡入(寫本)　牛若奥州に下りて秀衡の館に入り、平氏追討の事を託するに終る。十二段草子の後を受けたるものにして、牛若の威光と秀衡の豪富とを寫すを主とせり。

所多く、却て原書の面目を毀損せし嫌なきにあらず、今は假字を一定し漢字を宛てたる外は一切原本に從へり。三人法師以下の十六種は萩野氏の新編御伽草子、平出氏の室町時代小說集等に收錄せられざるもののみを擇べり、これらは概ね傳本稀少なるものなれば、當代の文獻に志ある人々のために便益少からざるべきを信ず。

今三人法師以下新採の十六種について簡略なる解題を施さんに、

三人法師（刊本）　一名を三人懺悔冊子といふ。高野山にて遁世の法師三人相會して、互に出家の來歷を語ることを敍せり。そのうち二人の話は相關聯し、他の一人の話は獨立せり。就中篠崎六郎左衞門が遁世出家の後、その鄕里河內に至りて、二人の子に邂逅する一段は、余の所藏せる朽木櫻（室町時代小說集に收む）と酷似す。遁世物中の傑作にして、七人比丘尼四人比丘尼等の懺悔物語は皆此書を祖とするものの如し。こゝに收むるものは鱗形屋本を底本とし、寬永頃とおぼしき繪入刊本と荒五郞發心記と題せる古寫本とを以て校合し、尙續群書類從本、史籍集覽本（明治十六年刊行の分）を參酌せり、刊本は文章殆ど異同なきも、發心記は出入稍多し。

その當を得ざるものなど疵瑕百出、加ふるに一定の型式に陷りて摸倣につぐに摸倣を以てし、依樣葫蘆の弊を極む。美人はいづれも丹花の脣、青黛の眉、翡翠の髮ざしあざやかに、唐土の楊貴妃、李夫人、我朝の衣通姫、小野の小町、染殿の后と引較べられ、悲歎の時はいつも天に仰ぎ地に伏し、流涕焦れ泣きて是は夢かや現かやとかこち、徒らに陳套の極文句をつらねて、語格調はず文脈通ぜず、且作者の文盲なる、賴朝を左近の右大將といひ、公卿の私邸に日の御座あるなど、創意もなく知識もなき衰世の文學たる陋態を遺憾なく暴露しつくせり。されば其の文學的價値は固より多くいふに足らねども、平安文學の末路を辿り、江戸文學の發程を知らんとする者にとりては、之によりて王朝の戀愛小說がいか程まで墮落せしか、江戸の淨瑠璃小說はいづくより萠えいでしか、その源委を尋ぬる好史料たるべく、又今昔物語以後の口碑傳說を保存するものとして其價値少しとせず。

本集收むる所すべて三十九種、そのうち文正草子より酒呑童子に至る二十三種は、明治二十四年今泉畠山二氏の校刊せられしものあれど、誤脫も少からず、且文章に修正を施したる箇

緒言

室町時代より江戸時代の初期にかけて、婦幼の讀物として述作せられし小說を概稱して御伽草子といふ、此名稱はいつ頃に始まりしか定かならねど、德川氏の初期に御伽物語、御伽婢子、新おとぎ等の書名多く行はれしより察するに、此類の小說をおしなべて御伽草子といひ習はしょことゝ、猶德川氏の中葉以後兒童の玩弄に供せし繪解本を、一般に赤本、草雙紙など稱へしと同樣なりしなるべし。享保の頃にや、大阪の書肆澁川某が文正草子以下酒呑童子に至る二十三種を擇び、繪入橫本の叢書として刊行せしより廣く世に知られて、これに入りたるもののみを御伽草子と思へる人もあれど、こは只手あたり次第に採り集めしばかりにて、深き理由あるべくもあらず。

さてこの類の草子は其數も多く內容も雜駁なれど、まづは戀愛譚、武勇譚、繼子いぢめ、遁世物、緣起物、異類物等に區別し得べし。趣向文章倶に幼稚にして、筋の通らず前後矛盾せるもの、敍述に主客輕重の權衡を失ふもの、挿話の冗漫煩縟に過ぐるもの、引用の詩歌故事

御伽草紙

全